THE KAIZO

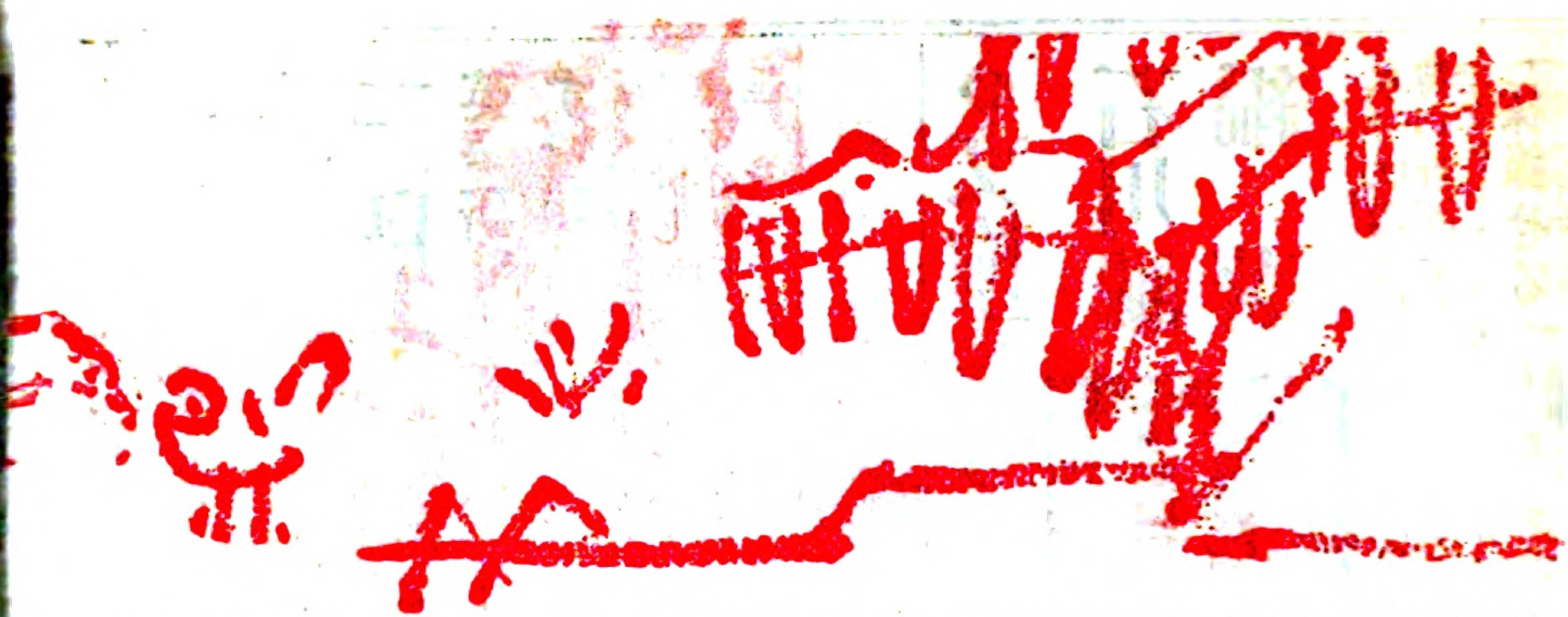
改造

四月特別號

1925



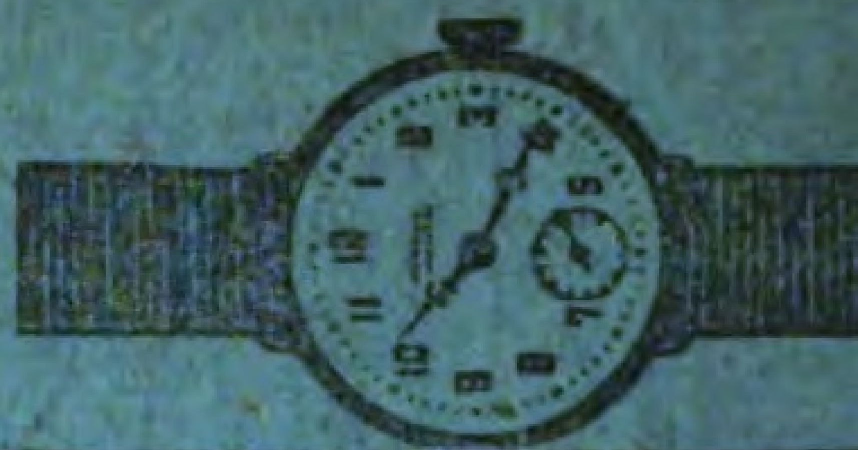
プラトン
萬年筆
新人の武器
活動家の片時
離すことの出來
萬年筆用
プラトンインキ



東京百鬼夜行錄

輸入品

時計界最初の試み



優良時計廉價提供

天賞堂の大量販賣

（直輸入品を直接愛顧各位へ）

卸商

小賣商

顧客

顧客

大量販賣とは原産地から直接に大量輸入したものを直接に顧客に供給するを云ふ。

普通の賣買系統を云ふと輸入商―仲次―問屋―小賣商と顧客に達するまでには三人も四人もの手を經て手數料を累加するが、大量販賣は仕入原價を遞減する上に三重四重の手數料を省き、一定品種を取扱ふ爲め營業費を少なくし且短時期間の商賣なるゆゑ資本に對する金利を最低率に算當し、自然坊間普通價に比べて數割以上低價ならしめる。其價は左記の如し。

甲種	乙種	丙種
十八金側十形高級アンクル機械金金具附腕紐及函附	十八金側八形高級アンクル機械金金具附腕紐及函附	白金側八形高級アンクル機械金金具附腕紐及函附
(A) 金拾九圓	(A) 金貳拾九圓	(A) 金七拾五圓
(B) 金貳拾五圓	(B) 金參拾五圓	(B) 金九拾圓

書留小包料拾八錢

シカモ品種は巴里型の最新流行、機械は實用上申分なき正確と堅牢、外見實質共にドンナお方がお持ちになつても恥かしくない優良品をドンナお方にも求められる低價で提供致します。

書面で御注文次第即時送品

詳細說明書御申越次第送呈

東京銀座【電話銀座[illegible]】振替口座東京五五

合名會社 天賞堂直輸部

天賞堂大阪支店・天賞堂日本橋支店

不廉

廉

▼着手以來十星霜を要したる

我國未曾有の大飜譯文庫

世界名作大觀

豫約募集

文藝上の名著傑作は時處を超越した全人類の寶である。本集收むるところは、各國古來の名著雄篇を當代の巨匠が多年の努力と苦心とを以て邦語譯したもので、本集が質に於ても量に於ても我國未曾有の大飜譯文庫であることは、呶々の辯を費す迄もなく、左の所載によつて明瞭であらう。敢て文藝愛好者と云はず、遍く萬人の家庭に推薦する。

尚第一部英國篇の十六册に、研究者の便宜の爲めに各原書の全文を卷末附錄としたる如きも、我國には前例ないことで、讀者はこの一事によつても、本集が如何に坊間の類書と選を異にした責任ある飜譯書であるかの一端を窺知し得らるゝことと思ふ。

▼第一部（英國篇）十六册（卷末原文附載）

デヴィッド・カッパフィイルド　四册　ディッケンズ著　平田禿木譯

快樂主義者メエリアス　二册　ペーター著　工藤好美譯

一青年の告白　ヂョージ・ムーア著　森田草平譯

ドリアン・グレー　一册　ワイルド著　平田禿木譯

獄中記　一册

▼第二部（各國篇）十六册

ウイルヘルム・マイステル修業時代並に旅行時代　二册　ゲーテ著　森田草平譯

ゲーテ自傳　二册　ゲーテ著　增富平藏譯

ドン・キホーテ　二册　セルヴァンテス著　森田草平譯

サイラス・マーナー

テス　二冊　平田禿木譯　ハーデイ著

チャンス　二冊　平田禿木譯　コンラッド著

ホーソン傑作集　一冊　馬場孤蝶譯　ホーソン著

ラム隨筆集　二冊　平田禿木譯　ラム著

▼第一部附錄（九冊）　曩の刊行に係る『泰西名著文庫』の中より選出せるもの

虛榮の市　二冊　平田禿木譯　サッカレー著

我意の人　二冊　平田禿木譯　メレヂス著

英國近代傑作集　一冊　平田禿木譯

エールヰン　一冊　戸川秋骨譯　ダントン著

カーライル佛國革命史　三冊　高橋五郎譯　幸田露伴補

計二十五冊

ガリヴァー旅行記

ノートルダム・ド・パリー　二冊　池田立基譯　ユーゴー著

シルヴエスト・ボナールの罪　二冊　池田立基譯　フランス著

椿姫　一冊　永井荷風譯　小デュマ著

タイス　一冊　永井荷風譯　フランス著

マリー・バシユカトセフ日記　二冊　野上豐一郎譯　バシユカトセフ著

▼第二部附錄（九冊）　曩の刊行に係る『泰西近代名著文庫』の中より選出せるもの

プルターク英雄傳　四冊　高橋五郎譯　幸田露伴補

十日物語　一冊　戸川秋骨譯　ボッカチヨ著

戰爭と平和　三冊　馬場孤蝶譯　トルストイ著

先覺　一冊　戸川秋骨譯　メレヂコーフスキー著

計二十五冊

◉計五十冊　四六判總クロース最上美本　九ポイント組一冊約七百頁

◉申込締切　四月三十日限

◈詳細規定及見本（四十五頁）は御申越次第送呈

略規

●各部共、附錄は切りはなしても御購讀隨意である

●會費は各部一ヶ月金三圓六十錢（外に送料を要す）
但一時拂は廿五冊（附錄共）金八十四圓五十錢、十六冊金五十四圓、附錄（九冊）金三十圓五十錢

●申込金は各部金三圓六十錢（但最終の會費に充つ）

●送本は來六月ゟ各部每月一冊宛廿五ヶ月にて完結

東京市本鄕區西片町十番地
電話小石川五三〇二番
振替東京一八五七二番

國民文庫刊行會

鶴見祐輔先生著

忽五版

思想・山水・人物

思想界の新人鶴見氏が、親しく世界の大人物に接し、古今東西を貫く思想を追究し、或は明媚なる山川風物を探りて得たる限りなき思索と體驗の所産たる隨筆集である。

豐富なる趣味と、明晰なる頭腦を有する著者が、現代に活躍せる歐米の大人物を歷訪し、明敏なる觀察眼を以て言外の眞理を洞察し、更に其國の人情風俗及思想の核心を把握し、敍するに流麗珠の如き文章を以てす。詩想湧く時は、思ひを古今東西に馳せ、飽迄詩的境涯を探究し、一木一草にも無限の感慨を述べ、讀者をして直ちに、思想豐かなる著者の心境に觸れしむ。眞に本書は人類文明の一大記錄である。苟くも現代文明の實相を知らんとする者の見逃すべからざる快著である

―(目次の一部)―

四六判 函入美本

定價 貳圓五拾錢

送料 拾貳錢

東京本郷 大日本雄辯會發行 (振替東京三九三〇)

左右田喜一郎監修
横濱社會問題研究所編

新カント派の社會主義觀

（社會問題研究叢書第貳篇）

菊判二五〇頁	假綴略裝
定價壹圓六拾錢	送料内地書留十八錢

本書は新カント派哲學者の社會主義觀を檢討することを通じて社會主義の哲學的基礎如何を究めむとする横濱社會問題研究所同人の勞作である。即ち研究員の分擔執筆に係る研究十篇

杉村廣藏 フォルレンダーの社會主義觀。 酒井正三郎 ランゲの社會主義觀。 酒井正三郎 コヘンの社會主義觀。 金子弘 ナトルプの社會教育論。 柳原巖 シュタムラーの社會主義觀。 杉村廣藏 シュタウディンガーの社會主義觀。 渡植彦太郎 クロオチェのマルクス批評。 宮崎力藏 シュルツェ・ゲヴェルニッツの社會主義觀。 本田謙三 トェニエスの「協同體」と「社會體」との區別。

と別に錄する

左右田博士 文化哲學より觀たる社會主義の協同體倫理

の雄篇とより成る。前者は新カント派諸家の論の概要を傳へて社會主義を倫理學的に又社會哲學的に確立せむとする近時の思想運動の鳥瞰圖を描けるもの、而して左右田博士の論は此の如き思想運動を捉へ來て縱横の批判を加へ、その意義と歸趣とを闡明し兼て本書の研究に結論を與ふるものである。

左右田喜一郎著
勝本鼎一譯

經濟法則の論理的性質

再刷 菊判三〇〇頁 總布表裝函入 定價貳圓參拾錢 送料書留卅二錢

發兌 東京神田 南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇 電話四谷五八七〇

——(治安法案は既成政黨を埋葬す)——



(四月號)

治安法案は既成政黨を埋葬す

どうも危險な時代が迫つて來たやうな氣がする。時代と全く沒交渉な人間が閣僚に列したり、自分が判斷もつかぬ、說明も出來ない法案を議會に提案し、そしてそれが多數黨の御威光によりて國民の總てを拘束する法律となる恐ろしい世の中だ。こんな事では我國の社會進展なぞは思ひもよらぬことだ。否 治安維持案が效力を發生する日から我國の文化は逆轉するばかりだ。普選を我黨內閣で片付けた現內閣は我政治史に未曾有のいゝ記錄は殘したが、それと同時に社會科學の硏究を全然阻止する惡案の責任者として永久に其醜名を負はされた。尤も野黨たる政ゝ本黨も同罪だが——。

かくの如く社會の進展を阻止するやうな法案は民衆の眞の自覺の發展と、その組織的能力の發揮さるる日には雲散霧消することは勿論だ。古への治者でさへ法三章といつて法は明瞭、朗正、簡約を尙び、そして萬民が均しく首肯の出來る直截の法文たることを要し、政治と法規に曖昧のないことが治の第一義とされていた。然るに我政治家のこの僞體とは何事ぞ。

彼等の十中八九は婦人參政が提唱さるると、それに對し野卑、醜陋の性慾意識しか働かない低級政治家であるが故に、眞の人間權の確立なぞ云ふことは夢想だも及ばぬであらうが。

頃者農民組合及び既成政黨分子から農民黨組織の聲も高まつて來たが、しかし眞の農民黨は、眞の無產政黨は矢張り後者が時代的訓練を經て既成政黨に對峙するものであつて欲しい、普選案を斷行して民衆に接近し、勞働者、農民の間に强い味方、數百萬の數多い同情者を獲得しながら身自ら又、民衆との一大溝渠を作成し、智識階級を敵とし、無產階級と絕緣し、全國の言論機關の殆んど全部を敵とするに至つた現內閣及既成政黨は普選實施第一回の總選擧に當りて無產政黨との間に一大決戰をなし、玆に我國の政界に階段的一大分野を現出するであらう、隨つて今日まで唱導された社會政策も、勞資協調主義も其時を以つて全部が打切られ、一大淸算せられて階級鬪爭の一大巨火が全國的に熾烈に燃り燃えるであらう。その時だ、その時を措いて國民が政治的自覺を新にする時はない。さるにても近く組織さるるであらう無產政黨の有鼻にさへ愛惜をつかさるるに至つた政府與黨の策戰の拙劣さはいつもながら呆れはてる。

労働組合の法律上の地位

―現行法は労働組合を如何に取扱つて居るか―

(労働組合法論第二章)

末弘嚴太郎

序説

一

自由主義經濟組織の上に築かれたる社會に於て、勞働者が彼等に與へられたる契約の自由を正當に行使し、以て正しき滿足すべき條件を以て其勞働を賣り得べき唯一の途は、集團的行動であり、組合による團體的交渉である。

彼等は組合により團體的交渉によつてのみ資本家と對等の地位に立つことが出來る。さうしてそれによつて初めて眞に取引し商議し且契約することが出來る。これならば、何所までも自由主義を標榜し、すべての國民に對して公平ならむ

ことを理想とする國家は、よろしく勞働組合發生の必然なる所以を理解し且つ之によつて始めて契約自由の正しき精神が社會的に發揮せらるゝ所以を看取して、組合の自由なる行動發展を認容し以て之をして資本家との間に正々堂々のフエヤプレーを爲さしむべきである。從つて又彼等に向つても一般國民に許されたると同等の程度に於て國家的施設を利用するの便宜を許與すべきである。

吾々は、自ら團結し得ざる弱き勞働者の爲めには、國家はよろしく特に保護の手を差し伸べて、彼等の爲めに人間らしき生活を保障すべき途を講ぜよ、と主張する。何故なれば、彼等は團結の力により自助的の手段によつて自ら其の地位を保全することが出來ないからである。國家はよろしく彼等の爲めに勞働者保護法を制定し、又最低賃銀を保障すべき何等かの方途施設を考慮すべきである。之に反し、自ら團結し得べき勞働者の爲めには――自ら團結して資本家と對等の取引を爲し得べき力ある勞働者の爲めには、必ずしも國家が之に向つて保護救濟の力を致すべきことを要求しない。國家が自ら進みて之を與へ以て彼等の要求の合理的充足を計ることが出來るならば無論これに越したことはあるまい。けれども、現に之を與へ得ざる國家、之を與へ得ざるが如き經濟組織の上に築かれた現在の國家に向つて、かくの如きことを望むも、その到底滿足なる解決を與へ得ざるは明白である。茲に於てか、吾々は云ふ。國家は必ずしも彼等の爲めに特別の保護を與へる必要はない。彼等の爲めに唯彼等自らの自助的手段を許せ。彼等は團結により自らの力によつて自ら獲得すべきものを自ら獲るであらう、團結により資本家と對等の地位に立ちつゝ平等の取引を爲すであらう。さうして、彼等個々の力を以てしては到底得ることの出來ないものを得るであらう。

然るに、今日吾國の法律は勞働者の爲めに其の團結を許して居ない。勿論憲法第二十九條は形式上勞働者の爲めにも亦「結社の自由」を保障して居ること後に述ぶるが如くである。けれども、勞働者が事實其の「結社の自由」を利用し

て團結を爲さむとするや、國家は之に向つて幾多の障害を與へて居る。又社會上存在する幾多の不當なる障害を彼等の爲めに除去すべき途を講じて居ない。其の結果、勞働者は自らの力によつて正當に獲得し得べきものまでをも得ることが出來ないのである。

吾々は唯勞働者の爲めにかくの如き障害を除去せよと主張する。唯彼等の爲めに平等なる地位を保障せよと云ふ。自由主義を理想とし平等を標榜する國家よ。何故にそれが出來難いのであらうか？

二

勞働者の爲には彼等が團結の力によつて資本家と對等の地位に立ちつゝ、之と平等の取引を爲すことを許し與へねばならぬ。

然るに、今日吾國の勞働者は此點に於て次の三種の障害に直面しつゝある。

其一は、勞働組合の組織活動を阻害すべき各種の刑罰法令である。帝國憲法第二十九條は「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス」と規定して居る。此故に、結社權が憲法上保障せられたる國民基本權の一たることは素より言ふを俟たない。勿論、「法律」により——議會の協贊を經——さへすれば之を制限することも又禁止することも出來る。と云ふのが憲法の考である。けれども、政府は勅令其他命令によつて濫りに結社權を犯してはならぬ。それは實に憲法上保障せられたる國民の基本權である。然るに、現行法は一方に於て直接勞働者の團結權を制限すべき何等の規定を設けざるに拘らず、同時に他方に於て其の行動を極端にまで制限すべき幾多の刑罰法規を設けて居る。さうして、勞働組合發生の社會的に必然なる所以を正常に理解せず、從つて其の當然に果さねばならぬ社會的職能を正し

く理解せずして、動ともすれば組合を違法視するの傾向ある警察官憲並に司法官は、此等の法規の適用によつて甚しく組合の活動を制限しつゝある。のみならず勞働組合の本質上當然に爲さねばならぬ行動までをも禁止し制限し且處罰しつゝある。其結果、形式上適法視されて居る勞働組合も全く行動の自由を奪はれて實質上違法視せられたると何等異なる所なき狀態に陷らしめられつゝある。組合は活動の爲めに存在する。否活動するが故に存在するのである。然るに一方其の「存在」を適法視すと稱しつゝ他方同時に其の「活動」を制限して居る。かくの如きは實に組合夫れ自身を違法視すると何等異なる所なきものと言はねばならぬ。此故に、勞働組合法制定に於ける第一の仕事は、此等勞働組合の活動を阻害しつゝある刑罰法令を全廢することでなければならぬ。

次に吾國勞働組合に對する障害の第二は、彼等の相手方たる資本家より來る。資本家は勞働者の團結を悦ばない。彼等を個々に引き離して置いて意のまゝに驅使したい。此故に今日資本家は一般に契約自由の名の下に勞働者の團體交涉を拒否する。さうして自己の傭使する勞働者をして組合に加入せざらしめ又組合を組織せざらしむるが爲めに、陰に陽に各種の對抗手段をとりつゝある。それは勞働者の組合組織に對して現に著しき妨害を與へつゝあるものなるに拘はらず、現在の國家と法律とは契約自由の美名の下にすべてを資本家の爲すがまゝに放任しつゝある。けれどもかくの如きは資本家が其の經濟的優越を利用して故意に相手方を壓迫し、相手方をして不當に其の劣勢を持續せしめ、以て彼等から貴重なる取引の自由を奪ひ、契約の自由を取り去らむとするものである。若しも國家が眞に國民の爲めに自由を賦與せむとするならば又彼等の爲めに眞に平等を保障せむとするならば、勞働者唯一の武器たる團結權は飽くまでも之を保護せねばならぬ。資本家が其の資本家たることに固有する優越性を以て勞働者の團結を妨害せむと企つるとき、公正なる國家は飽くまでも其の妨害を除去せねばならぬ。何故なれば、勞資兩者の問題は勞働者が其の勞働者たることに固有す

る優越性―團結――によつて資本家に對立する場合に於て初めて對等のものとなり公正のものとなり得るからである。

終りに、現在勞働組合の當面しつゝある障害の第三は現行法上彼等に對する權利の保護が全く規定されて居ないことである。勞働組合は吾々の社會が自然に生み出した一の社會的存在である。それは丁度經濟の必要が自ら株式會社を生み出したのと同一である。株式會社は多數の人々が資本を出資したる上各自其の責任を出資額の限度に限りて――換言すればそれ以上自己の私財を危險に曝すことなくして――事業を行はむが爲めに生れた制度である。而して近代の諸國は逐次此の制度に向つて法律的地位（リーガルステータス）を確認し、之をして各個個人が法律より受け得ると全く同一の保護を受け得るに至らしめたのである。それならば、同じく經濟の自然が生み出した勞働組合に向つても、若しもそれが希望するならば、一般の個人が受け得る同樣なる法律的保護を確認し與へて然るべきである。何故なれば、勞働組合も亦吾々と同じく此の社會に存在し活動しさうして公私各方面の人々諸團體と交渉を持つものである以上、それに關聯して裁判所其他國家の機關施設を利用し國家的助力を求め法律的保護を受くるの必要ある蓋し當然なりと云はねばならないからである。それにも拘らず我國現行の法律は勞働組合に對して何等正式に法律的地位を確認し與ふることなく、其結果財產其他權利の享有に關し又各種の行動について、法律上の不便を忍ばねばならぬ地位に放置せられつゝある。而してかくの如きは現在株式會社その他の社團が一般に享有して居る法律的待遇に比すればはなはだしく差別的のものなりと言はねばならぬ。

勿論、社會の事情が必然に生み出した勞働組合、勞働者が依つて以て生きむとし、より良く生きむとして作り出した勞働組合は、一の社會的產物であり社會的存在である。縱令國家が之に向つて正式なる法律的地位を確認し與へずとも社會的に存在する其の存在夫れ自身に何等の變はりはない。それは恰も、自然が此の世に生み出した人間は、國家が之

に向つて法律的人格を附與せずとも。――換言すれば縱令法律上は之を奴隷として取扱はうとも――其の人間たること夫れ自身に何の變はりもないのと全然同一である。けれども、同じく人間として生まれながら法律上他の人間と同等な國家的保護を與へられないことは、彼等が人間として生まれた所以を充分に發揮し享樂することの甚しき妨げとならねばならぬ。之れと同じく、社會の必要から生まれ出た或る種の團體――勞働組合――が他の一般諸團體と同等なる國家的保護を受け得ないことは、其の團體の生存並に發達に向つて甚しき障害を爲しつゝあること素より云ふを俟たない。

此故に、苟も國家が自由主義を標榜し國民の平等を理想とする以上、自由放任の資本主義經濟組織が必然に生み出した勞働組合に對しても、國家はよろしく其の本性的活動を自由ならしめて其の社會的職能を充分に發揮せしむべく、又少くとも他の一般團體が受け得ると同一程度の國家的助力を與へて其の活動に便すべきである。然るに、吾國現行の法律は此點に於て極めて不備である。それが爲め、勞働組合は甚しき不公正なる取扱を受けつゝある。

勞働組合の立法を論ぜむとする者は、先づ現在吾國の法律が組合に對して如何に甚しき不公正の取扱を與へつゝあるかの事實を如實に觀察して之を詳細的確に理解することが必要である。何故なれば、現に如何なるものの存在するかを正確に知らずして、之が改革を說くも其論の到底適切なるを得ざる素より其の所なりと云はねばならないからである。此意味に於て、勞働組合の立法を論ぜむとする私は先づ玆に勞働組合が現行法上與へられて居る法律的地位の何たるかを明かにせねばならぬ。以下節を分つて、第一に先づ『勞働組合に關する刑罰法令』を論じ、第二に『勞働組合に對する資本家の壓迫と法律』の之に對する態度とを說き、第三に現行法上に於ける『勞働組合の私法的性質』を述ぶるであらう。

第一節　勞働組合に關する刑罰法令

三

勞働組合が發達の過程上すべての國々に於て先づ第一に遭遇する障害は「刑罰」である。さうして勞働組合立法發達の歴史上先づ第一に行はるゝものも亦此の「刑罰」の除去である。

各國に於ける勞働組合の歴史を知る人々は、それが先づ如何に「刑罰」の下に苦しみたるかの事實を熟知して居る。さうして例へば英國に於ては先づ一八二四年の團結法廢止法 Combination Laws Repeal Act によつて「刑罰」廢止の第一期が初まり　軈て其後一八七一年の勞働組合法 Trade Union Act 1871 及び一八七五年の徒黨及財産保護法 Conspiracy And Protection of Property Act 1875 制定せらるゝと共に「刑罰」の時代が全く過ぎ去り、佛蘭西に於ては又一八八四年の職業組合法 Loi Du 21 Mars 1884 Relative à la Création des syndicats professionnels の制定と同時に其の時代の過ぎ去つたと云ふ事實を知つて居る

所が「刑罰」の時代が去ると共に　次に來るものは資本家の自力救濟である。「刑罰」の行はるゝ間資本家は唯其護衞兵たる國家に信賴して袖手傍觀すればよい。さうすれば國家は、産業保護の名の下に、治安維持の名の下に乃至は又取引自由の名の下に、極力彼等組合を壓迫してくれる。けれども一度「刑罰」の時代が去るとき、資本家は最早國家の積極的行動に信賴して安息することが出來ない。而かも資本の本質的優越性を擁する彼等は、決して「刑罰」やみたるの故を以て直に勞働組合をして其の爲すがまゝに任せやうとはしない。必ずや其の實力によつて組合を壓迫し又之を破壞せむと企てゝ居るにきまつて居る　或は組合及び其幹部に對し同盟罷業を理由として巨額の損害賠償を請求するが如き、

又或は勞働者が組合員たるの故を以て其の雇入を拒絶し又は之が解雇を爲すが如き、すべて其の企ての現はれであつて、資本自力救濟の時代は即ち玆に初まるのである。英國に於ては「刑罰」の時代去りたる後幾何もなくしてこの時代が來た。さうして一九〇一年に於ける Taff Vale 事件は實に資本家の自力救濟が最も有力に勞働者を脅かした實例である。英國に於ては一九〇六年の勞働爭議法 Trade Disputes Act 1906 制定に依つて勞働組合は最早此の脅威からも免かるゝに至つた。即ち資本家自力救濟の時代も亦去つたのである。けれども、米國に於ても今日佛蘭西に於ても尙資本家の專ら行ふ所は此の種の自力救濟であつて現に之に關聯して幾多の民事訴訟が行はれつゝある

かくの如き勞働組合法發達の一般的過程より云へば、我國の現狀は今尙「刑罰」の時代である。刑罰法規尙嚴として存在し、警察司法の官憲は何等の假借する所もなく之が適用を行ひつゝある。さうしてそれが爲め勞働組合の活動並に發展の阻害されて居ることは今更喋々するまでもない事柄である。

けれども、我國にとつても今は最早其の時代を去らしめねばならぬ時が來りつゝある内外の情勢は最早刑罰によつて組合を壓迫することを許さない。勞働者は勿論一般の輿論も亦之を許さない。官憲と雖も明識あるものは最早同じく之を許さないのである

私は以下、吾國の現行法中如何に多くの組合壓迫を目的とする法規が存立するかを説明し、さうしてこれが如何に組合の活動並に發達を妨げつゝあるかの事實を明かにしたい。さうして今尙「刑罰」に執着する最後の分子、而かも現在の制度上最も有力なる分子の爲めに、「刑罰」の時代を去らしむるの必要極めて緊急なる所以を説きたいと思ふ。

四

治安警察法の諸規定中直接勞働組合の行動を制限することを目的とするものは第十七條及び第三十條である。而して從來勞働問題に關聯して治安警察法の改廢を論ずるもの丶意見も多くは此等の規定にのみ限られて居る。けれども、些細に同法の內容と其の運用の實際とを觀察するとき、吾々の特に考慮を要すべき法規の決して單に此等一二の法條にのみ限られて居るのではないことを發見するであらう。

先づ第一に、勞働組合の運動は必然的に多衆的の運動である。而して多衆が其の勢力を公示すべき最も適當なる方法は集會、行列等の示威運動でなければならぬ。現に權力を擁する者富力を保有する者は隱密陰險なる戰術を好む。資本家の勞働戰術は常に陰性なるを以て其の特色とする。之に反して勞働者の戰術は多く公開的であらねばならぬ。示威的であり宣傳的であらねばならぬ。然るに治安警察法は安寧秩序の保持を名として集會、多衆運動の類を制限乃至禁止し得べきことを規定し、結社も亦同樣の理由を以て之を禁止し得べき者を規定して居る（第四條第八條第一一條第一二條）。其結果、組合が其の本質上必然に爲さねばならぬ行動又は少くとも兎角爲し勝ちである行動が、稍ともすれば此等の法案に觸れて禁止を受け勝ちであり、更に進みては又刑罰を受けることゝなり易いのである。

第二に、勞働組合の運動は友愛の運動である。抑制せられたる者壓迫せられたる者の相互的同情を心理的基礎とする結合の運動である。此故に、例へば組合の一員勞働の戰に傷けば他の組合員擧つて犧牲者の上に精神的乃至物質的の同情を注ぐが如く、常に相助け相倚り相慰めつゝ共々に微弱なる力を合はせて大敵と戰ふことは常に組合運動の特色であらねばならぬ。從つて、或る一工場に於て同盟罷業を企つるものあるとき、外部の組合より之に向つて物質的並に精神的の援助を與ふることあるは極めて自然である。又罷業其他爭議の犧牲者となりて失職し又は入獄する者あるとき組合の之に向つて同情を注ぎ援助を惜まざるも亦極めて自然である。然るに、治安警察法はかくの如き援助的行動を目して

勞働組合の行動に對して適用せらるべき現行の刑罰法規は大體之を三種類に分けることが出來る。其一は治安警察法であり、其二は各府縣の警察罰則であり、其三は一般刑法中の諸規定である。

同盟罷業を「煽動」するものとなすこと後述の如くなるのみならず、彼等が互に言葉を以て犧牲者を慰めることとすらも尙一の犯罪なりとして之を處罰して居る。現に、勞働總同盟は大正十年の大會に際し「全國ヨリ來會セル代議員約百餘名其他傍聽人ノ入場セル會場」に於て「日本勞働總同盟友愛會第十年大會ハ資本主義制度ノ根本ニ大斧鉞ヲ加ヘントスル階級鬪爭ノ陣頭ニ立チ遂ニ牢獄ニ繋ガレタル諸君ノ御活動ニ對シ滿腔ノ敬意ヲ表ス」との感謝文を決議承認したる上「當時出席セル所謂犧牲者ナル刑事被告人某々等ヲ各會場內壇上ニ整列セシメ（中略）其ノ者ノ面前ニ於テ」右感謝文を朗讀したる所、裁判所は遂に此行爲を以て治安警察法第九條第二項「集會ニ於テ犯罪ヲ煽動若ハ曲庇シ又ハ犯罪人若ハ刑事被告人ヲ賞恤又ハ救護シ又ハ刑事被告人ヲ陷害スルノ講談論議ヲ爲スコトヲ得ズ」との規定に違反するものなりとして鈴木文治氏以下數名の組合幹部を處罰したのである（大審院判例集第一卷第九號刑五一九頁以下參照）。さりながら組合は元來多衆を以て本質とする。同情を以て基礎とする。此故に、彼等其の結束を固め合同の行爲を爲すについては必然に「集會」を必要とする。組合が成るべく組合員の集會によつて事を行ふのは組合をしてデモクラチツクならしむる所以である。幹部の專制を防ぐ所以である。從つて組合の組織として寧ろ喜ぶべき形式なりと言はねばならぬ。又かくして「集會」せるに際し、彼等が其の決議によつて共同の犧牲者に向つて一言感謝の意を表するが如きは人間の至情として寧ろ當然の行爲なりと言はねばならぬ。若しも彼等の爲す所が、會衆を煽動して騷亂に赴かしめ以て治安の障碍をも惹起すが如きものであるならば、之を罰する尙理由ありと云ふことが出來やう。之に反し、單に如上感謝文を朗讀したるが如き行爲までをも處罰し得るが如き法規を存置せしむることは組合の行動に對する甚しき壓迫なりと云はねばならぬ。

第三に、勞働組合は結社である。さうして、現在の如く政府並に資本家が極力之が壓迫に力めて居る以上組合が成るべく其の存在を秘密にせむとするの傾向あることは自然であらねばならぬ。又現在組合に關する何等の法制なく、從つて組合設立せらるゝも特に之を屆出で又登錄すべき手續等が少しも規定されて居ない以上、組合は行動によつて其の存在を公示する以外、自ら敢て其の存在を公示すべき手續を採らざるは當然である。然るに、治安警察法第十四條は「秘密ノ結社ハ之ヲ禁ズ」と云ひ、而して最近大審院は其所謂「秘密ノ結社」なる文字を解して「一定ノ共同目的ノ爲ニ結合セル特定多數人ノ團體ニシテ其ノ社員間ニ於テ其ノ存在組織及目的等其ノ團體ニ關スル事項ヲ秘シテ國家ニ知ラシメザルコトヲ約スルモノ」なりと言つて居る（大審院判例集第三卷第十號刑六七九頁以下）勿論本判決の對象となつた名古屋市の「エルピー」なる「勞働組合」は會々「勞働組合赤色インターナショナル」に加入し得べき革命的勞働團體を組織することを目的としたものであつて、現在此種の行動に對する警察官憲の態度との關係上會員としても特に其の結社を秘密にするの意見が充分にあつたであらう。けれども、若しも右大審院の定義を文字通りに當てはめるならば、かくの如く特に秘密となすの意見を推測すべき事由明確ならざる一般普通の勞働組合と雖も秘密結社として所罰を受ける虞が甚だ多い。殊に爭議の準備として組織せられたるもの其他組織未だ强固ならざるものゝ如きは、性質上「秘密」であるのが普通である。而かも公安的見地より見るも何等特別の危險性なき普通の組合までをも「秘密ノ結社」なりとして、之に課するに六月以上一年以下の禁錮を以てし得るが如き法制を存せしむることは、是れ亦勞働組合の組織活動に對しての不當なる威迫であらねばならぬ。

かくの如く、治安警察法中には現在世間一般に論議せられつゝある第十七條の外にも、治安の名目の下に組合運動に向つて不當の壓迫を加へる根據となり得べき規定が澤山に存在するのであつて、勞働組合發生の社會的必然性を否認し

其の現代經濟組織の下に於ける正當なる使命と職能とを理解する者は、第十七條と同時に此等の規定の改廢をも論議主張せねばならないのである。

然らば、問題の第十七條は何を規定して居るか？曰く

「左ノ各號ノ目的ヲ以テ他人ニ對シテ暴行、脅迫シ若ハ公然誹毀シ又ハ第二號ノ目的ヲ以テ他人ヲ誘惑若ハ煽動スルコトヲ得ズ

一　勞働ノ條件又ハ報酬ニ關シ協同ノ行動ヲ爲スベキ團結ニ加入セシメ又ハ其ノ加入ヲ妨グルコト

二　同盟解雇若ハ同盟罷業ヲ遂行スルカ爲使用者ヲシテ勞務者ヲ解雇セシメ若ハ勞務ニ從事スルノ申込ヲ拒絶セシメ又ハ勞務者ヲシテ勞務ヲ停廢セシメ若ハ勞務者トシテ雇傭スルノ申込ヲ拒絶セシムルコト

三　勞務ノ條件又ハ報酬ニ關シ相手方ノ承諾ヲ强ユルコト

耕作ノ目的ニ出ヅル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ强ユルカ爲相手方ニ對シ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スルヿヲ得ズ」。

而して、右の規定に違反した者は第三十條によつて「一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス」ることになつて居り、尙「使用者ノ同盟解雇又ハ勞働者ノ同盟罷業ニ加盟セザル者ニ對シテ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スル者亦同ジ」と規定されて居る。

即ち、犯罪行爲を分つて、暴行脅迫若くは公然誹毀及び誘惑若くは煽動の二種類となし、其中前者は上記何れの目的を以て爲さるゝも常に之を罰し、後者は同盟解雇又は同盟罷業を遂行するが爲めに爲された場合にのみ之れを罰するのである。而して法文の形式上所定の行爲は勞資の何れによつて爲さるゝもすべて同樣に罰せられることになつて居るけれども、事實に於ては獨り勞働者の行爲を取締ることのみを目的として居ること素より言ふを俟たない。何となれば、

資本家は一般に此種の法規に觸れざる手段を以て有利に勞働者と取引を爲し得るに反し、勞働者は集團的行動によるの外取引上契約自由の利益を享受すべき何等の方法をも持たないからである。

此の規定中、暴行脅迫公然誹毀の行爲は一般刑法も亦處罰する所であつて、夫れ自身不法の行爲たること素より言ふを俟たない。けれども、それが不法であるならば一般刑法を以て之を罰すれば即ち事は足りる。勞働取引に關聯して爲されたるの故を以て特別の取扱を與ふべき理由は少しも存在しない。殊に、刑法によれば、單純なる暴行罪及び誹毀罪は告訴を待つて初めて之を罰することになつて居る。それならば、其の同じ行爲が勞働取引に關聯して爲された場合に限つて特に之を告訴の有無に拘らず罰し得べきものとする理由は少しも存在しないのである。然るに、此規定を辯護せむとする者は、勞働取引に於て爲されたる如上の行爲を以て特に公益に關するものとなし、以て之を一般の暴行罪誹毀罪の單に私益を犯すに過ぎざるものと區別せむとして居る。けれども、暴行はそれが單純暴行の程度を越えて人を傷害するか又は騷擾罪を構成するの程度に至らば格別、其然らざる場合に於ては縱令それが勞働取引に關聯して爲されやうとも特に公益犯として之を罰すべき理由は少しも存在しない。況んや誹毀罪に至つては愈々さうでなければならぬ。彼等は口に治警十七條は同盟罷業そのものを罰せむとするにあらず唯暴行脅迫の類を罰せむとするに過ぎずと言つて居る。けれども心中暗に、資本家の爲す所は國家產業の爲めに貢獻する公益の事業である、之を阻害する一切の行動は公益を害するものでなければならぬと云ふが如き思想を抱懷して居るに違ひないのである。けれども、若しも產業が勞働者から全く契約自由の利益を奪ひ去らねばならぬ程公益的のものであるならば、其の經營管理に付いても全く之を資本家の自由に放任すべき譯はないのである。然るに、一方に於て事業を全く利潤のみを目安とする資本家の經營に放任しつゝ、他方公益を名として勞働者を抑壓せむとするが如きは甚しき片手落である。かくの如きは畢竟勞働者をのみ犧牲

者として「國益」を計り「賃銀の低廉」のみを武器として國際產業競爭場裡に臨まむとするものであつて、其の不當なる素より言ふをまたない。要するに自由經濟の社會に於ては一般の營利企業は少しも公益を目安として統制されて居ない。それならば、資本家が勞働を買ふことは彼等が原料を買入れるのと同樣全く彼等の私事でなければならぬ。勞働の買入に限り特に公益を名として彼等を保護する理由は少しも存在しないのである。

次に、本規定は同盟罷業の誘惑煽動を以て一種の犯罪なりと認めて居る。けれども、團體交涉の一手段としての同盟罷業そのものに犯罪性なきこと上述の如しとせば、それを組織する爲めの誘惑煽動も亦犯罪性なきものと解せねばならぬ。何となれば、同盟罷業の如き集團的行動は何人かが之を主唱して他人の參加を勸誘するにあらざれば事物の性質上到底成り立ち得ない事柄である。何人かの主唱なく又勸誘なくして同盟罷業の成立するが如きは到底不可能事である。此に誘惑煽動を罰せむとするが如きは畢竟同盟罷業そのものを罰せむとするものである。口に罷業そのものゝ適法を唱へつゝ誘惑煽動のみ之を罰せむとするが如きは甚しき自家撞着の論と云はねばならぬ。

此故に警察司法の官憲は近時しきりに辯明して曰く。同盟罷業そのものは犯罪ではない。從つて今後勞働者が相互に申合はせ罷業を行ふのは毫も差支ない。唯局外の「第三者」が濫りに介入して煽動誘惑を行ふことは之を許すことが出來ない。最近官憲の處罰も亦此考の上に立てられて居る、と。

彼等は一般に勞働組合の幹部世話人等に對して、勞働ブローカー其他の惡名を負はしめる。さうして此等のものは直接利害關係なき局外の第三者なるに拘らず唯自己の利益を計らむが爲めに煽動誘惑を行ふものだと云ふのである。けれども、勞働組合發達の途上に於て第一期の組合は多く宣傳的であり教育的であり、誘導的である。常時多數勞働者の加盟を以て組織せらるものにあらずして、單に事あるとき多數勞働者を團結せしむることを目的とする小數指導者の團結で

ある。從つて、彼等は甲の工場に不平あるときは之に應援を與へて團體的行動をとらしめ、乙の工場に紛議あるときは又赴いて同じことを行ふのである。其結果彼等のなす所は局外の第三者濫りに勞働者を煽動して紛議を爲さしめ以つて其間に利益を收めむとするものゝ如き外觀を呈し易い。乍併、彼等所謂勞働運動者が誠心誠意勞働者の利益を考へて居る限り其の行動は毫も之を不法視することが出來ない。何となれば、組合當初に於ては、常時唯勞働運動者のみの團結が存在するに過ぎないけれども、一朝有事の際彼等は當該工場に於ける勞働者を團結せしめ其中核となつて集團行動を行ふものである。從つて、常時現に多數勞働者の加盟によつて組織された團體ではないけれども、必要ある毎に如何なる勞働者の爲めにも其の中核となつて集團的行動を執らしむべき機關である。假に發達したる勞働組合を移して現勢的組合と名付け得べくむば、此種初期の組合は名付けて潜勢的 potential の組合と呼び得べきものである。元來發達したる組合と雖も勞働者の外別に事務員とし世話人とし乃至は顧問參謀として有償乃至無償の役員を置くにあらざれば充分なる活動を爲得ないのは當然である。從つて——資本家が勞働者係其他の役員を雇つて勞働者問題に應接せしめて居ると同樣勞働組合が此種の役員を置いて對資本家問題の解決に便ずることはすべて之を適法視せねばならぬ。一方を許して他方をのみ禁ずるが如きは到底之を是認することが出來ない。それならば、發達した組合の役員幹部に相當すべき役目をつとめる潜勢的組合は、縱令それが關係の勞働者から成り立つて居らずとも、必要ある毎に逐次各種勞働者の爲めに集團的行動の世話をするものとして、換言すれば不特定多數の勞働者を—— potential ——組合員をして常時其の役員たる働きを爲すものとして、すべて同樣に之を適法視せねばならぬ。之を濫りに「第三者」として取扱ひ其の行動を目して局外者故なく他人の紛議に干與するものと爲すが如きは眞に勞働組合の社會的意義を理解したものと云ふことが出來ない。

大正十二年十二月十八日の大審院第一刑事部判決は、熊本縣八代郡築村の小作爭議に於ける日本農民組合支部長の行動に關して「自己ノ勸誘及ビ紹介ニヨリ、他人ヲシテ組合ニ加入スルニ至ラシメタル者ハ、其ノ加入ノ目的ヲ達セシムル爲メ援助ヲ受クベキコトハ德義上當然ノ事ニ屬スルガ故ニ、被告人ガ小作人ヲ勸誘シ且紹介シテ組合ニ加入セシメタル以上ハ、其ノ加入ノ目的ヲ達セシムル爲メ、小作人ヲ督勵シタル判示行爲――或は爭議に關する會合を開き或は小作人に對し日本農民組合長よりの來翰を朗讀し且目的貫徹の爲め結束を固むべきことを說きたる等の行爲――之ヲ以テ正當ノ事由ニ因ラズシテ他人ノ紛議に關與シタルモノト爲スベキニ非ズ」との判決を下して居る。(法律新聞第二二一七號所載)本件の事案は直接治安警察法第十七條に關するものにあらずして熊本縣令警察罰則第一條第六號「故ナク他人ノ紛議ニ關與シタルモノ」の適用に關して居る。けれども、組合の幹部が自ら他人を勸誘紹介して入會せしめた以上爭議の際それ等の者の爲めに活動するのは「德義上當然」のことであつて局外の第三者が「故ナク他人ノ紛議ニ關與スルモノ」とは認め難いとして居る點に於て、所謂「第三者」問題の解決上極めて價値ある判決と言はねばならぬ。而して私は此の主旨は潛勢的組合の行動に付いても亦全然同樣に之を認めねばならぬと信ずるものである。

かくの如く、治安警察法第十七條は毫も之を存置せしむべき理由がない。暴行脅迫公然誹毀に關する部分は素より、誘惑煽動の部分も亦すべて之を廢止せねばならぬ。而して組合を適法視する以上組合幹部の行動も亦すべて之を適法視せねばならぬ。同條を今後に存續せしむべき理由は毫も存在しないのである。

五

勞働組合の行動を防ぐべき刑罰法令中第二に注目すべきものは各府縣の警察規則である。

小作争議防止の爲め各府縣が其の府縣令を以て小作人の各種戰術を封ずべき幾多の警察法規を設けて居ることは曾て平野義太郎氏が、大正十三年一月の本誌上に發表された「小作争議の爲めの團體運動」中に詳説された所である。所が同様の法規は勞働組合に向つても亦適用せらるべきものであり又今後必要あらば何時にても府縣知事は一片の府縣令によつて此種の規定を作ることが出來る。今日此種の規定は主として小作争議の鎭壓を目的として制定せられ又適用せられつゝある。其の主たる理由は小作運動については上述の如く治安警察法第十七條中に單に「耕作ノ目的ニ出ヅル土地賃貸借ノ條件ニ關シ承諾ヲ强ユルガ爲相手方ニ對シ暴行脅迫シ若ハ公然誹毀スルコトヲ得ズ」との規定があるのみで、勞働争議に關するが如く「煽動誘惑」を罰すべき規定がない、從つて同法だけでは充分に小作組合の運動を鎭壓することが出來ないからである。此故に、今後若し幸に治安警察法第十七條が撤廢されるとしても、同時に以後勅令其他各種の命令を以て勞働組合の行動を抑壓する主旨の法規を制定すべからざることを宣明するにあらざれば、各府縣は必ずや其の警察命令によつて直接勞働争議の鎭壓を目的とする幾多の法規を制定するに違ひない。私は今日既に此の將來を恐れるのである。

現在存在する警察法規だけでも、其中

(一)警察犯處罰令中「故ナク面會ヲ强請シ又ハ强談威迫ノ行爲ヲ爲シタル者」を罰する規定(第一條第四號)は容易に之を以て勞働組合代表者の團體交渉申込を擊退すべき手段として使用せられ得る。

(二)次に又同令中「濫ニ他人ノ身邊ニ立塞リ又ハ追隨シタル者」を罰する規定(第二條第三十一號)は之を以て容易に同盟罷業の場合に於ける見張立番 Picketing の類を――而かも其中平和的なるものをも――罰することが出來る。

(三)尙現在多數府縣の警察法規中に存在する「故ナク他人ノ紛議ニ關與シ若クハ煽動シタル者」を罰する規定は、今日主として或は所謂三百代言退治の目的を以て又或は日本農民組合の如き小作組合幹部の行動を處罰する目的を以て適用

されて居るが、治安警察法第十七條廢止の曉には勞働組合に向つても同樣に適用され得べき規定である。而して上述の如く警察司法の官憲が現に包懷しつゝある「勞働者乃至小作人が自ら團結的行動をとるのは差支ないけれども、所謂勞働ブローカーの如き第三者が濫りに爭議に介入するのは不都合である」と云ふ意見が今後も尚長く存續する限り、治安警察法第十七條廢止以後に於て勞働組合の行動を最も甚しく拘束すべきものは正に此の規定でなければならぬ。

憲法によれば、吾々「日本臣民ハ法律ニ依ルニ非ズシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ」（第二十三條）然るに同時に「天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ增進スル爲ニ必要ナル命令ヲ發シ又ハ發セシ」め得ることゝなつて居り（第九條）、而して明治二十三年法律第八十四號「命令ノ條項違犯ニ關スル罰則ノ件」及び同年勅令第二百八號「閣令省令廳令府縣令及警察令ニ關スル罰則ノ件」を以て勅令以下各種の命令に罰則を附することを得、地方長官及警視總監の命する命令にまでも「五十圓以內ノ罰金若ハ科料又ハ拘留ノ罰則ヲ附スルコトヲ得」ることになつて居る結果、警視總監府縣知事の類までも「公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ增進スル」ことを名として濫りに各種の命令を作り、さうしてそれに罰則をつけることが出來るのである。成程、警察に向つては或る程度に於て機宜の處置が許されねばならぬ、さうして其の處置を强行するが爲めには或る程度の制裁を附することも亦許されねばならぬ。けれども、現在官憲の爲す所は多數の場合に於て此の權能の濫用である。彼等は安寧秩序の保持乃至臣民の幸福增進を名として此の權能を濫用する。さうして、憲法によつて明に保障された「結社ノ自由」（第二十九條）までをも遺憾なく之によつて蹂躙しつゝあるのである。結社の自由は法律によつてのみ制限し得べき憲法上の國民基本權である。府縣令等によつて課し得べき刑罰は縱令如何に輕くとも、之によつて勞働者の利用し得べき唯一の有力なる武器——團結權——を奪ひ去らむとするが如きは明かに憲法違反でなければならぬ。殊に、勞働爭議にあつては、

適當の時期に於て其の首脳者を拘留するときは、其の期間は縦令如何に短くとも事實上勞働者に向つて死命を制すべき打撃を與へることが出來るのであつて、この種警察法規の爲めに勞働者の受ける損失は極めて大きいと云はねばならぬ。

此故に、私は警察官憲が憲法上保障せられたる結社權を尊重するの主旨に於て今後力めて此種の警察法規を制定せざらむことを希望して已まないと同時に、治安警察法第十七條廢止の法律を制定するに際しては同時に以後勅令其他府縣令を以てするも同主旨の警察法規を制定すべからざることを宣明することが絶對に必要であると考へる。

六

終りに、勞働組合の行動を制限する刑罰法令として更に注目すべきものは一般刑法の諸規定である。勞働組合と雖も一般の個人及び社團と同樣に一般刑法の適用を甘受せねばならないのは勿論である。けれども、若しも刑法運用の任に當るべき警察並に司法の官憲が勞働組合發生の必然性と其の社會的職能とを正當に理解せず、勞資兩者の取引に於て双方をして眞に公正なるフエヤプレーを行はしむるの精神を有せざるときは、一般刑法も尙徒に勞働者の團結を妨ぐべき道具として使用せらるゝの虞がある。何故なれば、裁判の基調を有するものは結局に於て裁判官の主觀である。彼の人生觀であり社會觀である。彼の主觀に於て處罰すべきものと信ぜらるる事項に付いてはあらゆる法規の中に處罰の根據を求め、多少とも據り得べきものあらば直に之をとつて處罰の基礎とする。之に反して又彼の主觀に於て處罰すべからずとするものにあつては何等かの口實を法規の上に求めて處罰を爲さず又は少くとも出來得る限り刑罰の輕減を計るものであつて、法治主義の下に於ても又裁判官が主觀的には如何に公平であらうとも、裁判の實際は常に

かくの如きものである。而して此の傾向は警察並に檢察の官憲に付いて愈々顯著に之を認めることが出來る。其結果一般刑法も亦事實上勞働運動を抑壓する方便として利用される虞があるのである。

從來吾國の裁判所が勞働者の團結行動に向つて適用し又は今後適用するの虞ある刑法々規は、騷擾罪に關する第百六條第百七條、業務妨害罪に關する第二百三十四條、暴行罪に關する第二百八條、脅迫罪に關する第二百二十二條第二百二十三條、公務妨害罪に關する第九十五條等の諸規定であるが、先づ第一に勞働者と雖も暴行脅迫騷擾の罪を犯すべからざるは云ふまでもないけれど、同時に彼等の暴行脅迫等は多數の場合に於て資本家の無理解なる團體交渉拒絶と警察官憲の不當なる壓迫とに其の端を發するものなることは此際最も注意せねばならぬ事柄である。勿論多衆の集合は自ら騷擾を生ぜしむるの傾向あること素より之を否むことは出來ない。けれども、若しも資本家が初めより無解に團體交渉を拒絶せず、警察官憲亦濫りに不當なる壓迫を施すことなくむば、勞働者と雖も必ずしも好むで暴力的手段をとるものではない。司直當局の正に考慮せねばならないのは此點である。然るに、例へば大阪府下小川琺瑯製造工場の爭議に關する大正十三年七月十日の大審院判決(判例集第三卷第八號五六四頁以下所載)の如き現行刑法第百六條がたま〳〵其法文上――舊刑法と異なつて――集團的暴行の結果地方の靜謐を害したる事を騷擾罪成立の要件として居ないことを理由として容易く騷擾罪の成立を認めて居る。けれども、かくの如きは本來單純なる暴行脅迫乃至は器物毀棄として輕く所斷するを以て足るべき行爲を濫りに――首魁者は之を一年以上十年以下の懲役にまでも處し得べき――騷擾罪として重く處斷するの端を啓くものであつて、今後の勞働運動に向つて甚しき脅威を作爲するものと言はねばならぬ。

第二に又勞働者と雖も脅迫罪を犯すべからざるは勿論である。けれども、司法官にして若し勞働爭議の社會的意義を正しく理解せざるに於ては、單純なる同盟罷業も尙資本家の「自由」に對して脅迫を加へたものとして處罰を受ける虞

がある。成程、從來自己一方の意思を以て個々の勞働者を威壓し得たる資本家より云へば勞働者の集團による團體交渉はそれ自身明かに一種の威迫である。けれども、若しも此種の威迫と雖も既に違法的脅迫として之を處罰せねばならぬとするならば、從來個々の勞働者に向つて資本家の加へ得たる威壓はすべて同樣に之を脅迫と認めねばならぬ。勞働者は自己の意にみたざる勞働條件と雖も單に自己及び家族の饑餓を免れむが爲めに嫌々之を甘受すべく餘儀なくせらるゝ。それは勞働者團結の威力によつて資本家が已むなく或る勞働條件の許可を餘儀なくされるのと何等撰ぶべきものはない。然るに、從來資本家の爲したる所をすら罰せざりし裁判所が若し此の勞働者の團結行動夫れ自身を目して直に脅迫なりとするならば、これは明かに甚しき不公平なりと云はねばならぬ。

第三に又、同盟罷業怠業の業が資本家に向つて損害を與へ其の業務を妨害することは事實である。其結果、勞働者の集團的行動は稍ともすれば「威力ヲ用ヒ人ノ業務ヲ妨害シタル者」として刑法第二百三十四條の適用を受ける虞がある。けれども、單に勞働者が團結して勞働の賣控を行ひたるの一事を以て直に「威力ヲ用ヒ人ノ業務ヲ妨害」するものと爲すことは出來ない。取引の自由を基礎として居る經濟社會に於ては單なる商品の賣控は夫れ自身直に不法となるものではない。それが不法となるのは或は公益を害すべき惡行爲と認めらるゝか或は又取引の相手方に對し不公正なる手段によつて不正競業を行ふものと認めらるゝ場合に限られねばならぬ。商人が商略上得意先に向つて商品の賣控を行つてもそれのみを以て直に之を不正行爲と認めることは出來ない。それならば勞働者の勞働賣控も亦全然之を同一に取扱はれねばならない譯である。勿論勞働者は契約によつて勞働を賣るべきことを約して居る。けれども、單なる契約違反乃至債務不履行はそれ自身現行刑法の罰する所ではない。不當に債務を履行せざるの故を以て之を所罰するが如きは法制史上既に遠き過去の事柄である。のみならず、集團的取引によつて僅かに契約自由の利益を享受し得る勞働者にとつては、嘗

て——全然契約の自由を與へられずして——締結した契約の故を以て直に集團的取引手段としての勞働賣控行爲夫れ自身を債務不履行と認めらるゝことは甚しき不當の取扱であらねばならぬ。何となれば、自由經濟の社會に於ては勞働者も亦正當に契約の自由を主張することが出來ねばならぬ。而して彼等が之を主張し得る唯一の機會は團體交渉によつてのみ與へらるゝことを考へ合はせると、團體交渉それ自身は實質上嘗て締結された契約の履行に關する問題ではなくして、新に今後に對する取引値段を協定せむとする取引交渉の問題なりと見ねばならないからである。此故に同盟罷業乃至怠業に夫れ自身を目して直に業務妨害なりとするのは明に不當である。彼等は權利として正當なる取引を行ふのである。毫も不當に業務を妨害するものではない。嘗て舊刑法は「農工ノ雇人其雇賃ヲ增サシ」むる爲め「雇主及ビ他ノ雇人ニ對シ僞計威力ヲ以テ妨害ヲ爲シタル者」を以て一種の業務妨害たりとして居た(第二百七十條)而かも其の所謂「僞計威力」とは特に脅迫暴行若くは詐欺的の諸手段(menaces, violences on manoeuvres frauduleuses)を用ふることを云ふのであつて、勞働者が單に團結(Coalition)を爲し同盟罷業(grève)を行ふのみでは未だ之を處罰し得ざることと立法關係者たるボアソナード氏自らの佛國刑法と比較して詳説せる所である(Boissonade, projet révisé de code pénal pourl, empire du Japan, 1886 P, 823)。私は此種の疑はしき規定の既に全く存在せざる新刑法の下に於て、司直の官濫りに同盟罷業を目して業務妨害となさざらむことを祈つて已まないのである。

かくの如く、勞働者と雖も亦一般刑法の適用を免れることは出來ない。さうして現行刑法中には特に勞働者の團結夫れ自身を處罰すべき何等の規定も存在しない。けれども、警察官檢察官乃至司法官の勞働者組合運動に對する理解の程度如何によつては、一般刑法も亦不當に組合運動を抑壓する手段として使用される虞がある。此故に私は、一方に於ては此等の官憲諸公が組合運動に對する正當なる理解を得るが爲めに今後充分の修養を積まれむことを希望すると同時

に、他方に於て將來法律によつて勞働組合のことを規定せむとするに際しては特に今後勞働者の團結は單に團結の故を以て直に之を不法視すべからざる所以の原則を宣明し、以て之を司直諸官に對する訓令となすの必要あることを信じて已まないのである。

第二節　勞働組合に對する資本家の壓迫と法律

七

個別的取引に於て必然に其の優越性を利用し得べき資本家は必ずや常に團體交渉を喜ばない。一人々々の勞働者を相手とする限り資本家は常に自己の欲するがまゝに勞働條件を定めて之を勞働者に申渡すことが出來る。然るに一度勞働者が團結するとき、資本家は最早專制的態度を以て一方的に勞働條件を定めることが出來ない。必ずや勞働者に向つて或る程度の對等的地位を認めた上之と對等の取引を爲し協定を行はねばならぬ。かくの如く勞資兩當事者をして對等の取引を爲さしむることは、契約の自由を根本的制約となせる自由主義經濟組織の下に於ては極めて當然のことである。又かくしてこそ初めて契約自由の原則が理想として居る「正義」が勞資兩當事者の間に實現されるのである。然るに、從來一方的に勞働條件を定め、さうして專制的態度を以て勞働者に臨むことの出來た資本家は、長く其の「專制」を繼續せむが爲めに、或は溫情主義を口にし、或は契約の自由を口實として、團體交渉を拒否し對等の取引を嫌忌し、以て永久に勞働者の「服從」を要求せむとする。

其結果、一方に於て彼等は其の政治的に保有する實力を利用して、法律により警察により刑罰によつて勞働者の團體的行動を抑壓することにつとむると同時に、他方直接に其實力を利用し自助的手段によつて極力勞働者の團結と其の團

體的行動とを妨害せむと企てる。而して、此種の自助的妨害行動は今後——例へば治安警察法第十七條の如き——刑罰法令の廢止によつて刑罰を利用し國權を借りて勞働者の團結を抑壓することが不可能となる曉に於て資本家の專ら利用する戰鬪手段である。

而して、此種の資本家的戰鬪手段には色々種類があるけれども、其中主なものは次の三種である。

八

第一の戰鬪手段は「團體交渉の拒否」である。

一旦事あるの際勞働者は彼等の代表者を出して資本家と交渉せしめむとする。彼等はかくして資本家に對立しつゝ之れと對等の地位を保つて交渉を進め、以て契約自由の利益を充分に享有せむと欲するのであるけれども、資本家は從來と同樣契約自由の利益を自己にのみ壟斷せむと希望するが故に、勞働者の代表者を認めず、代表者による團體的交渉を拒絶する。さうして云ふ。「自分は唯個人に勞働者を雇つたのである。彼等が一人一人契約の相手方である。從つて雇傭の關係について問題があるならば彼等一人々々を相手として相談をする。代表者による團體的交渉を受けつくるや否やは全く自分の自由でなければならない」と。かくして、資本家は勞働者の團結による行動を妨げ、以て彼等から對等者としての契約利益を奪はむと企てるのである。

此種の戰鬪手段は確に有力である。何故なれば如何に勞働者が團結しやうとも、其の團結による交渉を受付くるや否やは現行法上確に資本家の自由だからである。此故に、現に我國の資本家は今尚多數の場合に於て此の武器を使用する。成程、勞働者の團結が強固であり、それが名實共に勞働市場を獨占するだけの實力をもつて居るならば、——必然

に勞働の協同なしには生產することの出來ない資本家は事實上尙此の武器の使用を躊躇するであらう。けれども、現在我國の如く勞働組合が尙未だそれだけの實力を備へて居ない國に於ては、資本家は比較的容易に此の武器を使ふことが出來る。

乍併先づ第一に、資本家をして此の武器を自由に使用せしむることは、契約自由の原則を基調とする現代法制の下に於ては、決して之を公正視することが出來ない。何故なれば、かくの如きは資本家が强いて勞働者の社會的實力に妨害を加へ、以て彼等が對等者として契約自由の利益を享有することを不可能ならしめ、自己にのみ其の利益を壟斷せむとするものと云はねばならないからである。又第二に、資本家が此種の戰鬪手段を使用することは、自ら勞働者をして暴力的傾向に趨かしむる原因を成すものである。生命の爲めに、より良き生活の爲めに不斷の向上に努力する勞働者の希望は到底終に抑壓すべからざるものである。彼等が現行法上許され得る唯一の手段——團體交涉——が資本家によつて拒否せらるるとき、彼等は決してそのまゝ默止すべくもない。彼等の次に赴くものは必然に暴力でなければならない。それは極めて自然の傾向である。吾々は英國の組合運動と佛國のそれとを比較するとき、容易に後者の前者に比して暴力的であり直接行動的でありサンデイカリスチツクであることを發見するであらう。然らば、其の差異の由つて來る所は何所にあるか？人此點について或は之を人種的氣質の差異に歸し其他色々の原因を語るものがある。けれども、其中最も注目すべき事實は、佛國の資本家が一八八四年の職業組合法が制定せられ——從つて法制上少くも勞働組合が適法視せらるゝに至つた後までも尙執拗に組合を否認し團體交涉を拒否したことが、自ら勞働者をして唯一の殘されたる手段——暴力——に趨かしむる原因を成したと云ふことである。

此故に私は、今日我國に於て勞働組合法を制定せむとするならば、唯單に勞働組合を適法視する主旨の規定を設くる

のみならず、同時に彼等の團體交渉は資本家に於て之を拒否すべからざる旨を規定することが必要であると考へる。團體交渉の法案協定成立するや否やは別問題である。少なくとも團體交渉なるの故を以て直に之が受付を拒否することを制限する必要がある。さうして勞資兩者の間に平和の交渉と協定とが行はれるやうな氣運を馴致することが此際最も必要であり、又社會の爲め――資本家の爲めにも亦――最も賢明なる策でなければならない。

今春社會局が勞働爭議調停法の原案を公表した。それによると、交通機關其他所謂公益企業 Public service Public Utilities に付いては強制調停、其他の一般企業に付いては任意調停の主義をとる旨が規定されて居る。即ち、公益企業については當事者一方の申立があれば縱令相手方の同意なくとも兎も角調停手續を開始し以て成るべく爭議の落着を迅速ならしめむとする主義をとれるに反し、一般企業に付いては當事者双方の合意ある場合にのみ調停手續を開始する主義をとるべきことを提議して居る。此の社會局案は當時日本勞働總同盟を初め勞働組合の側から――治安維持法案と同樣――「惡法」なりとして一般に相當手嚴しい反對を受けた。彼等が之を「惡法」なりとする理由には色々ある。けれども、公益企業に付いて強制調停主義の提案されて居ることは其の最も強い反對理由の一であつた。彼等は小作調停法が強制調停主義をとつて居ること（第十四條、第三十四條、第四十八條）を非難することから直に類推して、勞働爭議調停法に於けるそれをも亦全く同樣に否定し去らむとするのである。けれども強制調停の利不利はしかく簡單に論定し得るものではない。成程小作人は爭議の繼續中小作地をそのまゝ占有使用して而かも小作料を納付せざることを以て地主を苦しむべき戰鬪手段とすることが出來る。さうして地主が裁判所に訴へて土地を返還せしめ又は小作料の納付を強制せむと企つるとき、あらゆる手段を以て訴訟を長引かしむることが出來る。此故に調停制度の如き簡易なる解決手段の成立をより多く希望する者は寧ろ地主である。のみならず、相手方を強制して調停手續に參加せしむべき強制調停主義を希望

する者も亦寧ろ地主でなければならぬ。何故なれば、爭議の永續が小作人を苦しむることは地主がそれによつて感ずる苦痛に比して遙に輕いのを通例とするからである。此故に小作調停法に於ける强制調停主義を目して地主擁護の爲なりと批評しても必ずしも不當ではない。所が、勞働爭議にあつては事情が全く反對である。元來勞働者は單なる賃銀の債權者である。さうしてそれ以外何等の生活資源を有せざる無產者である。一度爭議が起つたならば、資本家は正當なる理由の有無に拘らず、ともかくも賃銀を拂はなければよい。勞働者の前に工場の門扉を鎖せばよい。又彼等の中の主立つた者を解雇すればよい。さうして、勞働者が屈服するまでは沈默を守つて全く交涉に應じないことが出來る。成程、爭議の繼續は資本家としても亦大なる苦痛であること素より言ふまでもない。けれども、更により多く痛苦を感ずる者は勿論勞働者である。何故なれば、賃銀の不拂は之れを唯一の生活資源とする勞働者にとつて實に生命の問題でなければならないからである。殊に現在我國に於けるが如く勞働組合の實力未だ充分ならざる狀態に於ては、資本家は比較的容易に爭議勞働者に代はるべき他の勞働者を求め得べきに引き換へ、勞働者の側に於ては組合基金其他一般勞働者の援助によつて爭議を續けるだけの資力を得ることが極めて困難である。此故に、爭議の永續を苦痛とする者は寧ろ勞働者である。從つて、若しも法律の力により資本家を强制して調停に參加せしめ、調停委員立合の下に對等の地位に立ちつゝ團體交涉を進めることが出來るならば、勞働者の之によつて受ける利益は甚大なりと云はねばならない。此故に、勞働組合の發達が現在の程度に止まつてゐる限り、獨り公益企業についてのみならず一般企業についても亦强制調停主義をとることは寧ろ反つて勞働者の利益である。さうして勞資兩當事者の對等なる會談によつて爭議を解決し其他勞働條件を協定する慣行が自ら此間に生れるならば勞資双方共に之によつて利する所決して鮮少ではない。

此故に私は法律を以て適當なる强制調停の制度を設くることが、現在の如く資本家が一般に團體交涉を拒否する風習

を根絶せしむるに就いて最も有效なる策であると考へるのであつて、單に「强制」なる名を恐れて一概に之を非難するが如きは、近時寧ろ現實的具體的の政策に向はむとしつゝある勞働組合の態度として私の聊か理解に苦しむ所である。

勿論現在の吾國に於けるが如く、勞働組合の中に於て動ともすれば小黨分立の傾向あり、一工場內に數個の組合――殊に僅かな組合員を有する小組合――分立するが如きことすらあり得る現狀に於ては、苟も「勞働組合」と自稱するものからの申込みがありさへすれば必ず之を受付けて其代表者と交渉を開かねばならぬと云ふことは資本家にとつて明に苦痛である。資本家は團體交渉を拒否してはならない。けれども、彼に向つて交渉する者が事實上其の雇傭せる勞働者の全部乃至大部分を代表する資格を持つて居ないならば、之と交渉するも何等團體交渉の實を擧げ得ざること素より謂ふを俟たない。此故に、將來勞働組合法を以て資本家に團體交渉を强制する手段を講ずるとしても、それは事實上勞働者の全部乃至大部分を代表し得る者からの申込みありたる場合にのみ限らねばならぬこと勿論である。

九

次に資本家が勞働組合を妨害する方策として用ふる第二の方法は「組合員の雇入拒否」である。

資本家が勞働者の組合加入を妨ぐるが爲めに用ふる自助的手段中最も有效なるものゝ一は組合に加入せる勞働者を雇入れず又勞働者組合に加入せるときは之を解雇する方策である。而して資本家が此の手段を完全ならしむるが爲め雇入の際勞働者をして組合に加入せざるべきことを誓約せしめ又は從業規則の中に其主旨を規定する例も少くないのである。

資本家の立場のみを考へるならば、彼が何人を雇ふか又何人を雇はざるかは全く彼の自由でなければならぬ。彼は必

すや契約自由の原則を楯にとつて何處までも此の自由を主張するに過ぎない。若し勞働組合が充分に發達して勞働市場を獨占するだけの實力を備へて居るならば、事實上資本家はかくの如き自由を主張して組合員の排斥を行ふことが出來ない。けれども組合の實力がそれ程有力でない國の資本家は好んでこの自由を主張し、さうして何所までも團體交渉の機會を避けやうと試みる。現在吾國資本家の態度が正にそれであり、北米合衆國の資本家も亦同樣の態度をとるものが多い。さうして契約の自由が憲法上保障されて居る同國に於ては、裁判所も亦資本家の此の態度を認めて適法なりと判決して居る。例へば、組合加入の故を以て勞働者を解雇することを禁止せむとする諸州の法律は從來すべて合衆國最高法院によつて憲法違反 unconstitutional なりとして判決された（Adair V, United States, 208 U. S.(1908)）又(Coppage v, Kansas, 236 U. S.(1915)事件に於て同法院は組合を脱退せされば解雇すべしと威嚇した雇主の行爲を以て脅迫 Coercion にあらずと判決し、同じく Hitchman Coal and Coke Co. v. Mitchell etae, 245 U. S. (1917) 事件に於ても同法院は組合に加入せざることを條件として雇はれたる勞働者を勸誘して組合を組織せしめむと企てた組合幹部の行動を目して之を不法なりと判決して居る。

しかしながら、かくの如き理由を以て組合員を排斥するが如きは實は契約自由の濫用であつて毫も其の精神に合致するものではない。勞資兩者間の平等にして公正なる契約は勞働者が同法によつて資本家に對立する場合に於てのみ之を期待することが出來る。さうして契約自由の原則の社會妥當性は之によつてのみ實現されるのである。然るに、資本家が契約の自由を口實として組合員の排斥を企つるが如きは自己の經濟的優越を利用して契約自由の利益を自己にのみ壟斷せむとする不當の行爲なりと言はねばならぬ。現に米國に於ても Justice Holmes 以下社會問題に理解ある法官は一般に此種の判旨に反對し（上記判決中に掲げられたる少數反對意見參照）、學者も亦之に向つて非難を加へるものが多い、

(例へば Adair 事件に付いては Richard Olney, Discrimination against Union Labor--Legal?, 42 Am, Law Rev 161, 164; Coppage 事件に付いて 28 Haw. L. Rev 497; Hitchman 事件に付いて又 Cook, Privileges of Labor Union inthe Struggle for lifee 27 Yal Law Journal 779 の批評を參照)。

此故に、勞働組合の立法に當つて是非とも設けねばならぬ規定の一は、組合員たるの故を以て雇入れを拒絶し又は解雇を爲すべからざる旨の規定でなければならない。勿論、縱令此種の規定を設けても資本家は事實上理由を秘して組合員の雇入を拒絶するであらう。又現行法上資本家は二週間の豫告を以てしさへすれば何等理由を示さずして解雇をなし得る(民法第六百二十七條)が故に、右の規定も法律上必ずしも組合員の解雇を防止する效果はないであらう。けれども、若しも此種の規定が新設されるならば、自ら資本家に對して相當の精神的影響を與へ得るに違ひない、又少くとも勞働者に向つて組合に加入せざる者の誓約を強要するが如き弊風は之を根絶し得るに違ひない。さうして、勞働組合の組織及び發達は今日に比して遙か容易となるに違ひないのである。

一〇

終に、資本家が勞働組合を苦しめる爲めに用ゐ得べき第三の戰鬪手段は「損害賠償の請求」である。

勞働組合の爭鬪武器たる同盟罷業乃至怠業の實は性質上必然に資本家を害するものである。從つて資本家の立場より云へば因つて生ずる損害の賠償を希望するのは極めて自然である。けれども、個々の勞働者並に勞働組合は多くの場合に於て到底其の賠償請求に應ずるだけの資力をもつて居ないから、若しも單に損害の塡補を求むるだけのことならば右資本家の希望は多く徒事に終らざるを得ない。乍併、元來損害賠償は一方に於て被害者の爲めに其の實害を塡補する働きを

爲すと同時に、他方に於て加害者に私的制裁を加へて加害行爲の反復を防止し且被害者の爲めに或る精神的の滿足を與へる作用を爲すものである。此故に、罷業乃至怠業の爲めに苦しめられた資本家が、賠償請求によつて勞働組合を苦しめ、あわよくば之によつて組合の戰鬪資金を破壞しをはらむと考へるのは、彼等として極めて自然的である。勿論、國家が「刑罰」を以て組合を抑壓してくれる限り、資本家は必ずしも自力により態々金と時間とを使つて賠償の訴訟を企てない。けれども、先にも一言したるが如く、一度「刑罰」の時代が去るとき、資本家は最早國家の公的制裁に依賴して自己を防衛し得ざる結果、此度は自らの力により民事の訴訟により私的制裁を加ふことによつて自己を防衛せねばならぬ。玆に於てか生まれ出づるものは「損害賠償」の時代である。

英國の「刑罰」時代は一八七五年の徒黨及財產保護法制定と共に終局的に過ぎ去つた。さうして其後の一時期は實に勞働組合の樂天地であつた。けれども、資本家は到底此の狀態の永續を許すことなく、彼等の法律顧問は頓て新なる武器──損害賠償──を以て勞働組合を苦しめ得ることに氣付き、之によつて或は組合の基金を破壞し又或は組合幹部の私財を脅すことを開始したのである。さうして裁判所も亦資本家の要求を認めて彼等の爲めに精鋭なる新武器を作り與へた結果、「刑罰」の廢止も事實に於ては多く勞働組合を保護するに足らざることを示すに至り、玆に慘酷なる「損害賠償」の時代が生まるゝに至つたのである。而して一九〇一年 Taff Vale 事件に對して下されたる上院判決 (T.L.K.B 305 (1901)) が同盟罷業の故を以て鐵道從業員聯合會 Amalgamated Society of Railway Servants 夫れ自身に向つて四萬二千磅の巨額なる損害賠償を命ずるや、勞働組合も亦玆に初めて新武器の甚だ恐るべきものなることを覺り、一齊に立つて之に反對し立法の力によつて資本家から之をもぎ取らうとあせるに至つたのである。

而して吾々は此の同じ現象を北米合衆國に付いても亦同樣に認めること出來る。かの有名なる Danbury hatters

Case に於て最高法院が勞働組合員百七十五名に對して三千萬弗の巨額なる損害賠償を命じたるが如き其の最も顯著なる實例である。

かくの如く勞働組合の活働が資本家を害するとき、組合が一々之を賠償すべき義務を負擔せしめられるとすれば、縱令、「刑罰」が廢止されても、勞働組合の法律的抑壓は尙依然として存續するものと云はねばならぬ。而かも同盟罷業其他勞働者の武器たる鬪爭的行動は多くの場合に於て必然資本家に損害を與へるものである。勞働者は資本家が其の損害の前に畏怖して彼等の要求を容すべきことを豫期すればこそ此等の武器を使ふのである。然るに、其の武器の使用が一々不法視せられ、其法律常に損害賠償の義務を生み出すものだとすれば、勞働者は到底安じて其の使用を續けることが出來ない。從つて鬪爭的行動によるの外彼等の要求を貫徹するに由なき勞働者が、此の「損害賠償」に反對するのは極めて自然である。

吾國の資本家は今日尙未だ一般に此の武器を使用しない。何故なれば、「刑罰」の時代が續く限り、資本家が自力を以て態々私的制裁を加へことに苦慮せずとも、國家が代つて公の制裁を加へてくれるからである。從つて將來「刑罰」の時代が去るならば、吾國の資本家も亦必ずや此の武器を使用するに違ひない。而して吾國現行の民法と之に關する註釋家一般の通說とは恐らく資本家の爲めに此の武器を提供し得べきことを考へると、私は近き將來に於ける勞働者の立場を擁護するが爲め今から適當の用意を施すことが最も必要であると信ずるものである。これが爲めには、曾て英國の立法府が慘酷なる「損害賠償」の時代を去らしむるが爲めに、一九〇六年の產業爭議法 Trade Disputes Act 1906 を制定して「產業爭議ヲ企圖シ又ハ助成セムガ爲メニ或者ノ爲シタル行爲ハ、單ニ他人ヲ勸誘シテ雇傭契約ヲ破棄セシメタルコト、他人ノ產業業務又ハ雇傭ニ干涉シタルコト又ハ他人ガ隨意ニ其ノ資本又ハ勞働ヲ處置シ得ル權利ニ干涉シタル

コトノ理由ヲ以テ、起訴セラルルコトナシ(第三條)との規定を設けたるが如く、吾國に於ても亦同主義の規定を勞働組合法の中に設けることが必要であらう。

但し私は、現行民法の下に於ても註釋家にして若しも勞働組合と其の武器たる集團的行動との社會的必然性を正しく理解して新らしき解釋を下すならば、必ずしも資本家は容易く新に「損害賠償」の武器を使用し得べきことを信ずるが爲に、以下聊か其の理由を說いて本節を終らうと考へる。

先づ第一に、從來の註釋家は一般に、個々の勞働者が同盟罷業怠業等を行つて勞働契約を完全なる履行をしないのは言ふまでもなく不法なる債務不履行である、從つて資本家は彼等に對して損害の賠償を請求し得べしと說いて居る。成程、個々の勞働者を引き離して個人主義的に問題を考へるならば、此の觀察は正當であらう。けれども、先にも一言したるが如く今日の勞働者は最早一般に契約の自由をもつて居ない。彼等は唯資本家の云ふがまゝに其のディクテートする條件を甘受せねばならない。而かも、自由經濟を基礎とする法制の理想より云へば、勞働者も亦契約の自由を有せねばならぬ。勞働條件が氣に入るまでは勞働を賣らざるの自由を保有せねばならぬ。所が貧弱なる一人々々の勞働者は到底自力を以て其の自由を享有することが出來ない。此故に彼等は團結する、團結の力により「勞働」の獨占者たる所以を發揮することによつて資本家に對立する。さうして彼等と對等の取引を爲すことによつて契約の自由を享有せむとするのである。それならば、彼等が集團的の交涉によりて勞働賣買の諸條件を協定するに際し、若しも資本家の提供する條件が氣に入らないならば、氣に入るまで勞働を賣らざるの自由を彼等の爲めに保障せねばならない。何となれば、契約の自由が許される以上何人も其意に滿たざる契約を締結する義務を負擔せしめられることはないからである。かくの如く考へるならば、勞働者が集團的行動によつて勞働の不賣を主張するのは、彼等が個々の「勞働契約」締結に際して

有することの出來なかつた契約の自由を集團的に行使するものであつて、之を單に締結せられたる個々の契約の不履行として考へるよりは、寧ろ新に勞働條件の協定を爲すに際し條件のおり合ふまで勞働の賣却を拒絶するものとして觀察するのが正當である。換言すれば、勞働者は團體交渉によつてのみ契約の自由を享有し得るのであるから、團體交渉に於ける各種の掛け引きは、彼等が本來ならば個々の契約に際して爲し得べき——さうして事實爲し得ない——掛け引きに代はるべきものとして之を正當視せざるを得ない。此意味に於て、私は現行法の解釋としても同盟罷業の責はそれ自身債務不履行となるものではないと解するのである。

次に、かくして勞働者自らの債務不履行を否定し得るとするならば、彼等が團體交渉の爲めに使用したる人々並に彼等の團體交渉に向つて援助を與へたる人々の行動も亦すべて「違法」の非難を免れ得るものと云ふことが出來る。恐らく從來の註釋家は、勞働爭議に向つて援助を與へる人々の行動を非難して、或は勞働者の債務不履行を教唆して債權者に損害を與へるのは一種の債權侵害でなければならぬと云ふであらう、又或は資本家の業務を妨害するものとして不法行爲の責任を負はねばならぬと主張するであらう。けれども、勞働者の行爲にして既に違法なる債務不履行とならざること上述の如しとするならば、彼等に援助を與へたる人々の行爲も亦違法であらねばならぬ。

抑も現代の勞働問題は集團的に觀察するによつてのみ正しく之を理解することが出來る。從つて、個人主義的考察の上に組立てられた從來の法理を以て直に新しき勞働問題に臨むも、到底正しき法理に到達し得ないのは極めて當然でなければならぬ。私は事物の性質に從つて新しき集團的の考察を施したい。さうすれば、現行法のまゝでも尙資本家から「損害賠償」の新武器を奪ふことが出來る。さうして勞資兩者の間に眞に公正なるフェヤプレーを行はしめることが出來ると考へてのである。

第三節　勞働組合の私法的性質

一

勞働組合は現行法上如何なる法律的性質を有するか？此點を明かにすることは現行法の下に於て勞働組合の受け得べき私法的權利保護の何たるかを知るに付いて絶對的に必要である

勿論同じく「勞働組合」と稱せらるゝものゝ中にも、單に革命的乃至思想的の社會運動團體たるに過ぎざるものもあれば、又資本家を相手として團體的取引を爲すことを目的とする經濟的團結たるものも存在する。而して、後者の中にも先に述べたるが如き少數の組合運動者から成り立つて居る潜勢的組合もあれば、事實多數勞働者の團結であつて夫れ自身に或る程度の勞働市場獨占を爲し得べき實力を備へた組合もある。而して、此等は私法的見地よりすれば各々多少異なつた法律的性質を持つものであるが、以下には唯此最後の形式に於ける——即ち最も發達した——組合のみを眼中に置いて說明を進めたいと思ふ。

此種の勞働組合は——其の綱領として各個に標榜する所は素より種々多樣であるが畢竟——「勞働」の獨占者として資本家に對立し以て之と平等の取引を爲さんことを目的とする勞働者の團體である　それは一定の「目的」を以て組織せられ、一定の「名稱」を有し、又一定の「定款」によつて組織及び行動の大綱を規定されて居る團體である。それは、或は營利の目的を以て又或は學術技藝慈善其他公益の目的を以て組織せらるゝ會社其他各種の社團と同樣。社團的組織を有する團體であつて、決して組合員相互の間に於ける單純なる契約關係ではない。論理的に云へば先づ一定の目的の爲めにする無形の組織が先きに存在する。さうして、その組織を構成するものとして個々の組合員が加入し又脫退

するのである。勿論、組合成立の當初に於ては之を創立する勞働者相約して定款を作成する。さうして創立の手段をとる。けれども、かくして相約する所は決して彼等勞働者相互の個人的債務關係を創定せむとするにあらずして、一定の目的名稱及び組織を有する抽象的の團體組織を創立せむとするにある。勿論時間的關係に於てはかくの如き團體組織の創立と創立勞働者の加盟とは同時である。けれども、觀念的に云へば組織が先づ出來て勞働者が之に加盟するのである。個々の勞働者相約して彼等の間に個人的債務關係を創設するのとは全然異別の事柄でなければならぬ

此故に勞働組合は一の「社團」である。

二

勞働組合は一の社團である。しかし後に述ぶるが如く現行法上法人格を與へられて居らず又之を取得する可能性をも與へられて居ないから、一種の「人格なき社團」Verein ohne Rechtsfähigkeit として其の法律問題を決定する必要がある。

所が從來法律學者は多く人の團結を區別して「社團法人」及び「組合」の二種となし、人格なき團結はすべて「組合」であつて、所謂「人格なき社團」なるものは存在しない、少くともかくの如きものには民法中「組合」に關する規定を適用乃至準用すれば事は足りると考へて居る。乍併、元來「社團」と「組合」とは本質上明確に區別されねばならぬものである。人格なき社團は唯其の人格なき點に於てのみ社團と異なるものであつて、人格なきの故を以て之を組合として――又は少くとも組合に準じて――取扱はむとするのは甚しき誤である。此故に私は先づ以下民法上の「組合」の如何なるものなるかを説明し、次いで之と「社團」との劃然區別されねばならぬ所以を説きたいと思ふ。

民法第六百六十七條以下に「組合」に關する規定が設けられて居る。さうして「組合契約ハ各當事者ガ出資ヲ爲シテ共同ノ事業ヲ營ムコトヲ約スルニ因リテ其效力ヲ生ズ」る旨が規定されて居る。

組合契約締結せらるゝときは組合員相互の間に一定の共同目的を有する團結が成立する。けれども、組合契約は何所までも組合員相互間に個人的の契約問題債務問題を成立せしむることを目的とするものである。勿論、組合員は共同の目的を達成せむが爲めに互に共力すべきことを約するものなるが故に、賣買貸借等の如き交換的契約關係に比すれば、遙かに團體的特色をもつて居る。現に民法に於ても「組合ノ業務執行ハ組合員ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス」（第六百七十條第一項）るものとし、又「組合財産ハ總組合員ノ共有ニ屬ス」（第六百六十八條）るけれども、而かも「組合員ガ組合財産ニ付キ其持分ヲ處分シタルトキハ其處分ハ之ヲ以テ組合及ビ組合ト取引ヲ爲シタル第三者ニ對抗スルコトヲ得ズ」「組合員ハ淸算前ニ組合財産ノ分割ヲ求ムルコトヲ得ズ」（第六百七十六條）と定め、尙其外組合夫れ自身をそのまゝにして置きながら一二の組合員だけが中途から脫退することをも認めて居る（第六百七十八條第六百七十九條）。

けれども同時に、民法が組合を以て尙各個組合員の個人的利益の達成を直接目的とする契約關係に過ぎざるものとして居ることは隨所に之を認めることが出來る。第一に、民法は上述の如く「組合財産ハ總組合員ノ共有ニ屬ス」るものとし、且中途から脫退する組合員は金錢に換算して其の持分の拂戾を爲し得ることゝして居る。けれども、個々の組合員の個人的利益から超越した獨自の目的を有する社團にあつては、其財産も亦社團目的の爲めに獨立して存在せねばならぬ。それは決して各個社員が獨立の個人的持分を有する共有物であつてはならぬ。成程各個社員は其財産が社團目的に供せられて獨立の存在をもつて居ることと夫れ自身の上に社員としての利益をもつて居るに違ひない。けれども個人として其財産の上に獨立の持分を有するものと解すべきではない。例へば、今日の法制上法人格をもつて居ない「辯護

會」の如き、又「政黨」の如き、何れも建物其他相當の財産をもつて居る。若しも此場合一般民法學者の說くが如く、法人格なき團體はすべて契約關係たる組合なりと考へ、かゝる財産を以てすべて會員及び政黨員の共有に屬するものとし、從つて組合員脫退の際には金錢を以て持分の拂戾を受け得るものと解するならば、其結果たる極めて不當なりと言はねばならぬ。

第二に又、民法は「已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ各組合員ハ組合ノ解散ヲ請求スルコトヲ得」（第六百八十三條）に旨を定めて居る。此規定は結局に於て組合を契約關係として觀察し各個組合員の個人的利益を保護する爲め必要あるときは組合の解散までをも請求し得べしとする主旨である。けれども、かくの如きは各個社員の個人的利益から離れた獨自の目的を有する社團の本質と相容れざるものである。勿論社團は社員の意見を基礎として成立する。從つて社員總會によつて解散が決議せられたる以上、社團と雖も亦之によつて消滅しなければならぬのは當然である。けれども個々の社員が、「已ムヲ得ザル事由」ありとして解散を請求し得るが如きは全く社團の本質と相容れざるものである。

一三

かくの如く、社團と組合とは全然異別の性質を有するものである。從つて民法中組合に關する規定は獨り組合にのみ適用せらるべきものであつて、性質上到底之を社團に適用することが出來ない。

然らば、かゝる社團に對しては民法中如何なる規定を適用すべきであるか？　法律學者は多く人の團結を分つて社團法人及び組合とするが故に法人格なき團結は實質上社團の性質を有するものにも尙組合に關する規定を適用せむとすることを上述の通りである。しかしかくの如きは獨逸民法のやうにそれに付いて特別の規定を置いて居るものに付いての

み認め得る結論であつて（第五十四條）、事物當然の理より云へば社團と組合とは別物でなければならぬ。さうして社團の中に人格あるものと然らざるものとの區別が存在するのである。

社團はそれ自身社會的の存在である。法律を俟つて初めて存在するのではない。唯法律は其中或るものには法律上の人格を認め、或るものには之を認めないのである。其現行法は私的社團中營利を目的とするものに付いては民法第三十五條及び商法會社篇の諸規定を設け、公益を目的とするものに付いては又民法第三十三條以下の諸規定を設けて居る。さうして其中に於て社團が人格を取得する條件及び手續を定め、其他かくして人格を取得したる社團の內部及び外部に對する法律關係、之に對する國家的監督、解散手續等を規定して居る。しかし夫れ等の規定は何れも直接は人格ある社團にのみ適用せらるべきものであつて、人格なき社團には直接之を適用し得ない。

然らば、人格なき社團の法律關係は現行法上如何に之を解すべきであるか？　私はそれに答へて云ひたい。人格なき社團に付いては定款其他に基いて當該社團の社會的實體關係を確認したる上之に相應すべき法律的取扱を與ふべきである。さうして、それだけでは愈々問題が解決出來なくなつた場合には人格ある社團に關する諸規定中社團的特質より出づる規定の主旨を參酌して之を解決すべきである。と、

以下二三の主要問題について此の趣旨を詳說するであらう。

先づ第一に、社團財產は社團其物の目的に捧げられた獨立の財產であつて、社員の共有物ではない。此點は社團が人格を有すると否とによつて何等の區別がない。唯人格ある社團にあつては形式上社團の名義を以て直接權利義務を保有し得るに反し、人格なき社團にあつては其の同じことが出來難い。其結果法律上の形式としては會長乃至會計主任等が社團の爲めに——即ち信託的關係として——個人名義を以て權利義務の主體となる必要があるのである。

しかし何れにするも其財產は社團財產として各個社員の私財から獨立したものであるから、社團解散の場合に於ても其の財產は決して民法第六百八十八條の規定によつて社員の間に分割せらるべきではない。否反つて、社團法人の場合と同樣、若しも定款に定めがあればそれに從ひ、何等の定めがなければ總會の決議を以て其處分方法を定むべきである。而かも、其決議を以てするも當該社團本來の目的に反するが如き處分方法を爲すことは社團の性質上之を許し得ないと考へる。

第二に、人格なき社團は事實上社團の名義を以て契約其他の法律行爲をするけれども、法律上それによつて權利義務を取得するのは社團の爲めに當該行爲を爲した代表者に過ぎない。何故なれば、人格なき社團は法律上自ら權利義務の主體となり得ないからである。勿論、かくして代表者の取得する權利義務は彼が社團の爲に――信託的關係に於て――之を保有するのであつて、彼の個人的權利義務となるのでは勿論ない。しかし又社團は組合と異なるが故に、かくして社團の取得した權利義務は法律上社員全部の共有となるのではなくして社團夫れ自身の獨立財產となるのである。さうして唯法律の形式上代表者の名義となつて居るだけのことである。

第三に、人格なき社團と雖も獨立の存在として社會に活働して居る以上、其の活働の結果會々他人に損害を加へることがあり得る。而して之に對しては自ら責任を負はねばならぬこと勿論である。けれども、人格なき社團は夫れ自身權利義務の主體たるを得ない、彼の財產はすべて法律の形式上何人か個人の名義になつて居るから、被害者が賠償を請求するに付いては法律上種々の困難な問題が起る。

私はかゝる場合には矢張り社團法人に對する場合と同樣當該社團の代表者を被告として訴ふべきであつて、訴へられた代表者は代表者たる資格に於て訴訟行爲を爲すべきである、と考へる。而して愈々賠償義務を履行するに付いても

――現に當該代表者又は其他の者の名義になつて居る――社團財産の範圍に於て其の方に任ずべきものであると考へて居る。

けれども、現行法の中に與へられて居る法律的形式から云ふと、先づ第一にかゝる場合に被害者は社團の代表者を代表者たる資格に於て訴へることが出來るかと云ふ疑問が起る。第二には又賠償義務を履行せしむる爲め社團財産に向つて強制執行をしてゆくに付いても、幸ひ社團財産の全部が會々被告となつて居る代表者甲の名義になつて居れば兎も角それが他の役員乙の名義になつて居るやうな場合に於て、被告甲を相手とする判決を以て直に乙に向つて強制執行を爲し得べきや否やは頗る疑問である。

私は若しも裁判所が人格なき社團を如實に觀察して其性質を正しく理解するならば、恐らくは第一の問題に對して又第二の問題にしても同じく「然り」と答へふべきであると考へる。何となれば人格なき社團は社團として獨立の社會的存在を有する、唯法律上人格を與へられてゐない爲め、其の機關たる個人の名義に於て各種の行爲を爲し又權利義務を保有すべく餘儀なくされてゐる、而かも夫れ等の名義人たる個人は假令各分擔する事務の種類に區別があらうとも之を同一社團の機關として統一的に觀察すべきであると考へるからである。從來の判例はまだ第二の問題に付いて何等の解決を與へて居ない。之に反して、第一の問題に付いては既に或る程度の答を與へて居る。私は以下項を別にし「人格なき社團」の「訴訟當事者能力」なる題目の下に其點を說明したいと考へる。

第四に、人格ある社團は自ら訴訟當事者となるの能力を有すること勿論であるが、人格なき社團は必ずしも其の能力をもたない。何となれば、現行法上訴訟當事者能力を有するは獨り法律上の人格者に限るを原則とするからである。唯民事訴訟法第四十條によると「公又ハ私ノ法人及ビ其資格ニ於テ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團なる文

字があつて、時に法人にあらざる社團又は財團の存在すること及び其中には法人にあらずして而かも訴訟當事者たり得るものゝ存在することを指示して居る。

人格なき社團を實質的に考へるならば、或は社團自らの名義により其の代表者を機關として、又或は代表者個人の名を以て但し社團の代表者たる資格に於て訴を起し又訴へられることが出來て然るべきである。

此點に付いて、從來の判例は、(一)當該の人格なき社團が――辯護士會、醫師會(今日では既に人格を與へられて居るが以前には辯護士會と同様人格をもたなかつた)、準則同業組合(明治十七年農商務省第三十七號同業組合準則參照)等の如く――「特定ノ法規ニ準據シテ組織セラルル社團」であり、(二)且つ其會則に特ニ會長ヲ以テ其ノ社團ヲ代表セシムべキ規定ノ存スル場合」には「會長ハ其權限ニ基キ會長ノ名ヲ以テ」訴を起し又は訴へらるゝことを得べしと云つて居る(明治二十八年十月三日、大正四年五月二十六日及び同年十月六日大審院判決)。けれども又人格なき社團が自らの名義を以て自ら訴訟當事者となるには特に法律を以て訴訟當事者たる資格が付與されて居ること(民事訴訟第十四條參照)が必要だと判示して居る(大正六年四月十九日大審院判決)。

しかしながら、人格なき社團は社會の必要が自然に生み出した所の社會的存在である。而して其中の或るものは――例へば辯護士會の如く――特に法律に準據して組織されるであらうけれども、政黨の如き、各種の學會の如き未だ之に關して何等特別の立法なきものと雖も、其の實體が一の人格なき社團」たる點に於ては毫も前者と區別せらるべきものがない。從つて、訴訟の當事者となる關係に付いてもすべて同様に之を取扱ふのが相當であらう。又假令會則に於て特に會長を以て代表者とする旨を定めて居らずとも、事實上社團の代表者たる者はすべて社團の名に於て訴へ又訴へられ得るものとするものが正當であらう。

第五に、人格なき社團の解散は社員總會の決議を以て之を爲し得るけれども、組合の場合の如く「已ムコトヲ得サル事由」あることを理由として各個の社員より解散を請求するが如きことは社團の性質上之を許すことが出來ない。

一四

人格なき社團は現行法上上述の如き法律的性質を有する。それと組合とは全然區別せられねばならぬ。

然らば、勞働組合は二者の中何れに屬するものと認むべきか？私は勿論之を人格なき社團として解せねばならぬと考へて居る。何となれば、勞働組合は其の性質決して之を各個組合員の契約關係として觀察すべきものではない。これは組合員の個人的利益から離れた獨自の目的と存在とをもつて居り、從つて其財産の如きも寧ろ組合目的に捧げられた獨立の財産と見るべきであつて、各個組合員の個人的共有財産として觀察すべきものではないからである。

所が、人格なき社團たる勞働組合には現行法上其の人格なきが爲めに幾多の法律的不利益が起る。以下其の中主要なる二三の點について說明を試みるであらう。

先づ第一に勞働組合は上述の如く組合の名を以て財産其他の權利をもつことが出來ない。土地建築を所有するとしても組合名を以て其の登記をすることが出來ない。而かも經濟的には勞働組合が夫れ自身獨立に財産を有するの必要あること勿論であり又實際上之を有することも事實であつて、唯法律の形式上其の權利者たることが出來ないだけのことである。所がかくの如く法律の形式上權利の主體となり得ないことは事實上勞働組合に向つて幾多の不便を與へる。勿論現在の如く組合の組織及び財政が一般に小規模である限り其の不便は甚しく目立たないけれども、今後勞働組合の發達と共に漸次此の不便は顯著となるに違ひない。何故なれば、現在自ら財産をもち得ない勞働組合は已むなく會長其他個人の名義を以て之をもたねばならぬ。又財産中特に動産の如きは組合財産たることは明瞭であつても法律の形式上何人

の所有物たるか全く明瞭を缺くものが少くない。所が、組合財產が會長其他個人の名義になつて居る場合に於て、其組合と會長との間の信託關係は全く道德的の關係に過ぎずして、第三者に對する關係に於ては法律上毫も保護されて居ないから、例へば會長其他名義人の個人としての債務の爲め其の債權者によつて組合財產が差押へられたやうな場合に於ても、組合は法律上其財產の自己に屬することを主張して執行異議の訴（民事訴訟法第五百四十九條）を起すことが出來ない。此等の點は組合が尚小規模であり、從つて會長其他と一般組合員との間に充分なる個人的の信任關係が存續する限り、未だ多くの支障を生ぜしめないけれども、將來組合の發達と共に漸次其の不便は顯著となるに違ひないのである。

第二に又、勞働組合の代表者が組合の爲めに爲した行爲は、其の法律行爲たると不法行爲たるとを問はず、すべて組合に影響を及ぼさねばならぬ。代表者が組合の爲めに取得した權利は――法律上の名義はともかく――實質上直に組合の權利となるであらう。又彼が組合の爲めに負擔した義務は同じく組合のものとなるが爲に、債權者其の履行を受くるが爲め法律的手段をとるについては、組合長を被告として訴を提起し得べく、而して組合長又は其他何人かの名義になつて居る組合財產に向つて强制執行を爲し得るものと解すべきであらう。けれども、先づ第一に、組合長又は其他何人かの名義になつて居る組合財產の信託關係は上述の如く現行法上毫も第三者に對する關係に於て保護されて居ない。從つて名義人の私債權者は信託關係を否認して其財產を差押へ得る。即ち第三者は必要あらば組合の不利益に於て其の信託關係を否認することが出來る。然るに、組合の債權者は其債權の滿足を得るが爲め實質上組合財產たるものは――縱令形式上何人の名義になつて居らうとも――すべて信託關係を認めて之を差押へることが出來る。即ち組合財產は第三者に於て自己の都合上任意に其信託關係を是認することも出來れば又否認することも出來るのであつて、組合の爲め極め

て不利益なりと云はねばならぬ。第二に又勞働組合の代表者が組合の名に於て爲した行爲の效果は法律の形式上代表者個人をして權利義務を取得せしむることゝなる。それは實質上彼のものにあらずして社團のものなるに拘らず、第三者は場合により其の信託關係を否認し、當該の義務が偶々代表者個人の名義となれることを利用して彼を訴へるであらう。而して現行の法律と裁判所とは恐らく彼をして敗訴せしめ彼れをして絕對の責任を負擔せしむるに違ひないのである。しかしながら、社團の代表者が社團の爲めに爲した行爲——特に法律行爲——の爲め個人として責任を負擔せしめらるゝならば、何人と雖も社團の代表者となることは極めて危險であらねばならぬ。其結果、社團は適當なる代表者を以て社團の爲め各種の行爲を爲さしむるに付いて甚しき不便を感ぜねばならないのである。

一五

かくの如く、勞働組合が法律上權利の享有に關して幾多の不利益を忍ばなければならぬことは、今後勞働組合が大規模となるにつれて益々其の不便を甚しくするであらう。又現在の組合はまだ多く其の不便を感じてゐないけれども、事實に於て其の不便が自ら組合の擴大發達を妨げつゝあることは之を認めざるを得ない。

然らば、此の不利益は如何にして之を取除くことが出來るか？

其の第一の方法は、組合にして希望するならば之に向つて法人格を附與すべき制度を樹立することである。現行法上營利を目的とする社團は商法の定むる四種の會社形式の何れかをとるによつて任意に人格を取得することが來る。また「祭祀宗教慈善學術技藝其他公益ニ關スル社團ニシテ營利ヲ目的トセザルモノ」は「主務官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ法人ト爲スコトヲ得」る。然るに、勞働組合は此等何れの規定によつても人格を取得しない。國家はすべての人間に對して同樣

に私權の享有を許し法律上の機會均等を作り與へねばならぬと同樣、社會の必要が自然に産み出した社團の爲めにも——若しもそれが自ら人格なき狀態に甘んずるならば格別然らざる限り——すべて同樣に私權の享有を許し法律上の機會均等を作り與へねばならぬ。其の社團が特に公益に害を與ふべき、從つて國家の保護に値せざるものであるならば格別、其の然らざるものに向つてはすべて同樣に平等なる法律的保護を與へねばならぬ。然るに我國の現行法は營利社團に向つて完全に人格取得の自由を許與せるに拘らず、勞働組合に向つて全く之を拒否して居る。かくの如きは、明に組合を敵視して之を不法視するの態度なりと云はねばならぬ。

佛蘭西に於ても白耳義に於ても勞働組合は當然に法人たる資格を與へられ（佛法第五條白法第一條）勞農露國の勞働法典（第百五十四條）も亦同一の態度をとつて居る。而して獨逸に於ても一九一六年六月二十六日の法律以後は勞働組合の希望さへあらば民法に從ひ區裁判所に登錄することによつて自由に法人格を取得し得ることゝなつた。私は勞働組合のすべてに向つて當然に人格を賦與する必要は必ずしもないと考へる。けれども組合自らが希望するに拘らず之を與へざるが如きは明に組合に向つて不公正なる取扱を與へるものだと云はねばならない。

勿論、勞働組合に人格を與ふるや否やの問題は——まゝ世間に誤解あるが如く——法律上勞働組合を公認するや否やの問題とは別問題である。法律上の用語として「人格の賦與」と云ふのは俗語に於て「人格を認め」「人格を尊重す」と云ふことゝは全然別問題であるそれは唯私權の享有を許され從つて其の防衞について裁判所其他國家機關の保護を受け得ると云ふ意味に過ぎない。從つて勞働組合を國家的に公認して之を抑壓すべき刑罰法令を廢止し又組合を資本家の攻撃より救ふべき各種の法規を設くるにも拘らず、同時に之に向つて法人格だけは與へないと云ふ主義も亦理論上なり立ち得る。從つて又何等か他の方法によつて勞働組合が人格なき社團たる爲めに受けて居る上記諸種の不便を除き得る

ならば、必ずしも法人格を與へずとも差支ない。何故ならば、法人格の賦與は夫れ自身單にかゝる不便を除くべき法律上の一方便たるに過ぎないからである。

此故に、法律は勞働組合をしてかゝる不便を免れしむる爲め、人格の賦與に代はるべき第二の方法をとるとも出來る。組合と代表者との間に存在する上記の信託的關係を法律上公認して第三者に對する關係に於ても亦完全に之を保護することが即ちそれである。

英國は由來信託 Trust 法理の母國である。此故に、例へば歐洲大陸諸國其他吾國等に於て通常「法人」を利用すると同一の場合に屢々「信託」を利用して同一の目的を達する。吾國に於て一般に「財團法人」を利用する場合に所謂「公益信託」Chari table. Trust を利用するが如き其の最も顯著なる一例である。勞働組合の人格問題についても英國の立法は一種獨特である。即ち之を法人とするの策をとらずして、單に組合と代表者との間に存する信託關係を保護し之によつて法人格を與へたると同一の效果を收めて居る。英國の勞働組合法によると、勞働組合は自ら希望するならば登錄を許される。さうして登錄した組合は「共ノ存續期間受託者 Trustees ノ名ニ於テ」各種の權利義務を取得し、又受託者若しくは組合規約によつて權限を與へられた他の役員をして組合の爲めに訴訟を爲さしむることが出來る。此故に、學者は屢々登錄勞働組合を呼んで準法人 Prusi-Corp oration と稱して居る。

要するに、私は、法律上の手段の如何を問はない、唯勞働組合の爲めに其他一般の社團と同樣私權の享有に關して裁判所其他國家機關の保護を受け得べき方法を確立せよと云ふのである。勞働組合を承認するに付いて刑罰を廢止する素より必要である、資本家の自力的攻擊を防ぎ與ふるとも亦必要である。乍併、同時に私權の享有に關して一般の社團と同樣國家の保護を受け得るものとすることは、勞働組合の承認に關聯して是非とも行はねばならぬ事柄である。此故に私は將來の勞働組合立法に於ては此問題をも亦解決するの必要ありと信ずるものである。

三度び勞働費用と平均利潤の問題を論ず

小泉信三

（一）

數月前改造社から同社版拙著「價値論と社會主義」增刷の相談を受けたが、私は先づ同書の中でマルクスの價値論價格論に就いて述べた卑見に對して前年河上肇博士が加へられた批評（「マルクスの勞働價値說」、大正十一年十一月——同十二年一月發行「社會問題研究」第三十九乃至第四十一册所載）に答へ、其回答文も併せ同書に收錄せられんことを希望したので、其旨を告げて、姑らく增刷を差控へるか、少くも印刷部數を最小限度に止め置かんことを求めて置いた。本篇は其時の約を履む爲めに起稿するものである。然るに河上博士の此問題に關する見解は最近に至つて極めて重要なる變易を閱みした。マルクスの價値論と其生產價格論とは兩立し難しといふ私の說は全くマルクス價値概念の誤解に出でたものであつて、若し之をマルクスの眞意の如く、人類全體の立場から見た犧牲、費用價値の義に解するならば、彼れの價値論と價格論とを調和せしむる上には何等の困難もないといふのが當時博士の力說せられた意見であつたが、今や博士

は舊見解の「マルクス說の解釋としては全く異れるものなること」を極めて率直に容認せられ、之れとは「大分違つた」新見解の一斑は、既に之を本年二月發行の「社會問題研究」第五十九册に發表して居られる。此の新解釋も今迄に發表せられた丈けの處では未だ僅に其端緒が示されたに過ぎないが、而かも此の新說は、博士の舊說よりも、遙に多くの首肯すべきもの（予の見地よりして）を含んで居る。其處で本誌に約束した私の寄稿も、今は大半無用に歸するか、少くも甚だ時機を得ぬものとなつた嫌がある。併し河上博士が其の「價値人類犧牲說」を放棄せられたことは、必しも直ちに私の說が當を得て居るといふ證據にはならぬ。博士は其舊稿の積極的（主張的）部分を放棄せられても、其消極的（卑見に對する批評的）部分は未だ依然保持して居られるかも知れないからである。加之「價値人類犧牲說」其者も、マルクス說の解釋としてでなく、それ自體一個の說として之を觀れば、頗る傾聽すべきものを含んで居るのみならず、マルクスの價値論價格論を調和せしめんが爲め、價値の概念を交易經濟の彼岸に求めることは、屢々人の想ひ及ぶ所であつて、「價値人類犧牲說」も亦た其一に屬するものであるから、暫く論爭の形式を離れて、旁々予の舊稿の足らざる處を補ひ、旁々交易經濟を超越した價値概念の如何なる價値を有するかを明にする爲め、今一度勞働費用と平均利潤との問題を論ずることは、恐らく全く無用ではあるまい。

（二）

私が論じたいのは、資本主義社會に於ける商品對商品の交換比率と其生產上に費さるゝ勞働量との關係をマルクスが何う說明したか、及び彼れの說明は果して首肯し得べきものであるか否かの問題である。

經濟學者は久しく「商品の市場價格又は現實價格（actual price）に對する自然價格なるものを說いて來て居る。一

商品の市場價格は其時々の需要供給に由て決定せられるが、此市場價格は絶へず自然價格に一致しようと傾くもので、自由競爭の行はるゝ限り、決して久しきに亘つては自然價格の上下に離れることが出來ぬ。即ち自然價格は市場價格の重心、又は旋廻中心だと謂ふのである。然らば市場價格は何故自然價格と離れることが出來ぬかと云へば、自由競爭の行はれる處で市場價格が自然價格以上に上る時（又は以下に降る時）は、必ず自動的に供給の増加（又は供給の減少）が起つて、之を再び下降（若しくは昂騰）せしめなければ已まぬからである。而して此說は猶ほ今日に於ても行はれて居る。學者の或は正常價格（normal price）或は靜的價格（statischer Preis）の說と稱するものが是である。即ち是等の說に從へば、商品の交換比率を決するものは、常に需要供給であるが、自然價格と一致せぬ價格を成立せしめるが如き需要供給は、其自體の中に變動の原因を藏してゐて永續することが出來ぬといふのである。と云ふ事は、自然價格に一致する價格は、變動の原因を其自體の裡に藏せぬ價格、即ち安定を得た價格だといふことに歸着する。オッペンハイマアの語を假れば、生産者中の何人にも生産の縮小又は擴張を促すことなき價格が即ち自然價格又は靜的價格である（Wert und Kapital Profit S. 31）。而してマルクスも他の理論家と同樣に、此自然價格又は靜的價格に相當するものを立てゝ、時々現實の市場價格が其周圍を旋廻することを說いて居る。ところでマルクスは、一商品の價値は其商品の生産上社會的に必要なる勞働量に由て決せられると說くものであるが、斯く謂ふことは、果して勞働費用が上記の意味の自然價格を決定すること、即ち一商品の價値は即ち其自然價格たることを意味するや否や。これが第一の問題である。

此點に關しては、マルクスの全系統中に明に二つの思想がある。一商品の價格は其價値を中心として旋廻する、即ち商品の價値が其自然價格であるといふ思想と、一商品の市場價格の引力中心點は其價値以外に存する、即ち價値は自然價格ではないといふ思想とがそれである。第一の思想は、明に彼れの「賃銀勞働と資本」（一八四九年）「價値（或は賃銀）

價格及び利潤」（一八六五年）及び資本論第一卷の主要部分に現れ、第二の思想は、資本論第三卷に生産價格の學說として說かれて居る。

併し此の二つの思想は、「AはAなり」「Aは非Aなり」といふ兩命題の相容れざるが如く、全然相容れぬものであることは餘りに明かである。そこでマルクスは右の二つの命題を同時に立てゝは居らぬ。一商品の市場價格の引力中心點は其價値以外に存する、即ち價値は自然價格ではないと主張するマルクスは、（少くも最早）商品價格が其價値を中心として旋廻することを主張するものでない。又さうする筈がないと解釋するものが、マルクスの味方からと敵側とから現れた。味方側の解釋によれば、マルクスが一商品の價値は其れに費さるゝ社會的必要勞働量で定まると謂つたのは、決して商品はそれに費された勞働量に應じて相交換されるといふ意味、即ち價値は即ち自然價格だといふ意味ではないといふのである。それに對應する敵側の意見は、例のマルクス變說說である。マルクスは始め勞働費用が商品價値を決定し、等價値の商品は互に相交換されるといふ價値法則を立てたが、資本論第一卷公刊後漸く此說の支持し難きを覺り、第三卷では其說を改めて極めて平凡なる生産價格說に歸着したといふのである。

言ふ迄もなく此の變說說は、マルクスが其生産價格說を得たのは、資本論第一卷著作後の事だといふ臆測に基づいて居る。然し此臆測の事實に反することは、既にエンゲルスが資本論第三卷中に明言して居る。即ちそれによれば、マルクスは資本論第二第三兩卷の腹案を既に一八六三乃至同六七年の間に完成し、（資本論第三卷序文）、又利潤率平均の謎を「解決」する第三卷第十章は、一八六五年に書かれてゐるのである。（Kapital III, S.156, Anm.）否な吾々は其後公刊せられたマルクス、エンゲルス往復書簡集（一九一四年）に出て、マルクスが更に此時より前、既に生産價格說を完成してゐたことを確證することが出來るのである。即ち私の既に一度紹介したやうに（「價値論と社會主義」第二篇第三章）、マル

クスは一八六二年八月二日エンゲルス宛書簡中に後の生產價格說（ただ生產價格を當時未だ費用價格と稱してゐた一事を除けば）を完全に說明し、資本の有機的構成を異にする諸產業が同一の平均的利潤を擧げ得んが爲めには、各產業は其生產物を、或は其價値以上或は其價値以下に賣らなければならぬ。「斯くして調節せられた此價格、即ち資本出費＋共通利潤×（×の意味不明）はスミスが自然價格、費用價格等の名を以て呼んだところのものである。これが諸產業間の競爭が……諸產業に於ける價格を歸着せしめるところの平均價格である。即ち競爭は諸商品を其價値には歸着せしめないで、費用價格（註曰、資本論第三卷に所謂生產價格）に歸着せしめる。而して此の費用價格は、資本の有機的構成如何に由て、或は其價値以上、或は以下、或はこれに等しい」と謂つて居るのである（前記拙著二七一頁）。

（三）

此引照は遺憾なくマルクス變說の無根據を證明する。然し同時にそれは、決してマルクスに有利な證言と見るべきものではない。何となれば是に由てマルクス系統中に於ける上記二思想の衝突が愈々顯著な形で現れて、其調和が愈々困難となるからである。前記の如くマルクスは、一八四九年の著作（「賃銀勞働と資本」）では、競爭が諸商品の價格を其價値（勞働費用）に歸着せしめると說いて居る。「……需要と供給との動搖は、一商品の價格をして常に再び生產費に歸着せしめる……。成程一商品の現實價格は常に生產費以上若しくは生產費以下に在る。併し乍ら騰貴と下落とは互に相補ふ結果、一定の期間內に於て產業の潮の干滿を通算すれば、商品は其生產費に應じて相交換される。即ち其價格は其生產費に依て定められるのである」（Lohnarbeit und Kapital. Neu hrsg. von, K.Kautsky. 1906 S. 22）。而して商品價格が其生產費に由て決せられるといふことは、此場合のマルクスには、「一商品の製作に要する勞働時間に依る價格の決

定といふことに等しい。」何となれば、「生産費は第一に原料及び用具、即ち其製作に一定量の勞働日の費されたる、從つて勞働時間の一定量を示すところの工業生産物から、第二に時間を其尺度とする直接勞働から成立つからである」（一〇頁）故に此場合のマルクスの眞意は餘りに明白であつて、マルクスは決して勞働費用が價格の旋廻中心だとは說いて居らぬといふ前記辯護解釋を到底容るべき餘地がないのである。然らば一度び生産價格說に到達した後のマルクスは、此の所謂第二思想を放擲して居るかといふと、それが又さうでないのである。

マルクスの「價値價格及び利潤」は一八六五年に作られたものであるから、此時には彼れの生産價格說は既に完成してゐた筈である。而かも此小冊子で、彼れは「賃銀勞働と資本」に於けると同樣に、明に一商品の價値即ち勞働費用は、其價格の旋廻中心をなすと說いてゐるのである。「需要と供給とが互に相平均し、從つて其作用が停止する瞬間に於て、一商品の市場價格は其眞價値即ち其市場價格の動搖の中心たる標準價格と一致する。」然らば此の「眞價値」は如何なるもので、又何に由て決せられるか。マルクス答へて曰く、「一商品はそれが社會的勞働の結晶なるの故を以て價値を有する。其價値額又は其相對的價値は、それに含有せらるゝ彼の社會的物質の量の大小、即ち其生産に必要なる相對的勞働量に依て定まる。故に商品の相對價値はそれに投下せられ、體現せられ、固定せられた勞働の相對量若しくは相對額に由て決せられる。同一勞働時間内に生産せられ得る諸商品量同志は、其價値が相等しい。即ち一商品の價値の別の商品の價値に於けるは、其一方に固定せられた勞働量の他の一方に固定せられた勞働量に於ける關係に等しい」と（Value, Price and Profit. Socialist Labour Party Edition New York 1919 pp, 31-2）。而してマルクスに從へば、それ自體として見れば、價格は價値の貨幣的表現に外ならぬもので、正にアダム・スミスが自然價格と稱し、フイジオクラアツが必要價格と稱するものが是れである。「然らば價値と市場價格、若しくは自然價格と市場價格との關係は如何。」曰く「諸君は皆

な、個々生産者に取つての生産條件は如何に違つても、市場價格は同じ種類の凡ての商品に對して同一なることを承知して居られる。市場價格は市場に或種の貨物の或數量を供給する爲めに、平均生産條件の下に於て必要なる社會的勞働の平均量のみを表現するに過ぎない。而してそれは一定種類の商品全量に對して算定されるのである。玆までの處一商品の市場價格は其價値と一致する。他方に於て、價値若しくは自然價格以上に昇つたり、以下に降つたりする市場價格の動搖は、供給と需要との動搖に由て定まるのである。市場價格の價値からの離反は不斷に行はれるが、併しアダム・スミスの謂ふ通り、「自然價格は諸商品の價格が絶えず歸着しようとする中心價格である。樣々の出來事が、時としては價格を可なり此以上の高さに支へることもあるであらうし、又時としては、之を此以下に降らしめることであらう。然し價格が此の安定持續の中心に落着くことを妨げる故障は何であつても、彼等は絶えず之に向つて傾きつゝある」と（三37―8）玆でもマルクスの眞意の所在に就いては疑問を介む餘地がないのである。

（四）

「資本論」以前に於けるマルクスの述作に徴して、吾々はマルクス擁護論の無根據を遺憾なく證明し得るが、併しそれと同時に、此等の述作には、商品價格は商品價値に一致しようとするといふのと、此兩者は必然的に相離反しようとするといふのと二つの思想が、到底調和すべからざる形に於て相衝突して居ることを否認することが出來ぬ。而して此衝突は、マルクスが恬然として「……競爭は諸商品を其價値には歸着せしめないで、費用價格に歸着せしめ、此費用價格は、「スミスが自然價格、費用價格の名を以て呼んだところのものである」（マルクス・エンゲルス往復書簡集第三卷八〇頁）と謂ひ、且つ一商品の價値の貨幣的表現は、アダム・スミスの所謂自然價格に外ならず、而して「アダム・スミスの謂

ふ通り「自然價格は諸商品の價格が絕へず歸着しようとする中心價格」だと言ふ(「價値價格及び利潤」一卅八頁)に至つて極まつて居る。而して資本論第一卷所說と同第三卷所說との對立も、畢竟「賃銀勞働と資本」及び「價値價格及利潤」に窺はれる思想と六一年のエンゲルス宛書簡中に說かるゝ思想との衝突の反覆に外ならぬものである。

マルクスは資本論第一卷第一章で鐵と小麥とが相交換せらるゝ場合を取つて、之を

小麥1クオタア＝鐵xツエントネル

の方程式に現はし、此方程式は抑も何を意味するかとの問を自ら設け、自らそれに答へて「それは此の一クオタアの小麥と、xツエントネルの鐵といふ二つの違つたものの內に等量の共通なる或物が存在することを語る。即ち此二者は、二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々は、それが交換價値なる限り、此の第三のものに約元されなくてはならぬ。」而して此の共通の或物は、費されたる勞働以外のものたることはあり得ないと論結して居るが、予が前年此の推究の方法を批評した時に、此方程式に示される交換比率は、果して現實世界に於ける交換の事實を意味するものなりや否やに關して、諸家の議論があつた。而してこれを現實世界に於ける交換比率と解しては、後の生產價格說と餘りに明かに衝突するところから、マルクシストは皆な否定說を取つた。併し今資本論の此部分は、「賃銀勞働と資本」「價値價格及利潤」の立場に立つて書かれたものとすれば、解釋に苦心する必要は殆どない。即ち此立場に立つ場合のマルクスは、現實社會の商品價格は、必ず商品價値に歸着しようとして其周圍に旋廻するものと解して居るのであるから、孤立例外的、若しくは瞬間的の交換比率でなくて、長時間に亘つて持續する「正常的」若しくは「自然的」交換比率を觀察する限り、相交換せらるゝ二商品の含有勞働量は、必ず相等しかるべき筈なのである。故に「價値價格利潤」等に說かるゝ所が正しいものとすれば、所謂蒸溜的推究法を現實世界の交換比率に適用しても毫も破綻を生ずる惧

れはたいのである。

（五）

其處でマルクスが一方では價格は價値に歸着すべき筈のものであると主張し、他方では價格は價値に一致せざるべき筈のものであると主張して居る事實は、之を否認することが出來ぬ。而して此の二つの命題は各々充分の理由と由來とを有するものであつて、その何れをも不用意無聯絡の發言として無視する譯には行かぬのである。これを調和せしむるには何うすれば好いか。

其の一つの方法は、商品がその價値通りに相交換されるといふのは、資本主義以前の經濟段階に適用せられ、競爭の爲めに商品價格が價値から離れて生產價格に歸着するといふのは、發達せる資本主義社會に就いて謂はれたものだと解釋することである。而して此解釋は、マルクス自身の發言に其根據を求めることが出來る。次に記す如く、マルクスは、資本論第三卷中に諸商品が其價値通り、若しくは略ぼ其價値通りに相交換せらるゝ爲めには、資本主義的發達がまだ或高度に到達して居らぬことを必要とすると說いてゐるから、是れは當然資本的生產方法の既に發達せる所では商品の相互交換は、其勞働費用通りには行はれぬことを意味するものと解することが出來る。然らば資本主義以前に於ては、何故に商品は其價値通りに相互交換せらるゝことを得るかといふに、マルクスに從へば、其れは其段階に於ては、價値と價格との一致を妨げる利潤率の平均が行はれないからである。

これで一應の說明は與へられて居る。併し說明があるといふ事と、其說明が首肯し得べきものか否かといふこととは、別問題である。第一に資本論第一卷の卷頭に說かれてゐる、相互交換せらるる商品間には等量の勞働量、即ち等量の價

値が含まれてゐなければならぬといふ法則が資本主義以前の社會に就いて立てられたものだといふことは、文義の解釋としては、全然之を容認することが出來ぬ。「資本主義的生産方法の行はるゝ社會の富は、無數の商品集積として現れ、個々商品は其元素形態として現れる。故に吾の研究は商品の分析を以て始まる。商品は先づ外物、即ち其性質に依て何等かの人間欲望を充足する物である。……」といふ資本論開卷第一頁の文句から、「商品の交換比率若しくは交換價値に現るゝ共通なる或ものは、即ち其價値である」との結論に到達する迄の間に於て、其處に論ぜらるゝ所が、特に「資本主義生産方法の行はるゝ社會」には適用なきものなることを示す文句は、一つも之を見出すことが出來ぬからである。否な第一卷價値論の章に論ぜらるゝ商品は資本主義的商品でなくて、所謂「單なる商品」(資本主義以前の商品)なることを主張する者と雖も、資本論第一卷を讀んで當初から自然に斯る解釋を下したのではなくて、多くは後に第三卷の出づるに及んで、其處に説かるゝ價格論と價値法則との餘りに兩立し難きことを見て、始めて右の如き解釋に想到つたに外ならぬのである。而かも上記一段の説明は、正に讀んで字の如く、之を資本主義的商品は其勞働費用通りに相交換されるといふ意味に解して差支ない理由あることは、既に前に説明した通りである。併し此文義解釋の當否は、必しも爭はぬ。私が論じたいと思ふのは資本主義以前に於ては、即ち利潤率の平均さへなければ、商品は其價値通りに相交換せられるといふマルクスの説の果して是認し得べきや否やの問題である。

(六)

「賃銀勞働と資本」で商品價値(勞働費用)は價格の引力中心を成すと主張する場合のマルクスの論據は、果して何處にあるか。それは價値と價格とが一致せぬ場合には必ず利潤率の不平均を生じ、利潤率の低い處から高い處への資本流

動の爲めに商品供給の增減を來たし、それに依つて價格をして下落若しくは騰貴して再び價値に一致せしめなければ已まぬといふ處にある。「一商品の價格騰貴の結果は何であるだらうか。多額の資本が繁榮なる產業部門に投ぜられるであらう。而して此の特に有利な產業區域への資本の流入は、それが普通利潤（die gewöhnhchen Gewinnee.）を生ずるに至るまで、或は寧ろ、過剩生產の爲め生產物の價格が生產費以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に、一商品の價格が其生產費以下に下降すれば、資本は此商品の生產から引き去られるであらう。……此の資本の逃亡に依て、斯る一商品の生產、即ち其供給は、需要に適合し、從つて其價格が再び生產費の高さに引上げらるゝまで、或は寧ろ供給が需要以下に降るまで、即ち其價格が再び其生產費以上に引上げらるゝまでは減退するであらう」(a.a. O. S 21.)。「價値價格及利潤」の論據も同じ處にあるものと解すべき理由は、既に別の機會に述べた（前揭拙著二七六—八頁）通りである。而して此議論はリカルドオがその市場價格と自然價格との章に說いてゐる所と全然其軌を一にする。

然るに、既に度々の機會に說明した通り、此の市場價格と自然價格との關係に就いてのリカルドオの所說は、同額の資本は同量の勞働を代表するといふ前提の下にのみ之を承認することが出來る（前揭拙著一九頁）。更に詳しく云へば、第一に賃銀額が正確に投下勞働量を反映し、第二に資本的生產者の支出資本中に於て、賃銀部分の占める比例が有ゆる產業を通じて均一なりとの前提の下にのみ之を承認することが出來るのである（同三一頁）。故に若し勞働者中に獨占的地位に占據して、投下勞働量に比例せざる高率の賃銀を收得するのがあれば、此の第一の條件は具備せず、從つて、勞働費用は最早市場價格の重心たる自然價格にはなり得ないのである。併し此點は殆どリカルドオに顧みられずに終つて居るから、姑らく之を措いて、茲には第二の條件のみを論ずれば、生產者の支出資本中に於て賃銀と賃銀以外の部分との占める割合が同一でない場合に勞働費用が最早市場價格の引力中心となるべき理由がないことは明白である。假りに例

へば、二人の等しく一萬磅の資本を投じて生産に從事する者があつて、各自生産物の性質上一人は其資本の大部分を機械に投じ、一人は勞働者雇傭の爲め賃銀として之を支出し、而して生産物は各々その含有勞働量に比例して賣買されるものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一人が收める收益は甚だ少く、一人が收める收益は甚だ多かるべき筈である。そこで此の不同の利潤率が平均を求め、資本が彼の不利の產業を去つて、此の有利の産業に流入し、供給の増減、從つて一方の騰貴他方の下落に由て利潤率の平均を恢復し、其處で始めて其流動が止んだとすれば、其平均を得た場合の二貨物の比價は、決して含有勞働量には比例せぬ筈である。此考察がリカルドオを導いて、商品相互の正常交換比率を決するものが獨り勞働費用のみでないことを容認するに至らしめたのである。

（七）

然らばマルクスは何うかといふに、彼れの所謂生産價格（價値から外れた價格重心）は、資本の有機的組成（賃銀と自餘資本部分との組合せ）に異同がある處で利潤率の平均ある爲めに成立する。即ち商品價格と商品價値との一致を妨げるものは、資本有機的組成の異同と利潤率の平均とである。其處で一見此の二要素の何れか一つが缺けさへすれば、價値と價格とは一致し得るかに考へられる。此場合若しマルクスが、資本の有機的組成にさへ異同がなければ、價値と價格とは一致する、即ち商品は其價値通りに相交換されると云へば、之れは畢竟リカルドの先蹤を追ふもので、結局恐らくリカルドオと共に、商品が其價値通りに相交換されるのは（一）生産上勞働を投じて機械を用ゐず、且つ生産物の市場に提出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合（二）生産上に用ゐらるゝ固定資本が、價値及び耐久性を等しうする場合に限るといふに似た結論に到達しなければならぬ事になつたであらう。然るにマルクスは、（少くも今問題にしてゐる個處

動の爲めに商品供給の增減を來たし、それに依つて價格をして下落若しくは騰貴して再び價値に一致せしめなければ已まぬといふ處にある。「一商品の價格騰貴の結果は何であるだらうか。多額の資本が繁榮なる產業部門に投ぜられるであらう。而して此の特に有利な產業區域への資本の流入は、それが普通利潤 (die gewöhnchen Gewinne.) を生ずるに至るまで、或は寧ろ、過剩生產の爲め生產物の價格が生產費以下に下降するまでは繼續するであらう。反對に、一商品の價格が其生產費以下に下降すれば、資本は此商品の生產から引き去られるであらう。……此の資本の逃亡に依て、斯る一商品の生產、即ち其供給は、需要に適合し、從つて其價格が再び生產費の高さに引上げらるゝまで、或は寧ろ供給が需要以下に降るまで、即ち其價格が再び其生產費以上に引上げらるゝまでは減退するであらう」(a.a. O. S 21.)。「價値價格及利潤」の論據も同じ處にあるものと解すべき理由は、既に別の機會に述べた(前揭拙著二七六―八頁)通りである。而して此議論はリカルドオがその市場價格と自然價格との章に說いてゐる所と全然其軌を一にする。

然るに、既に度々の機會に說明した通り、此の市場價格と自然價格との關係に就いてのリカルドオの所說は、同額の資本は同量の勞働を代表するといふ前提の下にのみ之を承認することが出來る(前揭拙著一九頁)。更に詳しく云へば、第一に賃銀額が正確に投下勞働量を反映し、第二に資本的生產者の支出資本中に於て、賃銀部分の占める比例が有ゆる產業を通じて均一なりとの前提の下にのみ之を承認することが出來るのである(同三二一頁)。故に若し勞働者中に獨占的地位に占據して、投下勞働量に比例せざる高率の賃銀を收得するのがあれば、此の第一の條件は具備せず、從つて、勞働費用は最早市場價格の重心たる自然價格にはなり得ないのである。併し此點は殆どリカルドオに顧みられずに終つて居るから、姑らく之を措いて、茲には第二の條件のみを論ずれば、生產者の支出資本中に於て賃銀と賃銀以外の部分との占める割合が同一でない場合に勞働費用が最早市場價格の引力中心となるべき理由がないことは明白である。假りに例

へば、二人の等しく一萬磅の資本を投じて生產に從事する者があつて、各自生產物の性質上一人は其資本の大部分を機械に投じ、一人は勞働者雇傭の爲め賃銀として之を支出し、而して生產物は各々その含有勞働量に比例して賣買されるものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一人が收める收益は甚だ少く、一人が收める收益は甚だ多かるべき筈である。そこで此の不同の利潤率が平均を求め、資本が彼の不利の產業を去つて、此の有利の產業に流入し、供給の增減、從つて一方の騰貴他方の下落に由て利潤率の平均を恢復し、其處で始めて其流動が止んだとすれば、其平均を得た場合の二貨物の比價は、決して含有勞働量には比例せぬ筈である。此考察がリカルドオを導いて、商品相互の正常交換比率を決するものが獨り勞働費用のみでないことを容認するに至らしめたのである。

(七)

然らばマルクスは何うかといふに、彼れの所謂生產價格(價値から外れた價格重心)は、資本の有機的組成(賃銀と自餘資本部分との組合せ)に異同がある處で利潤率の平均ある爲めに成立する。即ち商品價格と商品價値との一致を妨げるものは、資本有機的組成の異同と利潤率の平均とである。其處で一見此の二要素の何れか一つが缺けさへすれば、價値と價格とは一致し得るかに考へられる。此場合若しマルクスが、資本の有機的組成にさへ異同がなければ、價値と價格とは一致する、即ち商品は其價値通りに相交換されると云へば、之れは畢竟リカルドの先蹤を追ふもので、結局恐らくリカルドオと共に、商品が其價値通りに相交換されるのは(一)生產上勞働を投じて機械を用ゐず、且つ生產物の市場に提出せらるゝ迄に經過する時間の同一なる場合(二)生產上に用ゐらるゝ固定資本が、價値及び耐久性を等しうする場合に限るといふに似た結論に到達しなければならぬ事になつたであらう。然るにマルクスは、(少くも今問題にしてゐる個處

では）今一つの方の途を擇んだ。價値と價格との一致を妨げるものは　利潤率の平均だから、此事さへなければ、商品の其價値通りの交換が行はれると說いたのである。利潤平均以前に於ては價値通りの商品交換が行はれたと認むべき理由を、マルクスは左の如く說いてゐる（資本論第三卷第十章　高畠譯本第三卷第一冊三〇五頁以下）。

「問題を次の如く考へる時、事の要點は大抵判明し來るであらう。假りに、勞働者達が自ら其夫々の生產機關を所有し相互に其商品を交換するものとせよ。此の場合、斯る商品は資本家の生產物ではない。彼等の勞働の技術的性質異なるに從つて、種々なる勞働部門に使用せらるゝ勞働要具及び勞働材料の價値は種々異なり、また甲商品は一時間で完成し得るが、乙商品の完成には一日を要する等の相異に從ひ、與へられたる勞働量に對して要する使用生產機關の量——其價値の不等は姑く措き——は種々異なるであらう。

「更らに右の勞働者達は、平均同じ長さの時間——勞働の能率等の差異に基く諸種の平均化を計算に入れて——勞働するものと假定せよ。此の場合二人の勞働者は其一日の勞働の生產物たる商品に於て、双方とも先づ自己の支出、換言すれば消費せる生產機關の費用價格を回收したであらう。而して此の費用價格は彼等の勞働部門の技術的性質に準じて種々異なるであらう。

「次に、彼等は何れも等量の新價値を造り出したであらう。其新價値とは即ち彼等が生產機關に附加した勞働日のことである。此の新價値は　彼等の勞銀と餘剩價値即ち彼等の必要なる慾望を超越せる餘剩勞働——而も其結果は彼等自身の所有に屬すべき——との和を含む。資本主義流に言へば、彼等は双方とも同一の勞銀と同一の利潤との和を受け同時に又例へば十時間なる一勞働日の生產物に依て言現はされた價値をも受ける。然しながら、先づ彼等の商品の價値は不等であらう。例へば商品Iは商品IIに比し　消費せる生產機關に就てより多くの價値分を含むかも知れぬ。更に有

ゆる可能の差異を同様計算に入れこ商品Iは商品IIに比してより多量の生きた勞働を吸收し、從つて其の生産により長き勞働時間を要するものと假定せよ、此の場合商品IとIIとの價値は非常に異なつたものとなる。勞働者Iと勞働者IIとが與へられたる時間に爲す勞働の生産物を代表する商品價値の總額も矢張り同様である。放下せる生産機關の總價値に對する餘剩價値の比例を、此の場合利潤率と名づけるとすれば、利潤率も亦IとIIとでは非常に異なることゝなるであらう。生産の繼續中IとIIとに依つて日々消費され而して勞働を代表する所の生活資料は、前貸資本の中我々が他の場合可變資本と名づける分を成すであらう。然しながら餘剩價値は、勞働時間が等しいのであるから、Iに於てもIIに於ても同一であらう。尚正確に言へば IとIIとは何れも一勞働日の生産物の價値を受ける故、前貸せる『不變』要素の價値を控除した後 彼等は何れも等額の價値を受ける。而して此價値の一部は、生産上消費された生活資料の代償他の一部は夫を超過せる餘剩價値と見做し得るものである。若しIの支出額がより大であるとすれば、斯る支出額は右の『不變』分を償ふべき、彼れの商品のより大なる價値分に依て回收される。斯くて彼れは、又、其生産物の總價値中のより大なる一部を此不變分の素材的要素に再轉化せねばならぬ。然るに、之れに就てIIの收むる分がより少額であるとすれば 彼れが不變分に再轉化する額も亦それだけ少なるものとなるであらう。されば斯る假定の下に於て利潤率の差異なるものは何うでも宜い事(gleichgültiger Umstand)であつて それは丁度賃銀勞働者から強搾した餘剩價値量が如何なる利潤率に依つて表章されるかといふ問題が今日彼れに取つて何うでも宜い事であり、また國際貿易に就て云へば、種々なる國民に於ける利潤率の差異なるものが、彼等の商品交換に取つて何うでも宜い事であるのと同じである。」

故に「商品が其價値通り又は略々其價値通り交換せられる事は生産價格で交換せられる事に比べて遙に低級なる一段階を必要とする。後者には一定高度の資本制發達が必要なのである。」されば商品價値は「單に理論上のみでなく、歴史

的にも生産價格に先だつもの」であつて、此の歷史的事實は「古來並に近代世界に於ける地持自作農法並に手工業者に於て」之を見出すことが出來るといふのである。

畢竟マルクスに據れば、斯る狀態の下では、生産者に取つては、勞働に由て生み出された價値の放下資本額に對する比率が一方の産業では高く他の産業では低いといふ事實は「何うでも宜い事」であり、從つて生産者が比較的不利の産業を去つて有利の産業に移ることをなさず、從つて生産價格は成立せず、生産價格が成立せぬから價値通りの商品交換が行はれると謂ふのである。

(八)

此說明は果して容認し得べきものであるか。私は嘗て此問題に對する意見を要約して斯う謂つた――「……此場合に問題を決するものは、斯る社會に於て、自由競爭が行はれて、各生産者(勞働者)は充分打算的に合理的に行動したものと想像する事を許すか、之れを許さぬかである。若し之を許すとすれば、即ち其場合各生産者は最少費用の經濟本則に從つて行動したものとすれば、彼れに取つて利潤率の大小は決して「何うでも宜い事」ではない。彼れは必ず比較的不利の産業に移つて、其産業の生産物價格を下落せしめなければ已まぬであらう。是れはボエムバヱルクが其のマルクス批評中に縷々說明した所である。併し假りにマルクスの主張する通り、生産者に取て利潤率の高下は「何うでも宜い事」であつたとしたならば何うなるか。其場合に吾々の認め得ることは、利潤率が平均せず、從つて生産價格が成立せぬ一事のみである。併し生産價格が成立せぬことは、決して價値通りの商品交換が行はれることを意味しては居らぬ。否な利潤率が「何うでも宜い事」となると同時に、商品が價値通りに相交換されるといふ保障も失はれなければならぬのであ

る。凡そ交換價値論上の費用說が成立し得んが爲めには、現實交換比率と費用との間に背離が生じた場合に、之を館に復して兩者相一致せしむる自動作用が行はれなくてはならぬ。而して吾々の知る限りでは、其の自動作用は、費用以上の價格が成立した場合に其處に生產者が集中して價格を引下げ、費用以下の價格が成立した場合に生產者が其產業を去つて生產物價格を騰貴せしむることより外にはない。併し此自動作用が行はれゝば、利潤率は平均せずにはゐないのである。今經濟當事者の合理的打算的行動(經濟本則に適へる行動)資本勞働の自由流動を自由競爭の一語に約言すれば、抑も費用價値說は自由競爭の行はれざる處には成立せず、自由競爭が行はれる處では利潤率は平均しなければ已まぬのである。其處で自由競爭が行はれゝば價値通りの商品交換は行はれず、自由競爭が行はれなければ、抑も費用價値說が成立せぬのであるから、從つて又勞働費用說も成立すべき筈がないと謂はなくてはならぬのである。其處で自由競爭は價値通りの商品交換が行はれる爲めの必要條件でもあり、妨害條件でもあるといふ事になる。

(九)

旣述の通りマルクスも、「賃銀勞働と資本」及び「價値價格及利潤」では、明に自由競爭あるが爲めに價格が價値に歸着すると說いてゐる。而して資本論第三卷では、自由競爭を目するに價値價格の一致に對する妨害要素を以てしてゐるのである。そこでマルクスの說明には、讀者を當惑せしむる混亂が生ぜざるを得ぬ。彼れは資本論第三卷で、右記の如く、自由競爭の爲めに價値と價格との不一致が起ると說きながら、殆ど其の同じ場所で商品が價値通りに賣買される爲めの條件として自由競爭を擧げてゐるのである。乃ち曰く、「諸商品の依て相互に交換される價格が、略々其の價値と一致するやうになるには、單に左の諸事情を必要とするのみである。即ち(一)種々なる商品の交換は最早純偶發的なも

の、又は單に特殊的たるだけに止まるものではなくなること、（二）直接の商品交換（物々交換）が問題たる限り、兩當事者とも其相互の要求に略々一致した比例量に於て之等の商品を生産すること。此事たる市場に就ての相互の經驗に伴ふものであつて、連續的なる交換その者の結果として生ずるものである。（三）販賣が問題たる限り、契約當事者の一方をして價値以上に販賣するを得せしめ、又は價値以下に賣拂ふを餘儀なからしむる、何等の偶生的又は人爲的獨占有せざること。而して偶生的獨占とは、需給の偶然的狀態に依つて購買者なり販賣者なりに附與せらるゝ獨占のことを云ふ。」（高畠譯本三一一頁）

此の第三の條件が直ちに自由競爭を意味することは、言を待たぬであらう。而して商品の生産額が各々其需要量に適合するといふ第二の條件も、需要に比して供給溢れる商品の生産からその供給足らざる處に生産要素の移動するといふことがなければ、即ち自由競爭、利潤率の平均がなければ、具備することがないのである。而かも斯く一方に自由競爭を諸商品の「價格が略々其の價値と一致するやうになる」爲めの條件とするかと思へば、マルクスは又他方では、獨占の爲めに自由競爭の制限せらるゝ處で始めて商品が價値通り、若しくは價値に近く賣買され得るものゝ如く説いて居る。彼れの絶對地代論は斯くして演繹せられたものである。（拙稿「較差地代と絶對地代」三田學會雜誌第十八卷第十號所載參照。）

右の引用句の直ぐ後に、マルクスは「種々なる生産部面の商品は其價値通りに販賣されるとの假定は、固よりたゞ該商品の價値は即ち其の價格が回轉し、其價格の絶え間なき騰落は平均に歸して行く中心であるといふ事を意味するに過ぎぬ」と謂つて居る。此一句は頗る既引「賃銀勞働と資本」中の一節を憶起せしむるものであるが、資本論第三卷に於けるマルクスに取つては、固より利潤率平均の曉に就いては斯く謂ひ得ぬことは勿論である。併し利潤率平均といふこと

を度外すれば、猶更斯うは云はれないのである。マルクスに從へば、市場價値とは一生産部面内に産出せらるゝ商品の平均價値であるといふ。併し一商品の市場價格は何の原因に因つて此の市場價格を中心にして回轉するか。需要供給の關係上市場價値とは全く離れた高市場價格、又は低市場價格が成立した場合に、何が此價格を引下げ、若しくは引上げて、之をして市場價値の周圍に回轉せしめるか。一商品に就いて特に高い市場價格が成立した場合には、利潤率が普通以上に昇るので、他の生産部面から資本が流入して來て其供給量を增し、反對に市場價格が市場價値以下に離れた場合には、資本が逃れ流出することに依て供給量が減退し、斯くして再び市場價格を市場價値に近づけるといふならば説明は付くが、此の資本の流出入、即ち利潤率の平均運動といふ事を度外しては、市場價格が市場價値を中心として回轉すべき理由がないのである。即ち利潤率平均の曉には、市場價格は價値から離れた別の中心を求めて其周圍に旋廻するし、また利潤率平均といふ事がなければ、市場價格は價値の周圍には回轉しないのである（前掲拙著二八四頁。）

河上博士が其舊稿中に、價値通りの商品交換が行はれたのは、資本主義以前に限るとだと謂はれたのは、固より典據のある事であるが、私は其の典據たるマルクス其自身の思想に混亂があるといふのである。ヒルフアヂングの如きも、資本主義以前に於ては生産部面間の競爭に因る利潤率の平均なるものがないといふ事を頻りに力説して居る（Böhm-Bawerk's Criticism of Marx, p.17）。併し前にも述べたやうに、吾々が認め得るのは、利潤率が平均しなければ生産價格は成立しないといふ一事のみである。生産價格が成立しなければ、何故價値通りの商品交換が行はれるか。幸にして予の前段の論が正しければ、これを説明する爲めには再び利潤率平均を借り來らなければならぬのであろう。ブヂンの「マルクス學説體系」にも「價値は價格の測定せられる標準を立てるものであつて、價格は自然に此標準に一致する傾向を持つて居る。……市場の「値切りこぎり」の結果として生じる價格は、自づと其の標準價値の方向に牽き着けられる（山川

譯本九五頁）と說いてあるが、前述の通り、利潤率平均の行はれた後に就いては、無論斯く謂ふ事は正しくないし、利潤率平均以前に於ては、猶更斯うは言はれない。つまり何れにしても誤つてゐるのである。併し是は決してブチン一人の罪ではなくて、マルクス自身先づ此の混亂誤謬に陷つてゐたことは、前述の通りである。

以上私は、啻にマルクスの價値論價格論の衝突其者のみならず、又何故に斯る衝突が招致せられたかの理由を少しく說明し得たつもりである。マルクスは始め價値をして價格の廻轉中心たらしめた。斯く價格が價値に惹着けられるのは、利潤平均の一事あるが爲めであつた。然るにマルクスはやがて利潤平均其者を措いて、價値と價格との一致することを本則的正常的の傾向と認め、利潤の平均さへなければ此の「本則」「正常」が實現されるといふ風に考へ（少くも說かうとし）た。そこで自由競爭の行はれる處では價値通りの交換が行はれると說いたり、自由競爭に制限が加へられることに依て始めて價値通りの交換が行はれると說いたりするといふ混亂が生じたのである。

（十）

商品價値は勞働費用に由て定まるといふ法則を、現資本主義社會に於て含有勞働量の等しい商品同志が相交換されるといふ意義に解すれば、資本論第一卷は無論同第三卷と衝突する。併し資本論第一卷で含有勞働量を等しうする生産物同志が相交換せられると說かれてゐるのは、資本主義以前の商品に就て謂はれたことだといふ解釋も亦た文義上論理上倶に容し難いとは、正に上述の通りである。然らば茲にマルクスの所謂價値を、交換經濟の現象には現れぬ一觀念と解することに依て、價値論價格論の衝突を救ふといふ方法は如何であらうか。此方法の最も代表的なるものゝ一は、河上博士が嘗て主張せられ、今は撤回せられた、價値を人類全體の立場から見た費用の義に解するの說である。人類の全體の立場

れら見ての費用は、生産に費された勞働量の外にはあり得ぬものであるから、諸商品が現實社會に於て如何なる比率に於て相交換せられやうとも、含有勞働量を等しうする商品は之を等價値なるものと視なければならぬといふのが、此說の大意である。私は此說に對する卑見の大略を本稿執筆に先だつて河上博士宛の私信中に述べて斯う云つた。（其時私は博士が既に此問題に就いて新見解を發表して居られることを未だ知らなかつたのである）「此の撞着（價値論價格論の）を救はんが爲め種々の解釋試みらる。マルクスの所謂價値は人類全體の立場より見たる犧牲に外ならずと爲すが如きも其一なり。此說は其自體として之を見れば、頗る傾聽すべきものを含めり。然れども、斯の如き價値概念は、苟も人類あり、勞働あり、生産ある處には必ずなかるべからざる、非歷史的（ワグナアの所謂論理的純經濟的）範疇に屬するものなるを以て、生産物あるも未だ商品なき處にも其適用あるべし。今一切經濟學上概念（從て價値概念）の歷史的範疇に屬し、經濟學上法則の一特定生産方法の下にのみ適用あることを力說するマルクスは、果して斯の如き解釋を容認するや否や。姑く數步を讓りて、マルクスが所謂商品價値は實は生産物價値の義に外ならずとするも、斯の如き交易經濟の限界を超越せる價値法則よりしては、何等の價格法則 ableiten せらるることを能はざるべし。畢竟人類犧牲說は價値法則と價格法則との矛盾なきことを言はんと欲するの餘り、マルクスの意に反して、兩法則間の連絡を切斷したるものなり云々。」

（十一）

私は人類犧牲說を其自體としては決して輕蔑してゐない。否な嘗て「勞働の苦痛」と題する一文の中で、私自ら人類犧牲說を敍べたこともあるのである。「一社會若しくは『人間』全體がその享受すべき財を購ふ爲めに『自然』に對して何を支拂ふかと云へば、人間の支拂ふべき究極の代價は勞働以外に何もない。此點に就ては異論のあるべき筈はな

い。此意味でヒュッムが「地上一切のものは勞働に依て購はる」と叫び、アダム・スミスが世上一切の富は元と凡て勞働に依て購はれたるものなり。勞働は一切のものに對して支拂はれたる最初の代價、本來の購買金なりといふのは論ずる迄もない自明の理を述べたに過ぎないものである」(拙著「社會問題研究」一三八頁)。而して私は此章句を撤回すべき必要をまだ認めて居らぬ。それ故に私は、例へばツガン・バラノソスキィが「絶對的意義に於ける費用」は、人間のみが人間經濟の主體なりとの單純なる理由に由て、人間勞働の投費のみから」成る。「人類經濟上に於ける唯一の眞の費用要素は、人間其者のみである。」「予の所見を以てすれば、勞働が絶對費用の唯一の實質である」と主張する(Theoretische Grundlagen des Marxismus S. 143, 144, 145)のに同意し、又財の費用となる所のものは勞働以外に何もない。勞働は費用の視點より考察せる場合、財の發生史上に於ける唯一要素を成すものである。……財が人間に投下勞働の費用を課することは疑を容れぬが、更に又財の發生史上に於ては、勞働以外に人類に對し一財を獲得せんが爲め此を費したりと言はしむるが如き關係に立つものは、勞働以外にはないのである。成程一財の生産には此以外猶ほ一物が必要であり且つ役立つて居ることは、否定することが出來ぬ。即ち原料が必要であつて、其原料は自然が之を提供するのである……。併乍ら其故に費用ありと謂はんと欲するならば、人は自然を人格化して、自然の費用と言はなければなるまい。原料は人間が財の爲めに投ずる支出ではない。財の費用は、吾々に取てはそれが存する所のもののみである。」と說くロオドベルトスを承認するものである(Zur Erkenntnis usw. 1842 S. 7-8)。

併し此等の說其者を認めることとそれがマルクス解釋として當を得てゐるか否かとは、別問題である。第一に指摘しなければならぬのは、右述の如き意味に解釋せられた價値法則は、如何なる時代、如何なる段階の社會にも適用されるといふ一事である。成程價値を全人類の立場から見た費用の意味に解すれば、現實社會に於て如何なる交換比率が行はれ

ようとも、價値法則が此と衝突する餘地のないことは勿論である。併し斯る價値法則は「如何なる交換比率が行はれても」正しい許りでなく、如何なる交換比率も成立せぬ場合にも、即ち全く交換の行はれぬ社會、交換以前、交換以後の社會に於ても、苟も「人類經濟上に於ける唯一の眞の費用要素は、人間其者のみである」といふ見地に立つ限り、此價値法則は常に依然として正しいのである。即ち斯の如くに解せられたる價値は、交換、貨幣、資本、賃銀勞働等が一定段階の社會に於てのみあり得べき歷史的範疇に屬するのと反對に、欲望　生産　消費等と同じく、有ゆる社會發達段階に共通なる、人間經濟の論理的範疇に屬するものである。マルタスは果して斯る普遍的價値法則を立てようとしたものであらうか。（前記ツガン・バラノツスキイは勞働が唯一の絶對費用要素なることを主張してはゐるが、併し決してマルタスの解釋として之を提説するものではない。彼れは勞働が絶對費用の實體たることは之を認めるが、「勞働が價値實體たることは斷然否定」して居る。彼れの所見に依れば、價値と費用といふ全然異なる二概念を混同して、無費用物即無價値物と斷じたる所にロオドベルトス、マルタスの誤謬は存するのである。S. 145）

經濟學研究方法論上に於けるマルクスの立場を知るものは、此問を否定することに躊躇せぬであらう。マルクスが最も攻撃に力を用ゐたのは、如何なる特殊社會形態からも獨立せる非歷史的普遍的經濟概念を立てようとする舊經濟學者の研究方法であつた。彼れが此立場からして、生産せられたる生産財其者を直ちに認めて資本とする舊派學者間の通説に痛撃を加へたことは、既に人の知る所である。「黑人奴隷とは何か。黑人種に屬する人間である。此説明の價値は今一つの説明の價値に等しい。一黑人は一黑人である。一定の關係の下に於て始めて彼れは奴隷となる。一木綿紡績機械は木綿を紡ぐ機械である。たゞ一定の關係の下に於てのみそれは資本となる。此關係から引離せば、それの資本たらざることは、猶ほ金の其自體貨幣たらず、砂糖の砂糖價格たらざるに等しい。資本は一の社會的生産關係である。それは一

の歴史的關係である」(Kapital, Volksausgabe, 693 Anm.)。マルクスは又獨逸の一批評家が彼れの方法に對して下した評言を「適切」と認めたが、其批評の一節には左の如く曰はれてゐるのである。「併し乍ら人は謂ふであらう。經濟生活の一般的諸法則は、その現在に適用せらるゝと過去に適用せらるゝとを問はず、常に同一のものであると。マルクスは正に此事を否認するのである。……彼れの見解に從へば、歴史上の各時代は各々その特有の法則を有する。……生活が進化道程上の一時代に時代遲れとなつて、一定の段階から他の段階に移るや否や、直ちに別個の法則に依て支配され始めるのである」(資本論第一卷第二版跋)。故に彼れは「抽象的なる人口法則は未だ歴史上人類が干渉せざる前の動植物に取てのみ存在する」との理由に由てマルサスを排斥し、「特定の歴史的生産方法は、各々其の特有なる、其時代に限つて眞なる人口法則を有する」といふ見地から、その産業豫備軍の説を立てたのである。此の立場はマルクスをして經濟學者が「生産其自體」を論ずることをも排斥せしめた。即ち其遺稿「經濟學批評緒論」に曰く、「本書の主題は第一に物的生産である。社會内に於て生産を行ふ個人——從て當然社會的に定められたる個人の生産が出發點である。スミス及びリカルドオが其を以て出發した、個々の孤立せる獵夫及び漁夫は、十八世紀の空想力に缺けたる空想の一に屬する。社會以外に於ける單獨個人の生活は……倶に語る人なくしての言語の發達と同樣の荒唐無稽事である……。故に生産といふ時には、常に一定の社會發達階段上に於ける生産——社會的個人の生産を謂ふのである」と。(Zur Kritik der politischen Oekonomie, 1903 XIII–XV)

(十二)

併し姑らくマルクスの方法論を度外しても、マルクスの論ずる所が商品價値(Warenwert)なるの一事は、既に普遍

的非歴史的なる價値人類犧牲說を拒否するものと思はれる。商品は既に人間勞働の生産物であるが、併し勞働生産物其者は直ちに商品ではない。人間勞働の生産物が、歴史的發達の成果たる一定の社會的關係の下に置かれて、始めて商品となるのである。生産物が商品となる爲には人と人との間に自己の生産物を以て他人の慾望を滿たし、之と交換に他人の勞働生産物を以て自己の慾望を滿たすといふ相互關係が成立してゐなくてはならぬ。換言すれば、商品とは他人の勞働生産物と交換せんが爲めに造れる勞働生産物である。マルクスは資本論第一章に「一物は商品たることなくして有用物たり、又人間勞働の生産物たることが出來る。其生産物を以て自己の慾望を滿たすものは、使用價値を造出しはするが、商品は造出さぬ。商品を生産する爲めには、彼れは啻に使用價値を生産する許りでなくて、他人に取つての使用價値、社會的使用價値を生産しなければならぬ。」「勞働生産物は如何なる社會狀態の下に於ても使用對象たるものであるが、勞働生産物を變じて商品たらしむるものは、使用物の生産に支出せられた勞働を、その「對象的」性質、即ち其の價値として示すところの、歴史上の一定發達段階のみである。」と謂つてゐる。然るに人類犧牲の意味に解せられた價値法則は、苟も人類が勞働を支出して使用對象を生産するといふことがある以上は、如何なる社會にも行はるべき筈のものであるから、斯く解する時は、マルクスの商品價値法則は、商品なく、從て商品價値なき處にも其適用があるといふ不合理に陷らなければなるまい。エンゲルスは其「資本論第三卷に對する補遺」(Neue Zeit. Jahrg. XIV, 1, 1895) S. 33)に於てマルクスの價値法則が過去五六千年間に亘つて實際に行はれたことを言ふ中に之を一言で蔽へば、マルクスの價値法則は、總じて經濟法則が通用する限り、單なる商品生産の全時期に向つて、即ちそれが資本家的なる生産形態の出現により或る變改を蒙れる時代に至るまで、一般的に通用する。……だからマルクスの價値法則は、生産物を商品に轉化した交易なるものゝ始つた時代から、紀元後第十五世紀に至るまでの期間に向つて經濟上一般的な通用力を有するのだと」

（河上譯文に據る）と說いてゐるが、若し所謂價値は絕對的の費用の義に外ならぬものならば、其法則は過去及び將來の如何なる時代にも當てはまる。敢てその通用期間を生產物が商品に轉化する「交易なるもの﹅始まつた時代」以後に限る必要はないのである。

（十三）

併し右述の論に對して、商品の文字に拘泥するといふ非難があれば、數十步を讓つて、マルクスの所謂商品價値は實は生產物價値の義に外ならぬもので、價値法則は交換比率の如何、交換共者の有無如何に拘らず、何時如何なる社會にも通用するといふのが正にマルクス自身の本意だといふことを、議論の爲め姑らく認めても好い。たゞ價値法則を斯の如き意味に解釋すれば、斯る交易經濟の限界を超越せる法則からは、何等の現實的價格法則も演繹せられぬのであつて價値法則を基礎とする生產價格が何等の現實的意義を有せぬものとなるか、現實的意義ある生產價格說は價値法則に基礎を求めることが出來ないか、その孰れかでなくてはなるまい。マルクスの生產價格はスミス・リカルドオの自然價格と同樣に市場價格の旋廻中心をなすものとして說かれてゐるのであるから無論充分現實的意義を有するものと解せねばならぬ。而して既にエンゲルスは、資本論第二卷の序文中に、「啻に價値法則に抵觸せざるのみならず、否却て此法則を基礎にして平均利潤率が成立」すると謂ひ、マルクス自身も生產價格が究局價値に由て決定せらるゝことを力說してゐる。然らば價値は何故價格を決定すると謂ふことが出來るのか。

左表に示される通り、一商品の生產價格を直接構成するものは、費用價格と利潤とである。此場合の費用價格は單に人類全體の立場より見ての犧牲といふが如き漠然たるものではなくて、實際資本家が支拂ひたる出費を示すものでなく

てはならぬ。若し之を人類の犠牲と解して、第一表最終欄（第二表第五欄）の七〇、八一、九一等の數字は、單に生產上これ丈けの勞働量が投ぜられたことを示すに止まり、當該資本家は果して幾許の出費を負擔せるかを示すものでないとしたならば、又それを構成要素とする九二、一〇三、一一三等の生產價格も成立する譯には行かぬのである。然らば

第一表

資本	餘剰價値率	餘剰價値	利潤率	消耗不變資本	商品價値	費用價格
I 80c + 20v	100%	20	20%	50	90	70
II 70c + 30v	100%	30	30%	51	111	80
III 60c + 40v	100%	40	40%	51	131	91
IV 85c + 15v	100%	15	15%	40	70	55
V 95c + 5v	100%	5	5%	10	20	15

第二表

資本	餘剰價値	消耗不變資本	商品價値	費用價格	商品價格	利潤率	價値價格ノ差
I 80c + 20v	20	50	90	70	92	22%	+ 2
II 70c + 30v	30	51	110	81	103	22%	− 8
III 60c + 40v	40	51	131	91	113	22%	−18
IV 85c + 15v	15	40	70	55	77	22%	+ 7
V 95c + 5v	5	10	20	15	37	22%	+17

費用價格とは何であるか。それは賃銀即ち勞働力の價値と、消耗不變資本、即ち生產上に消耗せる原料機械道具等の價値との合計である。然し此等の價値が人類全體の立場より見ての費用額たるに止まり、實際資本家の出費を形成せぬ以上は、右表の如き生產價格が成立せぬこと右述の如くなりとすれば、生產價格を成立せしむる爲めには、（勞働力は

姑く措き）、原料機械道具等生産用の商品は價値額が即ち其の購入價格でなくてはならぬ。

（十四）

其處で斯う云ふ難問に逢着する。價値を超交易概念とすれば、生産價格との抵觸は免れ得る代りに、生産價格と價値との連繫は斷たれるし、費用價格が資本家の實支出額を意味するものとすれば、生産價格が價値に基づくの理は說明し得る代りに、一産業の生産物は生産價格で賣買されながら、之に用ゐらるる生産用具は其價値通り賣買されるといふことを想定しなければならぬのである。然るに生産用具も亦た資本主義的に生産せらるゝ商品である。それ故商品は其生産價格で賣買されるが、其爲めの生産用具は、其價値通りに賣買されるといふことは、畢竟商品は其價値通りに賣買せられ、且つ其價値通りに賣買せられぬといふの不合理に歸着する。例へば機械製造業の生産物（機械）は、マルクスに從へば、其の價値とは違つた生産價格で賣買される。併し他の産業の生産用具として之を見れば機械は其價値で賣れなくてはならぬのである。玆に於て機械は其の價値と一致するものと一致せぬものとの二個の價格で賣買せられざるを得ぬ。如何なる經濟學者も否認することなき「無差別の法則」「一物に二價なしの法則」(law of indifference) は玆に於て蹂躙せらるるのである。

略ぼ同じ事は勞働力の價値に就ても言ふことが出來る。前述の如く、生産價格は費用價格と平均利潤との加算に由て成立する。然るに上記第二表に就て云へば、平均利潤二二%は、第三欄數字の如き餘剩價値（二〇、三〇、四〇、一五、一五）が産出せらるゝことを條件として成立する。而して此等の余剩價値量は余剩價値率が一〇〇%で、而して勞働力の價値と賃銀とが一致する場合にのみ發生する。若し賃銀と勞働力價値額とが一致せぬ場合には、勞働費用の增減なきに拘

らず、賃銀率騰落の爲め、商品生産價格に變動を生じ得べきことは、リカルドオが其價値論中に説明する通りであるから、生産價格が獨り價値のみに依て決せらるゝことを主張せんが爲めには、勞働力は其價値通り賣買されることを想定しなければならぬのである。然るに勞働力の價値とは即ち勞働者生活必需品の價値に外ならぬ。そこで人は、生活必需品の價格は其價値から離反しながら、勞働力の價格は其價値に一致するといふ不都合か、或は食物衣服等の商品は生産價格で賣買せられ、同時にそれは勞働者生活必需品としては其價値通りに賣買されるといふ不合理か、その何れかを容認しなければならぬのである。それで結局資本論第三卷は、エンゲルスの豫告したやうに、「啻に價値法則と抵觸せざるのみならず、否却て此法則を基礎として」生産價格を説明することには遂に成功して居らぬといふ事に歸着する。價値法則を生産價格論と抵觸せぬやうに解釋することは、一應必ずしも不可能ではないが(マルクス解釋として其の承認すべからざること前述の如くなるは姑く措き、)然し斯く解釋せらるゝことに依つて、價値論は又價格論の基礎たる資格を失はざるを得ぬ。之に反し、價値論と價格論とを、其間に辿り得べき連鎖あるものたらしめようとすれば、二者は必ず相抵觸せざるを得ないのである。資本論第一卷に諸商品は其の含有勞働量に應じて相交換せらるゝ如く説かれてゐるのは、單に一の假定に過ぎぬと謂ふが如き、簡單なる解釋に由て此問題が解決せらるべきものでないことも、亦右述の論に由て明にせられたものと思ふ。此假定の上に構成せられた生産價格説を正しきものたらしめんとすれば、此假定も正しきものでなくてはならぬ。併し生産用具勞働力の價格が價値と一致するものと「假定」すれば、生産物は價値から離れた生産價格で賣買されるといふ主張を、假定と結論と兩つながら承認することは、商品は其價値通りに賣買されるものとすれば、それは其價値通りには賣買されぬといふことに歸着するであらう。それはAはAなりとすれば、非Aなりと謂ふに等しきものである。

以上の論に由て、予は決して勞働費用が交換比率に影響することを否認しようとするものではない。但し資本主義社會に於ては、勞働費用はそれが資本家の出資（expense）に現るゝ限りに於てのみ交換比率を左右する。而して資本家出資が勞働費用のみに依て決せらるゝは、賃銀が勞働費用を代表し、而して全放下資本中にあつて支出賃銀額の占める割合が均一なる場合にのみ限る。其以外の場合に於ては、勞働費用は交換比率を決定する一原因たるに過ぎぬのである。而して此意味でならば、勞働費用の自然價格正常價格を與かり決することを否認するものは、リカルドオ以後殆ど一人もないと謂つて好い。吾々は敢てカアル・マルクスを待つて始めて此理を解するものではないのである。（前掲拙著緒論參照）。

（十五）

前年予が河上博士と說を異にした時、名古屋高商の赤松要教授は、「マルクスの價値法則と平均利潤率との「矛盾」」と題する長論文を公にして、吾々二人の說に批評を加へられた（名古屋高等商業學校研究室編輯、商業經濟論叢二六一—三〇八頁）。其論斷は半ば河上博士に不利で、半ば私に不利なるものであつたが、私は教授の說明引證の丁寧該博なるとに服し、又拙稿に教授の指摘せられたやうな缺點の存してゐたことを承認するものである。教授が予に望まれたのは、予がマルクスの「小麥一クオタア＝鐵ｘツエントネルなる方程式から商品價値の本質を推究する方法は、其生產價格說と相容れぬと論斷するに當つて、「その立論を資本論第一卷第一章のみに求められず、少くも第一篇全部に亙つて求められたかつた事である」（二九四頁）。然かしたならば、私は一方に於て一層私の結論に有利なる證據を發見したと同時に、始めから「價格形態と價値形態との間に一の溝渠が設けられ、價格が價値より偏差し得る可能性ある事の明言されてある」といふ、私に不利なる事實をも發見したであらうと謂はれるのである。私は本論中に於て少しく此「偏差」の問題を論じ、マルクスの價値法則の立場から見て、如何なる「偏差」の許すべく、如何なる「偏差」の許すべからざるかを明にしようと試みた。若しこれに依て、教授の目に拙稿の缺陥が些か補はれたものと認められることを得れば、甚だ幸である。

失業と其對策

堀江歸一

一、世界的失業——失業者の定義——失業の弊害五個條——（一）貯蓄の減損、負債の増嵩——（二）全家の生活難——（三）精神上の打撃——（四）劣等なる職業に就く弊——（五）勞働力賣崩の弊、二、失業の原因——循環期的變動——産業の季節的變動——此原因より來る失業は事大ならず——失業の原因としての人的狀況——人的狀況の三種類、三、失業不可避説から失業輕視説——間歇的事業に於ける失業——失業救濟策——勞働組合——英國の實例——日本の現狀、四、失業保險制度——國家並に公共團體の事業促進——其功罪——職業紹介所問題——國立公立私立の別——職業紹介所の缺點——過剩勞働の處分策——失業者の海外移住——其我國に行はれざる所以、五、技術的救濟から根幹的救濟へ——經濟的循環期の過程に於ける調節——勞働權の確立——國民養老年金の制度、六、知識階級の失業者救濟——公私機關に於ける勤務時間の勵行——失業者無辜の説——解雇豫告命令の制定を必要とす

一

世界の經濟社會を通ずる不景氣の襲來と共に、失業は何れの國の勞働階級をも、又雇傭社會をも襲ひ、其勢の次第に猛烈ならんとするものがあり、諸國を擧げて、之に對する方策に忙殺される趣きの著しきことが認められる。日本に於ても亦大正九年三月の恐慌を一境界點として、經濟社會は好景氣時代から、不景氣時代に推移し、滿五年の歲月を送迎して、尙ほ不景氣の狀態を脫する能はず、失業は今や總ての階級を通じ、又一切の職業を擧げて、之に居る者を苦めて

已まない。何を以つて此問題を解決する對策とす可きものであらうか。學理と實際との兩方面に亙り、又諸外國と我國とを目標に置いて、失業問題に關する一部の研究を試みるのが本論の要旨である。

第一に私の明にしたいと思ふのは、失業者に關する正確なる意義である。世間往々にして無職業者と失業者とを同一視するの傾向があるが、失業者は決して單純なる無職業者と同一視すべきものではない。失業者を表面から見れば、其無職の狀態に苦むことに於て、無職者に異ならざるが如くであるが、無職業者の內には、失業者もあれば、勞働不能者もあり、又勞働不適者もある。無職業者の一たる失業者は勞働の意思を有し、又勞働に堪える素質を備へながら、自己の勞働力を適當に應用する職業を見出し得ざるものを云ふ。

勞働は神聖であると云はれる。而して勞働に從はんとする人の意思は尊敬す可きものであらうと考へられる。此意思の赴く所に依り、其人の希望を充さしめたならば、以つて一國に於ける富の生產に貢獻す可く、又其分配を公正ならしむ可く、啻に其人の生活を豐富ならしめるに止まらず、社會の全體に利益を與へることを疑ふを得ない。天が人に四肢を與へたのは、單に身體の外形を整へるが爲めではない、之を利用して、生活に必要なる資料を獲得し、其生存に價値あらしめんとするの意に外ならないであらう。果して然らば人が失業の狀態に陷り、其四肢をして用ゆるの道なからしめるが如き、天の意に反するの甚だしきものと云ふ可きである。

然らば失業には如何なる弊害が伴ふであらうか。弊害の第一は貯蓄の減損、負債の增加である。失業者が失業の後に、一家の生活を支持するに就て、取る方法は其人の境遇若しくは社會的地位に依つて、異なるものもあるが、大體に於て、貯蓄金ある者は之を費用するであらうし、貯蓄金なき者は自己の信用を盡し、他人に就て、負債を起すことを試みるであらう。二者の孰れを以つてしても、現に國民生產に供されて居る資本又は將來其れに供され可き資本を國民消

費に投じ、斯くて貨物の供給に減少を來すことを免かれないであらう。

第二、今日の社會組織に於ては、一家の家長が生計を支持し、全家の從屬者を扶養する責任を負ひ、時に從屬者中に勞働其他の職業に從事する者があるとしても、其所得は以つて一家の生活を補助する程度のものに過ぎないであらう。隨つて斯る家庭に於て、家長が失業したならば、全家生活の困難が忽にして殺到するのは、當然の成行であつて、生活難に伴う種々の弊害例へば健康の壞敗、教育の閑却、品性の墮落等は相次いで生ぜざるを得ない。第三の弊害は失業者の精神上に及ぼす打撃である。蓋し失業者の求めるものは職業であつて、然も之を得る能はずとすれば、煩悶焦燥を覺へることの大なるは勿論であつて、彼等を驅つて、自暴自棄に陷らしめるであらう。第四斯の如くして生活難に襲はれ、其苦痛の切迫する一方に、新なる職業の見出される望み乏しきや、失業者は如何なる劣等の職業であつても、自己を迎へる者があれば、之に就からうとする、而して一旦斯る職業に就いたならば、以前の職業に依つて收め得た勞働上の技術は減退し、他日の復業を困難ならしめる。第五殊に失業の弊害として最も恐る可きは、失業者の生活上に於ける窮境に乘じて、事業主が彼等を使役するに低廉なる賃銀を以つてすることであり、又失業者を使役するに低廉なる賃銀を以つてするを得ることは、自ら事業主の現に使役しつゝある勞働者に對して、賃銀の低減を强要する一種の强味たらざれば已まないであらう。賃銀の引上は勞働時間の短縮と共に、今日勞働者が勞働條件改善の方便として、最も重きを置く所であり、年來勞働運動の尊き犧牲に依つて改善された條件が失業者の爲めに、壞敗されることは、勞働者の忍ぶ能はざる所であつて、所謂勞働力賣崩の弊害と認められるものである。

二

然らば失業は何故に今日の經濟生活に發生し、恰も人事生活に於て、疾病の避けられざるが如くに、經濟社會も亦失業の襲ふ所と爲るのであるか。私は失業の原因を區別して、第一經濟上に於ける循環期的變動、第二個々の事業に於ける季節的變動、第三勞働者の人的狀況に於ける變動の三者に區別したいと思ふ。今日の經濟社會が確に循環期的變動に支配されて、常に其間に種々の異動を蒙つて居ることは、疑を挿む可からざる所である。此事が果して資本主義的經濟に伴ふ特徴の一つであつて、社會主義的經濟の下に於て、能く之を除却するを得るに至ること、社會主義者の說明する所の如くであるかどうかの問題に就ては、姑く之に觸れない。唯今日の經濟生活に於て、循環期的變動の存することは、爭ふ可からざる事實であつて、例へば或る國に於て、經濟社會が頗る順調に發展し、商工業を始め、諸種の產業が盡く繁昌して、活氣を呈したとする。利潤の獲得を事業の一大眼目とする現在の經濟組織に於て、斯る場合に際會して、何事が起るかと考へれば、資本家の事業に對する過度の資本放下に依る斯業の一大膨脹と云ふことに外ならない。斯る事業の膨脹に依つて、增産された物資が果して確實なる販路を占め得るかどうか、將た又事業其ものが將來健全なる發達を遂げ得るかどうかと云ふことに就ては、何等の成算を有せず、一意目前の利益を獲得する目的を以つて、事業を計畫する。其計畫が順調に進行しつゝある間は、甚だ可なりとするを得るが、事業に漸く投機的風潮を帶び來る一方に、資金融通の道に頓挫を招いたり、或は有價證券市場に變動を生じたりして、人心に疑惧の念を催さしめるに至つたたらば、右の如き空中に樓閣を築いた如き事業は忽にして崩壞すると共に、累を金融市場や、金融機關に及ぼして、恐慌の襲來に接せざるを得ない。恐慌襲來後の經濟的現象は不景氣の狀態であつて、經濟社會は滿目荒涼たる趣きを生じ、産業に何等活氣の見る可きものなく、個人生活亦慘憺たるものあるを免かれないであらう。然しながら不景氣時代に於て、右の如き狀態の下に、國民經濟が營まれたならば、必ず整理緊縮と云ふことが經濟の目標となり、個人の生活

に緊縮の加へらるると共に、公私團體の生活には、整理が施され、其結果として生ずるものは、物價の低落であり、金利の低下でなければならない。不景氣時代には、物價並に金利の低下することが動かす可からざる事實となるのであつて、兩者の間には、正に因果關係の密接なるものありと云へる。而して此事が同時に經濟社會を不景氣から、好景氣に導く所以であることを知らなければならない。即ち不景氣時代に行はれる整理緊縮は其事業界に及ぶものと、個人生活に亙るものとを問はず、必ず國民資本の增殖する勢を助ける、此資本が物價の低落に依つて、新に減縮された生產費を基礎とする計算の下に、諸種の事業に適用されて、事業の振興を刺戟し、振興された事業の產出する物資は生產費の低廉に依つて、價格が低く、自ら外國に對する販路を擴張して、輸出貿易を伸張し、益々內國產業に對する刺戟を強く、勞力物資に對する需要亦增進して、好景氣の利益は廣く社會に普及されるのである。

若しも一國の經濟社會が斯く景氣を恢復して、好景氣に為つた場合に、當業者が飽くまでも好景氣の狀態を持續し、之に伴ふ利益を滿喫するに止め、此以上に投機熱を煽揚する方嚮に向つては、一步をも踏み出さないと云ふ自制心を持つて居つたならば、當業者の為めにも、經濟社會の為めにも、喜ぶ可き次第であるが、今日の如き自由競爭に依る利益の獲得を基調とした經濟組織に於ては、斯る自制心の發揮に基く經濟社會の調節は到底望み能はざる所であつて、一人が營利獲得の為めに、事業を擴張すれば、他の一人も亦之に傚ひ、結局社會全體に投機熱を昂進せしめ、遂に恐慌の突發を見ざれば已まざること、前論の如くである。

即ち經濟的循環期說の教へる所を以つてすれば、一國の經濟社會は（一）產業の發展、好景氣、（二）投機熱勃興、之に次ぐ恐慌、（三）恐慌後の不景氣、之に伴ふ整理を經て、景氣の恢復と云ふ順序を履んで、常に其趨勢に變轉を見るものであつて、而して第三期の不景氣並に整理時代に於ては、諸種の事業の收縮する為めに、勞働使傭の減縮するのは勿

論であつて、又其減縮する爲めに、整理が行はれる。此場合に失業の生ずることは、已むを得ざる所であつて、第三期の終りから、第一期に移るまで、此事實の生ずることは、避け難き所に屬するのである。而して一國の經濟社會は殆ど其全體を擧げて、經濟的循環期の下に、不景氣の影響を蒙るに於ては、失業亦諸種の事業を通じて、全國的に發生せざるを得ざる道理であつて、失業に對する政策を案出するの困難も亦此處に存せざるを得ないのである。

失業を惹起す第二の原因である事業の季節的變動に對しては、必ずしも之を重大視するに値しない。蓋し如何なる事業に於ても、天候又は物資の需要を伴する國民的習慣若しくは特殊の事情に依つて、或は時期に於ては、非常に繁忙であつて、勞多數の勞働者を雇傭しなければならないが、其時期を經過すれば、著しく閑散と爲り、從に雇入れた勞働者を解雇する必要を生じ、其間に失業者の生ずることを免かれない。英吉利、獨逸の如く冬季に臨んで、氣候寒冷の爲めに、煉化石積に不可と爲るや、建築業閑散を告げて、斯業に從事する勞働者の多數をして失業せしめるが如き、耶蘇降誕祭の直前に於て繁忙を極める糖果製造業が祭日後遽に業務に縮小を來し、失業者を生ずるが如き、又之を事例に就て云へば、靜岡縣、京都府等の製茶業地方に於て、製茶季節前に於て、多數の茶摘女を需要し、續いて男工を需要するが、其れ等の需要たる、一年中に於ける短小の期間に止まるが如き、群馬縣長野縣等に於ける製絲工女の集散にも亦同樣の事情あるが如き、何れも勞働に對する需要に季節的變動があり、其季節の經過に依つて、失業者の簇生を見る事實を示すものならざるはない。唯此種の失業に對して、其第一の原因に基く失業に對する程に、之を重要視するを要しないのは、季節の到來が當事者の豫期する所に屬し、失業者に取つて、必ずしも突發的事實を以つて、目す可きものではない。隨つて勞働者にして多少の智慮を備へて居る者である以上は、業務の繁忙である時に、之を利用して、出來るだけ高額の賃銀を獲得し、以つて他の失業期に備へるの方法に出でるであらうし、又自己本來の職業の閑散である時を選

んで、所得を補足する考への下に、或る季節的事業に從事する場合には、季節の經過と共に、職業を失つたとした所で、勞働者に取つて、必ずしも大なる迷惑としないであらう。

失業を惹起する第三の原因は勞働者の人的狀況であつて、之に該當する幾多の場合が想像される。即ち勞働に對する需要の性質に變動を生じた場合に勞働者の方に於て之に適應する融通性に缺けて居つたならば、從來の需要に應じて居つた勞働者は直に失業者と爲る。人力車の流行に依つて、駕籠屋が職を失つたり、自動車の普及に依つて、人力車夫が失業者となつたりするが如き、將た又汽車の開通に依つて、驛路に於ける旅宿茶店等が衰微して、從業者が路頭に迷ふが如き何れも此適例であつて、斯る場合には、新しき職業に對する補導敎習の道を設け、以前の仕事に從つた者をして圓滑に新職業に移らしめる道を設けることが失業對策として、最も重要のものと考へられる。第二に人的狀況に依つて、失業者と爲る原因としては、當業者の老齢と爲つたことが擧げられる。蓋し壯年時に於ては、充分の體力を以つて、勞働上の能率を擧げるを得るし、聊か年齒の加はつた後に於ても、體力の衰へを補ふに、熟練の增進を以つてし、勞働上に依然たる高き地位を占めるを得るとしても、其愈々老衰期に達した曉には、到底從來の地位を守るを得ず、失業者として殘生を送らなければならないことゝ爲るであらう。失業者として彼等を遇する場合には、老人に適する職業を授ける工夫を講ずることを要するし、其れとも勞働上の老朽者として、彼等に他の道を以つて、保護を與へるかと云ふことに就て、自ら議論なきを得ない。之と同時に人的狀況から、失業者の輩出する原因として、吾人の攻究を要するのは、少年少女の所謂早時就業に於ける利害の關係である。蓋し今日文明國産業界に於ける一の特徴は法律の制限の存せざる限り産業の經營者は弱齢の者を驅つて、事業に雇傭しようとする一方に、弱齢の兒女を擁する家長は生活の必要に壓迫されて、彼等を職業に就かしめようとする一事である。國家は工場法を以つて、少年少女の就業年齢を限定し、單に國民健

康の保全又は改進に伴う必要に基くのみならず、國民教育完成の見地に於て、右の年齢を高くすることを期して、已まないし、時勢の進歩は工場法の適用される範圍を擴張して、制限的立法の効果を發揚することに勉めるのであるが、尙ほ一國には工場法の適用される工場以外に、少年少女の使役される廣き餘地があり、工場に於ける彼等の使傭の制限されると共に、工場外に於ける使傭の道の開かれるもの、頗る多きを加へた。殊に其著しきものは戸外若しくは街上の勞働であつて、倫敦市に就て云へば、花賣り、電信配達の如き我國に就て云へば、夕刊賣りの如き、何れも少年少女の殆ど專門に從事する仕事であるやうに見受けられる　而して是等仕事の元締たり、親方たる者が何故に特に少年少女を雇傭するかと云へば、其重なる理由は少年少女の賃金低廉であつて、彼等を使役することの營業費節約の有力なる方法である事情に歸着するものである。賃金のものたる、其高低を決定するに就て、種々の事情を存するが、就中當事者の年齢、其强弱に基く生活上の欲求の多大の如き決定の一廉要素に充てられるのであつて、少年少女が生活上に要求する所少なければこそ、低廉なる賃金にも安んずるが、年齢長じて、要求する所の大なるに至らんか、其從事する仕事は以前と同一であるとしても、必ず高率の賃金を獲得することを欲して已まないであらう。然も使用者が從來彼等を使役した唯一の理由にして、賃金の低廉なるとに存した以上は、今彼等が年齢の長じた故を以つて、增給を要求するに至つたならば、斯る輩は自家の欲する勞働者に非ずとして、遠慮會釋なく彼等を罷免し代らるに彼等よりも年少であつて、隨つて低廉なる賃金に滿足する者を雇傭するに憚らないであらう。事業主が資本主義的精神を以つて、從業者に臨む以上は、其爲す所の斯の如くであるは、疑を容れないとして、一方に斯く聊か年齢の長じた故を以つて、罷免されたる少年少女の將來は如何なるものであらうか。少年少女時代を街頭の仕事に費して、身に備はれる何等技術上の熟練もなければ、身體上の鍛錬もなく、年齢の長じた儘の狀態で、一般勞働市場に出でゝ、職を求めたとした所で、如何なる職業か彼

等を待つて居るであらうか。彼等の就くを得る者は不熟練職業あるのみであつて、其何人にも從事し得らるゝ故を以つて、賃金の低廉であるは勿論、競爭の劇烈である爲めに、失業に陷る機會亦多いとすれば、少年少女の早時就業と云ふことが失業の一原因として、重要なるものであるや、論を俟たない。諸外國に於て、失業對策の一として、少年少女の街上勞働に對する制限の次第に嚴重ならんとする趨勢の認められるのも、亦偶然でありとしないのである。

三

失業救濟策を論ずるに先だつて、一言す可きは、從來の經濟學に於て、失業問題が兎角學者に依つて、閑却され、隨つて救濟策の如き、稍もすれば輕く取扱はれる氣味のあつたことである。思ふに此事たる、失業を以つて、人體に疾病の避け難きが如く、經濟社會と云ふ一個の個體に發生する疾病であるとする考へに出でたもの丶如くであり、又更に賃銀高低の差別に關する學說から、生れ出された考へに基いたと見ることも出來る。前者の如きは、餘りに經濟社會に於ける自然の働きに重きを置いて、之に對する政策の價値を蔑視したものと云はざるを得ない。失業の發生にして、已むを得ざるものであるとしても、尙ほ經濟政策の立て方に依つては、其起ることを制限し、起つた後の影響を抑制し得ることを認めなければならない。後者はアダム、スミスが職業の性質から生ずる賃銀の不平等を說明するに當り、其一原因として、就業の定時性と不定時性と云ふことを擧げて以來、間歇的事業に於ては、其就業の不定である故を以つて、却つて賃銀の高いと云ふ事實が信ぜられるやうであるが、賃銀の高低は決して斯る簡單なる事柄のみに依つて、決定されるものではない。天分の豐なる藝術家の技藝の如きに至つては、一年幾回かの演出に依つて、一年分の生活に必要なる報酬を獲得する場合もあるが、一般勞働界の事情に就て見れば、間歇的事業は性質上粗雜なるを常とし、之に從事す

る者は概して不熟練勞働者であつて、仕事の間歇的である其上に、賃銀の低廉である場合の多々あることを見受ける。倫敦紐育等の港灣に於ける仲仕、波止場人足の如き、我國に於ける土方、立ン坊の如き、前者は船舶碇繋並に荷揚の狀況に依り、後者は天候の良否に依り、仕事の間歇的なることを免かれざるものであつて、一方に其賃銀は仕事其ものゝ粗雑であることの故を以つて、低廉を極める。倫敦に於て斯る一時的勞働者を如何にしたならば、永久的のものたらしめるかゞ常に重大なる勞働問題であり(Decasualization of Casual Laborer)又日本の俗諺に「土方殺すにや、刄物は入らぬ、雨の三日も降れば好い」と云はれるが如き、誠に彼等の勞働の性質を語るものであつて、自ら失業問題の閑却す可からず、又放任す可からざる所以を明にするを得ると考へられる。

然らば吾人は如何なる途に失業對策を求めるであらうか。國家の施設を求めるに先だつて、勞働者又は失業者自身の力に依つて、適當なる對策が求められたならば、勞働問題の解決上、此上もなき好都合であつて、而して私は其方便として勞働組合の働きを推したいと思ふ。蓋し勞働組合の職務として、吾人の重要視す可きものは少なしとしないが、就中失業問題に關係を有するは、所謂失業惠與金の制度であつて、組合は平生組合員から定額の醵金を徴收さると共に、其組合員が失業の厄に罹つた場合には、失業期間の長短に應じて、失業惠與金として、若干の金額を其人に交付し、以つて生活を維持するの資料たらしめるのである。蓋し失業者の生じた場合に、勞働組合の最も憂うる所は失業者が失業の苦痛に堪へずして、如何に低廉なる賃銀であつても、之に甘んじて就業するようなことがあつたならば、啻に其人に取つて、不利益であるのみならず、勞働組合の維持せんと欲して、已まざる標準賃銀の制度を打破し、其程度を降下せしめる危險を作う、勞働組合が組合員中の失業者に對して、失業惠與金を給與し、彼等の勞働力賣崩を爲す弊を防止することは、勞働組合自ら標準賃銀を維持して、組合自身を救う所以であり、隨つて組合も亦失業惠與金の負擔の増加し

て、組合の財政の紊亂することを恐れ、負擔輕減の方法として、組合員の失業者の爲めに、職業紹介の手段を取り、本支部聯合して、授職の道を講ずるのである。若し其れ戰爭其他の事變に臨んで、多數の失業者を生じ、組合の失業惠與金支出高增加して、組合の財政危殆に瀕するや、國家は組合に若干の補助金を下付して、失業惠與金の財政を援護し、以つて失業救濟に遺漏なからしめることを期する。國家が勞働組合を利用して、最も簡單に、又確實に失業救濟の行はれる次第であつて、現に英國の如き歐洲戰爭に際し、一方に勞働組合に向つて、其組合員から徵收する醵金を增加することを條件として、他の一方に組合が組合員に交付する失業惠與金の一部を國家に於て補給する制度を設け、以つて勞働組合を通じて、失業者を救濟した事實がある。

我國の如き從來法制上に於て、將た又行政上に於て、勞働組合を壓迫し、又之を公認せず、幾多の虐遇を試みて、其發達を妨げて居る場合には、如何に失業が甚しき程度に上つたとしても、勞働組合を利用して、之を救濟することは、不可能事に屬する。勞働組合の公認は我國年來の問題であつて、其公認されざる現狀に比較して、公認の後に於て、多少組合の發達を助長することは疑を容れない。此點に於て、勞働組合法の制定は緊喫事であるに拘はらず、政府は此立法を閑却し、一方に治安警察法の規定を其嚴峻なる儘に置いて、勞働組合の發達を沮害しようとする。我國に於て、勞働組合を利用して、失業問題を解決するが如き、將來は兎に角、現狀に於ては、全然架空の事に屬する。

四

失業保險制度の制定は勞働組合の力の足らざる所若しくは其效果の及ばざる所を補つて、失業者を救濟する效果を持つ。蓋し勞働組合は或る標準を定め、之に相當する勞働能率を有する者に限つて、組合員たらしむるが故に、其性質に

於て、制限的であることは、已むを得ざる所であつて、其效果亦組合員の享受する所に止まる。是れは勞働組合の性質上、當然でありと考へられるが、更に勞働組合に代り、廣く失業者に對して、失業患與金に類する補助を與へるには、失業保險の制度を採用することを以て、最も有效とするのであつて、殊に國家が保險料の一部分を負擔し、勞働者に對して、加入を強制する場合には、其效果は自ら廣く一般に及ぶを得るのである。唯我國の如き勞働保險制度の存在しない國に於ては、失業保險に如何なる效果があつても、之に依つて何等の利益を收めるを得ないことを遺憾とする。

右に述べた失業救濟策は要するに失業者を失業の儘の狀態に置き、單に彼等の生活に或る程度の安定を與へようとするに止まる。斯の如きは失業救濟の上乘を得たるものと見るを得ない、其完璧を期するには、更に一步を進め、失業者に授職の道を與へる工風がなければならない。此目的の下に行はれる失業救濟策の一ツは國家幷に公共團體に於て、其豫定せる事業の完成期を短縮し、豫定以上に多數の勞働者を使役して、以つて失業者の跡を絕たうとすることが計畫される。然しながら此計畫には大なる二個の缺陷が伴ふ。第一失業者の發生する時は槪して經濟社會不景氣の場合であり、此際には一日も早く此不振の狀態を挽回することが國民經濟全體の利害から云つて、急務とする所であり、之に應ずるには、財政に於ても亦緊縮を旨としなければならない。其際に殊更に財政を膨張して、事業關係の經費を增加せしめるが如き、以上の要求に反するの嫌なきを得ない。第二段に不景氣時代に於て、中央又は地方財政の經費に膨張を來し、事業の規模が擴張されたとした所で、其事業に於て需要する勞働者の種類は槪して粗雜なるものであつて、必ずしも熟練勞働を以て見る可きものではない。機械、製鐵製鋼の如き最も大なる熟練を要し、又之を備へた勞働者として斯る粗雜なる仕事に就かしめた結果は如何であらうか。假令ひ衣食の必要を充す所得は之を收めるとしても、一方に勞働上の熟練を毀傷し、喪失し、他日以前の仕事に復歸することを困難ならしめざるを得ない。一地方の狹隘なる區

域に於ては、或は之を以つて失業救濟策に充てるを得るかも知れないが、廣き範圍に亘つて、效果を期待することは、甚だしく困難であると考へられる。

玆に於てか職業紹介所の制度を完全にし、廣き範圍に亘つて、勞働に對する需要と其供給とを調節する計畫が行はれる。職業紹介所には國立、公立、私立三者の別があるが、私立紹介所の弊害多くして、利益の少なきことは、嘗に日本に於て然るのみならず、諸外國に於ても著明の事實に屬する。公立紹介所亦其職能の行はれる行政區域の狹隘である爲めに、充分の効果を發揮するを得ない。斯くて職業紹介所の形態としては、國立を以つて正當なるものとする。蓋し國立の下に、其職能を全國的にし、國費を以つて、之を維持することの結果求職者にも、求人者にも、無手數料を以つて、其求める所に應じ、殊に前者をして職業搜索上に於ける費用并に手數を省約し、職業に於ける需要と供給とを調節せしめるを得るからである。加ふるに職業紹介所の制度が或る程度まで、其事務の擔任者に適當の人を得たならば、(一)求職勞働者に對して、其適性を發見し、之を發揚し得られる種類の職業に彼等を誘ふを得る、(二)少年少女の爲めには、其紹介に係る職業に就いて後の狀態を調査攻究して、將來の發展に關する勸告を與へるを得るし、(三)遠隔なる地方に存する職業に就かんとする者に對しては、紹介所監督の下に、旅費前貸の制度を設け、勞働の地方的移動を行ふを難しとしない。

斯の如く職業紹介所には、大なる利益の伴ふものがある。私の如き千九百九年英國に於て國立職業紹介所の制度が起るや、其前獨逸の諸都市に起された市立紹介所の制度と共に、之を我國に紹介し、其設立の急を唱へて已まなかつた。其後我國にも中央地方に職業紹介所起り、近年に於ては、社會局の管轄に屬する紹介所の設立に接するが、失業問題の解決に就て、幾何の効果が期待されるであらうか。本來職業紹介所の缺陷とする所は如何に其れが懸命の努力を以つて、紹

されたとしても、無より有を生ぜしめる能はざる點に存する。換言すれば職業紹介所の職能として、望を屬せしめられるは、全國の一地方に餘れる勞働者を其足らざる所に送遣して、以つて需給の調節を謀らうとする一事に外ならないが、經濟社會に於ける循環期的變動にした所で、同一種類の事業には、全國一齊に不景氣の起ることを常とするのであつて、隨つて右に述べるが如き、勞働の移動の行はれることは、至難であると考へられる。然らば異種の事業の間に於て、勞働の移動の行はれることは、果して實際に之を望み得るであらうか。京阪其他の大都會に於て、工業の疲憊した場合に、北海道の漁業水産業は存外繁昌して居ることがあらうし、又都會の工業の隆盛なる場合に、地方の農業が衰微しつゝあるとがあらう。然も今日の如く勞働に特殊の技能發達して居る以上は、右の如き性質の異なつた事業の間に於て、勞働の轉換を期することは、職業紹介所の職能を以つてしても、困難であつて、寧ろ不可能事とするを當れりとするであらう。

然らば右に述べた諸方策の下に勞働に對する需要を增加することも、失業對策の一たるを失はないが、此反對に勞働の供給其のものを減少し、所謂過剩勞働を處分することも、亦其對策であると考へられる。先年英國に於て失業者增加して、其大都會に彷徨流浪し、爲めに都會の生活並に治安に有害なる影響を及ぼすや、之に對する方策として、政府は地方自治體と協力して、地方に勞働殖民地を開設し、都會の失業者を此所に移して、農業、牧畜、園藝等の諸事業に從はしめ、彼等に授職すると共に、多年都會に生活して、困憊した身心を休養せしめることゝし、大體に於て良好の成績を收めるを得たが、更に同一の趣意を擴張して、加奈陀に多數の失業者を移住民として送遣し、彼等をして生活の別天地を此所に開かしめることゝした事例がある。此等は何れも勞働の供給を減縮して、失業問題を解決したものと稱するを得るのであつて、殊に外國に移住民として彼等を送遣するが如き、最も有效の方策であると云へる。然しながら此事たる、偶々英國に於て成效したと云ふだけの話であつて、之を我國に移さうとした所で、果して幾何の效果が收められ

るであらうか、一個の疑問に屬する。蓋し失業者を他國に送遣する場合に、如何なる國を其目標とするかと云へば、其國は失業者の現に居住する國よりも、國民の生活程度高く、加ふるに勞働の能率の充分に發揚される所たるを要する。如何に失業者が生活に窮したからと云つて、現在よりも生活程度の低い國に赴いて、劇烈なる生存競爭の渦中に投ずるのは、彼等の能くする所ではない。然も英國の如く、加奈陀と云ふ殖民地を管轄下に持つて居ればこそ、生活程度の高き所に失業者を送遣して、失業問題の解決に資するを得るようなもの丶、日本の如く自國に比較して、生活程度の高きに居る國からは、何れも移住民入國拒絶を受けつ丶ある狀態であつたならば、如何に失業問題解決の急を訴へて居るとした所で、移住民の外國送遣を以つて、其方便とするを得ないのは、事情已むを得さる次第であつて、我國經濟上の方面に於ける立國の困難は圖らずも此點に於て、暴露された觀なきを得ないのである。

五

以上列擧記述した失業救濟策の如き、救濟の效果に於て、多少の見る可きものありとしても、要するに技術的手段たるに止まる。今日の如き複雜なる經濟社會に處して、失業救濟の效果を擧げようとするには、斯る技術的施設のみを以つて、滿足せず、更に事の根本に互つて、施設する所なければならない。即ち私の認めて、より大なる失業救濟策と稱するものは、之に當るのであつて、此種の工風に就て、特に我國に於て、其缺如して居ることを遺憾とする。左に其重なる施設を列擧する。

第一、經濟的循環期の過程を圓滑ならしめること。之は我國の實際問題に就て考へると、我國に於て恐慌の起つたのは、大正九年三月であつて、爾來經濟社會が其打擊を蒙つて居るものとすれば、不景氣の續くこと、今日に至つて、滿

五年の久しきに亘るものと云はなければならない。此間經濟社會には多少の波瀾起伏の伴ふことは、之を免かれなかつたとしても、尙ほ不景氣の下に、常に沈衰の狀況に居り、其結果として失業の如きは次第に其勢の酷烈を加へ、遂に今日の程度に及んだことは、爭ふ可からざる事實に屬する。然らば今日の如く我國に於て、失業問題の酷烈なる勢に赴いたのは、我國の經濟政策に大なる誤りがあつて、普通の過程に於て、經濟的循環期の推移し、運行することを妨げ、不景氣の時期をして特に五年の久しきに亘らしめ、今後に於て尙ほ之を脫する望みなからしめることに歸着するのである。諸外國の事例に徵するも、經濟的循環期に於ける一の季節が五年の久しきに及ぶと云ふが如きは、殆ど前代未聞の珍事であつて、永くも三年內外の日子を經過すれば、一の季節から、他の季節に移ることを常とし、隨つて三年內外の時期に於ける不景氣、之に伴ふ失業難であれば、其以前の好景氣時代に於ける國民的繁榮の餘力を以つて、之に當るを得る道理であるが、我國の如く五年以上に及ぶ不景氣に至つては、遂に總てのものを倒壞する危險を惹起すのである。而して斯く我國に於て經濟的循環期の常道を逸する程度に於て、又時期に亘つて、不景氣の繼續するのは、要するに第一好景氣時代に於て、政府が其勢を刺戟し、煽揚する勢、强きに過ぎ、爲めに恐慌後に生ずる反動を大ならしめたこと、第二不景氣時代に臨んで、不景氣時代と調和する程度に財政を緊縮せず、依然として之を放漫なる狀態に居らしめたことの二點に歸す可きであつて、失業問題の解決——少なくとも失業の繼續する期間を短縮するには、經濟的循環期の推移をして、其正しきに就かしめることを必要とするのである。

第二、勞働權を確立すること。本論の劈頭に於て論じた如く、失業者は勞働の意思を有し、之に從ふ資質を備へながら、尙ほ勞働の道に就く能はざる者である。斯る人を失業の狀態に置き、其國民生產上に貢獻するを得る力を無用無爲たらしめるが如き、要するに現在の經濟組織に何等か缺陷の存する結果であつて、國家は此缺陷を充す目的の下に、國

家の力を以つて、斯る勞働者に適當の職業を授けることを工風し、職業を授けるを得ない場合には、其人が或る職業を通じて、獲得するを得るだけの所得を國家から給與して、以つて其生活を保障することゝする。是れが即ち勞働權の確立と稱されるものであつて、失業問題解決の捷徑であると云はなければならない。

第三、國民養老年金制の制定。今日我國に於て、文武官吏に對して行はれる恩給制度は一種の養老年金制と見ることも出來るが、本來の性質は官吏の現職中に於て、給與す可くして、、給與しなかつた俸給の一部分を退職後に給與するものに外ならない。其官吏と云ふ階級の生活に多少の安定を與へる効果のあることは、實際の事實に依つて、證明される。然も其効果は限られたものであり、又其及ぶ所も大なりとするを得ない。全然文武官吏と爲らなかつた者や、官吏と爲つても、恩給受領の年限に達するまで、勤務しなかつた者の如きは、恩給制度に對して、全然門外漢たらざるを得ない。然して廣く社會全體の狀勢を眺めるに、其方面の何たるを問はず、人が二十年三十年或は全生涯を通じて、或る職業に從事して居るとすれば、其間に於ける一國の富の生産たり、増殖なりに貢献し、國民的繁榮に寄與することの少なからざるものと認めなければならない。而して其人が壯年時代の勞働を通じて得た所得の一部を蓄積して、老年時代の生活を支持するを得ず、壯年の際には、相當の職業に就き、之に對する所得を收めながら、老齢の加はるに隨つて、次第に所得の乏しき職業に就き、結局如何なる職業にも就く能はざる悲境に陷りながら、一方に何等の財産なく、貯蓄なき境涯に居ると云ふが如きに至つては、其原因は之を何れに歸す可きであらうか。今日の經濟組織に於ける競爭が餘りに自由であり、酷烈である其上に、、資本主義の跋扈する弊甚だしく、勞働者をして其生産上に貢献する所に相當する報酬を獲得する能はざらしめる一事こそ、斯る悲慘事の出現する所以であると解される。國民養老年金制度は國家の力に依頼して、一部の國民が壯年時に獲得す可くして、獲得するを得なかつた所得を年金の形態に於て、補償せ

しめようとするものであつて、老齢の爲めに、勞働能力不能となり、永久的に失業の狀態に陷らんとする者の生活を保障し、救濟の効果を擧げるには、此方法に依賴することを以つて、最も正しきを得たものとするのである。

六

以上論じたものゝ内、所謂知識階級の失業者に對して、適用される議論や、政策も多少はあるが、私の議論は專ら筋肉勞働者を對象とした。今本節に於て、知識階級の失業者を救濟するに就て、如何なる方策を行ふ可きものであるかの問題を考へたい。

救濟策の第一は官廳、銀行會社等に於て、事務を成る可く多數の人に均分する方法を講ずることである。今日其等公私の機關に於て、事務の繁忙を告げるや、所謂早出居殘りの制を設け、從來の定員を長時間に亙つて、勤務せしめ、若干の手當を與へて、其勞に酬ゆるのであるが、斯の如きは要するに失業者を釀成する源となる。若しも官公吏員を始め銀行會社員等が勤務時間を格守し、一定の時間以外に亙る勤務には服しないと云ふ方法を取つたならば、公私機關に於て、事務の繁忙なる場合には、必ず臨時に人員を雇ひ入れて、其他位を充さしむる可からざることゝ爲り、自ら失業者の救濟と爲るのみならず、更に現在勤務員の時間を勵行することが明瞭であつたならば、當初から或る機會に於て、繁忙と成る事務に當らしめる爲めに、定員を增加して置く必要を生じ、此點から失業者の生ずることを防ぎ得る道理である。勞働組合に於ては、組合員中に失業者の生ずることを防ぐ爲めに、勞働時間の規定を勵行するのは勿論、更に進んで失業者の簇生する場合には、時間を短縮し、短縮された時間に於て、成る可く多數の勞働者に勞働する餘裕あらしめることを期するのである。故に私は知識階級に屬する人々の間に於て、失業を防ぎ、又其打擊を避けようとするには、

せしめ彼等の間に連絡を設け、勤務時間を制限勵行し、規定外の時間に對しては、別に雇傭される人をして之に當らしめ、又過に斯る人を雇傭する必要なからしめる爲めに、平生から定員を増加し置くこと、の諸方針を以つて、臨むことの急務なるを信ずるのである。

第二に知識階級の失業を救濟する爲めに、私の必要とする所は國家の一制度として、解雇手當給付の制定されることである。蓋し今日經濟社會に變動が起り、或は好景氣と爲り、或は不景氣と爲り、波瀾の相重なることは、現在の組織に於て、已むを得ざる所に屬する。唯此波瀾起伏に處して、國家財政の擔當者なり、商工業の經營者なりが爲す所宜しきを得たならば、失業の如きも、或る程度まで、之を緩和し、輕減し得る道理であるが、實際に行はれる所は、斯の如く爲るを得ない。例へば經濟社會の繁榮時代に會するや、國家は其財政を一時の好景氣に乘じて、飽くまでも之を膨脹して、抑制する所を知らない、而して一旦經濟社會に不景氣の勢を生ずるや、斯の如く人爲的に膨脹し來つた財政は到底維持され可き道理はなく、急激に整理を行うことを必要とする結果、遂に人員の整理淘汰を行はざる可からざることゝなり、不景氣の最中に於て、失業者の續出を已むを得ざる事實とする。即ち積極政策の絶頂から、消極政策の深淵に落下するが如き勢を以つて、一國の經濟財政策が律せられることゝなつたならば、其間に多數失業者の續出するのは、當然の勢であり、而して斯る失業者は財政策に於ける急劇なる變更の犧牲となつた者であつて、本人には何等責任の負う可きものゝないに拘はらず、罷免解傭の憂目を見るが如き、社會的不公正の甚だしきものと云はざるを得ない。

銀行會社其他商工業の從業者に就て、之を見ても亦同樣の議論が主張される。我國實業界に於ける弊風の一ツは實業家に經濟社會の前途を豫測して、之に備へるの明察と戒愼とを缺くことであつて、一旦經濟社會の好景氣に逢するや、彼等は殆ど有頂天の有樣と爲つて、事業を擴張し、斯くて獲得した利益金は配當金賞與金等の形態に於て、多く自他の間に分配し、會社なり、手元なりに之を留保して、以つて他日の計をなすの用意に缺けて居る。隨つて一朝經濟社會に反動的機運を生ずるや、右の用意に缺けた事業に限つて、經營難に陷り、之に當る爲めに、告記事務員を解傭して、以つて營業費を節約せざる可からざるに至るのである。經營者の將來に關する方針宜しきを得ず、好景氣時代に、他日當

然到來する不景氣に處する準備を閑却し、不景氣時代に、事業を窮地に陷らしめたものであるとすれば、重役の如き經營の衝に當る者こそ、眞の責任者であつて、自己の俸給を減ずるなり、私財を提供するなりして、難局を踰越する道を打開す可き道理であるのに、斯る公正なる手段は之を試みず、罷免解雇等單に弱者に壓迫を加へて、以て自家の責任を抹殺し去らうとする。我國の知識階級に於て、失業問題の特に喧しきに至るもの、亦怪むに足らないのである。

知識階級に屬する人々に加へられる右の不公正を除却し、彼等をして公正なる地位に居らしめるには、國家に於て、解雇猶豫令なるものを制定して、彼等を保護するの道に出でなければならない。被傭者の所業に重大なる過失あり、又心身に容易ならざる缺陷を生じたりした場合に於ては兎に角、斯る過失の存せざる場合に、雇傭者の都合に依つて、解雇するには、第一解雇に先だち、半年又は一年前の豫告を與へ、本人をして他に職業を搜索するの餘裕あらしめること、第二解雇後一定の期間在職當時に於けると同額の俸給を支給し、而して其期間は在職年限の長短に依つて、決定することの二點を以つて、解雇猶豫令の骨子としなければならない。我國に於て民間事業家が書記事務員を雇入れるや、必ず彼等をして一片の誓約書を差出さしめる。而して其誓約書には被傭者の義務に屬する事項のみが列擧せられて居り、其權利を以つて見る可きもの、即ち雇傭者を束縛する條項に至つては、そして之を見出す能はざることを常とする。就中最極端なる取極めは被傭者は何時雇傭者の解傭する所と爲つても、之に對して苦情を申立てざる可しと云ふ一條の如き、被傭者に對する雇傭者の地位を專制君主同樣のものたらしめ、雇傭者の橫暴をして飽く所なからしめる所以である。斯の如きは第一、我國に於ては多年封建時代に涵養された事大思想が今日に至つても國民の腦裡に浸潤し、强者は切棄御免の考へを以つて、弱者に對しても、弱者は之を異とせざること、第二今日の資本主義經濟の下に、資本家は經濟上往時の封建　主と同一の威力を揮はんとすること、第三我國の知識階級に屬する人々の間にも、縱斷的にも、橫斷的にも、何等團結の見る可きものなく、隨つて團結した資本家に對するに個々の被傭者を以てするが故に、兩者の勢力に大なる懸隔をたすことに歸する。失業問　に對する策としては、此方面に就て國民の反省を求めなければならない。技術的救濟から、根本的救濟に進むの必要は失業問題に關聯して、其特に痛切なることを認めるのである。

資本主義治下に於ける我國農業農村の崩壊

中澤辨次郎

一

我が日本に於ける農業は、現在の所殆んど資本主義化しては居らない。單に現在資本主義化して居らない丈けではない。恐らく將來と雖も現在言ふ意味の個人主義的資本主義化には大なる困難がある。否な困難があると言ふよりも寧ろ不可能的事情がある。然し乍ら此のことは決して現在の農業が資本主義經濟の支配外にあると言ふ意味ではない。今の我が國農業が資本主義經濟の支配を受けて居ることは否定出來ない顯然の經濟現象である。何んとなれば我が國の農業はその經濟本態そのものに對しては、毫も資本主義化が行はれて居ないにも拘らず、其の經濟の基本に横つて居る土地と云ふ生産機關に對しては、今の地主の搾取能力が許るす殆むど最高限度にまで資本主義化が行はれて居り、次にその收獲の具體たる農産物に對しては、經濟的資力の薄弱なる農民の生産經濟等には毫も傾着する所なく、極端なる市場支配を行ふて居る。之れを換言すれば日本の農業は、他働的に資本主義化されて居つて、極めて合法的手段の下に農業搾取が行はれて居る。であるから農業の本態に向つて資本主義化を行はないでも、主要搾取形態たる利潤の獲得は、這の間最も合理的に實現し得るのである。殊に今の資本主義經濟は、更らに搾取の他面たる農業の必需原料品供給の上に於いても、同一機構の下に同樣な市場支配を行ひ、所謂賣買兩時に於いて、農業搾取の職能を完成して居るから、技術的見地より推斷して資本主義化に不適當（拙稿「農村振興の社會的新基準」參照のこと）である我が國の農業を、強いて資本主義化さし、其處に多少でも經濟上、技術上の犧牲を拂ふの必要を認めないのである。之れ今日に到るも我が國の農業がその經濟本態に對して、殆んど資本主義化が行はれずに居る技術的經濟的理由で

ある。

二

惟ふに我が國に於ける農業は、久しい間封建經濟組織の下に於いて、極めて手厚い搾取を受けて居た。當時公租は「五公五民」若くは「六公四民」と稱する文字の示す如く、收穫高の二分の一以上を、單なる土地の支配權の力の下に收奪されて居た。封建社會の表面に當時搾取され可く露出して居たものは土地がその大部分を占めて居た。封建政府は此の露出面に向つて殆んど極端であると言つて差し支へない誅求を行つた。斯くの如き公租干係の許に於いては、所有權の價値は最小限度に縮少されねばならない。或る學者の如きは此の爲め「德川時代の土地は國有であつて、所有權はないものである」かの如く誤信するに到つた。德川時代と雖も制限付きではあるが、所有權は嚴存して居た。けれども上級支配權が所有權を壓服して、其處に資本主義的搾取の餘地を殘さなかつたのに過ぎない。地主と云ふ中間階級を支配階級と農民階級との間に、經濟的に介在せしめなかつた迄である。從つて此の時代に介在して居た地主は前時代の經濟的資力の餘勢に依つてその餘脈を保つか、亦は封建政府の出店を引き受け「村役人」として介在するか、然らずんば實際の耕農民として存在するか、何れにしても之れ以外に彼等の生き得る途はなかつた。何んとなれば最上層の收奪權は、最下層の收穫高に對し、常に二分の一以上を單なる土地の支配料として徵收して終つて居た。從つてその殘餘を彼等の思ふやうに地主小作人で適當分配し得る途がなかつた。(拙著小作制度論第一編第七、八章參照のこと)即ち此の場合に於ける地主は支配權者に五、小作人に三、を認め自らは二乃至一を得られることに依つて滿足して居なければならなかつた。斯くの如き分配干係の下における地主の經濟的地位が、如何に不調であつたかは今更ら言を要さない。彼等は地代丈けでは到底その經濟的社會的地位を保つことは出來なかつた。封建經濟制度の下に於いて、土地資本主義が擡頭しなかつたのも決して偶然ではない。此處に於いてか彼等地主は前述の如く小作人と共に自作農として農耕に携はることを餘儀なくされた。

三

既に一言せるが如く、封建制度の下に於いては、搾取すべき露出面の大部分が殆んど農耕地を以つて占められて居た干係上、封建政府は之に向つて、極端なる搾取を斷行した。其の搾取手段の最も特有なる方法は、農業の基本である土地に對して、大

なる負擔を荷することであつた。而してその人的責任を個人でなく「村」全體の住民に負はせ、個々の不作は村全體の豐凶に依つて相殺せしめ、以て年々一定の收納を舉げ、自己の經濟生活を安固ならしむる仕組を整へた。然し乍ら此の仕組みと前述の貢租比率は、往々にして耕農民の生活を脅威する所となつた。當時全國所在の土地が景品付きで農民の手から手へ轉々し、その甚だしきに到りては大なる負擔付きの土地を手放して、その耕農否な貢納責任を免れ可く、酒一升若しくは金一封、甚しきに到りては自己の妻を景品に附けることに依つて漸くその土地を放棄することが出來たのだ。各地に往々「間男田」と稱するのは、當時の耕農民の悲哀を永久に語るものだ。斯くの如き事例に依つても封建經濟制度の下に於ける土に對する苛斂誅求が如何に完備的に極端であつたかは洞察出來るし、亦土地所有權の價値が如何に低下してるたものであるかも解かる。

實を言へば當時の支配階級には飯を食ふ農民は必要がなかつた。唯だ穀物を生み出す土地の廣がりが必要であつた。從つて此場合の農民は「人間」としてではなく、機械即ち「穀作機」としてその「働き」を必要としたのだ。此の思想、此の意味の下に於いて、彼等には苛斂誅求は當然の權利であつた。出來るだけ誅求し、出來るだけ收奪する。之れが封建經濟制度の土地搾取從つて農民搾取の大方針であつた。封建支配階級の土地政策には斯くの如き嚴然たる鐵則があつた。本多佐渡が「百姓は殺さず生かさず、財の餘まらぬやうにするが政治の要道である」と傲語せる、決して偶然ではない。之れが彼等の治民政策であつた。治農政策であつた。然かるに翻つて此の制度に取つて代つた資本主義（此處に言ふ意味は土地資本主義）は土地に對して如何なる政策を取つたか？

四

一言にして言へば今の我が國に於ける土地資本主義は、封建經濟制度の下に完成された搾取の特長を殆んど其の儘繼承して居るに過ぎない。而して其の搾取の特長を經濟的に政治的に、亦社會的に適當維持を計つて居れば、その土地の收穫高の二分の一以上を安全に收納し得られるのだ。斯くの如き搾取慣行のある所に於いては、勿論資本主義が、新たに開拓すべき搾取の對象となる處女地は極めて小部分であるに過ぎない。が封建制下の搾取率をたゞその儘維持する丈けであつても、その額は地代と企業利潤を合せ得られる程高額に上つて居ることは否定することは出來ない。）此の主義を培ふ他の經濟的環境が好都合に立て直つて來なければ、新たな搾取の餘地は發生しない。例へ

ば交通の發達、文運の進歩、人口の増加、從つて土地に對する需要の増加、特に小作人階級の小作地借り入れ競爭等に依る諸條件に依つ以外に、新たな土地搾取の名目は立ち難い。今日我國に於ける地代は、封建時代に比し、僅かにその比率を二分乃至五分の多くを値上げして居るのに過ぎない狀態に顧れば、如何に封建經濟制度の下に於ける搾取率が高いものであり、亦完備(搾取し得る見地から)して居たものであるかゞ解かる。現在の土地資本主義は唯だ該封建經濟制度の下になつた搾取率を維持して居る丈けで、既に立派に搾取本能を遂成することが出來て居るのだ。今の土地資本主義者が、該制度の持つ搾取の特長をその儘乘つ取つてそれを頑強に維持しやうとして居る理由も此處に發見される。更らに亦今日の小作者階級が此の點に目覺めて封建の遺制である搾取を解き、合理合法的な新小作制度を樹立すべく、一齊に經濟運動を開始した理由も亦此の點に發見される。從つて實際の耕農民階級から言へば、明治改革は、封建の搾取に代ゆるに、資本主義的新たなる搾取を以つてしたものに過ぎないから、彼等は該改革の爲に少しも經濟的解放は受けなかつた。唯だに受けない計りではない。其の後の資本主義的環境の進轉するに伴れて、極めて少額ではあるが、その間に多少の搾取率を高められて來たのだ。從つて此の傳統的搾取と新らしく加つた搾取を解き經濟的に公正なる分配關係を新たに樹立することは、彼等が焦眉の急とする所である。此處に土地資本主義の聽かては内崩すべき暢因を孕むで居る。

五

次に翻つて之れを土地資本主義の見地から言へば、封建制度の下になる搾取率が餘りに高度によつて居た爲め、新たに搾取すべき「肉の殘片」は餘りに尠なかつた。彼等は封建制度に取つて代つた當時、其の僅かなる經濟的地位の向上に陶喜して、徒らにその生活程度を高めた。封建時代に於いては、小作人と共に田園へ出て鋤鍬を取らねば、その經濟的地位を保てなかつた者が、明治改革以後、公租の大輕減(封建時代に於ける公租に比し、物納が金納となつた丈でも大たる輕減であるのに、大體に於いて當時の年貢米と小作米とを合せ得られる地位となり、その内の一部分を僅かに金納租すれば足りることゝなつた)に依つて、自耕することよりも、賃貸することの有利なることを知つた。此處においてか彼等の多くは封建的搾取率に依つて許るされる最高限度にまで生活程度を高めた。從つて彼等は次第に農具を捨てゝ土から足を洗い、農舍兼用の家を改築して、別莊的ならしめ、斯くして彼等の足は土から段々離れて行くと共

に、その生計費は急激に倍加するに到つた。

然かるに前述の如く封建制度の遺制を繼承した搾取率なるものは、極めて最高度に近いものであつて、其の搾取率は決して無限に否た容易に高め得られるものではなかつた。彼等が新たに土地より直接搾取し得る分量には自ら一定の限界が劃されて居た。それ以上搾取能率を高めることは、土地經濟少なくとも耕作經濟上許され難い事情が含まれて居た。此處に土地資本主義者の悩みがある。此處に封建の遺制に惠まれて、土地から足を洗つた階級の憂ひがある。

況んや我が國の耕地は現在の經濟狀態の下に於いては、耕し盡せる丈けは耕やされ、經濟的に開墾の餘地のある所は殆んど開墾し盡され、斯くて成り立つて居る全耕地の二分の一は、遺憾なく土地資本主義の下に兼併し盡して、最早之れ以上新たなる經濟環境の發生しない限りで手を下し得られない狀勢の下にある。搾取率を高めんか、さらでだに反抗氣分の横溢して居る小作人階級は此處に新たなる陣立てを以つて對抗運動を進めるであらうし、退歩して農耕に從事せんか、土地に長い間離れて居た彼等の手足は、敢然としてその命に背くであらう。のみならず、封建の餘勢を駈つて極端に資本主義化した土地の大部分は此の爲に耕作し切れず、茫々たる草原化せしむるの餘儀なきに到るであらう。此處に於いてか新潟縣並びに北海道地方に於いて見るか如き土地の極端なる資本主義化は、將來に於いて必然に崩壞すべき運命を抱くものと斷じても敢へて過言ではない。由來土地（特に耕地）は所有することが本義ではない。耕作すること、社會的生産を舉げることが本義である。過つた土地の資本主義化は國家社會を毒する所大なりと謂はねばならぬ。愛知縣鳴海の某地主の如きは、小作人に嫌忌されてその土地返還に逢ひ、終にそれを自耕することが出來ないので、國家に返上を企てたが果さず、今日に於いては、草は生える、租税は加徴される。進退兩難に陷り、之れを放棄せんとするも、終にその捨て場に困難して居ると云ふ失態を演じて居るが、極端なる土地資本主義化の結果には斯くの如き副産物も發生するであらうことを我々は參思しなければならない。

六

現在我が國の耕地は田畑合せて六百十萬餘町歩あるが、此の內約三百萬町歩は大體に於いて資本主義化され、耕やさぬ小數地主の手許に集中して居つて、其の下に喚めく約三千萬人の被搾取者を現存せしめて居る。而して唯だ之れだけの事實あるとに依つて、土地資本主義者の目的は貫徹されて居る。一片の契

約、それは相互無意識の許に成立した小作契約であつても、其の背後には封建經濟制度の下に於いて完成された搾取の鐵則が、それを力強く支配して、其處には今の社會思潮に照して、公正たる何等の基準も見出せない。頗る公平を缺いた地主萬能の小作契約が成立するのを常とする。地主の都合とあれば小作人が如何に永年懸かつて土地改良をした耕地であつても、何時でも無賠償で返還しなければならないと云ふ樣な、大なる不當的事實が道の間に當然の否な遵奉しなければならない不文律として強請的に維持されて居る。僅かに一ケ年凶作を原因として小作料の支拂ひが滯つた場合、永年の小作權が一片の通告に依つて抹消されるとのある例は、餘りに通常の茶飯事化して終つた。

田園に於ける土地資本主義の威力は、王者も尚ほ之れを凌ぐ能はざる勢ひがある。暴力よりも尚ほ被搾取者階級を恐怖せしめて居る。彼等の子女は王者の權力で「一夜伽」に引き出されることはないかも知れない。暴力でその生活を根底から覆へされる憂ひはない。然し乍ら土地資本主義の威力の下に於いては、滯つた小作料辨償の爲に最愛の子女を涙を呑んで賣笑婦の群に送らねばならぬ場合が生ずる。或ひは亦一家を擧むで永年棲み慣れた故鄕を賣らねばならぬ場合が發生する。新潟、山形、秋田方面の各縣が賣笑婦の供給地であるのは、取りも直さず該地に極端たる土地の資本主義化が行はれて居る副産物だ。因に、中國、近畿、特に和歌山、岡山、廣島、滋賀等の各縣下に出稼人が續出するのも、その有力なる大因は極端なる土地の資本主義化の副作用だ。然し乍ら斯くの如く土地資本主義の各方面に向つて普遍的浸透作用を及すときは、既に該主義がクライマックスに到達したことを物語るものだ。之れ以上此の主義の下に新たに開拓され、搾取され可き何物も最早此の土地から見出すことは出來ない。小作料を以つて例せば、全國平均五割五分六厘の現在率は、之れが最高限度であつて、之れ以上此の主義の下に搾取され可き餘地はない。否な寧ろ此の率は該主義の反對支出階級の手に依つて低減され可き運命の下にある。換言すれば我が日本に於ける土地資本主義は最早その末期に當面して居るものである。從つて地主の經濟的社會的現在の地位を頂點として、次第に退步すべく餘儀なくされて居る。何んとなれば彼等は之れ以上その生活地位を高め得らる可き何物の新搾取基準が見出せないからである。直言すれば現在の土地資本主義は、封建經濟制度の下に於いて開拓された素地を、其の任にあらず、偶然たる法則改革に依つて乘り取つた丈けに過ぎないのだから、其處に新らしい開拓の役割も割り宛てられず、亦××××すべき何等の×××××たない。從つて新興農民に依つて社會主義を樹

唱せられるとき、生存の自由と、××××が叫ばれるとき……（封建制度がその最頂點に到達した時、内に孕んだ資本主義經濟制度の爲に内因的に××××之れの如く、）……此の土地資本主義制度は新興農民經濟の爲に、自ら必××××××運命にある。之れを要するに日本に於ける土地資本主義は、餘りに容易に封建制を乘り取つた丈け、それだけ早くその存續の使命を果して終つて、最早今日に於いては之れ以上進む可き役割りがなくなつた。耕農民から土地資本家に、農舍から莊園的住居に移るに從つて彼等の手には、鍬の代りに算盤が彈かれ、鎌の代りに書畫骨董が愛玩されるやうになつた。其處には一厘でも爭ふ高利貸し氣分と、退嬰的現狀維持氣分より外に何物も求むることが出來ない。斯樣な不進取の氣分に漬つて居る階級が退歩し内崩するのは當然である。

七

前述の如く土地資本主義は搾取に忠實であつた封建制を其の儘乘り取つた丈け、搾取の手段としては如何にも幼稚なる直接搾取であつた。收獲物を二分する、それが主要なる搾取形態であつた。斯くの如き搾取形態が經濟組織の進むで居る今日、その儘永く維持され可きでないのは當然である。此の搾取方法はこの自由×が向けられては尚いだけ、其經濟的組織を××××ならしめ、軈て自らの經濟的立場に不安を醸す。此處に於いてか此の制度を維持して居る階級が、他の一般資本主義の持つ、合理的搾取の形式に憧憬し初め、亦それに準じやうと努力する氣分も、這の間に現はれるのである。此處に於いてか今日の土地資本主義者は、次第に一般資本主義の持つ機構に向つて握手を求め、土地資本主義の行き詰りを此の方面に於いて展開しやうと努力して居る。最近農村地主が都市に於ける株式に向つて投資を試み、亦その形態を農村より都市に止め、所謂地主の離村向都の傾向が特に顯著となつたのは、其の一端の事例を示すものに外ならない。

惟ふに一般の資本主義が持つ特有の經濟機構は、土地資本主義が持つ伸縮不自在な、搾取條件の不良なる方面に向つて、その威力を强ひて集中しやうとするやうな物好き氣分は持たない。極めて合理的に亦極めて自然に農業搾取を實行して居る。即ち農産物の市場支配と農用必需品の供給（市場）支配と、農用資金の金融支配とが即ちそれである。（之れに附隨して農民を政治支配せんともして居る）斯くの如く、一般資本主義は第一第二第三の陣立を以つて農業搾取の經濟機構を完成しやうとして居る。此の方法は勿論封建制下に於いては、殆んど未開拓の儘に

放任されて居た、現資本主義制特有の合理的農業搾取の機構である。

元々農業は土地を平面的に利用することに依つてのみ營み得らる可き業態である。從つて土地を立體的に利用して營業し得る商工業に比し技術的に亦經濟的に大なる立ち劣りを示して居る。從つて此の農業搾取の手段としては今の經濟組織の下に於いては、此の第二第三の障立てを以つて殆んど完全に農業搾取の目的を達し得るのである。と同時に此の方法を以つてせば、今の農業被搾取階級が個人主義的獨立經營を行つて居り、組織化されず、個々に生産をやつて居る限り、尚ほ多くの開拓し得べき餘地がある。封建制度の殘した直接搾取率は如何にも徹底的に過大であつた。が、然し乍ら土地資本主義並に之れに加ふるに此の一般資本經濟の搾取作用はそれよりも更らに合理的に最大である。次にその搾取形態を檢討することゝしやう。

八

それには此の際更らに再び封建制が資本主義に先行して農業搾取をやつた樣式を比檢するの必要を感ずる。——封建的搾取の樣式には大體に於いて土地の移動（賣買禁止）するとを防ぎ、土地を固定（一定の農民若くは一定の村に、世襲に於いて、直接搾取をやることであり、之れに配するに農民に對し「職業」と「住居」の自由を奪ひ、一定の場所に於いて農業に從事すべき鐵鎖を設けて、法制的にその手足を縛し、以つて搾取の目的を完成するにあつた。

殊に此の場合前者の直接搾取方法丈けは今日に繼承されてゐるが、後者の「自由制限」は封建制丈けの特有搾取條件であつて、個人の自由を基調として居る資本主義制に於いて承け繼がれる方法ではなかつた。

惟ふに封建制下に於て搾取を徹底的に貫行せんとすれば、その搾取の人的給源に對して制限を加へ得る權能があつた。人を土地に固定膠着させて、搾取を確定することが出來た。斯くとも搾取の物的對象を擔荷する農民の行動に對して、拘束を與へ、その移動の自由を制限することが出來た。斯うすることが搾取の目的を貫徹するに便宜であつた。然し乍ら此の搾取手段の持つ缺點は、結果に於て生産の人的要素に對し、其の活動能力に強い制限を加へることゝなつた。換言すれば搾取目的貫徹に急にして生産制限を強制することを氣付かなつた事になる。當時高（公定收穫高）より掟（年貢料）の方が往々にして多いことがあつたが（拙著「小作問題の研究」第二三頁參照）斯くの如き搾取方針は、必然に「隱地」（隱田）若くは「農民逃亡」

を招因する結果となり、封建的搾取經濟は斯くて自縄自縛のヂレンマに陷り、農業搾取に急にしてそれが反つて自殺的行動となり、自刃せざるを得ざるに至つた。

之れに取つて代つた土地資本主義は、封建的搾取の第一手段丈けを受け次いで、第二手段の持つ缺點を捨てた。即ち搾取の物的對象を取り、人的對象を解放した。而して新たに競爭の自由（住居並に職業の自由も）を認めて、各人の有する特徴を充分に發揮させ、以つて生産の増進を計つた。斯くして搾取の人的對象は較々不確定的となつたが、一方民法に依つて絶對的所有權を確立し、以つて其の弊を補ふた。斯くて「人」を「物」に乘り換へたが、物を以つて搾取する率は既述した如く、封建制度その儘の率乃至それ以上を「競爭自由」の原則を逆用することに依つて獲得した。

九

論は七項の續きに立ち戻る。——一般資本主義が農業搾取の合理的手段は、既に述べてあるが如く、農業に對する市場を三段に分けて支配することであつた。即ち第一段に於いては農業上の生産物を市場（搾取）支配して、其處に相當なる利潤を網みし、（蠣殻や堂島や深川正米市場等は之れに當る）、第二段に於いては農業用原料品供給の上に於いて反對の意味に於ける市場支配を行ふ。例へば肥料（主として金肥）の市場支配を行ふが如き、農耕具の供給支配を行ふが如き、即ちそれである。第三段に於いては農業用資金を供給する場合、前記二段の市場支配の外に、金融（主として銀行）支配をすることに依つて其處にも可なり大なる農業搾取を行ふのである。

言ふ迄もなく今日多くの農民は、その生産物處分に當り、其の價格を生産費に依つて決定することは出來ない。（況んやその價格に利潤を加味することに於いてをやだ。）生産費とは何等干係なき、と云ふよりも常に適當生産費よりも遙かに低い所謂市場價格に依つて、粒々辛苦の結晶を買收されて居るのである。之れは取りも直さず、資本主義が最も巧妙なる市場を通じて農業搾取の手段を取つて居る適例である。資本主義經濟に於いては之れが需要供給干係の決定する最も合理的價格であると稱せられて居る。反對に亦農民が農業用原料品を購入せんとする場合に於いても、市場價格の獨占權を握つて居る肥料會社其他に、之れとは別個の立場に於いて市場搾取を受けて居るのだ。殊に農業資金の如きに到りては、悲慘を極めて居る。農民の手より奪ふ零細なる資金は、四分何厘程度の貯蓄預金の形に於いて奪ひ、供給する場合には尠くとも、多數連帶なることを必要と

放任されて居た。現資本主義制特有の合理的農業搾取の機構である。

元々農業は土地を平面的に利用することに依つてのみ營み得らる可き業態である。從つて土地を立體的に利用して營業し得る商工業に比し技術的に亦經濟的に大なる立ち劣りを示して居る。從つて此の農業搾取の手段としては今の經濟組織の下に於いては、此の第二第三の障立てを以つて殆んど完全に農業搾取の目的を達し得るのである。と同時に此の方法を以つてせば、今の農業被搾取階級が個人主義的獨立經營を行つて居り、組織化されず、個々に生産をやつて居る限り、尚ほ多くの開拓し得べき餘地がある。封建制度の殘した直接搾取率は如何にも徹底的に過大であつた。が、然し乍ら土地資本主義並に之れに加ふるに此の一般資本經濟の搾取作用はそれよりも更らに合理的に最大である。次にその搾取形態を檢討することゝしやう。

八

それには此の際更らに再び封建制が資本主義に先行して農業搾取をやつた樣式を比檢するの必要を感ずる。——封建的搾取の樣式には大體に於いて土地の移動（賣買禁止）するとを防ぎ、土地を固定（一定の農民若くは一定の村に）狀態に於いて、直接搾取をやることであり、之れに配するに農民に對し「職業」と「住居」の自由を奪ひ、一定の場所に於いて農業に從事すべき鐵鎖を設けて、法制的にその手足を縛し、以つて搾取の目的を完成するにあつた。

殊に此の場合前者の直接搾取方法丈けは今日に繼承されてゐるが、後者の「自由制限」は封建制丈けの特有搾取條件であつて、個人の自由を基調として居る資本主義制に於いて承け繼がれる方法ではなかつた。

惟ふに封建制下に於て搾取を徹底的に貫行せんとすれば、その搾取の人的給源に對して制限を加へ得る權能があつた。人を土地に固定膠着させて、搾取を確定することが出來た。少くとも搾取の物的對象を擔荷する農民の行動に對して、拘束を與へ、その移動の自由を制限することが出來た。斯うすることが搾取の目的を貫徹するに便宜であつた。然し乍ら此の搾取手段の持つ缺點は、結果に於て生産の人的要素に對し、其の活動能力に強い制限を加へることゝなつた。換言すれば搾取目的貫徹に急にして生産制限を強制することを氣付かなつた事になる。當時高（公定收穫高）より掟（年貢料）の方が往々にして多いことがあつたが（拙著「小作問題の研究」第二三頁參照）斯くの如き搾取方針は、必然に「隱地（隱田）若くは「農民逃亡」

を招因する結果となり、封建的搾取經濟は斯くて自縄自縛のヂレンマに陥り、農業搾取に急にしてそれが反つて自殺的行動となり、自刃せざるを得ざるに至つた。

之れに取つて代つた土地資本主義は、封建的搾取の第一手段丈けを受け次いで、第二手段の持つ缺點を捨てた。即ち搾取の物的對象を取り、人的對象を解放した。而して新たに競爭の自由(住居並に職業の自由も)を認めて、各人の有する特徴を充分に發揮させ、以つて生産の増進を計つた。斯くして搾取の人的對象は較々不確定的となつたが、一方民法に依つて絶對的所有權を確立し、以つて其の弊を補ふた。斯くて「人」を「物」に乘り換へたが、物を以つて搾取する率は既述した如く、封建制度その儘の率乃至それ以上を「競爭自由」の原則を逆用することに依つて獲得した。

九

論は七項の續きに立ち戻る。――一般資本主義が農業搾取の合理的手段は、既に述べてあるが如く、農業に對する市場を三段に分けて支配することであつた。即ち第一段においては農業上の生産物を市場(搾取)支配して、其處に相當なる利潤を網みし、(蠣殼や堂島や深川正米市場等は之れに當る)、第二段に於いては農業用原料品供給の上に於いて反對の意味に於ける市場支配を行ふ。例へば肥料(主として金肥)の市場支配を行ふが如き、農耕具の供給支配を行ふが如き、即ちそれである。第三段に於いては農業用資金を供給する場合、前記二段の市場支配の外に、金融(主として銀行)支配をすることに依つて其處にも可なり大なる農業搾取を行ふのである。

言ふ迄もなく今日多くの農民は、その生産物處分に當り、其の價格を生産費に依つて決定することは出來ない。(況んやその價格に利潤を加味することに於いてをやだ。)生産費とは何等干係なき、と云ふよりも常に適當生産費よりも遙かに低い所謂市場價格に依つて、粒々辛苦の結晶を買收されて居るのである。之れは取りも直さず、資本主義が最も巧妙なる市場を通じて農業搾取の手段を取つて居る適例である。資本主義經濟に於いては之れが需要供給干係の決定する最も合理的價格であると稱せられて居る。反對に亦農民が農業用原料品を購入せんとする場合に於いても、市場價格の獨占權を握つて居る肥料會社其他に、之れとは別個の立場に於いて市場搾取を受けて居るのだ。殊に農業資金の如きに到りては、悲慘を極めて居る。農民の手より奪ふ零細なる資金は、四分何厘程度の貯蓄預金の形に於いて奪ひ、供給する場合には尠くとも、多數連帶なることを必要と

し、而も一割以上に及ぶのを通常として居る。農業利廻りが三分乃至マイナスである場合に(帝國農會調査及び農務局調査「農家の經濟調査」參照)一割以上の資金は、僅かに大なる農業搾取の形態だ。我が國現在の農村に於いては、その七割までが、小作農階級に屬し、之れ等の農民は土地の資本主義化されて居ることに依つて、直接に收穫高の二分の一以上を搾取され、次に間接的方法ではあるが、前記の如く、三段の陣立てを以て、生産者の地位に立つ場合、並に消費者側の地位に次つ場合、及び資金借り入れに際して、それ〲網の目も洩らさぬ緻密なる組織の下に、市場支配を受けて居る。殊に後の場合の三段の陣立に於いては單に小作農のみならず、非組織自作農亦此の市場搾取を受けて居る階級であるとを顧みねばならぬ。市場に經濟的足場を持たぬ小地主階級と雖も、亦此の搾取丈けは免れることは出來ない。是れ今日各地の地主階級が、非農業者たるの分際をも顧みず、眞乎の農業者顏して、農業の不利、農村の疲弊を訴へ得る多少の經濟的理由が認められる道理である。

十

今日の農村に於ける地主階級は、努めて都會に於ける經濟的足場を求めんとして居る。土地資本主義より一般資本主義への握手を求めんとする。不在地主の處分問題が戸數割問題を中心として各地の農村に起つて居るのは之れの反證著例である。既に大地主階級は離村して終つて、若くは都會に假寓して一般資本主義經濟の支柱となつて居る。然し乍ら未だ農村の多くには、帶には短く襷には長い中地主階級が止まつて居て、土地資本主義の上に於いては立派なる搾取者であり乍ら、一般資本主義の立場に於いては組織市場干係から、被搾取者たらねばならぬ階級がある。即ち此の階級は一般資本主義的見地から言へば、一面に於いて同類であり、他面に於いて反對干係の下にある不純分子だ。(資本主義が斯くの如き分子を内部成員として居ることは、大なる弱點であり缺點である)此處に於いてか、今までは一般資本主義は農業搾取の手段として、恰かも蟻が蚜蟲を庇はねばならぬ極めてデリケートな干係に於いて、或る程度まで農業保護策を認めて居つた。然し乍ら最近に於いては斯くの如き中地主の第一搾取の地位を覆へすことに依つて、第二第三の搾取を完成すべく、之れと妥協することを避け、反對の行動を敢へてするに到つた。最近極めて頻々に我が國の穀物關税、特に米麥關税が撤廢されるのは、取りも直さず這の間の消息を物語るものであり、帝國農會に立て籠れる地主階級が往年の不實同盟を動機として、「農事協會」次いで「農政協會」と

して之れ等の問題に主として關する爲に活動し初めたのは、之の副時作用に過ぎない。が斯くの如き反對運動は、恰も既倒の勢ひにある大厦を、一本の支柱を以つて支へんとするの愚である。所詮土地資本主義は、他の被搾取農業と共に、一般資本主義の偉大なる魔力の下に牽制され、次第に衰退すべき運命にある。

十一

之れを要するに我が國の農業は、その生産の基本機關である土地そのものに對しては、極端なる資本主義化が行はれ、全耕地の二分の一は地主の手許に兼併され、更らにその土地よりの收獲物の二分の一以上は地代として搾取を受けて居る、斯くの如き搾取干係のある他面に於いて、更らに一般資本主義はその農生産物に對して、市場支配、農用原料に對して供給支配、農用資金に對しては金融支配を行ひ、殆むど蟻の抜け出る隙間もないやうに農業搾取の網を張つて居る、斯くの如き搾取の重圍中に陷つて居る農業經營が、營利事業として成り立ち得ないのは當然である　營利經營の餘地のない所に資本主義化はない。我が國に於ける農業が、その經營の本體に對して、殆んど資本主義化が行はれずに居る經濟的理由は實に此處に存する、此の外技術的干係から、多少資本主義化に適當なる理由もないではないが、資本主義化されずに居る大原因は實に以上の點にある。然し乍ら此の事實は、現代の營利經濟社會に於ける、日本の農業の大なる弱點であつて、現在の農業は、土地資本主義と、一般資本主義の上から經濟上二重の手厚い緻密な搾取を受けて居るのであるから、此の經濟制度の下に於いては、到底その繁榮は望み得べくもない。從つて之れに從事して居る農民は年々貧乏して行き、從つて其の農村は次第に衰退し、崩壊的傾路を指して進まざるを得ない。

（三月八日山梨講演旅行に立つ可き前夜に認む）

政治過程の盲目的進行に對する意識的統制の必要及びその目標

大山郁夫

一 政治家的經綸の缺乏時代

現下の我國の政界が無限の混沌狀態を示して居るとは、誰れの眼にも紛れやうのないほど明瞭に映じてゐる。かういふ時代に於てこそ、政治家的叡知と、明察と、それに伴ふ經綸の手腕とが一般世間から何にも勝さつて熱烈に要求されるものだが、それにも拘らず、さうしたものの缺乏が、今日ほど痛切に感じられたとは、少くも我々の直接の記憶が溯り得られる過去に於ては、殆んどどの期間に於ても經驗されたことがなかつたやうにさへ思はれるのである。で、今日の政局に於て我々を取り卷いてゐる一種の底氣味のわるい不安の雰圍氣は、縱しそれの全部がそこから來てゐるものだとは言ひ切つてしまへないにもせよ、しかもそこから來てゐる部分が決して少くないことだけならば、必ずしも不當に誇張的にでなく斷定し得られることのやうに、我々には考へられるのである。

かうしたステーツマンシップの缺乏、及びそれから生じる不測の社會的不安の展望は、今日我々の眼前に最も重大な政治問題を投げ出して居る因子ではないか？ そしてその社會的不安を脫却する方途の探求が、現在に於て我々の政治

的關心の殆んど全部を充たしてゐる要素ではないか？　我々はもとより、さうした方策が果して究極に於て發見し得られるものであるか否かを、まだ的確に認知しては居ない。が、我々はしかし、我々をして不可抗的にそれの探求に向はしめた眞因を、餘りにも切實に意識せしめられてゐる。そこに、現代の政界に直面する我々の上に押し冠ぶさる重苦しき一種の壓迫感が、幾層にも加重される根據がある。

とはいへ、人類の過去の永き歴史を振り返つて見れば、ステーツマシップへの需要と、それの供給との間の不一致が痛感されたやうなことは、必ずしも今日に於て始まつたことではない。それは恐らく、歴史上の通則の一つとして見ても不當だとは思はれないほども、世界の各部の各時代の歴史の上に於て、頻繁に繰返されて來た現象ではある。もとよりそのことが我々自身の眼前の現實問題となつて來る段になると、我々は最早それを一つの『歴史的必然』として傍觀するだけに止まることが出來ないで、それに或る特別の意味を見ようとするやうにも、更らにまたそれの上に積極的に作用しやうとするやうにも、誘ひ込まれる。そして、それはまた、私には當然のことでもあるやうに思はれる。さうであればこそ、私は本文の劈頭で、現在直接に我々の問題として我々に臨んでゐる同種の現象の上に特別の注意を喚起しておいたのでもあるし、更らにまた、これから先きも、それを中心として幾分私の意見を述べようとしてゐるのでもある。けれども私は、それに先だつて、さうしたことの類例が、既に人類の歴史の上に於て、殆んど無際限といふ程度に示されて來たといふ一般的事實を一應靜觀しておくことが、決して私自身のこれからさきの論旨に無關係なものではないことをも、同時に認めようとしてゐるものである。

二　政治上に現はれる憎新性

ところで、私から見れば、各時代に於て、政治家的識見と實行能力とが最も多く要求される時に當つて、即ちそれらの缺乏が最も痛切に實感されるといふやうなことは、一般人の心理の自然的傾向から、殆んど不可抗的に來てゐるものであるやうに考へられるのである。といふと、それは恰度、かの普通に『隴を得て蜀を望む』といつたやうな成句に依つて指示されてゐる通りの、人間の欲望の無限の自發的增進力に關聯して居るもののやうに、ややもすれば解釋され易いかも知れないが、しかし實は私が意味してゐるところのものは、必ずしもさうしたものではない。否それはもつとデリケートな、若しくはもつと複雜な、一般人の心理的傾向から來てゐるものである。若しくは、更らに幾分詳細にいふと、それは常に環境の變移に應じて示されるところの、一般人の心理的傾向から來てゐるものである。若しくは更らに他の言葉を追加していふと、それは、個々の場合に於ける環境の變移から來る必要に應じて、敏速に人間の行動をそれに調節せしめることを常に困難ならしめるやうに働くところの、一般人の心理的傾向から來てゐるものだ、ともいへるのである。

斯ういふことは、各時代の政治家たちの識見及び實行能力が最も嚴酷なる試錬に遭遇するのは、最も多くの場合に於ては、政治の上に現實に作用するところの社會的諸勢力の均衡關係の上に、或る種の變移の起つた時を中心としての、その前後の一期間に於てである、といふ一般的事實の認識から來てゐるものである。今日では既に誰もの常識になつてゐる通りに、一般人の心性の根柢に於ては、舊來の社會生活上の因襲から離れて行くことを、極度の苦痛と感ぜしめるやうな一種の性癖が潜在してゐるものである。心理學者は、普通それを『憎新性』(misoneism)の名で指標する。し

かもこの性質は、社會的環境の上に或る激變が起つて、そして新環境が最早その因襲の存續と兩立しなくなつたことが明かになつてゐる場合に於ても、尙ほ異常な執拗さを以て働き續けて、そこに或る特別の有力なる障碍物の出て來ない限り、どこまでも新環境に直面する人々の行動をも支配し續けようとする傾向を示すものである。かうして一般人は、自己の行動を新環境に調節し得る前に、幾多の無益の抵抗と努力とを繰り返すことを餘儀なくせしめられるのである。政治家たちにしても、彼等が超人でない限り、かうした一般人の心理的傾向から全然自由になることが出來ないのは、いふまでもないことである。

しかのみならず、政治家たちこそ却て、一般人以上に、舊來の社會生活上の因襲に執着する動機に驅られるのを常とするものである。いふまでもなく、古來の人類の政治史に於て、政治家たちは支配群若しくは支配階級の代理者として、社會生活上の利害關係の調節とか、一定の秩序及び風敎の維持とかと言つたやうな任務を擔當して來たものである。ところが、彼等に依つて代表される支配階級は、舊來の社會的制度及び習慣の下に於て、直接に最大の物的利益を享受して來てゐる社會的集團である。それ故に、支配階級の直接物的利益の保管者としての彼等自身の地位を本能的に自覺してゐる政治家たちが、如何なる種類の社會的變革の徵候の動きが見え出した場合に於ても、苟しくも彼等が微かにでもそれを認めることが出來た以上は、必死になつて、それの防遏のために盲目的に努力することが先きに立つて、し無我無中のうちに、その他の一切のことを見失ひがちになる傾向に陷るを常とするのである。

三　實際問題としての『必然』と『自由意志』（上）

——歷史上の『必然』の認識——

けれども、すべての社會的變革は、究竟は如何なる個人にも集團にも抑制が出來ないところの諸原因に依つて、寧ろ暗々裡に激成されるのを常とするものであつて、しかもそれは、始終それ自身の理法に從つて、社會過程の軌道の上に現出するものである。けれども、支配階級及び彼等を代表する政治家たちの幻想は、それにも拘らず彼等をして、彼等が彼等の努力次第で、任意にそれの方向を轉換せしめ得るものとの謬見を懷かしめるのを常とする。が、若し假りに、彼等が果してその通りに、一切の社會的變革の運命の鍵を握つてゐるものだとするならば、如何なる時代に於ても、人類の世界への呪ひとしてかのやうに殺到する戰亂や革命やが、常に未然に防ぎ止められることが出來た筈であつて、從つてまた、人類の歴史は、今少し平和的であつた筈だし、少くとも今少し人類同志の血に彩られることが少くて濟んだ筈である。ところが、實際上に於ては、歴史は常に、各時代の支配階級や政治家たちの誇りに滿ちた豪語を裏切つて、社會的變革の將來が、常に彼等の意識的抑制の區域外にある諸原因から激發されるものであるものだといふことの實物教訓を與へて來たのである。そしてさうした事件の推移の間に起伏生滅した古來幾多の王侯將相の榮枯盛衰の夢の跡にまつはる悲喜劇の無限の連續こそは、縱し安價なる感傷文學に無盡藏の資源を供給する一の寶庫として見られること以外に幾許の意味がないものだとするにしても、しかもさうしたことの基底に横はる人間の群——若しくは集團——若しくは階級——の經濟的、社會的、政治的勢力の新陳代謝の經過の實跡を示す記録だけは、社會史の實際的研究上に必須な具體的資料として役立つものであり、更らにまた、我々が社會科學の研究に際して因果律の關係を通して一切の社會事實を觀察し整理することを必要とする立場をとる限り——私自身は、さうした立場を取ることが、社會科學の成立のための一根本條件だと考へてゐることを序に言ふ——は、社會現象の上に現はれる機械的及び心理的過程の法則の探求の據りどころとしても、絶對的に必要な基礎的資料としての用をなすものである。

かうして、過去の社會史及び社會過程の實際上の進行に關する研究から、我々が餘りに明瞭に學び得た一の教訓は、一切の社會的變革は、究極に於て、如何なる個人及び集團の意識的抑制の到達することが出來ない彼岸にある諸原因から釀成されるものだ、といふことである。各種の宿命說若しくは決定說（Determinism）が出て來るのも、決して偶然ではない。絕對理想主義の範疇の下に概括され得る各種の精神的決定說にせよ、それから又、それぞれに現實主義の範疇の間にその地位を占めて居るところの、唯物的若しくは經濟的決定說とか、生物的決定說とか、地理的決定說とか、社會心理的決定說とか言つたやうなものにせよ、いづれもみな、右の關係の認識を前提として出發して、それぞれの着眼點から、一樣に歷史の上に現はれる『必然』を見ようとする努力を表示してゐるものに相違ないのである。我々は、我々の各自が學術上の立場として、これらの決定說のいづれかを取るとか取らないとかの問題とは全然かけ離れて、單なる客觀的事實の問題として、右のやうに斷定することが出來るものである。

四　實際問題としての『必然』と『自由意志』（中）

——社會的行動と『自由意志』——

我々は、苟しくも我々が因果律の關係を通じて一切の社會事實を觀察し整理することを必要とする立場を取る限りは、社會科學上に於ける我々自身の立場として、いづれかの決定說を取ることから免れる譯には行かない、がしかし、他方に於て我々が、社會史及び社會過程の實際的研究——若しくは、今少し廣い立場からいふと、社會科學の研究——の必要を意識せしめられるのは、或る意味に於て、若しくは或る程度及び範圍に於て、我々が社會過程の今後の進行の上に意識統制を行はうとする際に役立つところの一種の指導原理をそこに——若しくはそこから——發見しようとする

意圖が、それの根本的動機をなしてゐるものだといふことは、實際上拒めない事實である。もとより、社會科學の研究が、さうした實用上の意味を離れても、或る程度に我々の知的思惟を滿足させるための道具となり得る可能性のあるものだといふことは、必ずしも全然虛妄だとはいはれないが、しかしさうしたことは、少くとも社會科學の發生を促した根本的原因ではない。のみならず、實際上の事實としても、一般人が社會科學の研究へ驅つて行かれるのは、最も多くの場合に於て、根本的には社會的行動のための基礎的知識を得ようとする動機からである。それは一般人が、社會人——若しくは社會生活者——として、何等かの社會的行動に關心しないものはない、といふ根本的事實から來て居るものである。

ところで、社會人の社會的行動は、何等かの形式に於て社會過程の上に意識的に働き掛けるといふ結果に導かれないものはないのであつて、更らにまた、社會過程の上に意識的に働き掛けるといふことは、究極に於ては、必らず或る程度に於て社會的環境に對する人間の意識的統制を目指す行動に合流する可能性のあるものである。それ故に、人間の意識的統制の外にある因果關係を通して一切の社會事實を見る社會科學は、結局は主として社會的環境に働き掛ける人間の意識的統制に交渉するものである。それは恰度、同樣に人間の意識的統制の外にある因果關係を通して自然現象を見る自然科學が、結局は主として物的環境に働き掛ける人間の意識的統制の基礎的條件となることに歸着するのと、同じ譯合ひのやうに、私には見られるのである。

社會的環境に働き掛ける人間の意識的統制を表象する行動の最も顯著な種類の實例の一つを、我々は、或る合議體に依る立法行爲なり、或ひはその立法行爲への反對運動なりの上に見ることが出來る。が、その外、すべての社會運動とか、思想運動とか、藝術運動とかの如きものも、いづれも皆同じ範疇に屬するものとして取扱はれるべきものである。

否、單にそればかりではなく、一般人が單なる名利のためにする行動の如きものさへも、苟しくもそれが社會的行動としての性質を帶びてゐるものである限り、少くともその結果から見れば、無論それの社會的行動としての性質の厚薄に應じてではあるが、それぞれに或る程度に於て社會的環境への意識的統制に影響しないものはないのである。

　しかし、さうしたことは、差し當りこれ以上究明する必要のないことだと考へられる。そしてそれよりも寧ろ、私が玆で特に强調しなければならないことは、我々が既に物的環境に對してでも、ただしは社會的環境に對してでも、兎に角苟しくも、人間の意識的統制の行はれることを言ひ立てた以上は、そこには明かに、『自由意志』——若しくは我々の國語で言ふ場合は『意志の自由』といふ方が、より適切であるかも知れない——の問題が言外に含まれてゐるといふことである。我々はさきに、歴史の上に現はれる『必然』を認識しようとする學術上の努力を當然のことと見ておきながら、今になつて急に、それとは全然反對の方面を指すやうに見られる『自由意志』を、人間の社會的行動に關聯して强調するのは、絶對に兩立すべからざる二つの觀念を强ひて兩立させようとしてゐるものではないか？　そして我々は、そのことからの當然の歸結として、救ふべからざるディレンマに陷らうとしてゐるものではないか？

　私は、『必然』と『自由意志』とに關しての、永久に終結することのありさうにもない一の形而上學的論爭の裡に、私自身を捲き込ませようとしてゐるものではない。それは、單に非常に退屈なことであるばかりでなく、私から見れば、私には大した用もなささうな知的思惟のための知的思惟の滿足上の必要以外には、別にこれといふほどの効用も價値もないことのやうに思へることである。が、それにも拘らず私は、實際問題としての『必然』と『自由意志』との關係に、玆で幾分でも觸れておくことは、私の所期の論旨を進める上に於て避けられないものであることを認めてゐるものであることを告白しなければならない。

五　實際問題としての『必然』と『自由意思』（下）

——兩者を楯の兩面とする見方——

『必然』と『自由意志』の問題の根本的解決といふやうなことは、單に永久に終結しさうにもない論爭の題目のやうに私に見られるばかりでなく、それは過去に於て無限の言葉の濫費に導いて來た通りに、おそらく將來に於ても、永遠にさうしたことを繰り返して行くであらう。少くとも現在の私には、この問題は早急に何れの側にか決まりよく片附けてしまはなければならないもののやうには考へられない。無論假りに若し、それに關する學界の討論が決定的に終結されると言つたやうな、如何にも起りさうにもないことが將來起る時があるとするならば、その時には私は改めて、自ら進んでその結論を聞くことに努力するであらう。けれども、今のところでは、——若しくは、この問題に關する討論が現在置かれてゐるやうな狀態の上に置かれ續ける限りは、——私は寧ろ、我々が我々自身の社會科學上の觀察の立場としてゐる『必然』と、我々が我々自身の社會的行動の上に於て凝視の焦點としてゐる『自由意志』とは、相互的に楯の兩面をなすものだといふやうな、平凡な、そして我々自身の常識にも合致するやうな說明から出發することに、滿足しようとしてゐるものである。いふまでもなく、さういふことは、我々に取つても、この問題の說明の全部ではない。がしかし、それは我々に取つては、その出發點としての用を充分に足すものではある。即ち我々は、我々の社會的行動の上に於て、我々の自由意志及びそれに關聯する意識的統制の上に重點を置くことは事實であるが、同時にまた我々は、社會科學上の觀察の立場からは、さうした自由意志——その『意志』そのものをも、その『意志』を行使する『自由』をも共に含めての——もまた、先行の或る原因若しくは諸原因に依つて惹起されたものだといふ認識から出發して、しか

もここから尙ほ一歩を進めて、さうした先行の原因若しくは諸原因の探究にも立ち向ふ、といつたやうなことをするのである。

必然と自由意志との問題に關する幾多の晦澁な論議の八幡知らずの深みから脫け出した後に、私が次に引用しようとしてゐるやうな、平明で、しかも確實に要點を摑んでゐるやうに私に見られるその問題の解說を讀むときには、私は不知不識の裡に、或る會心の微笑にさへ誘ひ込まれるのを感じるのである。それは、ロンドン大學教授のグレーハム・ウオルラスの言葉の中から取られたものである。彼は、著るしく實際的な一部のイギリスの學者に特有な、及び難き手輕さを以て、この難問題らしく見られるものを、事もなげに、しかも相當に適切に取り扱つてゐる。即ち、彼はかういふ。——

『私がこれらの二つの相反する信念の背後に潜む眞理は何であるかと自問自答しようとするとき、私は自然と、我々人間よりも一層進んだ理知——若しくは我々人間のとは異つた種類の理知——を持つてゐる存在に取つては、世の中に起るすべてのことは、自由でもあれば、また因果律的に決定されてゐるものでもあることが、自明の事柄だと考へられるに違ひない、といふやうなことを憶測せしめられる。若し木星の世界のどこかに、若しくは銀河の彼岸に、若しくはアインシユタインの宇宙に、或る生物が棲息してゐるものとすれば、彼は或ひは、力及び生命も、岸と岸との間を流れて行く河水も、流れを矢の如く遡る魚の躍進も、畢竟同じ物だといふことを、我々地球上の人間が理解するに惱んでゐると說き聞かされようとも、容易にそれを信じ得ないかも知れない。しかしながら、恰度犀のやうな巨獸が、その背梁の構造のために、自分自身の尻ツ尾を見ることも出來なければ、從つてそれがあるといふことを想像することすらも出來ないでゐる通りに、人間もまた、無知のためとか、或ひは、腦の、若しくは細胞の、若しくは原子の

組織の上に於ける或る故障のためとかで、自由意志と因果關係との問題に關して、一時にそれの片面以上を見ることが出來ないでゐるのである。けれども、假りに若し、犀が將來いつかは、それの體形を略ぼ現狀のままに維持しながら、人間の理知に似たものを具備するやうになることがあるものとするならば、さうした將來の犀は、近隣に棲む他の犀の尻ッ尾を觀察したり、自己の尻ッ尾あたりの筋肉の刺激に應じて生ずる運動感覺について內省したりなどして、究極に於ては、自分自身もまた一條の尻ッ尾を所有して居るものだといふことを認めるやうに——若しくは少くとも信ずるやうになるであらう。同樣に、類もまた、究極に於ては、自由と因果關係とが楯の兩面であるといふことを我々に認めしめるやうな——若しくは少くとも信ぜしめるやうな、人間の動機に關する概念を作り上げるやうになるであらう。おそらく我々は、この點に關聯して、無限に關する新概念を一般の思惟の中へ普遍的に移入することに依つて、得るところが少くないであらう。決定說の概念は、宇宙を有限として理解する觀念に、密接に交渉せしめられてゐる。だが我々のすべては、今日に於ては、單に空間を無限として觀念することだけでなく、原子をも同樣に觀念することをも試みることが出來るのである。曾ては、原子の數の有限及びその個々の單純性の假定から、宇宙の複合關係を有限的なものと臆斷するのが習はしであつたが、現在ではおそらく、一つ一つの原子が、無限に複雜な個體として觀念し得られるのである。『Wallas, Graham, *Our Social Heritage*, 1921, pp. 248 8.

もとより、かうした輕快な說明をよろこばないやうな傾向の人たちに取つては、右に引用した一節の如きものは、彼等の所謂『學的權威』に値ひしないものに見えるであらうが、實際問題の立場から『必然』と『自由意志』との關係を見究めようとする私には、それは私たちが取つてゐる見方を要領よく說いてゐるものとして、私の當面の用を足すには充分なのである。

六　本能生活と意識生活

しかし、必然と自由意志とを柄の兩面として解釋する見方は、如何に實用上の價値に富んでゐるにもせよ、この問題の説明としては、僅かにその出發點に當るそれとしてだけの意味を持つてゐるのにすぎないものである。といふことは、我々が單に實際問題としての、これらの兩者の關係を考察しようとするに際しても、矢張り言ひ得られることである。即ち、その場合に於ても我々は、尙ほ他の若干の要點を考慮しなければならない必要を感じるのである。

我々が社會的行動に携はつてゐる場合には、無論社會的環境への意識的統制を目標として、それに働き掛ける。それは我々が、我々の自由意志の實在及びその作用を最も鋭く實感する瞬間である。もとより我々は、さうした我々の『意志』も、それを行使する我々の『自由』も、共に我々の意志の抑制の到達し得ないところから働いて來る諸原因に依つて激成されたものであることを疑ふものではない。この意味に於て、我々の自由意志もまた、一種の必然の產物である。けれども、實際上の場合に於ては、我々は我々の自由意志が必然の產物であるか否かを、一々反問する餘裕を持つてゐるものではない。否、我々は寧ろ、飽くまで我々の意識的統制の目的を達成することの一點の上に、全力を集中しようとするものである。そして、我々がさうした努力の効果を重要視する限りは、さうする事は我々に取つて最も適當な態度だとしなければならないのである。といふのは、その場合に於て我々の目的が達成し得られる程度は、他の諸條件が變らない限り、我々がさうすることの熱度の厚薄の上に繫がつてゐるものだといふことが、一の必然として我々に臨むものだからである。

私が茲で態々かうした解り切つた平凡な事理を强調することには、そこに或る相當の理由があるのである。我々が直

會科學の方面から、必然の認識に即する何れかの種類の決定說に耳を傾けるとき、我々は動もすれば、我々の意識的行動を無益なものと斷定してしまふやうな誘惑に陷りがちになるものである。もつとも、我々に我々の意識的行動の無價値を信ぜしめやうとする努力は、或る他の方面から來るものも決して少くはない、といふことも事實である。殊に、古來の各時代の各社會の支配階級から一般民衆に薦められて來た道德的教訓のやうなものは　屢々民衆の意識的行動を冷却せしめやうとする意圖から割り出されて來たものである。現在の我國の場合に於ては、國民教育制度の創設者としての官僚の側から出た『德育』の綱目が、さうした方針の下におかれて居るものであることは、一般に周知されてゐる通りである。それはその根本に於て、民衆の意識的行動の上に於てよりは、寧ろ民衆の本能的行動の上に於て、より大なる價値を認めやうとしてゐるものである。もつとも、それは民衆の本能生活を重く見て居るとは言ひ條、實はそれが重く見て居るものは、民衆の服從本能の生活だけであつて、それ以外のものを一切無視して居る傾向があることは事實である。かうして盲目的服從こそ、それが一切の德育の根源として極度に推稱してゐるものである。即ちそれに於ては、これ程重く見られてゐる服從本能も、個々の場合に於て何に向けらるべきものであつて、また如何にして表現さるべきものであるかに關しては、各人に依つて自由に推理することが許されないやうになつてゐるのである。即ち、さうした推理は、一種の意識的行動であるが故に、許されないものにされてゐるのである。從つて民衆はただ、支配階級が命ずるがままに服從すべきだ、とされてゐるのである。かうして　暗がりの中に動く本能が生活の根源であつて、光りに照られて作用する意識は、生活といふものからいへば　寧ろ枝葉的なもの、末梢的なもの、とされてゐるのである。そこに、傳統主義が玉座に据えられ、合理主義が輕蔑の標的にされる根據が示されてゐるのである。

かうした官僚の道德訓に對して假借するところなき批判を行ふ思想運動が、多少とも官僚と共通

の社會組織を持つてゐる一般の支配階級から、橫暴な壓制を受けて來たのに、無理もないことである。それ故に、思想運動に對する支配階級の極端な壓迫は、最近に議會の重大問題となつた治安維持法を俟つまでもなく、年來間斷もなく行はれて來たのである。また近年思想運動と共に勃興した勞働運動の如きも、矢張り階級的に眼ざめた勞働者層の意識的社會統制を目標とする團體的行動を表示して居るものとして、同じ根據から、血の出るやうな壓迫を受けて來たものであつて、且つまた、同じ治安維持法の支配下におかれようとしてゐるものでもある。かういふ風に、我國の支配階級は、光を浴びた意識生活への民衆の眼ざめを極度に妨げて、暗がりに仄めく本能生活の裡に彼等をいつまでも繫ぎ留めたままでおかうとしてゐるのである。

かうした意味の本能生活の讃美は、單に官僚及びその一味である一般の支配階級から出る道德訓の骨子をなしてゐるばかりでなく、反動的社會思想が多種多樣の形式を取つて――時としては表面上進步主義思想の如きカムフラージユの下に――現はれて來てゐる今日の日本に於ては、屢々表面上それらしくない新粧を凝らして現はれて來てゐることもある。しかしながら、いづれにしても、近年來一般的に流布された進步的社會思想に依つて相當の程度に啓發されて來てゐる人々は、この種の議論に蠱惑されるやうな危險からは、比較的に自由になつてゐるやうである。で、專ら彼等に向つて警告する必要のあるのは、彼等が社會科學の方面から來るところの、必然の認識に即する各種の決定說に對する間違つた態度から、我々の社會的行動に於ける意識的努力の必要及び價値を輕視する誘惑に晒らされてゐる、といふ點に關してである。彼等に對してこそ我々は、自由意志の價値を特に強く注入する必要があるやうに考へるのである。今日我々に熱烈に要求されてゐる社會生活上の創造的意欲といふやうなものも、畢竟するに、我々の社會的行動に於ける自由意志の問題を離れて說くことは出來ないものである。

七　社會科學と社會的行動との融合點

しかしながら、既に我々の社會的行動の上に於て『自由意思』の働きを凝視することの必要を強調した私は、茲で再轉して、同じく我々の社會的行動の上に於て、社會現象の上に現はれるところの『必然』を正しく認識することの必要をも附け加へておかなければならない。私が見て居る通りの必然と自由意志との關係の考察に際しては、かういふ風に絶えず我々の論述を循環させて行くやうな行き方は、我々が一度に二つの言葉を聽者に解からせるやうに發することが出來ない限りは、どうしても避け得られないことである。それは兎に角、私は、我々の社會的行動に於ける自由意思の意義に觸れて居た場合にも、その『意志』並にそれを行使する『自由』が、我々の意志を以てどうにも抑制することが出來ない先行の諸原因に依つて決定されるものだ、といふことを注意し續けた。が、啻にそればかりでなく、その意志が働き掛けようとする環境――物的のものも社會的のものも――にしても、究極に於て我々の意志からの抑制が利かない因果律に依つて支配されてゐるものである。が、我々の意志の働きに對する障害は、まだ中々それだけで盡きてゐるものでない。我々は更らに、我々の意志が働き掛けようとしてゐるのと同一の目的物に對して、幾多の他の意志が働きかけようとしてゐる場合のあることをも忘れてはならない。しかも甚だ屢々、それらの幾多の他の意志は、我々自身の意志とは全然異がつた効果を狙つて、その同一の目的物に向つて働き掛けてゐるやうなこともあるのである。かう考へるとき、我々は我々の社會的行動の上に於ける自由意志の意義を認めても、しかもこの自由意志は、種々雜多の諸條件の下に於てのみ自由であり、そして自由な創造力を示すものであるといふ結論が、益々拒み難い力を以て我々の上に迫つて來るのを感じない譯に行かないのである。

今日では我々は、或る諸條件の下に於てならば、飛行機で空中を飛翔しようとする自由意志の要求をみたすことが出來る。しかし、さうしたことは、まづ第一に、ただ近代の機械的發明の進步が飛行機を出現せしめてゐる現代に於てのみ、言ひ得られることである。けれども、さうした機械的發明の進步を可能とした社會的環境は、我々に取つては、唯一つ與へられた事實であるし、そしてそれの到來に對しては、我々の自由意志は何等の交渉をも持たなかつたものである。更らにまた、我々が飛行機を操縱し得るためには、我々の知的及び肉體的狀況といふやうな、究極に於て、我々の自由意志でどうにも抑制の出來ない諸原因に支配される部分のある諸要素を考慮しない譯には行かない。それに我々が實際飛行を試みようとする場合には、その度毎に、氣流の關係のやうなものをさへも顧慮しない譯には行かないのである。更らにまた、我々が航空の上に於て或る記錄を作らうなどと企てる場合には我々自身以外の幾多の他の飛行家たちの操縱上の技倆をも、打算の中に加へなければならないのである。等・等・等。——

しかし、我々が單なる航空といふ行動よりも遙かに社會的行動としての性質の濃厚な或る行動に携はる場合には、我我が細心に考慮しなければならない諸條件が益々無限に多くなつて來るのである。しかも、それらの諸條件は、究極に於て我々の自由意志から抑制の到達し得ない因果律の支配の下におかれてゐるものである。從つて、我々が直接に働き掛けようとする社會的環境を、さうした因果關係を通して觀察する社會科學が供給する知識は、我々の社會的行動のためにも、非常に重要な意味を帶びるものとなつて來るのである。少くとも、我々の社會的行動が常に見當外れのものにならないためには、我々はそこに社會科學からの助けを高く評價する理由を發見するのである。もとより社會科學は、それが社會現象の間に現れる必然の認識を出發點としてゐるといふそれの本來の性質の上から、我々自身の社會的行動をも、一種の必然の産物として觀察する根據を持つてゐるものであるが、私はさうしたことまでが、直接に我々自身の

社會的行動の觀察に關係があるものだ、といはうとしてゐるものではない。だが、さうした本質を當然のこととして帶びてゐる社會科學から供給される各種の知識は、縱し今日に於ては、それの發達の程度が、自然科學上の知識に比較して、まだ極めて低いものであるにしても、しかも我々の社會的行動に對して絕對的に必須なものであることが、段々と明白に認められれやうになつて來てゐるのである。そして、このことが決して偶然でないといふことは、私が今までに述べて來たことで明かであらう。

かういふことは、社會運動が次第にそれの建設的段階へ進んで行くに從つて、それに携はる實際家達が、本能的に認識するやうに導かれることである。たとへば、イギリスの勞働黨が愈々政權爭奪運動を開始する機運に向つてから、それの理論家の一人である例のウェッブが、『勞働黨と新社會組織』(Labour and the New Social Order)と題する小冊子の中で、社會事實の觀察に關する『科學的方法』の重要性に觸れてゐるのも、全然かうした趣旨から來て居るものだといはなければならぬ。同じ傾向が我國の社會運動の上にも、何々『研究』などと言つたやうな名の下に、次第に顯著になつて來たのは、我國の社會運動が、甚だ遲ればせにもせよ、そして極めて緩漫な足どりに於てではあるにせよ、一歩一歩と次第に建設的實行期に向ひかけたことの徵證として見るのも、おそらく不當なことではあるまい。

八　政治家的經綸と社會事實

我々は我々の社會的行動に進み入るとき、最も普通な場合に於ては、意識的に若しくは無意識的に、私が上來述べた通りの必然と自由意志との關係から來る推論に從つて、我々の計畫を立てたり、進退を律したりするやうなことをしてゐる。たとへば、政治家たちが或る立法行爲を企てる場合には、彼等は無論、彼等がそれに依つて現前の社會的環境に向

つて意識的努力を行はうとしてゐるものであることを見てゐる。それは、彼等が彼等の自由意志を最も強く意識する瞬間である。もとより、彼等が彼等の自由意志だと考へてゐるものも、實は先行の諸原因に依つて惹起された必然の産物だなどといつたやうなことは、少くともその場合の彼等の打算の標的となつてゐるものではないのである。彼等は手短かにいふとその場合に何よりも先づ、彼等の自由意志の創造力に對する自信に力附けられてゐるのを常とするのである。けれども同時に彼等は、彼等の意識的統制の對象とならうとする社會的環境が、それ自身を支配する因果關係に依つて動いてゐるものだ、といふことを無視することが出來ないことを知つてゐる。しかのみならず、彼等はまた、その與へられたる一つの社會的環境の上に向つて彼等が新たに加へようとする意識的統制から豫期される影響もまた、精確に一定の因果關係を追うて現はれる筈のものだ、といふことをも知つてゐるのである。この意味に於て彼等が企てる立法行爲は、譬へて言ふと、一の自働機械を運轉させるために、最初にそれのスプリングのネヂを卷くと言つたやうな行爲に當るものである。彼等が彼等の自由意志に依つてなし得るものは、ただその一事だけである。そして、そのあとの仕事は、彼等の意志で左右することが出來ない一定の因果關係がなし續けて行くのである。かういふことは、政治家たちの或る立法行爲を企てるときに、明白にその意識中に置いてゐることとである。

もとより、彼等がさうして行く途中に於て、屢々意外の違算に陥ゐる場合がある。しかも、さうした違算は、平常の場合に於てさへも、決して稀れにでなく、また決して少い程度に於てでなく、始終繰り返され勝ちのものであることは、誰れもが知つてゐる通りであるが、殊に非常の場合――たとへば凡庸の政治家たちが注意して居ない間に漸次に醞釀しつゝあつた或る社會的變革が、いつしかその最高潮に達して、一朝俄然として社會の表面に爆發したやうな場合――に於ては、殆んど例外なく公衆の視聽の前で實演されるのである。この點に關しては、私はこの後今一度觸れてみる積

りであるから、今はそれを細論しないことにする。が、すべての政治家たちは、彼等の政治的能力若しくは手腕如何に拘らず、常にさうした逆算に陷るまいと努力する習慣を持つてゐることだけは事實である。それ故に、古來の國家政治の下に於ては、——殊に近代の國家政治の下に於ては、——現實社會生活の各方面に關する事實及び統計を蒐集及び整理することが、何よりもまづ第一に、立法行爲の準備的段階に於ける要件とされてゐるのである。もつとも、國家政治に於ける立法行爲が働きかける社會的環境は、事實上物的環境と複雜に錯綜し合つてゐるものであるから、それの必要上から蒐集され整理される事實及び統計は、單に社會現象に關するものばかりでなく、自然現象に關するものも共に含まれてゐるものであるが、私は本文の私の論述の目的の上から、特にそれらの社會現象に關するものゝ上に、私の注意を集めてゐるのである。が、いづれにしても、近代國家的政治の下に於て、調査とか研究とかの名に於て、社會生活の各方面に關する事實及び統計が、未曾有の大規模に於て蒐集され整理されるやうになつた傾向は、今更ら事々しく取り立てゝいふまでもなく、非常に顯著なものになつて來てゐる。それは、實際政治に於ける支配階級側の必然的要求に基因してゐるものである。そして或る意味に於ては、最近世に於ける社會科學の發達は、近代國家政治の下にさうして蒐集整理された社會生活上の事實及び統計を、それがそれ自身の基礎的資料として多分に利用したといふ事實に負うてゐることも少くないといふことは　我々にも無視することの出來ない一重要點である。けれども、この方面に於て近來特に我々の注意を促してゐる一新事實は、從來久しく純然たる被支配的地位におかれてゐた無産階級の側からも、同じ要求が漸次に擡頭しかけて來たといふ一事である。しかもこのことは、前にも言つた通りに、我國に於てさへも、今日では次第に明確に見られるやうになつて來てゐるのである。無論それは、或る點に於てイギリスの勞働黨の前例の刺戟から來たものであるには相違ないが、しかし同時にそれは、我國の無産階級運動が、段々と意識的社會統制を目指して進

むやうになつたことの確證としても見られるものである。

九　『社會法則』と『立法の原則』

しかしながら、政治家たちが立法行爲を企てるに際して專念に努力するのは、單に彼等が意識的に働き掛けようとする當面の社會的環境――物的環境も少くともそれに交渉する部分だけはその中に含めて――に關する事實及び統計の蒐集や整理だけに止まるものではない。彼等はまだその上に、彼等の立法行爲が當面の社會的環境の上に及ぼすであらうところの影響を、彼等の所期の意識的統制の目的に適合せしめようと企畫するのは、無論のことである。しかもこの場合に於て彼等は、一定の原因は常に一定の結果を生ずるものだといふ必然的關係を無視することが出來ないものでもあり、また實際上に於ても、それを無視しまいと努力するのを常とするものでもある。それ故に彼等は、彼等の立法行爲に依つて當面の社會的環境の上に或る一定の結果を擧げることを企圖する場合には、その目的に相應するやうにその立法行爲を調節して行かうと努めるのである。そしてその際彼等は、意識的にもせよ、若しくは無意識的にもせよ、彼等自身の『立法の原則』ともいふべきものを彼等の心眼の前に掲げて、始終それに依據して彼等の立法行爲を處理して行かうとするのである。

かうした意味に於ける『立法の原則』は、一面に於ては、それを立法上の規範としようとする當該政治家たちの『自由意志』に依つて決定される意識的統制の目的を基礎として打建てられるものであるが、他の一面に於てはまた、その意識的統制の對象である當面の社會的環境の上に現はれる『必然』を支配する因果關係――若しくは我々が簡單に『社會法則』と呼ぶもの――の觀察に立脚して作り上げられるものでもある。そして、社會的環境の上に行はれる因果關係

若しくは『社會法則』は、最も簡單にいへば、社會生活上に於て觀察された諸事實から歸納され、公式化されたものであることは、改めて斷るまでもあるまい。かうして、政治家たちの意識的統制の目的と、社會生活上に於て觀察された諸事實から歸納された社會法則とが、立法の原則の基礎の二大要素をなしてゐるものであることは、完全不完全の程度上の差異こそあれ、昔から今に至るまで、曾て渝らないでゐることである。たとへば、曾て第十九世紀の前半期に於てジェレミー・ベンタムが掲げた立法の原則と、現在のイギリスの勞働黨の政綱の中に現はれてゐる通りの立法の原則との間には、無論その項目の上に多大の相違點が見られるが、しかしそれらのものの基礎の上に、右の二大要素が置かれて居るものであるといふことだけは、兩者の場合に共通してゐる一事實である。そして、それらの兩者の項目の上に現はれてゐる相違點は、それらのものの各々が別々に重要視してゐる政治上の意識的統制の目的と、社會法則の認識との本質上の相違點から來てゐるものであつて、決してそれらの何れかに於てさうしたものが顧みられてゐないといふことから來てゐるものではないのである。

一〇　社會的變革と政治家的經綸

かういふところから、我々は次のやうな推論を引出して來ることが出來る——すなはち、政治家たちが、社會的環境の上に、並に社會過程の上に、意識的統制を及ぼして居る際に當つても、彼等はただ社會法則に依據してのみ、それを成し遂げることが出來るのである。少くとも、彼等が彼等のさうした意識統制が所期の効果を擧げることを企圖する限りは、彼等はただ出鱈目に彼等の意識的統制の目的を決定したり、また彼等のその目的を社會法則に逆行して達成するやうな手段を取つたりなどしてはならないのである。否、彼等がさうしてはならないといふやうな絕對的規範がどこか

にあるといふ譯では決してないが、しかし彼等がさういふことをしたところで、彼等の所期の目的が完全に達成されるといふやうなことは、萬が一にも期待が出來ないばかりでなく、却てそのことの結果として、全社會生活が收拾しやうのない混亂の渦中へ投げ入れられるかも知れない危險が、常にそこから發生しさうな脅威を示して來るのである。

若し政治家たちが、かういふ不幸を避けることを熱心に希求するならば、彼等はまづ第一に、社會過程の上に働き掛けようとする彼等の意識的統制が到達し得る範圍と、それが到底到達し得ない範圍とを見別ける必要がある譯である。我々は我々の社會行動に於て、我々の自由意志に何等の自信を繋がないでゐる場合には、何等の積極的活動をも、創造的努力をも試みる衝動を感じることがないものだといふことは、我々の經驗が常に我々に敎へてゐる事實である。がしかし、これに反して、若し我々が我々の意志の無條件的自由を確信するとするならば、我々の行動が、少くとも客觀的尺度に依つて測られる限り、箸にも棒にも掛らないやうな狂亂の境地に陷る虞れがないとは言へないのである。かういふことは、必然と自由意志とを楯の兩面をして見る立場からの、從つて意志の自由は或る條件の下に於てのみ期待し得られるものだと見る立場からの、當然の歸結として言ふことが出來るのである。しかも私は尙ほそれに附け加へて、實際上に於ては、政治家たちが彼等の自由意志に對する自信の缺乏から怠惰なる受動的態度に終始すると言つたやうなことは滅多に起らないことであるが、しかし彼等が彼等の意志の無條件的自由に對する妄信から、彼等の經世的行動の上に於て、狂態の限りを盡くすと言つたやうなことは、餘りに屢々經驗されて來たものだ、といふことを、序ながら記るしておきたいのである。

政治家的經綸上の實際問題として見るとき、政治家たちの意識的統制の到底到達し得ない範圍内のものとして、この方面に於ける我々の視野の上に先づ第一に展開して來るものは、永い社會進化の途上に於て、いつとはなしに釀成され行

くのを常とする種類の社會的變革である。かうした社會的變革は、究極に於てそれ自身の法則を追うて不可抗的に展開して來る社會心理的現象の『必然』の産物でもあり、また殊にそれは、社會生活上に於て、特別にどこにといふことなく、言はば普遍的に、そして大抵は隱微の間に、久しき期間に亙つて釀成されて行つて、そしてそれが愈々それの相當の高潮點に達した頃から、急に俄然として社會生活上の表面に擡頭する、といつたやうな過程を踏み越して來るのが普通である。そして、さういふことは、たとへば、專制主義の政治が猛烈に行はれる時代に、それへの反動として自由主義運動が勃興したり、資本主義の經濟組織が優勢に支配してゐる狀態の下に社會主義運動が現出したり、帝國主義がそれの降運の頂點に達した時に國際主義が擡頭したりする樣な趨勢の上に於て、近代人の日常の經驗事實中のものとなつてゐるのである。

かういふ風に、政治上に於て、或る傾向が盛になれば、必ずそれに對する反動の傾向が激成されて來るといつたやうなことは、――作用に對する反動が起るのが物理的必然であるやうに、――それは一の社會心理的必然である。如何に『超人』的な經世的能力や手腕の所有者である政治家といへども、この自然的若しくは不可抗的趨勢をどうにもすることが出來ないのである。それは、個々の政治家の意識的統制の到達區域の彼岸におかれてあるものである。といふのは、先づ第一に、如何なる政治家も、その意識的統制を、過去にまで溯らせることが出來ないものであり、從つて彼は、一の既成事實を、それが始めから既成事實でなかつたもののやうに變形せしめる、と言つたやうな魔術を行ふことが出來ないものだからである。更らにまたそれは、社會生活の上に働き掛けてゐる意志は、單に彼の意志だけではなく、彼の意志以外の幾多の意志が同時にそれに働き掛けて居て、しかもそれらの意志の中には、彼等の意志に逆行して働いてゐるものも決して少くはないといふことが認知されるからでもある。

かういへば、如何なる政治家も、右に例示したやうな社會的變革の前には、ただ呆然として拱手無爲の姿勢のまゝで

立ちすくんで居なければならないものであらうか？　否、少くとも近い未來の所論からは、決してさうした斷案が出て來ないのである。如何にも政治家は、彼の意志をどう行使しようが、旣に完成の途上に持ち來たされてある社會的變革をどうにもすることは出來ないといふことは事實である。彼がどれほど踠いても、社會進化の上に於て早晩完成されるべき必然性のある社會的變革は、結局はそれをそれの行き着くところまで行き着かせねばならないことになるであらう。それは確かな事實である。けれども、それと同時に政治家は、彼の意識的統制の適當な、若しくは不適當な行使に依つて、その社會的變革の完成の時期を早めるやうな促進的努力を試みるとも出來れば、それを遲めるやうな妨害的施設を採用することも出來るし、且つまた、その社會的變革に伴ふ一般の社會的混亂を深化するやうに反動的諸勢力を操縦することを企てることも出來れば、さうした社會混亂を最少限度に停止するやうに反動的勢力を抑制することも出來るのである。少くとも彼は、さうした樣々の意識的統制樣式の何づれでもを最も有力に行ひ得るとのために、國家生活上に於ける最も好適の地位を占めてゐるのである。そして、さういふところに、彼の政治家的經綸が試驗される機緣があるのである。

要するに、政治家的經綸に向つて一般世間から要求される最大要件は、彼が彼の地位から企てるところの、社會生活への意識的統制を、最も適當に行ふといふことである。尤も、さういふ場合に彼の自由意志から出て來るやうに見られるその意識的統制も、社會法則上の必然の產物だとして客觀的に說明され得るといふことは事實であるが　しかしさういふことは、餘りに解かり切つたことでもあり、且つまた、今の私の論旨に無關係なことでもあるから、私は玆ではそれを問題にしないことにする。それよりも寧ろ私に大切だと考へられることは、政治家がその經世的行動に於て、彼の意識的統制を最も適當に行ふといふとは、先づ第一に不可抗を不可抗と率直に認めることから出發して、意識的統制の

可能の範圍内に於て、それの可能條件に從つてそれを行ふことだ、といふ一點である。それにしても、政治家が行ふ適當なる意識的統制の諸條件はそれで盡きた譯でなく、その外にも尚ほ、我國の政界の套語となつてゐる『國利民福』とか、普通極めて曖昧な意味で用ひられてゐる『社會的公正』とか、更らにそれよりも一層茫漠たる意味に用ひられてゐる『人類の幸福』とか言つたやうな諸概念も、或る適當な意味に解釋されるときは、それらの諸條件の上に加へられることが出來るものでない譯ではない。けれども、かうした諸概念は、それらの内容が明確に指定された後でなければ、使用してみたところで始まらない話であるから、私はそれらに觸れることを後廻はしにする。

二　傳統的政治觀念への不滿

社會進化の永い途上に於て隱微の間に徐々に完成に向つて進んで來たところの或る社會的變革が、遂にそれの或る一定の段階にまで到達したところで、俄かに猛然として潮の寄せて來るやうに社會生活上の表面に擡頭したやうな場合は政治家の能力や手腕が、最も手きびしき試錬を受ける時期であるといふことは、前に既に繰り返して述べた。さういふ場合に政治家が執るべき道だとして一般世間から期待されてゐることは、彼が無暗に不可抗に抵抗する態度に出て、如何なる種類の社會的變革に對しても遮二無二防遏的手段を講ずるといふことではなく、少くともさうした社會的變革が如何なる點からも社會的必然のものと見られるものである限りは、それをして順調にそれ自身の完成の道程を辿ることを得しめるための施設を試み、それの進行に伴つて生ずる虞れのある一般の社會的混亂を最少限度に停止するやうに、その變革を促進しようとする急進的諸勢力と、それを妨害しようとする反動的諸勢力との間の關係を調節し、兩側の間の緊張狀態を出來るだけ緩和するといふことである。

かういふことが政治家たちに向つて一般世間から要求されるのは、普通の政治家たちが國家政治に於て『公平』な地位を占めてゐるものだといつたやうな、一種の傳統的通俗解釋から來てゐるものであることは、疑ひのないことである。が、しかし、かうした傳統的通俗解釋は、果して社會事實の實際に符合してゐるものであるか？

この問に對する答へは、前に既に與へられた。すなはち、そこで私が述べた通りに、過去に於ける人類の社會史上に於て際限なく繰り返された社會事實から歸納された社會科學上の解釋からいへば、各時代の各社會に於ける政治家たちは、決して國家政治上に於ける『公平』の地位におかれてゐるものではなく、常に支配集團若しくは支配階級の代理者として、當該社會内の各種の利害關係の調節とか、特定の秩序若しくは風教の維持とかの任務を擔當せしめられてゐるものである。それは不幸にも、今も昔に變らないでゐることである。かういふ事情の下に於て、彼等が國家政治に於ける觀念上の『公平』の地位から期待されるやうな種類の樣々の措置や施設を、實際上に於て行ふことが出來ないのは、決して偶然ではないのである。

しかも國家政治の常態の下に於ては、さうした事情から來る彼等の破綻が暴露されることがなくて、若しくは比較的に少くて濟むこともある。そして彼等が、決して階級政治を行つてゐるものではなくて、實質に全社會の利害休戚を中心とした政治を行つてゐるものであるかのやうに、外面の體裁を繕らうことに成功するやうな場合も、決して稀れに見られることだとは言へない。がしかし、さうした狀態が、如何なる關係の下に於ても永續的に維持され得るものだとは、尙更ら言へないのである。殊に或る重大なる社會的變革の進行が顯著になりかかつて來たやうな場合には、當該社會内の支配集團若しくは支配階級の利益の保管者としての政治家たちは、忽ちその假面を剝がされて、そこに彼等の生地の儘の正體を現はし、觀念上『公平』であるべきものとされる彼等の地位から期待されるところの如何なることをもな

し得ないことを、ありのまゝに、示さないで居られないやうになるのである。

かういふ譯であるから、彼等は或る重大なる社會的變革に面する時は、その變革が社會的必然であるか否かを問ふ前に、彼等はまづ第一にそれに對して防遏手段を講ずることに急いで行くのである。即ちそこでは、彼等の『怖新性』が、その對照の如何なるものであるかを見究める遑もなく、急遽に動員されるのである。彼等は彼等の『公平』の地位から期待されるところに從つて、その社會的變革に加擔する急進的諸勢力と、それと對抗する反動的諸勢力との衝突を緩和する努力を試みることをしないばかりでなく、すべての新勢力に對しては理非を糺さずに出來るだけの壓迫を加へ、すべての反動的勢力に對しては曲直を問はずに出來るだけの便宜を與へるのを常態とするのである。もとより、彼等がかうした絶望的努力を繰り返すにも拘らず、その變革が社會的必然のものである限りは、それが遂に行きつくところとまで行き着いて、波瀾萬丈の間を潜り拔けながらも、結局それ自身を完成するまでは休止しないであらう、と云つたやうなことを考へるものも、決して不自然なことだとは言へないであらう。が、しかし、如何に望ましき社會變革といへども、それが完成されるために、不測の社會的混亂と、異常の人命の損失と、無限の文明の破壞とを伴ふものである限りは、餘りにも高價なる犧牲を以て贖はれたものだとは、當然にいはれるべきものである。さうした犧牲も已むを得なければ、人類はそれを負擔することを忍ばなければならないかも知れない。且つまた、人類社會に於ける政治過程が、過去から現在まで渝らずに、たゞ一本調子に盲目的に進行して來たやうに、將來に於てもそれが無限にさうしたことを續けて行かなければならないものだとすれば、さうした犧牲を負擔しつゞけて行くことも、或ひは人類のために定められた免かれられない運命かも知れないと言へるであらう。けれども我々は、今一度立ち止まつて、それに對する意識的統制が可能であるか否かを考慮しなければならないものではなからうか？　そして若し我々が、かうした方面に於て當

來の政治家たち及びそれを支持する支配階級を到底信頼するに足らないものとの見極めを附けるならば、我々はそれに取つて代はるべき新政治的勢力に着眼することが無價値だとはいへようか？

いふまでもなく、政治過程の上に向つて行はれる意識的統制は、社會法則上の必要に順應せしめられるのでなければ、それから如何なる實際上の効果も期待し得られないものである。それは我々には、否定の出來ないことである。けれども我々は、從來に於ける實際政治上の行動規範として與へられて來たものが、種々の意味に於て壓倒的に支配階級及び民衆の本能生活を强調することの一面に偏して、空疎な概念として以外には、意識生活への眼ざめの必要が、事實上に於て閑却若しくは妨害されてさへ居たことを認めて、そして政治思想の方面に於て、この缺陷を救ふことが、我々の當面の急務であることを力說しようとするのである。

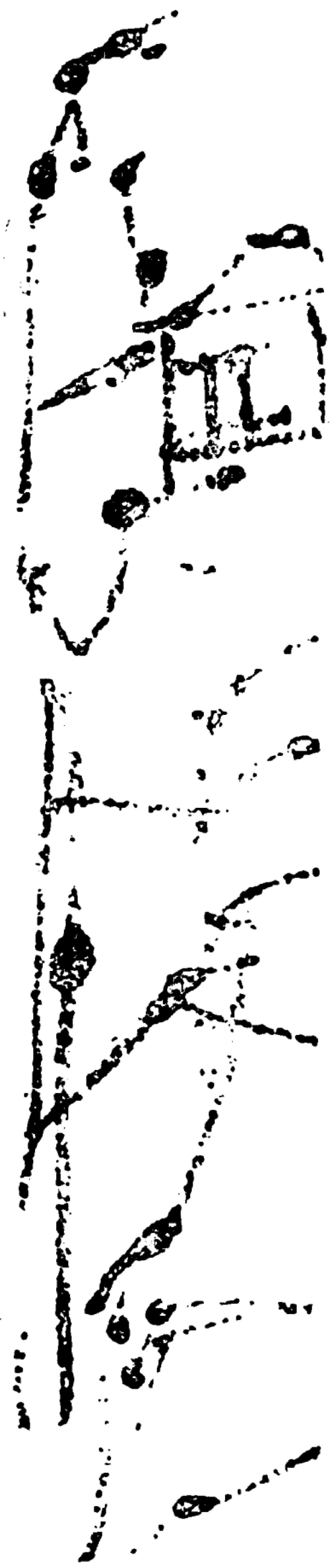
一二　新政治的勢力への期待

我々は、現代日本の政治的雰圍氣内に於ける生活者として、自國の政治過程が如何に盲目的進行を續けてゐるかを顧みる時、一種の凄慘な恐怖感にさへ襲はれないで居られない。即ち先づ外政の方面に視線を投げると、そこでは支配群としての資本階級の利害關係が、一切萬事を裁決してゐることが、餘りに顯著に見えて來る。殊にそれは、對支外交や對露外交の上に最も露骨に現はれて居るが、しかし世界の大資本國家であるイギリスやアメリカに對する追隨外交若しくは迎合外交の如きものも、一つとしてそれの表象でないものはないのである。ただ最近に於ける日露復交の擧の如きものは、表面上寧ろ異例とすべきものであるやうに見えるが、しかしそれも實は、或る特殊階級のみが獨占することが出來る利權に着眼しての上のことであつて、そして一般民衆は、關係條約面に記載されてある通りの、接壤兩國間の善隣

關係とか、經濟上の協力とかからは、極力遮斷されようとして居るのである。更らにまた内政の方面に於ては、一層陰慘な光景が我々の視野の上に展開されて居るのが見られるばかりである。今それを手近の實例について言へば、普選の實施は治安維持法を伴ひ、勞働組合法の制定は噂ばかりに止まり、久しく民衆の呪ひの的になつて來た治警法は改廢されようとする模樣もなく、失業問題の根本的解決のための適當な方策は試みられようとすらされないでゐるし、物價の調節問題は徒らに議會の饒舌の賑ひの種となるばかりであるやうなことは、單にその數例にすぎないものであるが、しかしさういふことだけでも、我々の心を無限に暗くするには充分である。そしてすべてが、民衆に服從本能の固守を强ひる支配階級及びその傀儡であるところの政治家たちの支配的本能の放縱無拘束な亂舞の裡から出て來てゐるのである。それにも拘らず、支配階級の代辯者としての政治家たちは、觀念上の『國利民福』とか、『社會的公正』とか、『人類の幸福』とかのの標語を高く掲げて、彼等が全然さうした諸理想に依據して『公平』な立場から社會過程への意識的統制を行つて居るかのやうな不遜な態度を示して居るのである。けれども、現在の我國に於ても見られる通りに、階級對立の關係が顯著な現實となつて來て居る狀態の下に於ては、さうした諸理想は、實際問題としては、單にブルジョアジーとプロレタリアートとの兩階級のそれらに對する別々の解釋を通してのみ、社會的に別々の具體的存在を持つて居るものと見做し得られるに過ぎないのである。そして、若しもその間に『公平』な立場があるものとすれば、これらの兩階級をして、フエアー・プレーの原則の下に、平和的にそれぞれの階級生存からの主張及び要求を自由に、且つ充分に闘はしめる機會を提供することの一途あるのみである。けれども、事實上支配階級の驅使の下にある今日の政治家たちから、さうした『公平』を要求することが出來ないことは、いふまでもないことである。それは、稀代の惡法といふべき治安維持法が第五十議會に於て制定されたといふ一事だけに依つても證明されてゐる。この新法こそは、支配階級の政治的

本能の盲目的行使の間から出たところの、最も代表的な產物の一つである。そしてこれが如何に我國の政治過程の盲目的進行を一層輪をかけて盲目的なものにすることに依つて、社會的混亂を一層甚だしく增進させる可能性を包藏してゐるものであるかを考へるときは、我々は無意識的にも、一種の戰慄をさへ感ぜしめられるのである。

我々はそれ故に、眞の意味に於て社會的に適當なる意識的統制が、我々の眼前の政治過程の上に行はれることの必要なを以て力說せずには居られないやうな衝動に驅られる。そして我々は、さうすることが、我々の日頃の學說上の立場と矛盾するものであるか否かを問ふ餘裕をさへ持たないのである。で、我々はそれを絶叫するために、前後を顧みないやうな狂態を演ずることをさへ躊躇しようとはしない。もとより我々は、支配階級及びそれの代辯者としての在來の政治家たちに向つて、さうした相談を持ち掛ける勇氣を、若しくは忍耐を持ち合せてゐない。それにも拘らず、我々は今一應は彼等に警告を與へることはするが、しかし、實はその警告の効果を信頼することは出來ない。我々は寧ろ、近來に於て擡頭の徴候を示しかけた新政治的勢力としての無產階級の政黨の上に、我々が望むやうな政治過程への意識的統制の遂行の希望を繫ぐ。しかも我々は、その意識的統制の目標を、既に近年來社會思想の上で反復的に言ひふるされてゐる無產階級のイギオロギーの裡に發見する。我々は茲には述べ盡くすことが出來ないほどの多くの理由に依つて、それを敢ていふのである。そして、我々はまた、それらのイデオロギーを、現實の政治上に移入せしめるに貢獻しようと努力をすることの裡に、我々の現在の絶望を將來の希望に化する可能性のあることを信じようとしてゐるものである。疑ひもなく、第五十議會で制定された治安維持法は、無產階級の政黨の出鼻を挫いた効果を示してゐる。けれども我々は、必ずしもそれで屏息する必要はないのである。苟しくも我々が我々の意氣を沮喪せしめない限りは、この新法の出現は、却て我々の——そして一般の無產階級の——戰鬪意志を强めしめ、且つその階級的大同團結の機運を促進せしめるやうに利用が出來まいものとは、誰れにも斷定が出來ないものである。



日本に於ける生物學上の研究

ハンス・モーリッシュ

狹い故國の範圍から出ることの出來ない生物學は、世界の動物、植物界又は全人類に關して正當なる見解を持つことが出來ない。中部歐羅巴では、生物は甚しい四季の變化の影響を受けて居る。然るに熱帶地方では、一年を通じて氣候の變化は甚だ少く、從つて其の動植物は判で押したやうに一つの型にはまつて居る。熱帶以外の世界の各地では、地理學上、地質學上又は生物學上の見地から、各々非常なる差異がある。即ち各地方は、固有の特徴がある。故に自然研究者が故國を去つて遠方の國へ來ると、新しい環境から澤山の刺戟を受けて、其の新しい印象を研究するのである。

私が二十六年前熱帶の瓜哇に行つた時もさうであつたが、二年前に私が日本政府の名譽ある招聘に應じて、仙臺の帝國大學の植物學部の主任として赴任して來た時も同樣の感があつた。私が此の日の出の國に來て自然研究者として受けた刺戟は、澤山で又多樣であつて、丁度瀧の水に打たれたやうに、次から次へと新しい刺戟を受けて、初めは殆ど休む

暇もないやうであつた。然し時を經るに從つて、調和せる平衡の狀態となり、二ケ年の間には、研究の主體は一段落を告げたのである。

有名なる雜誌改造の提敬する主宰者山本實彦氏の依囑により、私が日本滯在中主として興味を以て研究した、學術上の問題二三に就いて、此所に簡單に述べて見たいと思ふ。

一、日本の溫泉中の生物

アイスランド、ニユージーランド、及び北米のエローストーンパーク以外では、日本、やうに溫泉、鑛泉の豐富な所は、世界でも少ない。南は台灣から北は北海道に至り、東から西まで、大日本島帝國の至る所に澤山の溫泉が湧き出でて、其の數實に千以上に達して居る。日本は實に溫泉の本場と云つて差支ない。

此の溫泉は種々の方面から、即ち地質學上より物理學、化學其他の方面から研究せられた。然し生物學上からの研究は、三好博士の二つの有益なる論文以外には殆ど手がつけてない。そこで私は此の缺陷を補ふために、私の微力の及ぶ範圍に於て研究に從事したのである。

如何なる生物が溫泉中に生活して居るか、どれだけの溫度に堪へることが出來るか、如何なる特性を彼等が持つて居るか、溫泉中に生物の存在する意義如何等は、私が研究せんとした問題であつた。

多くの非常に高溫でない溫泉では、顯微鏡的の微生物では、光線の達しない所には、バクテリヤのみが棲息して居るが、光線の當る所には、藻類が現はれて來る。此の外に往々下等の動物も加はつて居る。即ち滴蟲類、鞭毛蟲類、アミーバ、蠕蟲の一種なるアンギルラ等である。

バクテリヤには色々の種類がある。其の內で特別の興味のあるものは、硫黄バクテリヤ、紅色バクテリヤ、鐵バクテリヤである。硫黄バクテリヤは特に硫化水素に富める溫泉に生活して居る。紅色の色素を持つて居る紅色バクテリヤも同樣の場所に棲息して居る。鐵バクテリヤは割合に少い方であるが、鐵を含む溫泉では大抵これを見る事が出來る。硫化水素は多くの植物には、微量でも毒であるが、硫黄バクテリヤは硫化水素の多量に堪へるのみならず、其の發育に此の瓦斯を要するのである。これは生物が外界の狀態に適應する顯著なる實例である。

溫泉（私は泉源で攝氏二十度以上の鑛泉を總べて溫泉と呼ぶことにした）が屋外で直射日光を受けて居る所では、通常綠藻類及び藍藻類に屬する種々の藻類を見ることが出來る。硅藻類と藍藻類は硫黄泉では、大抵硫黄バクテリヤ、紅色バクテリヤと一所に現はれて來るが、外圍に適應して、有毒なる硫化水素の多量に堪へて居るのである。

總べての溫泉の生物は、他の植物が發育しないやうな又直に枯死するやうな高溫に堪へる。私がバクテリヤや藻類が發育して居るのを見た溫泉の溫度は大抵は攝氏の二十度以上六十度の間であつた。私が見た內で、藍藻類のシネココックスが繁殖して居た最高の溫度は攝氏の六十九度であつて、或絲狀バクテリヤは北海道の定山溪の溫泉では、七十七度半の高溫で尙生活して居た。

文獻を見ると、日本以外で一層高溫の溫泉中に藻類の生活して居ることの報告があるが、かゝる事實は余程注意して調べた上でなければ、容易に信ずることが出來ない。これは往々精確なる測定を行はずして、報告するものがあるからである。私の研究によつて明かになつた著しい事實の一つは、日本の各地で行つた觀察の結果、綠藻類と藍藻類は攝氏の四十度迄は一所に現はれて來るが、四十度以上になれば綠藻類は全く跡を絶つて、藍藻類のみが發生することである。即ち攝氏の四十度以上六十度迄の溫泉では、常に藍藻類が繁茂して居ることは、殆ど法則と云つてよい程である。

これも亦顕著なる適應の實例である。藍藻類が盛んに發生して居る温泉に手をつけて見ると、一秒間も堪へることが出來ない。思はず知らず手を引込める。又此の中に木の葉を浸せば、數分ならずして熱傷して枯れて終ふ。かゝる他植物が枯死する如き熱湯中にバクテリヤ、藍藻類は生長し、發育するのである。

多くの温泉の藻類は普通の温度でも生活し、發育生長するが、概して高温を好み、或ものは高温に於てのみ生長し、繁殖する。

非常に興味ある事實は、好熱性の藻類及びバクテリヤ類は温泉以外にも廣く分布して居ることで、私は實驗室内で或適宜の水を三十度乃至五十度に熱して、好熱性の藻類を發生させて、盛に繁殖させることが出來た。それは水道の水か井戸の水又は河の水に或幾分になる藻類の少量を加へ、これに土か溝の水の幾分を入るればよいのである。かゝる藻類の胞子は往々地中に存在して居るが、これを發生、繁殖させるには、適當なる状態特に高温を要するのである。

藍藻類が温泉に棲息することは、此の種の藻類が恐らく地球が徐々に冷却して、尙其の表面の大部分が高温の水を以て掩はれて居た頃、最初に現はれた生物ではないかとの考を起させる。藍藻類と或バクテリヤ類とは高温に堪へる生物であるが、地球の開闢の當時生活し得るものは前者のみであつた。私が好熱性の生物の現出する有樣を調査し、或バクテリヤや藍藻類が特に温泉のみに發生する状態を研究すればする程、今日生存して居る温泉の生物は、數千萬年前の大古に、地球の熱い表面に最初に發生して、地球が段々冷却するに從つて、此所彼所に殘つて居た温泉中に退却した好熱性生物の遺物であるとの確信を強めるのである。温泉の生物は我が地球の地殼が尙温熱を持つて居た時分に、最初に發生した始原植物の遺物と考ふべきである。

二、鐵生物

鐵生物とは下等生物即ちバクテリヤ類、藻類、鞭毛蟲類其他の下等動物の膜の上又は膜の内部に、多くは酸化鐵として鐵を沈澱するものをいふのである。鐵バクテリヤは此點に於て著名であるが、藻類、鞭毛蟲類、滴蟲類でも多量に鐵を貯藏するものがある。鐵バクテリヤは私が年來研究したものであれば、此の生物が日本にも生存するや否や、若し存在するとせば、如何なる種類であるか、又鐵バクテリヤが地質上如何なる作用をなし、日本の含鐵層の成因と如何なる關係あるや否やは、私に取つて興味ある研究問題であつた。

私は日本の各地を廣く旅行して、鐵バクテリヤは日本國内に廣く分布して居て、殊に稻田の水中に多く存在することを確めた。肉眼を以て、往々稻田の可なり廣い面積が、粘液狀の銹色の塊團を以て充されて居るのを見ることがある。これを顯微鏡で檢査すると、大部分クラミドトリツクス・オクラセア及びガリオネラ・フエルギネア其他の鐵バクテリヤより成つて居るのである。又鐵分を含んで居る水のある池沼、涅滯にも鐵バクテリヤを見るのである。

或一種を除いては私は歐羅巴にある鐵バクテリヤは凡て日本にもあることを確めた。其の外に尚ほ一種の新種を發見した。然しこの新種も探せば恐らく歐羅巴にもあるであらうと思ふ。高等動物は大抵は日本のものと歐羅巴及び其の他の地方のものとは全然別の種類であるが、鐵バクテリヤは他の微生物と同樣に世界共通性のものである。

日本の森で、歐羅巴の種類と同一の植物を見つけることは、容易のことでない。私が始めて神戸、東京及び仙臺附近の森の中又は野原を散歩した時に、見る植物として珍奇ならざるものなしで、大多數は生れて始めて見たものばかりで、唯驚異の眼を以て熟視するの外なかつた。森の中を逍遙する時は、全く未知の世界にあるが如き感じがあつたが、顯微

鏡下で該生物を研究すると、多くの既知に遇ふことが出來た。即ちバクテリヤ類、鞭毛蟲類・下等藻類・滴蟲類及び其他の下等生物は、歐洲も日本も又他の國々も大抵共通で、殆ど全世界に廣く分布して居る。

私は多年鐵バクテリヤ及び他の鐵生物が自然界に於て鐵の沈澱に重要なる貢獻をなし、又低沼地の鐵鑛の形成に關與し、而して高等の水草も亦鐵の沈澱を促進することを主唱した。最近に至り米國の地質學者ハルダー氏は私の主張を裏書し、且つ之を擴張するの事實を發見した。即ち米國の土壤及び淡水の中に鐵の有機化合體、例へば枸櫞酸鐵アンモニヤの如きものより鐵を沈澱するバクテリヤが廣く分布して居ることを證明した。

かゝる鐵の化合體の溶液を消毒して、無菌の狀態にして置けば、何時迄も透明のまゝであるが、消毒しない方の溶液は暫くすると混濁し始め、終には其の中の鐵は全部赤褐色の酸化鐵として沈澱する。

私は以上の事實の正確なることを確信し、日本の土中にも又水中にも同樣の現象のあることを發見した。又海水中にも同樣に有機鐵化合體を沈澱するバクテリヤの存在することを確めた。

そこで我々は自然界には或バクテリヤ、藻類、其他の微生物は鐵を多くは水酸化鐵として沈澱し、疑もなく純粹の物理化學的の原因以外に含鐵層の形成に貢獻して居ることを見ることが出來る。

諺に云ふ『小なる原因が大なる結果を生む』なる語は珊瑚礁、白堊土、硅藻土及び珊瑚類、有孔蟲よりなる石灰岩の構成に適用せらるゝのみならず、日本の土壤中に多き低沼地其他の含鐵層の形成にも當てはまるのである。されば日本の土壤に普通に見る銹色の赤土層の成因は、單に物理化學的の原因のみに歸すべきでなく、主要なる原因の一は前述の生物學的作用に因るものである。廣く世界に分布し、萬國共通とも云ふべき生物が含鐵層の形成に大に關與して居ることは、此の方面の研究が進むに從ひ、益々明かになつたが、就中ナウマン、ハルダー兩氏の研究により、一層明瞭に之を

知ることが出來る。

三、石灰バクテリヤ

石灰バクテリヤとは、炭酸石灰を結晶形に於て、細胞外に沈澱するバクテリヤをいふのである。私がヂエラチン又は寒天の上に海水中のバクテリヤを澤山培養した時に、度々培養器の上に現はれ來る多數のバクテリヤの聚落の中で、多量の炭酸石灰の結晶を含有せるもの又は結晶で被はれて居る若干の聚落のあることに氣が付いた。此の結晶は通常亞鈴形又は球形で、特別の聚落に限りて存在し、同時に發生して居る多數の聚落には少しも含んで居ないから、私は海水中には石灰を炭酸鹽類として沈澱する特殊のバクテリヤが居るであらうと想像した。

純粹培養によつて精密なる研究を行つた結果、私の想像が間違ないことが確められた。

既に米國に於ても、ケラーマン、スミス兩氏は海水中に前述の性質を有するバクテリヤを發見した。これで見ると、石灰バクテリヤは廣く世界の海水中に分布して居るものと云つてよい。私は太平洋に面せる松島及び青森灣の海水を檢査して、兩者共に此のバクテリヤを發見した。海水は概して石灰の含量少きも、特に石灰を加へずして、其の中に解けて居る石灰だけで、此のバクテリヤに石灰の沈澱を起さすに充分である。然し鹽化カルシユムの如き石灰鹽類を特に加へると、石灰の沈澱は速に又一層明瞭に現はれる。

此のバクテリヤの聚落は、非常に多量の炭酸石灰の結晶を含有して居るから、肉眼で見ると特殊の混濁を認める程である。私の研究が進むに從ひ、海水の外に淡水にも石灰バクテリヤが生存して居ることが明かになり、又バクテリヤの外に或る黴菌も炭酸石灰を沈澱する機能あることを發見した。即ちアオカビ屬及びカウヂカビ屬の或種類の黴菌は此の特

性を有するのである。

如何にして石炭の沈澱を生ずるか。石灰バクテリヤは窒素を含める有機物例へばペプトーンを分解してアンモニヤを生じ、それが呼吸の際發生する炭酸瓦斯と化合して、炭酸アンモニヤとなる。炭酸アンモニヤが手近にある石灰鹽類、例へば硫酸石灰若くは鹽化カルシユムと化合するとせば、一方に硫酸アンモニヤ又は鹽化アンモニヤが出來て、炭酸石灰が沈澱するのである。

以上の説明が正しいことは、硫酸アンモニヤの溶液中に石灰鹽類、例令ば鹽化カルシユムの溶液を加へると直に炭酸石灰の沈澱を生ずるのを見て知ることが出來る。

石灰バクテリヤは自然界ではアンモニヤの存在する所で、石灰を多量に沈澱して、重要なる役目を果して居る。即ち海底に大量に沈澱して居る炭酸石灰の一部は、此の石灰バクリヤの製産物であると云つてよいと思ふ。

私は此所に最小の生物が自然界に於て重大なる作用をなすことの新しい例を擧げ、此の生物の研究が重要なる新知識を學界に貢獻したことを述べたのである。

四、死せる葉の炭素同化作用に就て

綠色の葉の内で行はれる炭素同化作用は、植物の生理作用の中で最も重要なる作用の一つである。葉綠粒のみが空氣中の炭酸瓦斯を砂糖、澱粉等の有機物に變化させることが出來るのである。葉綠粒は實に最も驚嘆すべき化學實驗室である。化學教室及び少數の例外を除いては、外に純粹の無機物から有機物を製造する所はない。葉綠粒のみが此の驚くべき作用を行ふ機能を持つて居るのである。

今日學界一般に行はれて居る說は、炭素同化作用は生きたる葉の内に於てのみ行はれ、死と同時に中止せらるゝものであるといふのである。然し私は二十年も前に次のやうな事實を發見した。それはオドリコサウの葉を攝氏の三十五度で充分に乾燥し、最早生活機能がなくなつても、光線をあてると遊離酸素を發生することである。

私は其の當時酸素の證明に發光バクテリヤ法を用ひた。發光バクテリヤは遊離酸素の存在する所に限り光るのである。其酸素の量は、極めて少量でよい。私は講義の際、學生に見せるために、一メートル程長い下の閉ぢた硝子管に肉汁養液を充し、これに發光バクテリヤを加へると、管全體が强く光る。然し五分乃至十五分後には、發光は衰へて、上部の空氣に觸れて居る液面の外は全然暗黑となるのである。

硝子管内の液體の光力を失ふのは、バクテリヤの盛なる呼吸作用のためである。肉汁の中には或分量の酸素が溶解して居るから、發光するには充分であるが、バクテリヤ自身の呼吸によつて、間もなく酸素が消費せられ、從つて今まで光つて居た液體の柱が暗黑になるのである。然し若し硝子管を倒にして、空氣の小氣泡を液體中に入れると、全體が再び光を發するやうになる。

酸素の檢定には種々の精密にして鋭敏なる方法があるが、發光バクテリヤ程鋭敏なものはない。此のバクテリヤ法は酸素の檢定には簡便にして又最も確實なる方法で、現今ではこれ以上の良法はない。

此の方法を以て、私は前に述べたやうに、比較的低い溫度で乾燥した葉が、光線にあたると酸素を發生することを證明した。然し其の當時は、唯一種の植物では成功したが、他の植物では不結果に終つた。私が仙臺に來て松島の太平洋の海水から强く光る發光バクテリヤを手に入れることが出來たから、再び乾燥した死んだ葉の酸素發生の實驗を始めて見た。少しく方法を變へて實驗したら、以前歐羅巴で私が實驗した際例外であつた事が、今度は普通の事實であつて、

私が實驗した時にも光を當てゝ乾かした葉が酸素を發生することを、發光バクテリヤによつて明瞭に證明することが出來た。

今回私が用ひた方法は、新に摘み取つた綠葉を攝氏三十五度の定溫器で三日間乾燥し、これを乳鉢で磨りつぶして、適量の蒸餾水を加へて、綠色の淡い粥狀のものとする。其の少量をナイフの尖ですくつて、バクテリヤのために強く光つて居る肉汁を充たせる瓶の中に入れ、直に磨り合せの硝子の栓をして、瓶の中には小さな氣泡さへも殘つて居ないやうに注意する。暗室でこれを見ると、肉汁の光は、大抵は數分の内に消へて真暗となる。これに強い光を當てると、酸素が遊離して液體は再び光り出す。引き續き暗室に置けば、光は消へるが、これに強い光を當てると、直に光り出すのである。此の實驗は何時でも確實に行はれるから、私は日本の學生に講義の際、暗室で見せることにした。

私が前述の實驗に用ひて特に好結果を得たのは、クローバー、ニハトコ、ホウレンサウ、ソラマメ、アブラナ等の葉である。然し若し葉を磨りつぶした液汁を濾過して用ひると、光線に當つて酸素を遊離する反應は無くなるのである。

三日間乾燥しても葉は尚生きて居るかも知れないといふ批難を避けるために、五日間乾燥した葉を更に純硫酸又は鹽化カルシユムの乾燥器（デシケーター）の中に三週間入れて置て、これを實驗に用ひると、クローバーの葉では陽性の結果を得た。乾燥を五週間以上續けると酸素遊離の機能は餘程弱くなり、三ケ月乃至五ケ月後には全く反應を失ふのである。

クローバーの葉を三日間三十五度の定溫器で乾燥して後、一時間半六十度に熱しても、尚明かに前述の光線反應を呈する。ソラマメの葉を三日間三十五度で乾燥したものは、明瞭なる反應を起すが、これを一時間九十六度に熱すると酸素を遊離する機能を全く失ふのである。

以上述べた所から、比較的低溫で乾燥した葉を磨りつぶしたものは、光線を受けて酸素を發生する機能を有すること

は疑ない事實である。其の際遊離する酸素の量は、普通生きた葉に於て自然の状態に於て發生する量よりは少ないが、死んだ葉に於ても炭素同化作用が行はれるといふ根本問題には影響がないのである。即ち炭素同化作用と關聯せる酸素の發生は生命とは無關係に行はれるものである。

葉緑粒は死んでも酸素を遊離する如き機能は絶滅しないのである。凍死した葉が種々の生理的現象例へば酵素の作用の如きものを保持して居るやうに、乾燥によつて死んだ葉が、光線を受けて酸素を發生する機能を保留して居るのである。然らば此の光線を受けて酸素を遊離する作用は一種の酵素の働であるとも考へられる。勿論此の考を確定的に證明するには、更に精密なる實驗をする必要がある。

何れにしても乾燥によつても死んだ葉が尚酸素を發生する機能があることは、私は最早疑ふ余地がないと思ふ。私はこれに就て尚實驗を繼續して居る。

五、蠟を好む菌類に就て

川村清一博士の研究によれば、美しき模様があつて種々の器具等に用ひて貴重される斑紋竹は、寄生菌類又は竹が出す色素の爲めに生じたものである。然し此の外に或暗黑色の菌類が、竹稈の一定の場所に限りて蠟を分泌する所に常に着生して居るといふことは、これまで誰も知らなかつた事實である。

多くの竹類では、節の直下の所に黑い環があつて、竹の稈の緑色又は黄色と對照して、目立つて見へる。此の環はアントシアンの色素のために出來て居る場合もあつて、其の時は暗紫色又は黑紫色を呈するが、暗黑色の菌類の着生による場合が少くない。後の場合には黑色を呈するのである。かやうな菌類の環は竹の中でもアルンチナリヤ屬のものに多

い。

然らば一寸不思議に見へる菌類の一局部に限定して着生する原因は何であるか、其の理由は竹の節の直下に環狀に蠟の層があつて、蠟を好んで養分として發育する菌類が着くためである。

菌類の着生せる黒色の環の部分を剃刀でこさげ取つて顯微鏡で見ると、蠟の中に縱橫に分岐した暗綠色の菌絲が見へる。殘念ながら菌類は全く結實せないから、學名を決定することが出來ない。此の研究により蠟を好む菌類が或一定の植物の上に常に着生して居るといふ特殊の事實を確めたのである。

クロモヂやウリハダカヘデの枝にも常に暗黒色の菌類が着いて居る。

私が或る晩日本の料理屋で食事をして居た時、食卓の上にあつたツマ揚枝の一面の黒いのみに目がついた。これを持ち歸つて研究して見ると、ツマ揚枝の材料はクロモヂの木で、黒いのは木の皮の上に着いて居る黒褐色の菌類のためであることが分つた。クロモヂの皮の黒い原因に就いて多くの人の意見を聞いて見たが、誰も菌類のためであるなどと考へる人はなく、皆クロモヂの木の特有の色であると思つて居た。此の木の一年生の若い綠色の枝でも既に菌類が着いて居て、年を經るに從ひ菌類の層が厚くなつて、手指位の太さの枝では、往々眞黒になつて居る。

ウリハダカヘデの莖は、子供の腕の太さ位になると特殊の模樣が現はれる。極若い初年生の莖は蠟の薄い層で掩はれて居るが、秋になると黒味を帶びて來て、數年の內には段々黒味を增して、終に眞黒となる。黒い層は枝全體を掩ふこともあるが、莖が太るにつれて新らしい綠色の皮が加はるために、莖の表面に特殊の模樣が出來て、瓜の皮のやうに見える。日本で此の木をウリハダカヘデと呼ぶのは適當の名である。

此の菌類はトルレラ屬のもので、私の觀察の及ぶ範圍では、ウリハダカヘデで此の菌の着かないものはない。

竹桿の或一定の場所や或樹木の皮に或菌類が常に着生して居るのは、其處に蠟が着いて居るからであるといふ私の見解が正しいとすれば、其の菌類を蠟の上に培養することが出來る譯である。

私は黄色の晒さゞる蜜蜂の蠟を用ひて實驗したが、前述の菌類は蠟より養分を取つて、よく發育することを確めた。此の事實は學術上興味あることであつて、今まで菌類を蠟の培養器に培養したことはないのである。

六、其の他の事項

以上述べた問題の外に、日本の植物に關する種々の現象に就て研究した。例令ば日本の植物に雨水に濡れ易い葉の多いこと、これは雨水の流下に都合のよい先の尖つた葉の多いことゝ關聯して居る。念珠藻（ノストック）と二種の苔類ブラシヤとカビクラリヤとの特殊なる共生關係の說明、海の光と發光バクテリヤとの關係、樹木生理に關する特別の現象、其他種々あるが、これを一々記述することは、紙面が許さない。

前に述べた私の學術上の仕事の概梗を見ても知れるやうに、日本は澤山の生物學上の刺戟を私に與へたから、世界に於て最も親切なる國民の一つである大和民族の住める日の本の國の滯在を愉快にしたと同樣に有益なるものとした。日本では國民が上も下も擧つて植物を尊び、愛し、又は崇拜するが、此の國は生物學者に取つては、植物の生活現象の研究に對して廣い未開の領域である。

以上簡單に概梗を述べた私の日本に於ける生物學上の研究は、追て特別の論文又は書物として關係の文獻を加へて精細に出版するつもりである。

日本についての印象

エンミー・レーデラー
エミール・レーデラー

編者曰く。――本篇はレーデラー教授夫妻の日本觀ではあるが、實は東西文化の特質とその融合の可能性に關する大なる問題の提供である。

筆者の解答に關しては異議をさしはさむ人は多いであらうが、問題の重要は何人も之を認めざるを得ぬであらう。

二年間の日本掩留も、いよいよ終りに近づいた。もう直きに、船が吾々をのせてこの海岸をはなれあのアジア大陸の大きい影をさして動き始めるであらう、そしてこの美しく日照る島は、水平線のかなたへとかくれて行くであらう。

自づからに集ひ來る追憶の數々。日本がこの國に住んだ經驗のある人に與へる感銘。それを私共はこゝで述べようとは思はない。またこの一文は私共の思ひ出の記であつてはならない。それについては、もう度々相當にエライ旅人等が、彼等が日本で受けた印象や彼等のこゝろが如何に日本に捉へられたかなどの物語を傳へたことである。そは如何にも重大なことでもあるかに。

だからと云つて、日本がどう、あるかと云ふことを描いて見る譯でもない。もとよりそれは、この限られたページに盡くべきことではない。私の企圖は、客觀的現實の立場から見て、客觀的な現實であるところのものを示して見ると、即ち、日本のある方面についてそれが私共にどう見えたかと云ふことを語つて見ようといふのである。それは、私どもがこゝで集めて作つた一幅の繪の筋書であり、他日仕上げるべき機會を得たいと考へる作品のデッサンに過ぎない。そしてこゝにこの二三のスケッチを未完成のまゝに選び出して世に示さうとするのは、要するに、この神秘なる國の扉を披くべく、私共を導いてくれた私共の日本の友への感謝の紀念に過ぎない。まことにこゝでもまた、他の國に於けると等しく、偉大なるものに達するの道は、たゞ人間の意識を通じてのみ可能である。日本を了解しやうと思へばそれを紹介してくれる友人がなくてはならない。外國に來ては人間

と接觸することなしにはその國を了解することは出來ない。さうしてこの國に於て私共の出くわせた人々がどういふ人々であるかと云ふことは、もとより尋常普通に經驗し得ることゝは全く異つた事柄であるのは云ふまでもないところであるが、私共がいくらかでもそれを知り得たのは、筆にしたり、口で云つたりすることの出來ないある人情の温氣があるが爲に外ならないのであつてかう云ふ人情の雰圍氣はたゞそれを感受し、經驗し、それを體得するより外はないのである。

では、いつたい、私共がこの國について何を云ひ得るであらうか？あまり永くもない月日を過したまでの私共が、何の理由あつて吾々の印象を語ることを得るのであらうか？二年前までは何も知らなかつた人々、且つその國をよくも見てゐない人々の意見などを、日本人は何の必要あつて聞き、それによつて何の得るところがあらう？云ふまでもなくかう云ふ企が大きい問題だと感じてゐること、私共に如く者はあるまい。この故にこの小文は、何等かの決論を與へようとの意でもなく、また何等かの解答や教訓やを示さうとのつもりでもない。然り斷じて答案ではない――それとは反對に單なる問題の提供に過ぎないのである。

問ひつ、眺めつ、私共はこの國を訪ねてまわつたのであつた。その自然に與へられ人文にはぐゝまれたこの國の現象形態と、その本質とが如何によく調和してゐるかを見ようと考へてであつた。そしていつも觀察者の態度を忘れることなく、こゝにあるところのものを、あるがまゝに見たいと吾々は考へたのであつた。――先づ吾々が注目するところの吾々身邊の事柄より始めて、つねにつとめてその内的眞相に觸れやうと心がけたのであつた。

或は色々の制度や生活樣式やについて、或は人々の行動について、私共が特異だと考へたものについては、それを更に色々と尋ねて見た。先づさう云ふ事實や行爲が、どう云ふ意味を有つものかを質し、ついで、それの歷史的心理的由來をもさがしあてやうと考へたのである。そして初めは全く不可解なもの、否奇妙だと思はれるものですら、それを色々の他の之に類似の生活事實、例へば風俗や習慣や價値の決定の仕方やと云つたやうなものと、よくその本質を捕へて比較して見ると、それがだんだんと了解の出來るものとなることが度々であつたのである。かくして最後に私共の問題はたゞ發展して、この吾々の了解した特異なる具體的事實の第二次的な結果や影響はどうであるかと考へるのである。即ち吾々はかう問いて見る。日本人は

——內外の推測により吾々の說明し得る範圍の解釋に從へば——物をかく見てかく見ない、かく行ひ、かく感じかく批判するが、それは、そもそもどう云ふ意味であるのか？と。又例へば、かくかくの社會の傳統は、果して、彼等の精神に如何なる影響をもつであらうか？それは如何なる點に觸れてこの精神を制約するか？（蓋し一定の傳統は、一方の方向へ進む條件を爲すと同時に、それと反對の方向へ進むさまたけとなる條件となるに相違ない。）またそれは如何なる點に於てこの精神を解放し、以て西洋の進步の線上には存しないやうな別の特色と可能とを有せしめ得るのであるか？と。こう云へば、吾々は如何にも自己中心に物を判斷するやうであるが、それは洵に已むを得ないのであつて、何等かの點を捉へて私共が日本と接觸しやうとするならば之より外にはないのである。云ふまでもなく私共は、吾々及吾々の考へ方を、決して絕對の標準だと云ふのではないけれども、近代日本人の本質は何であるかを知るがためには、彼等をその吾々に對する自然的關係に於て觀察するのが一番當を得てゐると私共は信ずるのである。何となれば、彼は今やその本質に於ても、その形態に於ても、「國際的」文化財を領有しようとしてゐるのであるから、彼の精神的物質的存立の問題として次のやうな問題が生じて來るのである。曰く、「いつたい、吾々は、天賦の本質に照し、また吾々自身が作つてゐる文化と傳統とに鑑みてどの位まで進んで行くことが出來るのだらうか？」と。

この問題についてならば、吾々にも多少關知し得るところがあり、またこの問題にならば私共にも與へられた通路——實際的又は理論的の——があると云へよう。

以上のことは當然に、吾々のもつ問題は、一つの問題ではなくして、問題の集團であることを示してゐる。けれども、この問題の集團を系統的に展開することはもとより吾々の力の及ぶ限りではない。それを爲し得るためには、世の中の色々のことについて充分色々の知識をもつことが前提條件であるけれども、それは固より貧弱なる私共の力の及ぶところではない。私共は吾々にせまつて來る多くの事象の內から、無理やりにも見なければならぬものを抽象するより外に道はない。吾々が熱心に研究してさがしあてる多數の印象の內よりその一二を選ぶより外はない。そしてこゝには、私共は、私の注意を特に興味を引いた問題のみに向けて、私共が考へて見た事柄と問題とを列舉するに留めやうと思ふのである。そしてそれを私共の學びたるまゝに了解したるまゝに——否恐らくは正體をつかみ得なかつたまゝに、或は誤解したまゝに述べたいと考へるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

外國人にとつて、國とは、先づその風景である。彼が遠いところからやつて來て、一團の群島が大洋に浮游してゐるのを見るならば、彼はこゝでは、凡てのものが小さく美しいと思ふであらう。けれども、彼が一度足を國内に進めるならば、彼はこの自然の大さを知りその雄大さを知るであらう。然らば彼はこの風景は、たゞの風景ではなくして眞の日本流のそれであることを知るであらう。登山家は單純なテクニックの問題だと解するかも知れないが、ともかくも、山水が吾々の眼にうつるためには、その山水が吾々の眼にうつるべき一定の形をもつてゐることが必要である。即ち山水の形態と雖も、その解釋を必要とするのであつて、從つて日本の山水も亦、その山水について日本人の考方を爲し得る人、即ち山水について日本人の觀念と實在とを有し得る人にして始めて之を了解し得るものと云はねばならぬ。パラドキシカルに聞えるやうだが、人間はそれを見るやうに、自分の外界を作り上げるのである。外界は美的現象であるとは、繪畫が人間の眼に教へた事實である、それだからこそ太古の人類は自然の美に對して盲目なのである。

その故に、多くのヨーロッパ人がこの國に來てゐながら、その眼の前に橫はつてゐる山水の特色を知らないでゐるのは決して不思議ではない。蓋し、彼等はそれを見ないのである。否たとひそれを見ても、ヨーロッパ流にそれを見るのだから、眞相には觸れることが出來ないのである。

あの脈々として展開しやがて突兀として重疊する連山、連峯、それは平野のたゞ眞中より突然に崛起し、五月には杜鵑花にもえつくされ、秋には滿山の紅葉にやけてつくされんとする光景、地上いづこにかその匹儔を求め得やう。この南國の陽の光に、この光景を親しく觀ない人々には、之を見て吾々の心臟の鼓動が高鳴るを覺え、之が人生に於ける最大の瞬間だと感ずることを了解して貰ふことは出來ない。それは決して二度とそのまゝに現し得べきものではない。それはこの世の驚異であつて、それをさながらの色に示すことは、到底出來得ることではない。こゝに陽の光より來る眼の喜びとなるべきものは、凡て相集まれりと云ふを得べく、櫻花爛漫として匂ふところ、恍惚として吾を忘れる日本國民の心境は、このとき必ずしも知ることが出來ないとは思へぬのである。

峯々山々は灌木を以てかざられた豐かに廣い平野の花や花咲く樹々は、云ふまでもなく、或は凡々と、或は燃えたる火のやうな奇怪な姿の山々にかこまれた高原、その中に、烟をはいて

ある噴火山のそゝりたつ岩壁、その色が間断なく変化してきながらにはげしいリズムのやうに動く世界と見ゆるおそろしきばかりの谷底、これに對してしばしの薄明にさまざまの色彩を映じ出すけわしい峠。凡て吾々の收獲したこれ等の寫眞、なかんずく、ほどよくしつらへられた鳥居と、高き社殿の丘を通して撮影せられた最大最美のそれ、凡て之等の寫眞はそれがあだかも日本精神の至純の特質であるかの如くに、いつまでも、私共の北歐の曇つた秋の日を照すであらう。然しこの日本の精神が如何に多くこの風景より流れ出で、且つまた如何に度々そこにと還り行くことよ。

ヨーロッパ人にとつて景色と云ふのは、彼が、街路と石造の家との間におしこめられて、それ等のものと詩的に感情的に結びついたときに始めて發見さるゝものである。そしてこのローマンチツクな巨牆をへだてゝ景色が、始めて繪となる。始めは大きい勇ましい繪であり、やがてはなつかしき美しき小さき繪である。現代となつては、この色々の關係がいつの間にか、一個の自然的な美的な、若しくは一個の繪畫的な關係となつてゐるのであるが、この關係は、果して一個の純眞な、本質的なものであらうか、それとも、わざと感じわざと作り上げたものであらうか？、言葉をかへて云へば、一般平均的に、ヨーロッパ人の景色を見る眼が、日本人のそれと同一であらうかと、

吾々は、自分を忘れてたゞ眼をのみ動かしつゝたゝずんでゐる白衣を着た巡禮の一隊の人々を忘れることが出來ない。ことに私共がふとしたことで湖畔に見た一人のすがたは、忘れやうとして忘れることの出來ぬものである。一人の百姓が、先端の尖つた偏傘を手にして雪よりも白い衣に立つてゐた姿。沈み行く太陽を見まもりつゝ靜かに風光に眺め入るとき、彼の心にはく一切の野心もなくたゞ靜かにしていさゝかの亂れもなかつた。彼は、疲れたる人の眼をたのしむが如くに、除ろに呼吸しつゝうつらう光とめぐる色彩とにながめ入つてゐた。このとき彼は譬ふれば一人の繪畫家と云へよう。それは神への祈でもなく自らの美の鑑賞でもない。彼は畫中の人にして、畫は彼あるによつて畫である。いかでか之より外にこの光景を云ひ表はす言葉があらう。然らば日本人は吾々とは異つたやうに、吾々よりはより深く、より美しく物を見ることが出來るのであらうか？、だが、これは、語り得べきことでもなければ、知り得べきことでもない。たゞ云ひ得べきことは、吾々と日本人との窮極の差異即精神の地方的特色はこゝにあるのであらうと云ふことであり、そしてそれは、私共には何だかたしかであるやうな氣もす

る。もしさう云ふ差違が實際にあることを知るならば、それはそれだけで可なり重要なことである。

* * * * * * *

智識階級の外人がこの國に來て見ると彼は、別の國に來たやうに感ずる。何となればこゝでは凡てが自然の狀態へと逆もどりをしてゐるのであつて、こゝでは人類が事物に衣を着せて作り上げる概念や言葉が人間に話しかけるのでなくして、事物それ自身が吾々に話しかけるのである。到るところ彼をめぐつて錯綜した澤山な脚をもつた繪文字が踊つてゐる。たとへ、彼に語學の才があつても、さしあたりに於ては言葉は單純な溪流のさゝやきの如きものであるから、凡て眼の力に依賴するより外はないのであるが、さてその眼に與へられるものはまさにこの錯雜なる繪なのである。この繪文字！　あるときは塊のやうなものでモシヤモシヤしたものが納まり返つて靜かにしてゐるやうでもあり、またあるときは、ゴチヤゴチヤと色々の影が錯綜したいらだゝしいものゝやうにも見え、その文字に筆者のやるせない忿怒が生き生きと盛られてゐるが如くにも見える。それは何たる情熱の表現、何たる感情解放の藝術であることであらう。そして如何に多樣の言ひ表はし方と偶意とが文字に與へられることであらう。

まことにヨーロッパの國語に於ては、會話者の音調によつて表はされるところのものが、こゝでは文字を書く人によつて、文字で自由に表現されるのだとも考へられる。が或はさうでないのかも知れない。即ち表現に用ひらるゝ文字はたゞ形の美さだけのために用ひられるのであつて、その美しい形に附隨した何の偶意もある譯でもなくまた別に大した意義もないのであるかも知れない。それは云はゞ直線や曲線や形やに關する眼のよろこび以上のものではなく、從つて大した意味のあることではないのかも知れない。

いづれにするも、日本人はその眼を通じて文字に生き文字で考へてゐるから、この繪文字は彼に取つて一つの表徵である。そしてその結果として、日本人にはしばしば、表徵さるべきものゝ代りにこの繪文字が意識に上るのである。たくさんの繪文字を學ぶと云ふことは、むつかしいこと、骨の折れること、尊いことであるが故に、やゝもすれば繪文字を知つてゐると云ふことが學問があると言ふことと同義と解される。同時にまた知識と云へば文字を知ることだけであるかにも吾々に見えることがある。そしてそれ以上に突き込んで考へやうとはしないかの如くでもある。吾々の知つてゐる範圍でも決して文書又は演說

の中に、自分の知つてゐる二、三の言語が出て來ると、もうこれで全體がわかつたと云ふ風に考へる日本の學生が吾々の知つてゐる範圍でも決して鮮くはない。蓋し彼等は自分の知つてゐる繪文字に出遇ふとそれで意味がわかつたやうに考へると同樣に、言葉がわかれば、凡てがわかつたやうに思ふのである。ヨーロッパの母國語については、言葉を言葉として學ぶと云ふやうなことは全然問題にはならない。即ち特別な科學上又は技術上の言葉をのぞいて、一般に勉強して學習する言葉などゝ云ふものはない。その故にヨーロッパ人は、文字の意味が全部了解され易いやうな本に向つても、その本がそれだけで直ちに讀めたとは考へない。例へば『ファウスト第二部』又は『純正理性批判』を讀む教養ある獨逸人は、その本文の一字一句についてその表現の詳細を知つてゐるのは勿論、單に言語の上ではいろいろ微妙なる變化をも味ひ得る場合であつても、それだけで彼はこの本の全部を了得したものであるとは云はないのである。然るにもかゝわらず日本人に於ては、言葉とその言葉の使はれてゐる特定の意味とを截然區別すると云ふことが、また充分徹底して考へられてゐない如くである。これが先づ第一につとむべきことであらう。もし私共にして、日本の青年とヨーロッパの精神生活とを結ぶために何等かの貢獻を爲し得たとするならば、それは私共が、眞に了解すると云ふことはたゞ文字を讀みそれにルビをふるだけのことではなく、まさにそれ以上のことであることを力說これつとめたことにあると考へてゐる。かくしてかう云ふ方向にわざわざ考へ方を向けて行くならば自然それによつて自己調整の習慣を養ひ得べしと考へたのである。

ヨーロッパ人が書物を讀むときには、言葉はそのまゝ發音符である。即ち言葉が直接に吾々に『話しかける』のである。しかし日本ではさうでない。こゝでは何物も直接に話しかけて來るものはないが、言葉と雖も自ら話しかけないで、それの繪姿、それの象徵を代表として吾々に向つて來るのである。即ちそれは、一方に於ては發音符として他方に於ては繪文字として同時に二つの形を有つてゐるけれども、その生命は寧ろ繪文字たることに存し、それであることによつて明確にして終局的なのである。かくして吾々にとつて、それぞれ異つた文字であり言葉でなければならぬものが、日本人にとつては、同じ言葉の異つた形であることが多い。何となれば異つた事物に同じ字を用ふるからである。故に例へば日本人は、『この字はかう讀むのだ、あゝよむのだ』などゝ云ふのであるが、之は、吾々ならば、一つの意味を云ひ表はすのに、色々のニュアンスをもつた言葉が

あると云ふべきところであらう。こう云ふニユアンスと云ふやうなものが日本人にはないのだらうか？彼はその形象文字に於て同時にその意味をも一定の型にはめてしまふのでないだらうか？

この言葉と文字との關係、この言語とその定義的用法との關の關係が、日本の、或は一般に東亞の最も大きい特長だと云ひ得るのかも知れない。即ちこゝでは、一切のものは、そのまゝの形で、露骨に眞直ぐに、ぶざまなまゝには存立しない。言語に於ても、自分をかくし、自分を後方におしやつて、なるだけその代理者を前方につき出して置かうと云ふ風が強い。それは決して言葉の發達生長を害するものではなく、それとは寧ろ反對に言語の分化とその發達とを助けるものに相違ない。何となれば、文字は窮極に於ては、この文化的社會に於ける思想の了解を保障せざるを得ないからである。しかしながら言葉が云ひ表はさうとするもの、言葉の內容は、必ずしも、決定的に、一定の形をもつた發音符でなければならぬと云ふことはないのであつて、たゞ吾吾に把握の出來る一定の形態をもたねばならぬと云ふに過ぎないであらう。かくしてその形象が一定に定まると、その形象がやがて獨立して言葉として第二の生命をもつやうになるのである。このときその言葉はたゞの音符でなくして、同時にまた一つの意味をもつのである。そして發音上の云ひ表はし方は全く一時的のものであるから、地方により時代に應じて種々に變化するのである。

故に日本の文字は、一見皮相的な人々が考へるよりは、より多く日本人の考へ方と關係あるものである。即ちそれは考への進行を害するものたるのみならず、それを變更させるものでさへある。これまさに日本と云ふものゝ本質の一重要點であつてこの文字を變更するものは、日本の精神をしてその軌道を變更せしむるものであると云はねばならない。又之を變更するともこの精神は果してその新しい軌道の上をうまく走るかどうか？何人もそれを斷言することは出來ぬであらう。吾々外人と雖もこの日本の現代を支配する型と制度との意味をつかみ、その關係とその相互の依存條件とを了解することは出來るかも知れないが、さて然らば、それをどう云ふ風に變更したらいゝかと云ふやうなことについては、何等決定的の事を云ひ得ぬであらう普通の歐洲人にとつては、文字は極めて簡單な問題を態と複雜にする原因となるだけのものゝやうに見えるけれども、この文字は日本の精神をしてまさに特異のものたらしむるために極めて深き關係あることを思ふならば、之を容易に變更するのは果して當を得てゐるであらうか。いづれにするもその變更の主力

は其の第一にそれに關係する文字の[illegible]ことにそ
ゝまるべきでなからうか。

云ふまでもなく、ヨーロッパ人の日本の文字に對する關係は以上にのべたところと何の關係もない。彼にとつて、當初は日用茶飯事が凡て如何にも大袈裟な形式的な、幻影の大膽な所産のやうに思はれる。そこで彼は街頭の看板に興味を覺え、別にその意味は何であるかなどは知る由もなくして、何ぞか特に美しい看板に眼をとめるやうにもなるのである。かくして二三の字が彼にしたしくなると、やがて彼はわからぬながら、その二三の字をつなぎ合せて見てゐる内に——多くは虛に——一步一步いらだたしい感じに打たれるのである。何となれば、彼が今四分の一・又は半分位知り得るやうになつた文字の數と、とても學び遂げ得られやうとは考へ得ないほどの彼の知らない文字の恐しい數とを比較するからである。もとより勝れたる才能をもつ人々はこれ位の困難にまけてはならぬと考へ、どうかしてこの世界を知るの門を入りたいと考へるであらう。けれどもいよいよ深くしていよいよ絕望である。そして多くの努力が何等の効果を齎さず完全に水泡に歸する場合が鮮くないのである。

＊＊＊＊＊＊＊

[illegible]い意味で歷史的であつて、傳統と便宜とに制約せられてゐること、從つてヨーロッパ風の考へかたを基礎づけてゐるところの意識され或はされない凡ての步調がないこと、之である。而してこの傾向は純學問的な方面にまで及んでゐるのであつて、日本の文化をして固定せしむるに貢獻するところ決して尠少ではない。

吾々の經驗によれば、思惟の傳統的なことは、最も近代的の日本人の間に於てすら、極めて強い。例へば國土、王朝、家族、氏族、その他學校、商店、工業等の制度に關する意識の如きは、或る特定の場合に極めて重要であるべき一定の元素的意識若しくは一定の存在的力である。加ふるに生活上の慣習や行爲上の制約は極めて微細なる發達をとげてゐる。凡てこの傳統の内に、ある特種の道德、封建的と名付けて差支へがないであらうところの道德が行はれ、而してそれに基いて色々な相互關係が出來てゐて、その關係は何れも單なる利害關係のみに立脚するものではなく、相互的な人格的な、連帶的な關係である。

日本風の思惟が、或は純粹なる理路を離れ、或は又論理上當然生ずべき結論に到達し得ないのは、その多くの場合に於てはかくの如き内的束縛、情義の情的關係が、その因をなしてゐる

爲である。而して特に形式を重んずる結果この情誼關係は本來の純眞なる感情以上に擴張されるのであつて、その人の範圍に就ても、その事の内容に關しても甚だ廣くなり、そのため、何事につけても嚴格なる批判を下すことが出來ぬやうになるのである。蓋し斯の如き關係は、皆各自の意識の内の問題に屬し全く統制さるゝことがないからである。それはたゞ存在し、尊重されるに過ぎないからである。ヨーロツパ人にとつては之ほど不合理なことはないと見えるけれども、その實は決してさうなのではなく之も亦ヨーロツパ風の論理的思惟に劣らない系統的な首尾一貫した思惟の一つであると云はねばならぬ。唯日本人がヨーロツパ風の思惟に習熟せんとする時、即ち論理主義により思惟の數學的嚴肅を保たうとする時、この日本的統一は始めて破られるに過ぎない。しかも日本人は、この間隙が、如何に甚しいかを充分認めてゐないやうである。

而してこの傾向は、今日もなほ封建的勢力が殘骸としてゞはなく生ける力として作用し決定的要因として存在しつゝある實業界而かも一方アメリカやヨーロツパと交渉を持たねばならぬ實業界に於て最も著しく現はれてゐる。

傳統や便宜の障害が存しない方面に於ても、ヨーロツパ風に思惟することに對しては又別に一つの制限がある。けだし、ヨーロツパの特種的科學的思惟自體既に吾々の意識しえない深甚の歷史的な、時としては感情的とも云ふべき多くの前提に基いてゐるからである。而してその中には、ギリシヤの神話的の考もあり、ヨーロツパ人日常の生活の中に入り込んだキリスト教的要素もあり、彼等日常の生活と渾然一體を爲す聯想もある。かくの如くにして百年前のヨーロツパ人の著作上の表現法が、充分日本人に了解し得べきやは疑問である。もとよりかゝる障害は之を除却することが不可能だとは云へないけれども、哲學的用語は勿論のこと、純科學的の用語と雖も決して單なる論理の道具でないことに鑑みると、この障害の根源も亦相當に根深いと云はねばならぬ。

ヨーロツパの國語はそれ自體の内に強き情火と測るべからざる調子と、色々に變化する能力とを包藏してゐるのであつて、これが、ヨーロツパのアジア精神に對する一特色——必ずしも有利とは云へない一特色である。ヨーロツパに於ては各階級が各々その國語をもち、各時代、時には各都市が各自分達の表現方法を作り出してゐる。從つて、之等の凡てについて特異をすてゝ眞髓を眺め、多樣の内に共通性を辨別し、相違の中に本質的なものを、認識し得んがためには、數百年否數千年の訓練を經て獲得された大なる抽象能力を必要とするであらう。

か[illegible]にして[illegible]、ものであり、思索の把持者（言葉）の特質によつて、制約せらるゝものであることが明らかであつて、譬へば建築『自體』か存在してゐないと同様に、『純粋な思惟自體』などと云ふものは存在してゐないものである。而して、十九世紀は、自然法に對する絶對的信仰と建築及び彫刻方面に於けるギリシャ的理想型の絶對的尊重とを打ち破つたが如く、（この兩者は、普通考へられてゐる以上に密接な關係になつてゐる）二十世紀は、深く歴史主義に沈潜して、合理主義の絶對信仰を打破しようとしてゐるものである。云ふまでもなくこのことも亦一定の前提の下にのみ妥當するに過ぎないけれども、少くとも今日のヨーロッパ人には妥當することは疑なく、吾々としてはかゝるヨーロッパ的思惟の成果以外何等世に提供すべきものを有たぬのである。まことに吾人は今、精神の發展史上の一危機に逢したのかも知れない。さうしてこの世とての意味とを、凡て相對主義の上に置いて、これまでとは全然別の範疇によつて了解しようと試みつゝあるものであらう。云ふまでもなくこれがヨーロッパ哲學の現下の問題である。けれども吾々が一般に『アジア的』『東洋的思惟方法』と呼んでゐるものは、この解決に對して何等の貢獻をなし得ないであらう。從つて吾々も亦、日本精神上の[illegible]を組入してたゞ思想界を混亂させることをのみしてはならない。吾々のなしうることは、これとは反對に、最高の成果を、最も純粋な形式で提供することである。しかも、その内から何を選び、如何に深くその内にはいりこむかについては、凡てを東洋自らの自由に放任しておかねばならない。私共は日本の精神界が立ちつゝある地位の極めて重大なことを知れば知る程、吾々は吾々の提供しうるものを提供するに止め、それ以上に決して指圖がましい干渉などをしてはならぬと考へるのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

色々と言葉の上の不便があるにもかゝわらず、又彼等は外國人教師との交際を大變なことのやうに怖れるに拘はらず、私共は若い日本の知識階級の人々の特色、性質、及び彼等のもつ問題に就て、かなり根據ある判斷を作りえたと信ずる。又二三の大學に於ける講義や（ヨーロッパの大學に於ける演習に類似した）大學内に於ける小人數の集團に於ける學問上の論議やによつて、さてはまた親しい交友關係を通じて、私共は他の外國人には容易に得がたい程度に、彼等を理解し得たと信ずる。加ふるに、ヨーロッパ特に獨、墺の青年學生に就ては、私共はその最

近の發達及傾向を熟知してゐると云ふも必ずしも僞言ではないであらうから、この點に關してはヨーロッパの實際家や政治家が見落し易いこともいくらか鋭く見得るものであると信ずる。

さて、過去の日本の知識階級の人々は、ヨーロッパやアメリカで勉强した。彼等は、印度や日本に在留するヨーロッパ人が——殊に彼等が純眞にして研究的である場合にするやうに、先づヨーロッパの言葉を、つぎにはその思惟の内容を、主として暗記的に勉强したのである。このヨーロッパの學問を暗記的に勉强することに付いて生じた現象は彼等が往々外國語を精密に而も最も完全に習熟したと云ふことであつた。けれども外國人と日本人との關係は、もとより表面ばかりに限らるゝのは免れがたきところであるため、彼等をして、言葉の練達と云ふことが、直ちに精神的問題の充分なる了解であると錯覺せしめた。勿論これには例外はあらう。しかし歐洲精神に深く入ること、即ち哲學、認識論、理論的學問、歷史、藝術等を深く學び之を完全に了解すると云ふことは本來容易のことでない。況んや日本風の考方を以つてしてそれを成就するが如きは事の性質上甚だ困難な譯であるが、これ等の古い時代の日本人には、彼等自ら完全にヨーロッパ化したと思つてゐる人が甚だ多い。その[illegible]、彼等の習慣、彼等の[illegible]方並[illegible]等も全然日本流であるのだけれども、彼等自身はこれには氣がつかないである。

新らしい時代の人々は、さうして新らしければ新らしい程、右に對しては又一段の飛躍をなしたが如くである。蓋し、彼等にとつては、ヨーロッパは、少年時代から最早氣味の惡い何物かではなかつた。彼等にとつてヨーロッパは自由の國であり、新らしい價値の支配する國である。彼等にとつてヨーロッパは、たゞに、電氣、鐵道、石造家屋等生活上の表面的なものだけではなく、實に生活それ自體として見えるやうになつて來たのである。

之を要するに新舊知識階級の根本的の差は次の點にあると云へよう。即ち古い時代は、ヨーロッパを技術的に卓越したものとして受け容れた。蓋し國家の危機に瀕すべき一大覺悟は、一切の躊躇逡巡を許さなかつたものと云ふべく、ひたすらに文明を受け容れ、速に西洋風の機械操縱に習熟することによつて、即ち『種痘を受けること』によつて一日も早く獨立の域に達しようと試みたものである。かくして古い日本人の眼に映じたヨーロッパは、不可思議な機械のヨーロッパであり、主として技術と自然科學のヨーロッパであつたのである。かくして一見ヨーロッパ化し[illegible]

や、[illegible]來の日本的であつたのである。之に反して今日の日本は、自らかに之等の技術上の問題以上に出てゐる。即ち新らしい時代の日本人は、ヨーロッパの精神生活に適する途を獲得したのであつて、今や彼等は「ヨーロッパの精神生活は吾々に對して果して如何なる意義を有するか」を問題とするに至つたのである。

　この問題は多くの人にとつて、而しておそらく最も秀れた人にとつては特に、今なほ未解決の問題であらう。蓋しこれは日本と西洋との精神を合して一段高い形式に融合せんとするもの、即ちその特色と本質とに於て全く異れるものを打つて一丸とし全く存在せざる文化を作らんとする一つの現實的統合の創造である。而してこれにつけては、日本からヨーロッパへは進むの道はあるが、逆にヨーロッパから日本への道はない。支那印度等についてはもとより、日本の精神的材料は、直ちに之を基礎の宏い變化し易い、色々の形をした且つ本來動的であり、いつでも變化して行くヨーロッパに嵌め込むことが出來るけれども、その反對にヨーロッパのそれを日本へ入れ込むことは出來ない。何となれば日本の精神と日本の形式とは、いづれの方面に於ても極めて純粹にして且つ純なるものであるからである。或は、しばしば言はれるやうに、日本の精神は、獨創力に[illegible]の刺戟を必要とするかもしれないけれども、日本精神は、常にその刺戟を自ら取捨選擇し、適當なるもののみを同化するものなることは、以前からさうであつて、朝鮮、支那、印度からの文明輸入には、周到なる用意と、選擇を行ひ常に自己の本質に照らすことを忘れなかつたのであつた。然らば、この點に關して、ヨーロッパは餘りに遠く、餘りに關係薄く、又餘りに無價であり多樣ではなからうか？、成程ヨーロッパの技術は、なめらかに取り容れられたには相違ないが、このことは、以つて直ちにヨーロッパの精神に就ても亦然りとの證明とはなるまい。蓋し日本人がヨーロッパの技術を採り容れた態度は子供の態度であつて その技術の力に驚き、その迅速なる運動を見て喜び、又その偉大なる能力に驚嘆して、これをとり容れ、巧に之を利用したのである云ふまでもなく、この技術も亦ヨーロッパの地に育てたものであり、多くの秀れたヨーロッパ人の考へるがやうに、決してほんの組み立細工ではない、何等の精神を含んでゐないものではない。けれどもこれを以つて日本人の眞髓そのものを動かすことは到底出來なかつたのである。

　翻つてヨーロッパの科學、特に哲學上の諸問題を日本人の頭に移入することを考へて見よう。

日本人にとつて最も不得手なのは、抽象力である。日本人の考方は、全然直感的であり、言葉も亦本來文學的であるからである。勿論ヨーロッパの言葉もその出發點に於ては日本のそれと大差はないけれども、已にギリシャ語に於ては學問的言葉と化し、ラテン語に於ては、日本人をして驚嘆せしむるほどの正確さにまで發達を遂げてゐるのである。惟ふに日常生活に於て、一事として明瞭、精確に述べられることのないところ、最後の決斷が斷然と下されることのないところ、又永年の習はしの結果凡ての感情は云ふまでもなく時には感覺までもが、抑壓されてゐて、たゞ僅かに睫毛のかすかな動きのみが内心の動搖を物語るやうなところ、―― さう云ふところでは言葉が、徹底的な明確な姿勢をもつやうに發達する筈がない。云ふまでもなく日本の歴史と雖も英雄もあり豪傑もあり、戰亂もあり、身を切るやうな悲劇もあるけれども、嚴格に規定された生活と、警察的に命令された儀禮とは、凡てを蔽ひかくして、いやしくも聲をたてることは相ならぬとするのである。そして人間の爭鬪の最終の最も普通であるべき意味がそのまゝに暴露さるゝことは絕えて許さないのである。

然るに抽象とは何であるか。明かに具體的事實の否定である、實際に適合を確保することである。表象と現在に屬する非戰である、嚴正そのもの冷酷そのものである。思索には代用もなければ、妥協もない。かくして數學、自然科學、技術は、それだけで完結する一つの興味ある、人類精神の發見物としてそのまゝに受け容れ易いのであるが、哲學はそれと異り、別の領域を侵すものである。而もこの哲學に對しても、當初は他の學問と同じ態度を以つて臨んで來た日本に於ても、哲學が若い日本人の間に行はれゝば行はれる程又その心を捉へれば捉へる程哲學を日本に移植することが可能であるかの問題、即ち單に例外的現象としてではなく、國民一般にとつてその移植が可能であるかの問題が、益々重大となつて來るのである。

近代の自然科學や、技術よりも、哲學の方が日本人にとつて緣遠いものであると言ふならば、人は或は奇怪に感ずるであらう。けれども事實さうに違ひない。何となれば科學と云ふものは一つの有形的組織を目的とするものであり、その組織はもとより日本人にも緣遠いものではない。而して有形的系統的にして意識的な秩序、區分の明確な職分と義務、數學的計算のやうに秩序付けられた日常生活――その由來の如何樣にあれ――凡て之等は數百年來日本に於て自明のことゝせられて來たものである。之に反して歐洲の精神科學及び哲學は、日本人にとつては、全く勝手の分らぬものである。と云ふのは、嚴格な抽象

論的思惟や理論[illegible]は、人間の[illegible]一つの[illegible]であり、而かも東洋式の様式とは全然異なるものであるからである。こゝに於て、東洋人がよくこの様式になずみ得るかが問題となるのである。

私共は今やつとこの問題にとりかゝらうと云ふに過ぎないものであつて之に就いてとかくの判断を下し得ない。けれども吾々は、日本精神はヨーロッパのそれとは全く正反對の途を辿つて發達して來たことを、注意せねばならない。その意味は、日本が、先づ第一にとり容れたものはヨーロッパの最近の産物であつたと云ふことであつて、それはその外形上必ずしも日本に縁遠いものでなかつたと云ふ意味である。即ち日本は先づ技術を、ついで精密自然科學を受け入れたのである。そしてあらゆる個別科學を喰ひつくした後、今や、凡ての認識の「母」たる哲學を移入する段取となつたのである。この哲學も亦漸く十年前までは單に「覺え」られたに過ぎなかつたが、今日に進んでは、問題を把握せんとする人の熱心は地平線を發見せる人のそれの如くである。がしかし、この地平線は果して到達し得べきそれであらうか。

明らさまに言へば、この疑問に對しては今日まだ、決定的判断を下し得ないであらう。たゞ私共の知るところによれば、日[illegible]に吾々に同化し、何が問題であるかを知り、又思想の曲折や吾々の辯證論的考へ方やに興味を見出し、吾々の居るところに安全しうるやうな人々が、到るところに出て來たことだけはたしかである。だが、それがどこまで進み得るか？そもそも人間の理解はどうして可能なのか、何が精神的接觸と云ふやうなものを作り出すのか、外國の思想は如何にして根を下し、花を開き得るのか、凡てそれは謎である。それにもかゝはらず、精神は、既に幾歩かを前進し、幾何かの束縛を切りはなしたのである。問題はこの精神が更に進んで自由に飛揚し、みづからの力を以て自らのプログラムを作り、それを解決し得るや否やである。之今日の問題にして、而も何人にも解答を許さぬ問題である。

然りこの問題については何人も答へ得ない。その故は、吾々は高速なる過程のわずかに出發點にゐるに過ぎぬからである。而して日本はいまその若き世代を以て、新しい時代に入らうとしてゐる。而してこの若き時代の人々にして始めて、この國民の精神的問題の重大――それは年とりたる人にとつては急激なる進化の齎した一問題たるに過ぎなかつた問題の解決の重大さを了解することが出來るのである。いなそれのみではない。ヨ

ーロッパの好事家にとつては何をして時間を空費しようとそれはかまはないが、こゝ日本には一つの現實の運命が與へられてゐる。それは單に東洋と西洋を合計し、兩者を竝べるのではなく、又單に甲に代ふるに、乙を以てするのではなく、眞に內的に兩者を結びつけるのである。このことは不可能であるとは、私共は決して申すのではない。私共はたゞ私共の印象を語つたゞけであつて而もこれが最終の言葉であるとは思つてゐない。況んや日本の內部から見るならば、この古い國の內より之を見るならば、事情は自ら異るであらう。而も問題は依然として存するでもあらうし、またしかく簡單でもないであらう。自ら徹頭徹尾、日本人であることを感じない日本人が何處に居らう。またヨーロッパ風の教育をうけた日本人にして、非常な熱心を以つてこの新らしい世界を研究しやうとしない人、又は研究せねばならないと思はない人が何處にあらう。而して今彼等は何を爲さんとするのであるか?、同時にアジアとアメリカとの分子を同一の都區內に相竝んで持つが如くに、この二つの世界を自已の區內に收めらるであらう?精神は大地の辛棒强さを持つであらうか?只今日吾々のなしうる所は、その運命の極めて重大なことを認め、吾々のなしうる全援助を提供するだけに止まる。最後の決斷と行爲とは、もとより吾々のなしうる所ではない。いなそれは決して吾々の爲すべきことではなく、日本人自らが、熟慮の上決定せねばならないところである。そしてこの問題にうちあたることによつて日本が意識的自己檢討の絕好の機會を得るであらう。こゝには日本がのがれうべき神秘の跡もなければ、引きづけられて行く盲目的な感情もない筈である。まさに熟慮して斷行せられねばならない。一國民の文化を導いて如何なる方向に進ましむべきかについて、かくの如き有意義なる決定の機會は、蓋し世界史上殆んどその例を見ないであらう。

　このときに當つて吾々がなし得る唯一のことは、問題はいまゝでのところでは決定されてゐるのではないと云ふこと、さうして、歐洲諸强國に於ける大混亂と、その世界政策上の力の減少とが、ペリー提督の來訪以來失はれんとしてゐたチャンスを、今再び日本に與へたものであることを了解することである。

無產階級解放史的觀點よりの第五十議會批判

第五十議會と無產階級

山川均

「議會はまだ會期二十日を殘してゐる。豫算案を初め、重要な議案は何一つ片附いては居らぬ。貴族院改革案は云ふに及ばず、普選案すらもいよいよ貴族院を通過するまでには、まだ相當の曲折を經なければならぬ。五十議會を批評することは幾分早計であるかも知れぬ。しかし少なくとも唯だ一つの事柄については、今から確定的な批評を下しておいても差支へのないものがある。」

行財政の整理緊縮の方針に基づいた豫算の編制は、云ふまでもなく、政府と與黨との最も力を用ひたところであつて、兎にも角にも國費の一定額を切詰め得たことは、或る程度の成功には相違ない。けれどもそれは或る程度の遣り繰り算段に成功したといふ意味であつて、日本の財政が根本的に立て直ほされた譯ではない。過大な軍事費は、依然として國民の生活を壓してゐる。生産的な經費が切詰められてゐる一方に、軍事教育の名の下に、廢物將校の生活を保障するための新經費すらも計上せられてゐる。これに反して、無產階級の生活に直接利害關係のあ

る社會的施設のためにも、益々深刻化し恒久化するところの失業を防止すべき施設についても、一錢の新經費も計上せられて居らぬ。一億有餘の國費を儉約したことは財政上の一つの變化である。しかし此の變化は、經濟界の不景氣に對する資本家階級と勞働階級との負擔の比例の上に、少しの變化をも加へるものではない。

□

貴族院を改革することは、貴族院を改革せぬことに勝さつてゐる。過去の遺物たる特權階級の政治勢力を制限して、近代的特權階級――ブルジョアジー――とその代辯者――を以つて之に代へることは、ブルジョア政治の一步前進であつて、貴族院改革の叫びは、貴族院のブルジョア政黨化の過程が一步を進めたものである。その結果は政治勢力の階級的分野を、より明瞭にする効果がある。

□

第五十議會の最大の事業は普選案の通過である。そして現在の議會と既成政黨とのブルジョア的性質を最もよく暴露したものも、また普選案の通過であつた。

既成政黨が普通選擧の實施を叫んだのは、彼等がその脚下に踏みしめてゐる資本主義――從つてそれに象どつて造られた彼等の政治思想――が、自由主義乃至は民主主義の精神に燃えてゐたからではない。政黨の地盤が一度び固定した以上は、在野黨に取つては、選擧權の擴張以外に勢力の均衡を變へ、局面を展開する方法がない。そこで普選の要求は、彼等に取つて必要であつた。

しかし愈々自黨の政府の手で普選案を議會に提出することになつて見ると、その收獲は結局誰れがするのかといふ問題が、現實に彼等に迫つて來た。彼等は普選の實を拵らへて民衆を請待した。けれども彼等は、隣の鶴を請待した狐のジレンマに陷入つた。幸ひ彼等には、丁度この最も利巧な狐ほどの利巧さがあつた。彼等はその實を、年齢の制限、住居の制限、保證金の制限などゝいふ最も淺い皿に盛つたのである。

ブルヂョア政黨の普選案が通過する時は、無產階級による眞實の普選の要求の初まる時でなければならぬ。

□

治安維持法の提出は、或る意味に於ては、財閥が北樺太に於て得た石油と石炭の代金であり、また或る意味では、民衆に對する普選の御馳走の勘定書であるとも見做される。

治安維持法案の委員會に於ける政府の答辯は文字通りに支離滅裂であつて、質問者の追窮に逢ふて答辯を取消したり、說明

を訂正したり、曖昧の限りを盡してゐる、要するに此法案のため政府自身、法文の解釋についても適用の範圍についても一向分らない。政府では唯だ一圖に、都合のよい時に都合のよい人物を都合よく引つ掛けやうといふこの法案の根本精神にのみ凝り固まつて、法文の解釋や疑義などゝいふ枝葉の問題は、てんで考究してゐなかつたものと思はれる。そこで委員會の形勢から考へたなら、この法案は、『多數橫暴』の力による外には到底通過し得べくもないものであつて、當然撤回せらるべき性質のものであるやうに思はれる。しかし『多數橫暴』の力は、今日の政黨や政治家の賴みとする唯一の力である。治安維持法も多少の修正を經て、議會を通過するかも知れぬ。

前年の過激法案が議會で葬られた理由は、第一には法文の解釋と適用の範圍とが明確でないといふこと、第二には、その刑罰が苛酷なといふことであつた。今度の治安維持法は、その法文の解釋と適用の範圍とに於いてはそれ以上に曖昧であり、目的とする行爲に比して刑罰はそれ以上に遙かに苛酷なものである。この點に於いては、治安維持法は當然、議會を通過する可能性がない筈である。たゞ治安維持法は、過激法案に比して一層曖昧であり一層苛酷であり、從つてまた、無產階級運動に對する威嚇としては一層有効である。それ故にまた、この法律案は議會を通過する可能性がある。

在野黨たる政友本黨は、豫算案に反對し、普選案に反對し、改革案に反對し、その他一切の政府案に對して、政府案なるが故に反對する。その政友本黨が、たゞ一つの例外として治安維持法案に贊成することは、この法案の特殊な階級的性質を物語つてゐるものである。

政友本黨は、曾て過激法案を出だした政黨である。けれどもブルジョア政黨の政治道德には、それ故に反對黨の政府の提出した同一の法律案に贊成しなければならぬといふ法則はない。現に憲政會は、反對黨政府の提案だつたがために、當年の過激法案に反對した。曾て反對黨政府の過激法案に反對したことは、自黨の政府の手で、より以上に過激な法案を提出することを少しも妨げぬ。政友本黨が治安維持法に反對しないのは、彼等の政治上の責任と政治上の道德がこれを命ずるからではなくて、無產階級の新興勢力に對してブルジョアジーの支配と特權とを擁護するためには、無產階級運動に報復する爲の最も悪虐な兇暴手段を合法化しておく必要を感ずる彼等の支配階級的本能が、たま〳〵彼等の政爭欲よりも一層强烈であるからに外ならぬ。

□

治安維持法が、多少の修正を經て議會を通過するものと假定

しても、いよ〱どんな形に修正せられるかは分らない。けれども如何に修正されようとも、この法律の本來の精神と目的とを打消すことは出來ぬ。若し何等かの修正を受けるとすれば、修正を受けた程度だけ、この法律の本來の精神と本來の目的から見れば、それだけ不完全なものとなり、適用の上に不便なものとなることを意味してゐるだけである。

治安維持法が原案の精神のまゝで議會を通過したならば、生產機關の公有を主張する無產階級の運動は、すべて合法的の運動領域から、地底運動の領域に追ひ込まれる。その結果は豫想するに難くない。たゞ避けがたき結果を豫想しつゝ、尙ほ且つこの法律を制定しようとしてゐるのは、要するに普通選擧の實施に伴ふ無產階級の政治的擡頭を阻止しようとする彼等の企圖に外ならぬ。狡猾なブルジョアジーの狐は、普選の葉を獨りで味はうとしてゐるのである。

□

無產階級に取つては、第五十議會ほど、嚴肅な鳥羽繪に見えた議會はない。勞働者に選擧權を與へることを、蠻民に竹槍を與へることゝ同じように考へてゐる人々が、チョン髷を結はずに洋服を着て議席に澄ましてゐるのも滑稽である。普通選擧の主張は階級打破の主張であると云つて極力反對した政黨が、三年と經たぬうちに、同じ議會で時勢の進運や國民の要望を說いてゐるのも滑稽である。二年前の議會では、日露修交の努力を指して國賊呼ばはりし、聞くに堪へざる陋險俗惡な毒舌を弄した最も下劣な種類の政黨屋が、日露協定の成功を誇りとする政府の一員として、同じ議場に厚顏無恥な面皮を曝らしてゐるのも滑稽である。これ等はすべて滑稽には相違ないが、同時にそれは、現代政治の本質を物語る嚴肅な滑稽である。

□

第五十議會は、少なくとも次の如き二つの事柄を、最も明白に吾々に見せしめた。

即ち第一には、日本の政治界には、中世紀的遺物として持ち越された保守主義反動主義の勢力が依然として有力なことである。そしてブルジョア政黨には、最早やこの保守的勢力と正面から衝突して、政治上の自由を伸張する氣力がないと云ふことである。政治的自由の伸張と政治の民主化とは、無產階級の壓迫によつてのみ、初めて招來することが出來る。

第二には、ブルジョア政黨の最も急進的なものすらも、最早や決して無產階級の利害を代表することが出來ぬといふことである。逆境時代の憲政會と革新俱樂部とは、勞働組合の公認を主張したり、失業保險の制定などを約束した。政權を握つた憲

政友會と革新倶樂部とは、組合法案の提出をも見合せた。治警十七條の撤廢をも見合せた。健康保險の實施をも繰り延べた。爭議調停法の提出をも見合せた。すべての社會的立法を見合せた代りに彼等は治安維持法を制定して、保守的勢力の歡心を買ふことに努めてゐる。

彼等は資本主と貿易業者の救濟に努力を惜まない。然るに無產階級を脅やかしてゐる失業問題の解決のためには、小指一本をも動かさぬ。若槻內相は貴族院に於ける質問に答へて、政府は失業問題緩和のために、勞働團體と協力して職業紹介事業の圓滑を計つてゐると云つてゐる。ところがそう云ふ口の下から現に政府は、職業紹介事業に相當の成績を擧げつゝある或る有力な勞働組合に對して、その紹介事業を組合から切り離すことを條件として、數萬圓の補助金を交附しようと誘惑した事實がある。職業紹介は、勞働組合の重要な職能の一つである。將來この事業は、當然、勞働組合の手に集中さるべきものである。勞働組合の關與を待たないでは、勞働市場の有効な調整は固より考へることは出來ぬ。然るに政府は、勞働組合の職業紹介事業の發達を阻害し、補助金を好餌として、これを組合の手から奪はうとしてゐるのである。

□

憲政會と革新倶樂部とは、政友會の分裂といふ偶然の出來事の偶然の成行きから、吾々に選擧權を與へて吳れた。けれどもそれ故に、無產階級の投票に對して、彼等は當然の權利があると考へてはならぬ。無產階級は獨立した階級的利害の立場から、獨立した階級意識に基づいて、その投票權を利用しなければならぬ。普通選擧の實施によつて與へられた一票をブルジョア既成政黨のために投ずるよりは、××××叩きこむ方が、遙かに意義がある。（三月五日）

五十議會の史的本流

高橋龜吉

いよ〳〵官僚が斷末魔の苦悶を始め出した。これ迄獨力では　どうすることも出來なかつたブルジョアー政治家が、嫌々なが

ら普選を約束して無産階級の援けを借り、いま此の五十議會で官僚許りに止めを刺さうとしてゐるからだ。所で、ブルジョアー階級は、その手飼の政治家が、官僚倒壊のために利用した「普選」の彼方に、無産階級擡頭の悪夢を見た。官僚も亦、その斷末魔の苦悶の中から、政商ブルジョアー政治家の彼方に、それよりも遙かに恐るべき無産階級擡頭の陣太鼓の音を聞いた。斯くて、官僚は愈々ブルジョアーに降參する外なしと見るや、その斷末魔の苦悶を止め、ブルジョアーの聲に和して、之が無産階級の擡頭に對する抑壓の叫びに代へた。之れ、今議會に提出せられた普通選擧、貴族院改革、治安維持の三法案を中心として捲き起された波瀾の意味である。然り、今五十議會の史的本流は、官僚とブルジョアーとの關ヶ原に於ける政權戰であつて、決して、無産階級門出の戰ひではないことは改めて云ふ迄もない。

斯様に解すれば、官僚の本城である樞密院に於て、普通選擧を提出した政府が散々油を絞られたる上に、その代價として治安維持法の提出を强要せられたと云ふことは少しも不思議ではない。又、その治安維持法が、三派のために、「政體を變革し」と云ふ項を削除せられ政府が之に同意したと云ふこともハッキリと理論の立つたことである。何となれば「政體の變革」が治安維持法に觸れては、ブルジョアー政權の確立に必要な、封建的官僚的政治組織の改革を遂行することが出來ないからだ。即ち之れあつては、議會を通じてさへ、樞密院や貴族院の改革の如きが出來なくなるからだ。之に反して、無産階級の立場から云へば、最も重大な「私有財産制度の否認」の項が、そのまゝ採用せられて、その上に「暴力を以て」と云ふ制限を付せんとする修正案すら否決せられたことは、如何にも露骨にブルジョアーの鐵血政治を現はしてゐる。

又、貴族院改革案に對する樞密院の審議に於て、有爵議員に貴族院議員の過半數を約束せる第七條の削除案が大した問題にならず、却つて、勅選議員の任期を七年とせんとする政府案を修正して事實上之を依然終身と修正し、更に政府がブルジョアー議員（百圓以上の直接國稅納稅者より互選）を增加せんとするを減じて、それだけ勅選議員（官僚畑の）を增加することに修正を加へたるが如きも亦、以上諸說の立場から見て、洵によく、ブルジョアーと官僚との戰ひの跡を語るものである。

しかし乍ら、樞府如何に官僚のために戰ひ、貴族院如何にブルジョアー政治家の抑壓に努力しても、今度の議會に於て、官僚の勢力は致命的打擊を受けたことは明かだ。なる程、貴族院に於ては依然、官僚の勢力を維持することに略ぼ成功した。し

かし乍ら、衆議院に普選案が通過して了つては、官僚が政府に立つ望は殆んど絶たれたと云つてよい。何となれば、我が國民を指導して來た官僚の實力は、文官任用令其他によつて後進を温室的に培養するに至り、茲に多くは「役人上り」が無能者を意味するに至れる如く其れ程無能者に墮し、いまや僅かに傳統によつてその勢力を維持してゐるに過ぎない。然るに、斯る傳統は從來の如き有權者には尚ほ少からざる勢力を維持するかも知れぬが、新有權者となれる無產階級には何等の權威にはならないからだ。

云ふ意味は、いま無產階級が政治に求むる所は、專ら、その經濟的境遇の改善向上を圖るにある。然るに、いまの官僚は、型に嵌つた法律論を知つてゐるだけで、經濟的知識は殆んど何も持つてゐない。尤も外國のことを模倣するだけでそれで、我が經濟の發展が出來た間は、それでも政治は何とか行はれたであらうが、今日の如く、日本經濟の實狀に即して新に政策を樹て換へねばならない時に於ては、斯様の知識のみでは何事もなし得るものでない。勢ひ、今後の政治は、今日の社會に於て、さうした知識のより優れたブルジョアー政黨に、愈々益々依存して、官僚の乘ずる餘地無きに至るであらうからだ。

然らば、我がブルジョアー政黨に今後無產大衆の生活程度を向上せしめ得る能力ありやと云ふに、今日に於ては殆んどその見込はない。日本の資本主義經濟は已に行詰つてゐるからだ。元來、ブルジョアー階級は其國資本主義經濟の尚ほ發展旺んなる時に於て、無產階級の援助により、その政權を封建勢力や官僚より奪還するが常態である。歐洲の歷史は正にさうであつた。この時に於ては、ブルジョアー階級は、その政權を納めたる曉に於て、尚ほ民衆の經濟的境遇の向上を圖り得る能力があるから、民衆に普選を約束してその援助を受けるも、尚ほそれが直ちにブルジョアー自らの脅威となる惧は少かつた。

然るに、日本に於ては、ブルジョア階級は、從來官僚の力に余りに多く頼り、しかも、資源、國際事情、資本主義經濟の世界的位地等の事情のため、その資本主義の行詰りも余りに早く來た。從つてブルジョアー政黨が、漸く覺めて政權を官僚より奪取せし時には、已に、その資本主義經濟は行詰つてゐて、民衆に普選を與へることは與へたが、しかしその普選を通じて民衆の要求する所のものを與へる力はなくなつてゐるのだ。

斯様のわけであるから、なる程、我がブルジョアー政黨は、普選によつて官僚から確實に政權を奪取することは奪取したが、しかし、普選の名に於て新に約束した民衆の要求を滿たし得ない地位にゐる。之れ、既成政黨が、新に無產政黨の成立發

展することを内心少からず恐怖せるわけである。茲に於て、ブルジョアー政黨が民衆に與へ得ないもので、しかも無産政黨のみが民衆に與へ得る武器の使用を極力制限する必要がある。その武器とは即ち社會主義的經濟政策であつて、我がブルジョアー政府が、治安維持法の極刑によつて取締らんとするものが即ちそれだ。

さり乍ら、ブルジョアー政府が如何に斯の如き苛酷の法律によつて無産階級の要求を抑壓するも、已に、普選によつて民衆にその生活の向上を政治に要求する途を廣く開きながら、しかもブルジョアー政府に之を滿し得る能力のなき限り、民衆は○○○○の伏字に匿くされた無産政黨隱然の約束に希望を移すに違ひない。

要するに、五十議會に於ける普選及貴族院改革の提案は、護憲三派が無産階級のためにやつて與れたものではなくて、官僚討伐、ブルジョアー政權の確立のためにやつたのだ。この意味に於てのみ五十議會は我が政治史上の劃時代的の議會であつた。而して、治安維持法の提案は、たまく、五十議會の普選の通過が無産階級のためではなくて、ブルジョアー政黨のためであつたこと、而して、ブルジョアー政黨は到底無産階級の利益のために働くものではないのだと云ふことを普選提案のその日に於て、無産階級にマザく と教へて與れたのである。この効によつて、然り、その効は如何にも大きい。第一に之によつて無産政黨の發達が少からず促進されるであらう——治安維持法の悪法たるの罪は、無産階級の解放上大體に相殺されると見てよいではないか。さう見る背後には、治安維持法は何れ普選實施後に於て、遠からず撤廢せられると思ふからだ。何となれば、無産階級の勢力は之を永くそのまゝに存置する程、それ程無力では最早ないからだ。(三月六日記)

無産解放過程としての五十議會

鈴木文治

◇所謂與黨三派を基礎とした現内閣が、今期議會に提出した社會關係の法案は、可なりの盛澤山である。曰く普選案、曰く貴

萬案、曰く勞働組合法案（これは尙未提出だが、提出さるべき情勢に鑑みて）。これ盖し現內閣が在野黨時代の聲明の手前、斯くすることの餘儀なき事情に出づるが故であらう。（勿論政友會の態度については所謂內變と認めざるを得ないが）。餘儀なき事情に制せられたといはんか、はた又時代の大勢に引ずられたといはんか、いづれにもせよ、相當に苦戰し努力してゐる點は買つてやらねばなるまいと思ふ。併し乍ら更に裏面の消息により、現內閣の腹を探つて見るに、夫れは眞に彼等の所謂『國利民福』を主眼としての政策といはんよりも、寧ろ政權維持のための策略の結果と見るべきではないかと思はるゝ節が多い。

◇民衆は何といつても眼ざめてゐる。それに社會一般に亘つて、自由主義的思想が發達して居る。極端過激の思想運動といふものに對しては、よし眉をひそむる連中でも、いつまでも舊弊頑固の高壓政治に對しては、猛烈な反感の漲り流れてゐることは、事實である。政治家としては此大勢を觀、この大勢を摑まなければならぬ。況んや普選案の如きに至つては、今正に國論といふて然るべきに於てをや。

◇一方に於てかく自由進步の思想が流れつゝあると同時に、他の一方に於ては、尙依然として頑迷固陋の思想が牢乎として盤据してゐるを見落すことは出來ない。況んや後者の所有者は多く國家重要の地位を占め、若くは權門富豪に因緣してゐるのである。これ等一味の勢力を無視しては、到底政權を維持して行けない。自分達にも多少の良心もあり、理想もある。且つは在野黨時代の聲明もある、けれども政權は何としてでも放したくない。ふぐは喰ひたし、命は惜しい、進退兩難に陷つた形である。此兩難の間にはさまりつゝ、何とか窮境を切り拔けやうとする。そこで折角出した普選案も、貴革案もメチャ〱な修正を施されたが、それでも甘んじて辛抱をしてゐるといふわけである。

即ち現內閣は三派の寄合世帶であるといふ弱味がある許りでなく、政治に對する理想が明かでない、其上、その理想を追求する情熱の燃ゆるが如きものがない。加之、現內閣の主勢力たる憲政會の如きは在野十年、つぶさに辛慘を嘗めてゐる。漸くありついた政權であるから、邪が非でも、一日でも長くこれを維持しやうとするのも無理がない。理想も明確を欠き、情熱も不足してゐる。たゞ烈々炎の如きものは政權慾あるのみとすれば、これに對して多くの期待を持つとせば、持つ方が寧ろ無理といはざるを得ないであらう。要するに特權階級政治の時代より、「無產階級政治へと推移する過渡期の產物といふべきである。我等は暫く眼をつぶつて隱忍し、而して無產階級の實力を

養うて、新しき時代を打開するの覺悟を要することを思ふのみである。

從つて自分は、普選案なり、貴革案なりの内容について批評するの勇氣を持たない。これはあまりに知れ切つたことである。名は普選であつても、三十歳以上ならでは被選權を認めざる如き、公私の救恤を受くるものを除外するといふ如き、小選擧區制をやめたはいゝが、それに代ふる中選擧區制を採用するが如き、要するにブルジョア臭味の紛々たるものがある。

貴革案といつてもその通り、勅選議員の任期を定めたのはいゝが、公侯爵議員の世襲を其儘にし、多額議員の員數を増せるが如き、その何の意たるを知るに苦しむのである。故初はもつと思ひ切つてやるつもりでもあつたらうが、貴院の猛者連の反抗を憚り、政局の動搖を恐れての、深謀遠慮の結果であらう、ひたすら恐れ入るの外はない。

畢竟するに、特權的基礎の上に立つ現内閣に對して、あまりに多くの期待をかけることは初から出來ない相談である。それにしても在野時代には可なり急進的な(ブルジョアの意味はあるにしても)意見を吐き主張を述べてゐたので、も少しやるだらうとの或る程度の期待を持たざるを得なかつたのであるが、それは要するに明けて口惜しや玉手箱であつた。我等はブルジョア政治の頼むに足らざることをマザマザと眼の前に見ることが出來たのである。

◆これにしても普選案は一大法案であるには相違ない。これを曲りなりにも通した政府並に與黨の努力はこれを多としなければならないであらう。鐵は熱い中に打たざるべからず、今のやうな内閣の時でもなければ、一寸通過は六ケしかつたかも知れぬ。(いづれ通過する時はあるにしても)貴革案にしてもその通りである。貴族院制度の弊害多きこと、その改造の必要あることを明かにした宣傳的效果だけでも認むべきである。此意義に於て現内閣は、新しき政治への黎明期に於て、或種の手引の役をつとめた點は公平に見て、認めてやるべきであらうと考へる。

◆夫れにしても、行すべからざるは、諸勞働立法、特に治安維持法案に對する現政府の態度である。昨年末頃の前觸れには、或ひは勞働組合法案(最も進歩的なる)を提出するとか、健康保險法を實施するとか、多少無産階級を喜ばしむるに足る努力をする筈であつた。然るに今期議會は、會期を餘すところ幾許もないのに、組合法は遂に提出の見込なく、治警十七條徹廢案も同樣見込なく、若し出るとすれば、出すともよき爭議調停法案(これも治警徹廢案と關聯するが故に提出せずとも傳ふ)であつて

而して現に提出せられ、將に衆議院で通過せんとする條項の惡法治安維持法である。

◇治安維持法の是非は既に論じ盡されてゐる。これは要するに先年提出された過激法案の延長であり復活である。然も當時野黨として猛烈にこれを攻撃し、遂にこれが通過を阻止したる連中より提出せられたのであるから驚くの外はない。要するに「勝てば官軍」であつて、彼等の間に政治的良心なるものを認めることは出來ないのである。

◇或は傳へていふ、政府はこれに對して大修正を加へらるゝも厭ふものではないと。それ程ならば、寧ろ初めから提案せぬ方が氣が利いてゐる。殊に法案の委員會に於て委員の質問に對する政府の答辯はシドロモドロである。取消をなすこと三回、釋明をなすこと數回に及んでゐる。政府部内に於ても意見の區々たることはこれで分る。又確信のないことも明かになつた。それ程の不備な法案を何故急いで提出したかといふに、それは樞府の老人連との間に約束があるのだといふ。どんな約束かといふに、それは普選實施後の老人連の取越苦勞に安心を與へるために、亂暴なものは法律を發布して取締りますといつたのださうな。然らば即ち現政府は樞府の前に國民を賣つたものではないか。

◇要するにこれとても、現内閣の安全主義より來てゐるのである。何でも構はんから、一刻でも長く政權を維持したい、在野黨になれば又こんな窮境に陷るかも知れないと、その事を專念心配してゐるのである。その必然の結論として、當らずさわらずで通さうといふことになるわけである。國體の問題は暫らく措いて、政體、私有財産制の變革否認云々の問題はどうするのであるか。聞くところによれば政體變革の問題は、議會自身の權能を自ら縮少するものだとの見地の下に、削除することになりさうだといふ。併し私有財産制問題は依然としてそのままである。

◇有體にいつて、今日時代の趨勢に眼ざめ、且つ一應社會科學の教養あるものであつて、現今の私有財産制度に隨喜渇仰してゐるものがあるであらうか。學問的良心ある者の中には、恐らく一人もないであらう。社會改造の運動なるものは、要するに此私有財産制度××××くは少くとも大制限を主眼として生れて來て居るのである。勿論、所謂共産主義と雖も、お互の鍋の中や、懷中まで共有共産で行かうといふのではない。つゞまるところ、一國の主要産業、生活必需品の製造にあたつて、營利主義を否定しやうといふにある。絶對の共産といふやうなことは人智發達の今日の世態に於て殆んど考へ及ばぬことである。

◇各國の勞働黨、社會民主黨中、恐らくは此種の政綱を掲げざるはない。我が日本に於ても普選實施の後に於て、無產政黨の生れ來ることは見やすき道理であるが、此法律の下にありては、到底思つ切つた政綱は掲げられず、畢竟、ブルジョア政黨のやゝ進歩的なものが出來上るといふに過ぎないであらう。然らば則ち現政府は一方に普選の好餌を與へつゝ、他方治法を以てアベコベに毒殺せんことを企圖しつゝあるものではないか。

◇繰返していふ、一切は現内閣の瓦全主義より出て來てゐる。政權慾の亡者である政黨者流は、一旦握つたら容易に放すまいとするのである。併しそれには各方面の反對勢力の存在することも考慮しなければならぬ。同時に又民衆の勢力も全然無視することを許さない。その間に介在して政權を維持して行かうといふのであるから、そこにいろ／＼な無理が出來るのである。

◇舊き時代より新しき時代へ正に甦生すべき過渡期の日本の政治を托するには、實はかういふコンベンショナルな瓦全主義者では困るのである。頑迷なる舊勢力を撤底的に叩きつけるには、一度や二度の内閣が短命にして倒れてもそれは止むを得ない。むしろ當然である。然かもその倒るゝや民衆と共にするのであるから、その都度舊勢力は退き新勢力は擡頭するのである。惜しい哉、現内閣には勇氣がない、當面を糊塗することを知つて、百年の大計を樹てることを知らない。これ瓦全を望んで玉碎を避くる所以であらう。

◇此意味に於て「無產階級解放の過程としての第五十議會」一功過相半ばすといひたいが、治安維持法の提案によつて、一層罪を重ねた次第である。たゞ極めて微温ながら、普選との名のつく法案を通過せしめて、無產階級運動の前途に幾分の地盤を掲げてくれたことは、せめてもの手柄と言はざるを得ない。若し治法提出の禁物なくば、普選通過の功績は、一段の光彩を添へたであらうにと思はるゝのである。

◇一切は×の問題である。我等はたゞ隱忍自重、百折不撓の勇氣を以て、來るべき日の準備をなすべきのみである。

（治安維持法上程の日）

五十議會の功罪批判

平林初之輔

一、忘れられた「憲政擁護」

加藤内閣の與黨三派は、昨年、研究會を中心とする清浦内閣が成立したとき、貴族院内閣は憲法政治に反するものであるとして、憲政擁護、特權階級打破の鯨波をあげて、清浦内閣倒壞の運動を起しました。そして清浦内閣によりて議會が解散され、總選擧が行はれたときには、「普通選擧」「貴族院改革」「財政行政の整理」の所謂三大政策を國民に公約することにより、選擧の結果大多數を占め、加藤憲政會總裁を主班とする與黨三派の聯立内閣ができたのであります。

そこで、加藤内閣に對する國民の期待は、この内閣が、どこまで憲法政治を擁護して、その障碍物と戰ふかといふこと、並に、與黨三派が國民に公約した「三大政策」を政府がどこまで忠實に履行するかといふことに存してゐたのであります。私も國民の一員として、加藤内閣に對して、それ以上をも期待しなかつたと同時に、それ以下をも期待しませんでした。

ところが、加藤内閣成立後、五十議會の開會までの間に、憲政擁護の聲は、だん〲と、かすれ、細つて、殆んど聞えなくなつてしまひました。加藤首相は「自分は護憲を口にしたことはない」と言つて陰に貴族院に秋波を送りはじめ「大命は加藤高明に降下したのであつて三派に下つたのではない」と公言して、暗に三派の制肘を煙たがりはじめました。そして在野時代十年一日の如く攻撃してやまなかつた元老の門を鞠躬如として伺候することをはゞかりませんでした。

これ等の事實を注意深く觀察してゐたものにとつては、加藤内閣に、どれだけ「護憲」の誠意があるかは、五十議會のはじまる前から、ちやんと判つてゐたのであります。果して貴族院改革問題に於ては、後に述べるであらう如く、政府は全く貴族院に對して戰意のないことを自白してしまひました。樞密院のためには、革新に面目を蹂躙されるやうな目にあひながら若し

內相は「樞密機關である以上樞密院が修正するのは當然である」といふやうな口吻を洩らして、平然とおさまりかへつてゐるのであります。

吾が國の政治の上層に立ちこめてゐる封建的雰圍氣、立憲政治の發達を阻害してゐる障碍物であるところの、元老、樞密院、貴族院の、不當な權力に、一指をもそめることなく、却つてこれに叩頭迎合盲從しながら、何の「憲政擁護」がありませう。私は、此等の特權機關を俄に廢止せよと極論するものでもありませんし、そんなことを現內閣に毛頭期待してはゐませんでした。けれども、苟も「護憲」の鯨波をあげて政權をとつた現政府が、これ等の特權機關と一戰をも交へずして降伏しやうとも期待してをりませんでした。加ふるに好機は屢々あつたのであります。政府の普選法案が、樞密院のために重大な修正を受けたとき、全國の言論機關をはじめ、與黨三派さへもこれを非としました。ところが、政府は、樞密院攻擊の火の手を鎭めるため、ポンプの筒先を與黨三派に向けたのみならず、「普選案は通すかはりに、早く治安維持法を出しなさい」と樞密院から嚴命されたらしいことは、若槻內相の問ふに落ちず、語るに落ちたところであります。

特權機關の權力が旺盛であつて、民選機關の勢力が萎微してゐるところに、憲法政治が徹底してゐる筈はない。憲法政治は民意が政治に表はれる政治でなければなりません。民意の發現が、その道程に於て二度も三度も關所を通過しなければならず、しかもその關所には、意地の悪い、時代後れの石頭が頑張つてゐるやうでは、憲法政治は有名にしても無實であります。政權の受授が元老によりて左右せられ、重要法案の運命が樞密院と貴族院とによりて決せられるやうな立憲政治がそれであります。加藤內閣は「護憲」を標榜しながら、五十議會に於て完全にこれを忘れてしまひました。食言の罪は、キリストさへも最も重としたものであります。この點に於て、加藤內閣の五十議會に於ける功罪は炳として明であります。

二、功罪半ばする普選案

與黨三派が國民に公約した三大政策の中で最も重大なものは普通選擧の即時實施であります。國民が一日千秋の思ひをして待つてゐたのは、政府の普通選擧法案の內容でありました。爾餘の政策の如何はしばらく措いて問はず、國民は、普通選擧の實施を促進する意味に於て、加藤內閣の存在理由を認め、この內閣を反對黨に對して支持してゐたのであると言つても過言ではありますまい。

然るに、政府が與黨三派と協議の上で作成した普選案は、選擧被選擧權より、國民の一半たる婦人を除外し、丁年以上とすべきをたゞ漫然二十五才以上に制限してゐる點に於て、普通選擧の名にそぐはぬものであつたのみならず、比例代表制、大選區制のやうな從來の主張を一擲し、加ふるに二千圓の保證金制度を定めて無產者の立候補（二千圓をもたぬ候補者を政府は泡沫候補と呼んでゐる）を實質上禁止した、頗る不滿足なものでありました。それでも、國民は、財產資格が名義上撤廢されてゐるといふことのために、政府案を諒としました。

ところが、この重大法案が樞密院に廻附されると、樞密院は、被選擧有權者の年齡を三十歲以上に制限し、貧困にして公私の救恤を受くる者の被選擧權を除外する等をはじめとして其他數箇條に亙る斧鉞を加へました。政府は、その大部分に一々御無理御尤もで聽從しましたが、政友會の强硬な意見に會して、再び再修正に同意しました。しかもこの再修正は、被選擧權の制限などには觸れない、枝葉問題ばかりでした。かうして、殆んど代議士の生命にもかゝはるやうな大亂鬪をへて、やつと衆議院を通過したのが、つぎはぎだらけの普選法案です。この法案は、目下貴族院で審議中ですが、貴族院の形勢は樂觀すべからざるものがあります。若し萬一、貴族院に於て、これが否決、修正、或は握り潰しの運命に會せんか、その責任の一半は貴族院に塗りつけることができても、他の一半は政府自ら背負はなければならないでせう。そして政府が、この重大法案の責任を背負ふ道は、總辭職以外にないことは明かであります。

吾々國民は、加藤內閣の存廢は意に介してゐませんが、普選法案の運命には甚深の注意を拂つてゐます。若し、これが、私が萬一を憂慮したやうな運命に陷つたならば、五十議會は、國民にとつては全く無意味な議會となつてしまいます。それと同時に加藤內閣は存在理由を失ひ、樞府と貴族院とは、國民の腦裏に、「怨府」として深刻な印象を殘すことになるでせう。その赴くところが奈邊にあるか、私には全く見當もつきませぬが、たゞ樞府や貴族院の期するところと正反對のものであらうことは確實であります。

若し普通選擧法案が、曲りなりにも兩院を通過するとすれば、それは、日本の政治史上に特筆すべき大事件でありますから、通過までの道程に於ける政府の醜狀は十分に責むべきであると同時に、これを五十議會の唯一の功績として數ふるに私は躊躇するものではありません。要するに、普通選擧の關する限りに於ては、これが、通過した場合にのみ、五十議會の功に

相半ばするものであると私は思ひます。

三、百害あつて一利なき財行政整理

綱紀肅正とか、財政行政整理とかいふことは、歴代の政府が、必らず看板にかゝげるにきまつてゐるお題目の一つであります。たゞ加藤内閣は、從來、消極的財政々策を主張して來た憲政會を中心勢力とし、消極政策の熱心なチヤンピオンであつた濱口雄幸氏を藏相とする内閣であり、特に財行政整理を「三大政策」の一にかゝげてゐたゝめに、國民はどんなことをやるかと幾分の好奇心をひいたのでした。殊に、軍備縮少の聲が、與黨の内部から熱心に叫ばれたことは、國民の期待に更に若干の油を注ぐものでありました。

ところが、濱口藏相が就任以來の實績は、節約の宣傳をしながら富籤附の復興債券を賣り出して中産以下の國民の財布をしぼり上げたことゝ、贅澤品に輸入關税を增課して、物價の釣上げと、ろくでもない特殊産業の保護をしたことと位に過ぎませんでした。

所謂財行政整理に於ては、若干の政府事業を繰り延べ或は中止したのと、何萬人かの官吏を、しこたまの退職金を與へて解職した位のもので、しかも鐵道計畫は政友會の要求を入れて、とりこまし、新官僚は、取り上げやうとした議員のパスを再び取り戻され、面目玉をつぶしてしまふ等の醜態は數へ切れない程ありました。官吏の解職の結果は重大であつて、中には、一年分の退職金を只取りして甲の課から乙の課へ移つたに過ぎないものがあるかと思ふと、中には、退職金は早速使ひはたして失業者の群に投ずるものもあるといふ有様で、憂ふべき社會問題をひき起したに過ぎませんでした。

元來、財政行政の整理は、その結果が、政治の能率を失はずして國民の負擔を輕減する場合、又は、その結果が社會政策的効果を伴ふ場合にのみ有意義であります。然るに政府のやり方は、資本家が、不景氣で困つてゐるから政府の仕事をわけてやらうといふ位の趣旨から出たものに過ぎません。その爲に失業者が出やうと、犠牲者が出やうとそんなことは一向意に介しないのです。ことによつたら、それによつて勞働市場を供給過剩にして勞働の市價をわざと低落させやうとするつもりだつたかも知れない位です。

特に、最も意外とするのは、あれ程聲を大きくして叫ばれた軍備縮少が財政整理とはまるで無關心にされてしまつたのみならず、その結果として、軍事教育案といふ厄介な副産物が生れた事です。成る程、陸軍は四個師團減少されました。けれど

もそれは決して國民の負擔の輕減とはならず、そのまゝ陸軍當局の方針によつて別の方面に流用されてしまつたのです。それはまだしも忍ぶことができます。然るに政府は一歩進んで、師團の減少によりて餘つた現役將校を、そのまゝ、中等以上の諸學校にふりわつて、强制的軍事教育、これを具體的に言へば陸軍の教育占領、文部省の獨立の消失、教育の神聖の汚辱といふ途方もないことをしてしまひました。しかも民衆の囂々たる反對の中に平氣で、無反省にやつてのけたのです。これは我國の教育史上に於て最も呪ふべき現象です。

これを要するに、加藤内閣によりて行はれた財行政の整理は百害あつて一利なきものでありました。かゝる呪ふべき黑點を藏する豫算案が通過したことは、五十議會の恥辱であると私は考へるものであります。

四、國民を啞然たらしめた貴族院改革案

大抵の期待は裏切られるものが普通であります。けれども、加藤内閣の貴族院改革案位、期待してゐた國民を啞然たらしめたものもありますまい。私は「護憲」の見地から、或る意味では、普選以上に、貴族院改革案に期待してゐたものです。

五十議會のはじまる前、與黨三派、特に政友會に於ては、强硬な貴族院改革意見が行はれてゐましたので、私は、日本の貴族院も、イギリスの上院或は第二院のやうな性質のものになるだらうと思ひ、憲法政治の徹底のために喜んでゐました。

然るに、政府の腰はだん〳〵くだけてしまひました。しまひには貴族院改革の意志があるのかないかわからなくなり、議會の開期が半ば以上すんでも、閣議は一向まとまらぬやうでした。そして此の上なく見苦しいことには、「出す意志があるなら早く出すがよい」と樞密院から催促されて、澁々、全く他人目にも迷惑さうな態度で、樞府へ廻付したのが、御承知の改革案です。その骨子(若し骨子がありとすれば)は、華族議員の過半數を破るために、多額納税議員を增加せんとする點にあつたのです。しかもそれすら散々樞密院で修正されてしまつたのです。

私は、この案を見たとき、ある雜誌で、かゝる改革案は寧ろ否決されることを希望しました。それは、一年を待つても、更に徹底した改革案を出すに如かずと考へたからです。果せるかな、今日の新聞で見ると、貴族院、特に政府を眼の敵にしてゐる研究會の内部に於てさへも、「これ位な微温的な改革案なら寧ろ通過させた方が政略上よい」といふ意見が高まつてゐるといふことです。

貴族院改革案の運命がはたしてどうなるか、閉院期の切迫し

た今日逆睹することはできませんが、これが通過するにしても、通過しないにしても、いづれにしても加藤内閣ひいては五十議會の恥さらし以上の何物でもありません。

五、呪はれたる治安維持法案

併しながら、恥さらしはこれにつきません。更に恥さらしの上塗りをし、無知、厚顔、卑怯等の悪名を、求めて買つたものは、治安維持法案の提出です。これが政府の發意であるならば、現政府の頑迷無知は度し難いものであり、世上傳ふる如く、樞密院の指金によるものとすれば、これに盲從した政府の卑怯と、政權に戀々たる政府の淺ましさとは言語同斷です。

この法案は精神に於て國民に挑戰するものであり、法理上に於て杜撰曖昧を極めたものであることは、世上の反對運動論評に於てつきて居り、委員會に於ける政府委員の答辯が事毎に矛盾撞着してゐることは何よりも雄辯にこれを物語つてゐます。しかも、普選案、貴族院改革案等の重大法案が、前途に暗礁を控へてゐて、何時難破しないとも限らない觀があるに反し、この法案のみは、僅か四文字が削除されたのみで、一瀉千里に兩院を通過しさうな形勢です。

かくの如く、政府委員が十分に打ち合せておいてさへ、解釋の多岐に亘るやうな法案が一度び法律となつて、司法官憲の自由な運用に委せられた日には、一種のクーデターであり、獨裁政治であり、日本國民は永久に戒嚴令下に置かれたやうなものです。さらでだに暴行傷害等の絶望的手段に出づる者頻々たる今日、この法案は世相を益々險惡にし、人心を益々暗黒ならしむるものです。五十議會は、この悪法案を葬らざる限り、永久に呪はれたるものとして國民に記憶されるでせう。

× × ×

一言にして云へば、五十議會は、普選案をのぞいては、國民特に無産階級にとつて、災ひのみ多くして何一つ利益を齎したとは言へません。豫算案にはもとより其他にも社會政策の片影をも認め得なかつたことは遺憾の極みです。加ふるに議場に於て暴行傷害の頻々として行はれたことは許し難きことです。警視廳は議場の外に警官を配布する代りに、内部に警官を派遣する必要があるでせう。

最後に、偶々開期中に日露協定が調印された好運を祝ひ、革新倶樂部その他の少數の議員が、治案維持法に對して最後まで健鬪されたことをせめてもの慰めとしてこの暗黒な一文を擱筆します。

無產政黨抑壓法

片山哲

□

内相は普選案提出の理由として『時勢の進運と國民の政治的思想の發達とは選擧法の改正を要求すること頗る切實なるものあり、政府はこの際内外の狀勢に鑑みこゝに衆議院議員選擧法の全部を改正せんとす』と、述べたことは、近代に於ける社會立法の趨勢を、幾分でも、語つた言葉として贊意を表するに躊躇しない所であつた。處が以外にも、同じ内相は其兩三日前に、社會運動を取締り之を鎭壓するために治安維持法を提出してゐるのである。其提案理由は多岐に涉るけれど、その一部を跋萃すれば『要するに各種の社會運動は漸を追うて旺盛なるに至るべく、此間過激なる思想を有する者等が帝國の治安を紊るの目的を以て不穩なる行動に出づるの傾向は益々增加すべきものと認むるの外なきなり。然るに是等の行動に對する取締法規としては刑法、治安警察法、新聞紙法等存するも其規定不十分にして、屢々危險なる行動を全く取締り得ざる場合あるのみならず、其罰則を適用し得る場合と雖も概ね輕きに失し、罰則を賭して不穩なる行動を敢行せしむるの結果となり爲に取締の實を擧ぐることを得ざるの感なきに非ず、(中略)こゝに於て本法は其過激なる社會的運動中に存する最も重大なる危險と弊害とを少なからしむると同時に一般社會を戒め不穩なる行動に出づるが如きことを豫防せんとするものなり』と。彼此對照して見ると、其立法思想は全然正反對であり、其間には越えることの出來ない大きなる溝渠のあることに注目しなければならぬ。同一人が、數日を出でざる間に、かくも異つた立法思想を平氣で辨じ立てゝゐる其蠻勇に驚くのである。否、立法に就き何等の哲學のないのに喫驚するのである。内相は普選案を提出したのでは決してなくつて、社會民衆が假りに現内閣を機械の樣に借りて、それを通じて議會に提案したのに過ぎない事になるのである。現内閣は普選提案者たる誇を決して獨占してはならない、

彼れは惡法提案者たるの惡罵こそ受けれ、民衆社會立法を提出するの資格は全然ないものである。

□

護憲內閣とは民衆を欺罔するの方便であつた、現內閣の惡法提出は何より其發明をなすものである。社會運動を取締るためには現存法律では手緩い、モット〱過酷なる刑罰を課せなければならない、豫め重刑を規定しておいて一般民衆を警戒するの威嚇法を制定しなければならぬと彼等は主張するのである。かゝる立法思想は、立憲政治の着物だけを着た初期の法治國、所謂、威嚇嚴罰主義の警察政治の時代精神である。警察國が法治國となり、更に一轉して社會國とならんとしてゐるの時に、護憲內閣の手に依つて威嚇立法が提案せらるるとは、正に時代の逆轉であり、我等をして失望落膽せしめること蓋し甚だ大なるものがあるのである。治安法提案は近代立法界の一大汚點である、最大痛恨事である。私は左に立法思想の進展問題を基として此惡法に痛擊を加へたいのである。

□

「樹木が日光を受けて生長する、子供が元氣よく遊んでゐる間にズン〱成長する、」是等の現象は自然の事實であつて、何等の無理がなく、又極めて組織的で、秩序整然と進展するものである。社會生活の現象も之れと同じ様に一つの秩序を保つて組織的有機的發展をなしつゝあるものである、一つの體樣で何時までも同じ處に停滯してゐるものでは決してない。これを同じ場所に停滯せしめようとするのは子供を何時までも子供たらしめるもので、自然の現象に反逆することであり、秩序を破壞するに等しいやり方である。法律なるものは本來この社會現象に反應して制定せられたものであるから、專制官僚政治の時代には、專制的な布告が多く、資本主義社會では、資本家萬能の法律規定が澤山發布せられてゐるのである。資本主義全盛時代に專制治下の舊法律が尙殘存してをつたとすれば、其法律は殆んど用を爲さないものとなつて、惡法の名を冠せられ遂に廢止せられゝに至るものである。舊法律は斯樣にして社會から置き去りにせられる、立法者が廢止を宣言せずとも、社會民衆が事實に於て廢止を宣言するに至るものである。之と同樣に、進展したる新社會で必要なる規則は社會民衆が要求して、新法律を制定しなければならぬ樣な羽目に到らしめるものである。社會力に制限選擧法を置き去りにして、こゝに普選法を制定しなければならぬ社會現象とならしめたものである、內相の所謂「時勢の進運

が當した改正」が即ち之れである。

□

處が、惡法治安法は法律の形を以て社會現象の進展を亂暴にも阻止せんとするものである。子供を何時までも子供ならしめやうとする人間壓搾器に類するものであり、美しい延び／＼してゐる樹木の新芽をもぎ取る鋏に等しいものである。社會現象の進展に對しては法律は助長器、補正器の役をこそすれ、決して之を阻止する役目、鎭壓する役目をすることは斷じて出來ないものである。法律自體が既に社會現象の進展に連れて改廢せられるべき本質をもつたものであるからだ。その本質をもてる法律で、社會現象即ち生活體様の一つである私有財產制度を取締らう、否、現在私有財產制度を確定不動のものとして、其れに絶對性を附與しやうとするなどとは、實に言語同斷の暴舉と謂はなければならぬ。私有財產制度は明かに民衆生活體様の一つの形に過ぎないものであつて、假りに、法律が潜越にも、絶對性を附與した處が、其れ自體が發展性を持ち流展性をもつてゐるものであるから、一定の場所で停止せしめやうとしても停止し得られるものでは決してない。いくら鐵鎖をもつて縛つておいても斯様な生活體様は日に／＼不斷の進展をするものであるから、停止はおろか、絶對不可侵性などとは思ひもよらぬものである。恰も封建的家族制度を神聖不可侵なりと考へ、之を謳歌した時代には、之に反逆するものには極惡人の如く考へてをつたと同様である。社會民衆力は日に／＼、この封建的××××××しつつある、一人の人間が之を打破するのではない、大風が之を吹き飛ばしてゐるのである。私有財產制度を金科玉條なりと信奉せんとする觀念は、恰も×××××××××××人間の家庭生活を絶對的體様なりと考へると、寸分の違ひはないのである。

□

現代の私有財產制度は資本主義經濟組織のことである。今度の治安法はこの經濟組織を否認する目的を以て結社を組織したものを罰してゐるのである、處が經濟組織は現實の自然事實であるから、否認しやうと思つても否認出來ないダーザインである。其經濟組織から産れてくる各種の産物、例へば所有權とか、賃貸權とか、雇人使用權とかは自然事實ではなくつて人爲的作爲の體様であるから、これならば或は否認出來るかも知れない。ある人をとらへて、その人間たる事を否認するといつても、其人間を消滅せしめない限り人間は何處までも人間であ

る。現實の事實を否認するといふことは全然意義をなさぬ事柄である。而も當局の說明に依れば、私有財產制の全部的否認は罪となるのであるが、個々の否認は罰しないと謂つてゐる、何ぞ其說明の兒戲に類せるや。私有財產制經濟組織が假りに否認し得るものなりとしても、否認といふことだけでは何等實績がない、暴力が加はつて初めてそれは違法性を持つことになるのである。大審院判例に下の樣な實例がある『本件記事は我國無產階級に屬する民衆は、資本を有し、生產機關を有するものを敵とし、資本家を應援する無產階級中產階級を敵とし、階級戰爭に於て無產階級の味方たることを明言せざる者を敵とし、騷亂を辭せず、暴力の使用を辭せず、直ちに平和の職業を抛ち、一擧に隣國の如く無產階級の勝利を致すべき行動に出づべきことを慫慂せる趣旨に歸し、即ち不法の手段により社會組織を急激に變更せんとする記事に外ならざれば、かゝる記事は社會の安寧秩序を紊す記事といふべきなり』と。要約するならば、不法の手段によつて社會組織を急激に變更せしめんとすることが違法であつて、其記事が安寧秩序を亂すものと認定せられたのである。然るに、今度の治安法は合法手段に依つて、私有財產制經濟組織を否認しやうとする者等を罰せんとするのであるから、思想の上に於て、前記の大審院判例より遙かに退步したる

ものであり、時代の進運に逆轉する立法であると斷じなければならぬ。社會組織が自然の事實である故その進展も亦人爲で如何ともすることの出來ない自然現象である。合法的手段を以て之に順應する方法を考へることが實際に於て自然現象に合致する事になるのである。暴力を以て破壞することのみ反自然の事實であつて、それを取締ることが法律の使命であり、社會立法の精神でなくてはならぬ。

□

治安法は全く法を弄むだものであり、立法權を愚弄したものである。內相法相の說明に依れば、立憲政體中立法機關は最も重要なものであることを明言し、三權分立中司法權の作用たる裁判所を否認しても政體の變革にはならぬが、代議政體の否認のみ政體の變革になるのであると言つてゐる。さ樣に重要な最高なものであるなれば、其の活動も縱橫自在であるべき筈のものである。處が、實際に於て立法手段によつて私有財產制經濟組織に變革を試みんとする運動をも制限壓迫せんとしてゐるのであるから、謂はゞ最高なりと祭り上げてゐる立法機關の活動を自分で非常な制肘を加へ、之を最高から二位三位へ蹴落さんとしてゐるのである。自家撞着、これより甚だしいもの はあるま

い。立法權を自ら狹くする議案に、双手を擧げて賛成する議員の不甲斐ないのにも驚く。本法は實に現代議士の立法權を蹂躙する代議士束縛の悪法である。更にこの法律には刑法第三十五條の適用（法令又は正當の業務により爲したる行爲はこれを罰せず）を受けるものであるから、代議士の院内に於ける行動には何等束縛を加へるものでないと言つてをる樣であるから、院外に於ける諸種の代議士の行動は總て此法律の制裁を受けなければならない事になるのである。

□

此法律制定の眞意を看破したい。普選の結果、無産階級は其昂頭し來ること必定である、彼等は政黨を組織して既存舊勢力を打破せんとつとめるであらう。資本主義經濟組織の倒壞が彼等の目標であるとするならば、先手を打つて、今から其政黨の政綱を骨抜きにしておかなければならない、其宣言を制肘しなければならない。これ立案者の眞意であり、官僚政治の常套である。資本主義經濟組織が各種の制度に其魔の手を延ばして、人間搾取の機會を作つた事は公知の事實である、この悪制度の變革を計ることは無産政黨の當然の使命である、さ樣な政綱を旗印としなければ其政黨は最早無産政黨では無くなるのである。立法者の卑怯なる手段は一面に於て現代議士の立法權を束縛し、他面に於ては、特に實現せんとする無産政黨をして既成政黨と同じ程度の灰色政黨たらしめんとするものである。よし假りに、法律の力を以て無産政黨を骨抜きにしたりとしても、澎湃として興り來る無産者解放の叫聲を骨抜きにすることはよもや出來まい。况んや法律制定の思想は時勢の進運と國民の熱求とに依つてのみ形成せられるものなるにおいてをや。

□

現代に於ける法律立案の機關が頗る複雜である。政黨内閣と言つてもそれは名義だけで、實は官僚政治のパリ／＼である。從つて法律立案の形式も斷々バラ／＼で、各省思い／＼に特勝手な眞似をしてゐるのである。小作法案や、小作争議調停法は農商務省で立案するし、勞働組合法、勞働争議調停法や、治警十七條廢止案は内務省社會局で立案する、而も同省警保局は之に反對するといふ有樣である。更に又司法省は司法省で、先般悪罵の中に葬られたる過激社會運動取締法案を案出したり、又今度の悪法を組立てたりするのである。社會立法の思想何處に在りや、統一せる立法精神何處に存在するや。資本主義臭味濃厚なる農商務省と、官僚思想を多分にもつてゐる司法省とは宜しく

社會立法の事業から退いて、全部を内務省社會局に一任すべしである。法律立案の組織が今日の様に多岐に渉つてをつては、皆其々責任のなすり合ひをして、統一せる社會立法は到底望むことが出來ない。治警十七條廢止案が今年こそは必ず提出せられるであらうと想像せられてをつたが、これも全く糠喜びであつた。不充分ながら勞働爭議停調法が提出せられるであらうと思つてをつたけれども、これも遂に姿を見せない。入れ替つて、こんな悪辣なる治安法が司法省立案の下に提出せられたのである。我等の驚愕と失望は遂にこゝに悲痛なる義憤を感ぜざるを得ざるに至つたのである。人爲的作爲を以て自然的進運を阻止せんとするの時、或は暴力の勃發なきやを恐るゝことと切實なるものである。

□

悪法は既に衆議院を大多數で通過した。恐らくは貴族院も大なる變更なくして通過するであらう。かくなる上は、我等は間斷なく次期よりこの悪法の廢止を運動しなければならない。必ず時勢の進運はかゝる反時代の法律を一蹴するであらうと信ずる。他面に於て我等はこの法律の適用に關し司法當局に大なる考慮を求むる處がなければならぬ。司法權は獨立なりといつても立法者の意志を全然無視して法律を適用するが如きは時代錯誤の觀念である。立案者が議會に於て明言せし範圍内に局限して、最も狹義に此法律を解釋し之を適用すること、又司法當局の時勢の進運に伴ふ處置であることを確信するものである。

我國思想政策の將來

清瀬一郎

一、法案何を目標とするか

二月上旬、其提案が豫知せられたる以來、既に世間に不評判を極めたる治安維持法案は、相當有力なる提案阻止の運動ありしに拘らず、二月十八日を以て衆議院に提出せられ、翌、十九日より委員會に附託せられた。爾來、院外に於ては、言論機關

思想團體、勞働團體は擧って之に反對したるに拘らず、反對の聲は院内に響かず。昨夜（三月七日夜）衆議院に於て、僅々十八名の反對投票と數名の棄權者を除き、院内四派、政、本、憲、中、革の一致の投票二百四十六票を以て原案に少許の修正を加へたる儘、衆議院を通過した。貴族院の通過は、今日の政情より察し或は困難にあらざるか。保守的法案が壓倒的大多數を以て衆議院を通過し、却て貴族院に於て阻止せらるならば、是れ天下の珍であらう。本文發表の時には此結果は明瞭である。記して以て後日をトせん。

それは兎も角、昨夜、衆議院を通過したる法案第一條は「國體ヲ變革シ又ハ私有財産制度ヲ否認スル目的ヲ以テ結社ヲ組織シ、若ハ情ヲ知リテ之ニ加入シタル者ハ十年以下ノ懲役又ハ禁錮ニ處ス」と在る。第二條以下は此目的の事項に關する協議、煽動、並に金品の授受を處罰して居る。而して國體とは天皇の統治權の義であると説明せられて居る。用語の可否は姑く別論とし、天皇統治權の一事は、我國に於ては指斥言議の外である。之を變革する者を處罰することは問題と爲らず。そうすれば本法案の目標とする所は何であるか。問はずして明である。私有財産制度、即ち是れである。

本案に依れば私有財産制度の否認は、合法手段に依る場合、即ち議會の立法段階に依る場合と共に處罰せられないことである。其事は、私有財産制度の否認の文字の上に「暴力手段に依り」の一句を插し、合法否認の場合は、罰條より除外せんとの運動が廢斥せられたる一事に徴し明白である。

然らば、衆議院が何故に私有財産制度の否認は、如何なる方法を以てするを問はず一切之を嚴禁するの立法を通過せしめたるか。其動機は別に之を論ずるとし、其理論上の根據如何。

議員諸君の演説を聞くに、結局斯う謂ふのである。私有財産制度は人類の根本制度である。殊に帝國憲法第二十七條に於ては「日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルヽコトナシ、公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル」と在る。憲法を變更せざる以上私有財産制度の否認は出來ない。而も臣民には憲法變更の權能なきが故に、私有財産制度の否認には合法性を認むべき場合がない。私有財産制度の否認は如何なる場合に於ても必ず違法性を具へて居るものである。故に私有財産制の否認を目的とする結社、協議等を處罰するに、其暴力所爲に依ることを條件とする必要はないと謂ふに在る。

二、私有財産制度と所有權の觀念

果して然るか？私有財産制は斯の如く神聖不可侵のものであ

るか。立憲の本義に於ては我國と此の相違なき英國、佛國に於て私有財産制の否認を目的とする結社が合法的に成立して居るではないか。我國の君主制は世界に類例はない。然し人民の自由權の保障、議會の立法權の限度に於ては世界立憲國に共通である。彼に許されて、我に許されざる理由如何。論理如何。

何等かの誤解、錯誤がそこに伏在して居らねばならぬ。誤解、錯誤は何處に在りや。

我國政治家は「所有權」といふことと「私有財産制度」といふことを混同してしまつて居る。「所有權」といふことは法學上の觀念である。「私有財産制度」といふのは社會學的用語である。所有權を基礎として私有財産制度は興つて居るのは事實であるが、「所有權」即「私有財産制」ではない。社會公益に密接する大量生産の手段までも個人の所有に歸せしめ、其任意に處理することが私有財産制度である。所有權は譬へば材木であつて、私有財産制は家屋である。所有權は原料であつて私有財産制度は製品である。

なるほど、所有權の否認は觀念上既に困難である。無政府主義者と雖も食物を攝らねばならぬ。手に握つた食物は彼の所有である。所有權絶對否定は合法的に成立する餘地はなからう。されぱとて所有權を材料として成立せる私有財産制度の變更又は否定が觀念上成立せぬといふ事とはならぬ。家屋を崩しても材木として殘るものがあるではないか。

所有權の保障は憲法に其規定がある。故に所有權の否定は憲法に抵觸せずやとの問題を生ずる。然し私有財産制度を變改する事は憲法と少しも交渉のない事柄である。我國政治家の錯覺は實にこゝに在る。

元來、我國に於ても、所有權の觀念及事實は太古よりあつたに相違ない。然し、私有財産制度といふものは極めて近代のものである。明治維新に至るまでの我國の産業は農業であつた。農業のみといつても大過ない。農業の生産手段たる土地は國有であつたのだ。普天の下率土の濱、王土王臣にあらざるなしといはれた。此格言は當時の意味では國土は王（又は國家）の有であるとの意味である。百姓は之を拜借して農耕に從事し、大名は百姓を領して居つたのである。領するとは管理して居つたことを意味するのである。即ち今日の意味に於ける私有財産制度ではなかつたのだ。これが私有を許されたのは明治二年であつた事は人の知る所である。

明治二年に農業が私有制度的經營となつた。次いで新なる工業が起つた。商業が起つた。銀行も出來た。取引所も出來た。斯くて我國に近代的意味の私有財産制度が完成したのである

が、それは前述の如く、僅々五十年以來のことである。それを誤つて、所有權自體と混同し、自然法學者の口吻を眞似て、私有財産制度は人類生得の自然權にして生命權と相併ぶたる不可變の制度なりと稱するが如きは誤解にあらずして何ぞや。

三、私有財産制の否認の可能

私有財産制は社會上の一現象に過ぎぬ。それ自身所有權の觀念と同一物でない。所有權は人類生活上最も便利なる法律觀念なるに拘らず、私有財産制は必ずしもそうでない事が證明せられた。今日の社會の最大害惡たる「貧困」の原因は私有財産制に在ることが發見せられた。科學の進歩は生産を容易ならしめたるに拘らず。人類の大多數は益々「貧困」に陷らんとす。其原因は那邊にあるか。犯罪、非倫、墮落、其原因は「貧困」である。「貧困」の原因が私有財産制の欠陷に在りとすれば之が改革又は否定は止むを得ない。是れ近代思想界に私有財産の改革が問題となつた所以である。

私有財産制度の改革には三種の手段がある。

(1)教化
(2)立法
(3)暴力

の三者是である。立憲政治を前提とする以上、暴力手段の排すべきは勿論である。目的は是であつても、手段が非であつてはならぬ。然し、私有財産制度が社會上の一現象に過ぎず、人類の合理性に訴へて其改革が可能である以上、又憲法の條規より見て此改革を禁ぜざる以上、(1)教化に依る改革、(2)立法に依る改革を禁壓すべき理由も、必要もない筈である。

しかのみならず、立憲の本分に鑑みれば、社會現象統制の爲めに立法を爲すことが議會の本能ではないか。男を女と爲す外は何事も出來得るとは譬論ではあるが、議會立法の限界の大なることを説明したものである。私有財産制の否認は立法手段に依るも猶且、之を處罰すべしとは、議會自ら議會の權能を縮少、侮蔑するものではないか。

四、社會政策新綱領

普通選擧は國民全體に發言權を與ふるを目的とする。從來、發言權なかりし無産階級にも政治參與の權を賦與するを目的とする。無産者の發言は無産政黨の組織に依り之を統一して權威あらしめねばならぬ。本法案の通過は無産政黨の組織を妨害しないか。是れ世人の聞かんとする具體的問題である。今日既に無産政黨の組織を計畫せられる人々あるを耳にして居るが、私

は未だ其政綱を聞いては居らぬ。そこで私は、獨、英の同樣の黨派の宣言、政綱並に學者の私案を掲げて、立案者に對し此等の綱領を定めたる結社が本案に觸れざるやを糺した。之を茲に發表し置くことは後日の左券として多少意味を爲すことゝ思ふ。其綱領は左の六種である。

第一、「イーリー」の社會改良綱目

(一)天然、人爲の獨占の社會化(國有又は公有の意味)。(二)土地制度の改革。(三)私有財產の社會的方面の發展(即ち個人的方面の抑制)。(四)私有產業の道德的基調の向上。

第二、「チェンズメリー」の改革案

(一)勞働團結權の確保と團體協約の公認。(二)調停仲裁の新制度。(三)最低賃銀の決定。(四)勞働時間の規制。(五)失業問題の對策。(六)產業代議組織。(七)產業國有化

第三、「ワッツ及ラック」の產業法典

(一)團結權。(二)集合協約。(三)生活賃銀。(四)八時間勞働。(五)婦人勞働對等權。(六)產業統制。

第四、英國勞働黨宣言中

(一)國民最低限の一般的實施。(二)產業の民主的統制(就中土地及主要產業の國有化。(三)國家財產の革命(就中資本課稅の設定。(四)剩餘財の公共福利的使用。

第五、獨逸社會民主黨新綱領

(一)共和制の擁護(此項は我國に關係なし)。(二)司法制度の民主的改造。(三)財政、租稅の改革、國民生活必要品の供給の確保、主要產業殊に鑛山の社會化。(四)社會政策の確立、殊に社會立法に依る勞働力の保護及び經濟議會制度の設立。(五)國民保健及び教育の社會化。(六)國際政策の樹立。

第六、社會政策新綱領

(一)產業の社會化。(二)產業の民主化。(三)產業上に於ける責任管理の制度。(四)勞働爭議に於ける產業自立的裁判又は調停制度の樹立。(五)產業利得の衡平なる分配。(六)勞働團體權及勞働協約の公認。(七)生活賃銀の規準。(八)勞働時間の規準。(九)勞働法典の編纂。(十)勞働者教育及成年教育の普及發達。

政府當局は以上六者の內、第四、第六には國有、公有の文字なきを以て此二者は本法に觸れざれども、其他に存在する、國有公有、社會有等の文字は、其使用者の意思如何に依り本法案に抵觸すべしと答へたり(詳細は本法案委員會速記錄中に在り)。

實に驚いた事ではないか。他の立憲國に於て何人も疑を存せざる政綱、政策が、我國にかて問題となるのであるか。我國に於ても、本案の提出あるまでは、上記各政綱が我國法に觸るべ

しとは何人も考へなかつた。上記各書文は永井亨氏の社會政策新綱領中より選んだものである。本法案通過の爲め此等の綱領の適法性に疑問を生じて來た。

政府は本法案には勞働者には適用はないと度々聲明した。是れ何の意味であるか。政府と資本家の憐憫に階善して居る勞働者には適用がなからうが、個性に目覺め、自己及自己の階級の運命開拓に進展せんとする勞働者には直接の適用があるではないか。新政黨組織は本法に依り阻止せられざる迄も、過大の制限を受くる事は勿論である。世間或は普通選擧實行の曉に擡頭すべき新興勢力を抑止する爲め某方面より本案の提出を諷止くは要求せられ、政府は其意をむかうる爲めに止むを得ず本案を提案したのであると稱せらるゝも必ずしも誣妄なりとして一笑に附するわけには行くまい。後年の歷史家必ずや之を明證せん。又記して後日を待つ。唯だ愧づ、私の微力なる、連日の抗爭に拘らず、本案の通過を阻止する事を得ず、衆人歡呼の裡に本案の通過を見たるを。但し本法破毀の一念、今猶ほ消磨せず。もし不幸にして本案が法律とならんか、機會ある毎に機會を捕へ、本法廢止に努力しやう。本法の成立に憤激し、合法主義を捨て、暴力主義に轉ずるが如きは切に、戒め且愼まざる可からざる所である。（三月八日、治安法案衆議院通過の翌朝執筆）。

は未だ其政綱を聞いては居らぬ。そこで私は、獨、英の同様の黨派の宣言、政綱並に學者の私案を掲げて、立案者に對し此等の綱領を定めたる結社が本案に觸れざるやを糺した。之を茲に發表し置くことは後日の左券として多少意味を爲すことゝ思ふ。其綱領は左の六種である。

第一、「イーリー」の社會改良綱目

(一)天然、人爲の獨占の社會化(國有又は公有の意味)。(二)土地制度の改革。(三)私有財産の社會的方面の發展(即ち個人的方面の抑制)。(四)私有産業の道徳的基調の向上。

第二、「チンスメリー」の改革案

(一)勞働團結權の確保と團體協約の公認。(二)調停仲裁の新制度。(三)最低賃銀の決定。(四)勞働時間の規制。(五)失業問題の對策。(六)産業代議組織。(七)産業國有化

第三、「ワッツ及ラック」の産業法典

(一)團結權。(二)集合協約。(三)生活賃銀。(四)八時間勞働。(五)婦人勞働對等權。(六)産業統制。

第四、英國勞働黨宣言中

(一)國民最低限の一般的實施。(二)産業の民主的統制(就中土地及主要産業の國有化。(三)國家財産の革命(就中資本課税の設定)。(四)剩餘財の公共福利的使用。

第五、獨逸社會民主黨新綱領

(一)共和制の擁護(此項は我國に關係なし)。(二)司法制度の民主的改造。(三)財政、租税の改革、國民生活必要品の供給の確保、主要産業殊に鑛山の社會化。(四)社會政策の確立、殊に社會立法に依る勞働力の保護及び經濟議會制度の設立。(五)國民保健及び教育の社會化。(六)國際政策の樹立。

第六、社會政策新綱領

(一)産業の社會化。(二)産業の民主化。(三)産業上に於ける責任管理の制度。(四)勞働爭議に於ける産業自立的裁判又は調停制度の樹立。(五)産業利得の衡平なる分配。(六)勞働團體權及勞働協約の公認。(七)生活賃銀の規準。(八)勞働時間の規準。(九)勞働法典の編纂。(十)勞働者教育及成年教育の普及發達。

政府當局は以上六者の内、第四、第六には國有、公有の文字なきを以て此二者は本法に觸れざれども、其他に存在する、國有公有、社會有等の文字は、其使用者の意思如何に依り本法案に抵觸すべしと答へたり(詳細は本法案委員會速記錄中に在り)。實に驚いた事ではないか。他の立憲國に於て何人も疑を存せざる政綱、政策が、我國に於て問題となるのであるが、我國に於ても、本案の提出あるまでは、上記各政綱が我國法に觸るべ

しとは何人も考へなかつた。上述各條文は永井亨氏の社會政策新綱領中より選んだものである。本法案通過の爲め此等の綱領の適法性に疑問を生じて來た。

政府は本法案にに勞働者には適用はないと度々聲明した。是れ何の意味であるか。政府と資本家の憐憫に隨喜して居る勞働者には適用がなからうが、個性に目覺め、自己及自己の階級の運命開拓に進展せんとする勞働者には直接の適用があるではないか。新政黨組織は本法に依り阻止せられざる迄も、過大の制限を受くる事は勿論である。世間或は普通選擧實行の曉に擡頭すべき新興勢力を抑止する爲め某方面より本案の提出を諷示して は要求せられ、政府は其意をむかうる爲めに止むを得ず本案を提案したのであると稱せらるゝも必ずしも誣妄なりとして一笑に附するわけには行くまい。後年の歴史家必ずや之を明證せん。又記して後日を待つ。唯だ愧づ、私の微力なる、連日の抗爭に拘らず、本案の通過を阻止する事を得ず、衆人歡呼の裡に本案の通過を見たるを。但し本法破毀の一念、今猶ほ消磨せず。もし不幸にして本案が法律とならんか、機會ある毎に機會を捕へ、本法廢止に努力しやう。本法の成立に憤激し、合法主義を捨て、暴力主義に轉ずるが如きは切に、戒め且慎まざる可からざる所である。(三月八日、治安法衆議院通過の翌朝執筆)。

農民組合大會の印象と批判

日本農民組合大會に就て

北澤新次郎

日本農民組合は去る二月廿七日より三日間に亘つて、其の第四回大會を東京に開催した。そして吾人は過去三ヶ年に飛躍的の發展をした同組合の大會を目擊するに及んで、新興勢力の意氣と覺悟の旺盛なるに心强く思はれた。先づ大會の情景は異常の緊張せる雰圍氣に滿ちて居た。議席には小作人としての日燒と生活に惱む六萬余の農民を代表する四百人余の代議員がずらりと列んで居り、壇上には各組合の象徴である數十の組合旗が混然と配列せられて居る。大會は農民歌の合唱に依て開會せられた。議事は靜肅と敬虔の態度で始まり、階上の傍聽者も亦私語を發するものもない。斯かる態度と情景は、平生斯うした事柄に馴れない農民として實に立派なことで、衆議院に於ける議員が彌次と揚足取りをなさんとする不眞面目なる態度に比較すれば、其の間に霄壤の差違あることを思はしめる。

會議は議長の選擧から漸次進行して、農民組合と友誼的な關係を持つて居る他の無産階級諸團體の代表者の祝辭があつた。そして友誼團體として祝辭を呈したものは、日本勞働總同盟並びに水平社の代表者であつて、其の何れも無産階級の階級的解放を成就する上に、共に提携協力することを高調したのであるが、吾人は此等の諸團體が既成勢力に對して協同戰線を張ることとの必要と努力を意識して居ることに非常なる心强さを感ぜざるを得なかつた。

本年の大會の議案は總體で二十一事項もあつたが、實際大會に於て論議せられたのは其の中の極めて少數のものであつて、其の中最も重要なるものは、組合組織改正の項目である。即ち從來組合が其の組合員も少數で、實力も微弱であつた場合には、其の組織も甚だしく非組織的であつたのであるが、組合が漸次内的にも外的にも發展するにつれて、組合の全國的組織を充實し、其の機能を充分に活躍さすべき必要に迫られて來た。そこで組合の從來の規約を改正せざるを得なくなつて來た。更に之れを具體的に云へば農民組合の總本部と其の地方的機關である同盟會、縣聯合會若しくは郡聯合會との關係を從前より有效にしなければならなくなつて來てゐる。ところが、此の兩者の關係は一方的の關係が其の土地の情勢に依つて、步調が不揃ひであることが組織變更に際して困難と矛盾とに逢着せざるを得ない現狀にある。之れを詳言すれば、農民組合が發生した當初に於ては總本部の實際的勢力は、之れを地方的な機關である同盟會のそれに比すれば、甚だしく微弱であつたのであつて、同盟會は組合員が據出する會費の大部分を自ら保有し、且つ其の管轄に屬する組合支部の上に甚大の勢力を持つて居たものである。ところが、組合意識の最も發達して居る近畿地方に於ては、地方的機關である同盟會の職掌と總本部のそれとの間に、漸次職掌上に確然たる分業が行はれるようになり、同盟會は單純なる評議會の如き形體を呈するに至つた。そこで、總本部と同盟會との關係が可成り圓滑に行くようになつて來

た。然るに其後發達したる聯合會並びに九州地方に於ける同盟會と本部との關係は未だ斷の如き形體を呈して居らない。從つて其等の場所に於ては、同盟會に實際的の勢力を持たせないことにすれば、組合の發達の上に可成りの障害を來さゞるを得ないことゝなる。

茲に於て問題は農民組合の全國的組織を中央集權的なものにするか、地方分權的なものにするか、其の何れのものが組合發達の上に有效であるかゝ云ふ點に歸着する。此の問題は單に農民組合ばかりでなく、勞働組合の場合に於ても屢々論議せられたところであつて、頗る重要なる且つ困難なるものである。吾人の見解に依れば、農民組合は農業の性質上又我國の如き狹長なる地域を有するところでは、地方的な細胞的機關の集團である縣聯合會に實際上の勢力を置くことが、種々なる點に於て有效であると考へられる。けれども、之れを極端に行ふと全國的な中樞機關である總本部の統制能力が甚しく微弱となつて、農民組合の一體的活動の上に尠からざる支障を誘致せざるを得ない。さうなれば、恰も封建時代の諸藩主が各自の利益を中心として相互に跋扈したように、農民組合の地方的機關が相對峙することになり、組合全體の團體的勢力が甚しく弱らざるを得ない。これは、團結は力であるとの原則に違反することになつて、組合の目的達成の上に尠からざる不利益を來すに違ひない。現に四國のある縣聯合會の如きは此の弊に陷つて居るところがあるようであり、總本部に對する態度は恰かも宗教上の總本山の如く考へ、總本部費を一種の賦金と見做して居るような傾向がないでもない。之れは不可である。尤も分散的な本質を多分に有して居る農業に於ては、地方的利害關係に因つて團結する地方的機關は、自らそれ自身の活動に熱心であり、地理的に懸隔せる總本部の職掌の均霑に與からない結果、動もすると總本部に對して冷淡なる態度を採り易い傾向を助長するものであるが、斯の如き態度と考へ方は團結的勢力の伸展の上に有害であると云はなければならぬ。故に吾人は地方的の實際的事項の活動は該地方の綜合的機關である縣聯合會の如きものゝ活動に俟つとして、更に相互扶助、無産階級の階級的解放といふ偉大なる事業の全國的綜合的機關としての總本部を極力維持、活躍させるのが重要なる事項と考へる。併し此の規約改正の件は大會に於て何等決定を見ないで保留せられたのであるが、之れは組合發展上最も重要なる事項であるから充分なる研究を遂げられんことを希望して止まない。

次に重要なる議案に、岡山縣聯合會から提出した「町村會議員改選には組合の候補者は立候補せざるの件」といふ項目があつたが、之れは幾多の論議の結果否決されたのである、此の事は農民組合の政治行動の上に興味ある問題である。蓋し、近き將來に於て普選が實施せらるゝ曉に於ては、農民組合は自ら既成政黨に對抗して無産政黨を樹立することに考慮を拂ふであらうと考へられる。そして此の場合に於て最も必要なることは、組合若しくは組合員が既成政黨の陰險なる幾多の奸手段に乘ぜられないことである。ところが、現在の狀態を見ると階級意識に自覺しない農民には、此の憂ひが充分に存在して居ることを見る。例へば群馬縣の如きは既に既成政黨者流の走狗傀儡として存在して居る組合があるようである。そして一度既成政黨者流の毒爪に掛つた大農民組合の存在するに於ては、普選實施後に於ても此等の政黨者流は益々斯の如き組合を自己の便宜のために利用するに違ひないから、農民組合が無産政黨を樹立せんと欲しても從來の行掛り上、純然たる無産政黨を組織せんとする場合に甚大なる、障害を

來すに相違ない。之れは農民組合員が最も考慮すべき焦眉の急務であると考へる。

此の外、大會に於て可決された事項に、農民に常に抑壓と苦痛とを與へる農地管理の中間制度を撤廢することや、農民組合の組合集會に於て議事を動もすると不統制に導く飲酒の禁止、並びに組合式結婚法を制定せんとする努力は、何れも農民組合員が組合的行動に對して如何に眞面目になつて來たかを象徴するものであつて、吾人は衷心から斯の如き事項が着々と實現せられつゝあることを喜ぶものである。

大正十一年に成立した日本農民組合の發達は、實に目醒しいものがある。そして、同組合は啻に組合員の經濟的地歩の伸展に與つて力ある許りでなく、更に到る處に農民學校を設立し、農民の社會教育につとめ、或は其の機關新聞である「土地と自由」を通じて、農民の社會意識の向上に資して居る。更に最近關東同盟會に於ても「日本農民新聞」なるものを發刊して益々農民の階級的意識の高調に努力して居ることは、之れが將來農民階級的の解放を達成する上に尠からぬ貢獻をなすことは疑ふ余地がない。（一四・三・七）

日本農民組合大會後記

大西俊夫

直後感

二月廿七、廿八、三月一日と、東京では初御目見得の、日本農民組合第四回大會もすむだ。

大會直後の感想は、何か？

まづ、第一に議事進行のことである。勿論第一日の儀式めいたものには問題はない――討議に入つた第二日以後の、あまりに不馴れの點である。議事進行といふ技術上からも、各地方のそれ〴〵の代議員の打ち合せの上からも、正に不行届である、異常な緊張、喧騒、時間の徒費、そして仇敵視せる兩派の對立かの如くに見える場面の展開となつたこと等である。尤も、スラ〳〵と小綺麗に渡つてのけるに限るといふことにもなるまい、又、これが、農民組合の本質的缺陷だといふことにもなるまいが、もつと、議事進行上の熟練にならなくてはならまい。

次に、今回大會には、もつと論ぜなくてはならぬことが一つがあつた筈である。

年に一度の大會に、全國からの――今度でも、東は青森から、西は宮崎、熊本から、四百余名が――代表者が參集する。この絶好の機會を、大會の討議にのみ出席したものとしては、十分に活用したものとは云はれぬ、大會で、過ぎし一ケ年の決算、來るべき一年の計畫、それに、訓練、教育、宣傳……と、大會順序――の運びだけでも、意義はあることではあらうが、對外的にも、對內的にも、もつといゝ、いゝ、いゝ、いゝと係されなくてはならぬことがあつた。爭議部法律部合同協議會が、開催せられたが、本年度の農民組合の大會にとつて、極めて重要な性質をもつた、そして、政治都市の東京といふ場所柄から、又、議會開會中普選案上程といふ時節柄からでも、無産政黨組織準備に關する華々しい決議の一幕が、なかつたことは、誠に遺憾であつた。これとても、その心もちなり準備なりが全然と缺けてゐたならばではあるが、機關紙「土地と自由」二月號の大會欄中に豫定が見出しえられるのであるから、尚更にその想ひがする。

世界短篇小說大系

世界短篇小說の文學史上に名高きものを悉く網羅したる上特に「近代短篇」胎生の基礎となつた古代の多くの物語を加へ、又露國勞農作家の作品集に一卷を宛て、又一卷は世界各國の家庭小說・探偵小說、その他興味中心の作に宛て、又一卷に作者不明の世界的名作を聚め、附するに「短篇小說發達史」及短篇小說の技巧的研究」を以てし、日本篇三卷には、坪內博士以後現代の新進作家を悉く網羅し、各自の自撰による珠玉とも稱すべき名篇百五十篇を收むる等、小社の用意が如何に細かなるかを諒とせられたい。尙譯者に申すまでもなく、現代の文壇が有する最高權威のみであることは、讀者諸君と共によろこぶ次第である。

興味深き家庭の讀物として、又、作意を有する方達には教科書として、作者にとりては絕好の參考書として、本大系を御勸めする。

1 古代物語篇 聖書、ヘロドタス、其他十餘篇
2 英吉利篇 歷代名作集三十餘篇
3 英吉利篇 近代傑作集[illegible]十餘篇
4 亞米利加篇 ホウソオン外二十餘家三十餘篇ヲ聚
5 佛蘭西篇 歷代作集二十餘篇
6 佛蘭西篇 近代傑作集三十餘篇
7 獨逸篇 ゲーテ外二十餘家三十餘篇ヲ聚
8 露西亞篇 歷代名作集三十餘篇
9 露西亞篇 近代勞農作家傑作集五十餘篇
10 南歐と北歐篇 ソエンキヰッチ外三十餘篇ヲ聚
11 探偵家庭小說篇 ポウ其他四十餘篇
12 作者不明傑作集 十餘篇外發達史研究等
13 日本篇
14 日本篇
15 日本篇
蘆花氏 漁夫の娘 外、明治より現代作家に到るまで、海外文學に拮抗すべき名作約百五十篇を網羅す。一々著者の自撰傑作のみ。
16 支那篇 李漁の十二樓其他二十篇

內容見本進呈
—ハガキで御申越し下さい—

豫約締切四月三十日限

規略

全十六卷 菊判七百頁以上 天金頒美本
申込金 四圓六拾錢(最後の會費に宛つ)
會費 (每月拂四圓六拾錢「送料市內六錢 地方十八錢」/ 一時拂六拾七圓)
配本 大正十四年六月より向十六ケ月

東京市京橋第一相互館
發行所 近代社
電話銀座四四六八番 振替東京七〇五九六番

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ、永年禁煙の出來なかつた人も一度「カロット」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて吳れました、其處で榮川堂主は自身來社せる誠意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを少體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸凉なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する丹き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他ト歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット（凡百日分）

パイプ ベークライト製付	壹組	貳圓五十錢
パイプ 象牙製サック入付	壹組	參圓五十錢

	内地	臺、朝、樺
送料	十八錢	四十五錢
引替送料	三十錢	五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森入新井町不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

十二大家傑作頒布會

今回左記十二大家の傑作各一枚を十二ケ月に組合せお頒けす。作品は毎月一枚宛配布し一年間にて十二枚即ち十二ケ月全部取揃ふやうにせり。會費が此の如く低廉なるは筆者諸先生が特別の好意を以て揮毫下さる故なり。御希望の方は左の規定御覽至急御申込み下されたし。

規定

一、本會の筆者は左の十二大家なり。（いろは順）

石井伯亭先生　山村耕花先生
大谷句佛上人　山内多門先生
小川芋錢先生　近藤浩一路先生
田中頼璋先生　北野恒富先生
中村不折先生　木村武山先生
野田九浦先生　飛田周山先生

二、會費 一ケ月 金參拾參圓　送費（内地 金六十錢／海外 金九十錢）

但し毎月一枚宛を配布する故、二月に第一回の配布を受けたる方は、來年一月迄に十二枚全部の配布を受け終り、三月に第一回の配布を受けたる方は、來年二月迄に十二枚全部の配布を受け終るなり。

三、申込み金等一切不要、會費及び送費は揮毫出來たる分より毎月一枚宛を代金引換郵便にて送附し、現品と引換へに頂戴す。東京市内は郵便によらず毎月御届けし其節會費を頂戴す。

四、作品は、巾一尺二寸長サ四尺八寸の紙本へ頗る入念に揮毫せし人物、花鳥、山水等適宜に取合せたる十二ケ月（十二枚）なり。此の十二ケ月は必ず前記十二大家の作各一枚宛を以て組合せたるものなり。

五、作品の大きさは、本寸六曲屏風に臺貼り仕立（金箔若くは緞子等を四方に額縁様に貼附はして仕立るなり）として、丁度よき寸法なり。又幅物としても巾、長サ共紙本の理想的大きさなり。尚ほ全部配布したる後ち、御希望に應じ屏風も幅物も（箱書共）實費にてお仕立す。

六、申込期日は、三月三十一日限りとす。但し期限内と雖も申込み豫定數に達したる時は謝絶す。

七、作品は、申込みを受けたる月より揮毫出來順に配布す。發送の際は毎回必ず書面を以て御案内す。

八、申込みは、普通の葉書又は手紙に「十二大家傑作頒布會に入會す。揮毫出來の分より毎月一枚宛代金引換郵便にて送附相成度申込み候」と記し住所姓名を明細に記入し、なるべく姓名の下に認印を捺して（東京市麹町區元園町中央美術協會）宛投函のこと。

東京市麹町區元園町一ノ一九
中央美術協會
長電話四谷五一九二番
振替口座東京二九七番

それから、これに、創立滿三ヶ年、奴算に髣髴してゐる日本農民組合第四回大會へは、無理な注文に屬するのだが、大會から社會へ、資料と意見とが、提供されない事だ。

農民組合の大會に限らず他の勞働組合の大會でも、各自の有する統計若しくは調査、趣勢報告の二ッ三ッ。並びに各自の運動上に當面した、或は當面の注目されてゐる社會上の問題に對して、各自の立場上からの意見が、大會の權威ある決定として一ッ二ッ、社會に投げつけて欲しいものだ。ことに、學者などは、有產者側の見解に對して無產者側の代表的な指導的なものとして、毎年の大會から提供されたい。無產政黨が出來たら、そんな役目は果すことではあらうが、勞働組合の大會はそれとは別個なものであらう。こんな注文は經驗から、氣から、財政上からひよわな日本の組合運動には、望みすぎることではあらうが、今日から要求してをいても、然るべきものと考へられる。

以上の三項が、大會直後に、念頭に浮むできたことである。

大會の焦點

日本農民組合の、この第四回大會が爲しとげるべき目標は何であつたらうか。

農民組合の發展は、貧農兵に極めて順當であつた、實に追手に帆を揚げるより以上の事實である。無產農民の全國的團結の基礎が確立したのである、そこに問題がある、三府四十縣に跨つて、この廣汎な地域、そして小黨分立式の日本人、近代的無產大衆運動の意識とは、一寸、緣の遠い農民諸君、正に、農民組合は、賣り札と唐樣に書く三代目」でなくて「……群雄割據となる三年目」の感がないでもない。これも一の目標が出來るわけである。

行き詰つた農業經濟制度の改革が所謂政治的分野への運動の進展とならなくてはならぬ、今年の三、四月から十五年春にかけての全國的の町村會議員の改選、俗は、普通選擧の實施に伴ふ、既成政黨打破と無產者政治教育と云ふ具體的問題も、目標の一つ。

小作料減免問題の、たか休み、一と吐きといふ合ひ間に、販賣購買の純經濟運動の着手、これも亦、一目標である。

目標は、かくのごとくであるとして、大會の議題、論議等に、如何に取扱はれなくてはならぬかといふ、大會の表と裏との使ひわけ、言ひ換えれば方法論が、問題となるわけである。

それから又、目標に、さうであつたとしても、大會の空氣、大會の感情とでもいふものが、目標とピタリと合はなくてはならぬ。

目標、方法論、大會感情　この三點の調和が整はなければ、大會の焦點が合つたことにはならぬわけであらう。

大會への、各地四十余の聯合會からの提出建議案六拾五、内、建議案委員會で採擇と決したもの十八案、加ふるに中央委員會提出の三案、計廿一案が議場に上程されたのであつた、すこしは、採擇が多すぎると考へられるのではあるが、なか／＼に有意義の議案があつた——後に列擧する——それ等は、ともかくにも全部の討議を完了した。しか！、この第四大會は、譜帮であつた、鮮かでない、重苦しい焦點はづれの大會であつた。

この焦點外れの大會が、面白かつた、失態だつた、眞劍だつた……と、さま／＼の批評がくだせるは、第三者側の人々のことであつて、大會に責任のある人達にとつては好ましからざるもの、豫想せざるもの、であつた事は疑ひを容れる餘地は寸毫もない。

こゝに、この焦點外れの大會とならしめた諸因を討究してみやう。その那邊に存する乎は、明白となる事であらう。

總本部の東京移轉

「總本部を東京へ移轉の件　提案者關東同盟」

日本農民組合は、四年前の大正十一年四月九日に神戸に設立された、爾來、總本部を大阪市に置いてあつた。この總本部の移轉案であるから農民組合運動の根本原則の問題ではない、相當の準備と時日とを以てする用意さへあれば足りることだ。本部移轉となれば、經費の點からも組合員全體の了解の點からも、豫算案編成の際には勿論のこと、中央委員會の議題としても協議した上での話でなければならぬ。ことに、現在の農民組合の地理的分布の上に、總本部費負擔の上に、日本中部以西に八分、中部以東に二分――この二分も、最近三四ヶ月前からであるが――といふ現狀に、組合員の心理を、考慮しなければならぬわけだ。

かゝる一切の手續なくして、總本部移轉案を、大會に提出し、然も極力支持するに至つては、態々、東京に出てきた中部以西の代議員の感情を荒立てるのは當然であらう。若しも、この案が通過したならば、豫算案は勿論のこと、組合の一切の方針、少さい事に至つては人々の仕事の關係まで、變更せねばなるまい。

この移轉案の、提案理由が、（一）に農民組合總本部の任務が諸官省との交渉等の政治的方面であり、（二）に總本部費の低減、であつた。その主張が、原理的にも、一切の準備なしに決定を要する緊急議案としての意味にもならなかつた。

總本部東京移轉案は、無産政黨の樹立された曉にも、當然、東京に移轉さるべきであるか、どうか判然としたやうな事であつて、一考を要する程度の問題である。

實に、つまらぬ問題であるのだが、第四回大會では「重大なる結果」を齎らしたのであつた。

同盟會の機能確定と廢止

「規約改正の件　中央委員會提出」

規約改正は、昨年十二月十四、十五兩日の中央委員會に於いて逐條審議の草案修正の上滿場一致可決し、直ちに同月廿日發行の「土地と自由」號外に發表された。

その要點は、「第四章組織」の各項「第一同盟會」「第二縣聯合會」「第三郡聯合會」以下……各組織體の機能が舊規約には明記されなかつたのが、原則的要點だけを規定したことゝ「第五章組合費」で、組合費の内容が、總本部費、同盟會費、縣聯合會費等に明示された事。「第七章細則」の制定であつた。

大會では、提案理由の說明の後に、法規委員會に附託された。

法規委員會では、規約改正案中に、豫定だにしなかつた、第四條總本部所在地の項の論議が余儀なくせられ、その煽りと共に「第四章組織」の第一同盟會の機能制度の件から、同盟會廢止の修正案とまでの論議となつた。

そして「同盟會」の問題が、主要點となつてしまつた、しかし、組織の新規定は、第五章組合費の規定と共に、極めて重大である、それこそ農民組合運動の精髓に觸れた問題だ。

その新條項は「第二十條　同盟會ノ機能ハ本組合ノ目的ノ爲メニ必要ナル地域上ノ聯合協議會トシ左ノ機關ヲ……」である。

改正主旨は、全日本に亘る農民組合の組織に於いて、組織上の最上位の中央機關である總本部の次位にある地方的な同盟會の機能を明確にすることが、同盟會設立の希望が地方に現はれて來る現實の上に必要であつた。そこで、

（一）同盟會は、地方から協議會として、各縣聯合會からの聯合執行委員會を主體とする地方的に必要な連絡共動機關とすること、

(二)同盟會が、單に、關東關西の二同盟に限定するの一面であるが農民組合には不可であること。

(三)現存するが如き、機能の指示されてゐない規約に據ると共に全國一樣なるべき總本部費から補助費を正式に提供を要する同盟會の績立を不可とする。

存の意味で起草され。中央委員會で決定した改正案が、日本農民組合運動の大局の上から是として承認せられるなれば條文の辭句の修正は末節として、當然既存の同盟會にも、とにかく適用しなければならぬ筈である。

これに對して眞先に頑强に反對した意見は「新規約に代る舊規約の同盟會規定を存續せよ」とするものであつた。その理由は、同盟會は宣傳のために必要である、直屬支部統括の爲に……といふ地方的な意見である。それが、悉く關東同盟側であつた。

次で、主張されたものは、山陰聯合會の同盟會名稱廢止の修正案である、「同盟會なる名稱をして名實共に地方協議會にすべし」といふ意味であつた。これは、又、餘りに純理的であつて、現存する同盟會といふ名稱への親しみを——これは、感傷ではない、機微な人情?であらうか——意に介せぬ案であつたが、精神に中央委員會案と同一であつた。

法規委員會は、舊規約說二票、修正說十六票、原案支持二票で決定した。次日の續行の委員會で起草新條項を附議しかけたときに、突如、提案者たる中央委員會からの意向が傳へられたので、法規委員の大半は審議を中止した、これで、改正規約草案も審議未了のままに議場で「新に特別委員を選出するか、」——このまゝ議場に於いて改正規約を審議するか」——の採決となつた。處が、議場にそのまゝすべしと可決確定した後で、改正規約草案を議事に附すべきか否かを、又採決に問ふと云ふ奇怪事となつた。が孰れにしても結局は、三分の二の贊成定數を缺くこと十數票で規約改正案に否決となつたのである。この否決側が關東同盟と福岡縣聯合會であつた。

改正規約案の經過大要はこれである、この規約改正案の落ち行く先が定まらなくては、豫算委員會の開催が不可能である——總本部移轉、同盟會に常任委員派遣等が關連してゐる——豫算委員會の開會が最終日たる三日目の夕刻で、辛うじて九時半に委員會が終了して、組合大會の豫算不成立　原案執行?否か?といふやうな、新史實を産まずに、濟むだわけである。

この規約改正は、實に重大問題である、農民組合員の大半が無頓着である　それよりも運動が肝要であると云ふ所謂現實論もあつたが、農民組合運動の大地を踏むでゐる人、眞に大衆を背負つてゐる先驅者の人達にまで必要としない、日本農民組合の規約改正上の論議が現實の問題でなくて、なんであらうか。大體に、前記の總本部移轉案と異り中央委員會　練つた上の滿場一致可決案が、この重大案が大會で流關するのが、現狀の農民組合の大勢に照らして、實に不審であるべきであらう。

九州同盟會

「九州同盟會承認の件　提案福岡縣聯合會」是は、正に規約改正と關係を持つた案である。規約改正案　影響がそのまゝに純理、感情相共に波動するの現象を呈した。

同盟會設立は大會の承認が必要だ、從つて中央委員會に一應附議せらるべきものである。九州同盟會設立は、この經路を踏むで、中央委員會では、九州同盟會設立に援助を與へるとの程度の保留となつたのである。

提案者の說明には、同盟會設立の必要が明確でなかつた、補助費云々を最初に切り出し

た不味い點もある、それに、同盟會の廢止と存置と別れた議場の空氣を無視してゐる。從に、センチメンタルに訴えた名演說も捨白科も、徹回を要求した大會の理性を打ち摧き得なかつた事は、この問題とは離れて農民組合のために幸ひさきよしであつた。

九州同盟會が、規約改正案の如くに、地方協議會の機能を持つたものであるとしたら、或は承認されたかも知れない、然しさうでなかつた事は、福岡縣の代議員諸氏が規約改正案に反對されたことによつて明白である。實に此點は、九州同盟承認を求むる人々に對して遺憾の極みである。同盟會の機能明示を支持する人々も、福岡縣の人たちが贊成さへすれば、三分の二の多數を得られた事を、萬々承知の事であるから、話し合ひが付いたであらうが、そんな交換條件によつて、理解なき贊成を求めなかつた事は、此が、正直者にとつて會心の微笑が、込みあげたことであらう。

其他

豫算案の問題が、極めて重要ではあるが、この問題は流石に「胸に一物」の程度でもあらうし、門外漢の窺ふべからざるものであらう。

討議した重要議案と報告

前項までに、餘りに長談に過ぎたので、肝腎のものを端折ることにはなるが、爰には列記するだけに止める。

一大正十四年度町村會議員改選對策の件、中央委員會提案
一青年教育に關する具體的方針確立の件（附實行案）京都府聯合會岡山縣聯合會提案
一產業組合運動に關する件、大阪聯合會提案
一機關紙統一に關する件、山陰聯合會提案
一爭議中央統制に關する件（附中央爭議部規案）山陰聯合會香川縣聯合會提案
一立毛差押並に耕作禁止の假處分に關する件
　關東同盟會提案
報告（一）小作法草案（二）土地國有案。

第四回農民組合大會を觀て

赤松克麿

一

今度の農民組合大會には、私は種々の用事のために、終始續けて列席出來なかつたのは殘念であつた。私は折々顏を出して受けた印象感想を書くことゝする。

私は第一回大會には出席しないだけで、第二回、第三回の大會には出席した。農民組合の現勢は、組合員數五萬四千人、都府縣の聯合數四十四、支部總數約七百六十であつて日本最大の組合であるが、組合勢力は大會毎に倍加して居る。また會毎に組合員の階級意識が際立つた發達を示して居る。第二回大會に於ては、偏狹なる農業立國主義を高唱して、都市勞働者との提携を忌避した代議員も多かつたが、今度の大會に於ける代議員の言論を見るに、都市勞働者の組合大會に於ける言論と殆んどかわらない。更に感ずることは、昨年の大會の代議員よりも、今年の代議員の方が年が若くなつたことである。農民組合員は戸主たることを原則として居るので、都市の勞働組合よりは、年齡の嵩んだ者が多く、從つて運動も保守的になり勝ちなのであるが、近來農民組合にも意氣潑溂たる青年鬪士が次第に增す傾向にあるのは喜ばしいことである。婦人の代議員も增加し、そして熱心であつた

ことも、今度の大會で注意を惹いた。岡山縣の山上きみ子氏、河本小夏氏、田尻かよ氏、熊本縣の杉山のぶ子氏、千葉縣の山本さだ子氏、小倉貞子氏等に、男子と比べて遜色なき立派な女性闘士である。

二

今度の大會で最も紛糾を極めた問題であつたところの、規約改正中の、同盟會を聯合協議會とし府縣聯合會を運動單位とする件及び總本部を東京へ移轉するの件は、關東派と關西派とが闘戰を交へる機會を作つた。雙方の言分を聞いて見れば、どちらにも相當の理窟はあるやうであるが、斯くの如く問題を惡化せしめた原因は、表面上の主張の相異よりも、內面的に蟠る感情のもつれにあると思はれる。此の感情のもつれが無かつたならば、問題はモツト圓滑に解決されたであらう。打割つていへば、總本部の幹部と關東同盟會の幹部との意志の疏通の十分ならざる處に問題の根蔕が横つて居るのである。一體、關東同盟の起りをいへば、大　十一年の八月に、勞働總同盟の有志と建設者同盟の有志とが相會して、關東地方の農民運動を企畫し、宣傳と組織に努力して基礎を築き、然る後に日本農民組合に加盟したのである。故に關東同盟は自主的能力と自主的發達の自信とを有し、總本部が手塩にかけて育て上げた組合と違つて、一種の外様大名的意識を多分に持つて居るのである。だから勢力の比率からいへば、關西の四に對する關東の一の狀態にあるけれども、組合幹部の心理からいへば、關東同盟は總本部に對して忠誠の響の足らざるものがあり、總本部は關東同盟に對する統制力の缺くるものがある譯である。

三

斯くの如く兩者は動もすれば對立關係に在る時に、總本部が、規約を改正して、同盟會を聯合協議會とし府縣聯合會を運動單位とせんとする提案をすれば、關東同盟の側では此の提案は同盟を脅威するものであると憤激し、また關東同盟が總本部を東京へ移轉するの提案をすれば、總本部の側では、此の提案は總本部を威嚇するものであると激怒する。感情を抜きにして冷靜にそして公平に考へれば、農民組合の組織は地方分權的傾向を有するが故に、運動單位も府縣聯合會に置き、同盟會は地方評議會となり、總本部は政治運動及び共濟事業の方面に重點を置くに至るべきは當然である。唯だ當面の事情よりすれば、關東地方及び九州地方に於て、同盟會の活動の必要が尚ほ存するといふまでである。また將來政治運動の盛んとなるに從つて、總本部を東京へ移轉すべきも極めて至當なことでもある。唯だ現在の際、豫算其他の關係上時期尚早といふだけである。問題はそんなに込み入つたものではない。隔意なく打ち解けて、冷靜に論議すれば、あれ程の紛亂を見ないですんだと思はれるが、それには前に述べた様々なる潜在感情が力強く働いて居るので、事は簡單に收まらないで、紛糾に紛糾を重ねた後、遂に兩案とも保留となつたのであつた。

總本部及び關西側の人々は、關東同盟が、同盟會の問題で同一利害に立つ九州側の人々を抱き込んで、總本部派に當らうとした政略的行動に對して、甚しく感觸を害したやうである。或る總本部員の話によると、總本部派の或る人々は、關西と關東と分裂しても構はぬといふ腹を決めて居つたさうである。關東同盟の立場からいへば、自己の正當なる主張を支持する必要から出た已むを得ざる行動であつたであらうし、總本部の立場からいへば、其れは不誠意極まる陰謀的行動であつたらう。

四

農業の性質が分散的であり固定的であり傳

習的であるところから、農民組合には各地方色が明瞭に現はれて居る。此の地方色の明瞭のところへ持つて來て、農民組合員には年習者で頑固一徹な人が都市勞働組合に比べて多い。だから、ともすれば議事は紛糾して來る。昨年の大會には九州の代議員と大阪府の代議員とが一寸した問題で毆り合ひを始めた。昨年の大會にも屢々あつたことであるが、今年の大會でも、問題が絡らんで來ると、議場では收まりがつかないで、別室で中央委員や各派有力者が懇談會を開いて解決をする。斯くの如き議事紛糾の程度は、勞働組合の大會では到底見られない圖である。勿論、議事法に未熟な點もあるであらうが、また今後次第に改善されるであらうが、農民組合本來の性質からして、大會は採めるもののやうに感じられる。

農民組合の大會が採め易いの　已むを得ないことゝしても、そして其れは次第に善化されることゝしても、私の希望する所は、農民組合の指導勢力の統一聯合である。即ち前に述べたところの總本部と關東同盟本部との　立意議の打破である。それには種々な具體　方法があるたらうか、其れは玆で說くべきものではない。兎に角、指導勢力の分立は、さなきだ、分散的傾向を有する農民組合の統制を阻害し、貧農階級の統一意志の表現を妨げるものである。

五

今度の大會で、西光萬吉、米田實、上田音一君等の如き水平社の幹部諸君が參加し、活動したのは興味ある現象である。農民組合と水平社との關係は以前からあつたのであるが、近來益々密接になりつゝある。水平社運動の指導精神が進化すると、差別撤廢だけでは滿足出來ないで、一歩進んで經濟運動又は政治運動に轉換して來る。經濟運動へ轉換する者は農民組合に加入し、政治運動に轉換する者は政治研究會に加入するのが最近の趨勢ださうである。前者は奈良縣、大阪府、京都府に多く、後者は三重縣に多い。尤も政治運動と經濟運動と峻別し　る譯のものではなく、其れは差當りの運動の方面を指したに過ぎない。水平社運動は目下混沌たる狀態にあるやうだが、其れが經濟運動又は政治運動の戰線內部に於ける鬪士團としての少數同胞運動化することによつて、水平社の前途は開かれるのではあるまいか。（三月八日）

大山郁夫著

現下日本の政治過程

四六判上製　定價參圓　郵送料廿三錢

新刊

社會學の方法と法則とを利用して科學としての政治學を確立せんと試みた唯一の學者は我が大山氏である。學者として眞摯な氏は同時に毅然たる性格の持主であつた。現支配群の惡質を切實に感得した氏は遂に書齋裡に晏如たるを得ず、今や此の累惡に打勝つ唯一必然の澎湃たる新興勢力の政黨化と其正義の發揚に滔々懸河の辯を揮つて奮進するに至つた。此決然たる行動を基礎づけた現日本の政治過程に對する學的思索の蘊蓄は納めて本書に在る。政治が漸く其本然の民衆の所有に復歸せんとする現代に遭逢せるあらゆる新人に敢て必讀を薦む。

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

英蘭銀行と倫敦取引所及其の周圍

青木得三

英蘭銀行の建物

英蘭銀行の建物は私が永久に忘れることの出來ぬものである。それは決してウエストミンスター、アベーやロンドン、タワーの樣に古色蒼然たるものではない。故に普通の旅行者に取つては何等の興味を惹かないものであるかもしれぬ。しかし尚其の建物は英國流のきらびやかでない豪宏なものである。

私が此の建物を永久に忘れることの出來ぬのは、大正七年十一月十一日午前十一時過に於ける此の建物の前の光景が永久に頭の中に刻まれて居るからである。英蘭銀行はバンクといふチューブ、ステーションを出た所にある。此のバンクのチューブ、ステーションからスレッドニードル、ストリートを通つて突き當つた所が、ビショップスゲートで、そこを右へ曲ると右側の七番地及九番地が我が横濱正金銀行倫敦支店のある所で、其の奥には日本銀行倫敦代理店監督役の事務所も大藏省の倫敦駐剳財務官の事務所もあるのである。

大正七年の秋十月私は倫敦の近郊ハムステッドのハーブアーストック、ヒルの阪の途中を左に折れたスティールス、ロードの十二番地に假寓して、毎日チョーク、ファームのチューブ、ステーションからチューブに乘つてトテナム、コート、ロードで乘り換へて、バンクで下りた。而して財務官事務所に通つた。當時獨逸軍の命は最早や旦夕に迫つて居たけれども、尚倫敦市内は夜中一切の街燈を點けなかつた。東京よりも遙に緯度の高い倫敦では十月には午後四時にもう眞暗になる。毎晩六時頃に財務官事務所を出てスレッドニードル、ストリートをバンクのチューブ、ステーションに向ふ私は夕闇の空に朦朧と浮き出て居る豪宏な英蘭銀行の建物を如何に頼りに思つたであらう。それ丈けでも英蘭銀行の建物は私に忘れ難い紀念であるの

に、同じ年の十一月十一日午前十一時此の建物の前に表れた光景は私の一生忘れることの出來ないものである。

大正七年十一月十一日午前十一時是れ獨乙軍が聯合軍に降服した時刻である。獨逸軍が聯合軍の提出した休戰條件を容れるか否かの最後の回答は此の午前十一時迄になされる筈であつた。私は此の當時流行して居た西班牙風に冒された擧後で、氣分が悪かつたので午前十時過に假寓を出てチョーク、ファームからチューブに入つた。此の時迄倫敦市は靜寂の都であつた。約束の午前十一時は私がチューブの中に居る間に經過した。私がバンクのチューブ、ステーションから再倫敦市中に表れたときに倫敦は喧噪の巷と化して居つた。

見よ、英蘭銀行の建物の前は狂喜亂舞して居る群衆を以て滿たされて居る。此の狂喜亂舞して居る群衆は決して道行く人ではない。英蘭銀行を中心としてプリンセス、ストリート、コーンヒル、ロンバルト、ストリートに鱗次櫛比して居る所謂シテイの銀行會社の事務員が、男女を問はず、オフイスから飛出して、或は聲を限りに叫び、或は手巾を振り、或は歌ひ、或は躍り、全く泥醉して居る人のやうであつた。しかも此等會社の女事務員は何れも帽子を被らずに騒いで居る。夜會服を着た貴婦人ならばいざ知らず、倫敦婦人が日中帽子を被らずに町を歩くといふことは下女の外には絶對にないことであると思ふ。しかるに此等のタイピストは何れも皆金髪を惜げもなく日光に曝して、亂舞狂喜して居る。

冷靜と沈着を以て聞えたアングロサクソン民族のしかも婦人がこの樣に亂舞狂喜したことが、英國の歴史に何時あつたであらう。何時又あるであらう。私はアングロサクソン民族の歴史に或は又とない珍らしい光景ではなかつたかと思ふ。それは英蘭銀行の建物と共に永久に私の頭から消えないのである。

戰時中の英蘭銀行

大正七年十一月十一日に倫敦市民が斯樣に迄狂喜したのは、戰爭中英國民が如何に苦んだかを證明するものである。英蘭銀行も亦遂に事實上兌換を停止するに至つたのであつた。英蘭銀行の兌換券發行には日本銀行、白耳義の中央銀行、獨逸の中央銀行のやうに制限外發行の制度を認めて居ないのである。即保證準備發行額の最高限度に達した時には、金準備を増す外には銀行券發行高を増す方法はない、此の保證準備發行の最高限度は歐洲戰爭勃發の當時千八百四十五萬磅（大正十二年二月十四日百三十萬磅を増加した）であつた。しかし戰爭の爲從來英國に流通して居つた金貨は英蘭銀行に回收せられたのみならず、民

間の信用は急激に縮少したので、之を補塡する爲に英蘭銀行はどうしても兌換券を增發しなければならなかつた。即千八百四十五萬磅の保證準備發行制限を超えて銀行券を發行しなければならなかつた。しかし英蘭銀行條例即所謂バンク、アクトは制限外發行を認めて居らない。

此制限發行を認めないといふことは經濟界の急變に遭遇した場合には甚當を行ない制度であると一般に論じられる、尤も日本銀行の此頃のやうにのべつ幕なしに制限外發行をやつて居ることも考へ物であるが、英蘭銀行制度は經濟界の急變に處する所以ではない、それ故英蘭銀行の歴史を讀んで見ると、千八百四十四年以降歐洲戰爭勃發迄の間に三度銀行條例を停止して保證準備銀行の最高限度を超過して銀行券を發行することを認めた實例がある、所謂サスペンション、オブ、バンク、アクトといふのは之れである。

然るに大正三年八月英蘭銀行は四度目として保證準備發行制限を超え得ることの權能を政府から與へられた。けれども、之を實行せずに終つた。其の理由に全く英國政府自らカレンシイ、ノートを發行したからであつた。一體英蘭銀行券の最小額面は五磅であつた。それ以下の支拂は戰爭前金貨で行はれて居た。即英國金貨の種類は五磅、二磅、一磅及十志である。しかるに戰爭の爲金貨の海外に流出するのを恐れたので、英蘭銀行は其の店の中に入つて來る金貨を再外へは出さなかつた。然るに英國の補助貨幣は五志（クラウン）、二志六片（ハーフクラウン）、二志、一志、六片、一片（ペニー）、半片（ハーフペニイ）等であるから、金貨の引上の爲に英國民は日常の支拂に困つたのであつた。玆に於て政府は一磅及十片のカレンシイ、ノートを發行した。當時大藏省の事務次官であつた（今は賠償委員會の英國委員である）サー、ジョン、ブラッドベリイが之に署名したので ブラッドベリイ、ノートとも稱せられたものであつた。其の發行額は遂に三億磅に達し、英蘭銀行券發行高約一億五千萬磅の二倍を越えたので、英國の通貨は英蘭銀行券よりも金貨よりも寧ろカレンシイノートを本體とするやうになつたので、バンク、アクトはサスペンドせられなかつたのである。けれども、英國の貨幣制度を全體として見れば、英蘭銀行が制限外發行したのと同じく英蘭銀行券は千八百四十五萬磅の保證準備發行以外は戰時中に於ても常に必ず金を準備として居つたにも係らず、英蘭銀行は兌換を停止しなければならなかつたのである。蓋しカレンシイ、ノートは無制限法貨であつて從て英蘭銀行券を自由に額面で交換せられ、且政府の代理人たる貨格の英蘭銀行本店に於て金貨と兌換せらるべしと規定せられたからである。

英蘭銀行の重役

英蘭銀行の重役は頭取、副頭取及二十四人の取締役である、之を英語で云へば、ガブアナー、デプユテイ、ガブアナー及ヂレクタースである。日本では之を譯して普通、總裁、副總裁及理事といふ。一體日本の特殊銀行の重役には總裁といふのと頭取といふのと二種ある。日本銀行、勸業銀行、興業銀行、朝鮮銀行は總裁といふ、横濱正金銀行、臺灣銀行、北海道拓殖銀行は頭取といふ。それは大體に於て官選と民選との區別である。(尤も民選でも大藏大臣の認可を要するのではあるが)此意味からいふと英蘭銀行ガブアナーは總裁ではなくして、頭取である。即英蘭銀行の總裁は民選である。唯民選であるといふ丈けでは不正確であるが、詳しくいふと總裁は前期に副總裁を勤めた人がなるのである。其の副總裁は理事中の最年長者(但し既に總裁又は副總裁を勤めた人を除く)がある。理事は株主に選擧せられるのであるが、それは唯名紙上の談であつて、實際は理事會自ら之を選ぶのである。總裁の任期は二ケ年である、總裁及副總裁の役を勤めた理事は永久に理事であつて、コンミツテイ、オブ、ゼ、トレジユリイといふものを組織する、其の委員會の權限は不定ではあるが、しかし偉大なる勢力を持つて居る。其の他の理事は一ケ年勤めると退任するがしかし一ケ年外に居ると再理事に選ばれる。理事に永久的欠員を生じたときには、其の補缺には倫敦の古い實業會社の前途有望な若い人が選ばれる。其の若い理事は一ケ年勤めると退任し、又一ケ年たつと再任せられる、而して其人が副總裁になる迄には凡そ二十年の歳月を經過するのである。私は此の英蘭銀行の重役選任制度を考へる毎に、今更乍らアングロ、サクソン民族の用意周到に感心せずには居られない。如何に凡庸な人物でも二十年間同じ仕事をすれば大抵は人並の仕事が出來るものである。英蘭銀行の理事に始めて選ばれる時には、其の若い青年實業家の頭髮には未だ一絲の白線をも止めぬ、それが副總裁になるなるときには最早や双鬢に霜を置くであらう、しかしそれ丈其の人の經驗は積んで居る。況んや其の人は倫敦の青年實業家の中で最俊秀な者が選ばれるのであるから、其の人が英蘭銀行總裁になる時には立派な識見と手腕とを持つ人物になるのは當然のことである。例へば日本の舊劇には門閥がやかましい、名門の出でなければ立派な役者になることが出來ない、從て門閥のない優れた腕の役者は不遇に泣くことが多いといふ、私は其の不遇に同情するに於て何人にも讓らないが、名門の出である役者が何れも相當な地位に上ることに就いては、多少辯護すべき事情もあ

る。何故なれば名門の出である役者は四五歳の時から或は千松とか小四郎とかいふ良い役をつけられて修業を積むのであるから、四十五十になれば何とか一と角の役者になるのは必しも不思議ではない、若しそれが天才であつたならば非常に優れた役者になるのは當然である、之れを思ふと歴代の英蘭銀行總裁が何れも立派な人物であることは少しも怪むに足りない、彼等は二十年來英蘭銀行の重役として訓練せられて來たのである。

英雄崇拜の風の旺な民族は後進を誘掖することも亦盛であると私は思ふ、英國人が英雄崇拜の風の盛であることは倫敦を初として到る所の大都會にポートレート、ギヤレリイのあることに依つて痛切に感ぜられる。歐羅巴大陸諸國では之を見ることが甚少ない。後進は先輩を崇敬して先輩は後進を誘導する。英蘭銀行重役選任の制度は正しく之である。理事中の最年長者が副總裁となり總裁となるといふ制度は古いと日本の新しい人がいふかもしれない。しかし其の理事といふのは決して華族の若様でもなければ、大金持の跡取でもない。倫敦青年實業家中の最優秀なるものである。而して二十年間先輩に依つて指導誘掖せられることを思ふと、何んで此の英蘭銀行重役選任の制度が古いといはれやう。

曾て武藤山治氏が日本銀行重役選任の制度を改めて民選にせよと主張したときに私は思つた。もし武藤氏が英國に生れたならば、氏は必英蘭銀行總裁になるべき人であると。蓋前に述べた様に英蘭銀行の理事は倫敦の古い實業會社の前途有望な人物の中から選ばれるので、決して銀行家たることを必要としないからである。否寧ろ銀行家たらざることを常とするのである。

ロード、カンリフ

英蘭銀行總裁の中で私の忘れることの出來ない人が一人ある。それは歐洲戰爭中其の任に在つたロード、カンリフである。ロード、カンリフは彼の有名なカンリフ、レポートに依つて廣く知られて居る人である。カンリフ、レポートといふのは歐洲戰爭の末期に於て英國政府が戰後の英國貨幣及爲替制度を研究調査せしめる爲に設けた委員會で、大正七年の秋に此の委員會は第一回の報告書を公にした。それがカンリフ、レポートと稱せられる。ロード、カンリフは此の委員會の會長であつたからである。

カンリフ、レポートは先づ戰前英國の貨幣金融制度を說いた後、戰後に於ては一日も速に金貨本位に歸り、即英蘭銀行の金兌換を回復し、倫敦を戰前のフリー、マーケットに歸さねばならぬと論じた。而して金兌換回復の障礙となるものはカレンシ

イノートの發行であるから、其の發行額を出來得る限り縮少しなければならぬ。それも急激には出來ないから、或る年に於ける最高發行額を超えてはならぬことにせよと主張した。又戰前英國には金貨が流通して居つたけれども、今後は必しも之を流通せしめる必要はない、寧ろ之を英蘭銀行の庫中に集中させることが適當である。而して英蘭銀行金準備の最小限度は差當り一億五千萬磅とする。政府發行紙幣(カレンシイノート)の準備にはなるべく英蘭銀行券を充當し、其の發行額が縮少せられて英蘭銀行金準備の維持に差支ない程度に至つたならば、カレンシイノートを引上げて小額面の英蘭銀行券を以て之に代へ、同時にカレンシイノートの保證準備發行に相當する丈け英蘭銀行券の保證準備發行限度を擴張すべしといふのであつた。

英國政府はその後屢々内閣の更迭があり、大藏大臣もボナーロー氏よりチェンバレン氏とサーロバートホーン、ボールドウイン氏、スノーデン氏、チャーチル氏と奈り、英蘭銀行總裁もロードカンリフよりロード・カレン・ノルマン氏と交代したけれども・カンリフ、レポートに說かれた大體の方針は歷代の内閣に踏襲せられて今や將に倫敦は戰前のフリーマーケットに歸らうとして居る。

然し乍らロード・カンリフの功績は決して此のカンリフ、レポートには止らなかつた。一體ロード・カンリフは英蘭銀行總裁の任期が二ケ年であるにも係らず・特に戰時中であるからといふので三任期即六ケ年間勤續したのであつたが・此等は何れもロード、カンリフが英國の爲に貢献した功績であつた。しかし多くの世人には知られないけれども、ロード、カンリフが世界の爲に貢献した功績には更に大きなものがあつた。

ヴェルサイユ條約の規定の中で、今日に至る迄最世界政局を支配して居る者は獨逸賠償の問題であることは何人も否定し得ないであらう。其のヴェルサイユ條約第八編賠償の規定の中で第三附屬書(船舶の引渡に關する規定)第四附屬書(建築材料の引渡に關する規定)第五附屬書(石炭の引渡に關する規定)第六附屬書(染料藥品の引渡に關する規定)はロード、カンリフの作つたものであると云つても必ずしも過言ではない。

巴里講和會議の賠償委員會は三個の分科會を作つた。其の第二分科會はロード・カンリフを主査とした。以上に掲げる四の規定の原案は此の分科會の作つたものであつた。第一分科會の報告はヴェルサイユ條約に殆んど採用せられなかつたに係らず・ロード・カンリフの作つた第二分科會の報告は殆んど原形の儘ヴェルサイユ條約に採用せられた。

私は肥大な身體を紺い、血色の良い顔をのせたロード、カンリフがフロックコートにシルクハットを被り、天氣の日にも洋傘を杖ついて、ルーブル宮殿の一角を占める佛蘭西の大藏省から出て、ルユー、ド、リブオリの通を歩いて行く姿を今もありありと頭の中に描くことが出來る。獨逸から多額の金を取ることが不可能であることを一九一九年に於て豫見したロード、カンリフは流石に卓見であつた。金を取ることが出來ないから船を取らう 石炭を取らう、建築材料を取らう、染料藥品を取らうとしたのは、多年英蘭銀行の總裁副總裁であつた人だけあつて如何にも實際的な考であつた。ヴエルサイユ條約第八編賠償の本文は殆んど皆實行不可能に陷り、殊に一九二一年五月の倫敦協定即所謂支拂計畫の如きは今日では殆んど空文に屬して居るにも拘らず、ロード、カンリフの作つた貨物賠償の規定は大部分實行せられた。殊に船舶及染料藥品の引渡に關する規定は殆完全に遂行せられた。私は玆にロード、カンリフの偉大さを見る。

英蘭銀行劵の歷史

英蘭銀行劵は日本銀行劵などよりは遙に大形の白紙に黑く文字を印刷したものであつて、何等の色彩をも持つて居らぬ。此點は佛蘭西銀行劵や獨逸のライヒスバンクの銀行劵又は米國のフエデラル、レザーブ、ノートを大に趣を異にする所である。しかし一見頗る清楚な感を與へるのである。此の銀行劵の發行額は約一億五千萬磅即我が十五億圓に當るのである。

英國銀行の歷史を讀んで見ろと、當初英蘭銀行は實業界に貢獻する爲ではなくして 政府に對して資金を供給する爲に設立せられたのであつた 當時英國政府は、佛蘭西との戰爭を行ふに多額の貨幣を要した、それで千六百九十四年に英國議會は英蘭銀行と稱せられる會社の設立を十年の期限を以て免許したが、此の會社は直に百二十萬磅を八分の利息で政府に貸付くべき筈であつた。同時に、爲替手形の取引を爲し 貨幣及び地金を賣買し、且商品擔保の貸付を爲す爲に同額の利息は紙幣を發行する權利を得た。然るに千七百九年に至つて英蘭銀行以外の法人又は六人以上の組合は英國で一覽拂手形を發行することが出來なくなつたから、英蘭銀行は紙幣發行の殆んど獨占を許されることになつた。而して英蘭銀行の營業特許期間は常に政府に對する新しい貸付又は舊債に對する利息の減額を條件として時々更新せられた。此等の戰爭の目的の爲にする貸金は巨額となり、其の結果千七百九十七年に於て英蘭銀行は兌換を停止しなければならなくなり、千八百二十一年に至る迄回復せられなかつた。

千八百二十六年に至つて、英蘭銀行の紙幣發行獨占は幾分か

寬和せられ、倫敦から六十五哩の範圍外に於て株式會社は紙幣を發行することを許された。千八百三十三年英蘭銀行の營業特許更新の際、其の紙幣は、要求に依り何時でも金で兌換せられ得る限りは、英蘭及ウエールスの到る處に於て法貨であるとせられたけれども、此の期間內に於て株式組織の銀行は、急に增加し從て紙幣發行高も大に增加した。そこで千八百三十六年に及千八百三十九年に商業上の恐慌が起つたときに、其の原因は銀行券の過剩發行であるとせられ、茲に銀行改革の運動を生じ、竟に千八百四十四年のピール條例の發布を見るに至つたのであつた。

此のピール條例カレンシー、プリンシプル即所謂バンク、アクトは今日の英蘭銀行券發行制度の根本となるもので前述の如く制限外發行を認めて居らないのである。それは銀行券の過剩發行を恐れる、換言すれば通貨の膨脹を避ける精神から來たのである。即學者の所謂カレンシイ、プリンシプルに基くものである。然し獨逸や白耳義や日本の銀行券發行制度を見て居るものは、此の英蘭銀行券の發行制度を以て誠に伸縮力のない不便なものであると考へて居る。然るに前述したカンリフ、レポートは戰後の英蘭銀行券發行制度に付いて論ずるに當つて、矢張制限外發行を認める必要はないと說いて居る。

大正七年十一月カンリフ、レポートの發表せられた時に私は倫敦の財務官事務所で之を讀んで一々御尤と考へた。殊に戰後の英國貨幣制度を論じて戰前のやうに金貨を流通させる必要がないと說いてあるのを見て、遙に雲山萬里の外の故國を想ひ起して痛快だと思つた、何故なれば私が倫敦に赴任する前の日本では、日本に金貨が流通しないことを恥辱と考へたり、又金貨が流通しないから日本は金貨本位國でないと考へたりする學者があつたからである。私はカンリフ、レポートの此の條を讀んだときは日本は戰前の英國よりも此の點に於ては一步進んで居たと云へると考へた。しかしカンリフ、レポートが制限外發行制度を設ける必要なしといふ一點に至つては聊か物足りない感がした。而してそれは英國人が保守的の國民であるから、舊慣を改めることを欲しないのであらう、恰も貨幣の計算に十進一位の方法を採ることを肯じないと同じであらうと考へた。しかし今日に及んで考へて見ると制限外發行を認めない英蘭銀行券と之を認める日本銀行券と何れが勝つて居るか、聊か判斷に迷はねばならないことになつた。

何故なれば、戰後英國の通貨は漸次收縮し、其の對外爲替相場は段々恢復して來たにも拘らず、我國の通貨は中々收縮せず、對外爲替相場は段々惡くなつて來たからである。抑ゝ制限外發行

を認める根本の理由は一朝經濟界の急變に遇ひて銀行券の發行高を急に增加する必要ある場合に金を準備としなければならぬといふのでは急場の間に合はないといふことである。それ故常時制限外發行が出て居るといふのは制限外發行制度の本旨には添はないのである。若し國家危急存亡の場合にのみ制限外發行を許すといふのであるならば、英蘭銀行の歷史に見るやうに政府は法律を停止することも出來るのである。而して制限外發行に對して稅金を課するといふことは、制限外發行の濫發を防ぐ爲である。即金利が騰貴して制限外發行稅を納めても尙銀行に利益のある場合にのみ制限外發行をなさしめる爲である。然るに制限外の發行稅は年七分であつて、中央銀行の最低割合步合が、八分であるならば、銀行は如何なる場合に於ても制限外發行をして損をする氣遣はない。唯保證準備發行よりも利益が少いといふに止るのである。之れでは制限外發行稅に依つて通貨の膨張を抑制することは出來ない。故に制限外發行を始めて採用した獨逸のライヒスバンクの制度を批評するに當つてウオーカーは『發行に對する此の障壁は最高額を超ゆる發行も、其の超過額全部に對し百分の五の租稅を納付するときは、經濟者之を爲し得るの規定に依り大に傷けらる』と論じ、ジェブォンスは『此の規定は恐慌に際して法律を停止することを避ける爲に作られたやうである。而して英國の通貨に關する法律にも同樣の修正を加へて利益を得ることは充分可能である。然し超過發行に對する罰金即課稅は遙に百分の五以上に出なければならぬ、而して英國に於ては一割以下に下つてはならないこと確である』と述べて居る。

ウオーカーやジェブォンスは何れも通貨の膨張を否とする學者である。通貨の膨張を可とするか否とするかは、勿論人によつて說を異にする所であるが、我國には英國の戰後經濟を非常に稱贊し、其の消費節約運動や財政の整理緊縮を歎美激賞し、英國が遠からず金の輸出禁止を解除しやうとして居るのを見て羨望の至と思つて居る人がある。私は英國が斯樣に早く對外爲替相場の恢復を見、金輸出解禁をなさうとするに至つたのは、勿論その原因は一つではないけれども、英蘭銀行券發行制度が制限外發行を認めず、カレンシイ、プリンシプルを基礎として立てられ、通貨の收縮に便宜に出來て居ることも確に其の重大な原因の一であると確信する。

昨年六月の或る日曜に私は靜岡市に講演に赴く汽車中で松方幸次郎氏の高論を拜聽する光榮を有した。松方氏は勿論私を知つては居られないのであるが氏は東京商業會議所議員阿部氏に向つて英國は十億の金を以て四十億の紙幣を發行して居るの

に、我國は十億の金を以て僅か十二三億の銀行券しか發行しない、如何にも情ないことであると云はれた。私は此の話を聽いて英國民は何の爲に政府紙幣の發行を縮少しやうとして居るのであらうと考へた。

英蘭銀行の保證準備發行制限は戰時中千八百四十五萬磅、今日では千九百七十五萬磅である。斯樣に保證準備發行制限の擴張せられるのは決して英國の通貨を膨張せしめる爲ではない。抑千八百四十四年の銀行條例（バンク、アクト）は英蘭銀行を二の部門に分けた。即一は單に銀行業（割引及預金）のみを行ふもので之をバンキング、デパートメントといふ、他は銀行券を發行するけれども、何等銀行業を取扱はないもので、之をイッシユーイング、デパートメントといふ。千八百四十四年當時の英蘭銀行券平均發行高は千四百萬磅であつたが、此の金額の英國政府債務證書を發行部（イッシユイング、デパートメント）に渡し、之を交換に即之を準備として發行部は千四百萬磅の英蘭銀行券を發行して銀行部（バンキング、デパートメント）に渡した。而して此の以上英蘭銀行券を發行するには必同額の金貨又は金地金を準備としなければならなかつた。當時銀行券發行の權利を持つて居た個人銀行及び株式組織の銀行は、其の現在の發行高丈けは將來尚繼續して發行することを許されたけれども、之を增加することは絕對に許されなかつた。而して何れかの銀行が銀行券發行をやめた時には常に英蘭銀行がプリヴイ、カウンシルの認許を得て、やめられた銀行券發行額の三分の二の保證準備發行制限に加へることを許された。これがピールス、アクトの規定であつて、此の規定の結果、株式組織及個人銀行の紙幣は八百六十萬磅から戰前に於て百二十萬四千四百九十磅に減少し、英蘭銀行の保證準備發行制限は千八百四十五萬磅に增加したのであつた。

大正十二年二月四日に更に百三十萬磅の保證準備發行額を增行したのも又同一の理由に基くもので、英國全體の通貨流通額け之が爲に從前よりも增加するのではない、若し日本の通貨膨張論者が英蘭銀行は英國通貨膨張の爲に新に保證準備發行制限を擴張したと考へるならば、それは大きな誤解である。

英國大藏省と英蘭銀行

英蘭銀行の重役は前に述べる樣に純粹なる民選である、それであるからと云つて決して英蘭銀行と英國大藏省とは疎遠ではない。私共の見る所では英國大藏省と英蘭銀行との間柄は、重役が官選である國々に於けるよりも更にしつくりと融通して居るやうである。少くとも重役が官選である國々に少しも劣る所はない。歐洲戰爭の結果各國の中央銀行が政府に多額の貸上金をした爲に、銀行券の濫發を來し、それが爲竟に各國共兌換

を停止するに至つた以來、中央銀行のオートノミイと云ふことを喧しくいふやうになつた。即中央發券銀行は政府の財政の爲に傾はされてはいかぬ、政府財政の犠牲となつてはいかぬといふのである。英蘭銀行は今回の戰爭中英國政府財政の犠牲となることは殆んと全くなかつた、政府自ら三億の紙幣を發行したからである、尤も英蘭銀行はこの政府紙幣の增發の在つた爲に自らも兌換を停止しなければならなかつた。しかし英蘭銀行の貸借對照表のみを見るならば、其の發行部は銀行券發行高に對して九割内外の金準備を持つて居つて、兌換は極めて容易に行はれ得る狀態を示して居る。玆に於て或は金準備を殆んど持たない政府紙幣と英蘭銀行券との間に何故價値の相異を生じないかと云ふ疑問を起す人があるかも知れぬが、私は之は恰も本位貨幣と補助貨幣との間に價値の相違を生じないのと同じ理屈であると考へて居る、即英蘭銀行券は五磅以上の額面で政府の紙幣は一磅と十志とであるから、吾々が日常補助貨幣なしには生活出來ぬやうに、英國人は今日では政府紙幣なしには生活できぬ。從て補助貨幣の實質價値は本位貨幣のそれよりも遙に劣つて居ても、補助貨幣の額面價値は低落しないやうに、政府紙幣の額面價値も低落しないのであると私は思ふ。要するに戰時中英國政府の財政の爲に英蘭銀行が迷惑を被つた程度は其の他の歐羅巴諸國の中央銀行よりも遙に少いのである。しかし英國大藏省と英蘭銀行との間が之に依つて疎遠であると考へる者があらば、それは大きな誤謬である。

今は英國大藏省の理財局長として各種の國際會議にも出席し、其の方面の人々には名を知られて居るニイマイヤー君が未だ若くつて、書記官級であつた時に、私は我國の四分半利付英貨公債の買入に付盡力を乞ふ爲に、同君を大藏省に訪ねたことがあつた、而して談が買入値段のことに及ぶと同君は立所にそれはガプアナーに相談するがよいと云つて、卓上電話を把つて英蘭銀行總裁——當時はブリアン、コケーン氏後にロード、カレンであつたが——の都合のよい時間を聞いて呉れたことがあつた。私は英國大藏省の一書記官が斯様に英蘭銀行總裁と懇意であるかと考へて驚いたのであつた。英國大藏省即所謂トレジユリイは倫敦のウエスト、エンドに在る、古色蒼然たる建物で、その入口なども極めて貧弱であるが、シテイに在る英蘭銀行とは形の上では相距ること遠い、大手町と呉服橋との距離ではない。然し大藏省卓上一線の電話は立所に東洋の一小官吏をして英蘭銀行總裁に面會せしめる力がある。私は其の翌日英蘭銀行の總裁室でフロツク、コートに身を固めたサーブリアン、コケーン氏に遇つた印象を今も記憶して居る。ロード、カンリフ

を豐艶ある偉大夫とすれば、ブリアン、コケーン氏代精悍の氣眉宇に溢れ、而かも淸癯鶴の如しと云つたやうな人であつた。總裁はニイマイヤー氏の紹介に依つて私を引見して周到な注意と適切な助言とを與へて吳れた。

最近英國金融市場が海外放資を好まない樣な傾向を表して來て居る。それは一日も早く金輸出を解禁して戰前のフリーマーケットに倫敦を歸さんが爲であると言はれて居る。而して英蘭銀行は英國金融業者の海外投資を抑制するやうな態度を示して居ると傳へられる。私は其の眞僞を未だ確める機會を持つて居らないが、若し之が事實であるとすれば、それは英蘭銀行自身の發意であるか否かを疑ふのである。どうも倫敦市場の海外投資を忌む傾向は勞働黨內閣沒落後に顯著となつたやうである。保守黨內閣の藏相チヤーチル氏は英國政界の風雲兒として平平凡々では過ごされぬ人である。今解禁を急ぐのも或は氏の方針ではあるまいか、傳へらるゝ英蘭銀行の海外放資抑制の態度も亦英國大藏省と靈犀一點相通ずる者があるのではあるまいか。

這般の機微は固より遠く隔たつた東洋の一角から想像すべき限ではないか、何れにしても英蘭銀行の重役が純粹な民選であるにも拘らず、英國大藏省との關係は最融和し且最親近であることを私は確信する。勿論民選である故に不當な政府の干渉、壓迫には敢然として反抗するであらう、然し苟くも英國國民の利益の爲、民衆の福祉の爲になるならば、英蘭銀行は英國大藏省と一致協力して奮勵努力するに少しの躊躇も逡巡もない。中央銀行の重役を官選にしなければ、國家の爲に貢獻しないであらうとか、官選にすれば銀行の利益を犧牲にしても國家の利益を圖るであらうとかいふ考へには、私は贊成することが出來ぬ。要はその人である、二十年來英蘭銀行のボールド、オブ、デイレククースの中に在つて、先輩から懇切周到な指導誘掖を受けた人であつてこそ、初めて世界金融の中心を支配する英蘭銀行の總裁として社會民衆の爲に貢獻することが出來る、官選と民選とは敢て問ふ所ではない。

倫敦取引所

大正八年の春二月頃であつたか、倫敦のチユーブの從業者がストライキをやつて、いつも利用するチヨークフアームからトテナムコートロードで乘り換へてバンクで下りる線に乘ることが出來ないことがあつた。其の時に已むを得ず、スウイス、コツテーヂからアンダーグラウンドに乘つてリブアプール、ストリート、ステーションで下りる線を利用したことがあつた。そのリブアプール、ストリート、ステーションは即前に述べた我

が財務官事務所のあるビショップスゲートの北端にある。此の停車場を出てビショップスゲートと並行するニウ、ブロードストリート及オールド、ブロード、ストリートを通つて南の方へ行くとスロッグモルトン、アブエニユーからスロッグモートン、ストリートへ出る、茲には帽子を冠らない人々の群がつて居るのを見て、株式取引所の近くに在ることが直ぐに察せられる。株式取引所は丁度バーソロメウ、レーンを隔てゝ英蘭銀行の建物と相對する。バンクのチューブ、ステーションからビショップスゲートに通ずるスレツドニードルストリートは丁度株式取引所の背後を通る譯になる。

倫敦株式取引所は會員組織である。會員には二種ある、ブローカー及ジョッバーである。會員でなければ取引所内に入ることは出來ぬ。ジョッバーといふのは自分自身の計算で公衆と株式の賣買をするもので、ブローカーといふのは公衆の代理人となつて、此等のジョッバーと株式の賣買をするものである。ジョッバーの數はブローカーの數の倍あるけれども、取引所の會員たる關係に於ては兩者少しも異なる所はない。

各國の取引所を參観して最痛快に感ずるのは、競賣買の方法である。取引所の理事者の立てる壇の下で、ブローカー即仲買人又は其の代理人が群を爲して、吾々局外の者には明瞭に理解されぬ叫びを舉げて、頻りに手を振つて居る。それは東京、大阪の株式取引所でも、巴里のブールスでも全く同じ事である。從て其の叫び聲は相合して何とも言へぬ音響となつて、例へば大洋の怒濤が海岸の巖石に砕ける音を遠くの方から聞いて居るやうな響となつて、取引所の中から其の周圍の街路に傳はつて行く。取引所に近つく人々の心を何となく騒ぎ立たせるものは此の音響である。

相對賣買

しかし倫敦の株式取引所の賣買方法は右の競賣買ではなく相對賣買であるから、斯様な花々しい音響を耳にすることは出來ない。即ブローカーが公衆から株式賣買の依頼を受けた時は、先づ株式取引所へ行つて平素取引するジョッパーを捉へる。それは平素取引をして居るものは最便利であるからである。而してジョッバーに賣買しようとする株式の値段を聞く、その時にブローカーは其の株式を買はうとするか、又賣らうとするのかをジョッバーに知らせることはない。其の理由は之を知らせればジョッバーは其の値段を言ふに當つて加減する虞があるからである。さてジョッバーは其の値段を答へるに當つて、途方もない値段を云ふ事は出來ない、何故ならば、ブローカーは

株式相場の様子を知つて居ることはジョッバーに劣らないからである。ジョッバーが答へる値段は常に賣値段と買値段と双方である。例へばミツドランド鐵道株に就いて六十九乃至七十といふが如きものである。其の意味は六十九磅で賣り七十磅で買はうと云ふことである。ブローカーが之を聞いて自分が賣らうと思つて居る値段より安かつたり、又は買はうと思つて居る値段より高かつたりするときには、値段の開きが大き過ぎる too wide といふ。ジョッバーが之に依つて値段の開きを少くすればよし、(例へば六十九、八分の三乃至六十九、八分の五)さもなければ、取引を失ふ虞がある、何故とならば、其のジョッバーの周圍には多數の他のジョッバーが立つて居るからである。然し實際に於てはかやうにブローカーが値切ることは極めて稀である。時としてはジョッバーは幾何の値段で賣り又は買ひ、若くは賣買しようとすることを叫んで居ることがある。然るときは勿論ブローカーは特に之を聞く必要はない。何れにしてもブローカーがジョッバーの答に滿足したときは、公衆からの依賴が買ふことであつたならば、ジョッバーに對し、例へば七十で有株式若干を買ふこと丶を告げるのである。

　ジョッバーは其の株式を寧ろ買ふことを欲したこともあるであらうけれど、一旦値段をブローカーに告げた以上は、賣買何れなりとも拒むことは出來ない、尤始ブローカーが彼に逢つた時にミツドランド鐵道株なれば自分は買ふのみであるといふことも出來る、又競爭者の少い株式であれば、値段の開きを大きくして自分の欲しない取引を避けることが出來る、即買ふことのみを欲して賣ることを欲しないときには賣値を非常に高くするのである、又賣ることのみを欲して買ふことを欲しないときには買値を非常に廉くするのである、之れに依つて値段の開きは大きくなる。例へばセルブイア國債七十四乃至七十八といふやうなことがある。此の値段の開きの多い相場附けをワイド、クオーテーションといふのであるが、之に依つてジョッバーは大きな利益を得る望がある。此の利益をジョッバースターンといふ、ワイドクオーテーションは取引の少い株式又は恐慌の際或はジョッバーの性質の數が小心翼々る時表れるのである。

　賣買せらるべき株式券に就ては、ブローカーは初に之を明言しないけれども、自ら制限のあるのであつて、ジョッバーが値段を答へるに當つても、勿論方外な數量を取引しようとするのではない、而して此の自ら定つて居る制限といふのは、例へばミツドランド鐵道株に就いては、一千磅である。さてブローカーがジョッバーのいふ値段に滿足して、若干の株式を買ふ旨をジョッバーに告げた時は、相互の間に何等の證書を交換するこ

とらなく、唯ジョッパーにうなづいて、双方各自分の帳面に之を記入するに止まるのである。但何れか一方は取引所備付の黒板に賣買價格を記さなければならぬ、かくする時は其の値段は次に發行せられる取引所の公報に登載せられるのである。しかし實際に於てはかやうに記載せられることは甚稀であつて、多くは下手な取引をなしたと考へた時のみ之を記載するといふことである。何故なれば之に依つて委託者をして眞に取引が其の値段で行はれたことを知らしめることが出來るからである。即ち餘り途方もない値段で賣り又は買つた時には、取引所の公報に其の値段が表れなければ、委託者はブローカーが嘘をつくと思ふかもしれないからである。

却説、かやうに取引の行はれた翌日に至り取引所の下に在る部屋で、ジョッパーとブローカーとのクラークが相會して取引の突合せをする。而して委託者がその注文の行はれたことを最初に知るのは、ブローカーからコントラクト、ノートを受取る時である。此のノートに記載せられる事項は、取引の日、ブローカーの住所氏名、及若干の株式が記載の値段で買ひ又は賣られたことである。委託者は株式を買つた場合には其の代價の外に、ブローケレーヂと稱せられるブローカーの口錢、政府に納付すべき印紙税及會社に支拂ふべき登記料を支出しなければならぬ。尚コントラクト、ノートの引取は取引所の規則慣例に從ふべき旨を記載し、且金額を支拂ふべき日即取引所受渡期日を明記してある。

其の受渡の期日の來る迄は、委託者は未だ實際其の株式を手に入れないでも、尚其の値段の騰貴した時には、之を賣つて利益を得て差支ない。かやうに清算日の來ない前に、同じブローカーの手に依つて、前に買つた株式を賣つた時には、ブローカーは賣買の双方をなすけれども、唯其一方に對する口錢のみを申受ける。而して取引期限は普通二週間であるから、此の轉賣を爲し得る期間は、取引の行はれた時日に依つて或は長く或は短い。即受渡期日後直に行はれた取引に在つては、二週間にも亘るであらうし、受渡期日のすぐ前に行はれたものに在つては一兩日に過ぎない。

何れにしても株式を買ふことを委託した公衆は、未だ代金の支拂をしない前に株式の所有權を得るのである。それ故、株式を買つた人が、受渡前に利益を得て之を賣却し、ブローカーから小切手を受取つた時のみ、正直に契約を履行し、若し受渡前に價格の騰貴することのなかつた時には、其の姿を晦ますことは屡見る所である。それであるから、ブローカーが未知の委託者と始めて取引するに當つては、信用すべき紹介者を求め、或は

擔保の提供を求めることさへあるのである。

受渡

倫敦株式取引所の受渡期日は三日に亘る、第一日は繰越決定日 Contango or making day 第二日は指名日 Ticket or Name day 第三日は決算日 Settling day である。

コンタンゴーデーの午後一時（規則は一時であるけれども實際は之より早い）に或る期の取引は結了し、其の後に取結ばれた賣買は次の期の計算に入る、取引期限は普通約二週間であること前述の通である。而して受渡は毎月中頃及月末に起る、但し英國の國債及印度の公債に限り普通の二週間受渡を行はず、特別受渡と云つて毎月一回月初に行はれる。コンソルセツトルメントと稱せられるものが即之れである。鑛山株に就いては尚一日のコンタンゴーデーがある。即他の株の受渡の始まる前日で他の株に就いては普通の取引日である。それ故鑛山株の受渡は實際四日に亘るのである。若し此の取引日が土曜日である時は、更に金曜日をもコンタンゴーデートとし、受渡を六日間に亘らしめる。此のコンタンゴーデーの延長は鑛山株大景氣の時に起つたことで、當時取引所は繰越に關する總ての事務を一日に完了することが不能であると認めたのであつた。

繰越決定日（コンタンゴーデー）といふのは、株式の受渡を延期しようとするものが、其の取引を次期の計算に繰越す日である。是れ所謂繰越取引といふもので、我國の取引所にはないことである。それは日本の株式取引の期限は一般に長く三ケ月限の取引さへある位であるからである。

指名日（チケツトデー）（繰越決定日の次の日）に於て株式を前期間に買つた會員は、株式の銘柄及其の數量、引受人即買手の委託者の氏名住所、代金、月日、及其の株式に就いて、代金を支拂ふべき會員の氏名を記した書面を作つて、之を賣手に渡さねばならぬ。之を渡すのは即取引結了の第一歩であつて、之に依つて賣手は代金を請求すべき人を知ることが出來る、又之は株式を正當に引渡すべきことの要求である。然し乍ら此の書面を渡された人は、彼が引渡を約束した株式を所有して居らぬことが屢ある。即彼が同一期間内に之を他人から買つた場合である。然るときは彼は其の氏名を受取つた書面に裏書して之を賣手に渡すのである。かやうに此の書面は幾度も轉々して遂に、實際株式を所有して居る委託者のブローカーの手に達するのである。

之に反して賣手が一定の時間迄に前述の書面を受取らない時には、取引所の役員に依頼して其の株式を賣ることが出來る（此の一定の時間は株式の種類に依つて違ふ）。即買手が表はれて來

ないに因つて、之に代る他の買手を求めるのである。而して違約した買手は、再賣買の費用及之に因つて生した損失を賠償しなければならぬ。即所謂違約處分である。

署名した株式の引渡狀を受取るのである。此の引渡狀に依つて決算日(セツトリングデー)に於て（指名日(ネームデー)の翌日）、買手はブローカーから賣手の權利移轉の所作が實行せられるのであるが、其の書式は各株式會社の規則に依つて違ふ、然し乍ら多くの會社は今日コンモンフォームと稱せられる共通の書式を採用して居る。其の書式は極めて簡單であつて、即引渡人は記載の金額を受取つて記載會社の株式若干を受取人に賣ることを約束する。而して引取人は引渡人が其の株式を所有したのと同一の條件に服して之を引取ることを約束する旨を記載してある。双方當事者は之に署名しなければならぬ。かやうに引取人の署名を求めるのは、主として其の株式に未拂込の金額がある場合に、其の拂込の責任を負ふことを記錄に止める爲である。

此の引渡狀を作るのは賣手又は其のブローカーの義務である。而して之に記載せられる金額は買手が支拂ふべきものであるけれども、必しも賣手が受取るべき金額ではない、何となれば其の株式は幾度も違つた値段で轉賣せられ、從て記載せられる金額は最後の買手の支拂ふべきものであるからである。又此の引渡狀には此の金額を基礎として法律の要求する印紙税を課する旨を記載してある。かやうに引渡狀記載の金額と、賣手の受取るべき金額とは違ふことがあるから、賣手が引渡狀の不正であることを疑ふ虞れのあるのを防ぐ爲に、此の理由を説明する書付(ノート)を引渡狀に添付することが普通である。

賣手のブローカーは引渡狀を作り之に委託者の署名を得たときは、之を賣つた株券と共に、終局の買手のブローカーに渡すのである。而して此等の書類が決算日(セツトリングデー)又は其の後十日の間に正式に引渡されたときは、買手は取引所の規則に依り、約束の代金を渡して取引を結了する義務を生ずる。

時としては、賣手の持つて居る株券の額面が其の賣らうとする額よりも大きい爲に、其の株券を手離すことを欲しないことがある。即一部分を賣つたのであるから、たとへ一時なりとも全體を渡すことを好まないことがある。然るときは賣手のブローカーは引渡狀を先方に渡さない前に、之を株券と共に會社に示し、會社は引渡狀に附記するに、引渡狀に記載してある額の株券が會社に預け入れられたことを以てし、此の額を差引いた殘りの株式に對する株券を賣手に渡す。然し乍ら株式會社によつてはかやうに引渡狀に保證をなすことを拒むものがある。然るときは取引所の Share and Loan Department 株式社債部の

書記が代つて其の株式を會社に呈示し、書記自ら記載せられた額の株券が預け入れられたことを引渡狀に保證する。此の保證は會社の書記がなすと取引所の書記がなすとに論なく、取引所の規則に依つて株券同様の效力を持つのである。それ故賣手の方ばかりから考へる時は、前述の手續は有效な株式の讓渡をなすものであるけれども、買手の方から見るときは、其の權利を會社が承認しない間は、法律上株式の所有者となることはないのである。故に買手は引渡狀に記名し、ブローカーに托し、株券と共に之を會社に持つて行つて登錄を乞ふのである。（但前以て株券を會社に出してある時は勿論株券を持つて行く必要はない。）時を經て買手を會社から其の帳簿に登錄せられたことを示す株券をブローカーの手を經て受取るのである。斯様にして買手は眞に其の買つた株式の所有者となるのである。

清算

倫敦取引所にはセツトルメント、デパートメントといふものがある。一名クリーアリング、ハウスといふ。此の清算所といふものは取引所の會員の全部が關して居るのではない、又すべての株式が清算所の便益を被る譯でもない、然し清算所の便益を被る場合には次のやうな手續に依るのである。

繰越決定日（コンタンゴーデー）に於て、各會員は自分の取引した株式各種に就いて清算表（クリーアリングシート）を作る。此の清算表には數多の會員に對する幾多の賣買を記載してあるけれども、之を作つた各會員が株式に關して爲すべきことは、單に其の賣つた數と買つた數との差を引渡し又は受取るだけのことである。其の他は其清算表に於て處理するのである。但玆に注意すべきことは清算所の清算するのは株券のみであつて、金錢には關係しないことである。

玆に一つの例を擧げて說明すると、例へば一會員の清算表に或る株式を總計六千磅買ひ込み、五千磅賣り渡したと記載してあると假定する。さうすると取引の數が幾何であるか、取引の相手が誰であるかは少しも問ふことなく、前に述べた書面を各個の取引に就いて受渡する代りに、清算所は他の會員の清算表に於て、當該株式を買つたよりも賣つた方が一千磅多いことを發見するであらうから、此等の會員を相會せしめて、株式を受渡させれば足るのである。然し前に述べた様に賣買の代金に就いては、清算所は何等關係する所なく、總ての賣買が一定の代價即所謂繰越値段 making up price でなされるものと看做して取扱はれ、之に依つて代金の支拂をなすのである。それ故此の繰越値段と約定値段との差は、各會員の相對の間に於て決算しなければならぬ。之が爲に受拂期日の最後の日である決算日

か存在するので、之が其の受渡日である。即此の日總べての差金を支拂ひ、又株式を引渡すべきものは、代金引換に之を引渡す用意がなければならぬ。記名株式に就いては引渡迄尚十日間の猶豫を與へられる。然し十日後に於て猶賣手が株式の引渡をなさないときは、買手は取引所の役員の手に依り、同種同額の株式を買入れることが出來る。此の際は公然競買の方法に依り、最低の買格で買入れる、而して違約處分として、賣手は違約から生じた總ての入費、買入價格が約定價格よりも高い時は其の差額を支拂はなければならぬ。(之と反對の場合即賣手が一定期間内に株式を引渡すべき人を發見することの出來ない場合に就いては、前に述べた通りである。)

倫敦取引所の規約は賣買差金の支拂は倫敦手形交換所の一員たる銀行宛の小切手を以てすべきことを定めて居る。此の規定の結果として取引所の各會員は差金の受取と支拂とを同時になすこととなり、實際上受取つた金額は直に支拂の用に供せられるわけである。支拂の延期は決して許さないので、支拂不能のときは直に債務不履行の宣告を受けるのである。

預金銀行主義

倫敦株式取引所と英蘭銀行とを對照して考へる者は、自然英國の銀行制度、即獨逸人の所謂スペクラチオンスバンクと對立するデポジッテンバンクの制度に思ひ及ばざるを得ぬ。證券金融といふか、獨逸人の所謂エミツシオンスゲシェフト、グリュンヅンクスゲシェフト、ウムヴンドルンクスゲシェフトに專門に從事する銀行は英國にないのである。尤も其の中で發行業務(エミッシオンスゲシェフト)に至ると倫敦の大銀行は公債社債發行のシンディケートを組織することがあるけれども、株式の發行、株式會社の設立業務(グリュンヅンクスゲシェフト)、又は會社の組織變更業務(ウムヴンドルンクスゲシェフト)に至つては獨逸のエッフェクテンバンクのやうに專問に之に從事するものはない。バークレーバンクにしても、ウェストミンスターバンクにしても、ロイドバンクにしても、ナショナルプロブィンシアルバンクにしても、ミッドランドバンクにしても獨逸のドイッチェバンクや、ディスコントゲゼルシャフトや、ドレスドナーバンクや、ダルムシュテッテルバンクや、ベルリナー、ハンデルスゲゼルシャフトのやうに預金を主たる資源とせず、資本金積立金を以て主として證券業務を營んで居るといふことはない。

思ふに工業會社を設立するに當つて其の株式募集の事業は工業會社本來の目的たる事業即例へば染料の製造、鑛石の採掘とは全く別種の事業であるから、當該工業會社の重役が其の株式募集の事業に特に擅能であるといふことは絶對にない、從つて

之れは寧ろ金融界の狀勢を審に熟知し且其の推移に始終周到な注意を拂つて居る金融業者即銀行家に任せる方がよいかもしれぬ。之が獨逸に於て證券銀行の發達した所以である。即獨逸の證券銀行は其の資本金及積立金を以て自ら工業會社の株式を引受け、金融界の狀態を見て、適當の時期に之を賣出すのである。それは勿論引受けて直ぐのこともあらう、引受後數年を經過した後のこともあるであらう。何れにしても此の事に因つて獨逸の工業會社の株式發行は大いに利便を得るのである。英國は預金銀行主義の國であるから倫敦にはかやうな證券銀行がない。然らば倫敦に於ける株式の新規發行は大に利便を缺いたものではあるまいかといふ疑問を生ずる。此の疑問に對しては倫敦の預金銀行が株式取引所の關係者を通して此の株式應募資金を供給して居る事實を以て答へねばならぬ。

それであるから倫敦の株式取引所では、新公債、新會社の株式の取引は、特別受渡に依つて完了せられる。尤も此等の新公債新株式を取引所會員は相互間に、又公衆との間に、賣買をなすことが自由であつて、證券及代金の相對受拂をなしても亦差支ないけれども、取引所法から見るときは、特別受渡期日の來る迄は少しも受渡をなす必要はない。特別受渡期日は當該取引の完了を希望する會員の請願に依つて取引所委員會が之を定める。而して之を定めるに先だち、當該株式會社は委員會に滿足を與へる手續をしなければならぬ。即委員會は（一）會社の設立せられたこと、（二）株式發行の條件（三）株式發行額其の他の事項を明示する書面を要求する。尙會社は株式の既に發行せられたこと、若くは少くとも將に發行せられんとすることを示さなければならぬ。

却說、取引所委員會の特別受渡期日の許可が甚しく遲延することは決して稀ではない、之が爲に多くの非難を生ずることがある。而して多くの場合に於て此の遲延は、會社に關係を有つて居るものが、決算日を延ばさうと欲する爲に起るやうである。蓋彼等は會社の設立當初に於て世人をして會社の有望なことを思はしめる爲に、多額の株式を買求めることがある。而して未だ之を他に賣り付ける機會のない間に、受渡期日の到着することを欲しないからである。とにかく、不人望な鑛山會社の株式の爲に特別受渡期日の許可を求めるには、非常な長い時日を要するけれども、有望な新公債の爲に之を求めれば立所に其の目的を達するのである。

堅實性

斯樣にして英國に於ける新株式の應募資金は株式取引所の關

係者を通して普通の預金銀行から融通せられる。之を見て獨逸の經濟學者はいふ、新株式の應募は預金のやうな何時引出されるかわからぬ資金を以てすべきものではない、英國の預金銀行は直接新しい株式を引受けるのではないけれども、其の株式取引所の關係者に融通する金は新株式の應募に使はれるのである。銀行は直接その事を知らないとしても、若し其の株式取引所の關係者が適當な時期に其の新しい株式を賣放すことが出來ないで、損失を被り借金を返濟することが出來なかつたならば、預金を以て其の資金を融通した英國の預金銀行はどうするであらう。寧ろ獨逸のやうに眞正面から證券銀行と標榜して資本金又は積立金を以て自ら新株式を引受ける方が遙に危險が少ないと批評する。

實に理論上から云へば獨逸の經濟學者の說が正しいであらう、しかし英國の預金銀行は近年に於て殆んど其の破綻したといふことを聞かない。大正十年の頃であつたかと思ふが、ファロウスバンクといふのが虛僞の計算を帳簿に記入して遂に支拂を停止したことがあつた。その重役は刑事上の犯罪者として起訴せられた、而してそれ以來英國大藏省は每年一回宛各銀行を檢査することに定めたと傳へられたが、それより外には近年英國銀行の破綻したことを聞かない。

米國の金融業者も時々破綻する、一九〇七年の恐慌の時に殊に甚しかつた、それ以來聯邦準備銀行も出來、經驗も積んだけれども、尙時々金融業者の破綻するものがある。日本金融業者は更に多く破綻する。私が本編の筆を執つて居る一月の末に高田氏一家の經營する永樂銀行の閉店を新聞紙が喧しく論じて居る。十年前時の大隈內閣が設けた財政經濟調査會に於て獨逸流の證券銀行の問題が研究せられた時に。當時未だ健在であつた豐川良平氏が私を捉へて非常に憤慨せられたことがあつた。氏は曰く、證券銀行を日本に設けるなどといふことは、日本の銀行に北濱銀行の二の舞をやらせるものだ、どうも怪しからんと言はれた。

獨逸流の證券銀行に關しては私は別に一家の見があるが、しかし今はそれを說くべき機會ではない、獨逸の經濟學者がいかに批評しやうとも、英蘭銀行、倫敦取引所及其の周圍を取り卷く英國の預金銀行は堅實である。バンクのチューブステーションを出て東南に行く通はベージョトの名著に依つて名高いロンバルト、ストリート、それとスレッドニードルストリートの間の通がコーンヒル、此等倫敦の所謂シテイの中心は何處迄も堅實一方で固められ居る。秋から冬にかけて倫敦の町が濃霧に襲はれるときには、此の邊は晝の眞中でも電燈がなければ、眼前咫

尺を辨じなくなることがある。しかしいかに霧が深くとも英蘭銀行、倫敦取引所及其の周圍を取り卷く英國の金融業者の羅針盤は一厘も狂はないのである。

倫敦の金融界は歐洲戰爭の爲に深刻な痛手を負ふた。戰前世界金融の中心として紐育を壓した倫敦は、戰爭の爲地を變へて紐育の下風に立つこととなり、紐育が寧ろ黄金の洪水に苦む時に英蘭銀行は兌換を停止し、英國は法律を以て金の輸出を禁止した。對米爲替相場は平價の四弗八十六仙から下落して三弗臺に至つたこともあつた。殊に英國政府が米國政府に對して負擔する四十六億弗の債務の爲に倫敦は紐育に對して頭が上らなくなつたのであつた。

然し乍ら、堅忍不拔を以て名高いアングロサクソン民族は決して逆境に屈服しなかつた、天の試練に逢つて能く之に堪へた。彼等は徐々として運命の回轉に努めた。而して彼等の努力は着々として其の效を奏した。金輸出禁止の法律の期限が滿了する年である本年に至つて對米爲替相場は既に四弗七十九仙に達した。私は正貨準備の三倍に近い紙幣發行高を持つ英國と正貨準備の僅に一倍二三歩に過ぎない紙幣發行高を持つ我國との對米爲替相場を比較して誠に慚愧の眼をみはらずには居られない。實にアングロサクソン民族の堅忍性は感嘆に値すると思ふ。而して斯様に速に倫敦が戰爭前の金の自由市場に返り得るやうになつたに付いては、保守黨總理、現内閣總理大臣スタンレー、ボルドウイン氏が嘗て大正十二年の春大藏大臣として米國に赴き、四十六億弗の大債務を六十二ケ年の長期年賦償還債務に書き替へた功績を先づ第一に擧げなければならない。又英國民一般が或はアンチ、ウエースト、カンペインを叫び、或は財政の整理を唱へ、消費を節約し、奢侈を排斥し、勤儉力行したことを第二に數へなければならぬ。

然し乍ら若し英國金融界の中樞を握る英蘭銀行及倫敦取引所竝に其の周圍に居る人々がよく堅忍不拔の精神を以て奮鬪しなかつたならば、どうして戰爭後十年も經過せぬ中に金の自由市場を回復することが出來やう。佛蘭西、伊太利、白耳義、獨逸、墺太利、露西亞の中央銀行の現狀を見れば誠に思ひ半ばに過ぎるものがある。見よ、その中には墺太利、露西亞のやうに戰前の中央銀行を廢めて新に中央銀行を建てた國もあるではないか、獨逸のやうに中央銀行は同一であつても、其の組織を殆んど根本的に改めて新に紙幣を發行しようとして居る國もあるではないか、佛蘭西、白耳義、伊太利の中央銀行はそれ程甚しくないとしても、何時それが兌換を回復することが出來るであらう。それは遠い〳〵將來であらねばならぬ。斯様に考へて來

ると私は英蘭銀行、倫敦取引所及其の周圍の人々に如何に多くの稱讃を呈しても、決して多過ぎることはないと確信するのである。

筆を擱くに當つて私は大正七年の秋、私がビショップスゲートの財務官事務所から毎夕六時半頃、バンクのチューブステーションに行く途中、毎晩定まつたやうにイブニング、スタンダードを賣つて呉れた一老人のあつたことを想起す。彼も亦英蘭銀行周圍の一人物であつた。彼はもう故人となつたであらうか。若し未だ生きて居るならば、更に幾久しく其の健在ならんことを祈る。

トロツキズム對レニニズムの思想戰

◇トロツキー排斥の眞相◇

播磨楢吉

一 排斥の原因

トロツキー排斥の導火線となつたのは彼の新著『十月革命論』（目下刊行中のトロツキー全集の第三巻にして上下二册に分刊）である。該書は所謂トロツキズムの見地から『十月革命』即ち勞農革命を批評したもので、トロツキーの論旨を概括すれば斯うである（勞農革命は太陽暦にては十一月七日であるがロシヤ暦では十月二十五日であつたから、ロシヤでは普通十月革命と稱するのである）。十月革命を準備したのはレニンにあらずしてトロツキー自身である。勞農革命の中心人物はトロツキー其人であつた。そしてロシヤ革命を思想的に指導したのも實はレニンではなく、トロツキー自身であつた。換言すれば、ロシヤ革命はレニニズムに依つて行はれたのではなくて、トロツキズムのお陰で今日の成功を見るに至つたのである、といふのである。『十月革命論』を讀めば、トロツキーの雄姿は如何にも躍動してゐるが、肝心なレニンの活動は餘りに目立たない。レニンの高弟たるジノヰエフ、カーメネフ、ブハーリン、スターリン等に至つては悉くトロツキーの槍玉に揚げられてゐる。彼は『十月革命論』において、レニンを圍繞する幹部連の失策誤謬を攻撃して、之に依つて間接にレニンを貶するの老巧なる筆法を應用してゐる。

前記共産黨幹部の意見によれば、トロツキーの『十月革命論』は素と自己宣傳を目的として著はされたもので、史實はトロツキー自身の爲に都合の宜いやうに改竄されてゐる、尠くとも誤まり傳へられてゐる事實が甚だ多いといふ。ジノヰエフ、カーメネフ等の幹部を始め幾多の黨員は各自に筆を呵して、トロツキーの誤謬、訛傳を指摘し糾彈しつゝある。尤もトロツキーはその以前にも『千九百五年』（千九百二十二年出版にして千九百五年の第一次革命を評論したもの）

や『新しき進路』（千九百二十四年出版）等を公にしてトロツキズムの宣傳に努め、レニズム、ボリシエヰズムに對して彼れ一流の批評を下してある。そしてレニニズムを批評したこれ等の著書は、レニンが再起の望みなき病床に呻吟してゐた時分から彼の死後に及んで公にされた。この事情は共產黨の幹部をしてトロツキーの心事に對して一種の疑惑を喚起せしめたものと思はれる。

トロツキーがレニニズムを無視して自己のトロツキズムを發揮せんと企てたことは決して今に始つたことではない。曾てはブレスト・リトフスク條約の際に於ける、職業組合問題（千九百二十年冬）の論議せられた時における通貨改革（二十四年春）實施當時における、彼の異端的行動言論は最も著しいものである。レニンの在世中はトロツキーの反對的態度に對しは常に何等假借する所なく眞正面からキメ付けてゐたものだ。それはブレスト・リトフスク條約當時の記錄や、職業組合問題討議錄を一讀すれば分るのである。

ジノヰエフ、カーメネフ等はトロツキーが斯の如く斷えずボリシエヰキー黨に向つてトロツキズムに服從を迫らんとする異端的態度には、この蔭に何等かの野心あつてのことではないかと疑ふやうになつた。ボリシエヰズム中にトロツキズムの如き異分子の存在を默過するのは、將來ロシヤ共產黨の爲に恐るべき危險を貽するものであると考へた。しかるにトロツキーのレニニズム無視の態度はレニンの死と倶に一層露骨となり、無遠慮となつて來た、特に最近に至り黨員の間にトロツキズムに共鳴してレニニズムに疑念を挾み、勞農政府の政策に不審を抱かんとするものさへ現はれた。レニニズムは正に危機に面した。共產黨幹部がこの形勢の重大なるを覩て俄かに恐怖來を感じ出したのは、吾人之を想像するに難くない、最早や猶豫するを許さない、一日を忽せにすれば一日だけ多くトロツキズムの危險に侵かされるのである。

レニンの高弟等はレニニズムの旗印の下に蹶然起つて、全國的にトロツキー排斥の聲を揚げた。言はゞトロツキーといふ反逆者に對してレニン親分の爲に義戰を起したやうなものだ。檄は全露數十萬の黨員の間に飛ばされた、トロツキーの反レニニズム的態度に關し黨員の會合は各地に開かれ、今や全黨を擧げて義憤に燃えつゝある。トロツキーは一たまりもなく失脚して野に下るの已むなき悲境に陷つた。ジノヰエフ一派は此の機會においてトロツキーをして再び起つことの出來ないまでに叩き付けて彼の勢力を徹底的に一掃し、共產黨におけるトロツキズムの異分子を根本的に驅逐し去るといふのか、トロツキー排斥

運動の動機である。

豫てからトロツキーの態度に反感を有し、彼の勢力を不快に思ひ、彼の異端的思想の危險を恐れてゐたレーニンの弟子等は、隱忍して機會の到るを俟つてゐたのである。『十月革命論』は偶以て排斥運動の導火となつたに過ぎない。排斥は豫定の行動と見なければならぬ。然し『十月革命論』は必ずしもトロツキー排斥の主なる原因ではない、またブレスト條約以下の彼の反對的態度が排斥運動の眞因でもない、それ等は相俟つて排斥の近因となり遠因となつてゐることは事實であるけれども、トロツキー排斥たるやその由來する所遠く、決して一朝一夕の故ではない。排斥の眞相は深く思想問題の裡に藏せられてゐる、レーニズム、トロツキズムの歷史的衝突、ボリシエヰズム對メンシエヰズムの思想戰が、抑もトロツキー排斥の根本原因となつてゐることを忘れてはならぬ。

二　戰鬪の序幕

千八百九十八年ミンスク市（現今白ロシヤ共和國首府）で社會民主派に屬する全ロシヤの諸團體が第一回の大會を開いて『ロシヤ社會民主勞働黨』の結黨式を擧げ、同時に同黨の綱領を發表した。同黨はロシヤ最古の政黨にしてレーニンもトロツキーも共に同黨に黨籍を置いた。同黨は間もなく經濟派と政治派とに分れ、政治的自由を以てロシヤ勞働運動の第一條件と認める政治派は、千九百年外國において機關紙イスクラ（火花の義）を發行したが、この時トロツキーもレーニンも共にイスクラ紙の幹部として執筆した。

千九百三年ロンドンにおいて第二回のロシヤ社會民主勞働黨の黨會が開かれたが、この黨會の際、黨員の間に意見の衝突起り、同黨はメンシェヰキー（少數派）とボリシェヰキー（多數派）とに分裂した。この時ボリシェヰキー側の主動者としてメンシェヰキー側と奮鬪したのはレーニンにして、トロツキーも初めの程はレーニンの方に味方してゐた。しかるに黨の中央委員會の役員にトロツキーを選出すべきか否やの問題が起つた時に、トロツキー選出に斷乎として反對したのはレーニンであつた。この時レーニンがトロツキーを排斥したのは一見意外に感ぜられる次第であるが、レーニンはトロツキーの思想にメンシェヰズムの傾向あることを既に看破してゐたからであると言はれる。レーニンの爲に排斥を喰つたトロツキーはレーニン反對派の有力者マルトフ、ダーン、セクセリロード等と提携してメンシェヰキー派を組織し、レーニン一派に對して敵對行動を開始した。トロツキーが斯かる行動を執るに決したのは、レーニンに對する腹癒せの報

復手段であつたか、但しは主義上の公憤に出でたのか、その動機の如何は暫く問はないとして、レニン一派を中傷し攻撃せるパンフレツトがトロツキーの筆によつて早くも社會に流布された。トロツキーはその小冊子の中に特にレニンを目して黨の執政者たらんと欲する野心家であると罵つた。

レニン對トロツキーの論爭は斯の如くして幕を切つて落されたのであつた、爾來今日に至るまで二十箇年の久しきに亙り、レニニズム對トロツキズムは不斷の闘爭を繼續して來たのである。

三　恒久不斷の革命

ボリシエヰキー派とメンシエヰキー派とは千九百五年のロシヤ第一次革命の經過を考察し、その失敗の跡を研究した結果、ロシヤ革命の特種性、革命運動に對する態度及び戰術に關する兩派の見解に大なる相違點あることを發見した。この時までメンシエヰキー派の有力な論客として推されてゐたトロツキーは、メンシエヰキー派の戰術に漸く不滿を感じ同僚パルウースと共にメンシエヰキー派を脱した。同派を脱黨したパルウースは有名な『恒久革命論(パーマネント)』を唱道した、ロシヤ革命史上において『恒久革命論』を標榜して、この理論に基いてロシヤの革命運動に關する戰術を定めんとしたのは實にパルウースを以て嚆矢とする。トロツキーは直にパルウースの説に和して『恒久革命論』の提唱に全力を注いだが、この理論を初めて唱へたパルウースはトロツキーのためにお株を奪はれて、恒久革命論と言へばトロツキーの一手販賣の如くになつて了つた。それ故、トロツキーの思想を知らんと欲するには先づ恒久革命論の何たるかを研究しなければならぬ、而して恒久革命論を審かにすることは是れ即ちトロツキズムを究むる所以である。

トロツキーはその『恒久革命論』を以て千九百五年の第一次革命の性質を研究し、革命運動の實際經驗から獲た所の理論であると言つてゐる。恒久革命論の向ふを張つて持出されたのがレニンの『勞農執政論』であるが、吾人は先づトロツキーの所謂恒久革命論を述べて、而して後にトロツキズム對レニニズムの論戰に入らん。

トロツキーの恒久革命論を知らんとすれば前記彼の著『千九百五年』を一讀するに如くはない。彼は該書の序文中に次の如く論じてゐる。

千九百五年一月二十二日(冬宮前庭に慘劇の演出された日)から十月の全露總同盟罷業に至るその間において著者(トロツキー)の腦裡に、ロシヤ革命の發展の性質に關し

て一つの意見が生じた、私はその見解に「恒久不斷の革命論」なる名稱を附した。この六箇敷い名稱は、ロシヤ革命が當面の問題となしてゐるのはブルジョア的目的であるけれども、ロシヤ革命はこの目的に停止し得るものでない、といふことを意味するものである。プロレタリーがロシヤの主權者とならざる限り、ロシヤ革命はその當面の問題を解決することは不可能である。一度びプロレタリーが政權を掌握するや、ブルジョア的な革命の範圍に局限され得るものでない。即ちロシヤのプロレタリー先鋒は自己の勝利を安全ならしめる爲に、その支配の最初から封建的並にブルジョア的私有權に奧深く侵入するであらう。この際、ロシヤのプロレタリーは革命戰の初期においてプロレタリーを支援した所のブルジョア的政黨團體と衝突するのみならず亦、プロレタリーの政權掌握を援助したロシヤ農民の大衆團とも敵對的衝突を來たすに至るであらう。文化に遲れ、最大多數の農民を有するロシヤにおける勞働政府の矛盾撞着は、唯×××大規模において、プロレタリーの×××××××においてのみ初めて解決が出來るのである。

との論文に明言されてゐるが如く彼の不斷革命の理論は、千九百五年のロシヤ第一次革命の際に、ロシヤ革命の特質、その發展の傾向、各社會的勢力の階級的相互關係に關する根本問題を研究した結果、到達した所の結論であり斷案である。しかし此の理論は元とマルクスからその思想を取つたもので、當のマルクスは此の理論を斯う述べてゐる。

民主的小ブルジョアがその要求の出來るだけ最多數を實施すると共に速かに革命を終熄せしめやうとする時に當り吾人の利益及び吾人の目的は多少とも資產を有する總ての階級が○○××××××まで、プロレタリーが○○××××××××××××久のものたらしめゐに在る。

兎に角ロシヤの勞働者がロシヤの主人公となるまでには、幾多の革命的階段を通過しなければならぬ。平たく言へば、先づロシヤの地主貴族が倒れて、その後に立憲民主黨(カデット)の如き自由思想のブルジョア政黨が現はれる、自由思想のブルジョアは急進的な小ブルジョアの爲に倒される、かくて最後に殘るのが農民と勞働者である。この勞働者と農民も何ほ衝突を免かれ難い運命にある。プロレタリーが最大多數の農民を屈伏せしめてロシヤを支配するに至るまでには斷えず恒久的に革命戰を繼續して行かねばならぬ、といふのだ。

トロツキーは之の不斷革命論がロシヤ第一次革命に依つて確實に證據立てられた許りでなく、今度の大革命も亦彼の理論を

徹頭徹尾裏書きしてゐると言つて大に得意になつてゐる。前記引用の『千九百五年』の序文の一節に『爾來（千九百五年から十七年まで）十二箇年の間斷絶してはゐたが、この理論は徹頭徹尾確證された』と揚言し、更に昨千九百二十四年に公にされた彼の小著『新しき進路』において、

『不斷革命論に關しては、余（トロツキー）は之に關して去る千九百四年五年六年及びその後に論じた思想を斷じて放擲すべき理由を見ない。余は今日尙ほ、余がその當時論究した思想の根本は、その當時におけるボリシエヰキー派の人々が發表した幾多の論說よりも、比較にならぬ程遙かにレニニズムの實質に近いものであると思惟してゐる。不斷革命（パーマネント）の語はマルクスに依つて用ひられた言葉である。不斷革命は之を精確に譯すれば、不斷若くは常恒の義になる。この語の含有する政治的思想はと言へば、吾人共產黨から觀れば、××なるものは或る一つの政治的征服の後に終結するものにあらずして更に開展を續けるものである。而して吾人の爲には唯社會主義的社會がその○○の限界となる、といふのである。

トロツキー自身の言葉によつて所謂不斷革命論の如何なるものであるかは、充分明かになつたことゝ思ふ。

四　農民拔きのプロ政府

トロツキーの不斷革命論において見逃すべからざる特徵は、勞働者と農民との對立及びロシヤ革命と世界革命とを結び付けた點である。彼の所論に從へば、ロシヤに革命が起れば革命の初期に當つては農民はプロレタリーの味方となつて共同の敵と戰ふけれども、革命が勝利を獲てプロレタリーが愈ロシヤ政府を建設する段になると、勞働者と農民との利害關係から兩者の間に衝突が起る。別言すれば、ロシヤ革命の初期は一方勞働者及び農民、他方ブルジョア諸階級の戰ひであるが終期に入れば、それが勞働者對農民の鬪爭に變るのである。何故か。所有權を認めない社會主義と農民とは本來仲の良い友達でない、農民は先天的に所有觀念に囚はれたブル的性質のものである。農民は反動的のものである。反革命的素質を有してゐる、農民には革命的可能性が欠けてゐる、といふ考がトロツキーの思想の根底に橫へてゐることを知らねばならぬ。從つてロシヤ革命において勞働者と農民との提携乃至同盟の如きは、トロツキーにとつては現實性なき一種の空想としか見えなかつた。彼はロシヤの勞働者と農民とは遂に衝突の避くべからざる運命を有してゐることを切論して極力農民を排斥し之を無視するに至つたのであ

る。而して農民を排斥し、農民の革命上の意義を否定する必然の結論として彼は、彼の『不斷革命論』にも劣らない、寧ろそれ以上に有名になつた『ツアールなしの勞働政府』なる合言葉を發明した。ツアールなしとは農民を雜へない、といふ程の意味にして、此の句を別な言葉で言ひ表はせば『農民拔きのプロ政權』となる。農民は反動的分子だ、ロシヤ革命の邪魔ものだ、と決め込んで了つた。果ては『農民との提携を唱ふるが如きは是れプロレタリーの政治的自己制限をば更に客觀的アンチ反社會主義的保證に依つて補足するものに外ならぬ』（『千九百五年』）とまで極言してゐる。

既に全露人口の最大多數を占める農民を敵として戰はねばならぬとせば、ロシヤのプロレタリーは革命に方りて何れに向つて救援を索むべきか。トロツキーは之に答へて曰く、

歐洲プロレタリーの直接國家的援助あるにあらざれば、ロシヤ勞働階級は政權を維持してこの一時的支配を恆久なる社會主義的執政に變ぜしめることが出來ないであらう。これ全く疑ひを容れない所である。（千九百六年川版『我が革命』）

これで不充分ながらトロツキーのロシヤ革命に對する意見の要點は紹介した積りである。ロシヤ革命における。プロ執政に關するトロツキーの見解を約言する時は、右に最多數の農民を對手に戰ひ、左に界×××××援を求める所の主權といふことに歸着する。

五　レニンの勞農同盟論

トロツキーの『ツアールなしのプロ政府』なる合言葉に對抗して標榜されたのがレニンの『勞働者と農民の民主的執政』といふ標語であつた。トロツキーの農民無視に反しレニンは最初から農民と勞働者の提携、都市と農村との同盟を標榜して起つた。レニンは論じて言ふ、

プロレタリー執政はプロレタリー、勞働民衆の先驅と、ロシヤにおける多數の非プロ的勞働社會（小ブルジョア、農民、知識階級）との間における階級的同盟である（レニン全集第十七卷）

更にレニンは論歩を進めて、

プロレタリー執政とは、之を通俗に述ぶれば、都市及び一般工場勞働者なる一定の階級がロシヤ革命において、新しき社會主義的制度の建設事業において多數の勞働者、被搾取民衆を指導することを謂ふ（レニン全集第十六卷）。

レニンは勞働者と農民との同盟を以てロシヤ革命におけるプロ執政の根本となし、トロツキーは農民を排してプロの單獨執

立を唱ふ。レニンはプロレタリーがロシヤ革命の中堅となつて多數の農民を指導すべきことを高調し、トロツキーは最多數の農民と勞働者との衝突を豫見す。トロツキーはロシヤ革命の援軍を×××××に期待せんとし、レニンはロシヤ國内における農民と勞働民衆との中に革命の援軍を見出さんとする。兩者の意見は斯の如く扞格しロシヤ革命の根本問題に對する兩者の見解の間には、一大溝壑が横つてゐる。何故か。トロツキーの農民の革命的意義の否定が千九百五年の革命の實際經驗に基くが如くに、レニンの農民重要視も亦同じく第一次革命の實物教育から生れ出たものである。ツマリロシヤ革命における農民の役割に對して兩者の見方が異つてゐるのである。

レニンは考へたのである、ロシヤ農民には革命的可能性が果して缺如してゐるだらうか、若しこの可能性がありとすれば、革命の爲に之を利用して農民をして勞働者の同盟たらしめ得べき希望があるか否か。農民問題を研究した結果レニンは件の問題に對して積極的斷案に達したのである、彼はロシヤ農民の中に革命的能力あることを確めた。

ロシヤ農民に對する兩者の見解の相違から見ても、兩者の社會主義上の色彩が想像される。トロツキーが純然たる西歐ソチアルデモクラツト系統の人であるに反しレニンの思想は、ロシヤの黒土に培はれたマルクシズムを思はせる。農民を重要視するレニンが、ロシヤの農民黨とも稱すべき社會革命黨に接近の傾向を有したことは極めて自然である。農民を無視する點がメンシエヰズムの特徴であるやうに、農民を重視する思想はボリシェヰズムの特徴である。レニン側に言はせると、トロツキーズムはロシヤの特種國情の土に培はれたロシヤ革命の特性に對する理解を缺き、その結果として農民の革命的意義を閑却するに至つたものである。この點においてトロツキズムはメンシエヰズムの一變態と斷ずることが出來るといふ。これとは反對にレニニズムはその根幹を深くロシヤの特種性の中に發してゐる。レニンはロシヤ革命が勝つか敗けるかの分れ目は、一に係つて勞働者と農民との提携協同が成立するか否かにあると觀た。レニンは之が生きた實例として第一次革命を舉げてゐる。

千九百五年の第一次革命は何が故に失敗したかと言へば、都市と農村との提携が實現されなかつたからである、當年の革命は專ら都市勞働者によつて行はれ、農村はたゞ傍觀するだけで敢て之に呼應しなかつた、農民が都市勞働者の運動に刺戟され覺醒されて、革命運動に馳せ付けたのは、都會における革命運動がロシヤ官憲のために全く鎭壓された後であつた。この二階級の提携行動を實現させることの出來なかつた事が、ロシヤ第

一次革命をして失敗に終らしめた最大原因であつた。レニンは然う論じてゐる。

しかるに千九百十七年の大革命の時には、勞働者と農民との同盟が立派に、殆んど理想的に實現された。勞農革命の今日ある實にこの二階級的提携の賜物である。同じロシヤの農民はトロツキーのためには危險なる敵と見へ、レニンのためには革命の同盟者となつて現はれた。レニンは言ふ、

プロレタリーと農民との革命的な民主的執政はロシヤ革命において既に實現された。勞働者及び兵卒代表者委員會（勞兵會）は是れ即ちプロレタリーと農民との民主的執政にあらずや。兵卒中にて最多數を占めるものは農民なることを記憶せよ。（レニン全集第十四卷）

千九百十七年の大革命ではソウエート（委員會）といふ一種特別な形式の下にロシヤ勞農の同盟が成立した、これ全くロシヤ革命の特性に基くものにして、ロシヤの特種國情の然らしめた所であると認めねばならぬ。レニンの勞農執政とトロツキーの農民抜きのプロ執政とは、この間正に霄壤の差がある。トロツキーは農民のブル性を恐れ、農民の中に社會主義の危險な敵を見た。この理を推して、反動性ある農民と提携するボリシエヰズムはその思想中に反革命的分子を包藏してゐると喝破したのである。

ボリシエヰズムの反革命性は、革命が勝利を獲た場合に非常な危險を以て脅かすものである。（『千九百五年』）

ボリシエヰズムは反革命性、反動的分子を含有してゐるといふトロツキーの意見は、ボリシエヰムズに對して大なる侮辱であつた。

六　ロシヤ革命の援軍

上に述べた如く、農民を排斥し去つたトロツキーはロシア革命の援助を西歐のプロレタリーに期待した。彼の說に從へば、ロシア一國だけでは到底困難であるから、西歐の同僚から援兵を送つて來るまで、ロシヤだけでプロ革命を起すことは見合せたが可いといふのである。ロシヤだけでプロ革命を起して見た所で、西歐のプロから××××が來なければだめである。ロシヤと前後して西歐各國にも××××が勃發し、西歐とロシヤと東西相呼應して初めてロシヤの××××は成功するものである。それ故、西歐先進國に××の起るまでロシヤでプロ革命を起してもそれは徒空であるといふのだ。トロツキーがロシヤ革命に必要な×××××××××求めんとするのはこの所以にして、彼は斯の見地からロシヤ革命の說明を試みんとするも

のである。彼に言はせると、千九百五年の革命が遂に敗れたのは、西歐に×××起らなかつた故である。西歐プロレタリーはロシヤ革命を見殺しにしたものである。

千九百五年の革命はそれで說明が出來るとして、然らば今回の大革命は之を如何に說明せんとするか。勞農革命は西歐プロの援助なきのみか、剰さへ西歐各國の敵意と妨害の重圍中にありながら善く成功してゐるではないか。吾人はトロツキーの說明を聞かん。

プロレタリー國家がたゞ一箇國、然かも文化の遲れたロシヤにおいて全世界に對抗して維持されてゐるといふ事實は、ロシヤのプロレタリーの絕大なる勢力を證明するものにして、先進文明國から之を觀れば確かに奇蹟たるを失はないであらう。しかし勞農政府は政治的及び軍事的意味においては國家を建設し得たけれども、社會主義的社會の建設には着手してゐない、未だその建設に到達さへしてゐないのである。餘他の西歐文明國がブルジョア的政府で支配されてゐる限り我がロシヤは經濟的孤立と鬪ふために資本主義的世界と妥協を求めるより外に途はないのであらう。しかるに資本主義國との妥協は、幸ひにしてロシヤの經濟的瘡痍を治する上には效果があるだらうが、しかしロシヤにおける眞の社會主義的經濟の振興は、西歐先進國におけるプロレタリーが×××××までは到底覺束ないものである。（「十月革命論」）

若しトロツキーの所論にして正しとせんか、勞農ロシヤは實に心細い道程を辿りつゝあるものにして、永續性を欠げる農勞政府の基礎は頗る薄弱であると言はねばならぬ。トロツキーの論法で將來を卜する時は、勞農政府は早晚ブルジョア化すべき運命にあると言ひ得る。

一方レニンの意見はどうかと言ふに、レニンは正しくトロツキーの裏を行つてゐる。レニンはロシヤ一國だけでプロ革命の充分可能なる理由を信じた。社會革命は工業の最も發達し、資本主義、帝國主義の全盛を極める文明國に起るべきもので、文化の程度の低い、そして工業も資本主義も發達してゐない國には起る機會が尠い、といふのが從來一般に信ぜられてゐる定說である。然るにレニンの見方は頗る從來と異つてゐる。彼は〇〇〇は帝國主義及び資本主義の世界的連鎖の最も弱い所（國）において起り易いものであると觀た。故にロシヤの如く工業の幼稚にして資本主義の尚ほ發達しない、文化に遲れた國にプロ革命が勃發したのは當然にして何の不思議もない、而して勞農革命がロシヤ一國だけで成功するのも充分有り得べきことであ

ると說く。兩者の見解及び立論が如何に甚だしく懸隔せるかに注意せよ。

ロシヤ一國に勞農革命の成功すべき所以の理を信じ、而して西歐先進國にプロ革命の勃發を期待し難き事情を研究したレニンは、ロシヤ革命の援兵を西歐に望まずしてロシヤ領土内の農民及び虐たげられた諸民族の間に其の同盟者を見出したのであつた。農民といふ屈强な援軍を勞働者の同盟者になすことが出來た事實が、十月革命の成功の基礎であつたとレニンは論じてゐる。

七　入黨より排斥まで

千九百三年以來三月革命勃發の時まで十五年間、レニンとトロツキーは絕えず思想戰に鎬を削つて來たが、この十五箇年間における兩者の論爭を一々紹介すると長くなるから之を省略する。

世界大戰に對し社會主義者は如何なる態度を採るべきか、といふことが大戰勃發當時各國社會黨の爲に最も重大な問題であつて、この問題を決定するために各國社會黨は千九百十四年と十五年の兩度にスヰス國キンタル及びチムメルワルトに二回の國際大會を催ほした。ロシヤ各社會黨は大戰に對する態度問題に關して二派に分れた、敗北派と防禦派是である。敗北派といふのは、ロシヤが戰爭に敗ければロシヤに革命が起ると豫期して、ロシヤの敗戰を希望したのである。防禦派は敵の侵入に對して祖國を防禦すべきである、しかし自分の方から敵國に侵擊するのは不可であると論じた。敗北派の中堅はレニンにしてメンシエヰキー派を中心とせる防禦派の中にはトロツキーを見出した。レニンは革命のためにロシヤの內亂煽動を主張し、トロツキーは之に反對した。レニンは勞農の民主的執政を唱え、トロツキーは農民拔きの勞働執政を振廻した。レニンはブルと妥協を事とする第二インターナショナルと絕緣して新たに第三インターナショナルの建設を唱道したが、トロツキーは之に反對を表はした。かくの如くして大戰中における兩者の思想は更に接近の模樣なく、益遠かる許りであつた。恰もこの時ロシヤに革命が起つた、そしてこの三月革命が緣となつて過去十有五年に亘つて仇敵の間柄であつた二人は意外にも互に握手を交はすことになつた。トロツキーはボリシエヰキー黨に入黨してレニンの配下となるに方り、黨に對して何と挨拶したか。

『三月革命は吾人の意見の相違を拂拭し去つた！』

まことにあつさりとした入黨の辭である。彼は彼の從來の意見が誤つてゐたとは別に告白しなかつた。否、寧ろトロツキー

は彼れ自身の意見の正當にして、レニンの思想こそ[illegible]道つてゐと信じて入黨したのであつた。即ちトロツキーは言ふ

余（トロツキー）は余がレニニズムの許へ歩いて來たその道が他の道よりも不確なそして不堅實なものとは全然思つてゐない（一九二四年出版『新しき進行』）。

これはレニンが死んで間もなくトロツキーの口から發せられた言葉である。彼れ自身の歩いて來た道（トロツキズム）を以て他の道（ボリシエヰズム）以上に確實堅固な思想であると信じてゐるならば、何の必要あつて彼はレニニズムに改宗したのであらうか。果然ボリシエヰキー黨に入黨したトロツキーは依然としてトロツキズムの見地に立つてレニニズムを批評することを止めなかつた。彼は自己の歩いて來た道の方が正しいと確信してゐた程であるから、ボリシエヰキー黨に入黨しても毫も自己の思想即ちトロツキズムを放棄すべき必要を見なかつた。彼は共産黨内において飽くまでトロツキズムで押通ほさんと欲したのである。彼がトロツキズムを固守して之を棄てない限り、黨と彼との間に衝突の起るべきは初めから明らかな話である。

十月革命の當時、彼は講和委員長に任命されてドイツと和を議すべくブレスト・リトフスク市に乘込んだ。彼は出發に臨みレニンからたとひ不利な條件でも速かに調印せよとの命令を受けたのであつたが、彼は和を結ばず『不講和、不戰爭』といふ珍無類の宣言を後にして引揚げた。この時、對獨戰爭を打切るか若くは繼續するかに依つて十月革命の運命は決定するのであつた。若し戰爭を續けるとすれば十月革命は直に崩壞すべき形勢にあつた。故に十月革命を救はんと欲すれば嫌でも應でも一先づドイツと和を講ずることが焦眉の急であつた。レニンの講和主張は當時におけるロシヤ軍隊即ち農民の戰爭に對する心理に基いて立論された意見であつた。戰爭を欲しない農民にこの上尚ほ戰爭を强ひる時は、ロシヤ革命を内部から覆して農民と勞働者の不和反目を招くの恐れがあつた。しかるにトロツキーは調印拒絶の理由を述べて曰く、

今やロシヤ革命は西歐プロレタリーを動かすべき肝心な時機に際會してゐる。この時に方り若しドイツと屈辱的講和に調印せんか、吾人の革命宣傳は茲に滑稽化するに至らん。

トロツキーはロシヤ一個國におけるプロ革命の失敗を信じてゐたから、農民の心理狀態の如何に頓着なく、ドイツに對し革命戰を宣し、之によつて西歐に革命勃發の機會を與ふべしと論じたのである。トロツキーの意見にはトロツキズムが遺憾なく

發揮されてゐる。當時レニンの講和說とトロツキーの主戰論とは何れが勞農革命を救つたか、といふことは今日に至つて明かになつた。トロツキーの說を容れて戰爭を繼續してゐたならば、十月革命は遠うの昔に滅びてゐたと言はれる。

ブレスト條約問題はトロツキーが共產黨をしてトロツキズムに服從せしめやうと企てた最初の謀反であつた。レニニズムをして無理にもトロツキズムに服從せしめんと欲する彼の行動、共產黨をしてレニニズムを棄てゝトロツキズムの道を辿らしめやうとして止まない彼の態度は、勞農政府が難局に逢着する每に執拗に發揮されてゐる。ブレスト條約は單にその一例に過ぎない、職業組合問題、貨幣改革問題の論議された時における彼の反對、或はソウエート國家機關に共產黨員以外の異分子を任用せんことを提議したるが如きはその最も顯著な數例である。勞農政府の國家的大問題には必ずトロツキズムが飛び出して共產黨の最高政策に反對を唱へ、黨の一致と平和を攪亂せんと試みるのである。黨の幹部も一度や二度は隱忍して來たが、傍若無人な彼の行動が度重なるに從ひ、また危險を伴ふ彼の異端的思想が益跳梁跋扈せんとするの形跡あるを見ては、最早や傍觀默止する譯に行かなかつた。トロツキズムに對する黨の警戒と對策は漸次具體化して來た、かくて黨內におけるトロツキーに對する不平の聲は高まり、反トロツキーの氣運は醸成されたのである。

トロツキーが農民との提携を標榜するレニニズムを以て革命のために最も危險な反革命的分子を含有するものであるとして攻擊したことは既に上に述べた。彼は反革命的危險性を藏するボリシエヰズムが辛くロシヤ革命を指導して之を成就するに至つた理由を說明して、

この危險が起らないで濟んだのは全くレニンの指導の下にボリシエヰズムが千九百十七年の春即ち十月革命以前に思想上の武裝を仕直したからである（一九二二年出版『千九百五年』）

トロツキーの說では、ボリシエヰズムは三月革命當時までは危險極まる反革命思想のものであつた、がその後俄かに思想の入替を行つたお蔭で十月革命に成功したのである。思想上の武裝仕直しとはボリシエヰズムに代ふるにトロツキズムを以てしたことを指すのである。レニンは自己のレニニズムが革命のために役に立たないことに氣が付いて俄かに革命的なそして正しいトロツキズムで思想の入替えを行つたといふのである。更に語を換へて言へば、レニンはトロツキズムを剽竊してボリシエヰズムを造り變へたといふ意味になる。レニンズムを奉ずる共產黨にとつてこれ程大膽なそしてこれ程侮辱的な暴言酷評が

またとあるだらうか。トロツキーの眼中レニンなしと云ふべし。トロツキー排斥の近因は實にこの『思想上の武裝仕直し』の一語に發してゐると斷言するも決して過言でないのである。カメーネフはこの一語中に包含させられた深い意味を闡明し、トロツキーの意中を忖度して左の如き推斷を下してゐる。

一　ロシヤ革命の根本問題、革命の性質、その發展、社會的力に對する見解に關しトロツキーは正しかつた、ボリシエヰキー黨及びレニンは間違つてゐた。

二　十月革命の勝利はボリシエヰズムが豫しめその前に當つて思想上の武裝を改めたから獲られたのである、レニニズムは十月革命前にレニニズムとは全く別種の思想即ちトロツキズムで武裝を仕直した。

三　ボリシェヰキー黨はこれ等の問題に於てトロツキーの說に歩み寄つて來た、トロツキズムに變つて來た、そして千九百十七年以來ボリシェヰキー黨の政策はトロツキーの理論と一致するやうになつた。

トロツキーが如上の思想をば公然と發表しないで『思想上の武裝仕直し』なる一句によつて婉曲に暗示してゐる所は、その手腕の凡ならざるを知ることが出來る。

共產黨の幹部がトロツキー及び彼の思想に對して如何に斷乎

たる理想の態度に出でゐるかは、敢て贅々するまでもない。

十月革命論は始めから終りに至るまで此の筆法で論じ、この筆法を以てレニンを批評し、レニンの高弟を攻擊すると同時に、トロツキー自身の手柄を吹聽する目的のために著はされたものであるから、その內容は之を想像するに難くない。

以上述べた所によつて、トロツキーの排斥運動は單なる政策上の問題に基いたものでもなく、また感情の問題にもあらず、實に思想上の根本問題に其の基因を發してゐることが明瞭になつたと思ふ。ロシヤ革命史の背景をなすこの二思想が、千九百三年以來互に對峙して思想戰の渦を卷いて來た委曲に至つては、僅少なる紙面の能く竭し得る所でない。こゝにはその筋だけを略述して大體を彷彿せしめただけである。本篇はトロツキー排斥の事情を述べたのであつて、思想としてはトロツキズムとレニニズムと何れが果して正しいか、といふ議論をしたのではないことを斷つて置く。



エドガー・アラン・ポー

野口米次郎

紐育をさう離れない所にホードハムといふ一小町がある。アラン・ポーは恰も秋の木の葉のやうで無慈悲な不運に追捲くられ乍ら、晩年の足掛け四年をこの町端れの一小屋で暮した。大きな窓が玄關前の猫額大の庭を覗いて、一見平家らしく見えるが天井の低い寢室が上にあることは屋根の下に二つの小さい窓があるので知れる。部屋の數はいくつも無いが，自分と家内と家内の母との三人暮には大きすぎる位である。それに家の構造が萬事和蘭式様であることをポーは喜んだ。又家の前にある大きな一本の櫻の木は春先きどんなに見事であらうと彼は想像した。道を隔てゝ家の前に擴がる眼に麗はしい小公園には澤山の樹木が繁茂して、その間で鳥が鳴いて來るのも彼の氣に入つた。ポーは鳥が好きであつた。現にこの家へも一羽の米喰鳥(ボボリンク)と一羽の鸚鵡と連れて來て居る。又鳥以上にポーの好きなものは猫である。彼は書齋に座り大事な猫を肩に止まらせると，文學者として更新の生命が朝の潮水のやうに彼の胸に溢れると彼は感じ，彼は微笑した。

『子供女房』のバジニアと母親のクレム夫人は始めて家庭氣分が味はへると思つた。家の周圍に拋放しにしてあるダリアにも適當な手を入れ、又家の後にある三四本の果實の木にも蟲のつかない注意をせねばならないと彼等兩人は思つた。

これまでの生活には落付きが無かつたが、假令貧乏に追はれても今後は多少のんびりした氣持が得られようと彼等は思つて、彼等はこのホードハムの生活を心から喜んだ。然し彼等を附廻る運命の神は怖ろしい無慈悲である不吉である。最初は一寸微笑したけれども、間も無く冷淡な獰猛な殘忍性にかへつて彼等を睨み始めた。ホードハムの家へ移つてから一年目になつた頃から、ポーは文字通り左前になつて、どう足搔いた所でどうとも成らないことになつて仕舞つた。書いたものからは必要丈けの金が入らず、さりとて彼は他にどうして金を作らうといふ工夫も知らなかつた。一家三人がたゞ顏を見合せてぼんやりして居るのみであつた。この貧乏が原因の大きな一となつてバジニアの病氣を募らせ、彼女はます／＼衰弱するのみであつた。今は體面がどうのといふ場合で無いので公の救助を受けるに至つた。バジニアは千八百四十七年の一月三十日に僅か二十四歲を一期として死んだが、死んだ時などは寒冷骨を刻む一月末でありながら家中何處にも赤い火一つも無かつたさうで、バジニアは一匹の猫を股の間に入れ僅かな暖を取つて死んだといふことである。貧乏にも段々あるが、かう成つて來ると人は一種物凄い感に打たれる。中途半端を冷罵する絕對境の權威さへあるともいふことが出來る……だが、それは局外者のいふ言葉だ。

バジニアの死後は特にさうであつたが、この時代に於けるポーの友人は重もに中年者の未亡人で、彼等の感情は荒び心の單純性を欠つた女文學者連であつた。彼の家内の子供らしい無邪氣がかへつて彼の不平を苛立たせる場合があると、彼は其等の自由な未亡人へ行つて自分の理智を滿足させたのだ。ヲスグッド夫人との交際は死んだバジニアも公然と奬勵して居つたが、この未亡人は特にポーの美男子振りが氣に入つて居つたと思はれる。彼女は文章に書いて彼の容貌風采を賞めちぎつて居る。『ますぐな彼の頭は氣高い麗はしい、感情と思想が高まると彼の黑い眼は電光のやうに閃きだす』と彼女は書いて居る。『感じ易い花車作りの女からいふと、ポーには特別な抵抗し難い一種の魅力がある、彼が婦

人に接する場合に武俠的で上品で實に優しい尊敬心を捧げる」とも彼女は書いて居る。ポーの性質は最も美はしい光を家庭のなかで放つた。年の若い柔和な偶像視して居つた自分の妻に對すると、宛も子供のやうで、澤山戯けたがり情を深く機智に富むと同時に柔順でさうして氣まぐれでもあつた。それから彼の所へ遣つて來るものに對しては どんな多忙な場合でも親切な言葉を與へ、愉快な微笑を洩し、品の良い慇懃な注意を拂つた。彼は彼の「愛する失はれたレノーア」のロマンチツクな肖像の下に置いてある机に坐つて、幾時間でも熱心で忍耐強く一言の不平も無く、精美明瞭な文字を走らせて勉強した、さうして「珍らしく輝く空想」が彼の驚くべき胸中を突くと、その速かなること超人の仕事と云へる』とも彼女は書いて居る。外に剛なる人間は得て內に弱いものだ。外へ出歩るいて喧嘩好きな人間は內へ歸へると至つて柔順なものだ。又男子の間に友人の無い人間(男子)は、女の友人を澤山持つて居るのを普通として居る。さうしてアラン・ポーも男の友人が無くて女の友人を持つた美男子である……ポーのことを私は胸に浮べるとヘルビンのエングレービングとして知れて居るポーの肖像が眼前に浮いて來る。

所謂中肉中脊の男で、眞直な恰好の良い骨格は軍人的訓練さへ持つたであらうと想像される運動家の型である。秀でた額と大きな顳顬はナポレオンのものとは異つて卓越したもので、手を見ると婦人に相應しい位に指は細く皮膚は柔い――前から見ても後から見ても優雅な紳士で紳士といふ「極め」を産れ乍ら押されて來た男だ。この男が即ちアラン・ポーで、少くも彼が殘忍な運命に飜弄されない高雅時代に於ける彼である。又彼が婦人に對して示すことが出來た優美なアスペクトの彼である。彼は美男子の特權として女を歎美したが、實際英語文學の永い歷史を通じても、彼位女性崇拜を文字で傳へたものは無い。然しそれは美男子の趣味といふのみで無く、女を美の音律的創造中で一番完全なものと信じて、女性崇拜を實行するといふことは即ち自分の信念に忠實なる所以であるとポーは思つたのである。女の一擧一動

には音樂的リズムがあつて、これが戀愛の一字で統一されて居る。彼は狂人にも比較することが出來る理智慾を持ち、それを誇つて居つたが、婦人に對すると彼の理性は直に姿を隱して仕舞つて居る。丁度彼が詩人として詩の上で理智を否定して詩を美といふ單一な問題に限つたと同樣であると云へる。美の極致は悲哀の外何物でも無い。女が、(どんな女でもポーに對すると美人であつたが、)地上生活を失つて未知の天上生活に進むといふ場合位美なるものは無いと信じて、彼はそれを詩の中で歌つて居る。この事は彼自身に向つては、主義を遵守したものに外ならない。女性崇拜は彼に盡きて居るの感がある。かういふ信念に立つて居る男をどうして女が嫌ふことが出來よう。彼が特にバジニアの死後樣樣な女に取捲かれるに至つたといふことは別に不思議でない。これは美男子が當然踏むべき道へ落ちて行つたものだ。特に意思の强健性を欠いた美男子が拂はされる稅金だとも云へる。然しアラン・ポーは意思の極めて弱い米國の南方人である。

家内を失つた前後から彼の健康は不良であつたが、苛酷な冬も盡きて總ては春を迎へるといふ自然の法則と等しく、ポーも漸次とその健康を回復して、この不幸な年の殘りを捧げてユルエカの一篇と長篇の詩ユラリユーム『空は灰色で眞面目であつた』で始まる名篇だ)を書上げた。私はこの詩を長篇だといつたが、眞實な詩は長篇に無いと信じたポーに云はせると『ありや短篇さ』と答へたであらう。この時分から佛蘭西ではボウドレールが乘り氣になつてポーを飜譯し始め、巴里第一流の評論雜誌でポー論が始めて出たのもこの頃のことである。又ポーの『大鴉』から暗示を得て、ロセチが『昇天聖女』を書いたのもこの頃の事であつたであらうが、自分の文名が大西洋を越して居ると云ふことをポー自身は知らなかつたに相違ない。想像すると、自分の文學が將來生きるだらうかといふことに關しても彼は時には悲觀的であつた。さう云ふ寂しい場合に彼が發見し得た避難所は、彼を取捲く未亡人連との交際其物であつた。もとよりポー

と彼等との友情（戀愛といふ言葉を使つてもよいが）は所謂プラトニックで精神的のものであつたであらう。又ポーも日本王朝時代の戀愛歌人のやうに二人も三人にも同時に戀して居つたと思はれるが、この戀愛なるものは無邪氣な所謂獨逸式のものであつたであらう。然し私は感情の純白性を失つて仕舞つた彼を憐れまざるを得ない。人生の海上で荒み果てた彼の運命を憐れまざるを得ない。これ等の未亡人連から勇氣を附けられると、ポーは永年の宿題である雜誌發行の計畫が頭の中でによき／＼と彼の野心を煽立てた。ハジニアの死後滿三年の千八百四十年一月二十二日附で彼がワヰリスに送つた手紙に、雜誌發行の目論が附きかけて、既に自分の手に二百名計の購讀者があると書いて居る。それから、『雜誌の名稱はスタイラスで、出版者の手を全然離れたものでなければ發行の必要が無いのだ。五百の購讀者が無ければ始められないが、その目的を達する爲め私は講演して廻はる。手始めに「宇宙といふ題で、二月の三日ソサエーチー・ライブラリーで講演する』と書いて居る。この『宇宙』はユルエカの模樣替したやうなもので、この外彼は『詩の本質』といふ講演もして居る。然し雜誌のスタイラスは彼が死ぬまで世に出なかつた。

講演者として彼は聽衆に滿足を與へる前に自分自ら講演に醉つたと云へるかも知れない。之れは講演者唯一の秘決であるに相違ないが、彼は多少雄辯家といふ所があつたであらう。彼は恰悧な男で聽衆の心持を支配し得る丈けの餘裕を演壇の上で持つことが出來た。演題の性質から見るとさう人に感動を與へさうにないに係らず、色々な人が彼の講演振を賞めて居る。前に書いたラスグッド夫人は「彼の辯舌は純眞無垢で殆ど天上のものたるに近い」といつて居る。それからポーの傳記で有名なグリスウオルドも他の事柄に關しては兎も角もとしてポーの講演を『超人間的』といふ言葉で評して居る。『彼の聲は驚るべき訓練で調節され、彼の大きな表情的な眼は時には休憩して居るやうに見へ、又時には聽衆に向つて火焰のやうな動亂を打出す。さうして彼の顏は、想像が彼の血脈を早める時には赫々と輝き、想像が冷却し

て内心に淡く時には無變化に否白い』とも書いて居る。ヲスグッド夫人同様、バジニアの死後ポーの愛人であつたホキトマン(ヘレン)夫人も、『彼の辯舌には他に匹敵を見ざる程不思議な魅力があつて、これは辯舌見物の純正に期するに

といつて居る。今日から見ると米國でも百幾十年前のことであるから、講演料といつた所で多寡の知れたもので、これが雜誌發行の爲め何の役に立つもので無いことは知れて居る。又ポーにしても、一時は込上げて來るやうな熱心で雜誌の事を思つて居るかと見ると、翌日になると雜誌の事などはけろりと忘れて居るやうな永續的忍耐を彼は欠いて居つた。考へて見ると、運命の皮肉とでもいふのであらう……衣食さへ滿足に出來ない男が餓腹くつてでく／＼肥た連中を前にして詩を語り美を宣傳して歩いたといふことは、然しこの點は百年前でも今日でも世界を通じて、根本的には變化が無いといふことが出來る。所詮人間はノートル・ダムの鷲頭獅身(ガーゴイル)の怪獸で、ポーの詩の言葉にある「夜の陰府の岸から」來る運命に操られる人形たるに過ぎないであらう。さうして無慈悲な人生の記憶の表象が何かの形で私共の魂に殘るであらう。今ポーを憐んで一文を書て居る私自身も、ポーの運命と大きな相違がある筈が無いと思つて身震ひせさるを得無い。

『ポーよ、君は時と場所から離れて歩く美の修業者だ。
白い空中に魔法師の杖の動くのを眺め乍ら、手に持つ「平凡の反旗」を翼の風に靡かせて歩く。
君は奇怪な空氣を吐き出す鷲頭獅身(ガーゴイル)だ。
現實と神秘の間から感傷的な悲劇の雲を湧かせる。
ポーよ、君を讀むと　再び來ないものを悲しむ人間性の悲鳴が
藝術の沙漠から吹いて來て、同腹し難いといふ運命の花を咲かして居る……

私はこの花を一つ〳〵摘んで寂寞な人生の前に捧げる。』

ポーの新雜誌發行計畫を考へると私は岩野泡鳴のことを思出す。泡鳴も幾度も雜誌の計畫を立てゝ幾度もその計畫を水の泡にして居る。それでも晩年になつて『日本主義』といつた見窄らしい小雜誌を出して死ぬ少し前まで繼續して居つたやうに記憶して居る。然しポーには泡鳴程度の雜誌さへ惠まれ無かつた。費府（フヰラデルフヰア）にクラークといふ出版者が居つて、この男がポーの雜誌計畫を面白いことゝ思つて、彼の爲め資本家となる約束を與へた。所で、ポーは非常に勇氣附いて、雜誌の表題を『ペン』と決定し、直ぐ友人間にこの計畫を吹聽して歩いて又澤山の引札まで印刷して撒いたものだ。彼の熱心はすばらしいものであつたが、直にクラークの方で考へだしてこの計畫を破棄して仕舞ふに至つた。然しこの頃出版者は少なからぬ金額をポーに貸込んで居つたので、ポーはクラークから分れる時借金の抵當に原稿を殘したといふことだ。如何にもポーが遣りさうなことだ。其後紐育で『ブロードウエー・ジョウナル』といふ雜誌に關係して、ビスコといふ男からこの雜誌を讓受けたことがある。然し買額五十弗（五十弗で買へる雜誌とあつては多寡が知れたものだが）が現金で拂へないとあつて、其當時の有名な新聞記者ホレース・グリーレーに裏書して貰つた銀行の小切手をビスコに渡した。ビスコが銀行へ行くとポーから貰つた小切手が不渡とあつて、グリーレー自身が自腹を切らねばならないことゝ成つたさうである。かういふ不始末な事件はポーには數へられない程あつて、彼は不始末の常習犯であつた。ポーの『ブロードウエー・ジョウナル』との關係も數箇月で無くなつたが、彼の雜誌發行の計畫は彼の一生を通じて彼を惱ました夢の一であつた。ポーの傳記者のすべては皆な彼に事務的智識が欠けてゐたと書いて居るが、果して其點はどうあらうか。事務的智識の缺如を責める以前、彼はとんと金に無緣であつたことを語るのが至當では無からうか。昔

いたものを信ずると、彼は一生中金百弗以上手に握つたことが無かつたさうだ。バジニアと結婚した際人から百弗借り又懸賞小說に當選して同額を貰つたことがあつた位のものである。さうして彼の傳記者は、結婚の際借りた百弗は彼が返濟し無かつたとまで附加へて居る。又ポーはバートンといふ悲喜劇役者に雇れて、その所有の二雜誌に關係した時一週に十弗といふ報酬であつたさうだ。編輯上の意見が相違したのでポーは間も無くお拂箱に成つて仕舞つた。この時の事情を明かにするバートンがポーに與へた手紙がグスウオルドのポー傳に出て居る。それを讀んで見るとポーの方が悪いやうにも思はれる。ポーは人を攻擊することが人氣に投ずると信じて毒筆を縱橫に振ひ、さうして購讀者を增すことが出來ると思つたらしい……あはゝ、よく遣る編輯者の手だ。年齡から考へるとポーが三十歲位のことで、敏感な婦人性が激すると突飛な爭鬪性と一變し、彼を絕へず追掛ける貧乏は彼の感情の平和を荒びさせで無益に社會へ喧嘩を吹掛けたり同時代の文學者を罵倒させたりさせたものであらう。今日の米國とは雲泥の相違がある百年前のことだ。其時代には文學といふ職業はまだ發見されて居らなかつた。文學者に對する報酬などゝいふことは人が考へて居らなかつた。からいふ時代に産れて、ポーが背水の陣を敷いて文學で生活をしようと決心した點に物凄い武狹的態度があることを注意して遣らねばならない。若し彼が今日の米國に居るとしたならば、小說の報酬で自働車の三つや四つは買ふことが出來るかも知れない。然し端から見ると悲慘な彼の生活は彼の身上だ。悲慘な生活の物陰で彼の一生は前にも後にもないやうな恐ろしい色彩を出して居るとも云へる。バートンと絕緣した頃から彼は飲酒癖で非難され始めて居るが、それを攻擊したものはバートンばかりで無い。然し之れと全然反對に否定して居る連中も顯はれて居る所を見ると、彼は生前已に傳說を作りつゝあつたものと想像することが出來る。千八百四十三年六月十一日附の手紙で僅か五弗の無心をグリスウオルドにして居る所を見ると、バートンと絕緣後の物質的窮境は想像される。グリスウオルドの言葉にかう書い

た場所がある、『世に小數の天才があつて特種な敏感性を基調として居る、かういふ人は年の若い時代に放埒な生活をして精神的鋭氣を費やさない、しかるに段々年を取ると、普通な常態のよく整理されて居る生活の人ならば容易に達せられるであらうと思はれる點まで想像力を無理に刺戟せねばならないといふ渇望が湧いて來る。餘りに澤山な著名な人を不幸にも性質附けて居る伎工的感激に對する熱烈な思望は心的缺陷か或は必要といふべきであらう――失はれたものを取返へさうとする努力――事情を異にすれば當然達せらるべき筈の地位を再び得ようとする魂の爭鬪といふべきであらう。』かういふ言葉からなるポーの傳記者はポーが阿片を吸ひ始めたものと想像して居るが、前記の言葉をこの時代のポー即ち三十三歳位の彼に適用するとなると、彼の人生も、ポーとしても餘りに早く腐爛し始めたものだといふ感が多い。然しこの時代に於ける費府でのポーの家庭は、內的には平和な牧歌の一節である場合もあつたに相違ない。費府で持つて居つた彼の家は粗末なものであつたが、清潔と優雅の雰圍氣で滿ちて、隣人も穩良な連中のみであつて、彼の家へ入ると部屋の裝飾は安價なものばかしであつたとしても、これならば天才の住家に相應しいとまで想像された。グリスウオルドもこの生活狀態は養母即ち妻君の母であるクレム夫人の家政的伎倆が產みだしたものだといつて居る。實際ポーの爲めに喜んで家僕の役目を取つた守護聖徒は即ちこの夫人であつた。所が娘のバジニアの死後どう成つたかは明瞭でない。さうして一方のポーは所謂薹の立つたやうな年齢の未亡人の後を追掛けて居る。

ポーは彼が關係するに至つたいづれの未亡人とも兎角に相撲が取れなかつたと思はれる。それはどういふ意味かといふに、未亡人の誰れでも彼以上に世故に長けて居つた。詰り彼等から見ると所謂甘い男であつたであらう。然しポーには詩人的天才といふ目に附き興味あるアトラクションがあつて、彼等はそれに引懸つたものであらう。いふまでも無く彼等五人の中二人だけ除いて皆な文學婦人である。あるポーの傳記者は、『それや原稿の材料にする爲めであつた』など

ゝ皮肉をいつて居る所を見ると、所謂モデル問題は文壇を突破する近路であつたかも知れない。今日このことを思つて私は苦笑せざるを得無い。甘い男の事を戀愛世界では『完全な紳士』と女はいふであらう。さうだ、ポーの死後ばかりで無く生前でも、彼等はみなポーを紳士だと賞めて居るが、愛人は愛が破れても互に惡聲を放たないといふ西洋の習慣と共に、彼等自身の年齢を考へると、ポーに對する讃美も額面では受取れないかも知れない。然し彼は、『おゝ、御伽の王國から來れる愛の神(サイケ)よ』で始まる『ヘレンに與ふ』と題する戀愛詩を四十五歳の女に投付ける男だ。詩としてはポー作品中卓越したものに相違ないが、實際問題としてそれを受取つたヘレン・ホヰトマン夫人はきつと、『さう理想化されては末が心配だ』といつたであらう。もとよりヘレンは四十五歳でも女詩人であつて見れば、職業柄として『詩人の特權亂用』として微笑したかも知れない。

この女はロード・アイランドのプロビデンスに住んでゐた其當時相當に名を知られた女詩人の一人であつたであらう。ヘレンのポーに對する熱心は『文學的』から始められたものだが、ポーは直に結婚を申込んで居る所から察すると、彼の心にぶら下つてゐる振子は已に非常識に不規則に振り始めて居つたであらう。ヘレンは禁酒といふ條件で婚約をするに至つたが、彼は酒場への路から離れることが出來なかつた。結婚の日が決定された時、李白もどきに酒中の仙を氣取つたかはどうか知らないが、朝早く酒を飲み廻つて居ることをヘレンが知つて、斷然婚約を破棄して仕舞つたとある書物に書いてある。或は事實であるかも知れない。婚約を破棄後も彼等は交際を續けて居つたらしい事實は彼が死ぬ一年前にホヰトマン夫人へ送つた書簡で知ることが出來よう。『私が近頃耐へて來た苦悶は私を火で燒いた。故に私は今は强い。私を愛するものも又私を無慈悲に亡ぼさうとするものも知るであらう：：以前は狂氣のやうに好んだ興奮物にも今は絕對的に喜を持たない。私は歡樂を追つたが爲めに、生命や名前や理性を危くしたので無く、これは死物狂

の試みの爲めであつた：：身を苦しめる記憶から逃れ、不幸不正義人から負はされた不名譽の記憶から逃れ、堪へることが出來ない寂寞の覺官とある不思議な差迫つて來る運命に對する恐怖から逃れる爲めであつた。』これぞ眞に人に斷腸の感を與へる悲痛の文字である。例に依つて多少修辭癖の遊戲もあらうが彼の本音が響いてゐるやうに感ぜられる。この言葉を土臺として書いたものであるが、佛蘭西のボウドレールはかういつて居る、『米國はポーには一大牢獄であつたが、その中を左右前後に驅け廻つて熱病患者のやうに焦り、生れ更つて一層純潔な世界で呼吸しようと願つた。詩人として精神的な、醉拂ひとしても精神的な彼の內部生活の充實を唯一の目的として、それに反對する空氣の勢力範圍から逃れようとした。』ある批評家に云はせると、ポー終生の傑作は『黃金蟲』でも無ければ『大鴉』でもない、詩人ボウドレールに自分の眞實な後繼者を作つたことがそれである：：この事もこゝで序でに書添へて置く。

前に書いたヲスグッド夫人と絕交するに至つた背後にはエレット夫人といふ女の邪魔が潜んで居つたといふことだ。いくたりもの未亡人を手近かに引寄せて置いては、到底事件が圓滿であるべき筈が無いことは知れて居る。況んや陰口好きで惡戲と悋氣を交ぜて居る婦人連であるに於ては尙更だ。エレッド夫人もヲスグッド夫人も共に感情的な女で、英語でいふガツシヤーであつた。ポーとの交際から手を引いたヲスグッド夫人は可なり常識的な女で自分で自分の始末の出來た女であつたらしい。人は公然ポーからプロビデンスからアルバニーへと追掛けられたが、彼の愛を拒絕したと語つて居る。それでも彼の死後、私が前に書いたやうに、ポーの人格を辯護する感情に滿ちた辯辭を出して居る所から見ても、明瞭な理性の所有者であつたらしくも思はれる。

ポーが第三番目に深い交際を持つた女はアニーといふ既婚の婦人である。彼はこの女にも麗はしい詩を捧げて居るが、亭主持であつて是は實際の意味でのプラットニック・ラブであつたかも知れない。然しその當時の下馬評では、ホヰ

トマン夫人との破約はこの女から來て居る。アニーは元來が文學婦人で無く、たゞポーから眞實の戀愛を要求し、又信口な遣口で無くとも正直にポーを愛したやうな證據は上げることが出來る。それからホヰトマン夫人の破約の原因となつたといふことも、單に道途の說のみで無かつたかも知れない。自分が結婚されない時に、他をも結婚させ無いといふ女の心理狀態は決して了解に困難な事でないであらう。

最後にシェルトン夫人の番だが、この女は年齡も五十で、事務的才があつたのみで無く相當の資產家であつた。恐らく不縹緻だつたであらうが、身に附屬してゐる澤山の金は、產れて以來ポーが苦み通して來た金錢難から彼を救助して、安全な家庭に避難させるであらうと想像された。この婦人はポーの方から感情の馬力をかけて共愛を所望するといつたやうな型で無く、母性らしい溫い愛を彼に注ぐに適した。戀愛の惡戰苦鬪に疲れたポーは今や平和の風吹く蓬萊の離れ島で病弱な體を横へようと思つたのである。シェルトン夫人が女王である蓬萊島には陰口にかしましい女文學者は踏み込むことが出來ない。又此處には女の悋氣といふ刺のある薔薇も生長してゐない。若しポーがこの夫人に結婚したならば、どんな工合に彼の運命は回轉したであらうかは容易に想像されないが、少くも彼は四十歲を一生として告別するに至らなかつたであらう。ポーはシェルトン夫人と結婚の日を定めた。自分の金で無かつたかも知れないが、結婚の指輪も買求めた。彼は講演かた〲夫人の住地であるリツチモンド（ポトに取つては思出多き南部の都市だ）へ出掛けて、熱帶的色彩に輝く愛の光線を二三の友人と味つた。彼は夫人と結婚後リツチモンドに永住する目的だと夫人に語つた。夫人はそれを喜んだ。さうして共目的に對する用意があるといつて、彼は紐育へと北方さして出掛けたが、バルチモーアへ着し、ある酒場でしたゝか飲んで、そのまゝ旅行を續けることが出來なくなつた。所で、その頃大統領選擧騷ぎの眞最中で、バルチモーアへ着した翌日のことでもあらうか、自分の味方に投票させようといふ魂膽からか人々は彼を引き

づり廻はし酒場巡歴をおつ始めたものだ。さうしてポーといふ米國に一あつて二つと無い文豪は、千八百四十九年の十月三日、精神攪亂者或はアルコール譫妄者として公立病院に投入れられ、病院に三日居つて四日目の七日に彼は死んだのである。主治醫師のモランといふ男が何か遺言でもあるかと彼に尋ねると、彼は、『親切な友人でも來て僕の腦髓を打ち突いて貰ひたい』といつた、この言葉が最後であつたさうである。不世出の天才もかくて最後の幕を下したが、これ以上悲慘な人間の話は澤山あるまい。結婚する筈に成つて居つたシエルトン夫人は黑色の喪服を着たさうだが、ポーを取捲いた其他の未亡人は、『あなたはよく似合ひますね』といつたかどうかは記錄に傳へられて無い。

バルチモーア公立病院の醫師はポーの最後を詳細に語つてゐない。彼の死ぬ間際の容貌はどんな風であつたらうと思つても、それを聞くことが出來ない。然し彼が泥醉して病院へ擔込れた時の彼の容貌には、ベンダムが描いたポー肖像に出て居るある一種の強張つた不愉快な線が頤や首の邊に顯はれてゐたとであらうと思ふ。このベンダムの肖像は前記ハルビンの作とは異つたポーの心理狀態を描いて居る。丁度婦人連が見たポーと男子が批評的に眺めたポーとが違ふやうなものだ。ポー自身も自分を讃美する女に對しては、ベンダムが發見したやうな不愉快な線を顏に出さなかつたのであらう。然し彼が人間の意識を失つて病院に横たはつた時には、彼の惡い方面の特質が遠慮無く外部の容貌にさらけ出されて居つたに相違ない。夜を更かして賭博したり無茶に酒を飲む男の顏にはこの不愉快な筋肉の線が目立つて來るものだ。ポーの晩年には、特に男性に對しては、この野卑な一面が顯著な表現をして居つたであらうと想像される。何をこの不愉快な筋肉の線が語るか？　心の懊惱に對して脈味のない合戰を語つて居る。其處に劇的で挑侮的な野性がある。又奇怪な皮肉の冷笑がある……一言でいふと、人間が敗殘した場合の表象だ。晩年に於けるポーは正に斯くの如きものであつたであらう。然し女の讃美者と一緒に彼を『完全な紳士』として眺めることも正當である。又それと同時に、

彼の傳記者のあるもの丶如く全く反對の方面から彼を批判するのも間違つてゐない。ポーの場合ばかりで無く、人間は善惡邪正二つの性質で動いてゐて、それ等が影と日向の紋織を作つて居るであらう。又ポーにしても、婦人達が想像したやうな完全な紳士で無く、又反對論者が書いて居るやうに惡魔の權化でも決して無かつたであらう。彼も君や僕と同樣に、普通の人間的感情を持つて泣いたり笑つたりした一箇の人間に過ぎなかつたであらう、然し今日に於けるエドガー・アラン・ポーは濃厚にも劇化されて仕舞つた。

ポーは一部の批評家がいふ如く狂人であつたであらうか……これは興味ある文學問題だ。ある醫者の研究に從ふと、ポーは尋常普通の飲酒家で無く正銘の精神病者であつたさうである。更に專門的名稱を附けると、精神的癲癇病者であつたさうである。ポーは激烈な感情の發作で宇宙的恐怖に襲はれ、迫つて來る物質的衰亡の感念から逃れることが出來なかつた。彼は正氣の世界と魔攻めの世界の二つに住んだ、さうしてこの二重生活の文學的報告が彼の作品である………即ち彼が魔攻めの世界から目覺めた時に、彼は不思議な狂想的作品を得て居るのである。彼の不規則な思想、彼の混亂した猜疑、彼の誇張された迫害の恐怖……恐く彼が精神論者であつたことを立證して居るといふのであるが、それは例のノルダウを裏書した論であるに止る。私の友人はかう論斷して居る。『その當時の米國は瓦斯をともした野蠻國であつたに過ぎなかつた。一班の米國人は物質的發達を誇り、固く工業の萬能を信じ、時と金とは非常な尊敬を拂ひ民衆の愚説が輿論の名で勢力を振ひ、俗惡な日常智識が常識と云はれて何の反省も無く行はれた。所で、ポーには貴族趣味が多分にあつた。彼は米國の大不幸はこの貴族主義の缺乏にあると信じ、貴族主義を了解しないやうな國は美の崇拜を腐敗、縮少、遂には消滅させて仕舞ふものとした。一般米國人が自由を愛するのは是認すべきものであるが、その動機が低級な物質慾にあつたので、却つて眞實の自由を潰して居つた。不徹底な自由の横行は取りも直さず別な壓制、云

ひ替へると衆愚の限制に外ならなかつた。彼は即ちこれを自己の全生活にかけて呪つたものだ。ポーとして斯ういふ時代に又かういふ國に適應すべきかどうかゞ既に大問題であると云はねばならない。彼は始めからかゝる外界の束縛と常識的道徳から逃れて、純潔な精神の自由を自分の内部生活に求めたのである。不自然な死に達した程悲慘な孤獨味は彼の自業自得の奮闘的刑罰であつた代りには、彼にあつたと傳説されてゐる溺酒と狂亂とは――果してあつたとしても――一般的道學者や健全論者の指をも觸れることを許されない彼のおほつぴらの特權であつたのである。兎も角、かゝる並外れの病的微妙性を發揮して、並外れの愛美心の爲めにあれまで奮闘したといふことは、私等の見て以つて多とする所である。』更にこの私の友人は言葉をつゞけてかう書いて居る。『人によると生れ乍らにして或物に陶醉してゐるのがある。たとへばスピノサの如きは一種の神靈陶醉者で、神靈の火に溢れてゐたので他の何物をも容れる餘地が無かつた。又日蓮の如きもそれで、救世の念ばかりに胸が滿ちて、他派の教理などを吟味研究する暇を持つことが出來なかつた。彼等と等しく、ポーの一生は美と一つに耽溺熱醉したのである。ハリソンと云ふ人はかういつてゐる、『彼の腦髓はいつも熱病の如く熱し、一噴火山が活動して内面的感應性を有してゐたので、一滴の外的刺戟を加へてもそれを溢れ出させて、觸れるものを悉く破壞若しくは蹂躙したのである。』かくてポーは自分を滅亡させて仕舞つたものだ。故に彼の死は寧ろ他人の場合に於てよりはずつと銳敏な神經組織の挫折に在る。必ずしも泥醉の結果で無いといふ結論に達するのである。病的であつたとしても、かゝる病的は一般の常識家や、古典論者の全く理解出來ない全人的生活の勝利を意味する棕櫚の葉そのものであつて、これをかざしてこそ彼アラン・ポーの惡魔主義の藝術並に人生觀は發達したものである。』

私は簡單に附加へたい………『大鴉』にしても『赤い死』にしても又『ゼ・ハウス・ヲブ・アッシャー』にしても、果して狂人の力で書けるか。狂人は文學者で無い。其等の傑作を讀むと、最も氣高い藝術的技能力が結晶して金剛石の如

く輝いて居るではないか。世界の文學を通して、其等のやうな最も稀れに最も壯麗な作品の匹敵を求めることはさう容易な事で無いと云はねばならない。ポーが狂人だ……狂人になると彼の作品が書けるといふたら、文學者はだれでも喜んで狂者となるであらう。ポートハムに住んだ彼の隣人や乃至は八百屋や牛肉屋の主人達は輕蔑の眼で彼を眺めたであらう。又冷血な節約を重んずる賢い倫理的なニユウ・イングランド學派の連中は、最初から彼を毛嫌ひし賤しむべき不德漢と思つたであらう。然し凡眼に對する天才は詮くことの出來無い謎で無くて何であらう。ポーには貧乏が附き纒つた。彼は劣才の文學者が成功して居るのに彼の努力は適當に報酬されてゐないことを怒らざるを得なかつた。彼は出版者に不遜な横柄な態度を見た。彼は常に屈辱を感じた……彼が實際狂したとしても、之れは自然の結果であるといつて然るべきであらう。彼は宛もバイオリンの絲のやうなもので、並外れた彼の天賦が冷い周圍の空氣に觸れて前觸なく切れて仕舞つたものである。

ポーの飲酒乃至は溺酒位彼の傳記の上で問題に成るものは無い。然しまづ第一に百年以前の米國、特に彼が產れて育つた米國の南部では飲酒は必ずしも罪惡でなかつたことを注意せねばならぬ。由來南方人はセルチツクな感情を受けて、北部の人のやうに事務的に人生を整理することが出來ない、力强い爭鬪の上ではいつも敗北者であらねばならなかつた。酒を飲まなくつても、ポーは日常生活の上で勝利者たることが出來なかつたであらう。それに彼は飲酒癖を遺傳的に受けて少年時代に於ても既にそれと戰つたらしい。彼は生來好酒家であつたであらう、又酒を少量飲んでも直ぐ醉拂つた男であつたであらう。この想像は色々な彼の傳記者が支持する所となつて居る。貧乏な人間の飲酒癖は自然に借金となつて來る。憐れなるポーは下手に借金し廻つた男だ、彼は紳士的に借金する方法を知らなかつた。飲酒の上でも又借金の上でも彼は卓越性を缺いてゐたが爲め、詩や散文を藝術化させた如く成功しなかつたのが遺憾だと云へるであら

う。實に自分の天性を損ふといふ結果を出して居る。彼には人生の處理者として無くてならない釣合の力が與へられて居らなかつた。云はゞ彼は不道德で無く無道德であつたと云へる。生活の上では普通の觀念が麻痺して其區別を辨別することが出來なかつた場合が少くなかつた。かういふ場合になると、彼は自分自身を誇大視したに相違ない、又過度に發達して居つた彼の頭腦は適當に整理する能力を失つたに相違ない。飲酒は彼の想像を一層大膽にして、彼に理想美の面前で涙の尊敬を拂はさせたに相違ない。彼が内面的烱火を放散した場合は、人間の誇りを犧牲にしてこの理想的尊敬心を買つた時といふことが出來るであらう。彼は醉つてゐてもゐなくても一種の陶醉家であつたが、決して箇性の無い淫佚者で無かつたのである。彼は精神的に陶醉して地上生活から肉體を解放して、悲哀の快感と苦痛の愛を味つたのである。彼のかういふ恍惚は酒の福惠であつたか知れないと思ふ。世間には紙幣や銀行の小切手で舟を作つて池へ浮べるシエレーのやうな男もある。立派な殿堂に住んで日中と夜を取違へて生活するバイロンのやうな男もある。若し假に五年でもポーをしてシエレーやバイロンの地位に置くことが出來たならば、彼はきつと異つた傳記を後世に殘したであらう。人から彼の飲酒も攻撃の材料にならずに濟み、もとより人から借金する必要も無かつた譯だ。彼が金屛風を背景として酒を飲むことが出來る身分であつたならば、飲酒其事も彼の破滅の原因にはならず、所謂紳士らしく酒を樂しむことが出來たと想像される。無理して樂しむ『禁ぜられた快樂』であつてみれば、たれでも極端に走るといふことは自然であらう。

私は彼は下手に飲酒した借金したと云つた……實際彼は飲酒以上に借金の上で無細工であつた。彼は借金といふことは藝術の一種であるといふことを意識しなかつた……怜悧な彼には不似合なことだ。彼は一生を通じて不景氣な遊面作つた身容らしい低級な借金家で終つて仕舞つた。借金といふことはもつと優美で偉大な職業であるべき筈だ。ブリ

ンスレー・シエリダンつやふた有名な借金家に云はせると、ポーの如きは名譽ある職業に泥を塗つたものだと怒るであらう。ポーは日光が輝き花が笑つてゐる五月の一日といふやうな嬉しい顔で借金せずに いつも葬式に出掛ける托鉢坊主のやうな姿で出掛けた。彼が擯斥されたのに何の不思議があらう。それにたま〳〵人から電車賃位の少額を借りても返濟日に之れを返して居らない、又その上に彼に金を貸した人間を公然と攻撃して居る、……かうなると事件は愈々復雜になつて來るのは當然である。しば〳〵ポーに金の融通をしたグリスウオルドの如きも、千八百四十三年の夏費府に於ける講演で、ポーから彼を激烈に攻撃されて居る。かう攻撃して完膚なからしめて置いて彼は死ぬ時彼はグリスウオルドを自分の作品處理者(エキセキユター)として指名して居る。私はポーは馬鹿げた男だと云ひたい。彼には常識が無かつた。文學の上では常識の有無はさう問題とすべきもので無いが、日常生活の實際問題の上では適當な注意を常識に拂はないと間違つて來る。然しグリスウオドは處理者としてどの程度までポーを負傷させたであらうか。グリスウオルドのポー傳は不都合な書物であらう。彼を惡化して居る。彼を解剖の臺上に乘せて想像のメスを振ひすぎて居る。結果として、暗示に富んだ面白い讀物を後世に與へて居るが、筆法が餘り無同情であるので却つて親切な同情者の多數を作つたといふ不思議な現象を起したとも云へる。グリスウオルドのポー傳は彼の惡い汚い半面を暴露したものに相違ないが、彼の善良で優美な方面を誘ひ出す導火線ともなつたのである。傳記としてこの書物位雄辯に書いたものは無い。作者の敵意が取扱つた題目に雄辯を振はしめたものだ。だが、その爲めポー自身は損害を受けたといふよりは寧ろ敬意を表されたものだといふ見樣も無いで無い。ポーには永久に殘る作品がある。彼は傳記の二三冊位で殺される位な小文學者でない。グリスウオルドはポーの墓地に止めを刺す劍を突立てたと同時に月桂樹も植えたのである。ポーも彼に希望する所があつたとすると、それ以上何物でも無かつたかも知れない。

私は以前に『敵を愛せ』といふ一文を書いたことがあつて、中にかう云つて居る。「敵とは何だ？君の溌剌たる生氣を説明する最も有力な證人である。君の友人が君を百曼荼羅歎美するよりも君の眞實なる敵が一句君を攻撃した方が遙に君の眞價は説明される。君は敵の兇猛獰惡なる容貌に對し、又恐ろしく苦い言葉に對して感謝せねばならぬ。君は敵の落す一滴の藥品の力で、君の眞實なる特質が即座に表面に浮び出るのであるから、君は君だけでは完全でない。即ち君は敵を得て始めて「完全なる君」と成ることが出來るのである。君の敵は（外面ではどんなに見えようとも）君の爲めに顯はれたものだ。云ひ替へるとどんなに彼が君を輕蔑罵倒するにもせよ、又どんなに君を負傷させようとするにもせよ、彼は君の創造したものに外ならない。彼に毒惡な性質の呼吸を吹込み怨恨害心の活動を誘つたものは即ち君である。彼の存在は君に拂ふ敬意の表現と見ねばならない。君は彼が君の特質ある意義を否定するのを見て微笑して然るべきである。彼の否定するのは即ち逆に反對の側から君を是認して居るのだ、彼は君を殺してしかも君を活かして居る。さうして彼を作つたのは誰でも無い即ち君だ。君の知らない眼に見えない半面が即ち彼として出現したに外ならぬ。僕は敵の歎美者である。敵の歎美者であるのは即ち僕自身の歎美者であるからである。僕は極端の主我論者である。個人主義者である　僕はこれを誇るものである。僕は敵を持つてゐるのを一生の光榮と考へて居る。僕の存在は僕の敵が説明して呉れる。』さうだ……ポーの存在を最も明瞭に説明したのは即ちグリスウオルドである。ポーはどこかゝらグリスウオルドを『理想の敵』として祝杯を上げて居ることであらう。

今私はずつと逆に戻つてポーの生立から語りたい。彼の兩親共にきまつた家の無い田舍廻りの旅役者で、もとより高級の藝術家で有りよう筈が無い。エドガー（文豪ポー）共三人の子供を連れて、興行の爲めリッチモンドへ舞込んだのはいつであつたか知らないが、千八百十一年一月ポー夫人は病褥に就いてこの先きの旅行を續けることが出來なくなつ

た。それでそのまゝ愚圖〳〵リッチモンドに居着いたものらしい。この旅役者の一家がどんなに貧苦に責められたであらうといふことは容易に想像される。三人の子供が寄邊無い孤兒となるに至つた時、エドガーは土地で裕福な煙草屋と知られたジョン・アランに養はれることゝ成つた。エドガーは男振りのいゝ子供で、辯舌擧動共にませて居つた。この點は子供の無い金持の奥さんを喜ばした。これまで腹をすかし通しで生きて來たエドガー・ポーは、養家の名前アランを呼名に貰つて、一躍芝居に出て來る小公子となつた。實際アラン家に於けるポーは、手の込んだ玩具の一種で、養父母は彼の早熟を側から感服して徒に彼の片意地を發達させた。小さい子供のポーが食卓を前に立上り手に酒杯を持つて、『諸君乾杯！』と叫んだなどゝいふ傳説まである所を見ると、彼の養父母の教育法がどんなものであつたかは想像される。然し貧乏が福裕と舞臺が一變した丈けで、精神的にポーは幸福で無かつた。

六歳の時彼は養父母に連れられて英國を訪問した。養父母は彼をストーク・ニユウイングトンにあるマノア・ハウス・スクールに入れて自分等丈け米國へ歸つた。ポーがこの學校に於ける經驗は彼の小説『ウヰルリアム・ウイルソン』に書かれて居るが、コラリッヂのクライスト・ホスピタルの追憶に匹敵すべきものだと云はれる。ませた文學的なポーの心が如何に古風な英國で動かされたであらう。ポーの英國に於ける小學校生活を詳細に寫したものだと想像されるウイルソンの學校生活は引用すべき價値があるが、最初の部はかう言葉で書き始められて居る。『私の最も早い學校生活の追憶は朦朧とした英國の一小村落に於ける大きな纏りの無いエリサベス時代の家屋に關聯して居る。巨大な瘤のある樹木の澤山が立つてゐて、すべて家は極めて古い。實にこの尊敬すべき老村落は夢のやうな魂で慰められて居るといつたやうな場所だ。今私は想像で、樹蔭の深い廣小路の氣分を爽快ならしめる冷氣を感じ、數限りない灌木の香氣を吸ひ込み、説明されない喜びで、毎時打ちだす寺院の深い空虚な鐘の音が不意に陰氣に響くのを、浮出細工の尖塔をくるみ

眠らせる薄暗い雰圍氣の靜寂を新く感動することが出來る。』『それからこま〴〵と古い不規則な學校の家屋や庭園や周圍のことがポー一流の名文で書いてある。

彼は十二歳の時英國からリツチモンドへ歸つて、直ぐ土地の學校へ入つて羅甸語や佛蘭西語を勉强すると同時に運動競技で筋肉を練つた。彼は擊劍家で又水泳に巧であつた。ある六月の一日、彼は一時に二三哩流れる水を切つて七哩以上も泳いだこともあつたさうである。かういふ運動家に相應しい明るい健康性を燻し銀色に裏付けて居る彼の婦人性は、彼に初戀ともいふことが出來る心持を與へる事件がこの頃起つた。ある日彼は同窓者の家を訪問した所、その男の母親に親切な言葉を懸けられて『最も偶像崇拜的な純な理想的な戀愛』を感ずるに至つた。この婦人はポーの少年の悲哀を共に悲み、動揺した感激し易い彼の少年時代を照らす愛の燈明臺となつた。然るにこの婦人は急に死んで、ポーの憂愁は言葉で語ることも出來なかつたであらう。彼は幾ケ月間は夜な〳〵彼女の墓地を尋ねて熱い涙を墓碑に注いださうだ。この女が彼が一生大事にして書齋へ懸けた『レノーア』(肖像)で、彼はこの初戀に歸つては戀愛の理想をしみ〴〵味つたのであらう。彼はこの後十七歳の時バジニア大學に入學して居るが、この頃から身分不相應に賭博に耽り始め、一年の中に二千五百弗といふ賭博負債さへ拵らへるに至つた。養父のアランは商人である。學生としてこの不始末を怒つたに相違ない。又如何にポーがバイロン張りの詩の天才を誇つたにしても、このことが養父に對する何の害にはならなかつたに相違ない。千八百二十七年の春彼は幕斯敦へ出奔して、印刷者であつた友人の少年を手に入れて處女詩集を出版したが何の反響をも時の文壇から受けることが出來なかつた。彼はその年の五月にエドガー・エー・ペリーといふ變名で志願兵と成り米國の軍籍に入つたが、その動機は『食ふ路を求める』といふ散文的のものであつた。彼は今バイロンの黒いマントを捨てゝ軍人の外套を着たが、この外套を彼は行儀よく着たものらしい。彼は品行方正だといふことで、

千八百二十九年一月に聯隊附き副官軍曹に陞任して居る。所がその翌月養母の死を聞いて依願免職となりリッチモンドへ歸つた。

翌年即ち千八百三十年一月に彼は學生としてウエスト・ポイントの兵學校に入學して居るが、年齢も最早二十一歳、しかも活社界の爭闘が齎らす冷い味も多少體驗して居つたから、彼は假想戰場の軍略に青年の興味を注いで居る他の學生とは異なる所があつた。學生連中とウヰスキーを前に置いて雜談をする無邪氣な時間から退くと、彼は既に痼疾になりかけてゐた寂莫に襲はれた。さういふ場合に彼は讀書し、又作詩の上に虹色の光澤を放散し始めた。佛蘭西語と數學に彼は自信があつたさうだが、練兵點檢夜番などゝいふ軍隊業務は六ケ月の經驗で澤山すぎるといふので、彼は軍人希望を捨てるに至つた。兵學校を止めることに對して養父は不同意であつた。それで彼は故意に軍務を怠り、進んで軍法會議に懸つて入學の翌年、詩集の原稿を風に靡かせて兵學校の門を出た。

養父が金錢上の補助に乘つて呉れないので親類を頼んでバルチモーアへ出た。そこで第二詩集を出版したが身の振り方に對して何の役にも立たなかつた。バルチモーアで彼は書記になつたり學校教師になつたりしたが、千八百三十三年は彼の『着物の無い食ひ物の無い』年で貧乏を詳に經驗した。彼は『バルチモーア土曜週報』の懸賞に應じて、『徳利から出た原稿』と『ゼ・クリシアム』が散文と詩で兩方とも當選して合計百五十弗の賞金を得た、又その上ケネディといふ選者の友情まで得て、食物や着物を與へられ彼の馬に乘る自由も貰つた。丁度この時分から叔母のクレム夫人と同居して居つたが、娘のバジニアは僅か十一歳の小娘に過ぎなかつた。

千八百三十四年に彼の養父は死んだ。彼はリッチモンドへ急いだが、養父の遺言中には彼の名前は書いてなく、彼と養家との關係は全く切れて仕舞つた。ケネディがリッチモンド發行の『南方文學使者』の編輯者に對し彼に與へた紹介

狀の中に、『筆が立つ男だ……古典的で學者風だが。彼に經驗が無く指導者を要する、然し君の爲め役に立つやうになることは疑はない……この青年は極めて想像的で、少しく恐怖に捕はれて居る』といふ言葉が使つてある。ポーは千八百三十五年からこの雜誌に關係し始め、一年も立たない中に實際の編輯主任となつて二三百部の賣高から五千部に一躍させた。彼が書いた評論文は時の文壇で新機軸を出したもので、偶像破壞的で元氣旺盛な攻擊的な彼の筆法は幾多の文學者を恐れさせた。ポーはクレム夫人とバジニアをリツチモンドへ招いて、バジニアと公然結婚したが彼女はまだ十四歲になつて居らなかつた。

千八百三十七年に彼は『南方文學使者』との關係を斷たれるに至つたが、その有力な原因は彼の泥醉の惡習慣にあつたとせられて居る。その證據として論者は雜誌の所有者ホワイトがポーに送つた書簡を引用して居る。その中にかういふ言葉が使つてある、『君が正直に約束を守るといふことに關しては何等の疑を持たない。然し君が一度でも町を步くと、君の決心は衰へ本性を失ふに至るまで酒を飮むであらうことを恐れる。』

千八百三十八年に費府へ移り、その翌年から『バートンの紳士雜誌』の副編輯者として關係し始めたが、間も無く所有者のバートンと喧嘩して手を切つたことは私が前に書いて居る。彼は『グレーハムの雜誌』と關係を結ぶことになつて、その雜誌へ『モルグ街の殺人』や其他の小說を揭載した爲め、雜誌の賣高は六千部から三萬七千に飛んだといふことである。この雜誌から彼が受けた待遇は惡くなかつたに係はらず、『主人の命令で、人間の頭腦を銀貨に鑄造し直すことは辛いものだ』の言葉を捨臺詞として再び貧乏の中に突入して行つた。彼が千八百四十四年に紐育へ出た時、彼の嚢中には殆んど一文も無くその上妻のバジニアを連れて居つた。彼の筆力は紐育に於ける新聞や雜誌の編輯者を喜ばせたが、彼の努力に對する報酬は零碎なものであつたに相違ない。千八百四十五年一月は彼に對する赤字口であつた……

彼の『大鴉』は『ゼ・イブニング・ミロウ』紙上に出版された。詩人としての彼の名聲は成つた。彼は一足飛びにその當時最も著名な文學者と成つた。彼の『大鴉』は、ある評者のいふ如く國民的の鳥となり、獰惡な運命の表象を嘴に啣へて人間の魂に食入つた。この一篇位ポーが自分を支配し得た詩は無いのであるが、この詩に表現されて居る想像は必ずしも高尙なもので無いかも知れない。鬱氣人に迫る所があるが、技巧的な不自然さが眼に付いて抒情氣分が溢れないではあるまいか。

詩とは何であるか？　人間共有の感能を通じて自然に發する言葉である。詩の範圍は深くて廣いけれども、その精神は絕對的であり原始的であるべき筈だ。詩は認識することが出來るけれども、到底摑んで以て分類することが出來るので無い。自然の原理を暗示する一表現、人間感激の叫びを暗示する一表現として詩を假定し得るのみである。故に詩人はポーと同樣、『詩は私に對しては感情であつて目的でない』といふであらう。百年以前に於ける米國詩壇の思想的傾向を考へると、ポーのこの宣言位大膽なものはなかつた。この宣言は、倫理の法城を守り思想の殿堂に默禱するニュウ・イングランド學派に對する挑戰である、『美の旗下に集れ』の開戰布告である。

再び私はいふ、詩とは何であるか？　强制的に人間に迫る一つの力である、精緻ではあるが極めて力强い一の生命である。人間が本然的に持つて產れた原始的な力である。詩の取る形は變幻自在で捕捉し難い……然しそれを捕へるものは眞實の詩人である。然らば如何なる力で詩を捕へるかといふに、言葉によつて捕へるのだ。詩は言葉の表現で具體化される。具體化された時、詩は金剛石の如く光澤を放散する……其光澤は反照し又屈折し更に一層麗はしい光澤を示現する。ポーは一斷案を下していふ、『詩に長篇は無い、短い抒情詩が即ち眞實の詩である』と。正にその通りである。

眞實な想像は創造的である如く言葉の表現も創造的で無ければならぬ。詩は發明である、故に詩人は創造者である。創造の力があつて始めて人間本來の感情を撰擇し整理することが出來るのだ。たゞ之れを感ずるのみでは創造で無い…………即ち藝術で無い。實感の上に想像の世界を作りだす、或はその世界が存在するといふことを暗示させるのは創造者の仕事である即ち藝術家の價値である。天下に詩人多しと雖もポーの如くこの資格を具備したものは無い。ポーの敏感性は驚くべきものである。人が之れに觸れると眞に美のラプチュアに入るであらう。彼は倫理を敎へるものでない、又思想で宇宙を極限するものでもない。彼は敏感な人間の心理で新しい感情の世界を發見させるのである。再びいふが、彼は眞理を目的としない、彼は美の表現を目的とする彼は美の修行者である美の音律創造者である。彼位音樂を重大視した詩は無い。彼位形而上學を嫌つた詩人は無い。彼は所謂レーキ・スクールの敎訓式に反對した。實際にこの冷い規則正しい式樣が何程コラリツヂなどを傷付けて居るか知れない。彼は詩を制限した、然しそれは彼として賢明であつたであらう。彼は制限された範圍で自分の力を有利に使用して『撰ばれた詩』の世界を完成した。即ち彼は音樂の力でその完成を仕遂げたのである。彼は詩人中最も完全なバイヲリニストである。私共はその聲を聞いて、世に最も珍らしい美の哀調に觸れ未知の不思議な靈の王國の中へ入つて、嘗て失つた人間の單純性を取返へすことが出來るのである。彼の詩には巨大で微細な雰圍氣が溢れて居る。彼は單一の詩人では無いが、單一のムードの詩人である。彼は官能的であるが、彼の官能が靈化されて永劫の情調となつて居る。

批評的に詩人としての彼を見ると、彼の價値は處女詩集で既に定まつたものと云へる。十八歳の時の詩集を二十歳の時に修正し、ウエスト・ポイントを去つてからも第二詩集をまたもや修正して居る。比較的長い作にはバイロンとムーアの影響がある。さうして詩の精神から見るとシエリーの暗示がある。其後作つた『眠れるもの』『夢の中の夢』或は

『レノーア』の原詩であらうと想像されるものが、既に初期時代の詩集に包まれて居る。『定罪された都』や『ニスの溪谷』も二度まで顯はれて居る。然し彼のスタンダート詩集としては勿論千八百四十五年の『大鴉と其他』を開けねばならないが、一生を通じての作品は數の上でコリンスやグレー以上で無い。又取扱つた題材も極めて少數に限られて居る。今私は彼の名篇いくつを取つて彼の價値を詳にしたい。

諸君は彼の『海中の都』を讀んだことがあるか。人は直にターナーの繪を想起させるものだといふであらう。此處に不思議な都會があつて死が王座を占めて居る。この都を飾る靈祠宮殿或は高い塔は私共地上世界のもので無い。吹く風も共等に近寄らず茫漠たる天空の下で觀念の靜寂を味つて、憂愁の水で取捲かれて居る。この神祕的な都は光線を受けて輝いてゐるが、その光線は天より來るので無く、靑ざめた海からの光線である……この光線が小樓や尖塔や圓屋根を目掛けて流れのぼるのである。澤山なる奇異な靈祠を目掛けて照りのぼるのである。靈祠を取りまく長押の彫刻帶は中世紀の樂器を叢茱や葛と縫い合せて居る。見よ、この都の高慢な高い塔の上から、死が巨人の如くに見降して居るぞよ。海は恐ろしく物靜かである……いな、動く、都の塔は少く海中へ沈まんとする……鈍重な潮は赤く光り始める。今や都はこの世のもので無い悲鳴を上げて海中へ／＼と沈んで行く……地獄は數の知れない王座から頭をもたげて、沈み行く都に敬意を拂つて居る。

この詩の如きは悲壯を極めたエフエクトの詩と云はねばならない。此處に暗示的な概念が音律的な言葉で恐怖と陰鬱とをどしん／＼と運んで來るのを感ずる。此處に厳粛な悲劇がある。又精神的な深い影を永劫の上に投げて居る。これは回復し難いもの、再び來らないもの表象で無くて何であらう。だが諸君が月下で失神する花が夜の催眠歌で眠るやうな優麗な詩を彼に求めるならば、私は第一に『眠れるもの』を擧げるであらう。

六月の眞夜中に神秘的な月が天に懸り、それより發散する煙霧は宛も阿片のやうに人を麻醉させ、一滴〳〵柔かに山上に落ちさうして谷間に忍込む時、經帷子に包まれた美人が眠つてゐる。長く垂れた毛髮のなかに蒼白の顏を横たへて居る。あゝ、この美人は何を夢見てゐるであらうか。美人の眠れる部屋の窓は開かれ、其處から魔法使のやうな無責任な空氣は流れ込み、部屋の床では幽靈が立つたり座つたりして居る。美人は眠る……彼女の眠は永劫のものであるだらう。彼女は安然な神の御手の中に握られて居る。彼女の眠つてゐる部屋は更に神聖なもの更に憂欝なものと一變して居る。彼女は平和に永遠に閉ざされた眠を動かさずに眠るであらう――詩人がこの詩で要求する所は幻滅の恍惚境に外ならない。

諸君は『勝利者の虫』を讀んで人間生活の絶望に壓されるであらう。今や天人は涙に濡れた顏を面紗で包み、劇場に集つて希望と恐怖の芝居を見て居る。登場する道化役者は神樣の扮裝をして何事か語るが、元來『目に見えざる悲哀』といふ舞臺監督の指揮に從つてゐるに過ぎない。然る所、眞赤な奇怪な一物が場面へ現はれて苦悩し始め、居ならぶ道化役者を食べて仕舞ふ。燈火は消える、大暴風雨の凄まじさで幕は下る……見物の天人連は、『あはゝこの芝居は「人間」と題する悲劇で、その主人役者は「勝利者の虫」といふのだな』と耳語する。この詩に於ても『大鴉』や『海中の都』と同樣に、ポー一流の運命論が斷定的に表現されて居る。私共はそれを批判する必要が無い、たゞこれを讀んで奇怪感激に觸れゝば足りる。私の好む一篇は『幽靈の出る家』である。この詩には變幻多樣の綺譚がある、又整頓された麗はしい音樂がある。『失はれた魂』の意想がこの詩位想像的に取扱はれたものは無い。もしそれ諸君が音律の上で彼が最高潮に到達した場合を見ようとするならば、諸君は『アンナベル・リー』と『鐘』へ行かねばなるまい。前者は昔むかしのその昔に海岸の王國にゐたといふアンナベル・リーに對する哀悼歌である。後者でポーが吐出す名詩人の言葉

は、銀の鐘黄金の鐘眞鍮の鐘の鐵の鐘のやうに、紙の上で狂亂の響を發して居る。私共はこれを讀むとその意味が何處にあるかを尋れない、鐘聲の驚くべき擾安に感染せられる自分の心も狂亂するのを感ずるであらう。ポーは實に旋律の天才である。彼のやうな詩人は再び顯はれないであらう。時代は變化する、變化する時代に連れて文學は變化する詩は變化する。然し變化した今日の時代は賞讃すべきものであるか。それは別の問題として論じなければならない。

私はポーに關して思出多い幾多のものを持つて居る。ポーの詩集と芭蕉の句集を懷にして北米加州ヲークランド近くのミラー山莊に入つたことも、今日から見ると最早や二十年前の昔話だ。黄金の敷物をのべたやうに咲き亂れた毛莨や罌粟の上で、私は時間を忘れてポーを讀んだ。悲哀の言葉なき歌調を天上の月が谷間の樹間へ送つた時、私は耳に流れる銀鈴の水音を聞き乍らポーを讀んだ。ポーの『ヘレンに與ふ』といふ詩にある如く、園庭の薔薇が月と戀愛の沈默を交換する時、私は自分がポーでは無いかとさへ思つたことがあつた。私の最初のポー讃美はアンナベル・リーの哀調で始まつたことはいふまでも無い。私は何時の間にやらポーの大部分の詩を暗誦することさへ出來て、ポーの言葉で自分の感情を書くことさへあつた。さういふ場合に、私は左の詩で書いた……私はポーの暗示を受けて英詩界に入つたことを後悔するもので無い。

『神秘的な煙霧の春、
色彩の阿片的な香氣、
南無三、私は私自身でない。
朦朧と霧を帶びた奇怪な香が

私の眠い魂から立ちのぼる。
私は胸に霧を捲きつけ、
たつた一つの眠の星の如く、
暗く慄く柳の線の中で、
私は獨り佇んで居る。

（以下十行略）

この詩が出版された時、これはポーのユラリーの剽竊であると攻擊されるに至つた。私はその時公開狀を發して、自分は憚り乍らポーである少くも第二のポーであると書いて米國人を驚かしたこともあつた。あゝポーの追憶！今日の私にはさういふ宣言をする勇氣が無い、又其資格も無い。私は變化したことを悲しむもので無いが、いさゝか寂寞を感じない譯に行かない。

詩人である私の權利として、ポーの詩に重要な興味を持つことを讀者は許して吳れるであらうと思ふ。然しだ、若し彼に散文が無かつたとしたならば、文學者としての彼の名聲は今日の如く大なるもので無いかも知れない。實に彼の短篇小說には理智と想像の紋織がある。其等は希臘の體に燃える情熱の東洋的衣裳を着せたものだ。現實と神秘との間に戰慄する魂の主觀的創造だ。彼の短篇小說も詩の一種で、所謂散文詩に屬して居る。心の冒險を單一な物語人の經驗から語らしたもので、推理的に空想の一形式を作り、恐ろしいモルビッドな心理狀態を原始的に表現して居る。詩に顯はれて居ると同樣、短篇小說に於ても精神の超絕と理智の飛躍を語つて居る。靈的なあるものを取扱つた場合は、彼は心理學の領土に入つて居る。さうして目に見えない世界への暗示を伺つた場合は、彼は確に發明者の神秘を操つて居

る。

ポー對ホウソーンは米國文學に於ける最も興味のある問題の一である。彼等は南と北とで米國の容を照らした二つの彗星である。ポーは詩に長詩が無いと信じたやうに、小說も短篇で無ければならないと思つたかも知れないが、讀者の興味を永く永續させ之れを繼續する力が無かつたともいふことが出來よう。之れに反して北方の人ホウソーンは文學的永續性を努力の忍耐で得て居る。彼には力がある、腰の强い粘着性がある、最初は派出でないが段々信服させて呉れる篤實な所がある。然るにポーは南方の人である、暖和な空氣が自然に彼の感情を放縱自由なものにして、瞬間的に爆發飛濺させる。ホウソーンの洞察力は深いが、ポーの魔力は他の模造を許さない。彼等兩人共稀れに産れるロマンサーで、違つた方角から文學の本陣を攻落した文豪である、さうして作品を簡單明瞭な基調に置いて、別々な特種の手法で完全に表現した藝術家である。作品の精神から見ると、ホウソーンの方がポー以上に詩的であるけれども、外面的色彩と感情を神秘化した點で後者が前者に優つて居る。ホウソーンは平凡な日常生活の中からでも神秘を發見して、捕へた神秘を美的に具體化する不思議な手腕があつて、作品の性質は男性的であるが極めて柔和なアスペクトを持つて居る。然るにポーは精緻な女性美で自分をデカタン的墮落に投げ入れて居る、さうして普通人の耳が聞くことも出來ない諧音を空中に聞き、普通人の目が見ることの出來ない感情の秘密を人間生活に見て居る。一言で蔽ふと、ポーは米國文壇の異端者だ。

私は彼を異端者だと讃美してこの評論を終る。



京都と西鶴

（昔を今にしのぶ浮世草に　附(つけたり)、京男京女島原のことども）

石田幸太郎

　談林派の宗匠として一向旅行したらしくもない井原西鶴が海内至る所に取材して「見て來た噓」以上の詳細な世相報告を筆にしてゐるのは些か奇觀である。しかしその地方地方の名稱をどう入替へても格別問題ではないらしく、結局机上の想像と推定しても故障はないやうである。江戸でさへ、さう度々は行つてゐない筈で、吉原の傾城話など相當眉唾物である。ひとり京都のみは觀照把握確實俊敏を極め、今日の我々をして一々敬服拜跪せしむるに値ひする。思ふに彼は京都を最も鮮かに描破してゐるといつていゝであらう。

　却て思ふに大阪の挿話は概ね拙い。京都程には鮮やかに手際よく描寫し得てゐないやうである。結局大阪人たる彼には大阪は描けなかつたのではないか。

　目馴れ過ぎてゐたが爲に要領を逸し、觸れ過ぎてゐたが故に明確な印象を受け得なかつた、とも解釋出來るし、又在住の關係上、大阪の事、兎角差合ひがあり、樂屋があつて筆が暢達を欠いたとも見られる。

　事實或は京都に最も多く取材してゐるし、又之を縱橫無碍に描寫し盡してゐる。名篇も亦京都に關したものに最も多いやうで、江戸に取材した與太話とはもとより比較にはならない。

　さて今、私の前に置かれた問題、――西鶴の描いた京都と我等が今見る京都、元祿時代の京都と大正の京都、今昔二百數十年の距離である。その間に怪しい絲をあやつつて京都の推移の跡を見やうとする。問題は大きく、絲は極めて細い。今と昔の緣がよし切れやうとも私の知つたことではない。

一、京の街

　「貞享元祿間京都大繪圖」を見るとその頃の京都は今の京都と大差なく、その頃の方が、むしろ御所から北の方など家が建てつまつてゐたやうで、今更に京都の變化の少ないのに驚かずには居られぬ。尤も近年郊外など非常に開けて來て都市計畫とか何

とかいつてからは殊に發展が著しいやうであるが、私の中學生の頃などどうも却て元祿頃とは地域も狹く人口なども少なかつたやうに思へる。むろんこれには皇居奠都による打撃もあらうがそれにしても進化しない程度がひどすぎるやうであろ。本朝二十不孝の「今の都も世は借物」に西鶴は斯ういつてゐる。

今の都を淸水の西門より眺め廻せば、立續ける軒場の內證は、景色朝日に映りて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豐なる御世の例、松に音なく、千歲鳥は雲に遊びし、限も無く打開き、九萬八千軒といへる家數は信長時代の事なり、今は土手の竹藪も洛中になりぬ云々

この九萬八千軒といふ數が信長時代の戶數だと云ふ彼の出駄羅目な斷定を信ずるならば、其の頃は凡そ十一二萬の戶數があつたわけである。しかも今日の京都市の戶數はいくらであるか、僅かに十二萬七千そこ〳〵に過ぎない。

西鶴のこの說は無論筆の調子がすべつての誇張ではあらうが、それにしてもその頃既に現在と比較して僅か三萬に滿たないだけの差異しかなかつた程あつた事を思へばその發展の遲々たる事驚くべきである。――いや、元祿時代からあと數十年間は猶益々發展して行つたのであつて元祿の頃にはまだ西、南、北に御土居（即土堤で取圍まれてゐたのである。東の方だけは

京極通即寺町通東にもとあつたのを東方の發展につれて取こわしたらしい）のあつたのを寛永年中からそれら土堤外の耕地を宅地とした、都合上とう〳〵之も取こぼつてしまつたらしい。して見れば寛永前後は更に一段發展した筈であるが、その後漸次文化の中心が江戶に奪はれるやうになつてからは京都も全く發展を阻止されたものと見える。京都の市街が萬人の知る通り概略碁盤目のやうになつてゐることは無論昔も今も何の變ることとはなく、その頃出版された貝原益軒の「京都めぐり」などを見るとお上り様のために京の町はどうさがすかなどいふことが詳しく說かれてゐる。

高瀨川は既に德川の初期に開鑿されてゐるのだから無論この頃はこゝに舟曳く聲が聞けたわけである。但しその名は男色大鑑の「忍びは男女の床違ひ」に四條通高瀨川の橋詰に「吉彌白粉」を商る店があつたといふことを書いてゐる位で外には一向見當らない。

この高瀨の舟も廢止になつてから今に幾星霜を經たであらうか。私は子供の時分よく先斗町の伯母の家から木屋町に朝早く誰もまだ眼を醒さぬ先に起き拔けて川岸に出かけた。霧の中をピカピカ靑く光らせて走る電車、のんびりした船頭の掛聲が面白かつた。船頭が曳綱を曳く便宜の爲に平地から四五尺も拔ち

上げたこの所獨特の石橋が幾つも幾つも並んでゐた。その橋向ふの西木屋町には當時人氣のあつた瀬川小次郎などいふ新派の役者の風呂歸り姿がよく見受けられた。――その瀬川が今どこの田舎を放浪してゐるのか皆目知る人がない。唯一つ腐つたまゝ取殘された高瀬川は今にその見る影もない醜骸をそのまゝに横へてゐる。

先斗町今京都で祇園に次での花柳街でいかにも狹斜の巷二つくりの感じの土地であるが、こゝに藝妓が置かれるやうになつたのは文化年度のことで西鶴の時代には極淋しく、小宿や隱宅みたいやうなものがあつたに過ぎない。世之助が零落してこの小宿に住んでゐたことが一代男に出てゐる。

この先斗町といふ名がカルタのポイントから出てゐるといふ事は最近新村出京大教授の「南蠻更紗」によつて初めて知つた成程西鶴の本朝二十不孝、先斗に置いて來た男の條に歌留多遊びで先斗に二十兩づゝはねられたといふ記事が歴然と出てゐるのだから、之に誰も氣がつかなかつたのは些かうつかりした話である。（昔こゝにポルトガルの南蠻寺があつてそれをポンタスといつたのでそれからの名だなどとよくまことしやかに田舍出の學校友達にふきかけてやつたものだが考へて見ると罪な話であつた。）又貞享元祿間京都大繪圖を見るとなる程この土地は今と違つてグツト劍先狀に川の中に出つ張つてゐて加茂川などもこゝで弓のやうに歪んでゐる。いかにもスペードのポイントに似た形であつた。私はこゝにこうしたエキゾテイツクな名稱を附した當時の都人の心持とカルタのエースを胸に描きながら飽かず古臭い地圖に眺め入つた。

すると又もう一つ私に取つて新らしい發見がその繪圖から獲られた。それは四條河原の人向の人達が住んでゐる。從つて下京の方が何かにつけて上京より活氣のあることは確かで、上京は物靜かに、上品一方といふ傾向は著るしい。元祿時代に於てもその點殆んど同じであつたらしく、西鶴も「萬上京と下京の違ひあり」と耳功者なる人の言へり、明衣染の花の色も移りて小町踊を見しに、里の總角なる振袖に太鼓の拍子、四條通までは靜かにゆたかに、いかさま都めきけり、それより下は、町筋かぎりて、躁せはしく、足音ばたつき、夕涼に就てで、今は勿論なくなつてゐるけれど、十數年前には猶行はれてゐた。それは確かに四條の川上だつたと覺へてゐるのにこの地圖には川下數町が中洲になつてゐる、だから西鶴の頃には今の西石垣の前に川涼みがあつたわけである。

上京と下京、今日でも猶京都はこの兩區に分たれてゐる。中

京などいふのは公式な名稱ではない。下京は概して商家に多く上京は概して有閑階級の勤かくも變るものぞかし（一代女、舞曲の遊興）といつてゐる。上京には今でも長者町などといふ町名があるが當時富貴長者が多く住んでゐたものらしく、長者町の表盡はしば／＼彼の筆にのぼされてゐる。

二、洛外の情趣

秋は京都に歸つて以來、隙ある毎に洛外の寺を訪ね、近郊の自然を探つてゐる。子供の頃の思ひ出をなつかしみ、思はぬ新しい勝景の發見に胸をおどらせる。それは私に閑寂な氣分を味はしめ、おちついた心を與へた。それはどちらかといへば芭蕉の心境を追ふものといつていゝであらう。

芭蕉も西鶴も同じく元祿に生きて素晴しい仕事をした人である。しかしその仕事の隔たりはどうだ！どこに一點本質的に似通つたところがあるか、自然を心とした人と雜閙の中に生きた人、閑寂を樂しんだ俳人と歡樂を追ふた小說家、同じく俳諧の道には入つたがしかし唯同じ俳諧の道に在つたといふことの外性格的にも藝術的にも何一つの交渉も持つてゐない二人の對照はどうだ。その西鶴の描いた境地を今芭蕉の心を心として眺めやうとする。（笑つてはいけない。古の聖賢も既に顰を學ぶ者は贅なりといつてゐる。どうもぴつたり來ないのは當方にも判らないところである。

私はつい此程洛外の龍安寺に出かけた。若い畫家と二人、冬の内にしては暖い午後だつた。案内を乞ふと可愛いゝ七十恰好の婆さんが出た。私は何心なしに一代女にある「世間寺大黑」の條を思ひ出した、禪寺へ來てから雜念がおこるやうでは駄目だと我を叱つて心を落つけて方丈に通りそして靜かに相阿彌が作つた俗に虎の子渡しといふ象徵的な庭に對した。この庭は五十坪程もの廣さがあらうか、一面に白い砂が敷かれた中に大小十五の石が五つ、三つ、二つといつた風に五つにかためてあるばかりで、外には一本の木も一本の草もない。しかもこの前に對して見入つた時何ともいへないゝ氣持を感じた。その象徵的な表現の美しさは實に深い感じを持つてゐた。私達はしばらくそれに見惚れてゐた。やがて二人は感歎の聲を合せて退出した。そして寺の前の池に出た。その池は毎年冬になると鴛鴦が來て遊泳するので有名な池である。しかし近年は殆んど出て來たことはないやうでその時にもそんな鳥の來さうな可能性さへ見出せなかつた。その後二三日してから「西鶴名殘之友」を見ると「小野の炭頭も消え時」の條に思ひがけなくこの龍安寺の池のことが出てゐてしかも西鶴自身がこゝへ出來たのである。私

は一寸變な氣持がした位である。それには斯う書いてあつた。

　岸の枯芝の上に麵花むしろを敷ならべこの池の鴛鴦のつき邪を見ること、近年はやりて毎日人の絶ゆることなし、これも京の冬の眺めと語りける、内に汀なる草庵より法師立出でて手近く餌をまきて招きければ限りもなく鴛鴦爰に集りて、おのがさま／＼の戯れ、氷を紅に彩り、浪に白玉を散し、夕日の映り、稲妻を久しく見るが如く、夜とも晝とも辨へのなき遊興、御所めきたる女臈仲間はこの鳥によそへての歌よみ給へるもあり、云々

「へーん、さうかな」と思はず私は聲を出した。描寫の旨さは兎も角として鴛鴦のつき邪など第一此人の目のつけどころが違ふと思つた。それにさうした景色を面白いと眺める西鶴、こゝまで來ながら相阿彌の庭を見ないで引かへすなどいかにもこの人らしいと思つた。私はその晩寢てから相阿彌と西鶴とをどうかして勝負させてやらうといろ／＼考へて見た。しかしむろんそれは正氣の沙汰ではなかつた。

　西鶴は人間を見ることは實に鋭い、どんなに粉飾を施してもいかにすましこんで見ても、奥の奥の柔かなところまで一睨みで見拔かれさうに思はれる、しかしそれが自然を眺めるとなるとさう純粹に鋭くは見拔けない。僅かに情趣といつた程度である、それも人間を借りてこなければ完全には掴むことが出來ぬ人間を介してのみ自然に接し得たのである。彼の自然描寫も畢竟脂粉の氣から脱却し得るものではなかつた。

　彼の自然描寫は朱雀の小路を描く時に於て最も光彩を放つてゐる。それは朱雀の小路、即今の千本通が島原と相接してゐるからである。丁度吉原對入谷の田圃といつたやうな交渉を島原に持つ小路だからである。置土産の「愛宕颪の袖寒し」の條（後に「島原」の項に例にひく筈である）など特にすぐれてゐると思ふ。又

都の遊所島原の入口を小唄に唱ふ細道といふ野邊なり、秋の田が熟(み)る折節、諸鳥を嚇(おど)す爲に案山子を拵へ、古き編笠を着せ、竹杖をつかせ置きしに、嶋鳥も不斷燒印の大編笠を見つけてこれも供なしの大盡と思ひ。少しも驚かず後は笠の上にもとまり、案山子を粹ごかしにあはせける（胸算用、門柱もかりの世）

などユーモアがあつて何ともいへない面白味がある、朱雀の細道、それが往古の朱雀大路だつたことを考へると殊に感興が湧くのである。

この茶店の小路を北へ取ると壬生狂言で有名な壬生の地藏がある。そのあたりは七八年前までは慈姑の一杯植えてあつた田圃で、蛙が晩春頃からやかましい程に啼いた、私はその頃の友人で背の高い少し鼻の下の長い獨逸文科の學生があつたがその男と朝下宿の前などで逢ふとよく「今日朝壬生の田圃を歩いて來たが慈姑の田圃つて面白いものだね」などと罪のない笑顔をして話しかけることがあつた。いつも同じ事をいふので私も馬鹿正直に慈姑の田圃といふのを或朝早く檢分に行つたことがある。しかしさうした朝の田圃の氣分はむろん惡くはなかつたがそんなにまで打込む氣持はわからなかつた。その男は學校をよくずるけて欠席がちであつた。それから間もなくその男が島原で遊ぶといふ噂を耳にした。自分は「なあんだ」と思つた。そして氣易いやうな、腹立たしいやうな感じを覺えた。

三、町人と金

戰爭があれば武人が幅を利かし、泰平の世には町人が勢力を持つこと、古今東西紛れのない定跡である。もとより元祿時代は打續いた泰平の代、金がものいふ現實主義の享樂時代であつた。二本棒は實力上町人の下風に立ち、町人の資は大名など思ひも及ばぬ程度に達してゐた。世の治まれること久しきによりて人皆過奢して近頃は有祿の士より上つかた國郡の主まで其の外貧困してすべて商家をたのみて內外の事を營む、故に位ある人も商家を恐れたつとぶ事甚しければ商家は之に乘じて士太夫を輕しめ侮る、是も昔に變れる風俗なり」と太宰春台も「獨語」に感慨に堪えぬやうに書いてゐる。

金力を以て優に權力に對抗してゐた當時の町人はその金力を極度に驅使してこゝに物質的な放縱至極な生活が展開されて行つた。彼等はもとより無學であり、又本能的であつた。精神的に求めるものを持たない彼等は必然的に肉慾（性慾の如き狹いものではない、あらゆる肉體的慾望である）の充足にはしつた。美女、酒宴、豪奢、見榮、そしてさうしたものを完全に供給するところのものが即ち遊廓だつたのである。遊廓と町人、これが當時の生活の代表者であつた。

町人が遊廓に於ける放縱な豪奢な遊興に就ては今改めて例を擧げる迄もない。町人は當時すべて金錢を蓄積するに、將來の歡樂陶醉を豫想してゐたともいつていゝ位で、歡樂境を志さぬ野暮天は人間並には取扱はれなかつた。粹、通、わけしりが彼等の理想だつたのである。

しかし京都の町人、是を一ももとより一般に江戸大阪の町人

共と表面何等變るところはないやうであつたが、さすが京都固有の傳統の保守的な精神は背後に働いたと見えてさうした世界など見向きもせず、ひたすら貨殖の道にのみいそしんだ町人共も少くなかつたやうで男色大鑑の涙の種は紙見世の條にも「今の京に何がはやるといへば始末して銀を溜めることぞと語る」とあり、又「常住香の物菜の外にはいかな〳〵三月の鯛一枚、松だけ一本三分する時も目に見るばかり、油火も眞中にひとつともして是を寢さまに消して」（浮世親仁氣質）置くといふ男もあれば「人の家にありたときは梅、櫻、松、楓、それよりは金銀米錢ぞかし、庭山にまさりて庭藏の眺め、四季折々の買置、是ぞ喜見城の樂みと思ひ極めて、今の都に住みながら四條の橋を東へ渡らず、大宮通より丹波口の西へ行かず、云々」（日本永代藏、二代目に破る扇の風）といつた風の生活をするものもあつたのである。しかし又かく貯蓄した金を、使ふべき時に適度に使ひ、見榮はるべき時には太氣に見榮も張るのを男の甲斐性とした。胸算用の都の顏見世芝居の條に「天下の町人なれば、京の人心何ぞといへば、太氣なることと是まことなり、これ常に胸算用して隨分末始のよき故ぞかし」などとあるのがそれである。即ち萬事始末よくして是處ぞといふ時に金の使ひ榮させるのを第一としたのであつて是は今日の京商人も同樣である。扨機的なことは不得手といふよりも恐れるのである。今日でも眞の京の商家といふものは店を華美に飾るでなし廣告に金を入れるでなし、至極堅く間違のないところをコツ〳〵とやつて行くのである。從て今日でも尚京の商家は打見たところさして華々しくなく景氣も引立たないが、金を持つてゐるといふ點では三都の中隨一だといはれてゐる。

さて當時の町人がかくして貯蓄した金を何に使つたかといへば、先づ芝居見物、能見物、謠曲、遊山といつた種類のもので當時四條には七つ程も劇場があり、坂田藤十郎などいふ名優が居り、每年末の顏見世は都中大騷ぎをしたもののやうである。又能は折々觀世、金春、金剛の勸進能が大掛かりで催されたものらしく（胸算用や一代男などに出てゐるが、そんな時は隨分スツキリと使つたやうに描かれてゐる。又當時謠曲は非常な流行で幸田露伴博士なども近著「冬の日抄」の中に「謠曲の貞享元祿の頃の人に親しかりしは長唄の明治大正の吾等に親しきよりも親し」といつてゐられる。この西鶴の浮世草子など到るところに謠曲からの文句が引かれてゐて、謠曲を度外視しては西鶴解し難しといつてもいい位のものである。以てその流行のはげしかつたことを知るべきである。

遊山なども隨分營んだつたやうで「名殘之友」に「都なればこそ師走の二十日過ぎての野遊び、山の蕗を所々に見る事、他の國にはない事ぞと、忙しい心靜かになりて云々」などと見えてゐる。

今日ではこれらの遊びは餘程衰へてゐるやうで芝居小屋なども櫓のあるのは南座一つばかり、能も月に一つ位が關の山、謡も人の増した割には殖えず、遊山なども著しい衰へやうである。

さてかうした公明正大な遊興は概して一家族打揃ふての事が多く、先づ京都の家風には似つかはしい遊びであるが、その外の所謂傾城狂、野郎買に至つては堅い京都の町人はあまり溺れなかつたやうで、島原の大盡も大阪堺の商人が多く、京都の遊客は大した問題ではなかつたのである。しかし遊ばぬも男の恥といふので一寸したきつかけに心にもなく席酒を呑んでそれがきつかけとなつて深はまりをした例なども數多見られるのである。で島原の遊興に就ては第五節に述べることにして次に京女を一寸紹介して置かう。

四、京女

京女がその頃いかに日本國中に美しいものとして聲聞いてゐたかは「京の女郎に江戸の張を持たせ、大阪の揚屋で會はゞ此上何かあるべき」（一代男、句はかづけ物）と西鶴もいひ、難波鑑（是は一代男より二年前に出てゐる）にも既に「さる人長崎の寢道具にて京の上﨟）に江戸のはりを持たせ大阪の九軒町（新町の揚屋町なり）にて遊びたしと願ひしとかや」と出てゐるので知られる。こゝには遊女が引合ひに出されてゐるが遊女だけに限つたことではない。西川祐信の「女中風俗艶鏡」にも「見ぬ唐土はいさ知らず我日の本の風俗は花の都にこゆるはなしその風流の是とすること高艶にして葉手ならず、自然に備はる都の風儀遠き浦々島々までこの風俗を見習ひ聞習ひ都をしたふも宜なるかな」とあるによつても良家の子女も亦美しいものとして地方の人達のあくがれの的となつてゐた事が推察される。一代女にも「女は都に増して何處を沙汰すべき、一つは物越ほど可愛らしきはなし、是わさとならず、王城に傳へていひならへり」（國主の艶妾）とも又「京のことなれば美しき娘もあるに」（美扇の戀風）ともいひ出てゐる。無論その頃は京大阪が文化の中心であつて殊に王城の地といふので萬事京風といふことがもてはやされてゐたにもよるが事實あの時代としては即ち女が殆んど人一人並に取扱はれてゐなかつた時代として

は京女のやうな肉體的に豐艶な、そして男に全然倚りかゝつて行くやうな弱いやさしい心持を持つてゐる女性が當時の男性に尊重されたことは至極當然のことで、殊に何等精神的な葛藤も理想主義的な何物をも持たなかつた世相としては、さうした現實的な女性を愛し、且讃美し、從てその典型的な女性である京の女が諸國の男女の憧憬の的となつたといふことに何等不思議なことではない。

　當時の美人としての標準は一代女の「國主の艶妾」の條に、或大名が妾の周旋を出入の呉服屋に依賴することが描いてあるがその妾の容色に就いて條件として擧げてゐるものがそれである。

　先づ年は十五より十八迄、當世貌は少し丸く、色は薄花櫻にして、面道具の四つ不足なく揃へて、目は細きを好まず、眉厚く、鼻の間せはしからず、次第高に、口小さく、齒並（齒竝）あら／＼として白く、耳長みあつて、緣淺く、身を離れて根まで見えすき、額はわざとならず自然の生へどまり首筋立のびて、後れなしの後髮、手の指はかよわく長くあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指反つて裏すきて、胴間常の人より長く、腰しまりて肉置たくましからず、尻付ゆたかに、物越、衣裳つきよく、姿に位備はり、心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて、萬に味からず、身に黶子一つも無きを望み云々

之が希望の條件であり、「又美人としての標準だつたのである。そしてそのア・プリオリの條件を相當具有した女は更に之を磨き上げて完全な美しさに迄到達せしめやうとする、一代男の戀の捨金の條に、

　そも／＼京は清く、少女の時より顏はしきを貌は湯氣に蒸し立て、手に指かねさゝせ、足には足袋はかせながら寢させて、髮はさねかづらの雫に梳きなし、身は洗粉絶えず、二度の食物、女の喫方を敎へ、肌に木綿物を着せず、是に仕立る事ぞかし、

　とあるやうに至れりつくせりの方法を講じたもののやうだ。むろん是等はどちらかといへばうぶ素人のことでなく玄人向きの女に就てのことではあるが良家の深窓にそだつた女性などもさう大して差異はなかつたであらう。貌を湯氣に蒸したてるといふことは近頃美顏術が行はれてからの事とばかり私など思つてゐたがそんなことは旣に三百年もの昔に早ちやんとあたり前のこととしてやつてゐるのであつた。

　かくして出來上つた女性が當時の京都の女性だ。これは正におかおやかとしての女性である。この頃の京都の女性は皆さうだ

つた。

第一彼女等は經濟的に何の立場をも持つてゐなかつた。夫が死に親が死ねば妻は娘は自ら何のためのむべきところもなく、忽ち何人かに頼るの外はなかつたのである。彼女等は小さい時から女大學式の教育を受け男女兩性の對等的位置などいふことを夢にも知らないで唯女らしく女らしくと育てられて來た。たま／＼さうした點に眼覺めた女があつても、周圍は何の造作もなく之を同じ鑄型に入れてしまつた。彼女等は金の有難さは概念的にはよく心得てゐた、しかしそれは男性が排斥するが故に、男に順つて金を有難いものと思つてゐたに過ぎぬのである。そこには何等實感はなかつた。彼女等の金に對する理解は深窓の處女が男性に對して持つ理解と殆んど大差なく、ごく遠くから夢のやうに見て自分ぎめで有難いもの又恐ろしいものと思つてゐたのである、金を以て購ひ得る美しい衣類、金なきが故に陷る不快な又恐ろしい窮迫、それらが先づ彼女等の眼に入つた。それが金故だと考へてそして後の考へとして金を恐れ、金を倖んだのである。從て彼女等は金錢そのものを直接に尊重したわけではなく、金錢の用途を通じてその威大な力の前に屈服したのである。だから或意味に於て彼女等は金錢に就て本質的な見方をしてゐるともいへる。夢幻的ではあるが大地を離れた打算的な見方ではない。精神的にも消極的にも諦觀して考へるといふやうなことはなく、薄衣一つ隔ててはゐるがその把握したものは見當をはづしてゐないのである。

斯うした心持でゐてしかも全然經濟的に無力な地位に置かれてゐるのであるから、勢ひ男性、甲斐性のある男性の方に倚りかゝつて行くの外はないではないか。彼女等は或意味に於て最も怜悧である。じたばたしないでアッサリと身を預けてしまふのである。そのために又彈力はともすれば消失し、意氣は失はれ、更に精神的な苦闘を避けるが故に漸次人形型の女性となつて行つてしまつたのではないかと推定されるのである。

かくの如く萬事京都の女性はその心持に於て、足をしつかと大地につけてゐる。うはの空な心持の動きは極めて少ない。才氣煥發な女は平安朝以來その跡を絶つて表面的には何等熱情的なところのない、しかし心の奥には女らしいやさしい媚びた感情と怜悧な打算的な理性の相應てきぱきと働く女がその頃京都に一杯だつたのである。だから京都の女は見榮坊だといつたり又京都は「着倒れ」だとかよくいふが、實は皮相た觀察である成程京都人は派手な衣裳も着るであらう。しかしそれは決して分に過ぎたものを着るといふのではない。分相應の派手をしたいのである。大阪や江戸の人間のやうに無理算段をしてまで

喰べ物に贅をつくし、又芝居見物に見栄をはりはしないのだ。とにかく不時の災厄に備へる爲又子孫の爲に殘すといふ落ついた心で萬事に成る始末をして溜込むのである。ところが一方京都人の傳統的特性として美に對する感受性が極めて鋭敏であるから、この美といふ方面に於ては能ふ限り欲望を遂げたい、即ち眼を樂しませたいといふので、他の欲望を犧牲にしてでも身の分際に能ふ限り（ここが大切だ）の贅を盡さうとするのである。それがたま〳〵誤解されて「京都の着倒れ」となつたのではないだらうか。以上は概して元祿時代の女性に對して言つた言葉である、だが今日の京都の女に對してもやはり同じやうな事がいへはしないか。たしかに今も足が地についてゐる筈である。等持院や下鴨にキネマの撮影所が出來て、相應華やかな、放恣な刺戟の強い女が顏を見せて毎日のやうに新聞紙上にその華々しさうな生活が紹介されても案外別にどこの蓮葉娘が直接談判をはじめたとも耳にしない。洋裝の女も隨分眼につくやうになつたとはいへそれらは新らしい革袋に入れた古い酒に過ぎず、まだ〳〵京都人根性が立退いてゐるとも見えぬ。人形が唯衣裳持をしたに止まるのである。洋服がはやるから洋服を着ただけのことである。人形の家はまだ當分無事平穩と觀察する。

五、島原

江戸の吉原、大阪の新町、京の島原、之が元祿時代第一流の代表的な遊廓である。近松が「朱雀三谷もいかなこと直下(ちよつか)にみつの難波の里」（淀鯉出世瀧德）といつてゐるやうに新町の繁昌を叙するに彼一流の誇張を以てして猶朱雀（島原）三谷（吉原）を引合ひに出して來てゐることを思へば島原の全盛は推して知られる。西鶴の如きその好色本はむろんのこと、その他の小説も京の島原に取材した物語が何といつても一番多い。又彼自身も若い頃から幇間宗匠として大阪の富豪どもにお供して隨分出かけたやうである。

その頃のことを思へば今の島原はまるで火の消えたも同然のさびれやうだ。この廓は元來足利時代の末から柳馬場押小路、即ち京の眞中にあつたのが後に六條西洞院、室町あたりにうつり、更に寛永十八年に移されて遂に今の丹波口(たんばぐち)に定まつたのだといふ。最初は西新屋敷傾城町と呼んでゐたが、丁度その頃肥前島原に天草四郎の亂があつて天下騷然としてゐたので、この遊廓の人を誤まらせ、世を害すること甚しいのを島原の賊徒がその城廓に立籠つて天下を惱ましたに比(なぞ)らへて、戯れに島原と呼んでから、とう〳〵それが本當の通り名になつたものらし

い。しかしこの廓は島原といふ名を頂戴してからます〳〵繁昌して來て、貞享元祿のあたりには最も全盛を極めた。當時の町人共がいかにこの廓に足繁く出入したか、又いかにお大盡遊びに町人としての分際の能ふ限りをつくしたか。それは今の島原を頭に置いての我等の想像の思ひもよらぬ程だつたに違ひない。又單なる性慾の充足のためといふ境地から一歩を進めて自由な世界、階級的差別のない世界、潤達な世界、華美な世界（一般町家の女も當時餘程華美であつたがその華美も所詮は遊女の時流（はやり）を眞似てのことである）にあこがれ彈力のある女、美しい女、夢の世界の女を求めてわけしりの粹人共が日夜島原にひたりこんでゐたことや又律義者がふとしたことから島原の味を覺えてそのあと夢中になり家財分散や繩目の憂目を見た話又零落しても猶昔忘れずそのあたりを徘徊する男のことなど西鶴や都の錦、山之軒政房、西澤與志、雲風子林鴻、又北條團水、月尋堂等の浮世草子によつて數限りもなく描き出されてゐる。

大宮西二町に東に向いて大門がありその傍に所謂出口の柳がある。廓内は、貞享元祿間京都大繪圖を見ると中央東西に大路があり、その大路を堺に南北に各三筋（東より上の町中の町、太夫町、中通し、揚屋町、下の町）の小路がある。狹い土地であるが區劃整然として揚屋置屋茶屋など軒を陳ねてゐたものらしい。荒れてゐる今日でも廓區劃だけは變らないけれど、ついてゐる、尤も山陰線の丹波口といふ驛を出たすぐのところも昔揚屋町などゝ稱へて汚ならしい娼家がかなり今では出來てゐるが。

その當時揚屋には嘉右衞門だの權右衞門だの、又八文字屋、柏屋妙安、丸屋七右衞門、又藤屋の彦右衞門などあつたらしく、浮世草子にたび〳〵出てゐることを思ふとそれらは一流の揚屋だつたやうである。今は角屋輪違屋など有名であるが、それらも京都見物の連中が傾城買の古式な風を見にゆくといふことをよく耳にするだけでその昔の全盛は見る由もないさうである。太夫では高橋、吉野、薫、野風、花崎、藤浪、三笠などの名が頻りに好色本に出てゐるが、それらは思ふに西鶴などが遊びに行つた頃から一寸以前の頃の傾城だつたやうで、一代男、二代男、など詳細にその行狀記といつたものが書かれてゐる。

「情あつて大氣に生れつき、風俗太夫職に備はつて衣裳よく着こなし、道中大底に變り、少しするに見えて、幅のなき男は畏れて逢ふこと稀なり、取入りては好き事多き人にして座配賑やかに、床しめやかに、名殘思ひを殘させ云々」（一代男、食さして袖の橋）は三笠のことであり「都をば花なき里になしにけり、吉野を死出の山に移して、と或人の詠めり、亡き跡まで名を殘せし太夫、前代未聞の遊女なり、何れを一つ惡しきと申す

べき所なし、情第一深し云々」（同、後は様つけて呼ぶ）は吉野がことである。この吉野はかの貝原益軒が明暦年中、京都に遊學の折、馴染んだ小紫の姉分になる吉野、と同一人ではないかとも考へたりするのだが、これはうかつなことはいへない。浮世草子に出てゐる名前が本當の名だつたか假名だつたかも疑へば疑へるし、又西鶴より少し以前の女だと斷言することも實は不安な位だから。しかしとにかく、西鶴の一代男や二代男など皆一面から見れば廓評判記であり、傾城細見記に相違ないのであるから、それらに描かれてゐることによく似たことが事實にあつたらしいといふことは考へられる。そしてその事々しい記述から見て、そしてそれが大いに世に受けたことから考へて當時の町人共がいかにこの廓に興味を持つてゐたかは想像のつくことである。

さて次に概略遊女に就て述べて見る。

太夫といはれる遊女はその頃でも大した數ではなくせい／＼五六十人ぐらいだつたと思はれる。今日では先づ二十人位のものである。御前義經記に「太夫といふをいにしへは知らず今平安城にして六條に遊女町三筋あつて一の女郎の直段を五十三匁と定め、之を五三といひ、その比の勤めには能などをよくしけるによつて太夫といひそむるぞかし云々」と出てゐる（但し五十三匁は六條に廓のあつた時分のことで後には引舟共に七十六匁となつた）又松を太夫といふ秦始皇の故事を逆に太夫を松ともいひ、又第一流の女郎といふので上臈とも呼んだ。その風俗は「眉剃りて置墨濃く、小枕なしの大島田、一筋懸の隠結び、細帶の平結、後れは假にも嫌ひて、拔き揃へ、二尺五寸袖の當世仕立、腰に綿入れず、裾廣がりに、尻付大きに平たく見ゆるを好み、しんなし大幅帶しどけなくつい結びて、三布なる下紐常の女より高く結びて三襲の衣裳着こなし、素足道中練出しの浮歩、宿屋（揚屋のこと）八の字足、座敷つきの拔足、階子のぼりのはやめ足、東角草履見ずにはきて、云々」と一代女、淫婦の美形の條に出てゐる。その風俗は今でもさして變つてゐるわけではなく、つい近年までやはり鐵漿をつけ歯を瑠璃色に光らしてゐたと聞いてゐる。

まだ小學生の頃私は太夫の道中といふのを見た。之は島原年中行事の一つで毎年四月二十一日にあるのだがあの東西わづか二三町の道を小半日もかゝつて、所謂八文字を踏んでねり廻るのである。最初に花車が行つてそれを若い藝妓や舞妓たちが曳いてゆく。そのあとに二十人程もの太夫が島田や立兵庫その他いろ／＼の髮に玳瑁の櫛、數知れぬ笄を重苦しく挿し、三枚歯の黒塗の高木履を素足に履いて八の字の線を描きながらそろり

／＼と道中をする。（殿りは傘止といつて當年一の賣れつ妓が承はるのである。）その兩脇には所謂禿がつきそひ、後からは妓丁が定紋のついた大きな日傘をさしかける。隨分不思議な光景であるな。幼い頃の自分の眼には美しいといふよりは奇怪に映つた。今思ひ出しても決して美しい感じは殘つてゐない。明るさも華美な感じもなくて、むしろその極彩色の故に却て陰慘な感じをさへ受けたやうに覺えてゐる

その禿なども借物だそうで、近所の少女がその時ぎり雇はれて勤めるのである。だから中には泣き出すのがあつてそれに附添つてゐる母親らしい女が持餘すといつた興醒めた光景がよく見受けられる。何人もこの道中によつて僅かに昔の全盛を偲び得ると共に今更に現在の衰微が痛感せずにはゐられないのであらう。

太夫に次いでの女郎を天神といつた。今そんな名稱は殘つてゐないことと思ふ。「異本洞房語園」には「勤銀二十五匁なれば北野（天神）の緣日に取て天神といふ」と說明されてゐる、又「好色伊勢物語」にも「一名なめ（海）是も神の木なれば、かくいふなるべし、一名はね（刎）、てんじんとはぬる故とぞ」と出てゐる、又太夫の上臈になぞらへて次職ともいつた。勤銀は右二十五匁とあるが、都の錦の「諸藝太平記」には三十匁と出てゐる、後に値上したものらしい。

一代女卷二には、太夫であつたのが、あまり高うとまつたため評判が惡くなりこの天神におろされた時のことが描かれてゐる「雞鳴く別れにも客を送らず、何れの人も嫌な貌して濟ましければ自づとこの沙汰惡く、勤め欠けければ親方持ちこたへず、一門內談して天神におろしけるに、早その日より引舟女郎もなく、寢道具も變りて蒲團二つになし、末々も腰を屈めず、様附けし人も殿になり、座付も上へは上げず、口惜しきこと日に幾度か、太夫の時は一日も宿にて暮さず、二十日も前より遣手を頼み、日に四五軒からもらはれ、揚屋から八橋かけて、そこからそこに行くにも迎ひ人、送り人、さゞめき渡りしに、今はまた小さき禿一人連れて足音も靜かに、云々」とあるを見れば格段の差等があつたやうである。江戸でいはゞ格子といふところであらう。

その次が十五（圍、鹿戀、拵、鹿子位などいろ／＼に書く）といつても勤銀十五匁だつたので十五と書くのだが元祿の頃には十八匁となつてゐる、なぜ「かこひ」といふかはつきりわかつてゐない。柳亭種彥は十五の數を三徒の語に「かこひ」と

いふのでその十五匁の揚代にかけて言ふのだらうといつてゐるがまづはその邊のところであらう。御前義經記に「天神より一段下りて、一尺八寸（十八匁のこと）とも、鹿職とも、追帳とも、八寸とも、女の子とも、鹿とも、」いふとあり更に「太夫につくを引舟とも、つきものとも、太鼓女郎なんどいふはこのたぐひぞかし」と見えてゐる。（但しこの太鼓女郎といふのは藝妓の役をかねたもので西鶴置土産、四十九日の堪忍の條にも「又次の間を見れば太鼓女郎二人まで、九匁がところ（九匁取りのこと、）彈き草臥れて、三味線の筒を枕に足もたしあらで、云々」と出てゐる。所謂十五と全然同一といふのではない。同じく置土産の「愛宕颪の袖寒し」の條にある坐持女郎といふのも太鼓女郎のことだと思ふ。享保年中に藝者が出來てからこの種の女郎はなくなつた。）一代女に「最初のお客と呼びに來ると、一つも賣るを仕合せに、其男見に遣る迄もなく、もし又いらぬと變換せられては、今日の紋日の切なさに、取急ぎ行くさへ、揚屋の男めが耳こすり（當こすり）いふは、十五ぐらいの女郎は、人遣ると否や使者と連れて來る人を呼べ、惡女郎の罪に身拵へ、それだけ損ぢやわ、十八匁のものを九匁も人が出すにこそと（十八匁の內九匁は揚屋が取つて、九匁抱主にやることをいふ）聲高に囁くもつらし、內儀も見ぬ貌して言葉をも懸けられず、手持無く台所にあがれば、丹波口の茶屋が其席に居合はせ、それ二階へ上れと指圖する片手に、尻さくるなど、少しは腹立ちながら、座敷に入りて見れば、大臺の數程太夫もありつれ、衆には天神かたづき、お機嫌取りの若男四五人ありしが、その中へ揚交に呼ばれて、どれにあふとも定めもせず、下座に直りて行所のない時の淋さゝれ、酒はかいしを請けねども、誰氣をつけて挨拶する人もなく、つい隣の太鼓女郎にさして、口の暮るゝを待兼ね云々」分里數女の條）とあるは少し誇張した言ひやうだが、とに角天神とは更に一段格式の落ちたものであつたらしい。

その又下がは、しつぼね（端局）といつて三匁取り、二匁取り、一匁取りといろ／＼ある。色道大鏡に「端女郎とも局女郎とも、あそびとり（太夫天神の如く格式ばらず氣樂なところから遊び鳥とでもいつたのだらう）ともいふ、けちぎり女（假契、略してけちともいつた）のことなり」と出てゐる、御前義經記には「端女郎は鹿戀より下、みせ女郎をいふなり。替名をけちとも穴打とも山家とも局女郎とも、端とも小松ともいふ、位は一（一匁取りのこと以下同斷）を一寸とも月ともいふ、二は二寸とも影ともいふ、三を三寸とも汐ともいひ、又五（銀五分取りのこと）を五歩ともわけとも北むきともそゝりともい

へり」とある。右の一を月といひ、二を影といひ三を汐といふは謡曲の「松風」に「月は一つ影は二つみつ汐の夜の車に云云」に由來してゐることは明かである。以て當時謡曲がいかに京都に盛んであつたかを知るの一證ともなし得るだらう。一代女に詳しくそれらの女のことが描かれてゐるが些か卑猥に過ぎるやうだからこゝには省略して置く。

以上大體四種類の遊女があつたが、その階級の差は右の如く相當はげしく、その容貌、形容によつて最初から區別されたらしい。又初め天神でも賣れなかつたり、年が長けてくると鹿戀に引おろされるといふやうに上から下へ引おろすことはさして珍らしい程のことでなく、一代女には太夫から端まで順次引下されて行つた女のことが出てゐる、よしそれは全くの作りごととしてもその可能性は十分あつたことがうなづけるのである。しかし現在猶こんな歴然とした區別が存在するとは思はれない。すべてさうした小うるさい差別は漸次上下の兩極に取かたづけられて行つて今は太夫とたゞ女郎との二階級となつてしまつてゐることと思はれる。それはやがて現代の社會が年々中産階級なるものを失つて行つて結局大資本家と無産者との二つにかたづけられるだらうといふ豫想と些か似通つた推定によつてである。

それは兎も角、これらの遊女達は概して十年の年期で何百兩とか何十兩とかで身を賣つたもので「一代女」の主人公が太夫に賣られた時は五十兩といふことになつてゐる。それで十年の勤めといふのだから當時一日に何百兩を使つたお大盡樣があつたことを思ふと隨分ひどい話である。置屋にしろ無論その養成費や又衣裳や頭のものその他いろ〱入費も嵩んだではあらうがその不當利得のいかに甚しかつたかは察するに難くない。まして揚屋に至つては饒舌と阿諛との中に殆ど取込む一方だつたのだから、當時その景氣のよかつたことは非常なもので且は元來が派手商賣のこと故萬事一般の町家とは比較にならなかつたであらう。殊に暮し向き地味一方の土地がらである京都のことであるからその對照は特に著しかつたに相違ないものである。

從つて當時の町家の人達がいかにこの遊廓といふものを見てゐたかは我々の想像以上で全然一廓の別天地とはいひながらそして或程度までさうした男の歡樂境存在を呪ひながらも猶良家の子女がとかくその風儀を見習ひがちに、その流行を追ふてゐたことは推定に難くない。それは當時の浮世繪師西川祐信が描いた繪草紙によつても明かに看取し得るのである。だから又良家でない貧窮な家庭に於てもよく島原の全盛が話題に上り、遊女の風俗が問題になつたことはたしかで、從てそれらの家の娘

ぞれがさうした世界の派手な風俗に對して憧憬の念、羨望の眼をさへ持て眺めたであらうことも無論考へられる。して見れば「苦界に身を沈める」といふことも案外當時の娘どもには文字通りの苦界らしい感じが響かなかつたかも知れないのである。まして奴隷賣買などいふ事は夢にも思はなかつた事であらう。

又事實彼等は一度松の位の太夫樣となればこの世界でのいはば女王であつて、客は少くとも形式上に於てでもその前に拜跪せねばならなかつた。いや客はかく歌舞の菩薩の前に拜跪する事を喜びとさへしたのである。

かくして遊女も遊客も階級的差別や權力の世界を遠く離れ、金力と愛慾の世界に、しかもその金力を能ふ限り人情化して、その愛慾を能ふ限り、粋の中に同化せしめて以て日夜宴遊に耽り現實を謳歌し、喜見城をこの一廓に現出せしめたのである。當時の島原は町人全盛期であつただけそれだけ眞の不夜城を現出したのであつた。

以上の如き西鶴等によつて描かれた當時のこの島原の素晴らしい有樣を頭に置いて現在の島原を眺めて見る。それは幻滅とも悲慘とも何とも形容の言葉もない氣持である。相應古びた揚屋置屋の家並には既に廢墟ともいひたい程の荒涼たる感じが添ふて、時雨する眞暗な殆ど家のない千本（朱雀）での小路から打見た姿は物淋しさの限りである。すぐ西側に接した丹波口の停車場にはいつも數へる程もない乘降客が北風に吹かれてプラットホーム（これも名ばかりの）に立つてゐる。日に上り下り合せて僅か二十數回の田舍びた山陰線の列車は半分もとまらないですぐ發車してしまふ。その西の野原には石油會社の油槽があり、すぐ北には瓦斯會社の瓦斯槽がプロザイックな姿を露はに見せてゐる。その殺風景な雰圍氣の中にわびしく取殘された廓――誰がその昔の有樣を想像することが出來るであらう。角屋の豪華な建築、贅を盡した調度品、まるでお寺に見るやうなといふ襖繪や庭など想像して見てもそれは少しもこの周圍の荒涼さを救つてはくれない。

私は或る雨の降る眞晝東寺からの歸り途を西にとつて朱雀の小路を歩いて見た。丁度年の暮に近い頃でぬかるみのひどい小路には牛車や馬車が二三台行き惱んでゐた。驛夫が一二人しか見えない道から見通しの丹波口の停車場は京の場末の停車場といふよりも寧ろ山間の小驛といつた感じであつた丈。プラットフォームにくつついた島原の娼家からはさすがにどことなくなまめいた氣分が受容れられた。私はその時ふと西鶴置土產の中の泉州堺の島長といふ大盡の物語を思ひ出した。――彼はこ

の島原や野郎狂ひに放蕩のある限りを盡してさしも名高かつた大盡が千種色の木綿布子、それも身狹にして借屋住居の憂目を見ねばならなくなつた。ある日愛宕參詣を思ひ立ち二日の旅用意をして出發した。堺からは夜船に乘つて橋本に降り、そこから左して松の尾に出、嵐山を越えて行けばいゝものをやはり他所ながら島原がのぞいて見たく、大廻りして東寺に出、千本通りを私が行つたと同じやうに通つてこゝまで來た。その邊のところを西鶴は斯う書いてゐる。

曲輪の塀越に揚屋町の裏を行くにどういふても都ほどありて物日の出懸姿、枡屋、丸屋の二階に、衣裳はとかく赤きがひとしほ目立つものぞかし。小唄聞えて撥の音、是は何ともならぬ。今一度千兩ぎりにしつこうせず、變の氣色を見たしと、八文字屋の裏なる蔵のこぼれより覗きぬれば、名も知らぬ女郎が、座敷離れて灰所に拵へし疊床に、枕もなく寢轉び、今時分女郎の手には珍らしき本の小判を五兩づゝ四所に並べ置き、嬉しさうに眺めて、知れてある算用を幾度も數よむこそをかしけれ

やがてそこへ内儀が出て來ていろ〳〵客あしらひに就て女郎どもに言ひ聽かせるのである。とても勤めの身のことだから男振などをいふことは問題にしないでどんな野暮天でも金さへ確にくれる客は大事にするがよいといつたやうなことを説いてさて更に言をつゞける

惣じて帥（粹のこと）が女郎様方の役に立たぬもの、隨分洒落たる男自慢の人、京大阪堺にもあきたあれど、無分別に遣ひ捨て揚屋の手前も味惡く、廻つて通るほその心からのたわけ者、女郎狂ばかりにかたづけば、末長う遊ばされしを、又野郎に戀をきたげ、あたら身體を潰し、若盛にあてがひ世帶、うご〳〵と生きてゐて何が面白い事ある

とその説教がまるでその男を見つけての當こすりのやうにさへ思へるので身顫ひして立退き、こゝまで廻り道したことを後悔しながら嵯峨に行く、ところがこの嵯峨の宿屋で又島原に元女郎を勤めてゐたといふ女に逢つて脱線し、歸りには山崎からの掛賃もなくて捨草鞋の行路、中食も食はずに歸つたといふのである。

私は千本の通から揚屋町を覗きこんだ時のその男の姿がすぐそこに見えるやうな氣持がした、又そうした宿命的な蕩兒の姿を私はその瞬間たしかにしつかり摑んだやうな氣がした。やがて私は踏切を越えて島原の西の出口の前に來てゐた。汚ならしい大門が雨にぬれてみそぼらしく立つてゐた。壬生の田圃の中には瓦斯會社の怪物のやうな瓦斯タンクが二つ氣拔したやうに

きづくまつてゐた。

六、島原以外の遊里

猶島原以外の當時の遊里といへば祇園町、石垣町、上八軒、穴奥、八坂清水などの茶屋町であつて石垣町は今南座（劇場）のある鴨川の東川端の土地で、そこにはかなり所謂茶や女がゐたのである。一代女には「茶屋とはいへど此所には一軒に七八人づゝあつても衣類の仕出し好き人相人に分里（島原のこと）の事も聞き覺えて盃の廻も少しは騷ぎて、上京の歴々にも氣の盡きぬ奴といはれて、願西に揉まれ神樂に太皷を見習ひ亂酒に付差鸚鵡に輕口、自らして此道は賢くなりぬ」（石垣戀小町）と出てゐるがそれである。今は丁度その川向に當る西石垣の方がよく名が知られてゐる、この賑やかな界隈としては不思議に一寸物淋しいところである、わずか七八間四條の大通から這入つただけだのに。しかし昔は今でいへば祇園町の格だつたらしく、若衆野郎なども出入し、相應大きな茶屋もあつて絃歌湧き燈火に狂態の影映つて道行く人を顧みさせたと隨所に見えてゐる。又こゝから見た東山の月の美しさを描いて「十三夜の月東山を我物になし、松の梢を照り上れば四條通を螢の飛ぶも見え渡りぬ」（男色大鑑、擧に色ある化物の一ふし）と書いてある

又祇園町はもと祇園村といつて田圃だつたのが元和二年に開かれて以來、祇園清水などの參詣の人の爲に前から賑ふてゐた茶店がいよ〳〵隆盛になりいつの間にか女を抱へ、酒肴を出すやうになつて、遂に寛文六年には祇園新地として公然茶屋渡世が許されるやうになつたのである。今祇園のすぐ門脇にある中村樓なども所謂祇園の二軒茶屋のその一つで、その由緒は隨分古く、當時の繪圖などにも二軒茶屋の名が出てゐる、往古はこのあたりから今の祇園新地 ProPer に近茶屋がたくさんあつたらしく、殊に西門今の石段下の前には左右に茶屋が並んでゐたのである。清水八坂は丁度今の八坂の塔から東、靈山の下のあたりに茶屋が相當たくさん出てゐたやうで「清水八坂にさしかゝり、此邊の事ではないか、口外物語せし、歌よくうたふて酒飲むで、しかも憎からぬ女は、菊屋か參河屋か、蔦屋かと搜して、細道の萩垣を奥に入れば、梅に鶯の屏風、床には誰が引捨てゝ、樫の木の棹に一筋切れて結ぶともなく、うるみ朱の煙草盆に炭團の埋火絶えず、疊は何となく打しめりて心地よからず思ひながら、例のとたん出て、祇園細工の足附に、杉板につけて燒きたる魚、お定まりの蛸、漬物、色肴の鉢に塗竹箸を取添へ、折節春深く、藤色のりきん縮に、譯知りだてなる茶染子の幅廣袂結ひにして、朝鮮綸綾の二布物をほのかに、延紙に數

揚枝を見せかけ、髪は四つ折にしどけなく束ねて云々」（一代男、別れは當座拂）とあるのが之である。祇園の方もさして變つたことはなく一代女には一緒にして紹介されてある。彼等は給銀極めて三百目、五百目、八百目など腕に應じて取つたのであるが、衣類は手前拵、揚枝一本、紙の油までも各々に買ふのだから總にその境界が拔け切れないで色香が失せてゆくといつたやうな感慨深いみじめさが描かれてゐる。今清水八坂あたりは見越しの松といつた寸法のものが多く又曖昧な女なども居てお賽前などお湯にゆく艶めいた女や悧潑らしい小婢によく出くはす、清水八坂から高台寺前、下河原町から祇園にかけて美しい東山の自然を前にこつむたり獨得の物柔かな空氣がたゞよふてゐる。いかにも京都らしいところである。

上八軒といふのは多分今の北野神社の東、上七軒といふのと同じであらうかと思はれる。或は昔八軒あつたのが後七軒になつてさうした數による名が呼ばれたのかとも思ふ昔から西北に偏した土地柄さして繁昌したといふ程でもなく一代女にも「この男漸う細奥町上八軒の茶屋遊びの諸分ならでは知らずや云々」と餘程輕蔑した口調で書かれてゐる。しかしこゝはかなり前から西陣の織屋の旦那の手堅い遊び場所となつて淋しくはあるが今に品格は保つてゐるやうである。中學時代親しい友達がこの近所にゐて私はこのあたりをよく通つたがもの云はれたあたりの軒並は茶屋町といふよりも街道の宿場のやうな氣分であつた「手燒上等かきもち」などと看板を出した間口一間位の諸酒た店のあたりに僅かにそれらしい感じが漂うてゐた。

穴奥（細奥とも書く）は今は小堀と書く。東山通、祇園石段下から智恩院門前へかけての土地で元祿の頃にはやはり茶屋があつたと見ゆる、今はその西臍所（邸）裏にお株を取られてさうだつたかといふ痕跡もなく、前の大通を疾驅するボギー電車の埃をあびるばかり、十年程前にはこゝに小さな芝居小屋があつたが今はその跡に自動車屋が頑張つてゐる。男色大鑑には身自ら色を賣らねばならぬ「野郎」どもが隙の夜はこれらの茶屋へ女買ひに出かけたらしいとが描かれてゐる。この他にも私娼の類は數多く一代男（卷二）などにも岡崎の尼寺に數間女（牙婆とも書き室町に住んで、借座敷などしてゐる諸國の遊山客を心掛けて之に京染物賣るを表商賣にするもの）や京屋者（之も似たもので多く小川に住んだもの）や仕手殿（紅葉の鹿子賣るを看板にするもの）などがよく出入してかせぐなどいふことが出てゐる。その外いろ／＼種類はあるがあまり必要もないから省いて置く、又この外に十日限の手懸者、涌屋徒（之は若衆女郎の如きもので若衆に仕立て坊主共を相手にしたものである）や

又あいの女（傾城でもなし、茶屋女でもないそのあひの女）などその他いろ〳〵あるが之も省略して置くとにかく以上あげたやうに各種各樣の娼婦が京洛の內外に跳梁してゐたことを思ふとすさまじい位である。しかもこの外には更に一段はげしかつた衆道の戲れがあつたのだからその風俗の淫靡頽廢はとてもひどいものだつたことが知れる。西鶴等の好色本の類がもてはやされたことも誠に偶然のことではないのである。

さて現在の遊廓はどうかといふにそれらの遊廓や茶屋がそれが西鶴時代に持つてゐた社會上の位置とはとても比較にならない立場に置かれてゐることが先づ念頭に思ひ浮ばれねばならない西鶴時代遊廓や茶屋はその時代の一般民衆に對して切るに切れない密接な交涉を持ち、その精神生活に甚大な影響を與へゐたに對して現在の花柳街は我等現代人の生活に全然、何の交涉をも持つてゐないことを思へば、今猶盛んにそれらの地が發展して行つてゐるやうではあるが結局問題にする必要はないのである。（完）

附言、猶外に野郎（若衆）のこと、歌舞伎のこと、東山並に西山遊樂のこと、飲食物のことを初め書きたいことがいろ〳〵あり又西鶴當時の情話の實說にどに就いても書きたいでゐるが既に紙數も超過して居るので之は他日に讓る

ふくろの中のなやみ

楚人冠

一

夕立が降り出した。

『一しきり降つたら、晴れるだらう』と皆々がいふ。『降らずば濡れざらましを旅人の』といふ歌はこの邊から出たこ

やがて雨は晴れた。雨やどりをしてゐた一同は、それぐ\に立ち別れた。

たゞひとり取り殘された自分は考へた。全體一しきりとは何事だらうか。

しきりといふ言葉に如何の意味があるのであらうか。しきりは「さかり」の轉といふならそれでもよし、ぱツとさかりが來て、ぱツとそれが消えてしまふこととも取られる。しきりは仕切る」の義、一段落を意味するといふなら、それでもよい、一段落で何事かゞ片づいて行くのだと思へば、さう思はれぬこともない。

だから、一しきりといふ言葉の内には、自ら成住壞空の相がある、何事も先づ段々に出來かけて、出來上つた所で又段々壞れかけて、結局元の通りなくなつてしまふのを一應の順序とする。一しきりといふはこの順序を總括した言葉である。この順序は人の力で如何ともし難い。強ひてこの順序を亂さうとするのは破滅の基である。となつてゐる。果してそんなものだらうか。

誰の頭にも記憶の新しいものを例に求めて考へるなら、地震である。地震が一しきりゆつた。ゆつた後又一しきりゆりかへしがあつたといふ。前の一しきりには、地震の初まる前、遠く

から、ぴり〳〵と輕く微震が來て、それが段々强くなり、その前も强い極度に至つて後は、又次第に弱くなつて行く次第が讀める。これで地震の一段落がついた。後のゆりかへしの一しきりは、地震後直ぐそれが起り、それが止んだかと思ふと、又幾時か經て又起り、次第に時の隔りが長くなつて、同時に地震の力も段々弱くなつて行く。その幾度か起つてはやみ、起つては止むうちに、末終にあるかなきかに至るまでの連續のシリーズを一しきりと見て居る。これでさかりの過ぎ行く意味が讀める

語源の穿鑿はいづれでもよしとして、兎に角この一しきりの言葉の中に、或る定つた、若くは定まり兼ねる時間の長さを含めて居ることは疑を容れぬ。こゝに或る時間の長さといふて二種の說明が要る。一には瞬間に起つて瞬間に消える電光石火の如きものではないこと、二には或る長さはあるが、その長さは限りも知らぬげに打ち續く長さでなくて、程なく止むるは止むといふものであること。この二つが含まれる。

斯ういふ一しきりが、時の上にも處の上にも、この世の中に充ち滿ちてゐる。處でいへば山一しきり、川一しきり、野原一しきり、田畠一しきりと續く。時でいへばわれらが起き出づると、手水を使ふ一しきり、廁に上る一しきり、飯を食ふ一しきりと續く。人生はリズムの集積といつた心理學者のあつたのはこんなことであらうか。物は突如として起り、突如として消えない。人を訪ひて一しきり、人に訪はれても亦一しきりはかゝる。來客が一しきりの用談をすませて、いよ〳〵辭して歸らうとする時、ふと何かの拍子で玄關口に立ち止れば、必ず或る一脈の時間を話しこまなければ歸れなくなる。人が途中で友だちと會つて、たゞ目禮したまゝで行き過ぐればそれ迄だが、立ち止つて話しかけたら、必ず或る長さの物語りがすまねば別れられない。之をヘフチングだつたか（何分三十年に讀んだ記憶をたどるのだから間違つてゐるかも知れない）誰だつたかゞ說明して、一つのリズムが切れた時、次のリズムに引つかゝつたら、もう、そのリズムの絶える迄途中でやめる譯に行かなくなるのだと言つてゐる。

だから一しきりには長さがある。その長さが短い長さであつて、それがすめば又次の一しきりに移るといふ。その限りある長さに依賴して、われらはしば〳〵自ら慰める。若しくはあきらめをつける。若しくは時節の到るを待つ。一言にしていへば、われらはしば〳〵一しきりに安心を求めて居る。子供が泣き出せば、一しきり泣いたらやむだらうといふではないか。老人が咳き入れば、一しきり咳いたら治まるだらうといふではない

か。山が嶮しければ、今一しきりで能たといふではないか。川が淺くて舟が動かぬ時、一しきり行けば深味に出るといふではないか。苦も永くは苦しむを要せず、樂もいつまでか樂しんで居れるものでないとなる。惡い日であつたといふのは、日を一しきりと見、惡い年まはりといふのは、年で一しきりをつけたに過ぎぬ。その日又はその年の過ぎたらん後にぞ慰安を求めてゐるのである。この慰安は果してたしかなものかどうか。

斯くの如くにして辛くも求め得た慰安は、未だ苦に即して樂を求むるの境地に達してゐないのではあるまいか。時節の到るを待つてあきらめる心は、臆病な、未練がましい慰安ではあるまいか。人間が一しきりを口にすることは、われ〳〵不自由な境地に、その身を陷れて滿足してゐることではあるまいか。

二

そも〳〵人生は一張の幕である。縫ひ目もなければ、切れ端も見えぬ一張の幕だ。其處に「すべて」があり、其處に「全き」がある。この渾然として珠玉の如く一まとまりにまとまつた人生を、人間が自分勝手に兎や角と區切りをつけて、何のかのといふのが癪にさはる。

雨が一しきり降つてやむとする。やむのも亦一しきりではないか。いづれは又降り出さう。雨と晴とが互に入り亂れた一しきりがすめば、今度は雨も晴もかまはぬ大きな一しきりが來る。日でりのつゞくこともあらうし、雨の降りつゞける事もあらう。その大きなしきりの上に、又大きなしきりがある。その上にまだ有る。いくらでもある。しきりの中にとり込む範圍を廣くすれば、限りなくいくらでも廣くなる。この上廣くしやうもおしつめてないといふ所までおしつめて行つて、初めてまとまりがつく。なま半可な途中で強ひて一區をしきつて、其處で一應のまとまりをつけやうとするのが、現在の癖だ。

過去を戀しがる者は、よく何かにつけて、昔はよかつたといふ。われらに縁の近い新聞紙に就いて語る時にも、さういふのが、昔はえらい新聞記者も出たが、今日は出ないなどいふ。而して必ず栗本鋤雲をあげ、末廣重恭をあげ、吉川喜六をあげ、矢野文雄をあげ、尾崎行雄をあげ陸實をあげる。如何さま擧げられた人は皆えらい人に相違ない。しかし昔といふは永い間の時間であつて、今日とは短い間だ。日本に新聞紙始まつて以來もう六十年になる。この六十年間が皆「昔」であつて、今日といふは大正十四年に限る。六十年の間に幾多の惡い記者もつまらぬ記者も數へ盡されぬほど出て居る中に、飛び拔けてえらい五六人の名が人の記憶に殘つてゐる迄で、この六十年と一年と

を比較にとつて、どちらにえらい者が多く出たかといへば、六十年の長い間に出た者の方が多いことは知れ切つてゐる。昔がえらいのでない。昔の方が長い迄だ。勘違ひをして呉れては困る。

更に進んで考ふるに、昔の新聞記者がえらかつたといふは、右に擧げたやうな政治家めいた記者が多かつたといふに過ぎない。兎もすれば昔の記者には國士が居たが、今は居ないなどいふので知れる。國士まことに結構である。しかし今日の新聞紙はもう國士の出る幕ではなくなつてゐる。そんな者の出ないのは當然である。さういふ事も少し知つてゐて貰ひたい。

新聞紙が政治を論議することを何よりの大事と心得てゐた時代には、何處の國でも、國士めいた政治家が新聞紙界に出てゐる。英米獨佛皆それだ。日本に限つた事でも何でもない。ところが新聞紙の任務としては、政治を論議するのも左る事ながら、事實を報道するのが、もつと大事な事であるといふ事が段々分つて來てから、理屈ばかり言つてゐる變な國士などより、種取りに走る記者と、手ぎはよく之を書き上げる記者の方が大切になつて來た。歴史家はこの變遷を說いて、エヂトル時代からリポター時代に移つたと言つてゐる。斯ういふ時代にえらい國士の出ないのは自然の成行である。その代り記事を書かせては、昔の國士以上の手腕をもつた記者が澤山に出てゐる。昔はよかつたなど、利いた風のことをいふべからず。

新聞紙を一つの「容るもの」と見たらば、昔がいゝか、今がいゝかは、この後の結末がどうなるか分らぬ限り、未決の問題である。政治の論議が事實の報道に至る準備であつたかも知れない。事實の報道が更に別に生じ來るべき或る物の準備に過ぎぬかも知れない。新聞紙は指導すべきものなりや報道すべきものなりやといふは、隨分古くから討議された問題であつて、政治論議時代を夢みて居る者は、ともすれば指導主義を取つて、當今のやうに讀者に媚び俗衆におもねるのは新聞紙の大職を無視したものだと說く。事實の報道を何よりの任務と心得てゐる者は、指導などとは以ての外のお世話で、新聞紙はたゞある事を有りと報じ、無い事は無いと知らせさへすればよい と言つてゐる。前者は後者を新聞紙の堕落と罵れば、後者は前者を頭が舊いと笑ふ。今日この馬鹿〱しい議論を闘はしてゐるヒマ人が時々に新聞紙や雜誌へ出て來る。いつくんぞ知らん、斯ういふ馬鹿〱しい議論をしてゐる間に、いつしか、新聞紙の任務は指導ばかりでない、報道ばかりでもいけない、要は「奉仕」するに在るとて、奉仕主義なるものが、ちやんと出て來てゐる。

政治論議の時代から事實報道の時代と見たならば、政治家臭

い記者が立派に見えて、[illegible]腹じみた記者がつまらぬ者にも見えやう。指導を重視する眼から報道を重んずる側を見たならば、事實は議論よりも力のないものとも見えやう。新聞紙の「歪」を見ずして、或る時代或る方面をしきつて、甲から乙を評すればどんな事だつて言へないことはない。言ひ得て得意になつてゐる間に、兩者の中道を貫いた新時代新方面が開かれてゐることを知らぬならば愚かしき至である。新聞記者を評するなら新聞紙の「歪」を見て申せ。しきり〲で見やうとするから間違ひが起る。

これを譬ふれば、新聞紙に連載さるゝ小説の一二回分を飛び飛びに讀んで、それが面白いとか面白くないとか言はれやうか。評をするなら、全篇の結構を見てからのことだ。人を評するものが、その人のある一日の行動だけ見て、悪人とか善人とかいひ得やうか棺を蓋うて後初めて語るべきである。無暗に昔を戀しがつて今をけなすが如きは今の一部を悪い方にしきり、昔の一部を善い方にしきつて見た亂視の一種である。見當ちがひも元より之[illegible]所と笑つてやりたい。

三

しきりは時間の上のみならず空間の上にもある。前のがしきりなら後のはくぎりか。一段落をしきつて考ふる事に、臆病者の安心があり得ると同じく、一地域をくぎつて考ふる事に、無精者の便利さがある。凡そ物をまとめるに、その一部〲を區切つてまとめるほど樂なことはない。樂は樂だが、動もすれば其處に間違ひが起り、面倒が起り、爭が起る。部分の眼は大局の眼をくらますが常だ。

京橋區の警察署と麴町區の警察署と、その所管の區域がちやんと定められて分秒の交渉を許さない。お蔭で兩署の間の山下橋や數寄屋橋の上には、乞食が始終治外法權顏をしてすましてゐる。悲しいのになると、自分の管内に行き倒れ人をそつと隣の管内へおしやつしてすましてゐる警官も昔はあつたさうだ。今はあるまい。何で今少し大きな目をして東京市といふものを見ることが出來ないのだらうか。

世界といひ得ぬまでも、せめて日本を一目に見得るなら、少なくとも日本の市は一視同仁と行ける。それを細かに割つて北海道は九州と爭ひ、中國は、東北と爭ふのが今日の、日本の狀態でなからうか。議員の選擧區にしても、日本全國を一區に見て、些細な行政區劃に囚はれずして、議員を選ぶことゝしたら、それこそ一地方の利害を超越した一國の代議士が得られやう。それでは人によつて投票の得點數に餘りに大小の開きが出

來過ぎやうと心配するなら、投票得點の數に應じて、議場に於ける票決權の率を定めるがいゝ。必ずしも一人一票たるを要しない。さうすれば選擧民も出來るだけ多數の票決權をもつた有力なる議員を上げやうといふ考から、散漫な投票を避けることもあらう。これでは小數の有力な議員だけが議場で幅を利かせて、結局は寡頭政治に陷いるだらうなどゝ心配することなかれ。若し衆望を負うた寡頭政治が成り立つなら、それも或は今の行き詰つた衆愚政治に勝るものかも知れぬ。それを何ぞや。一たび大選擧區が行はれた間もなく、議員だか政黨だかの個々の利害から打算して、又もや小選擧區に引き直をし、今度普通選擧法で再び大選擧區にかへると思ひきや、中選擧區とやらに一時ごまかさうとしてゐるなどは何處まで未練たらしいことかと齒がゆくなる。

名は大國だが、國土の小さい日本だ。この小さい日本をいやが上に小さくぎつて、それで日本人が小さくならなければ正に奇蹟である。市內電車が全線均一の賃錢は、長い間ごたついて、やつと成り立つた。ローランド、ヒルのペニー、ポーストの理窟からいへば、均一が至當だ。汽車の賃錢さへ長短遠近を問はず均一にして差支ない位に吾々は思つてゐる。其處へ乘合自動車が出來て、むざ／＼とこの均一制を破つた。破つたにしても市營の上野から東京驛まで一區十錢、會社線の新橋から日本橋まで一區十五錢であつた頃は、まだのんびりとした味があつた。市營が從前の一區を二區に割くと聞いて、會社線までがこま／＼と一區を二區に分けた結果、淺ましい人の心はひたもの十錢の所を五錢ですまさうとあせるの餘り、如何に市民の心が小さかしくなり、せゝこましくなり、ケチ臭くなつたかは想像に餘りある。區制を小さくした爲に小きざみに乘り降りする者が多くなつて、自然全線の速力が鈍くなつたのは姑らくいふまい。その爲に三枚ですんだ切符が六枚になつて、乘客にも車掌にも手數をかくること一倍に及んだことも姑らくいふまい。それらは姑らくいはぬにしても、もと／＼小さい島國に生れて育つて、さなきだに島人根性のこま／＼と小さい事にのみ憂身をやつす日本人の心を、いやが上に小さくしやうとする傾向に至つては、斷じて看過すべからず。一自治體、一營利會社の單なる經濟上の問題でない。一國民心の據ふ所を支配する重大なる社會問題と私は見てゐる。

四

話は馬鹿に橫道に入つてしまつたが、元來が非哲學的に出來た私の哲學には、正道たところ橫道も本筋も差別はない。橫道

もつきぬけてしまへば立派な所へ出る位に考へてゐる。今少し横消されてしまふ。

滿山の雪ー 遙にさは／＼と人聲が聞える。

この人聲が遠まきに一帶の澤地を圍んで、段々上の方へ押し寄せて來る。迫子だ。

山の上には網を張つて獵師が待つてゐる。

下から迫子に追ひ立てられて、兎が一つ雪の中へ飛び出した。右も左も迫子のけたゝましい聲。血路は山の方に一つ開けてあるきりだ。

この一つの血路にいやでも應でも兎は進まなければならぬ。其處を行けば網にかゝるか、鐵砲に打たるゝか二つに一つは免れぬ。

兎は雪の上に血みどりになつて仆れた。

これが日本の教育である。

義務教育といつて、子供が年頃になれば何が何でも小學校に入らなければならぬ。小學校六年の課程を經來る間に、いつとはなく、小學をすませば、更に中等の學校に入るべきものだといふ思想が發はれる。實際又今の小學教育だけでは、一公民として世に立つだけの用意は出來ない。其處でよく／＼暮しのよろしいものでない限りは、中等の學校に行くべきものと定つてしまふ。果然此處まで迫子に追ひ上げられた。

中等の學校にも色々あるが、特殊の事情に餘儀なくされた者の外は誰しも農學校や商學校や師範學校に行くよりは中學校に入りたがる。中學校とはその名の如く、中途半端の學校で、日本中のあらゆる學校中最も無用の教育を施す所の學校である。小學校より大學に至る間の中途の豫備學校としてのみ、多少の用には立つが、中學校だけでは、卒業したとて卒業したといふ一種の銀粉（敢て金粉といはず）を引つかけて貰ふに止まり、世に出でゝは全くの時間つぶしになつてしまふことだ。中學校の科目は數々あるが、大別すれば、語學と數學と多少の科學で、その中に語學に就ていへば、漢文の半端、國文も半端、英語も至つては半端の半端だ。小むづかしい文法語格は、肝腎の英語國と同じほどにやかましく教へるが、さて實用となると、話も出來なければ手紙一本碌には書けない。中學校卒業生にして外人に道を聞かれてすら／＼と答へ得るものが幾人あらう。外人の店に入つて滯りなく買物の出來る者が幾人あらう。況んや外人から手紙で何かを頼まれてその斷り狀を書き得る者とては殆どない。斷り狀が書けないから、大低の事は承知してしまふ。大

低の事は頼まれた通りに承知するから、日本の學生は柔順でいゝなどゝほめられる。怪我の功名之より大なるはあるまい。

そしても話は横道に外れた。數學はといへば代數も幾何も三角も皆半端で、大抵の秀才も卒業の後一二年の間に皆忘れてしまふ。たゞ高等の學校に進む者のみに取つていさゝか用には立つが、高等學校に進む者が必ずしも科學者になるとは限らぬから、文學や法律に志ざす者に取つては興味もひかねば利益も得られない。由來日本では普通學の意義をはき違へて、普通人の一應知つておくべきものでも何でもないものを、小學校や、中學校の科目にあるから、知らなければならぬものと心得てゐる。普通學だから小中學に置かれるのでなくして、小中學に置かれてあるから普通學と思はれてゐるのである。普ねく通せざる普通學、われ初めてこれを日本の中學校に於て見た。

高等學校に行く者の外用のない中學校だから、中學校を卒業した者は高等學校か專門學校に行きたがる。行きたがるより何より、高等又は專門學校には中學校卒業生又は之と同等以上の學力を有する者でなければ入學出來ないことになつてゐるのであるから、高等學校には、中學校といふ一筋道しか通つてゐない。前提まで追子が追ひ上げることになつてゐる。

大學といふ名稱に隨喜渇仰の涙を流してゐる今の若い者には、大學でなければ收まらない。この大學に入るには私立大學は別として帝國大學には科によつて、又もや入學試驗が要る。追ひまくつておいて網にかけるの類だ。網を免れて、やつと大學に入つて、やつと卒業すれば、もういゝ加減な年配になつてゐる。短命な日本人には、大學が鐵砲の玉だ。

しきれるだけ仕切つて何者をも一方口へ追ひつめやうとするのが、どの方面にも見らるゝ傾向であつて、制度といふものが無上に幅を利かす。昔日本では如何なる人も内務省の醫術開業試驗を二回受けさへすれば、醫者になれた。今日では開業試驗が廢止されて、一定の專門學校を出た者でなければ、醫者にはなれない。いくら醫者の方が出來ても、一定の專門學校に入るには一定の普通學が出來なくてはいけないといふのである。その普通學といふのが、例の普通ならざる中學校の普通學だ。辯護士も今までは試驗を受けさへすればよかつた。所が之も一定の專門學校へ追ひつめにかゝつた。不幸にして辯護士にもならうといふ元氣のいゝ連中は、この試驗制度の廢止に苦情を唱へて、試驗延期の大運動を試みた爲、時の政府はとう／＼その請を容れて延期と決した。しかしこれも幾年かの後には醫者同樣一方口に追ひつめられるのである。

醫師然り、辯護士然り、官吏に至つてはいふ迄もない、こと〴〵く出入の口が定つてゐる。按摩針醫でも口が定つてゐて、みだりに入れない。そのうち新聞記者も一定の試驗の上か、一定の學校出の者から取ることにもならうか。恐らくその頃には女中登用試驗、植木屋資格試驗、大工檢定試驗などいふものも出來やう。樂んで待つてゐるか。

三月一日から無線放送が始まらうといふ時、何萬といふフワンが勝手に作つた受信機が許さるゝとか許されぬとか大分問題になつた。政府の認可した一定の型にまとめてしまいたかつたらしい。一定の型にまとめずして、フワンが銘々勝手に作つて勝手に放送を受けることゝなつたら、誰も受信料を拂ふ者がなくなつて、放送局の經費を辨ぜんやうがない。アメリカのやうに新聞社が各處でニユースの放送を行へば、新聞社の方は無料でやつて、受信者にも金はかゝらぬが、放送の中心が一個處に定つてゐないと、電話の取締がつかぬといふので、新聞社や何かゞ相寄つて放送局なるものを作つた。作つて見ると、新聞社任せの場合とは違つて、金がかゝるから、何とかこの金の埋め合せをつけなければならない。此處でやかましい規則を作つて、聞えても聞くなといふ事になつた。聞くまいとすれども今日の無電かなで、空中から自然に聞えて來るものを聞くなといふは無理だ。機械にしても各人が完全に所有權をもつてゐるものを、いくら何でもまさか沒收する譯に行かぬから、機械は持つてゐてもいゝが、それで聞いては法律に觸れることゝなつた。そんな事が取締のつくものでない。とう〳〵遞信省も我を折つて、認可さへ得れば、どんな器械を使つてもかまはぬ事になつて結末がついた。この大天大地に何處とも定めず存在してゐる無電放送にまで一定の仕切をつけて、或者には聞かせ、或者には聞かせまいとしたのである。空中に滿ちた空氣を人間が吸ふのは已むを得ぬが、酸素だけ吸つて、窒素は肥料に殘せといふの類だ。今少しすておいたら米國から傳はる無電を聞くなら、輸入關税を拂へといふ事になつたかも知れない。

何でもかんでも、物をいくつにか割つて、其間に區切りを入れなければ承知出來ぬと相見える。

人生を時間にしきり、空間に區切つて、その一片から人生を見渡した積りでゐるのも間違なら、これで他の一片を見ずしてわれとわが心を頼ひて安心しやうとするのも大きな間違である。何事も成るがまゝに任せて、そうツとして置かうでないか。人の力でしきつてしきり切れるものでもなし、くぎつてくぎりおはせるものでもない。民を治むるの道も此處に在る。安

心立命の道も此處に在る。

人生を幾つかに切り割つて便とする者は、西瓜を切つて喰ふの便を知つて、丸ごとの丸いのが畠の青葉の間にころがつてゐる時の美を知らぬ者だ。

全きをこそ、すべてをこそとこひ願く。われは切賣をいやしむ。請ふ、「まるごとの歌」といふのを歌つて、この篇を結ばう。

人の世の如何ならん事にも
　一として意味なきはなし。
たとひそれが如何に哀しいことであつても、
又如何にそれが筋の通らぬ事と見えても、
　必ず其處に何等かの意義がある。
よし、それが智慧限りある人間に分らずとも
　神のみの知ろし召す
　　さるべき意義のないのはない。

運
因果
天の命
神の攝理
佛の導き
　趙州の無字
　庭前の柏樹子

名は何とか名のれ、わが求むるは名に非ず
人の世は一卷の繪卷物に似たり。
　開き行くまゝに見れば、
　　見にくき、美しき、とりどりならさらん。
一卷をことごとく開て初めて一目に。
　いみじき繪卷の姿ぞ見得べき。
苦しみと哀しみとを訴ふること勿れ。
その中にひそめる意義と妙味とを
　探り得ぬわが力の乏しきをかこて。

（附言）この文を書き始めた時は、こんな事を書くつもりではなかつたのです。書いてゐる間に横へ走つてまことに變なものになつてしまひました。

堺利彦傳

堺利彦

▲前の東京學生時代の中に、學校以外の讀書、卽ち新聞、雜誌、新刊書など(殊に坪内逍遙、德富蘇峰、尾崎紅葉等の影響)について書く筈だつたが、その機會を逸してしまつた。後に單行本として出す時、書き添へる積りでゐる。

第三期　大阪時代

(一)　長兄の死

放蕩の子、墮落の子、失敗の子を、老いたる父母は矢張り喜んで迎へてくれた。その時、主人たる兄(平太郎、三十五歲)を失つた小倉の堺家には、六十四歲の父と、六十一歲の母と、卄幾歲の未亡人と、外に十四歲の志津野又郎がゐた。そこに卄歲の利彥が悄然として歸つて來たのであつた。

兄の病氣は急性腹膜炎であつた。非常な苦痛を訴へて一夜の間に悶死したと云ふのであつた。死後、全身處々に紫色の斑點を見たと云ふのであつた。あの雪のように白かつた皮膚に紫色の斑點を想像した時、私はゾットせずにゐられなかつた。父はおもむろに訝つた。兄のこの急死には頗る怪しむべき節があつた。兄みづからもそれを疑つてゐた。兄はその日、銀行の重役の家に行つて重大な事件の相談にあづかつて來たが、特に自ら注意して、茶一杯の外、何等の飲食もしなかつたと云ふのであつた。然し醫者は急性腹膜炎と診斷した。大酒家にはありがちな病氣だと云ふのであつた。兄は實に大酒家であつた。殊に近來、銀行の問題について鬱々たる餘り、平生の大酒がいよ〳〵大酒になつてゐた。病氣はその結果とも見られるのであつた。いづれにしても事は既に過ぎた。致し方はないと云ふに決してゐた。

銀行の問題は、矢張り海山社事件を大きくした樣なものであつたらしい。この銀行はたしか第十七國立銀行で、一時の威勢

は素晴らしいものだつた。私は曾て兄に連れられて其の建物の內部を見せて貰つたが、それが私の初めて見た西洋館であつた。重役は松田、齋藤といふ兄弟で、矢張り士族だつた。この兄弟、殊に松田さんの豪奢な生活振はエライ評判で、四季折々の庭園の作り、殊に綺羅びやかな菊の花壇を前にした盛宴の趣きなどが、嫉妬と羨望とをこきまぜて語り傳へられてゐた。何でも金もうけは銀行に限るそうだと云はれてゐた。然るに堺平太郎はそういふ重役の下に簿記係を務めてゐた。彼は小心者であつた。簿記係として帳簿を正直につけるより外の事を知らなかつた。彼は恐らく種々の誘惑を受けただらう。彼は敢然として重役に反抗するほど大膽な男では無かつたらしいが、然し又、そういふ誘惑に乘るほど不正直な男ではなかつた。そこで彼が邪魔物になつて來たのであつた。兄が死んでから間もなく、二人の重役は行衛を晦まし、銀行は破産してしまつた。これも矢張り、士族の間からブルジョアを出さうとした、そのモガキの一つであつた。

　何しろ兄は死んだ。これは大變だと云ふので、隱居の父が鉢卷をして元氣を出した。然し父にはもう何事も出來なかつた。私は中村家から堺家に復籍して兄の家督を相續した。そして兄の未亡人には紀念の懷中時計を一つ持たせて里方に歸つて貰つた。私の相續した家督は、豐津に殘してあつた家屋敷と、先祖の位牌と系圖と、その外、多少の雜品だけであつた。負債は大抵、兄の死と共に消滅してしまつた。豐津の家屋敷は月五十錢で人に貸してあつたが、後に七十圓で賣れた。その內、無盡の掛金か何かに二十圓だけ引去られて、五十圓だけ受取つたが、當時の我々としては、それがチョット大金だつた。

　それから私の身の振方について、豐津の友人からは、村役場に世話しようと云つて來てくれたが、それは餘りになさけなくて厭だつた。その時、次兄の乙槌は大阪に行つて『花かたみ』といふ小說の雜誌を出したりしてゐた。彼はそれより以前、坪內逍遙の『小說神髓』で洗禮を受け、欠伸といふ號をつけて、福岡日々新聞に續き物の小說を書いたりしたのだつた。それで私もその緣故をたどつて、兎にかく大阪に出る事に方針を極めた。實は私自身も、紅葉の『二人比丘尼』を懷中して歸國したくらいで、みんごと小說志願の文學青年になりおほせてゐたのである。そして又、早くも短篇小說を一つ書いて『福日』に送つたところが、早速それが同紙に連載されるといふ不幸に遭遇したのであつた。

二　英語の先生

明治廿二年の夏、私は大阪土佐堀淀橋南詰の何とかいふ宿屋の一室に私自身を見出した。そこには兄の乙槌（欠伸）と、芝尾喜多夜叉君（入江）とがゐて、文學修業をやつてゐた。芝尾君は兄と私との中間くらいの年配で、前に記した佛山塾の漢學書生だつたが、それが矢張り坪内式の文學洗禮を受けたのであつた。そこで私も『蘭日』に連載された『處女作』を兩先張に示したりして、得々として小さな文才に誇るといふ氣障を極めた有樣であつた。

然し私は何か別に職業を求めないでは居られなかつた。それには先づ英語の先生より外にあるまいと云ふのだつたが、それが結局、天王寺高等小學校の教員と極まつた時、前に豊津の村役場を勸められたと同じなさけなさを感じた。けれども仕方がない。私は毎日、汗を流し流し、土佐堀から天王寺に通つた。その夏の記憶の中に、宿屋が毎度胖飩を食はせるのに困つた事と、通勤の途中、町の辻に出してある接待の麥湯の嬉しかつた事とが殘つてゐる。

斯様にして私は初めて職業に就いた。小學教員といふ事は如何にもなさけなかつたが、それを『英語の先生』といふ所で僅かに自ら慰めてゐた。月給は八圓五十錢。それを初めて全部五錢の白銅貨で貰つた時、ずいぶん澤山あるものだと思つた。

先生として初めて生徒に接つた時の心持はずいぶんへんだつた。何しろこちらはまだヤツト二十歳の少年で、生意氣ではあるが體は小いさいし、大人らしく生徒を叱るなどゝいふ事は氣耻かしくて出來ないし、さうすると生徒が我儘を始めて騒ぎだすし、それを取り鎭めて行くだけの氣事もなく、從つて威嚴がなかつ[illegible]イワイと湧き立つて、どうにもこうにも仕様が無いで困つてしまつた。そんな時、隣室の受持教員がこちらを覗きこんで一騒ぐ生徒達を叱つてくれるので、わづかに一時の鎭靜を見るのが私としては如何にも面目なくつて辛かつた。然しそれは一年級二年級の事で、三年四年となると、生徒の數も少ないし、年も取つて物も分つてゐるので、不慣れな教師を馬鹿にするよりも學ぶ其の實力を認めるのであつた。それで私は段々に、英語の先生から數學の先生ともなり、歴史の先生ともなり、作文の先生ともなつた。その頃の天王寺はまだ半分ゐなかで、生徒の中には、屑糸織の着物に金糸入のビロードの襟をかけてゐる様な古風な娘もあつた。そしてそいふ娘は『先生』の事を『お師匠はん』と呼んでゐた。

三　豊津士族の大坂移住

秋の初、私は天王寺の東門外に一軒の古家を借りた。それは

農家の隱居處で、元來は相應な建築なのだが、今はずいぶんと荒れてゐた。然しそれが丁度わたしに似合つてゐた。家賃は一圓二十錢だつた。私はそこに國の父母を迎へた。志津野又郎も一緒にやつて來た。

斯くて私の一家は、丸で空中からでも落された樣に、ポツリと天王寺の片ほとりに置かれた形であるが、然しそれには色々の因緣があつた。前にも云つた樣に、大阪府知事建野郷三氏は豐前人であつた。それに連れて多くの豐前人が大阪に來てゐた。浦橋家が早くから大阪に出た事も既に前に記した。二月谷志津野の拙三さんが住吉神社の禰宜になつた事も既に記した。然るに拙三さんは程なく身まかり、その跡に直文君といふ養子が來て、それが東成郡役所に務めてゐた。私を天王寺小學校に世話してくれたのは即ちこの直文君であつた。(この人は後に坂鶴鐵道に關係したりして、一かどの實業家に出世した。)そこで私は天王寺に來ても、直ぐ近處に二軒の親戚(浦橋と志津野)を持つてゐた。要するに、豐前の士族が生活を求めて續々と國外に出る時、その一部は相率ゐて大阪に向ひ、そして本吉の兄にせよ、芝尾君にせよ、皆その跡を追ふたわけである。

所が、堺の一家が斯樣にして大阪に移ると同時に、篠田の一家も同じく大阪に移つた。篠田家にはその後、恒太郎君といふ養子が出來てゐたが、これもいよ／＼豐津では法が立たないので、矢張り大阪を目ざした。そして江戸堀邊に小いさた藥種店を出した。堺家の移住に志津野又郎が附屬してゐたと同じ樣に、篠田家の移住には志津野耶が附屬してゐた。つまりこれで志津野家も同じく大阪へ移つたわけであつた。然るに堺家が私の月給八圓五十錢で立ち行かないと同じく、篠田家の藥種店も立ち行かなかつた。八十幾歲の蒼安老が遂に窮迫の中で死んだ。「來て見れば花も紅葉もなには潟、只身を濡す處なりけり」といふ辭世があつた。それから間もなく、又郎君は横須賀の親戚の許に走つて海軍工廠の職工となり、耶君は大阪で何かの工夫になつた。斯くて士族の子の一部は勞働者となりつゝあつた。(篠田恒太郎君は近來まで靜岡縣廳の官吏であつたが、今は同地に隱居してゐられるよし。)

四　天王寺の塔を中心

これから三年ばかり、私の教員生活、天王寺生活が續いた。今でも天王寺は私に取つて最も懷かしい場所の一つである。

あの天王寺の高い塔に幾度登つて四方を見晴した事か。私の目に映つた大坂は、今でもあの天王寺の塔を中心として　總てが展開してゐる樣な感じがする。

天王寺の西門の石の鳥居を出て逢坂を西に降りると、左手に一心寺がある。その直ぐ前に浦橋家があつた。小い石垣の上に建つた家で、その石垣の片隅に夾竹桃が毎年美しく咲いてゐた。（今では勿論、家はスッカリ變つてゐるが、夾竹桃だけは殘つてゐる。）浦橋家には男女の子供が五人もあり、お婆さんが二人もあり、ずいぶん賑かな家であつた。主人の爺さんは、その頃は遊んで居られたが、元は河内邊の郡長など務めた人であつた。父はこの爺さんの夫婦といとこである關係上、よく遊びに出かけては晩酌の馳走になるのを樂しみにしてゐた。私もずいぶんよく出入りして厄介をかけた。

逢坂を降りて今宮に出ると、今の「新世界」のあたりが一面の畑だつた。只その間に『商業倶樂部』といふ一廓の遊園地があり、又一心寺のすぐ下の處に『丸萬』といふ料理屋が新らしく出來てゐた。逢坂の下には奇麗な清水があつて、浦橋の娘達や子供達がよくそれを汲みに行くのであつた。夏の夕暮など、私は殆んど毎日その邊を散歩してゐた事がある。

天王寺から谷町筋を北に何丁か行くと、生玉神社、高津神社などがある。その邊までの處が私の天王寺生活の、云はば繩張内であつた。生魂神社の前を少し東に行つた椽が辻の邊に志津野直文君の家があつた。そこのおばさんや、ねえさんは、勿論、二三月谷以來のおなじみであつた。

道頓堀にも、心齋橋筋にも、中の島公園にも、固より毎度行くには行つたが、それらは只だ大阪の町であり名所であつて、特に自分の親しみを感ずる土地ではなかつた。後に兄が親の大阪日々新聞社にはいつた時、下町の中で、ここだけが少し懷かしく感じた。

私の家の裏は直ぐ畑であつた。大部分は綿畑であつた。そしてそれが河内一面、生駒山の麓まで續いてゐる樣に思はれてゐた。夏になると、其の廣い綿畑の到る處に在る深い井から、丈の高いハネツルベで毎日せつせと百姓達が水を汲みあげては、その畑を濕してゐるが、大變な骨折に見受けられてゐた。それが謂ゆる河内木綿の原料であつた。然るに其の綿畑も、河内木綿も、いつの頃からか全く消えうせてしまつた。そして天王寺東門外の一帶の地が市中になつてしまつた。

五　天王寺小學校

天王寺小學校は天王寺の北手につづく空地の間に在り、尋常校と高等校との二棟から成る粗末な平家建であつた。村役場も直ぐそのそばに在つた。總ての樣子が如何にも都會の町はづれといふ感じであつた。

校長の野村準彦君は三十五六でもあつたらうか、非常に元氣な、よくさばけた、然しながら可なり我儘で强情な、謂ゆるヤり手であつた。私が東京の學生生活の失敗者だと云ふ所に同情してくれて、大へん可愛がつてくれた。この人が總ての教員中で、幾らか書生風を帶びた只一人であつて、私に對して君だの僕だのといふ言葉使ひをしてくれたので、私も好い氣になつて、十幾つかの年長者に對して君だの僕だのとやつてゐた。それが嘸ぞ生意氣に聞えたゞらうとは、よほど後になつて初めて氣がついた。野村君は江州人で、あちこち渡りあるいて教員生活をして來た人だつた。大の酒好きで、少し耳が遠くなつてゐた。

主席の訓導は生田君と云つて、『上の宮』の神主さんであつた。色の白い好男子で、俳諧の方では『南水』と云つて宗匠株であり、歌も作り、畫もかき、書もうまし、オルガンもひけるといふ、多才多藝の人であつた。上の宮の在る處が昔しの百濟野に當ると云ふので、百濟といふ號もつけてゐた。社内に楊の木があるので『楊の舍』とも號してゐた。私はこの生田君から『風流』の事について色々の教育を受けた。生田君の家の茶室で、中板を挾んで靜かに酒を汲んだ事、古い瓦の置き棄てゝある間に秋海棠のゆかしく咲いてゐた小庭の景色などが思ひ出される。生田君の風流は又、色町の方面にも及んで、南地の『芦邊踊』の歌なども作つたりしてゐた。(南水君は今尙ほ健在で、大通人として大阪に有名だと聞いてゐる。)

常石碇君は土佐の人で、針を並べたような短い髮、金壺の塊まりのような大きな顏が、子供達を恐れしめるに足りた。これも大の酒好きで、醉ふと存外、無邪氣な笑ひ顏を見せるのであつた。美しい小柄の細君に煙草店を出させてゐた。森田金三郎君は鳥取の人で、脊の高い、鼻の高い、瘦せられるだけ瘦せた人だつた。平生は全く火の消えた樣な人だが、醉ふと昔の火が發作的に燃えあがるといふ風で、この人も(其の燃えあがつた時の火で)非常に私を愛してくれた。中尾勇三郎君は土地の人で、天王寺の東門外(私の借宅の直ぐ前)に家があつて、富裕を以て知られてゐた。私は當時、中尾君に幾らかの負債をしたが、今日に至るまで返濟して居らぬ。伯水義順君はまだほんの青年で、たしか眞宗寺の息子さんだつた。その外、もうこれ以上に年を取つた先生はあるまいと思はれる老先生や、もうこれ以上に若い先生はあり得ないだらうと思はれる若先生など、まだ數人の敎員があつた。校番の『おつさん』は可なりヨボ／＼した、目のしぼついた老人だつたが、そのおかみさんは存外若かつた。

野村校長はよく田舍の學校にゐた時の話をして、教員室の窓から釣竿を出して裏の池の魚を釣つたりすので、『丸で無茶や』など〻笑つてゐたが、それだけ現在の天王寺校の整頓してゐるのを誇りにしてゐた。然し一面には、飲み會の多い事、歌の會、碁の會のはやる事など、ずいぶんノンキなものだつた。

村長は橋本善右エ門氏で、まる〳〵とよくふとつた其の風采からして、如何にも土地の物持らしい人物だつた。(後に衆議院議員になつたりした。)私は何かの時、少しこの人に突つか〻つて、あぶなくその爲に免職されかけた。助役の赤田瑳一君はまだ若くて、頗る私を愛してくれた。或時、私が割前の拂へない斷りをすると『遊ぶに勇にして拂ふに怯なる、之を眞の遊興と云ふ、意とする勿れ、意とする勿れ』と大いに腹のふとい所を示した。(この人はたしか現に衆議院議員である。)

その頃の男女の生徒の中に、まざ〳〵と私の記憶に殘つてゐる人達が少なくない。それらが皆、今どうして何處に居るやら。多少、消息を傳へ聞いたのもあるが、大部分は私にわからない。人生は左樣にはかない。然し只一つ、最も著るしい人物がある。それは武林男三郎、即ち後の野口男三郎君である。彼は當時、たしか古本屋の息子として、可愛らしい生徒であつた。(私は後に彼と、獄中で最後の交りをした。)

六　俳句、和歌、花見、月見

私の文學熱はまだ小說熱となる機會を得なかつた。俳句熱、和歌熱、古文熱、徳川文學熱、これらが當分の私の思想生活であつた。

俳句の方ではもちろん、南水君が中心だつた。然し南水君は宗匠ぶらずに、矢張り外の連中と一緒に初心顏をしてやつてゐた。野村君は何でも自分に出來ないものは無いといふ調子で、無茶苦茶に作つてゐた。僕は檀林派だなど〻云つて威張つてゐた。檀林派は當時の素人仲間に大流行だつた。兄の欠伸も折々はこの仲間に加つてゐた。後には父も眠雲宗匠として點者の一人になつてゐた。父の無聊はよほどそれに依つて慰められてゐた。私が『枯川』といふ號のつけたのはその頃の事だつた。『かれ野』『かれ川』などいふ俳諧趣味から來たので、『涸川』と書いた事もあるが、『禿山枯川』といふ字面を見つけ出したから、それに極めてしまつた。當時の私の句の一つ。『白壁にブツつけて見る熱柿かな』

歌の方では小菅秀治君といふが中心だつた。これは天王寺から大ぶん東の方の勸橋小學校の先生だつたが、家は逢坂の下の、安居天神のそばに在つて、相當の資産家だつた。入口に藤

柵のある、二階の廣い、落ちつきのよい家で、よくその二階で歌の會が開かれた。そこのおかあさんは切髪の品のよい人で、如何にも歌よみらしく見受けられた。選者は大江神社の神主さんだつたが、堅くるしい事は少しも云はないので、例の野村君や私はずいぶん無茶を通してゐた。眞劍に歌をよむといふよりは、むしろ皆が寄つて遊ぶと云ふ方が主であつた。

　然し私は自然に歌に關する色々な本を讀んだ。『百人一首一夕話』『和歌麓の塵』などいふ俗本から、『古今』『新古今』『萬葉』『山家集』『金槐集』など、大抵のものにはひとわたり目を通した。それから更に私の趣味は、古い和文書類に向つて行つた。例の竹取つれ〴〵、枕の草紙など、一通りの物が濟むと、今度は『源氏物語』を讀破しやうといふ野心を起した。果して讀破したかどうかは分らないが、兎にかく『湖月抄』を皆な讀んだ。それから惡い癖がはじまつた。一面には擬古文を書きだし、一面には古文法崇拜をやりだした。本居宣長の『詞のやちまた』だの『玉霰』だのを熱心に讀みおぼえて置いて、それにのつとつて『ぞるこそれ』流の文章を書いてみたのだから堪らない。然し私はまだ〳〵自分の文章を活字にする機會を持たなかつた。

　和文熱　文法熱の次には徳川文學熱が來た。それは主として近松の淨瑠璃であつた。馬琴、三馬、種彦なども少しは讀んだ。八犬傳は既に豐津で讀み、梅暦、春告鳥の類は東京で讀んでゐた。西鶴は世間の流行に係はらず、私は初から餘り好きでなかつた。

　こうした讀書は、私に取つて皆な面白い遊びであつた。和歌や俳句は固より遊びであつた。碁の遊びも少しはやつた。まだその外に　花見、月見などの遊びもあつた。桃の頃に桃山の花を見るべく　親戚の人達を招き集めて、銘々に辨當を持寄つて、掛茶屋で半日を遊んだ事もある。私はそんな事が好きだつた。或る仲秋の夜、浦橋の一家と私の一家とで、安居天神の內で賑かな月見をした事もある。滅多に外出しない私の母なども、そんな時には出かけるのであつた。安居天神は今でもある樣だが。桃山は總て町になつてしまつた

　遊びと云へば、私はその頃、學校の若い教員二人（伯水君と萩君）と共に、月夜に暗がり峠を越えて奈良に徒歩旅行した事がある。又何かの拍子に獨りで嵐山の花見に出かけて、歸りに汽車賃が無くなつて、それを借りる積りで松井先生の處に行つたが、（松井先生は豐津中學の先生だつた人で、今は京都の第三高等中學の教諭であつた。）久しぶりに善く來たと云つて歡迎されたので、とう〳〵一ばんとめて貰つて、金なんどの事は迚も云ひだされず、翌日たつた五錢の金を握つて、京都から大阪ま

でテクテク歩いて歸つた。その時の句。「十三里、錢は菜の花の中の旅。」

七　不平と飮酒癖

こういふ風に書くと、大阪教員時代の私は、只のんきな、おとなしい、無事平穩な男のようであるが、實は決してそうで無かつた。相應な野心を持ち、自惚を持ち、希望を持つた青年が、たとへそれが一たび飮酒遊蕩に身を持ちくづした、失敗の後であるとは云へ、東京の學生生活から一轉して、忽ち老父母を奉じた極小の月給取生活に落ちたのだもの、それが不平でなくてどうするものか。

然し何と云つたところで、養はねばならぬ老父母が眼前にある。兄は本吉家に養はれた人である。堺家を相續したのが私である。私は父母と共に一家を支へて行くより外に道はない。それに母は既に老いて毎日の水仕事が出來かねる。私が妻を持つか、女中を置くかせねばならぬ。前者は差當り出來さうな事でないので、後者を取つた。月給は八圓五十錢から少しあがつた。府廳の檢定試驗を受けて、英語科專科正教員といふ資格がついてから後、十圓、十一圓まで昇給された。志津野又郎はまだ少年ながら、こういふ有樣の間に居候をしてゐるのが辛くなつて飛びだしたが、それでも親子三人と女中とが十圓や十一圓で生活するのは容易でない。只、父母が豐津以來、質素の生活に慣れてゐるのと、女中が少し愚かなくらい正直で、よく忠實に働らいてくれたのとで、家の中は存外無事に過して行かれた。然し金はどうしても足りない。兄が少しは助けてくれる事になつてゐたが、それも約束どほりに實行はされなかつた。

然しそれだけならば、只だ少し足りないといふだけで、大した困難には落入らない筈であつたが、東京以來の私の酒飮み癖が改まらなかつた。酒を飮まないほどの意久地なしは人間の數に入らないといふ位の時勢であつたので、生來酒の好きな、見え氣味の少なくない青年が、貧の爲に克己的な生活をする事など思ひも寄らない。否、それどころではない、失意の境遇にある彼利彥としては、その失意をごまかして、己れを欺く爲に、わざとでも滿醉淋漓として人前に氣を吐くといふ趣きであつたから堪らない。而もそれが酒ばかりではなかつた。酒は自然に女遊びを作つてゐた。

八　飮み仲間、東京の友人、新聞記者

酒飮み仲間は第一に學校の職員達であつた。野村校長が率先して飮みあるくのだから、多くの者がそれに附き從つた。私

は妹によく近處の料理屋などを連れて歩かれた。清水の八百松、逢坂下の丸萬、生魂の夜櫻など、そうした思ひ出は數々ある。天王寺の北門脇に『金剛』といふ小さな料理屋があつたが、そこは學校に辨當を持つて來たりする家で、職員達が皆な顔なじみで、私もずいぶんよく飲みに行つたが、或る月の夜に、野村校長が醉つぱらつた勢ひで、そこの娘に料理と酒とを持たせて學校の運動場に連れだし、運動用の高い台の上に小宴を開いて『月見』をした事がある。ずいぶん亂暴な先生達であつた。或時は又、職員達が殆んど總出で、南地あたりに押しかける事もあつた。村役場の書記に梅川定一君と云つて、私の同郷人がゐた。豊津中學の知り合が偶然こんな處で落ち合つたのだから、忽ち無二の友人になつてしまつて、ずいぶんよく二人で遊びに出かけた。

東京の友人が折々は私を訪ねて來てくれた。それが私に取つては、懐かしくもあり、羨ましくもあり、そして又、恥かしくもあつた。犬塚君は高等商業學校にはいつて、或る夏、横笛一本を携さへてやつて來た事がある。この人だけは品行方正であつたので、一緒に今宮の商業倶樂部を散歩して、月下に横笛を弄しただけで別れた。小林助市君は白金の明治學院をやめて、先輩であり親戚である岩崎小次郎さんが滋賀縣の知事をしてゐるのをたよつて、暫らく大津にゐると云つて遊獵者姿で鐵砲を持つてやつて來た。川村藤吉君はまだ辯護士にもなれないで、暫らく國に歸ると云つてやつて來た。末延直馬君も學校をしくじつたといふ話を聞いた。杉本平二君は私と一緒にしくじつたが、更に慶應義塾にはいつた。と聞いた。川村君と私と會つて、もちろん飲まないではゐられなかつたもちろん遊ばないではゐられなかつた。小關雅樂君もやつて來た。これは首尾よく高等中學に居るには居たが、寧ろ文學的な人物が工科を志願して、圖を引く事なぞ僕には迚も出來ないんだと云つてムシヤクシヤしてゐた。ムシヤクシヤはお互ひなので、ずいぶん盛んに二人で飲んだ。その時、小關君の私に示した詩をよく覺えてゐる。『衫上酒痕舊時態。十年遊子又逢春。』小關君は迚も學校を卒業しないだらうと思はれた。

私は東京の友人に會ふ度に、今の生活のみじめさをつく〴〵感じた。友人達が必ずしも皆な得意ではなかつたけれども、私の様な困難の地位に居る者は一人もなかつた。東京に對するあこがれ、小學校の先生たる身の上、私はジレ〴〵して堪らない氣持になつて來た。その間に、只すこし私を慰めるのは、兄を通しての新聞記者方面の交りだつた。

その頃、芝尾君は既に國に歸り、兄は大阪日々新聞といふ小

さた新聞の記者になつてゐたが、私もその縁故で、たまには少しくらゐ何かの雜文を其の新聞に載せて貰つたりして、漸く其方面に希望を持ちはじめた。勿論まだ、例の『ぞろこそれ』を大いに發揮する所までは行かれなかつたけれども、いつかは自分も新聞記者になれそうだと思はれた。そして同時に又新聞社の人達が皆だらしのない放縱な生活をしてゐるのが、何か大へんエライ、脫俗的な事のように思はれたりして、自然にそれを眞似る氣持になつた。そんなやうな事からして、新町、松島などの夜景にも大ぶん親しんだ。

或る時、新聞社の人達と一緒に堺の大濱に遊んだ。新聞社の人達と一緒にブラ〳〵遊んで歩くといふ事が頻りに嬉しく感じられた。所が、その歸り道に、皆が連れ立つて天王寺の前から谷町を北に向ふ時、ちようど私の學校の前を通つた。『こゝが僕のゐる學校だ』と私が云ふと、『ハハア、これが君のプリズンか』と一人の新聞記者が云つた。私は突然に『プリズン』（牢屋）といふ言葉を聞かされて、內心深くヒヤリとした。

九　土佐落ち

こういふ私の放縱な生活は私の身邊を借金だらけにした。或日、今日こそはどうしてもせめて五十錢でも何處かで借りだして持つて歸らないでは、父や母に申譯がない。申譯はどうでも好いとして、實際、年寄二人を干ぼしにする事になる。と云つて何處の誰にすがりつかう樣もない。すがりつけるだけの處には既にすがりついてゐる。私は進退きわまつて、とう〳〵道ばたの石に腰かけて、永いあいだ途方に暮れてゐた事がある。

こうした窮乏の結果、或る月の末に、私は月給を貰つたまま、それを旅費にしてフイと土佐に走つた。川村君が國に歸つてゐるのだから、それにすがりついて見ようと考へたのであつた。これは後に考へて見ると、川村君にこれ〳〵の金策をして貰つて、それを持つて歸つて借金の片付をしようといふ風に、ハッキリ見込をつけ、方策を立てたわけではなく、むしろ只、しばらくでも、苦しくて苦しくて堪らない現在の立場をどうにかして逃れたいといふ一心であつたかと思はれる。

たしか秋の事だつたが、私は飄然として土佐の高知に着いた。高知から川村君の家（安藝郡井の口村）まで又十里以上もあつたらう。途中の山畑に蕎麥の花が白く咲いてゐた事を覺えてゐる。川村君は近ごろ細君を迎へて、暫らく國に落ちつく積りで、鑛山か何かの事業をやりだしてゐる所だつた。そこに、東京の惡友、大阪の道樂者が訪ねて來たのだから、それが親達から歡迎される筈はなかつた。それでも遠方からたよつて來たも

のを突き放すわけにも行かず、おつかさんが色々と世話を燒いてくれ、殊に若いお嫁さんがずいぶんと心配してくれた。川村君も少々持て餘したに相違ないが、そこは親分肌で心よく引受けてくれた。それで凡そ一月たらず、或は一月あまりも、私は川村君の家にゐたり、或は川村君について近處の土地を歩きまわつたりした。

　或時は、蛇の多いといふ山を、夜中に松火を振り照らして越えた事もある。或時は高岡の宿屋にとまつて長曾我部だの香曾我部だのの昔話を聞いたりして『旅あはれ、晝は機音、夜は砧』などやつた事もあつた。何處かの茶店で、大きな鰹のおかずで晝飯を食つた時、その代が二錢だつた。何しろ鰹は盛んに食はされた。例のタタキがうまかつた。安藝の町では、謂ゆる料理屋（實は曖昧屋）でずいぶん飲んだ。井の口村は岩崎彌太郎、彌之助等の出生地だと聞いて、何だか非常に特別な土地柄のような氣がした。我が川村君がその土地の生れとして、或はそれと同じような大成功をするのではないかとさへ、私は空想した。私は又、井の口村の彼方に聳えてゐる高い山の昔話を非常に面白く聞いた。昔しそこに山城があつたが、それが豐臣勢か何かの爲に攻め落された時、そこの奥方やお姫さまや女中達が、火のついた高い御殿の上から、その直ぐ裏の深い古い池の中に、皆んな飛びこんで死んでしまつた。

　私は長い滯在で川村君（殊に若い細君）に厄介をかけただけでも濟まないのに、まだその上に何程かの助けをして貰つて、神戸行の汽船に乘つた。その頃の高知の港はまだ古風なノンキなもので、川村君は二三の友人と、一二の女とを連れて、ハシケで私を汽船まで送り、汽船の今出るといふまで、ハシケの中でチャン〳〵三味線を鳴らしながら飲むといふ騷ぎだつた。土佐の高知の播磨屋橋で、盲が目がねを買ひよつたり、坊んさんがカンざしを買ひよつたりする、例のヨサコイ節を無茶苦茶に繰返すのか、何とも云はれず無邪氣で面白かつた。

一〇　教員生活の足拔

　然し大阪に歸つて見ると、中々そんなノンキな話どころでは無かつた。堺はもう歸つて來ないかも知れない。利彦は若しか死んだのではあるまいかといふ騷ぎだつた。然し苦勞人の野村校長は私の爲に色々と取りつくろつて、私の地位を繋いでおいてくれた。而も不在中の月給もスツカリ貰へるようにしていをてくれた。それで私は諸方面に對して極まりの惡い思ひはしながら、矢張り引續いて『先生』を勸めた。

けれども私の家の財政は、もうどうしても其まゝではやつて

行かれなかつた。それでいよ〳〵仕樣がないので、差當り、暫らくの間、私の一家を擧げて兄の家に同居する事になつた。兄はその頃、朝日新聞に入社して、大分工面も善くなつたので、國から妻子を呼び寄せて、家を持つてゐたのであつた。それで私が兄の家に同居したと云ふのは、モット適切に云へば、兄の家に轉がりこんだのであつた。

兄の家は初め濟堀に在り、後ち桃谷に在つた。兄と私とは兄弟でもあるが、友人でもあつた。共に飲み、共に語る事は、二人の最も愉快とする所であつた。私が兄の家に轉がり込んだからと云つて、兄が厭な顏をするでもなし、私がしよげた顏をするでもなかつた。只、兄嫁（お浪さん）と父母との間には、双方、遠慮や苦勞の多かつた事と思ふ。然しその頃の若い私は、まだ大してそんな事の思ひやりもなく、從つて何等のヒガミもなく、又その姉さんなる人が如何にも溫順な好い人であつたので、別段何事も無くて濟んだ。

或時、濟堀の家で、兄と私と、箕面の若葉を見物に行くと云ふので、草鞋をはき、檜木笠をかぶつて、大變な身仕度をした。所が、表に出てから考へて見ると、餘り懷中が寂しすぎる。いつそこれは宿車に乘つて行く事にしやう。それなら月末拂で濟むからと、草鞋檜木笠が二台の車を連ねて箕面まで往復した。そんなフザけた眞似もあつた。然し桃谷の家になつてから、私はどうしても私の酒に制限をつけねばならぬ事を痛感した。然し全く禁酒もなし得ないので、一月に一回、月給を貰つて來た日だけ、一升でも二升でもウンと飲む。その外は一寸も飲まぬと極めた。そんな事がいつまで實行されたか覺えないが、何でも兄と二人で、家内の人達を皆寢せてしまつたから、玄關の三疊で夜明まで飲みつゞけたりした事もある。

その頃から私もいよ〳〵新聞方面文學方面との緣故が深くなつて、ヤットの事で教員生活から足拔をする事が出來た。私は初めて新聞記者といふものになつた。ずいぶん怪しい、小いさな新聞ではあつたが、とにかくそこの雜報記者になつた。何しろこれは私の生涯に取つて、一つの發展であつた。小學教員から新聞記者への立身出世であつた。月給も十五圓に上つた。所が、その立身出世の新らしい地位は、僅か二ケ月ばかりで免職になつた。それは新聞社の經濟上の事情にも依る事だつたらうが、一つには、堺は生意氣でいけないといふ事だつたらしい。今では其の新聞の名も忘れてしまつた。

その以前私はヤット兄の家を出て、直ぐ其そばの小いさな家に移つてゐた。五軒長屋の一軒で、ガサ〳〵の二階建だつた。私はその小い城廓に立てこもつて、新聞社免職後の浪人生活を

やる事になつた。まさか再び教員生活に跡戻らうといふ氣持はしなかつた。それが明治廿五年、私が廿三歳の時だつた。

一一　中江、征矢野、末松

大阪に於ける三四年の間、私は文藝癖と遊蕩癖との爲めに、政治上の事には頗る冷淡であつた。然し間接ながら自由民權思想の洗禮を受けて來た青年として、全く其の方面の情熱が無くなる筈はなかつた。保安條例で東京を逐はれ、大阪に來て新聞を出してゐた中江兆民の奇矯な逸話などはずいぶん私の心を刺激した。兆民先生は或時、半纏股引の職人姿で演說をやつた。兆民先生は又、自ら好んで西濱の新平民を代表して議會に出た。兆民先生は毎晩、盛んに飮み、盛んに談ずるが、コロリと横になると忽ち鼾聲雷の如く、旁若無人に眠つてしまふ。それかと思ふと、翌朝早く行つて見ると、いつの間にかチヤンと其日の新聞の論說が出來てゐる。兆民先生は又、金の煙管を持つてゐるが、氣焰を吐くついでに、それを滅茶々々に叩きつぶして、ペチンヤコにしてゐる。兆民先生は或時、さん〴〵醉つぱらつてエライ勢ひで何處かの遊廓へ押し出したが、フト途中で母親の事を思ひだしたと云つて、忽ち車の向きをかへてサツサと家へ歸つてしまつた。そんな樣な話が無數に傳はつてゐた。(この時、幸德秋水が兆民先生の玄關番をしてゐたのだそうだ。これは後に聞いた話。)

第一回の衆議院議員の選擧の時、(即ち明治廿三年)、私の非常に失望した事が一つある。豐前の國からは、我々の尊信する先輩、征矢野半彌さんが、勿論出る事だとばかり思つてゐたのにそれが末松謙澄との競爭になつて、とう〳〵末松が當選してしまつた。末松と云へば佛山熱川身の先輩ではあるけれども、伊藤博文の婿として藩閥官權の代表者である。それが多年民權自由の功勞者たる征矢野さんを壓倒するとは何事だらう。殊に、行事、大橋邊の富豪等が皆な末松方に傾いたので　金力のない征矢野さんが遂に負けたのだと聞くに至つては、自由黨びいきの青年として、實に堪らない氣持がした。實際その時には、末松謙澄が憎くくて憎くくて堪らなかつた。

一二　一つのまじめな戀

お前は自分の戀愛について少しも書かないぢやないか。遊びをした、放蕩をしたといふ樣な、抽象的の事ばかり云つて、婦人との關係を一つも具體的に白狀しないぢやないか。こういふ批評が何處からか出さうな氣がする。如何にも御尤もです。

然し私は餘りさういふ事を書きたくない。一つには、現に非

人、若しくば其人の近親者が生存してゐる時、それの迷惑を思はず、それの感情を憚らないで、自分の勝手な事を書き散らすに忍びない。又一つには、兎にかく私はさういふ事を書くのが恥かしい。それも大した惡事と感じてゐる事なら、恥を忍んでも告白を爲し、懺悔を爲す必要があるかも知れないが、ありふれた小いさな戀愛事件を何も仰々しく書き立てるには及ばないだらう。有のまゝに書くのが自傳の精神だといふ説もあるだらうが、恥かしい事を恥かしいとして置くのも、また自然の行き道ではあるまいか。懺悔と稱し、告白と稱し、有のまゝを書くと稱して、實は自らの戀物語に我知らず有頂天になつてゐる場合も、世間にはある樣に見受けられる。それも無邪氣な、人間の弱みだとすれば、別だん咎めだてをする程の事でもないが、それが爲に、他の人が恥かしがる心持を押しつけて、强いて自分達の流義に從はせようとするのは、少し無理だと思ふ。

私にも勿論、多少の戀愛事件がある。豐津の少年時代にも、幾分かの匂ひ、何程かの接觸はあつた。（九州の土地柄として男色事件も勿論あつたのだが、それは猶さら恥かしくて話されない。）東京の學生時代には、只だ吉原の無茶な遊びがあつただけで、戀愛らしいものは一つも無かつた。つまり、それまでの所、私の性的生活は極めて平凡な、物質的なものであつた。

大阪では一つのまじめな戀があつた。それが私の初戀だと云つてもいゝ。然しそれは失戀に終つた。そして彼女は程なく死んだ。私は彼女に對して深い知己の感を持つてゐた。私が貧弱な教員生活をして何ら將來の希望も示してゐない時に、彼女は堅く私を信じてくれた。彼女は、私が他日必ず、何らかの方面に多少の頭角を現はすべき事を期待してゐた。それも、愛を感じた男に對する、若い女のありふれた心持だと云つてしまへば、誠に只それまでのものだが、當の男としては矢張り感激せざるを得ないのだつた。

私は彼女と手を觸れあつた事すらもない。其の交りは極めて古風な、極めて堅くるしい、或は極めて幼稚な、或は極めて臆病なものだつた。一面に於いて、飮酒遊蕩の亂暴狼籍を演じてゐる男が、他面に於いて、どうしてそんな道德的態度を取つたのだらう。それは女の理智的な氣品に懾せられたのだと解釋する事もある。然し又、それが即ち私の性質の二方面だと見る事も出來る。更に又、私が一面に物慾を恣いまゝにしてゐた結果、一面に精神的であり得たとも考へられる。

何にせよ、彼女は情を矯めてゐた。そして只、私の理解を求めてゐた。彼女は家庭の事情に身を殉じてゐた。然しながら飽くまで私の面目を傷つけない事を誓つてゐた。彼女は私と結婚する事なしに、如何にして私の面目を保たしめる積りだつたらう。所が、その疑問は無用になつた。彼女は早くから旣に病ひに罹つてゐた。そして間もなく死んだ。『盃一つ、闇に呑まれて消えにける』

豐太閤をめぐる女

高須芳次郎

（一）

太閤がその最愛の美姫、淀殿の水々しい娘姿をはじめて見たのは、天正十一年、信長の麾下で剛の者と云はれた柴田勝家を征服した春であつた。その時分、太閤は五十歳にまだ二三年の間がある頃で、はちきれさうな元氣を面上に現はしてゐた。また可なり、女好きでもあつた。太閤は北國の女に相當の期待をかけてゐたが、從戰に氣を取られて、享樂から暫く遠のいてゐた。そして砂を嚙むやうに殺風景な陣中生活を眞面目に續けたのである。

ところが、もう勝利の見込が確かに定つて勝家が一兩日のうちに亡滅する間際、北國の花の魂がぬけ出したやうな美少女三人が一時に太閤の前に現はれた。享樂に渇してゐた太閤の眼はある新しい驚異を見出したやうに歡喜の色を示した。三人の少女のうちで、一番年長と思はれるのは、十五六歳の佳人で、花ならば半開にちかい艷麗さを漂はしてゐた。彼の女の眼は青い湖のやうに澄んで、珊瑚珠のやうな脣のあたりにかすかな微笑を含んでゐた。そして豐かな白い頰、端正な鼻の形など何處を見ても一點の難を入れることが出來なかつた。

「無雙の國色ぢや」

太閤は心のうちで、かう呟いて、優れた名器を鑑賞するやうに彼の女を見つめた。彼の女の視線が太閤の視線に觸れると、太閤は稍狼狽したやうに視線を次ぎの女に轉じた。そして太閤は更に女たちの後に平伏してゐる附添ひの男を見た。かの女らが太閤の陣屋へ來たわけを明かにするには、天正元年、近江の小谷城が陷つた悲劇を回顧しなければならぬのである。その時分、小谷城に籠つた淺井備前守長政は織田信長に攻めたてられて、もうどうすることも出來ない悲況に沈んだ。長政は自殺の

決心をしたが、せめてその美しい妻だけは助けたいと思つた。といふのは、長政の妻が信長の妹に當るので、氣象のはげしい信長も流石に骨肉の愛を捨てぬであらうと察したからである。

　それで長政はその妻小谷の方――お市殿とも云つた――に向つて、「もうかういふ有様になつては仕様がない。私は潔く自殺する。が、お前は信長の妹だから、生き殘つて私の亡き跡を弔ひ、三人の女兒らを育てゝほしい。」と云つた。けれども小谷の方は飽迄、その夫と運命を共にしたいと思ひつめたので「それは餘りに情ない御言葉でございます。もし貴郎ばかりを先立てて、私のみ後へ殘ると、あれが薄情な淺井の妻かといつ迄も世の人たちから笑はれねばなりませぬ。どうぞ私も是非冥途の御伴をさせて戴きたうございます。」と再三、長政に迫つた。

　長政は妻の言葉に深く動かされたが、三人の女兒のことが何よりも氣になつた。長女は五六歳、あとの二人も相當に可愛い盛りに育つてゐるので、父の情として、その長い未來の幸福を望んだ。それで長政は率直に胸のうちを告白して、「お前の心は私にもよくわかつてゐる。私はそれを嬉しく思ふ。けれども私は後に殘る娘らが何より可哀さうでならない。信長も娘らに對しては冷かであるまい。何とか世話してくれるであらう。そこで私は最後の望みとして、お前があの娘らを伴うて靜かに何處へか落ちのびてほしいと思ふ。」と熱情こめて妻に云つた。小谷の方も臨終の夫から、さう切に頼まれると、夫の意に背きかねた。彼の女は涙にぬれながら、悲壯な夫の最後を見る斷末魔に三人の娘たちをつれて、小谷城を去つた。それは初秋の風がそつと城の壕の水を吹く頃であつた。

　小谷の方は藤懸三河守に衛られて、事なく、信長の陣所に着いた。信長は長政の望みを聞いて快くうなづいた。そして小谷の方らを信長の弟、上野介信兼に托し、尾張清洲城にをらせることにした。かうして十年の日子がいつの間にか流れ過ぎた。長政の娘たちは、いづれも美しい處女になつた。元來、織田家には美女、美男の系統があつた。信長は痩せて神經質であつたが、優雅な顏付をしてゐた。そして小谷の方は色が白く、眼が涼しくて、艶麗の美女であつた。三人の娘たちは小谷の方によく似てゐた。殊に長女の容貌は水際立つてゐた。小谷の方は唯その娘たちの未來に望みをかけて、わびしい日を送つたのである。

　ところが、天正十年初夏、信長が俄かに本能寺で明智光秀のために殺されたので、小谷の方もぢつとしてゐるわけにゆかなくなつた。丁度、その時分、織田家の宿將が清洲にあつまつた際、小谷の方についての話が出て、彼の女を妻に迎へたいと望

むものが二三人あつた。傳說によると、太閤もその一人であつた。が、柴田勝家も亦小谷の方の美貌に心を打込んだので、二人の間に戀爭ひが起つた。勝家は戀の女神に祝福せられて、太閤に勝つた。そして織田信孝の肝入で、小谷の方を自分の物とした。かういふ傳說は後人の想像で、太閤には關係がなかつたと察せられる。かうして小谷の方は三人の娘たちと北國に赴いて、新しい生涯をはじめた。勝家は心から夫人を愛した。

勝家の夫人となつた小谷の方は一時、幸福の光に包まれたが、程なく、破滅の運命に見舞はれねばならなかつた。それは勝家と太閤との間が不和になつたからである。勝家の旗色は最初よかつた。けれども日の出のやうな勢を荷つた太閤には所詮、敵しかねた。天正十一年四月下旬、北の庄の城がもう直ぐに陷らうとした間際、勝家はせめて小谷の方だけ、助け出したいと思つた。

それで勝家は夫人に向つて、「今日の落城に臨んで、私の氣になるのは、お前の身の上である。元來、女性は戰爭に何の關係もない。決して私と運命を共にするに及ばぬ。それにお前は太閤に取つて主筋に當るから、太閤も先君の大恩を思うて、わるく取計らうまい。何とかして城を出て、平和な餘生を送つて貰ひたい。」と云つた。ところが、小谷の方は勝家の言葉を聞くと、沈痛な色を浮べて、屹と決心したらしかつた。

「貴郎の御心づかひは嬉しう思ひます。けれども私が今日、かうした悲しい目に逢ふのは、以前、長政と一緒に死んで了はなかつたからだとつくづく身に染みて考へられます。私はもうこの世に淋しい未練がましい生を續けたうございません。貴郎のもとへ來て、まだ日數はたちませぬけれども、やはり夫婦の契りを結んだ上は、貴郎ひとりを先立てるわけにはゆきませぬ。私も一緒にこの世を去つて、長い未來を契りたう存じます。」

小谷の方が雄々しく、かう云つたので、勝家はひどく喜んで、「では死の運命を共にしよう。」と云つて一夜、諸將士をあつめて盛宴を張つた。夫婦はそれを名殘に世を去つたのである。ところが、その死に先立つて、勝家は夫人の伴れ子三人をその臣、富永新六郎に託し、太閤の陣所へ送つた。勝家は新六郎に旨を含めて「この三人の娘は私の子ではござらぬ。いづれも淺井長政の子でござる。それには先君の血を引いてゐる關係もござるから、どうぞ充分に保護を加へられたい。これが勝家最後の御願ひぢや。」と傳へさせた。

(二)

三人の美少女が、僅かに太閤の陣所にその姿を現はしたのは以上のやうな關係からであつた。太閤は新六郎がどうして來たのかと思つたが、仔細を聞くと、心から娘たちに同情した。

「勝家殿の御配慮は最も至極でござる。孃さんたちは私の主筋に當るから、疎かには致さぬと何卒勝家殿に御傳へ願ひたい。」

太閤はかう云つて、三人の美少女を保護することを固く引受けた。その三人のうちで一番目につくのは長女茶々――野々とも云ひ傳へられてゐる――であつた。前に述べた通り、太閤の眼にも、その冴えた美しさが第一に印象せられた。それに茶々は聰明で處女の高い誇りをその涼しい母ゆづりの双眸に現はしてゐた。後に太閤の愛を一身にあつめた淀殿はこの茶々であつた。

茶々が太閤の側室となつたのは、二十歳を過ぎてからである。年齢の上から見ると、太閤と茶々とは親子のやうであつた。茶々の胸には別に若い、美しい貴公子の俤が、未來の夫の影像として、おぼろ氣に描かれてゐたにちがひなかつた。兩親に別れて世智辛い世に殘された彼の女は太閤が親切に世話してくれるのを喜んだであらうが、そこには自分の戀人に對するやうな情緒が起らなかつた。何となく、第二の父――それも自分の昔の身分から云ふと、いくらか地位の低い父とでも云ひたい人に對する情緒を喚び起したにすぎなかつた。猿のやうな顏付をして、身長も高くない太閤は茶々に取つて、戀の對照とするには、余りに隔りがあつた。

ところが、太閤自身はさう思はなかつた。彼れの風采は昂らないけれども、氣は青春の人のやうであつた。そして太閤は茶々を世話した最初から、自分の娘のやうに思ふよりも、戀の對照として見るのがふさはしいと感じた。最初、彼れは成るべく、さうした思ひを外面に現はすのを避けてゐた。それとなく、よく氣を付けて、茶々を喜ばせるやうにしてゐた。そのうち、二年經ち、三年經つて、太閤の心持が茶々にわかるやうになつた頃を見計らつて、腹心のものに茶々を說かせた。

最初、茶々はその話を聞くと、顏を赤らめた丈で何とも答へなかつた。彼の女は寧ろそんな話を自分にするのは意外であると云つたやうな色さへ見せた。何一つ、太閤の意の儘にならぬことはなかつたが、若い、水々しい主人筋に當る一美女を自由にすることは、流石にむづかしかつた。手一つ動かすと、多くの軍隊を機械のやうに自由にする太閤も、茶々の黑髮一筋さへ左右するわけにゆかなかつた。

が、老巧な太閤は失望しないでゐた。そして亦た折を見て腹

心のものに根氣よく茶々を說かせた。それが度重ると、茶々も萬事、よく氣の付く太閤の愛を素氣なく拒みかねるやうになつた。かうして茶々は二十歲過ぎてから、太閤の側室となつた。太閤の喜びは十年も一時に彼を若がえらせたやうであつた。新しい戀の成功に伴ふ新しい希望、新しい興味が太閤の胸に滿ちた。

それから、程なく、太閤は茶々のために山城の淀に土地を選んで、そこへ城を築くことにした。淀は永正の頃、細川氏の属城であつたが、元龜の時代に三好黨の岩成主稅助佐通が茲に據つた。後、織田氏の將細川藤孝がこれを陷れた。淀は京都に取つて一の要害で、相當に重く見られた場所であつた。太閤はかうした由緒ある地に側室の居城を作つたのである。その建築を監督したのは太閤の弟、豐臣秀長であつた。それが出來上つたのは天正十七年三月である。

茶々が淀に移つて以來、太閤はそこへ度々通つて、茶々のことを「淀の女房」とも、また「淀のもの」とも呼んだ。太閤には淀殿のほかに愛妾、侍女が少くなかつた。そのうちで松の丸殿、三條殿、加賀局などは太閤の愛を受けた主要な女性であつた。それらの美女は太閤及びその正妻北政所を中心として群星のやうに輝いてゐた。そして太閤の愛妾はいづれも名門の出であつた。松の丸殿は京極長門守高吉の女で、若狹の武田孫八郎の妻となつたが、武田が亡びると、太閤に思はれてその側室となつた。彼の女は淀殿に次いで愛せられ、伏見の松之丸にゐたので、松之丸殿と呼ばれた。三條殿は近江日野の城主、蒲生賢秀の娘で、太閤が柴田勝家を破つて引上げる折、日野に宿つたのが緣となつて側室にしたのである。加賀局は前田利家の娘である。が、それらの中で、太閤が最も熱情をこめたのは淀殿であつた。

それは淀殿の際立つた美しさと若さとが自然太閤を魅した爲めであつた。が、淀殿にはその他にも、太閤の心を巧に操る力があつた。彼の女は早くから、眞の父に別れて、他人の間に育つた。彼の女は母の暖い愛ばかりに浸りきつてゐるばかりにゆかなかつた。世の中の苦勞を知つた十年間に彼の女は自然、人の心を讀む術をも知つた。それから母が柴田勝家に再嫁してからも、義理の父に對する遠慮や心づかひのために、人知れず、淋しい思ひをしたことがあつた。かうしたことから、彼の女は同じ年頃の處女にくらべると、いくらか大人(おとな)びたところがあつた。

それで淀殿は、太閤の寵を受けるやうになつてから、よく太閤の氣質を吞みこんで、成るべく、太閤の心を捕へやうと力め

た。無論、最初はさうでもなかつたのであるが、次第に太閤に親むにつれて今度は太閤を自分ひとりの物にしたいと思ふやうになつた。はじめのうちは、淀殿も眞の戀から太閤に近付いたのでないだけに、唯義理から身を任かせるといふ風で、何となく、冷かな投げやりの態度を見せてゐた。そして處女の特權ともいふべき高いプライドや我儘をかくすことなしに、太閤の前に示した。それが太閤に取つては、一つの好ましい表情のやうに思はれた。太閤は淀殿を側室とするまでにいろいろの女性を愛した。その數は恐らく、秀次の侍妾――三十餘人と云はれる――にもゆづらないであらう。けれどもまだ淀殿のやうに美しく、そして淀殿のやうに高いプライドを持つ女を見なかつた。そこに太閤に取つて、まだ知らぬ新しい情味があつた。そして太閤は淀殿に逢ふ度に、そのプライドに共鳴して、力めて淀殿の歡心を收めようと、萬事に注意した。

そのうち淀殿は漸く太閤に對して打解けた樣子を見せるやうになつた。そして時には拗ねて見たり、また時に甘へて見たりした。場合によると、他の寵姫のことなどを話して、輕い嫉妬の閃きさへ現はした。太閤はさうした淀殿の嬌態に吾知らず、引付けられた。そしてかの女を自分の眼の中に入れたいほどに愛着の情を燃やした。

（三）

その後、淀殿は天正十六年、太閤の種をやどして、翌年夏、鶴松といふ公子を生んだ。この事あつて以來、太閤の愛はまるで淀殿にあつまつたやうに見えた。といふのは、長い間、太閤に實子がなかつたからである。太閤には姉智子、異父弟秀長、異父妹旭姫などがあつたが、小供には緣がうすかつた。それで彼れは止むなく、北政所の姪、秀秋を養子として、自分の子のやうに愛した。けれども太閤は次第に老境に入るに及んで、一人でも宜いから、實子がほしいと深く思ひ込むやうになつた。秀秋一人だけでは物足りなかつた。

太閤は自分の思ふことに何一つ不自由しなかつたが、子供のことだけには、一番長く心を惱ました。彼れは秀秋のほかに姉の二男秀勝を養子としたが、朝鮮征伐の時に歿した。その他、二人ばかりの養子があつたが皆早世した。が、太閤も五十歳以前には、享樂や功名に忙はしくて、それらのことについて、左程淋しくは思はなかつたが、五十の坂を越すと、そこに一種の物足りなさを感じた。生來賑か好きであるだけに、太閤は秀秋ひとり位ではとても滿足出來なかつた。どうしても二三人ばかりの實子がほしくなつた。

けれどもこの望みばかりは、太閤の意の儘にならなかつた。妻妾の數は多いけれども、正室には最初から子がなく、愛妾らも亦子を生まぬとすると、「俺は一生子なしに終るのか、そして豐臣家は實子の手にゆづり渡して死ぬことが出來ぬのか。」と思ふと、太閤はひろい沙漠の中に唯ひとり取殘されたやうな寂寞を感じないでをられなかつた。無論太閤は忙はしさにまぎれて、さうした感じを忘れることもあつたが、すこし暇を得ると、何かの機會に不圖、小供のことについて思ふ場合があつた。さうした時、彼れは人知れず、わびしい、やる瀬ない思ひを抱いた。

さうした中に太閤は、唯一つ、淀殿に望みをかけてゐた。淀殿の豐滿な、ふつくらした肉體の健かさ、水々しさを見ると、太閤は、「この女なら、或は子を生むかも知れない。」と考へた。が、太閤はまた性慾の上に不攝生な生を續けて來た過去を振返つて見て「もう俺には子種がないかもわからない。して見ると、たとひ淀が若くとも、またどんなに健かであつても、子が出來るとは思へない。」と自分の望みを打消してしまふこともあつた。

太閤がかう自己の生を悲觀してゐると、ある日、淀殿の侍者が來てその姙娠したことを知らせたので、急に飛び立つばかりに喜んだ。それは太閤に取つて、丸で夢のやうに思はれた。最初彼れは自分の耳を疑つたほどであつた。太閤は多年の望みが始めて玆に達せられるべき時に逢つたので、初戀の女が始めてその愛人に逢ふやうに誕生の日を待ちかねた。その秋、太閤は北野に大茶會を開いたが、これも彼れの喜びの閃きであつたとも見られた。そして翌天正十七年夏、淀殿が障りもなく、公子鶴松を生むと、太閤は相貌をくづして悅んだ。それは彼が五十三歲の時であつた。

太閤は、淀殿によつて、自分の唯一の望みを達することが出來たので、淀殿を愛する念が一段深くなつた。彼れは松の丸殿や加賀局などを疎外しなかつたが、自然、淀殿にその愛を傾けた。北政所は正室として、充分重く見たし、また昔の儘の愛情をも持續したが、太閤の胸の奥に一番深く、鮮かに印象せられたのは淀殿の艷姿であつた。太閤は何處へ至つても先づ淀殿のことを思ひ出した。かの女の一顰一笑までが、美しい繪卷物のやうに太閤の心眼を始終往來した。

それで太閤は天正十八年三月、關東へ出かけて、北條氏政を征伐した折、陣中、淀殿のことを頻りに思つて、四月十一日、手紙を正室、北政所に寄せ、淀殿を小田原へ迎へることにした。その手紙には先づ公子鶴松のことを記して、「若君戀しく候

へ共、何々のため、また天下を穏かに申付く可候と存候へば、戀しきことも思ひきり候。」と父としての愛情を述べ、さきに陣中の無聊を慰めるため、「各々へ申ふれ、大名共に女房を呼ばせ、小田原にあり付き候へと申ふれ、みぎとう／＼りのごとくに、長陣を申付け候まゝ、そのために、淀のものを呼び候はん間、そもじよりも、いよ／＼申つかわせ候て、前件に用意致させ候べく候。そもじにつゞき候ては、淀の物、我等の氣にあひ候ように細かに使はれ候まゝ、心やすく召寄せ候よし、淀へもそもじより申やり、人を使はせ候べく候。」と記して、淀殿を呼び寄せることにしたのである。

北政所はこの手紙を見て、一種の嫉妬を感じたかどうか。それは、はつきりわからないけれども、餘り宜い感情を持たなかつたらしい。が、太閤と北政所との間柄は極圓滿で、正室としての價値を充分に備へてゐた北政所に向つては、太閤も敬愛の情を始終披攊してゐた。天正十五年、太閤が九州征伐を終つて凱旋する折、肥後から北政所へ出した手紙のうちに、

「今度の陣に年寄り、早々白髮多く出來申候て、ぬき申すこともいり申さず候。御目にかゝり候はん事、はづかし、そもじへばかりは苦しからずと存候へども、迷惑に候。」と打解けた言葉で太閤の愛情を流露した。かうして太閤は絶えず、陣中から、北政所へ手紙を出して、軍情や一身上のことなどを報じた。また北政所からも、度々出陣の手紙を送つた

北政所は杉原助左衛門定利の娘で、太閤が二十六歳の時にその妻となつた。それ以來、彼の女は男優りの氣象で長い間、太閤のために盡した。それは一家の私事ばかりでなく、政治向のことにも、やはり内助した場合があつた。かうした關係で、太閤が北政所を敬愛した樣子もわかる。また北政所も太閤の器量に心服したことも察せられる。が、太閤の情生活については、流石に女性だけに、まるで無關心でゐることは出來なかつた。それも三條殿、加賀局ぐらゐなら、まだ安心出來たが、松の丸殿の美貌であること、太閤が可なりに彼の女を愛する樣子など知ると、いくらか胸のうちに不安を起さないわけにはゆかなかつた。たとひ、北政所の地位は安固でも、そこにかすかな淋しさを覺えたであらう。殊に淀殿が太閤の側室となつてからは、太閤の心は半ば以上淀殿に傾いたので、北政所も自制しながら、その輕い嫉妬の情をまるで抑へきれなかつたらしい。後に淀殿と暗闘するやうになつたのは、一つはかうしたところに根ざしたものと思はれる。

それで太閤が小田原へ淀殿を呼寄せることは、北政所に取つては喜ばしくはなかつたであらう。けれども北政所はよく自制

して、太閤の望みを妨げなかつた。聰明な北政所は太閤の生前、その情事について素知らぬ顔をしてゐた。一度も嫉妬の態を太閤に見せなかつた。が、それだけに北政所の胸のうちは、何となく、一種の不滿が蟠つてゐたにちがゐなかつた。

(四)

太閤は淀殿を陣中に呼寄せるについていろいろの配慮をした。彼れは内心、一刻も早く淀殿の顔が見たいので、人々に命じて、途中の各驛に傳馬その他の用意を迅速にさせた。程なく淀殿は一柳越後守、大野木甚之丞草野次郎右衛門らに護られて、小田原の太閤を訪ふた。太閤は淀殿を見ると、今迄戰爭のために暗く、荒んでゐた心持が急に輕快に明るくなつたのを感じた。

當時、小田原城は容易に落ちなかつた。北條一族は固く城を守つて、成るべく、太閤の軍勢に倦怠と疲勞とを與へるやうにつとめた。かうして長期の持久戰に入つた上、鬱陶しい五月雨の季節が來たので、太閤も「これではならぬ。」と考へた。それに徳川家康、織田信雄らが北條に内通したと噂がぱつと陣中にひろがつたので、太閤はそれにも心を痛めた。が、それは一片の風說にすぎなかつた。それらのことから、太閤は諸將士を倦怠させまいと考へ、各自、陣中へ女房を呼寄せしめた。さうした際、絶世の國色として知られた淀殿が花やかな裝ひをして、太閤の陣中に現はれたことは、諸將士の心を柔げる力ともなつた。

その時分、太閤は淀殿と共に酒宴を催したり、茶の湯の會を開いたりした。それには諸將をも招いて、一緒に歡樂の盃をあげた、また太閤はある時、女たちに金扇を與へて「皆のもの、懸命に踊れ。」と命じたので、いづれも面白しさうに踊りはじめた。折柄前波半入といふ道化者が太閤の旨を含んで、金扇をかざしながら「どんどろ、どんどろ、とろとろなる釜も、とろとろたる釜も、湯がたぎりたぎる。」と繰返して唱ひ、踊つたので、陣中の將士は腹抱へて一齊に笑ひくづれた。淀殿も吾知らず、その笑のうちへ引込まれた。太閤は淀殿の笑ふ樣子を見て、興に入つた。

太閤はかうして身方に元氣を付けて、七月のはじめ、漸く小田原城を陷れることが出來た。そして其の處分を終ると、彼れは奥州征伐のため、更に東北に進軍することになつた。太閤は淀君と別れたくなかつたが、軍規を保つ上から、思ひ切つて、彼の女を淀へ歸らせることにした。太閤はそのため、小荷駄三十疋、人夫六百人を用意させた。

それから太閤は奥州を征伐して、九月一日元氣よく京都に凱

旋した。太閤の心は、もう淀殿のところへ飛んでゐたが、折柄、朝鮮の使節が來たので、太閤は思ふやうに、淀君に逢ふべき暇がなかつた。さうなると、太閤は一層、淀殿のことが思はれた。小田原の陣中で、ひとり、女王のやうに輝いてゐた淀殿の姿が眼にちらついて離れなかつた。太閤は夢に彼の女を見たほどであつた。それで兎も角、淀殿のもとへ手紙を出して、近く彼の女を訪ふべき旨を優しく傳へた。

その以後、文にて申まひらせ候はで、御心許なくおもひまひらせ候。若君いよいよ大きくなり候や、そこほどの火の用心、又は下々まで、紊れなきやうに、堅く申つけられ候はん事専にて候。二十日頃には必ず參り候て、若君抱き申すべく、その夜にそもじをも、そばに寢させ申候べく候。折角御待ち候べく候。かしく。返すがへす若君冷し候はんやうに申しつけ候べく候。何れにつけ候て、油斷あるまじく候。

からして太閤は秋になつて、はじめて淀殿に逢ひ、小田原で別れて以來の話——奥州征伐に出かけた折の陣中の模様などを語つた。唯一の愛兒鶴松を抱いて、淀殿に對した太閤は、家庭の樂しみといふことを今更、沁々感じた。

(五)

封に太閤の一家に思ひがけない不幸が起つた。それは天正十九年秋、太閤が五十三歳にして得た唯一の愛兒として、第二の生命とも思つてゐた鶴松が三歳で夭折したことである。その時、太閤は悲痛のどん底に沈んだ。鶴松の病中、彼れは各寺社に病氣平癒を祈り、洛中の名醫らをあつめて、治療に手をつくさせた。が、運命は鶴松に幸ひしなかつた。からして鶴松が世を去つた翌日、太閤はつくづく世のはかなさを感じて、遁世する人のやうに髮を斬つた。諸大名も太閤の心中を察して髮を斬り、喪に服した。太閤の周圍は火が消えたやうに滅入りこんだ。

間もなく、太閤は淸水寺に參詣して、鶴松の冥福を祈り、それから悲しい記憶から逃避するやうに攝津の有馬溫泉へ出かけた。太閤は溫泉によつて、その悲しい氣分をはらひのけようとしたが、やはり、鶴松のことを忘れかねた。彼れは人知れず、亡兒追憶の涙に咽んだ。それで太閤は何か他の方法で、この悲みを忘れたいと思ひつめたので、かねて企てた朝鮮征伐のことを決行しようとするに至つたのである。

爾後、太閤は出征の用意に忙しくなつたが、さうした折にも、尙ほ鶴松の俤を夢に見た。それは鶴松が蘇生して、太閤の手に抱かれた姿であつた。太閤は喜んで、ぢつと愛兒の顏を見つめて頰ずりすると、急に夢醒めてひどく失望した。涙が瀧の

やうに留め度なく流れ出た。太閤はたまらなくなつて、「なき人の形見に泪殘し置て、行衛しらすもきへをつる哉」と血を吐くばかりの歎を咏んだ。

この悲境にゐて、太閤が孤獨を痛感した時、淀殿のゐることが彼れにとつて、一番心强くもあり、またせめてもの慰めとなつた。北政所や松の丸殿らは、太閤のわびしさを解くことが出來なかつた。が太閤は淀殿の美しさと若々しさと、そして亡兒の悲みをひとしく體驗したことなどを思ひ合せて、一段の深い愛を淀殿の上に感じた。

太閤は思つた。

「俺は北政所を一番、尊敬してゐる。あれは俺の足らぬところをよく補つてくれる。が、俺は昔のやうな愛着をかの女の上に感ずることが出來ない。これは理屈からでなくて感情だから、どうも仕方がない。また松の丸などは偶ま顔を合はせると、それで氣が濟む。彼の女に對する愛は昔ほど强くない。が、淀は別だ。淀は自分に主筋に當る。それだけでも大切にしなければならぬ。その上、淀は自分の氣に一番合つてゐる。淀のすること、云ふことのすべてが俺の心に協つてゐる。俺が若返つて、靑春の氣分の下に毎日暮らすことが出來るのは、俺の性質にもよることぢやが、一つは淀が俺の周圍にゐるからだ。淀には毎日でも逢ひたい。――それにこの頃は、かの女も鶴松を亡くしてから何となく憂鬱に沈んでゐる。あの心持がわかるのは俺のみだ。また俺の重い悲み、鶴松を喪つた大きい不幸を理解してくれるのは、かの女ばかりである。だから、俺は淀に逢ふと、俺をはかなむやうな淋しい心が一時に消散する。物狂はしく、いらいらする感情がすつかり沈靜になる。他の女たちは、俺が淀のみ偏愛するのをひどく氣にしてゐるらしいが、それは本能的に抑へることの出來ない要求ぢや。誰が何と思ふとも、俺は淀に對する愛情を不自然に制限するわけにゆかない。」

かうした思ひを抱いて、太閤は時々、淀のもとへ赴いた。どんな忙はしい中でも、成るべく、暇を作つて、政治向に差支えない限り、淀殿と逢ふのを樂しんだ。それにつれて他の愛妾たちは、太閤からまるでその存在を忘られたやうな有樣になつた。太閤は一にも淀、二にも淀と云ふ風で、淀殿が側にゐないと片時の間も我慢出來ない姿であつた。

それで朝鮮征伐をはじめて、太閤が文祿元年三月下旬、京都を出發する折、陣中へ淀殿を伴ふことにした。それは小田原在陣の時、淀殿を呼寄せて、程なく、勝利を得た吉例にちなんだ

ものである。が、それは恐らく表向きの口實にすぎなかつたであらう。つまり、太閤は一日でも、淀殿と離れてゐたくないので、陣中へ伴ふことにしたわけである。太閤が肥前名護屋に着いたのは四月二十五日のことであつた。

太閤の行裝は小田原征伐に發向した時と同じやうに、或はそれ以上に華麗を極めた。太閤は鼻下に作り髭を付け、髪は作り捲で付けで一束に結んだ。そして彼れの腰には美事な太刀を横たへ、目ざめるやうに花やかな具足を着けた。また馬揃衆はいづれも猩々緋の羽織を着け、召替の馬の鞍は善美をつくして、人目を惹ゐた。かういふ具合で、淀殿の一行も亦春にふさはしい裝ひを凝らした。

太閤が名護屋で淀殿と睦じい日を送つてゐるのを他の諸妾は餘り快く思はなかつた。彼の女たちは、淀殿のみ愛せられて、あるかなきかの存在を續けるのを不滿に感じた。が、さうした感情を誰れも表面に浮べなかつた。さうした中で、松の丸殿のみは淀殿と姻戚の關係がある上、淀殿に次いで愛せられたので、淀殿をわるく思はなかつた。彼の女は他の女たちにくらべると、淀殿と仲が宜かつた。けれども三條殿や加賀局は、北政所に近付いて、淀殿のことを何彼につけてよく思はないでゐた。彼の女らは、北政所の蔭に身を寄せて、それとなく、淀殿に楯ついた。愛の暗闘！　それが太閤を中心に人知れず、波瀾を惹起した。が、太閤はさうしたことに一向頓着しない様子をしてゐた。

けれども太閤は長い間の情生活で人情の機微を人一倍、よく解してゐるので、その妻妾たちにも、成るべく、好感を起させるよう、ぬけ目なく、彼の女たちを好遇した。淀殿を偏愛するについても、成るべく、他の諸妾を憤怒させぬよう、注意した。それで妻妾らは誰れも太閤に向つて、不滿や不平を持たなかつた。太閤の事業を呪つたものは一人もなかつた。そこに太閤の老巧なところが見えてゐた。が、松の丸殿以外の女は、一切の不平を淀殿に對して抱いた。太閤の偏愛も、つまり淀殿が太閤の背後にゐて、太閤を操り、いろいろの皮肉の策略をめぐらすためであらうと邪推した。彼の女らが空閨を守り、わびしい日を憂欝のうちに送らねばならなくなつたのは、すべて淀殿のすることである。淀殿のために、自分らの一生が埋れ木同様になるのだと思ひつめてゐた。流石の太閤もこの誤解を消散させることが出來なかつた。

その時分、太閤は可なりに朝鮮征伐に熱中したが、元來、この事について、最初から全心を打込むといつたやうなところが見えなかつた。愛兒を喪つた悲しい氣分を早く一轉させやうとあせつた氣持の方が強かつたやうにも見えた。それは太閤の意

氣、精力が昔にくらべると、いくらか衰へた爲めであつたかも知れない。名護屋にゐるときも、太閤は、より多く歡樂を求める方に傾いてゐた。彼れは陣中で淀殿や侍女らを相手に酒酌みながら、笑語のうちに時を費すのを樂みとした。それに淀殿は丁度、女盛の時分で、その豐艶さを増してまるで太閤を自分の物として、その心を左右する魔力を持つてゐた。太閤は淀殿の纖手に操られて一向他愛がなかつた。それほど淀殿は太閤の心を底までも見ぬいて、實際、正妻を凌ぐばかりの地位を占めたのである。

名護屋にゐるうちに、淀殿はまた太閤の種をやどした。第二の實子を得たいとあせり切つてゐた太閤は、暗黒のうちに、大きな光明を得たやうに喜んだ。亡くなつた鶴松は餘りに虚弱であつたので、太閤は「今度こそ立派に强い子を生んでくれ。」と淀殿に注意した上、手落ちのないよう、萬端、配慮した。かうして淀殿は姙娠と共に京都に歸つた。

この時、太閤は淀殿と別れたくないと思つたが、愛兒を得るために、自分の歡樂を一時犧牲にするのはやむを得ぬことだと思ひあきらめた。太閤は一方では淋しい心持、一方では前途に希望を描く明るい情感を抱きながら、靜かに旅立つ淀殿の後姿をぢつと見送つた。

（六）

その後、朝鮮征伐は陸戰で大勝を得たけれども、水戰では大敗した。それらについて、太閤はいらだつて、親しく渡鮮しようとしたほどである。けれども德川家康らがそれを留めたので、渡鮮のことは見合せた。そのうち、太閤の母が病んだ。太閤はそれがため、文祿元年七月二十二日、名護屋を出發して、二十九日、京都に入ると、母はもう呼吸を引取つてゐた。太閤の悲みは深かつた。

が、それと共に太閤に取つて、一つの喜びが一方にあつた。それは同年八月、淀殿がお拾――秀頼を生んだのである。お拾と名付けたのは、亡くなつた鶴松を棄と呼んだのに對して、成育を祈る心から「ひろい」としたのである。この命名のことは、太閤が名護屋在陣の時から、思案を重ねて、豫め北政所のもとへ「返す〲も子の名わひろいと申候べく候。」と申送つた。また太閤は出産前、秀頼に用ふべき衣類、調度などをすべて伊勢大神宮に送つて、神殿で祓き濟まし、安産の祈りをして貰つてから、はじめて安心したのである。かうして太閤は萬事に氣を付けて、只管平産を望んでゐたところへ、その豫期通りに秀頼が生れたので、非常な歡喜を覺えた。それは太閤の五十

七歳の時である。

その時分、太閤は鶴松の歿後、姉の子、秀次を養子に迎へ、豐臣家を殆ぼ秀次に讓る決心をしてゐた。秀次が關白に任ぜられたのは、それがためであつた。ところが、間もなく、實子秀頼が生れて、健かに育つのを見ると、太閤の愛情はすつかり秀頼の方へ移つて、秀次を疎外するやうな風が見えはじめた。

元來、太閤は秀次の性質を愛して、養子としたのではなかつた。彼れは鶴松を亡くした淋しさをまぎれさせ、また自分の後繼者を定めて置いて豐臣家の命脈を長く保たうと思つて、氣まぐれに秀次を養子としたのである。そこに最初から深い愛がなかつた。それに秀次は關白の器でなく、人物が余りに平凡で、向ふ見ずであつた。その言行は萬事、太閤の氣に入らぬことが多かつた。殊に女色に耽り、奢侈を喜んだことは、太閤の秀次に對する感情を惡化させた。かうした有様で、太閤は次第に秀次に飽いた。「あれでは、豐臣家の天下を一日も保つわけにゆかぬ。」とまで思つた。

「俺はどうも少し早まつたことをした。秀次を關白にしたのは全く俺れの誤りだ。」

太閤は秀頼が生れると、かう考へるやうになつた。が、今更、どうすることも出來ぬので、彼れは日本を五分にして、その四分を秀次に、一分を秀頼に與へようとも思つた。が、淀殿が秀頼の背後にゐる上は、この事に滿足するかどうか。太閤はそれらのことを慮つて日夜苦心を重ねた。

ところが、秀次の方では、一向そんなことに氣付かなかつた。その日常の行ひは、不謹愼に流れた。文祿二年正月、正親町天皇が寶算七十七歳で崩ぜられた時、秀次は精進潔齋をしなかつた。その上、諒闇中、近郊に遊獵したり檢校を呼んで平家琵琶を彈奏させたりした。そのほかにも、秀次には太閤の疑惑を起させる振舞が時々あつた。そんなことから、秀次謀叛の噂が高くなつた。丁度太閤が秀次を疎んじはじめた頃からかうした隔りが出來て、太閤は追々、秀次を謀叛人のやうに解つて、到頭、高野山へ追ひやつたのである。

太閤が玆まで秀次を手嚴しく處分したについては、太閤に秀次のことを讒したものがあつたにちがひなかつた。たとひ、讒せられずとも、秀頼が生れた上は、早晩、秀次の運命は危かつた。この事については、淀殿がどんな風に考へてゐたかは、明かでないけれども、太閤に逢ふ毎に秀頼の行末について、いろいろ太閤を口說いたことだけは、確かにあつたと察せられる。

秀次が天下を取るか、秀頼が天下を取るかといふことは、淀殿自身には、大きな關係があつた。もし秀次が時めくと、淀殿

は秀頼と共に日影者にならねばならぬ。が、もし秀頼が秀次に打勝つて、世に出ると、淀殿は思ふ儘の生活が出來るのである。それで淀殿は感情一邊に最初から秀次のことをよく思はないで、一種の邪魔物のやうに見た。その心の閃きは太閤と話す折にも、時々ちらと現はれて太閤の胸にある影を投げかけた。かうしたことから、太閤は余計に秀次をよく見なかつた。

咀はれた秀次の末路は悲慘であつた。彼れは高野で無念の涙を呑んで自殺した。殊に哀れを極めたのは、何の罪もない秀次の妃妾及び幼兒ら三十餘人が三條河原で刑せられたことである。秀次が關白となつて、威勢がよかつた時、かの美女や幼兒は皆綺羅に包まれて、花やかな日を送つたのである。世の中の榮華を身一つにあつめたやうな佳人もそのうちにゐた。が、秀次の死と共に彼等の生涯は丸で變つた。九天の上から九地の底に落された。彼等が三條河原へ引出された頃は、もう零落した人のやうになつて、見る影さへなかつた。そして彼等のうちには、豫め死を覺悟したものもあつたけれども、中には、白刃の前で恐怖の色を浮べたものもあつた。幼兒たちは泣き叫んで、この世ながらの地獄を見物人の前にはつきり見せた。その光景に接して哀泣せぬものは一人もなかつた。當時、この事を非難する聲が高くて、京童は「行末めでたかるべき政道にあらず。吁因果のほど御用心候へ。」と諷した。

が、さうした因果のめぐり合せについて、太閤は何も考へなかつた。太閤は唯秀次といふ犧牲者を出した爲めに淀殿が安心した顏を見て、そこに一つの滿足を覺えた。また彼れは、その實子がはじめて豐臣の天下を繼ぐことが出來るであらうと見定めて、そこにある喜びと慰めとを得た。が、半夜、人定つてからの寢ざめに不圖、秀次やその侍妾のことを思ひ出すと、心が暗くなる時が稀にあつた。

その時分、太閤は淀殿、秀頼らを伏見城に移した。この城は二十五萬人の工夫を用ひて新たに築きあげ、形勝の地を占めてゐた。太閤は一兩日でも、淀殿の方へ音づれをせぬと、何となく、心に濟まぬやうに思つた。それは淀殿と秀頼と二人に對する濃情のためである。それである時、太閤は淀殿のもとへ手紙を寄せて、「返す／＼この間、遠のき候へば、一しほなつかしく存じ候。秀頼様こなたに御座候はねば、留守のやうにて一しほ徒然、なか／＼申すばかりなく候。」と述べ、秀頼の健康に充分注意すべきやう命じた。

（七）

この頃、太閤の愛は淀殿ひとりに注がれた趣が見えた。が、

流石に太閤には北政所はやはり相當の愛情を示した。北政所が眼を病むと、太閤はひどく心配して有馬入湯を勸めた。それについて、太閤は京から大阪城にゐた北政所へ手紙を寄せて、眼病には入湯が一番よいから、有馬溫泉の浴舍を普請させる爲め、前田主水を遣はしたことを述べ、養生法などを敎へたそれから再度の手紙では殊に入念の注意をして、「湯へ入り候はんこと、まづ／＼灸あそばし候はんよし然るべく候。一日ころに越し可申候。藥師／＼よび候て藥おろさせ可申候間、その心にて灸まづ／＼しまゐらせ候べく候。又湯冷へ候まゝ、湯へいり候はゞよく候はんと存候。眼は湯冷へ候故に仍上氣候上かと存候。」と親切に申添へた。

また太閤が名護屋在陣の折、北政所へ與へた手紙にも、夫婦の情愛が暖かく流れて出てゐた。それには、「節句の帷子いろ／＼取揃へ給候。めでたく幾久しくも祝い候てめし候まゝ、御心安く候べく候。九月の節句は唐にて受取可申と存候。」と述べた。尙ほ太閤は朝鮮の諸城を多く陷れ、國都を手に入れる日も近いから、更に明國（支那）をも征服して、御身を迎へるつもりであると老來の元氣を示した。かうして太閤と北政所との間には、絶えず消息を通じ合つて、物品の贈答も度々重つた。

その後、一度双方の音信が暫く絶えたことがあつた。北政所は太閤の身を案じて、手紙を出すと、太閤は喜んで、返事を出した。太閤はそのうちで「この間は久しく文にても申さず、御ゆかしくおもひまゐらせ候。折ふし文給候。めづらしく候て戀此に見まゐらせ候。高麗へは三月中に越し申すべく候。」など述べて、程なく渡鮮後、凱旋すべきことを傳へた。

が、太閤と北政所の間が圓滑であつたのは、北政所の愛情がいつも太閤の上に働きかけた爲めでもあつた。太閤も世味に徹してゐるので、豪放な人に似合はず、極細いところへ氣が付いたが、北政所はその上を越して、どんな時、どんな場合にも、氣轉を利かした。太閤が京にゐて、頻りに能に凝つてゐると、北政所はいろいろの贈物をして、太閤を喜ばせた。それで太閤もその情愛に共鳴して、「再々文給候へども、能に暇なく候儘、返事も申さず。今日は色々ひちうふくろ珍しきを可給候。一段氣に合ひ申、一段と能もいよ／＼あがり候て、色々の仕舞しまゐらせて見せ候へば、皆々一段とほめ申、早々二日致し、ちと休み候て、九日のひ致し候て、京中の女房どもに見せ申すべく候。」と申贈つた。

能についての手紙でもわかる通り、太閤はその周圍の女性たちに、彼れの仕舞を見せたり、彼の女たちと物見、遊山をしたりするのが好きであつた。彼れの晩年に於て最大の豪華をつくしたと

仰へらるゝ太閤の花見は、彼れが北政所や淀殿と最後の歡をつくしたい爲めに思ひ立つたのである。

慶長二年頃から、太閤は何となく、身の衰へを感じた。長い間の征戰、强い刺戟から刺戟を求めて移つた享樂生活、それが太閤の精力を不知々々のうちに消耗した。彼れは時々生の倦怠を感じた。また善知らず、滅入りこんでどうにも仕樣のない寂寞に襲はれる時があつた。

「俺は事になると、近いうちに死ぬのではなからうか、どうも、氣分がすがすがしくない。そして物事に興奮しても、反撥する力が昔の樣に强くないのだ。多年の努力に俺の意氣が自ら磨り減らされたのであらう。體力も使ひ古した機械のやうに衰へたのであらう。それを思ふと、俺は最後の思ひ出に充分の歡樂を女房たちと一緒にして置きたい。さうすれば、後に思ひ殘すことがない。」

太閤は不圖、かうしたことを考へたので、慶長三年三月中旬、醍醐の花見をその愛人たちと樂もうと考へた。それで太閤はその年正月、早くも、石田三成らに命じて、醍醐の茶亭などを經營させ、寺院の破損を修理せしめた。その式目の覺えは左の通りであつた。

一、三寶院小破のところ、修理を加ふべし。大破なるは新たに立つべし。僧以下改むべき事。

一、院外五十町四方、三町に一箇所づゝの番所を置き、弓、鐵砲のもの、堅く守るべき事。

一、伏見より醍醐に至つて、道の左右に埒を結ふべき事。

一、寺々宿札を打つて、破壞の所あらば修理すべき事。

一、院内、院外、掃除念を入れ、申付くべき事。

一、振舞等、その外潤澤にあるべき事。

一、百姓以下往還の旅人等、迷惑せざるやうに有べき事。

一、大津宰相、福島左衞門大夫、増田右衞尉。

右三人、醍醐總構近邊の奉行として猥がましき事を停止すべし。

一、山中山城守、中村式部大輔。

右兩人、總構の内に奉行を爲して、御用人の外一切停止すべし。

役人らは、太閤の命令によつて、費役の分ちなしに修理や經營に當つた。諸大名のうちには、太閤の風流に共鳴して、醍醐の山へ番匠らをつれて出かけ、水に臨み、山に沿うて新しく茶亭を作つたものもあつた。かうして花見の用意が手落ちなく出來ると、太閤は三月十四日、その妻妾らと伏見城を出て醍醐へ志した。當日、輿の順序は、一番目が北政所、二番が三條殿、

三番が松の丸殿、四番が太閤、五番が淀殿、六番は加賀局らであつた。太閤に秀頼を伴れて、前後に美女たちを率ゐ、歡樂の世界へ急いだ。

やがて一行が醍醐の三寶院へ着くと、すつかり従者を返して、北政所、淀殿らは輿から出て、坐敷へ這入り、そこで重の衣を各自に着飾つた。そして新たに化粧をしなほして、紅の香、白粉の匂ひが艶めいて、一段の春色を加へた。太閤は上機嫌の體で、秀頼以下、妻妾らと共に薄紅の霞をひく櫻花を見て廻つた。花は正に滿開であつた。その花の下をゆく淀殿らの美しさは、仙女が下界を逍遥するやうに太閤の眼に映つた。背景として、錦の幕、五彩の緞子を張りめぐらした様子も亦春にふさはしかつた。太閤はうつとりした氣分になつて、先づ増田長盛夫婦が客を待つ茶亭へ入つた。太閤はそこで酒盃を傾けて、靜かに櫻花に見とれた。その時、太閤の侍女高洲は座興に、「天が下のこらぬ花のさかりには、山より山や風にほふらん」と咏んだ。それに續いて右衛門介といふ女が「聞くならく醍醐の花の世界、見來ればこのところ峯の乾坤。」といふ聯句を賦した。

一説によると、當時淀殿のみは、最初太閤から醍醐行きを勸められた折、氣が進まぬと云つて、體よく斷つたと傳へられてゐるが、どうであらう。太閤の傍には、淀殿も太閤に從うて、花見をしたと記してゐる。後の方が眞實らしい。兎角、その頃から、淀殿にわが儘な傾きは見えたであらうけれども、また憂鬱症に囚へらるゝ時分ではなかつた。それで淀殿も晴れやかな氣分で北政所らのうちに加はつたことと察せられる。

太閤の目的も北政所、淀殿の二人を中心にして、他の美しい女たちと、のんびりと春の日永を樂しもうといふにあつた。死の豫感に脅かされ、氣がいらいらしてゐた太閤もこの日はすべての憂ひや惱みを忘れて、美酒に陶醉した。そして此處彼處の茶亭に立寄つて、浴泉の興を味つたり、操の人形を面白がつたり、四方から集つた各地の名物に感嘆したりした。そして北政所や淀殿らの笑ふ顔を見て自分も大きく笑つた。かうして太閤はいつまでも、歡樂に浸つて、時のうつりゆくのを忘れてゐた。

が、いつの間にか夕靄が丘や花下に漂ふやうになつた。太閤はもう少し留つてゐたいと思つたが、別段、夜の設けまでしてないので、彼れは名殘を惜みながら、北政所らと共に京へ歸つた。太閤はその翌日、醍醐の花見を思ひ出して、「あれほど愉快な一日はなかつた。が、俺の歡樂も、昨日がその最後とならうも知れぬ。」と思つた。それほど彼れは弱つてゐた。そして其れから二月も經たぬうちに、太閤は烈しい不眠症に惱んだ。食氣も

亦ひどく減じた。夜中、いろいろのことを思ひ續けて、衰弱が日毎に目立つた。その病名はわからぬが、致命症であると誰れも見た。

(八)

太閤の病氣について、一番心配したのは淀殿であつた。淀殿の威勢は太閤の庇蔭によつた。もし太閤が世を去ると、彼の女はどうなるかも知れぬといふ不安を感じないわけにゆかぬのである。それに秀頼もまだ幼弱であるので、それも心細かつた。殊に太閤恩顧の諸將は大抵、北政所に身方してゐて、淀殿の力になるのは、石田三成らの一派にすぎぬのでそこにも亦力の欠乏が見えてゐた。

淀殿はそれらのことを思うて、氣分が重く沈んだ。そのふつくらした頬も亦痩せた。彼の女は心から太閤の平癒を祈つた。ある日、淀殿は憂欝な氣分を力めて抑へて、鏡の前で化粧するつもりで、不圖、そこに映つた自分の姿を見た。その姿は眞の自分だとは思へないほど、やつれてゐた。顔の色は青ざめて、眉のあたりに暗欝な色が漂うてゐた。そして涼しい目は充血して、唇の色さへ、よくなかつた。淀殿は鏡面の自分を見つめる勇氣がなかつた。唯ひとり悲痛の底に投げこまれたやうに鏡の前に倒れて、暗涙に咽んだ。

同じ思ひは太閤にもあつた。彼れは淀殿を後にして世を去らねばならぬかと思ふと、堪らなく、淋しかつた。それに秀頼のことは家康、利家を始め、三成以下の人々に懇ろに頼みはしたが、自分の死後、彼等が一致して秀頼を擁護するかどうか。それは何ともわからなかつた。太閤の前で、柔和な假面を着けてゐる羊が、太閤の呼吸絶えると共に獅子にならうも知れなかつた。事によると、豐臣の天下は自分一代で亡びるかも知れぬ。かう見定めを付けると、太閤は何とかして、もう少し生命を延ばしたいとあせつて見たりした。すべての權力、すべての榮華も夢だ。一切の享樂、あらゆる戀も亦夢だ。自分の眼を慰め、心を浮々させた美女たちも亦自分の死につれて、一切、自分の前から淡雪のやうに消えてゆくのだ。太閤は病床でさうしたことを幾度も繰返して、懊惱した、苦悶した。が、到底太閤を眞に心から安堵させるだけの確かな保障は得られなかつた。が、最後に太閤は一切を夢とあきらめて「露と置き露と消えぬるわが身かな、浪華のことは夢の又夢」といふ辭世の歌を殘して、靜かに大悟した人のやうに永遠の眠りに入つた。

太閤の薨後、彼れをめぐつて輝いてゐた女たちは、北政所の一味と淀殿の一味とに、につきり別れた。北政所には太閤恩顧

の諸將が接近した。德川家康も北政所を敬愛した。淀殿には、石川三成、小西行長、宇喜田秀家らが接近した。その時分、淀殿については、いろいろの風說が傳へられた。淀殿は空閨の淋しさに堪えかねて、美男の名ある大野修理を愛したとも云はれた。また彼の女は名古屋山三郎にも魂を打込んだとも云はれた。さうしたことについては、はつきりした證據が一つもない。が、いくらか放縱に流れたところがあつたかも知れなかつた。それに太閤の生前にくらべると、彼の女や秀賴に附き從ふものが次第に輕薄な樣子を見せたので、自然神經をいため、彼の女のプライドを傷けて、憂鬱症に囚はれたことが略ぼわかる。それらに伴ふて現はれた淀殿の擧動が、ある部分の非難を受けたことも亦ありさうな話である。

が、所詮すべては亡びるのだ。淀殿は何とかして、家康の野望を挫いて、秀賴の天下としたいとあせつたけれども、運命はすつかり淀殿に逆らつた。無雙の國色を謳はれ、自らも誇つた美しさも、亡滅の前には、黑い死の手にゆだねられねばならなかつた。太閤をめぐる女性のうちで、淀殿が一番花やかであつた丈に、その末路がまたひどく悲慘に見える。美よ、もろい美よ。

古代生活の研究

——常世の國——

折口信夫

一　生活の古典

明治中葉の「開化」の生活が、後ずさりをして、今のあり樣に落ちついたのは、譯がある。

古典の魅力が、私どもの思想を單純化し、よたげて清新にすると同樣、私どもの生活は、功利の目的のついて廻らぬ、謂はゞむだとも思はれる樣式の、出來不明なる「爲來り（シキタリ）」によつて、純粹にせられる事が多い。其多くは、家庭生活を優雅にし、しなやかな力を與へる。門松を樹（タ）てた後の心持ちのやすらひを考へて見ればよい。日の丸の國旗を軒に出した時とは、心の底の歡び——下笑（シタヱ）ましさとでも言ふか——の度が違ふ。所謂「異教」の國人の私どもには、何の掛り合ひもない「くりすます」の夜の燈に、胸の躍るを感じるのは、古風な生活の誘惑に過ぎない。「くりすます」の木も、さんた・くろうすも、實はやつぱり、昔の耶蘇教徒が異教の人々の「生活の古典」のみやびやかさを見棄てる氣になれないで、とり込んだものであつたのである。家庭生活、郷黨生活に、「しきたり」を重んずる心は、近代では著しく美的に傾いてゐる。大隅の海村から出た會社員の亭主と、磐城の山奥から來た女學生あがりの女房との新家庭には、どんな春が迎へられてゐるだらう。東京樣（ヤウ）を上等にして、女夫（メヲト）雙方のほのかな記憶を入りまじへた正月の祝儀が行はれてゐるに違ひない。さうした寂しい初春にも、やすらひと下ゑましさとが、家の氣分をずつと古風にしてゐることゝ思ふ。

生活の古典なるしきたりが、新らしい郷黨生活にそぐはない

場合が多い。度々の申し合せて、其改良を加へても、やつぱり不便な舊樣式の方に縒りを戻しがちなのは、その中から「美」を感じやうとする近世風よりは、更に古く、ある「善」——勘くとも舊文化の勢力の殘つた郷黨生活では——を認めてゐるからである。此「善」の自信が出て來たのは、溯れば溯る程、神の信仰に根ざしのある事が顯れて來る。

數年前「東」の門徒が、これまでかた門徒連のやつた宗風のすたれるのを歎いて、「雜行雜修をふりすてゝ」と言ふ遺誡をふりかざして、門松標め繩を廢止にしようとした時は、一騷動があつた。攻擊した人達も、「年飾り」をやめる事が、國人としての氣分の稀薄になつた證據だといふ論據を深く示さうとしなかつた。唯漠然と道德的でない感じがしたと言ふ程の處にあつた樣である。ところがあれなどは、神道家がもつと考へて見なければならない古義神道或は「神道以前」の考察を疎かにしてゐた證據になるのである。陰陽神道、兩部神道、儒敎的神道、衛生神道、常識神道などに安住して、自由に古代研究をせなかつた爲である。

古代研究家の思ひを凝さねばならぬのは、私どもの祖先からくり返して來た由來不明のしきたりが、時にはさうした倫理內容まで持つて來た譯についてである。言ふまでもない。神に奉仕するもの、「縒り」と言ふあやまち」を罪と觀ずる心持である。此が信仰から出てゐるものと見ないで、何と言はう。

神道家の神道論にもいろ／＼ある。私の思ふ所をぶつきらぼうに申せば、文獻の上に神道と稱せられてゐる用語例は、大體二つにはひつて來る。

素朴な意義は、神の意思の存在を古代生活の個々の樣式に認めて言ふのであつた。併し、畢竟は、其等古代生活を規定する統一原理と言ふ事に落ちつく樣である。其を對象とする學問が、私どもの傳統を襲いで來てゐる「國學」である。だから、神道の歸する所は、日本本來の宗敎及び古代生活の軌範であり、國學は神道の爲の神學、言ひ換へれば、古代生活研究の一分科を受け持つものなのである。

神道の意義は、明治に入つて大いに變化してゐる。憲法に據る自由信敎を超越する爲に、倫理內容を故意に增して來た傾きがある。出發點が宗敎であり、過程が宗敎であり、現にも宗敎的色彩の失はれきつて居ぬ所を見れば、神道を宗敎の基礎に立つ古代生活の統一原理と見、其れの信仰樣式が「しきたり」として、後代に、道德、藝術或は廣義の生活を規定したと見て、よいと思ふ。

日本の古代生活は、此まであまりに放漫な研究態度でとり扱

はれて來た。江戸時代に、あれまで力強く働いた國學の傳統は、明治に入つて飛躍力を失うた。爲に、外側からの研究のみ盛んに行はれた。古代人の内部の生活力を身に動悸うたせて、再現に努めようとする人はなくなつた。數種の文獻に遺つた單語は、世界の古國や、邊僻の民族の語彙と、無機的に比較研究せられた。此は傳統的事業を固定させてゐた私どものしくじりであつた。

私どもはまづ、古代文獻から出發するであらう。さうして其註釋としては、なるべく後代までながらへてゐた、或は今も纔かに遺つてゐる「生活古典」を利用してゆきたい。時としては、私どもと血族關係があり、或は長い隣人生活を續けて來たと見える民族の「しきたり」又は現實生活と比べて、意義を知らうと思ふ。稀には、「等しい境遇が、等しい生活及び傳承を生む」と言ふ信ずべき假說の下に、かけ離れた國々の人の生活、しきたりを忍んだ心持ちから、暗示を受けようと考へてゐる。

三月の雛祭り・端午の節供・七夕・盂蘭盆・八朔……などを中心に、私どものやすらひを感じる「しきたり」が每年くり返へされる。江戸の學者が、一も二もなく外來風習ときめたものゝ中にも、多くは、固有の種がまじつてゐる。私は、今門松の事を多く言うた緣から、元旦大晦日に亙る「しきたり」の最初の佛を考へて、古代研究の發足地をつくる。

二　ふる年の夢、新年の夢

海のあなたの寂（シツ）かな國の消息を、常に聞き得た祖先の生活から、私の古代研究の話は、かたりはじめるであらう。

それは、曆の語原たる日數みの術を辨へた人によつて、月日の運り、氣節の替り目が考へられ、生産のすべての方針が立てられた昔から說き起す。曆法が行はれても、やはり前々の印象から、新曆に對立して、日よみの術が行はれて居り、昔日よみを以て民に臨んだ人の末が、國々に君となり、從來の傳承は、その部下の一つの職業團體の爲事として、受け繼がれてゐるやうになつてゐた。

大倭の國家が意識せられた頃には、もう此狀態に進んでゐた。曆法は、最遲く移動して來たと思はれる山石人（イソシヒト）（南方漢人）などの用ゐたものが、一等進んでゐたであらう。道・釋の敎が、記錄の指定する年代よりも遙か以前に、非公式に將來せられてゐたのと同樣、曆法も亦、史の書き留めを超越してゐるものと見てよい。天日矛（アメノヒボコ）や、「つぬがのあらしと」などを歸化民團と目すに、侵入者と認めた時代の、古渡り（コワタリ）の流寓民の村々にくつついて渡つて來たものと思はれる。だから、表向き新曆法の

將來せられた時は、ずつと遅れる譯であるが、唯一般になつたと言ふまでゞあらう。かうした村々で、色々な暦法を用ゐ、又次第に相融通するやうになりかけた時代に跨つて話を進める。從つて記録の上では、新暦の時代に入つてゐても、古代研究の立ち場からは逆にまた、新舊暦雜多の時代と見ねばならぬ事も多い。

概算する事も出來ないが、祖先が、日本人としての文明を持ち出した事は、今の懷疑式の高等批評家の容認してゐる所よりも、ずつと古代にあると考へねばならない多くの事實を見てゐる。此古代研究の話も、おちつく所は、その荒見當を立てる位の事になるであらう。考證と推理とに即かず離れないで、歩み續けなければならないのは、記録の信じられない時代を對象とする學問の探るべき本當の道である。暦の話ばかりでなく、古代を考へるものが、ある年數を經た後世の合理觀を多量に交へた記録にたよる程、却てあぶないものはない。私は大體見當を、大昔と言ふ處に据ゑて話してゆきたい。そこには既に、明らかに國家意識を持つた民もあれば、まだ村々の生活にさへおちつかなかつた人々もあつたものと、見て置いて頂きたい。強ひて問はれゝば、飛鳥の都以前を中心にしてゐるのだが、時としては、飛鳥は勿論、藤原京の世にも、同樣の生活樣式を見出す事もあり、更にさがつて奈良の時代にも、古代生活の俤を見る事があらう。私の言ひ慣れた言ひ方からすれば、即、萬葉びと以前及び萬葉人の生活に通じて、古い種を採り分けながらお話する次第である。

陰暦陽暦「一と月遅らし」と、略三通りの暦法をまち〳〵に用ゐてゐる町々村々が、境を接して居ると言ふ現狀も、實は由來久しい事なのである。暦法を異にした古代の村々が、段々歸一して來る間に、其々の暦に絡んだ風習が、互にこんがらがつて來て、極めて複雜な民間年中行事をつくる樣になつた。譬へば、大晦日と元日、十四日年越しと小正月（上元）節分と立春との關係を見ると、元々違つた其々の日の意味が、互に接近して考へられて來たのは事實である。

私は暦の上に、元日と立春との區別の混沌としてゐた昔語りを試みる。

三　夜牀の穢れ

地震以後「お寶々々」「厄拂ひませう」も聞く事稀に、春も節分も寂しくばかりなつて行く。「生活の古典」が重んぜられてゐた東京の町がかうでは、今の中に其意義を話して、偲びぐさとしたくなる。

寶船は、初夢と關聯してゐる爲に、聰明な嬉遊笑覽の著者さへも、とんだ間違ひをして、初夢を節分の夜に見るものを言ふとしてゐる。元は、寶船が役をすました後に現れる夢を、初夢と言うたらしいのである。だが、暦法のこぐらがりから、初夢と寶船とが、全然離れ〳〵になつたり、寶船その物が、好ましい初夢を載せて來るもの〻樣に考へ紛らかしたりして了うたのであつた。

初夢と寶船とに少しの距離を措く必要があつたからこそ、江戸の二日初夢などの風が出來た。除夜の夢と、新年の夢とには、區別を立てねばならなかつた。除夜の夢の爲の寶船が、初夢と因緣深くなつてからは、さうした隱約の間の記憶は、二つの間に區劃をつけて居るに拘らず、初夢のつき物として、寶船まで二日の夜に用ゐられるのであつた。ともかくも初夢が、元日の覺めるに先つて、見られたものを斥(サ)した事は疑ひがない。處で、寶船の方は、節分の夜か除夜かに使ふのが原則であつた。宮廷や貴族の家々で、其家内に起居する者は勿論、出入りの臣下に船の畫を刷つた紙を分け與へる事は、早く室町時代からあつた。牀の下に敷いて寢た其紙は、翌朝集めて流すか、埋めるかして居る。だから、此船は惡夢を積んで去るものと考へた處から出た事が解る。今見る事の出來る限りの寶船の古圖は、其が昔物ほど簡單で、七福神などは載せては居ない。併しあまり形の素朴なものも出て、擬古のまやかし物と言ふ疑ひがあるから信じられないが、石橋臥波氏の研究によると、荒つぽい船の中に稻を數本書き添へたものが、一等古いものと考へられて居る。畫の脇に「かゝみのふね」と萬葉書きがしてある。次は米俵ばかりを積んだ小舟の畫と言ふ順序である。こゝまでは疑はしい。が、其後の物になると帆じるしに「獏」の字があり、船の外に又のしるしが書いてある。更に此が意匠化して、向ひ鍵の紋になり、獏の字も緣起のよい字か、紋所と變つて居る。其からは段々七寶の類を積み込み、新しい處で、七福神を書きこんでゐる。

又のしるしは、疑ひもなく呪符✕の轉化したものであり此の畫まで來る間に年月のたつて居る事を見せて居る。獏は、凶夢を喰はせる爲であるから、「夢違(チガ)へ」又は「夢拂(ハラ)へ」の符と考へられて居たに違ひない。一代男を見ても、「夢違ひ獏の符(フダ)」と、寶船とが別物として書かれて居る。畢竟除夜又は節分の夜、去年中の惡夢の大掃除をして流す船で、室町の頃には、節分御船など言はれたものが、いつか寶船に變つたのであつた。船にすつかり乘せて了うた後、心安らかに元日又は立春の朝の夢を見たものであつた。かう言ふ風に、僅一紙の隔てもな

い處から、初夢を守る爲の物と言ふ考へも出て來た。遂ひやらふべき筋が、かうして寶の入り舟として迎へられる事になつた譯だ。が、寶船元を洗へば獏の符なのであつた。更に原形に溯つて見ると、單に夢を祓ふ爲ではなかつたらう。神聖なる寢の居處と見られた臥し處に推積した有形無形數々の畏るべき物忌むべき物・穢はしい物を、物に托して捐てゝ、心すがしい寢のおちつき場所をつくる爲である。(臥し處・居處を其人の人格の一部と見たり、其を神聖視する信仰は、古代は勿論近世までもあつた。)

此風習の起りの一部分は、確かに上流にある。上から下に船の畫を與へる樣子は、大祓その儘である。穢れた部分全體を託するものとして「形代」と言ふ物が用ゐられた。此で群臣の身を撫でさせたのをとり集めて水に流したのが、大祓の式の一等衰へた時代の姿であつた。此船の畫は、とりも直さず大祓式の分岐したものなる事は、其行ふ日からしても知れる。其上、尙、大殿祭(オホトノホガヒ)に似た意味も含まれてゐる。其家屋に住み、出入りする者に負せた一種の課役の樣なものである。其等の無事息災よりも、まづ其人々の宗教的罪惡(主として觸穢(ソクヱ))の爲に、主人の身上家屋に禍ひの及ばない樣にするのであつた。此風が陰(オン)陽師(ミヤウジ)等の手にも移つたものと見えて、形代に種類が出來て、禊(ミソギ)の爲の物の外、かうした意味の物が、庶民にも頒たれる樣になり、遂には呪符の樣な觀念が結ばれて來たらしい。神社などの中にも、「夢違ひ」の呪符の意味で、除夜・節分の參詣者に與へる向きが出來たのである。併しかうした風習の民間に流布したのは、陰陽師の配下の唱門師等の口過ぎに、利用した結果が多いのである。

けれども、此が庶民の間にとり容れられたには譯がある。前々からあつた似た種に、新來の樣式がすつぽりとあてはまつたからなのだ。寶船に書き添へた意味不明の廻文歌「ながき夜のとおの眠(ネブ)りの皆目覺め……」は一種の呪文である。不徹底な處に象徵的な効果があるのだが、釋る部分の上の句は、人間安執の長夜の眠りを言ふ樣ではあるが、實は熟睡を戒しめた歌らしい。海岸野山の散居に、深寢入りを忌んだ昔の生活が、今も島人山民などの間に殘つて居る。夜の挨拶には「お安み」の代りに「お寢敏(イサト)く」の類の語を言に交す地方が、可なりある。此考へが合理的になると、百姓の夜なべ爲事に居眠りを戒しめるものとして「ねむりを流す」風習が、隨分行はれて居る。柳田國男先生の考へでは、奧州の佞武多祭りも、夜業の敵なる睡魔を祓へる式だとせられて居る。熟睡を戒しめる必要のなくなつた爲に、さうした解釋をして、大昔の祖先からの戒しめを、無意

味に守つて居るのである。此「眠り流し」の風も元は、船に積む形を採つた事と思はれる。

四　蠶の淨土

而も、まだ海河に祓へ捐つべき物が、臥し處には居る。其は牀蟲の類で、蚤を以て代表させて居る。おなじ奥州仙臺附近には、「蚤の船」と言ふ草がある節分の夜（?）に、その葉を寢牀の下に敷いて寢れば、蚤は其葉に乘つて去ると傳へてゐるよしを谷川磐雄氏から聞いた。さて、其牀蟲は「蚤の船」に便乘して、どこへ流れて行くのか。縁もゆかりもなさ相な琉球本島では、初夏になると、蚤は麥稈の船に乘つて、麥稈の竿をさして、「にらいかない」からやつて來ると言ひ、「にらいかない」へ去つて了へ」と言うて蚤を拂ふ。「にらいかないの説明が私どもの祖先の考へて居た「とこの國」と近よつて來るのである。「にらいかない」と言ふのは、海の彼方の理想の國土で、神の國と考へられてゐる處である。儀來河内(ギライカナイ)、じらいかないなど、色々に發音する。神はこゝから時に海を渡つて、人間の村に來るものと信じて居る。人にして、死んでにらいかないに行つて、神となつたものゝ例と遺老説傳には記してゐる。南方、先島(サキシマ)列島に行くと、此淨土の名をまやの國といふ。先島列島の中、殊に南の島々の寄百姓から出來た八重山の石垣島は、此場合擧げるのに便宜が多い。宮良(メイラ)といふ村の海岩洞窟から通ふ地底の世界にいる（又、にいる底(スク)）と言ふのがあるのは、にらいと同じ語である。此洞から「にいるぴと（にらい人）」又は「あかまた、くろまた」と言ふ二體の鬼の樣な巨人が出て、两年每に成年式を行はせることになつてゐる。青年たちは神と言ふ信念から、その命ずる儘に苦行をする。而も村人の群集する前に現れて、自身踊つて見せる。暴風などもにいるから吹くと言つてゐる。さう言へば、本島でも、風凪ぎを祈つてにいらかない去れと言ふことを伊波普猷氏が話された。にいらかないは本島では淨土化されてゐるが、先島では神の國ながら、畏怖の念を多く交へてゐる。全體を通じて、幸福を持ち來す神の國でもあるが、禍ひの本地とも考へて居るのである。唯先島で更に理想化して居るのは、にいるを信じる村と、以前は違つた島々に逆うた事情で住んでゐた村々の間で言ふ、まやの國である。春の始めにまやの神、とまやの神の二神、樂土から船で渡つて來て、蒲葵笠に顔を隱し、簑を着、杖をついて、家々を訪れて、今年の農作關係の事、其他家人の心をひき立てる樣な詞を陳べて廻る。つまり、祝言を唱へるのである。にいるぴともやはり成年式のない年にも來て、まやの神と同前に、家々に祝言を與

へて歩くことをする。

五　祖先の來る夜

かうした神々の來ぬ村では、家の神なる祖先の靈が、盂蘭盆のまつ白な月光の下を、眷屬大勢ひき連れて、家々にあがりこむ。祖位（ヲトゥカダ）の祖先の代表と謂ふ祖父、妣位の代表と傳へる祖母とを言ふのが、主になつて居る。大人前（オシュメイ）は家人に色々な教訓を與へ、從來の過ち・手落ちなどを咎めたりする。皆顔を包んで假裝してゐるのだから、評判のわるい家などでは、隨分恥をかゝせる樣な事も言ふ。その家では、これに心盡しの馳走をする。眷族どもは、樂器を奏し、舞踊しなどをする。此行事は「あんがまあ」と言ふ。語原は知れぬが、やはり他界の國土の名かと考へられる。私はある夜此行列について歩いて、人いきれに蒸されながら考へた。有名な「千葉笑ひ」京都五條天神の「求祭り（ウケラ）」の惡口、河内野崎祭りの水陸の口論、各地にあつたあくたい祭りは、皆かうした所に本筋の源があるのではなからうか。さう思つてゐる中に、大人前（オシュメイ）がすつと進んで出て、那是として、其年から勵行する事になつた節約主義を、哄笑を誘ふ樣な巧みな口ぶりであてこすつた。村の共通な祖先が出て來て、子孫の中の正統なる村君のやり口を難ずるのに對して、村君も手のつけ授がなかつた理由が知れる。其が倚住の要素を合んで、かくたれの懸け合ひが生れて來たのであらう。此三通りの人と神との推移の程度を示す儀式が、石垣一島に備つてゐるのである。此神も人も皆、村の青年の擇ばれた者か、嚴重な秘密の下に、扮裝して出るのである。先島の祖先神は、琉球本島から見れば極めて人間らしいあり樣を保つて居る。にいる人と言ふ名は、神の中に人間の要素を多く認めてゐるからなのである。而も、島人の中には、にいるを以て奈落の音將と考へて居る人もある程に、畏怖せられる神である。其は、地下の死後の世界の者で、二體と考へてゐるのは、大人前、祖母の對立と同じ意味であらう。さすれば、死の國土に渡つて後、さうした姿になつたと考へたか、元々さうした者の子孫として居たのか識らぬが、同根の語のにらいかないの說明には役立つ。

にらいに對するかないは對句として出來た語で、にらいが知れゝば、大體は釋ける。にらいかないは元、村の人々の死後に靈の生きてゐる海のあたりの島である。そこへは、海岸の地の底から通ふ事が出來ると考へる事もある。「死の島」には、恐しいけれど、自分たちの村の生活に好意を期待する事の出來る人々が居る。かうした考へが醇化して來るに連れて、さうした島から年の中に時を定めて、村や家の祝福と教訓との爲に渡つて來るも

のと考へる事になる。而も、この記憶がさうなつて久しい後まで斷片風に殘つて居て、樂土の元の姿を見せて居るのである。

琉球諸島の現在の生活―殊には内部―には、萬葉人の生活を、二の儘見る事も出來る。又、萬葉人以前の俤さへ窺はれるものも、決して尠くない。私どもの古代生活の研究に、暗示と言ふより、其儘をむき出しにしてくれる事すら、度々あつた。私は今、日琉同系論を論じてゐるのではない。唯、東歐西亞の民族と同系を論ずる態度と、一つに見られたくない。此論が回數を重ねるほど、私の話は、愈裏打ちせられてゆくであらう。

六　根の國・底の國

祓禊（ハラヘミソギ）の基礎となる觀念は、やはり唯海原に放つだけではなく、此土の穢れを受けると海のあなたの國を考へて居たものと思はれる。船に乘せて流す樣式が、祓の系統にあると言ふ事は、此行き着く土を考へに持つて居るのである。「氣吹戸（イブキド）にいますいぶきどぬしと言ふ神、根の國底（ソコ）の國にいぶき放ちてむ。かくいぶき放ちては、根の國底の國にいますはやさすらひめと言ふ神持ちさすらひ失ひてむ」とある六月晦大祓の詞は、必しも此土に居た古代人の代表的な考へと言ひきる事も出來まいし、又祝詞の傳誦が、久しく口頭に委ねられて居た間の自然の變化や、開化時代相應の故意の修正のある事が考へられるのであるから、多少注意はいる。が、日本の宗教が神學體系らしいものを持つて後も、根の國を海に絡めて言つて居るのは、唯の平地や山邊から入るものとし、單に地の底とばかりで、海を言はぬ神話などよりは、形の正しさを保つて居るものと言ふ事が出來る。（出雲風土記出雲郡宇賀郷の處に、師、北の濱に磯（イソ）（大巖石の意味）あり。名はなつきの磯と言ふ。高さ一丈許。磯至（ココ）は、邑人朝夕に往來する如く、又木枝も人の攀引する如くなれど、磯より西の方に、窟戸あり。高さ廣さ各六尺許。窟内に穴あり。人入る事を得ず。深淺を知らず。夢に此磯窟の邊に至る者は、必死す。故に俗人古より今に至るまで、號けて黄泉（ヨミ）の阪黄泉の穴と言へり。」夢にでも行けば死ぬと言ふので、正氣では、巖の西に廻らないのである。（伯耆の夜見島大根島などを夜見の國、根の國に聯想した先人の考へも、地方（ヂカタ）から近きに過ぎる樣に思はれるが、島を死の國と見た處は、姑らく棄て難い。海上遙かな死の島への道が、海底を拔けて向うへ通じて居ると言ふ考へが、一轉すると海底にある國と言ふ樣に變る。出雲風土記のも、或はさうした時代の考へ方に屬してゐるのかも知れない。大祓詞の方も、底の國といふ語に重きをおいて考へれば、海中深く吹き込むと說ける。併し又、遠隔した死の島へ向けて吹きつ

けるともとられる様で、どうでも解釋は出來る。」何にしても、出雲びとも大倭びとも、海と幽冥界とを聯絡させて考へて居たと思うてもよい様である。」)

七　樂土自ら昇天すること

奄美大島から南の鹿兒島縣下の島々は、どの點からでも、球琉と一と續きの血筋であるが、琉球の北端から眞西に當る伊平屋群島をこめて、なるこてること言ふ理想國を考へてゐる。伊平屋は、南方のまやの國の考へも持つて居た様だし、琉球半島のにらいかないをも知つて居た事は、巫女の傳誦して居た神文をば證據にする事が出來る。尙、琉球本島の宗教で、にらいかない以上のものとしたをぼつかぐらと言ふ地の名さへ唱へた様である。本島では、天の事をあまみやと言つた様に見えるが、此も神の名あまみこ、しねりこから想像出來るあまみ しねりと樂土の名から出たものらしい。をぼつかぐらなる天上の神の國が琉球の信仰の上に現はれたのは、當時の人の考へ得た限りでの全能な神を欲する様になつてからの事であらう。

私どもの今の宗教的印象を分解して見ても、幽冥界に屬してゐる者は、一つに扱うて居る場合が多い。單に神の住みかと言ふだけではない、惡魔の世界なる内容も持つて居る。神・惡魔・死靈など、其性質に共通した點が尠くない。其著しい點に、皆夜の世界に屬する事である。鷄鳴と共に、顯明界に交替するからだ、一番鷄に驚いて事遂げなかつたのは、魔や靈に絡んだ民譚だけではない。神々すら曉鷄の時をつくる聲の爲に、失敗した事を傳へてゐる。尊貴な神にすら、祭りの中心行事は、夜半鷄鳴以前に完へる事になつて居る、わが國の神々の屬性にも存外古い種を殘してゐるので太陽神と信じて來た至上神の祭りにすら、曉には神上げをしなければならなかつた。古今集大歌所の部と、神樂歌とに見えた晝目歌を見れば祭りの曉の氣持ちは流れこむ様に、私どもの胸に來る。昔になるほど、神に恐るべき要素が多く見えて、至上の神などは影を消して行く。土地の庶物の精靈及び力に能はぬ激しい動物などを神と觀じるのも、進んだ狀態で、記錄から考へ合せて見ると、其以前の髣髴さへ浮んで來るのである。其が果して、此日本の國土の上であつた事か、或は其次前の祖先が居た土地であつた事かを疑はねばならぬ程の古い時代の印象が、今日の私どもの古代研究の上に、ほのかながら姿を顯して來る事は、さうした生活をした祖先に恥ぢを感じるよりも、堪へられぬ懷しさを覺えるのである、庶物の精靈に「媚び仕へ」をした時代に、私どもの祖先の生活に段々力を持つて來、至上の神に至る階段になつた神と、神の國と

の語を避けなければならなくなつた

くどいまでに、琉球の例をとつて來たのは、此語をすらりと通す爲である。生物。無生物が、些しの好意もなしに、人居を廻つてゐる事を、絶えず意識に持つた祖先の生活を考へて見ればよい。古風土記には、いづれもさう言ふ活き物としての自然と闘うた暮し方の、後々まで續いてゐた事を示す幾多の話を書きとめてゐる。記録に乘つて、私どもに最遠い「古代」を示す祖先たちは、海岸から遠ざかる事を避けた村人であつたと思はれる。山地に村を構へた人々の上には、今語る古代には、まだ現れなかつたのである。記録の年立に随ふなら、神武以前の物語をする事になる。

八　まれびとのおとづれ

祖先の使ひ遺した語で、私どもの胸にもまだある感觸を失はないのは、「まれびと」といふ語である。「まらうど」と言ふ形をとつて後、昔の副を失うて了うた事と思はれる「まれびと」の最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて來り臨む神である。大空から海のあなたから、或村に限つて、富みと齢と其他若干の幸福とを齎して來るものと、村人たちの信じてゐた神の事なのである。此神は宗教的の空想には止らなかつた。現實に、古代の村人は、此「まれびと」の來つて、屋の戸を押ぶるおとづれを聞いた。音を立てると言ふ用語例の「おとづる」なる動詞が、訪問の意義を持つ様になつたのは、古義「音を立てる」が戸の音にばかり偏倚したからの事で、神の來臨を示す「ほとほと」と叩く音から來た語と思ふ「まれびと」と言へば「おとづれ」を思ふ様になつて、意義分化をしたものであらう。戸を叩く事について、根深い信仰と聯想とを、いまだに持つてゐる民間傳承から推して言はれる事である。宮廷生活に於いてさへ、神來臨して門におとづれ、主上の日常起居の殿舍を祓へてまはつた風は、後世まで殘つてゐた。平安朝の大殿祭は、これである。夜の明け方に、中臣、齋部の官人二人、人數引き連れて陰明門におとづれ、御巫（宮廷の巫女）どもを随へて、殿内を廻るのであつた。かうした風が、一般民間にも常に行はれてゐたのであるが、事があまり刺戟のない程きまりきつた行事になつてゐたのと、原意の辿り難くなつた爲に、傳る事尠く、傳へても其遺風とは知りかねる様になつて了うてゐたのである。此よりも古い民間の爲來りでは、萬葉集の東歌と、常陸風土記から察せられる東國風である。新嘗の夜は、農作を守つた神を家々に迎へる爲、家人はすつかり出拂うて、唯一人その家々の處女か、主婦かゞ留つて、神のお世話をした様である。此神は、古くは同

島の神ではなく、春のはじめに村を訪れて、一年間の豫祝をして行つた神だつたらしい。

此「まれびと」なる神たちは、私どもの祖先の、海岸を逐うて移つた時代から持ち越して、後には天上から來臨すると考へ、更に地上のある地域からも來る事と思ふ樣に變つて來た。古い形では、海のあなたの國から初春毎に渡り來て、村の家々に一年中の心躍る樣な豫言(カネゴト)を與へて去つた。此「まれびと」の屬性が次第に向上しては、天上の至上神を生み出す事になり、從つて「まれびと」の國を、高天原に考へる樣になつたのだと思ふ。而も一方、「まれびと」の內容が分岐して、海からし、高天原からする者でなくても、地上に屬する神たちをも含める樣になつて、來り臨む「まれびと」の數は殖え、度數は頻繁になつた樣である。

私の話は、「まれびと」と「常世(トコヨ)の國」との關係を說かねばならなくなつた。

九　常世の國

常世の國は、記錄の上の普通の用語例は、光明的な富みと齡との國であつた。奈良朝以前から既に信仰內容を失うて、段々實在の國の事として、我が國の內に、こゝと推定して誇る風が出來て來た樣である。常陸風土記に、自ら此國を常陸の國だとしたのは、其一例である。人麻呂の作と推測される「藤原宮の役民の歌」を見ても、「我が國は常世にならむ」と言うてゐるのは、藤原都の頃既に、常世を現實の國と考へてゐたからである。此等から見ると、海外に常世の國を求める考へ方は、古代の思想から當然來る自然なものである。出石(イヅシ)びとの祖先の一人なるたぢまもりが、ときじくのかくのこのみを採りに行つたと傳へる常世の國は、大體南方支那に故土を持つた人々の記憶の復活したものと見る事が出來る。此現實と思はれてゐる事柄にも、若干民譚の匂ひがある。垂仁天皇の命で出向いた處、還つて見れば、待ち歡ばれるはずの天子崩御の後であつたと言ふ。理に於いて不都合な點は見えぬが、常世の國たる仙界と、我々の住む國との間に、時間の基準が違うてゐると言ふ、民譚の世界的類型を含んでゐる事を示してゐる。浦島子の行つたのも、やはり常世の國であつた。此の物語では、「家ゆ出て三年のほどに、垣も無く家失せめや(萬葉)」と自失したまでに、彼土と此國との時間の物さしが違うてゐた。浦島の話は、更に一つ前の飛鳥の都の頃に既に纏つて居たものらしいが、早くわたつみの宮ととこよの國とを一つにしてゐる。海底と海のあなたとに相違を考へたくなつた事は、前にも述べたとほりである。

常世の國を理想化する時に到つたのは、藤原の都頃からの事である。道教信者の空想した仙山は、不死常成の樂土であつた。其上歸化人の支那から持ち越した通俗道教では、仙境を戀愛の理想國とするものが多かつた。我が國のとこよにも戀愛の結びついて居るのは、浦島の外に、ほをりの命の神話がある。此は疑ひなく、海中にある國として居る。唯浦島と纏つて居る點は、時間觀念が彼此兩土に相違のない事である。此海中の地は、わたつみの國と謂はれてゐる。此神話にも、富みと戀との常世の要素が十分にはいつて來てゐる。富みの豐かな側では、古代人の憧れがほのめいてゐる。海驢(ミチ)の皮疊を重ね敷いた宮殿に居て、歡樂の限りを味ひながら大き吐息(ナゲキ)一つしたと言ふのは、萬葉歌人に言はせれば、浦島同樣、「鈍(オソ)や。此君」と讀み嗤ひをするであらう。ほをりの命の還りしなに、わたつみの神の釣(ツ)り鉤(ハリ)を手渡すとて訓へた呪言は、「此鉤(ハリ)や、呆鉤(オボチ)・啾鉤(ススチ)・貧鉤(マヂチ)・迂鉤(ウルチ)」と言ふのであつた。此鉤を受けとつた者は、これ〳〵の不幸を釣り上げると呪ふのである。其上に水を自在に滿干させる如意珠を貯つて居るのは、農村としての經驗から出てゐるので、富みの第一の要件を握る事になるのである。貧窮を與へる事の出來る神の居る土地は、とりも直さず富みに就いても、如意の國土であつた譯である。

とこよと言ふ語が常に好しい内容を持つてゐるに拘らず、唯一つ違つた例は皇極天皇紀にある。秦(ハタ)河勝が世人から謂はれた「神とも神を傳へ來る常世の神」を懲罰した其事件の本體なる常世神は、長さ四寸程の綠色で黑斑點のあつた蟲だつたとある。橘の樹や蔓椒(ホソキ)に寄生したものを取つて祀つたのである。「新しき富み來れり」と呼んで家々に此の常世神を取つて淸座に置き、歌ひ舞うたと言ふ。巫覡の託言に、「常世神を祭らば、貧人は富みを致し、老人は少(ワカ)きに還らむ」とあつた。かうした邪信と見るべきものだが、根本の考へは、やはり變つて居ない「常世」竝びに「常世」から來る神の内容を明らかに見せてゐる。

十　とこよの意義

「とこよ」と言ふ語は、どう言ふ用語例と歷史とを持つてゐるか。とこは絕對、恒常或は不變の意である。「よ」の意義は、幾度かの變化を經て、悉く其の過程を含んで來た爲に、「とこよ」の内容が、随つて極めて複雜なものとなつたのである。「よ」と言ふ語の古い意義は、米或は穀物を斥(サ)したものである。後には、米の稔りを表す樣になつた。「とし」と言ふ語が、米穀物の義から出て、年を表す事になつたと見る方が正しいと同じく、此と同義語の「よ」が、齡(ヨ)、世(ヨ)など言ふ義を分化したも

のと見られる。更に萬葉以後「性欲」「性關係」と言ふ義を持つたものがある。此は別系統の語かも知れぬが、常世の戀愛、性欲方面の淨土なる考へに脈絡がある樣だからあげておく。「とこよ」を齡の長い義に用ゐた例は澤山にある。「とこよ」と言ふ語は、古くは長壽者を直に言ふ事になつてゐる。だが、長壽(トコヨ)の國の義から出たと說くのは逆である。「とこよ」の義には、まだ前の形があるのである。「常世の國に住みけらし」と萬葉人が老いの見えぬ女の美しさを讚へたのは、長壽の國の考への外に「戀愛の國に居たから」と言ふ考へ方も含まれてゐる樣である。

「とこよ」の第一義は、遙かに後までも忘れられずにゐた。奈良盛時の大伴坂上郎女(イラツメ)が、別れを惜しむ娘を諭して「常夜にもわが行かなくに」と言うたのは、海のあなたを意味したものともとれるが、多少さうした匂ひをも兼ねて、原義をはつきり見せたのである。宣長も、冥土、黃泉などの意にとつて、常闇(トコヤミ)の國の義としてゐる。常闇は時間について言ふ絕對觀でなく、物處について言ふもので、絕對の暗黑と言ふ事である。此意味に古くから口馴れた成語と思はれるものに、「常夜行(トコヨユ)く」と言ふのがある。かうしたゆくは繼續の用語例に入るもので、絕對の闇の日夜が續く義である。「神功皇后南の方に紀伊の國に詣り、太子に日高に會ふ。……更に小竹(シヌ)宮に遷る。是時に適(アタ)りて、晝暗きこと夜の如し。已に多日を經たり。時人常夜行くと言ふ」と日本紀にあるのは、此暗さを表すのに、語部(カタリベ)の口にくり返されたと思はれる。成語を思ひ合せて、「此が昔語りの天窟戶の條に言ふ天照大神隱れて常夜行くと言うたあり樣なのだ」と考へたものであらう。この常夜は、ある國土の名とは考へられて居なかつたやうに見えるが「とこよ」の第一義だけは、釋る樣である。併し尙考へて見ると、單純に「常夜の國に行つてる」やうなあり樣と言ふ感じを表すで語あつたかも知れない。さう思へば、古事記の「爾高天原皆暗(クレ)く、葦原中つ國悉(コト)に闇し。此に因りて常夜往く：」とある「とこよゆく」も固定した物言ひで、或は古事記錄當時既に一種の死語として神聖感を持たれた爲に、語部の物語りどほりに書いたものであらう。第一義としての常闇の國土なる「とこよ」が、祖先の考へにあつた事は想像してよい。

十一　死の島

寶船の話から導いた琉球宗教の淨土「にらいかない」が元死の島であつたことを說いた。私どもの國土に移り住んだ祖先の「にらいかない」は、實は「とこよのくに」と言ふ語で表され

てゐたのであつた。村々の死人は元より、あらゆる穢れの流し放たれる海上の島の名であつたのである。其恐しい島が、富みと齡乃至は戀の淨土としての常世とはなつた過程は、「にらいかない」の思想の展開が說明してくれて居る。海岸に村づくりした祖先の亡き數に入つた人々の靈は、皆生きて、遙かな海中の島に唯稀にのみあるものとせられてゐたのである。さうして、兒孫の村をおとづれて、幸福の豫言を與へて去る。その來るや常世浪に乘りて寄り、去る時も亦、常世浪に搖られて歸るのである。「天照大神、倭姬ノ命に誨へて曰はく、是の神風の伊勢の國は、常世の浪の重浪歸する國なり。傍國(カタクニ)の美國(ウマシクニ)なり。こゝに居らむと思ふ(紀)」とあるのや、「子らに戀ひ、朝戸を開き我が居れば、常世の國の浪の音聞ゆ」と丹波風土記に見えたのなどは、如何にも極樂東門に向ふと言ふ樣な感じであるが、更に語の陰にある古い印象を類ふと、神の祖徠の船路を思はせるものがある。すくなひこなの神は、此浪に搖られて蘿摩(カヾミ)の實の皮の船に乘つて、常世の國から流れ寄つた小人(コビト)の神であつた。さうして去る時も粟島の粟幹に上つて幹に彈かれ「常世に渡つたと言ふ。最古いものと言はれる寶船の畫に「かゞみのふね」と書いてあるのは、此船がすくなひこなの命の乘り物なることを示したもので、學者の入れ智惠の疑はれる點である。唯すくなひこなの古ごとを忘れて後も、蘿摩の皮に嫌ふべきものを載せて海に棄てた風習があつたものとすれば、蘿の船の類のものとして、其古さが加はる譯なのである。

「とこよ」の國と根の國とが、一つと見え又、二つとも思はれる樣になつたのは、「とこよ」が理想化せられて、死の島と言ふ側は、根の國で表される事になつて了つた後の事である。而も、「とこよ」は海上の島或は國の名となり、根の國は海底の國ときまつたのである。

「まれびと」の來る島として、老いず死なぬ靈の國として、「とこよ」は常夜ではなくなつて來た。恰もよし、同音異義の「よ」に富み(穀物)又は齡の意義があつた。聯想が次第に此方に移つて、事實と語と相俟つて、遂に動かされぬ富みと齡の淨土となつた事であつた。



成吉思汗傳奇 (3)

露伴學人

憤恨種子

第七折

場處。小丘起伏し、密林斷續せる、放難河の畔の一地點。
時季。前折に同じ。
人物。也速該巴阿禿兒。
也速該の兄、捏坤太司。
也速該の弟、答里臺、斡惕赤斤。
蔑兒乞特族の也客赤列都。
其從卒二人。

斡勒忽訥特族の女月倫。

馬上の也客赤列都及び同じく馬上の從卒二人、月倫を載せたる小車を護りて歸る途。

從卒甲。いやな奴等が去つて終つてから、時も餘程立つた。

從卒乙。引返して來るのでは無いかと心配したが、此樣子ではもう來無いらしい。何にしろ早く歸ることだ。

也客赤列都。さうだ。馬を急がすが何より緊要だ。もし彼奴が惡漢だつたら、惡漢に相手になるくらゐ馬鹿げたことは無いからナ。

從卒甲。然樣ですとも！世の中に理不盡の奴の相手になる位迷惑なことは有りません、わたしが氣が弱いから然樣云ふのでは有りませんが。

從卒乙。ハヽヽ、氣が弱いからでは無い、腕ッ節が弱いからだらう。惡い奴がはびこるのは惡い奴を通して遣るからだ。腕ッ節で理不盡な奴を遣付ければ道理は引込まぬ。かう見えても俺などは二人力、いざと云へば馬鹿者などは叩き挫いで呉れるつもりだ。

從卒甲。ト陰では威張つても、あんまり眞個に強さうでは無い。

從卒乙。ナニッ、此の弱蟲め。

ト云ふ時、馬蹄の音嘎々として聞ゆる。從卒甲、乙、也客赤列都キョツとして耳を澄て歩を止むる、間も無く也速該把阿禿兒を眞先に、つゞいて捏坤太司、答里台斡惕赤斤、威勢猛烈に突出し來り、

也速該把阿禿兒。退れ！　そこな男ども！　鬪ふか、サア。

ト叱咤する。從卒乙其の兇惡の猛威に怯れて第一に馬を引返して走り逃げ。從卒甲も同じく馳去る。也客赤列都も、

心外ながら衆寡敵せざるを見て、忽ち一計を出し、一卒の逃げたる方に吾が馬も遁られじと首を向けたる機に、身を捻返して也速該把阿禿兒の方に手を戟にして突き出し

也客赤列都。來い！來い！

と罵りながら、馬を飛ばして馳去る。吾が馬の駿足を利用し、あらぬ方へ三人を誘き入れんとする心算。

也速該把阿禿兒。おのれ猪小兒！

と跡を追ふ。捏坤太司、荅里臺斡惕赤斤も同じく追驅く。一個の白鶴、三個の蒼鵲、空中に盤旋するが如く、馬蹄おきた地に着かざるに似て走り、忽ち見えずなる。其間に也客赤列都の淡黄色の馬駛ること甚だ疾ければ、漸く三人と隔たり、其の背影を見せながら、一つの丘の巓を走り過ぎ、又一つの山嘴を轉廻し、一つの流れのやゝ幅廣くして深く、兩岸絹壁を爲せるを跳り越し、遂に三人を遙に後にして、前の月倫の車あるところに回り來る。車上に憂ひ悶えたる月倫、立ちつ居つして、彼方此方を見廻し居たるが、今也客赤列都の還り來れるを見て狂喜し、身を起して、

月倫。オヽ！也客赤列都！

と叫び、汗になりて馬を乘り付けたる吾が男に縋り付く。

也客赤列都。アヽ苦しい！心は跳る！息は喘む。！此の馬が能く驅けたればこそ彼等を撒いたが今直にまた追つて來よう。ア、何としよう！

と悲しみ苦しむ。此の腑甲斐無き言葉に少からず不快を覺えたると見えて、

月倫。何としようとは？

也客赤列都。噫、好い方法も無い！汝を抱いて逃げやうとすれば、馬は二人の重みには能う走りきれまい！闘はうとすれば三人に一人！

ト泣きさうになる。男心無き此の言葉に月倫は又更に心の張を失ひながらも、

月倫。弓も幸に此の車にある、箭も幾枝ある一の箭に前頭を、二の箭に二の奴を。然様はなりませぬか也客赤列都！

ト勵ませども也客赤列都心怯れて、

也客赤列都。屹度然様出來る手錬も無い！

ト嘆息する。月倫愈々男の雄心無きに遣る方無き哀愁を抱きながら、

月倫。闘はゞ闘ひやまで！手を空けて見てゐる月倫ぢや無い、御身の傍に死にませうに！

也客赤列都。そ、そ、それが悲しい。我が爲に其方を死なせるのが何より辛い。俺が殺されるのは厭はぬが！

ト豫じめ敵に及ばぬもの、やう自己を我から定むる弱き男の怯れたる心根を、月倫は卑しみ惡れむ心にもなる傍に、又其の我を愛することと淺からぬことの明らかなるに可憐と思ふ心も募りて

月倫。それでは？

ト、男の顔をじつと打瞻りて、其答無きに、

月倫。其の君には何様なれといふ御心なのか。

ト云ひかけて、ワッと泣けども男は猶言葉無し。月倫涙の間より男を視る、男も月倫を空洞になりし心にて視る。

涙眼相視て兩心凍り、山川寂として一鳥啼く。かくては果てじと月倫キッとなりて、

月倫。妾が何様なるのは厭ひませぬが、打合ひ咬合つて死なう心の無い御身を他の餌食にさせるそれが悲しい！、彼の

三人の恐ろしい眼、白い火の燃えた彼の眼つきは、御身を殺さう若い氣色。ア、今日は何といふ情無い日か！是非の無い運つたない運！貴郷を庇ふよりほかは無い、サ、是非も無い、お逃げなさい。御命さへあらば軒毎に女子は有りませう。男は御命さへあれば妻は又出來ませう。妻のやうたものは又有りませう。異つた名の者を又月倫となさいませ。何處までも御生命を全うしておいでなさい。急場の別離、記念のしるし、せめては此品を妾とおぼして。

ト美しき短衫衣を脫ぎて與へる。赤列都涙ながらに此を受くる時、馬蹄の音忙しく也速該等三人現はれる。赤列都馬を拍ちて急に逃ぐる。

捏坤太子。小賢しい奴！馬の良いので我等を撒き居つたが、ハテ何となる？ ハ、、、樹を倒さば根を拔け、人と爭はゞ血を見ろだ。彼奴逃がすまいぞ。つゞけ者共！

ト赤列都を追ふ。

也速該。谷里台。オ、、勿論！

ト續いて追ふ。月倫車上に伸び上りて、赤列都の馬の行方を見る。馬影早くも林間に消え去つて、追ひ縋らんとする三馬もまた頓て見えずなると、グタリとなつて車上に崩折れる。常磐樹の梢に微なる風音起り、風の齎らす秋籟河の瀬の響、ありや無しやに遠く聞ゆる。

月倫。何樣ぞして彼の三人に追付かれなさらねば好いが！ 馬は好いし、御軀は輕し、馬上は達者。樹の根、岩の角などに馬さへ躓かずば、必らず無事には逃がれなされうが、マア何といふ今日は惡日！語り交し笑ひ交した先刻までの運は盡きて、獨り悲しみ獨り氣遣ふ今の遣る瀬無さ！樹の葉が枝を離れては土に落ちても流水に乘つても、また枝には上る日に輝く事とは無い。女が賴みにした男に離れて、身の行末が何とならう！それに付けても恨めしい口惜しいの

は赤列都の腑甲斐無さ、頼み甲斐も無い、男甲斐も無い、なぜ敵はぬまでも一ト箭射る心は持たれぬ？なぜ胸の頭を立直して、敵の眼を吾が眼の光に睨み返されぬ？如何に女の孱弱くても、男の生命の取り遣りを默つて見て居る月倫では無いといふたに！嵐の風が吹萎る時、枝が折れれば葉も共に飛ぶ、それは是非無い時の仕合せ！それを厭はうわたしでは無いに。我が爲に其方を死なせるが何より辛いとは、恩情が餘つて味氣無い。わたしといふものをあんまり知らない、アヽ女といふものを餘り知らない。情が過ぎて情が無い。と云つて恨まうやうでは無い。嬉しい有難い心ではあるが……あゝ解らない人は。恨んでよいか悦んでよいかも解らない。自分も何樣思つて何樣なればよいか解らない。好い日は過ぎた。解らない日は來た。とは云へ、其のやうなことを思つてゐる時では無い。何樣したが好い？今のわたしは。たゞ身に襲ひかゝる運を待つのは、力の無い女にせよ愚かしい。オヽ、今日の悪運を逃れられるだけは逃れようとするが當り前、諺にもある通り、鷹を鵰に避ければ宿鶉も小禽を庇ふ、といふ。赤列都も茲に然樣せよといふ心が有つたにちがひない。逃げおほせよとは思はれないが、逃げられるだけは逃げよう。枯草の茂み、宿草の下、大樹の簇枝の上、岩の洞。

ト車を下りて歩み出し、身を隠すべき處を索め、前後左右上下、あちこちを見廻しながら、現無の心になりて去る。入りちがひに也速該等三人また現はれ、車上に人無きを見て、

也速該。ハヽヽ、斯樣有らうと思つた。
捏坤太司。世話を燒かす女
也速該。だが無理も無い　赤列都の指圖であらう。
答里臺。捜しませう　三方に分れて。

也速該　疎く遠く捜すな、細かに近くを捜せ　賢い者は燈火の下に闇さを便る　馬鹿で無い以上は脚限りには走るまい から、餘計の心づかひにはいらぬ、必らず見出せる、

三人三方に去る、

第八折

場處、前折の場處より也速該の幕舎へ歸る途中、馬に水飼ふに適したる小河の傍、

人物、也速該把阿禿兒（エスゲイバアトン）、

捏坤太司（ホクンタイシ）、

苔里寨斡惕赤斤（タリダイオッチギン）、

月倫（ウエルン）、

時刻。夕暮近し

月倫（ウエルン）車上に在り、也速該轠を牽きて車を從へ、苔里寨轅に傍ひて馬を打たせ、月倫の萬一に備へ、注意する。捏坤（ホクン）太司（タイシ）は前頭に立ちて路を望み先導する。暮色蒼然として山阿の樹の茂みより起り、まだ光らぬ月白く　青き天に懸り居る。夕風やゝふやかに、得意の人の面には快く渡り　悲める人の面をば淋しく吹く、十分に水飼はれたる馬は、家路を知りて、ことくくと歩む、月倫（ウエルン）は面を隱して、盡きせぬ涙に忍泣して居る。

苔里寨斡惕赤斤（タリダイオッチギン）。そのやうに何時までも泣いて居ずとも、ちと面を擧げて山や川のさまでも御覽なさい、風も然程は無

くて静かに暮れて行く春の夕、樹々も何様やら煙り立つやうで、悪い心持はせぬ頃です。

と頓ては吾兒の妻と思へば優しく慰むれども、

刀倫。ハイ。

トのみ言葉をも續がず。

喀里嚢。九日か十日の月が出て居ます。御覧なさい。白いばかりで光も無く人にも氣づかれずに碧空に隠つてゐるのみですが、も少ししたらば、美しく輝きませうし、又四五日も過ぎたら大きくもなり、其の上る時には丁度光りもあつて、人が皆其の出るところを仰いで見ませう。人も矢張り月の通り、其の處と時とで立派なものも詰ら無く捨置かれたり、又大層に持囃されもしませう。貴卿もこれからは光る月、輝く月となつて人々に仰いで見られるやうにおなりなさるのに、機嫌を悪くばかりして居らるゝことは有りません。

機月倫。……

也速該。ハヽヽ。打棄つて置け、喀里嚢！機嫌を取つて遣つて呉れ無くつても好い。今に解る。世の中の頓個の事は力なのだ。契丹（遼）が趙官（宋）を攻へ、阿勒壇（金）が契丹を押付けて、土地を取り民を取り物を取つたのに理も非もあるか。理非は棒に塗つた彩色だ。俺巴該合罕が生命を阿勒壇に取られたのに理屈は無い。樺の種子が飛んでむら〳〵と生へる。大きくなつた樹は小さな樹を日蔭にして終ふ、小さな樹は育た無くなる、又大きな樹の根は小さな樹の根に水を遣らないで自分が吸つて終ふ、小さな樹は水を取られて育たなくなる。何でもない。皆力がする事だ。力がさせる事だ。世の中に頓個の悪い者が有るなら其は力の無い者だ。鴿は力の無い枝梢には巣を造らぬ、屹度力の有る枝梢に巣を掛ける。燕は横板に巣を造らぬ、力の無いのを嫌ふからだ。鴿ちや無い、此世の法律が大古から力の

有る者を善い者としてゐるので、それで次第に筋骨の力や智慧の力の無い者が亡びて、力の有るものが榮えるのだ。男は皆それを知つてゐる。殊更我々は今力強い者にならうと骨折つてゐる。たゞ女だけが大昔から此事を知らない。それは女の性だ。女は力強いものより美しい者が好きだ。世の中の半分が然樣出來てゐるのだ。勝手にさせて置くがよい。眞のお蔭で世の中が美しくなるのだ。美しいものは善い、強いものは善い。醜いものは惡い、強いものは惡い。然し大本は力だ、世の中の眞個の事は力なのだ。鴿の巣は力強い枝に掛けられる。それで無ければ鴿は蹴き亡びる。我々は力を善い者として可い。

答里察。合不勒合罕の危かつた事、俺巴孩合罕の殺された事、それ以來其の事は誰しも思つてゐます。忽圖剌合罕の言葉も身に浸みてゐて、それは言つて戴かなくても解つてゐます。

二人の此談話を傍聽して、月倫は又今更に赤列都の心も身もたゞ美しくして強からざりしを思ひ出で、又今更に忍びかねて泣く。

答里察。其樣に烈しく御泣きなさるな。貴卿の御哭きなさる方は、七の丘を越えて往つて終はれ、幾條の水を渡つて往つて終はれてゐます。よし大聲たてゝ御呼びになつても振顧りは能う爲ますまいし、跡を追はうとお思ひになつても、跡を隱して往つて終つてゐます。何樣か御心を廣くお持ちになさつて!

第九折

場處。兀兒失溫河の西岸。也速該陣屋。

人物。也速該巴阿禿兒。

也速該の弟。荅里臺斡惕赤斤。
也速該の從卒多勢。
塔塔兒の勇將帖木眞兀格
同　豁里不花。
晃豁壇の察刺合

六。　紀元一千百五十五年。我が近衛天皇久壽二年。
忽圖刺合罕、合荅安太司、也速該巴阿禿兒等。兵を卒ゐて、塔々兒に對し俺巴孩合罕の復讐戰を試みたる一夜の曉天、夜襲の功有りて大勝利を得たるに營々さゞめきわたれる中に、也速該巴阿禿兒の幕營は、敵將帖木眞兀格、豁里不花の二人を生擒したるに殊更勇み立ち、劍光きらめき、馬聲勇むが間に、繩付二人を引据えて、從卒等これを也速該の前に見參に入れんとする。皮を張りたる將几樣の物に也速該腰かけ居る。從卒弓箭劍等を持ち、也速該の左右を圍繞し居る。荅里臺也速該の傍に在り。

也速該巴阿禿兒。昨夜の一戰、奇功を奏して、散々に塔々兒の奴原を斬捲り、手際よく引揚げたのは、よい氣持だ。
荅里臺。特に敵將二人まで生擒つたる上、按轡の馬、兵器其他品々も少からぬのは、重ね／＼心持のよい事で。
也速該。ム、其方はじめ皆々の甲斐甲斐しき働きによるところ。敵の總大將闊端巴刺合、札里不花二人は敏捷い奴で。今度も打洩らしたは殘念だが、先づ／＼以て大勝利、戰は何時も斯樣有り度い。
荅里台。生擒二人、御檢めなされまするか。
也速該。オヽ、一應改めて面を見て與れよう。

荅里台。生擒二人、此處へ引いて來い。

ト從卒に命ずる。從卒二人を引出す。二人臆せず、怒りたる態度にて入來り、突立ち居る。

從卒。坐れ。

ト繩尻を取つて引据ゆる。帖木眞兀格、豁哩不花の二人の中、帖木眞特に相貌も逞しく、堂々たるが、二人とも
ドツカと坐り、足を組み坐す。

也速該。汝は何といふ？

帖木眞兀格。帖木眞兀格。

也速該。汝は？

豁哩不花。豁哩不花。

也速該。帖木眞、汝の身分は？

帖木眞。千人長。

也速該。豁哩不花、汝は？

豁哩不花。千人長。

也速該。塔塔兒の奴等は汝等のやうな甲斐無い者を千人長としてゐる故に、昨夜のやうな見苦しい不覺を取る。おめおめと繩にかゝつて一日二日を生延ひやうより、何故斬死をせなんだのか。

帖木眞兀格。運が惡ければ是非は無いわ。見ろ、右の臂に箭を負ふて劍はおとす。馬も爪際を射られて脚を折る、乃公は落馬する。不意を打たれての敗軍、なまじ踏止まつたればこそ折重なつて押へられたのだ。運を換へれば汝だつて

斯様ならう。僞つて呉れるな、殺さばサア殺せ。

也速該。ムヽ、味なことを言ひ居る！好い奴だ。定めし今までに相應に働いて、此方の兵をいため居つたらう。

帖木眞兀格。ハヽ、そりや敵同士だもの、少しは汝の方の奴を傷めもするさサ。今更手柄話もはじまらぬことだ。さつさと處分をして呉れろ。

也速該。云はずともいづれ處分はする。死急ぎ（シニイソ）をするな。塔塔兒（タヽル）の内情を聞くだけ聞かにやア。

ト云ふ時、營前に馬の音聞え、小卒入來りて答里臺（ダリタイ）に對ひ、

小卒。申上げます。

答里臺。何だ。

小卒。敖雛（オノン）の迭里溫勃勒答黑（デリウンボルダク）より、晃豁壇（コンコダン）の察剌合（チャラカ）殿早馬にて只今陣門に到着。直々申上ぐることのある由にございます。如何いたしませう。

答里臺、也速該の面を見る。

也速該。よし。

ト、帖木眞等二人を引きて來し兵卒等に眼を遣り、

也速該。汝等此生擒を前の場處に連行き、油斷無く護り居れ。

ト命する。兵卒二人を引去る。

也速該。察剌合（チャラカ）をこれへ連れて來い。

ト命する。

小卒。ハツ。

ト去りて、やがて察剌合を引來る。五十餘りの人好げなる察剌合入來り、也速該、荅里臺に恭しく禮する。

也速該。察剌合！早馬は何事だ、何事か有つたか。

察剌合滿面の笑を堪へて

察剌合。ヤ、おめでたうござりまする、おめでたうござりまする。何事か有つたどころではござりませぬ。一大事のおめでたいこと！

也速該。フン。

察剌合。かねて御懷姙の月倫兀眞（兀眞は夫人と云はんが如し）様、御産めでたく安々と敖難河添の迭里溫勃勒荅黒（敖難河の左岸、也客阿剌勒と呼ぶ大河洲の上流十四支那里の地といふ）の御幕舍にて御男子御出生、御母子ともに何の御障りもなく、

也速該。ホ、ウ。

ト喜ぶ。荅里臺も喜びて、

荅里臺。イヤ、おめでたい！、戰には勝つ！男の子は生れる！

察剌合。ヤ、そのおめでたさも亦一ト通り世の常の態ではござりませぬ。如何なる瑞祥でござりませうか、蒙古にも聞かねば、阿勒壇も契丹にも、趙官の國にも聞いたことのございませぬ不思議！

也速該。ナニ、何の不思議の

ト聊か心配氣に云ふ

苔里臺。瑞祥があつたといふのか。
察刺合。ヘイ。何樣いふ事でござりまするか、老人どもゝ考へ得ぬことでござりまするが、若樣御誕生の其砌り、
也速該。フウ。
察刺合。若樣は其の御ン右の手に。
也速該。フン。其の右の手に、
察刺合。失阿（蒙古の兒童、我が邦の兒童の毬を弄ぶが如くに弄ぶ玩具にして、大鹿其他の巨獸の骨を以て作るもの
これを擲ちて遊戲す、玉の如き光澤ありといふ）のやうなる眞赤な血の塊を御握りなされて御生れなされました。
也速該。ナニ！失阿のやうなる血の塊を握つて生れた?!
察刺合。左樣にござりまする。
也速該。フムー。
答里台。フムー。不思議な。
也速該。何樣いふ瑞祥であらうかナア。」
苔里台。察刺合。さればサ。
ト同時に答へる。
也速該。シテ其の嬰兒の樣子はナ？
察刺合。物の見事な逞しい御顏つき、しつかりとした御身體つき。
也速該。フムー。

察剌合。人々はたゞもう若様の御噂で夢中になつて居ります。何樣いふ方に御成りであらう、いづれにしても一ト通りの方ではあるまいと。

也速該。ムヽ、何樣いふ瑞祥か俺にも分らぬ。が、何樣か美しい者にはならずとも強い者になつて呉れ、何樣ぞ強い者になつて呉れ、強い者になつて呉れ。

苔里台。ひよつとしたら我々蒙古の者の先頭馬になる偉いものちやあるまいか知らん。

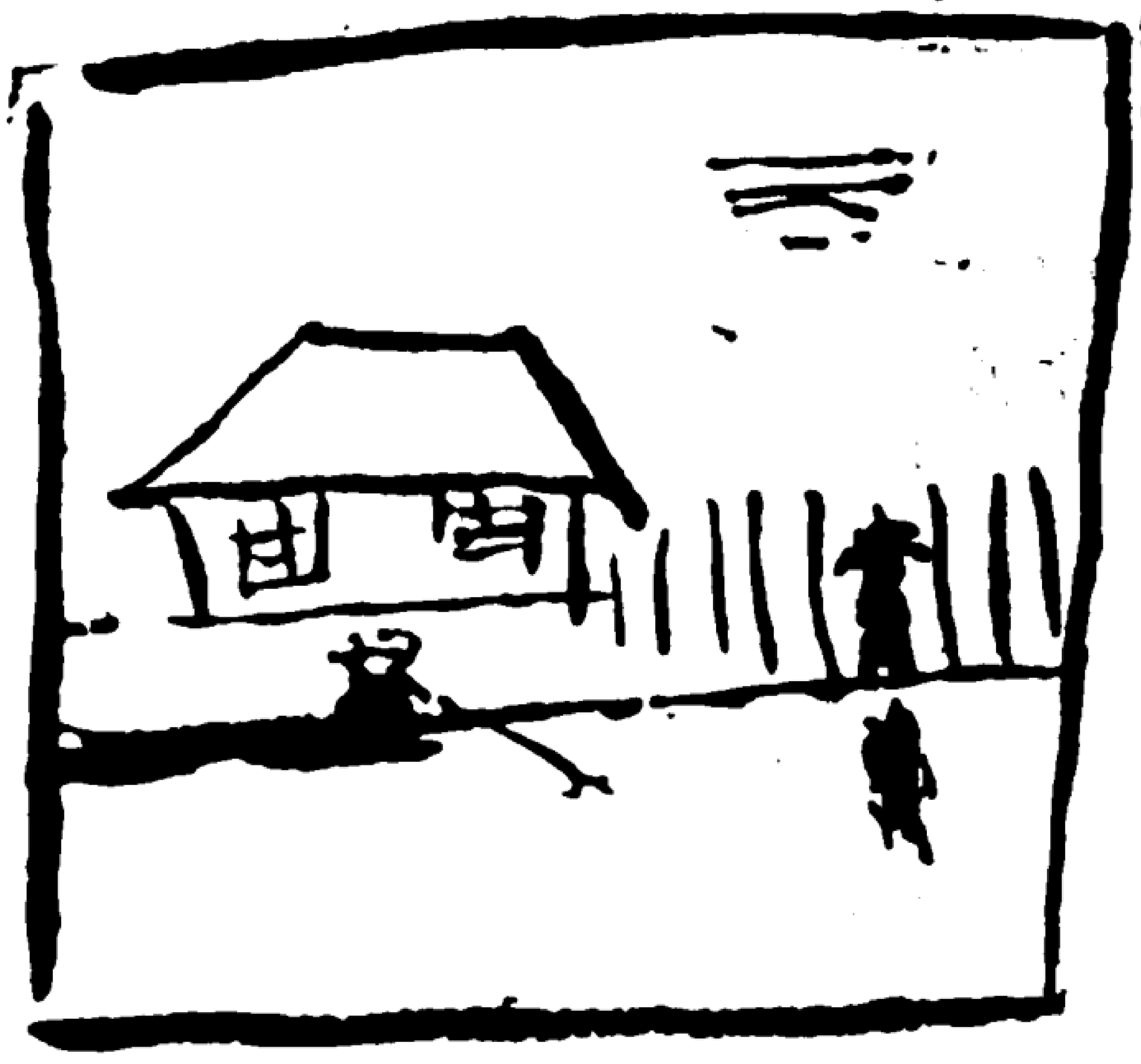
也速該。何にせよ乃公の魂魄のうづく者が生れた。嬉しいのだか、恐ろしいのだか、何だか知らぬが、育て！育て！今度の戰の勝利に因んで、鐵木眞といふ名を命けて呉れう。

苔里台。めでたい！

察剌合。おめでたうござりまする。

座上兵卒一同。おめでたうござりまする。

(憤恨種子終)



伊都滿譚詩

佐藤春夫

序

糸滿は琉球南方の一海村なり。その民は勇敢にして甚だ海洋を愛し、好んで扁舟をもて遠洋に泛ぶと也。われ故鄕に歸りて、南海の濱に居し、一夕、怒濤を聽きて興趣を覺ゆ。ふとリヒヤルト・デエメルに「海の鐘」の歌ありしを思ひ出で筆をとりて試みにこの譚詩をつくる。

なんぢ童たち
朝夕の目ざめに
潮騷の音を
海とや思ふらん。

わたつ海の底に
深く鳴りいづる
世にもいみじかる
鐘のひゞきは、

漕ぎ出でて水の
心臓に觸るる時
選ばれし舟子ぞ
命を賭けて聞く。

波ぞ美しき。波ぞ
勇ましき。波ぞ
怖ろしき。怖ろしき
美しき、可愛しき。

怖ろしき時いとゞ
可愛しや。波、命。
我は勇魚となりぬ
波の間にまに。

友や、七人
この日波に呑まれつ
勇魚なる我が眞上に
星一つ見えきて、

雲裂けて、月はだら
明け、鳴り出でぬ、鐘
海の鐘、生きて我
美しき身ぶるひす。

「海の荒、颶風の
友、人の勇魚」
かく呼ばれてわが
髪は白くなりつ。

常若の海は
白き髪を好まず、
わが骸は今ぞ
陸の妻にまかす。

言ひよりて囁く
海の胸の鐘ぞも。
まごころを明しぬ
底なき底より。

七たりの友に
われは勝ちつつ
海はこの日より
われに身を任せつ。

我ぞ聞きし。むかし。
海の底ふかく
鳴り出でて響く
いみじかるかの鐘の響。

よしや高鳴りて
胸をとどろかすとも、
知れ、潮騒はただ
たはれ女のたはれ唄。

子ら、友に勝て
風に勝て、海を娶れ
深なさけいみじき
海をその鏡に聞け。

覆りたる刳舟は
汝が腕に抱け。
二つなき海の鏡は
命かけて聞け。

わが教こそは、好き
童たちにのこす、
骸は、徒らに
陸の妻にまかす。

澁谷にて

與謝野晶子

水さしが落梅のごと面白く硯濡らしぬ藻風の家

主人出で天女と語る臺なれど地上の春を眺望すわれ

遠き霞近き欅の煙をば愛づる物見のしろき臺かな

數々の棚に木立と家を置き下の澁谷はうす霞ぞする

高き木も大厦もわれを仰ぎ見る物見の臺の暖きかな

屋上の物見を降り戸を押して入る時おぼゆ人の悲しみ

佳き夢の書庫の口より流れ來る所にありて物を思はず

春の空君が書齋の高き壁灰ばみ雪のはだらなるかな

玉筱めし蝦夷の刀の重きとはさま變りたる重き愁ぞ

人なればわれも心の移るなりあはれ死ぬまで終りの日まで

二方のくれたけ色の垂幕が書齋に引ける三月の春

春なれど信濃の霧の夕ぐれに似て暮れ行きぬ西のむさし野



東京百鬼夜行錄

ショップ・ガール

北澤秀一

一

家庭から社會に出て働いてゐる若い女性の中で、此頃最も人の眼につくのはショップ・ガールである。大都會に於けるデパートメントストアを初め、文房具店、藥種屋、化粧品屋、その他の大きな商店に働いてゐるショップ・ガールは、兎に角日本では極めて新らしい出現であり、一種の特色を持つた階級である。彼等の携つてゐる仕事それ自身は、必ずしも新らしいものではない。然し最近その數が增加すると共に、だん／＼彼等の容姿が美しくなり、全體を通じてショップ・ガール特有の表現をさへ持つ樣になつたので、ます／＼人々の眼につくのである。

初めて彼等の小さな群が三越呉服店あたりへ現はれた時、人々は之を女店員と呼び、或ひは賣子と呼んでゐた。そして今でも大概さう呼ばれてゐるけれど、私は强いてショップ・ガールと呼んで見たい。十年前には唯珍らしいと云ふだけで、とり立てゝ云ふほ

どの特色を持つてゐなかつたけれど、今日の彼等はその頃の女店員ではない。私が强いてショップ・ガールと呼ぶのも、女店員だの賣子だのと平凡な名詞で呼ぶよりは、外國語でハイカラに呼ぶ方が、彼等の持つてゐる近代的な氣が、もつとはつきり出て來るからである。

往昔だつて女の店番はあつた。美しい看板娘が座つてゐる爲めに、さかんに烟草の賣れる烟草屋もあつた。然しそれはたま〳〵その烟草屋の娘が美しくて、彼女が店へ出て愛嬌を振りまくのを意としない場合だけであつた。是等はみんな特殊な例で、廣い意味に於ける若き女性の職業ではなかつたが、私が茲に云はうとするショップ・ガールは、多數の若き女性の爲めに、かなり近代的な職業上の地位であると共に、婦人問題としても社會問題としても重大な意義を持つて居る。

そして大商店がショップ・ガールを使ふシステムは、勿論外國から輸入したものであるが、そのオリジンは烟草屋の看板娘が客に對する心理の延長である。それを應用しそれを組織的にして、規模を大きくしたものに過ぎない。だから最初から美しい娘のみが選ばれ、次第に美しい娘達が其處へ集つて來る樣になつた。センセーションを起すのは何時でも美しいものである。世間が之を婦人問題として、或は社會問題として取扱ふよりも、ショップ・ガールに對して民衆的興味を動かす事の方が多いのはその爲めである。

美しい若い女を利用してうまく商賣をしてゐるのは、此外にカフエーと料理屋とがある。そして其處に働いてゐるウエートレスも、廣い意味に於てショップ・ガールと呼ぶ事が出來るかも知れないが、よく考へて見ると兩者の間にはかなり內容的な隔りがある。假りに同じ愛嬌を賣る商賣だとしても、ショップガールの方は物を賣ると云ふ事務がその主眼であり、ウエートレスの方は客を接待する方が主眼であるからである。殊にショップ・ガールは時間を定めて、多くは日中だけ働いてゐるのに對し、ウエートレスは舊式な日本の料理屋に働いてゐる女中と同じ樣に——早番遲番などの制度があるにしても——その勞働は終日終夜で定つた彼女自身の時間を持たぬ點に於て、甚だしく文化的相違がある。

私はショップ・ガールを重んじて、ウエートレスを輕蔑する譯ではないけれど、前者の方がより多く近代的色彩を帶びてゐるだけ、それだけ多く興味を持つのである。そして世間の人々も亦、ウエートレスのロマンスなどにはもう耳を藉させないのにショップ・ガールのロマンスだと大袈裟に云ひ立てるのを見ても、如何にショップ・ガールの群が世の中の注意を惹きつゝ

あるかゞ分る。

二

今まで家庭にばかり閉ぢ籠つてゐた若い娘達が、社會へ出て働く樣になつたのは、兎に角最近に於ける世界的傾向である。そして此傾向は主として各國の大都會に現はれたのであるが、此の爲めに種々の婦人問題が思想から實行に移つて來たのは爭ふべからざる事實である。

歐米諸國の若い婦人達が家庭から街頭にその歩みを進めたのは今世紀の初頭からである。然し俄かにその數を増したのは、あの世界大戰を機會としてゞあつた。日本でも矢張り三越、白木屋あたりが若い娘を使ふ樣になつたのは、必ずしも新しい事ではないが、東京では一昨年の大震災を機會として、外へ出て働く若い女性が著しく増加し、ショップ・ガールの數が俄かに増へた事は誰でも知つてゐる通りである。

日本の都會ではまだそれまでではない。然し今後ます／＼増加するであらうが、何れにしてもショップ・ガールの存在は、文明國に於ける大都市の都會的條件の一つとして、もうなくてはならないものになつて終つた。ニューヨークでもさうだ、パリーでもさうだ。ロンドンでもさうだ ベルリンでもさうだ、是等の大きな都會を旅行した人は誰でも氣の付く事であるが、何處のデパートメントストアへ這入つて見ても、何處の商店へ這入つて見ても、嬉々として働いてゐるショップ・ガールが余りに多いので、娘と云ふ娘はみんな外へ出て働いてゐるのではないかと思はれる位である。

そして是等のショップ・ガールが如何にも美しくて、愛嬌のあるのに私達は吃驚する。それは何處でも同じ樣に出來るだけ愛嬌のある美しい顏の持主を選むからでもあるが、ロンドン、パリ、ニューヨークのショップ・ガールが、日本の藝妓などより余程愛嬌があつて美しい事は實際驚くに足るものがある。

勿論單に美しい女を求めたら女優の中にもゐるであらう。コーラスガールの中にもゐるであらう。然しショップ・ガールの群は、その數に於て、其淸新さに於て、それから何處の店へ行つても見られる點に於て、數の少い女優やコーラスガールを、正に壓倒しつゝある。そして日本のゲイシャ・ガールが古い時代の社交界の花であつた如く、歐米の大都會では今や是等のショップ・ガールが、その都を飾る花である。

「そしてそれ等のショップ・ガールは夜になるとみんな町へ出て稼ぐさうぢやないか。」そんな風に想像してゐる者は、私が何時かロンドンのショップ・ガールの話をした時、さう云つた私

の大半ばかりではないかも知れない。勿論多數の中にはセミ・プロフエッショナルな夜を稼ぐ女もたまにはゐるであらう。さがして見たら普通の娘の中にだつて卑しいことをしてゐるのがあるのだから。細君の中にさへ堅い藝妓より浮氣なのがゐるのだから。よく事情も知らぬ旅行者などが、夜の町で親しくなつた娘が偶々何處かの店にゐたからと云つて、或は出鱈目に彼女が何處かの店に務めてゐるなどゝ云つたのを眞に受けて、ショップ・ガールの大部分がさうだと思ふのは大間違ゐである。

然し何處の國でも、女を享樂の對象とする時、惜し氣もなく大金を拂ふのに反比例して、その勞働賃銀が廉いのは、日本と同じ事である。例へばロンドンに於けるショップ・ガールの俸給は、一週二磅内外が一番多く、三磅以上四磅もとるのは極めて稀である。富んでゐるアメリカのショップ・ガールはもつと餘計貰つてゐる樣であるが、富の程度が餘りに違ふアメリカの例よりも、ロンドンに於ける例の方が適切かも知れない。其處でロンドンに於ける一週二磅の金は普通の廉い下宿料と同じ額だから、若し彼女が自活しなければならないとしたら、それだけでは何うしたつて足りはしない。一月に三十圓か四十圓貰つてゐる東京のショップ・ガールが、獨立しては暮して行く事が出來ないのと同じ事である。だから多數のショップ・ガールは何れも親がゝりで、或る者はその收入に依つて幾分でも家庭の生活を扶け、或る者はその收入に依つて出來るだけ親の世話になるまいとしてゐる。そんな程度に過ぎないのである。然し中には何うしても自活しなければならない境遇にゐる者も少くはない。其處で問題は起るのだ。

それが意志の固い働きのある娘ならば、何んなに儉約しても、遊ぶ時間を節約して内職をしてさへ、自活の途を立てるのであるが、意志の弱い女が生活の苦しさに堪えかねて、何時の間にかストリートガールの群に墜ちて行くと云ふ樣な事は何處にでもあり得る。今までは親がゝりで大きなショップへ通つてゐた娘が、急に父親が失くなつた爲め、病氣の母親と幼い妹とを抱えて、何うにも立ち行かなくなつたと云ふ樣な話は、新聞の六號記事にさへならないほど彼方にも此方にもある。俺のガールは本統に可哀さうだよなどゝ云つて、彼女がストレンジアーに媚を賣らなければならなくなつた、そんな種類の哀話を、のろけまじりに聞かされた事は、ロンドンにゐる時しばしばあつた。

三

然しこんな種類の哀話なら日本にだつてあるに違ゐない。幾らでもありさうな事である。けれど多數の中に少數の悲劇の主人公がゐたからと云つて、眞面目に働いてゐるショップ・ガールの全體を、賣春婦の團體でゞもあるかの如く云ふのは、何と云ふ氣の毒な、そして殘酷な見方であらう。

そして私が前に、歐米の大都會に於けるショップ・ガールは日本のゲイシヤ、ガールが社交界の花であつた如く、今や文明國の都市を飾る花であると云つたのも、彼等の中に媚を賣るものがあらうと云ふ意味ではない。其處に美しい娘が大勢集つてゐるので、それが一般の、そして多數の青年の對象になつてゐると云ふ意味に過ぎないのだ。そして此美しい娘達が大通りの商店の華やかな店頭を飾つてゐると云ふ意味に過ぎないのだ。

歐米の大都會に比較すれば、その販賣術も、店頭裝飾も著しく劣つてゐる東京に於てさへ、そして店頭に於て働いてゐるショップ・ガールの數はまだそれほど多くもない東京に於てさへ實際彼等は新しく生れ出でた都會の花だと云ふ樣な感じがする。そしてヤング・ジェネレーションの對象が、カフェーのウエートレスなどよりも此方に向ひつゝある事を見逃す譯には行かぬ。

前にも述べた如く彼等の收入は決して多いものではない。店に依つて人に依つて違ふのではあらうが、私の聞いてゐる範圍では大低三十圓から五十圓位ゐまでゞ、特殊な技倆を持つてゐるものでなければ、それ以上は貰つてゐない樣である。だから東京のショップ・ガールもまだ經濟的に獨立する事は出來ないのだ。若し收入の點から云つたらカフェーに働いてゐるウェートレスの方が、場所に依つては二倍も三倍も得てゐるさうだから、とてもそれに匹敵する事は出來ない譯である。然しショップ・ガールは夕方店から歸つたあとの時間を、自由に使ひ得る點だけでも近代的勤務である。若し何か勉强でもしやとする娘の爲めには、ウェートレスに比べて餘程優秀な地位にゐると云はなければならぬ。

婦人勞働問題の上から見れば、彼等の收入に關しても議論の餘地はかなりある。けれど我國の會社や事務所には、一人前の男でさいショップ・ガールと同じ程度の俸給で働いてゐる世の中だから、彼等の收入が社會問題にならう筈もないし、私も亦之を論じやうとは思はない。それよりももつと大切な事は、十年以前ならば家庭にゐるべき多數の若い娘が、社會へ出て働いてゐると云ふその事實と、更にその收入はまだ獨立して自活し得るほどでないとしても、勞働に依つてなにがしかの金を得て來ると云ふその事實である。

諸種の婦人問題は素より、思想的にも法律的にも、社會的にも家庭的にも解決されなければならないが、それ等の問題を實現する爲めに、婦人の經濟的獨立は常に少からざる關係を持つてゐる。若し多數の婦人が獨立して生活し得るならば、社會的にも家庭的にも解決さるべき問題は澤山あるのだが、現に彼等はその基礎を築きつゝあるではないか。勿論婦人の經濟的獨立のみに關して云へば、ショップ・ガールよりもその他の職業婦人、例へば事務員、タイピスト、婦人記者、女優、それからウエートレスなどの方が優つてゐるかも知れない。然しショップ・ガールは是等の職業婦人に比較すれば專門的職業婦人でない點に於て、言葉を換へて云へば準素人――そんな言葉を使つて好いか惡いか知らないが、商賣人ではない感じがする點に於て、それから最もその數が多い點に於て彼等の得つゝある地位や、進んで行く途が問題になるのである。詰り他の職業婦人は別として、新しい多數の若き女性の群が、やゝ獨立的地位を占め、同時に社會的交渉を持つて來たと云ふ事は兎に角著しい事實と云はなければならない。

四

私は斯くの如き傾向が、一般の若き女性の爲めに、また家庭問題の上から見て、それが善であるか惡であるか斷言する事は出來ない。然し都會に於ける小賣業の發達するに從つて、ショップ・ガールが益々增加するであらう事と、美しい娘達が今後次第に其處へ集つて行く事だけは豫言し得られる。

ショップ・ガールの商店に於ける仕事に對して、保守派は、かう云つてゐる。若い娘を人中へ出して曝しものにする事が既に恥である、女に金を稼がせると云ふこともよくない、と。然し之は經濟的に多少でも餘裕のある階級の云ひ分らしい。そして進歩派は、女だつて外へ出て稼いで見るが好い、金の大切なことが分るから、と。之は娘を稼がせなければならない階級の思想かも知れぬ。そして他の進歩派は、世間見ずの娘を社會に出して働かせるのも好い事である。殊に共同生活に對する訓練のない日本の女に、社會的教養を與へる事は極めて必要だ、とさへ云つてゐる。

果してそれが善であるか、惡であるか、ショップの仕事がどれだけ彼等を訓練するか、それは別問題として、兎に角ショップ・ガールの群が今後益々增加するのは避け難き事實である。そして彼等が自分自身の勞働に依つて金を得、家庭よりも社會的に生活する時間の方が多い爲めに、おのづから彼等の思想や態度が變化する事も避け難き事實である。

何れにしても日本に於けるショップ・ガールの出現は、極めて最近の事でもあり、殊に東京大阪の様な大都會にのみ見られる新しい階級に過ぎないからまだ彼等は社會的風潮を作るほどの努力を持つてはゐない。けれど歐米各國では、ロンドン、パリ、ニューヨークの様な大都會は勿論、都會と名のつくほどの都會には、夥しき多數のショップ・ガールがゐる爲めか、彼等は常に一種の社會的風潮を作つてゐる様に見える。例へば彼等が平氣で烟草を喫んだり酒を呑んだりしてゐるのも――アメリカには酒はないけれど――彼等が自分の收入を持つてゐるのと社會的生活をしてゐる處から、何時の間にか覺えた習慣である、若し此階級の娘達がその母親の如く、家庭生活に終始してゐたとしたら、烟草や酒の味と云ふものを知らずに濟んだかも知れない。

假りに酒や烟草は別としても、彼等の社會生活が家庭の娘と比較して、彼等の思想や態度をどれだけ自由に、近代的にしてゐるか知れない。ふるいロマンテイシズムからナチュラリズムへ、センテイカンタリズムからリアリズムへ、そして傳統主義から自由主義へ、次第に移り行くモダーン・ガールの傾向を、私達ははつきりと看取する事が出來る。勿論彼等は棄てゝ置いても此傾向に向つて進んで來たかも知れぬ。然し彼等の働いてゐる商店のコンマーシアリズムと、自由な社會生活が、少からずその傾向を促進せしめた事は明かな事實である。そして同時に斯う云ふ傾向を持つた娘達の中から、自由戀愛論者が出たり、享樂主義者が出たり、時としてはストリート・ガールに轉ずるものが出たりするのも、その經路を察する事が出來るではないか。

五

然し、彼等の思想や態度がどんなに變つて來た處で、完全に經濟的獨立の出來ぬ點がショップ・ガールの弱味である。彼等の中に時々美しい女の悲劇が起るとしたら、矢張り其處からである。

そして、生れたばかりの日本のショップ・ガールは、之からどんな態度を執つて進んで行くであらう。今後彼等のグループがもつと大きくなつた時、彼等はどんな新しい風潮をつくつて見せるであらう。私は凡そそれを想像する事が出來る。

モデルになる娘

竹久夢二

A──記者。C──畫家

A。モデル娘のことを話して頂きたいのですが。

C。モデル娘といふと、繪のお手本になる方の娘のことでせうね。

A。むろんさうです。モデル娘には何か面白いローマンスがあるでせう。

C。どうしてさうお思ひでせう。モデル娘だつてやはり普通の娘として育つて、ただ職業としてモデルを撰んだだけでどこも違つた所はありませんよ。

A。さうでせうか、境遇がちよつと違つてゐるぢやありませんか。

C。相手が美術家だからといふのでせう。すると美術家も、世間からは特殊な人間に思はれてゐるわけですね。

A。まあさうぢやないでせうか。それにモデルになるには、特殊な條件があるのではないですか。たとへば體格だとか、容貌だとか、それにどつか違つた容子がありますよ。何つて言ふか──どこかコケテイシユな。

C。そんな事はないでせう。昔は職業婦人はみんな髮結や、藝者や、救世軍はむろんのこと、電話交換手でも、女學生でも、教會の女でも、モデルの娘も一種の型を持つてゐたやうですが、今は一見何ともかんとも分らなくなつたやうですよ。

A。昔のモデルはどんな風でした?

C。昔は──とうとう私にモデル話をさせるんですね。よろしい、では昔話からはじめませう。

A。是非どうぞ。

C。今のモデル屋の宮崎の先代の女主人がモデルがプロフエ

ショナルになつた最初の女ださうですよ。何でももとは旗本の娘かなんかで、上野公園へ茶店を出してゐたお菊といふ女を、その頃の美術學校長だつた岡倉さんが勸めて、着物を脫がせて、モデルにしたのださうだ。

A。ではロテのお菊さんのやうな女だつたでせうね。

C。さあ、ぼく等が世話になつた頃には、もうモデル婆さんで通つてゐたくらゐだから、美人だか何だか分らない年頃で、自分でモデル娘の周旋だけしてゐたから。

A。その時代にはどんなモデル娘がゐましたか。

C。黑川さんがよく使つた、例のお千代といふモデル娘は、時々モデル臺の上から先生に飛びついたさうだ。ぼくは使はないからお千代は知らないが、この頃の白馬會の連中は大分惱まされたつて言ふ話だ。

A。W畫伯はモデルと大分艶聞があつたつて話ですが、さうですか。

C。さあ、あつたかも知れないが、なんしろあの頃は、君がさつきも言はれたやうに、モデルになる女は自墮落な女かなんかでなくてはなれないやうに思つてゐたし、雇ふ方も、まだ、第一世間だつて今よりはロマンチツクだつたから、浮名も立つたわけですよ。今のやうに商業主義になつては、モデル娘だつて浮名の立ちやうもないでせう。

A。その頃の作品になつたモデルの有名なのがありますか。

C。和田英作氏のお七のモデルは、後に島森の藝者になつたお仁だと言ふし、岡田三郎助氏のお蘭だとか、中村不折氏の「孟母斷機」のおさき、新海竹太郎氏の「辨天娘」のおかつだとかね。しかしモデル列傳なんかつまらないではありませんか。實際は作品とたいした交渉がないのですからね。

A。作品とでなく、作者にもつと交渉の深いモデルの話はありませんかしら。

C。そんなのは一種の美談でもう傳説だ。

A。そんなのを一つ聞かせて下さい。

C。モナ・リザのやうな話は日本にはないやうだが。京都の方にゐた頃こんな話がありましたよ。何でも堀川邊の友禪の下繪を描いてゐる男なんだが、文展へ是非通りたいといふので、主人の娘をモデルになつて貰つて、六曲一双の費用をやつとまあ工面して、この男でも文展へ通れば、といふ空頼みと、主人もいつか掛けてくる。本人は、その曉は娘に結婚を申込むといふ大それた空想がだんだん增長して來たものと見える。たかが友禪畫描きでも、繪筆をもつてたつとモデルの方を見つめた眼は輝いて、ひとかどの藝術家に、その娘には

見えたのがすべての不遜のもとで、文展落選、出入法度とい
ふことになつた。

A。　そんなのが實際あるんでせうね。

C。　こんなのがある。あるモデルがある彫刻家の仕事場へ通つてゐた。彫刻家は氣輕な好人物なんだが、仕事となるともう一心不亂で超人的な人間に見える。といつの間にか、その十七になるモデル娘は。――そのモデル娘はモデルになつてはじめてこの彫刻家の許へ雇はれてきたので、年は若いし、經驗はなし、一つの部屋の中で、若い愉快な青年と二人でゐるのだから、いつの間にか戀してしまつたものだ。片方の彫刻家にとつては、たゞ一人のモデルで、眼前に白い東が動いてゐるぐらひで、前週使つたモデル娘も、今週はじめたこのモデル娘も、異つた心持では對してゐないのだ。一週間が――娘の考へるには、夢のやうにすぎて、やがて二週間目になると、どうもモデル娘變なので

「おい。お前眠いのかい」

「いゝえ」

「どこか悪いのか？」

「いゝえ」

「じや、しつかりしろよ。もつと二の腕に力を入れてくれ。さうだその調子だ」

彫刻家にさう言はれて、娘は、はつとして顔を眞赤にして、一もとのポーズをとるのでした。何か自分の心持に、自分ではほつきり意識しないほどに、男を思ひそめてゐたのを。見拔かれた恥かしさにすぐきた姿勢(ポーズ)がくづれて、夢見心地でぼんやり、モデル臺に立上るのです。

「仕様がないなあ、もう今週で仕上げるつもりなんだよ。もつとしつかりポーズを作つてくれなくちあ困るよ」

「はい」

娘はさう言つて、また、夢見心持から甦るのでしたが、もう今週で製作が終ると聞いて、悲しくなつたのです。製作が終るともう、自分には用はない。製作の完成する日が近づくことは、自分の愛する人にもう逢へなくなる日が近づくことだ。娘は、あさはかにさう考へました。

娘の戀は、製作と一所に日一日と成長して、我知らず心で育つてゐたのです。

ある日、娘はアテリエから歸りしなに、完成に近づいた自分の立像をぢつと見つめてゐました。熱い涙が娘の眼からぼろぼろと落ちてゐました。

娘はいきなり泥人形の首をもぎとつて、どんどん、走つて歸

りました。

翌日、彫刻家は驚きました。

娘は、彫刻家の足もとへ、泣きくづおれて、「あたしの首も、あなたがもぎとつて下さい、さうすれば、あなたのお腹立もなほらうし、あたしの望みも叶ひます。」と言ふのです。

C。　それは、實際の話ですか。小說ですか。

A。　本當さ。「實錄模泥瑠娘雪白首」といふ題で小說にするつもりなんだ。今一つ、これは小說にあつたんだけれど本當よりも本當だから話しませう。これは畫家とモデル娘が愛しあつたのだが、どつちも自由なのだが結婚出來なかつた。畫家の仲間でも誰知らぬ者もないほど、許してゐたのです。そのうちに畫家の方は、外國へゆくことになつて、いよいよ出發といふ日がきまつて、親しい、仲間うちで、その畫家の畫室でフアシボール式の送別會をやつたのです。その日はむろん、そのモデル娘も盛裝してやつて來ました。

「ようお幹ちやん」

「これはこれは幹子夫人」

などとこの仲間獨特のこの日はわけても道化けた變裝をした人物が、お幹といふこのモデル娘にからかつたものです。

「涙でお白粉が剝げたよ」

そんなことも言ふのです。實際、お幹は葉山――これはその畫家の名です――に別れることを考へて、笑ひながら泣いてゐたんです。

「嘘だよ。お幹ちやんの涙なんかお天氣さへよければすぐかはくよ。見てろ、葉山の船が棧橋をはなれる時分には、お幹ちやんは、橫濱の公園を新しい戀人と步いてゐらあね。」

戲談にしてはすこしあくど過ぎることを言つた道化が一人あつたのです。

「湯川さん、あなたそれを本當に仰言つたんですか。あたしは何を言はれても好いけれど、今日は葉山さんとお別れの日なんですよ。あたしは葉山さんに濟まない」

お幹の眞劍さは、一坐のものを動かして、何か苦しい空氣が一室に出來てしまつた。湯川といふ男は、氣まづくなつてきたが、酒の上ではあり、變にいこぢになつて、お幹が現にこの間も葉山でないある男と池の端を手を組んで步いてゐたといふやうな話までして、自分の言分を立てやうとしたのです。

「湯川さん、何とでも仰言しやい。あたしはもうあなたとあつたことないことの押問答なぞしやうとは思ひません。ただ、葉山さんに、愛する葉山さんに、別れの際に少しでも、

あたしが不實に思はれたり見られたりするのはいやです。だから、いまみんなに、あたしがどんなに葉山さんを愛してゐるか、その證言を見せてあげます。あたしの葉山さん、さやうなら」さう言つたかとおもふと、あつけにとられてゐる道化人物の仲をわけて、畫室の高窓から崖下へ飛びおりて死ぬといふ、モデルの娘の話です。

A。面白いですね。なんといふ小説ですか。

C。「岬」といふ小説ですがね。書出しはどこか岬の海水浴場のホテルのバルコンの客の會話からはじまるのです。その時、岬の道を、夕燒の空を背景にして影繪（シルエット）のやうな一人の男が、大きな乳母車のやうな車を押して歩いてゐる。その車の中に女が乘つてゐるんです。

A。シネマ式ですね。

C。その女がモデル娘です。窓から飛びおりて足が折れたんです。そこで、そのロマンチックな畫家は、外國へゆくのをやめて、その娘と、海岸の淋しい邊土で埋れたる日を暮らすといふ筋なんだ。まだそんな話があるよ。

A。いや、今日はもうこれだけで澤山です。

C。さうですか。ぢやさようなら。

（三月一日記）

漁婦一夕話

三上於菟吉

繪かきの伊野と布木（いづれも假名）なぞといふ連中はその道の勇者といつてもよろしい。二人ともモンマルトルを荒し廻つて來た猛者どもで、まして本國日本での狂暴ぶりと來ては、からだも頭も弱い僕なんぞは指をくはえて見てゐるだけでも腦貧血が起りさうな氣がする。この連中の一人の伊野が、最近僕の書齋を訪れて話して行つた。共同經營冒險一夕話といふ奴を、改造社のおすゝめで讀者諸君にお裾分けすることにしよう。

* * * * * * *

「……俺達はすつかり飽き飽きしちやつたんだ。繪は描けず、妙に酒がまづくなるし、二人つながつて放埒三昧なことをしてみたところで、藝者だつてコオラスギヤールだつてけち臭いとんちきばかしだし、麻雀や花には負け込むしで、何もかもが味氣なく素氣なく、全くもつて生の倦怠（アンニュイ）といふのを感じちやつたんだよ。するとある朝、女拔きで泊つた下谷の待合の奧座敷で、布木の奴、並べて布いた隣りの床で新聞をバサ〳〵やつてゐたが、急に突拍子もなく元氣な聲ではしやぎ出したものだ――

「こいつあ面白いぞ――こいつあ刺戟的だ。」

「何が面白いんだい？刺戟的なんだい？」と、僕が訊ねた。

布木は腹匍ひに布團を乘り出して來て、俺に（××案内）の一欄を指さした。

「見ろ、俺達あまだかういふ家を訪ねたことがないぜ。」

見れば例の（求婚）といふ部なんだ。嫁度とか求妻とかいふ小廣告がズラリと並んでゐる。

「ね、中々、中には面白いのがあるぜ。これなんか素張らしいぢやあないか――年廿八、極めて美貌、教育音樂の素養あり、十分交際の上嫁ぎ度し――ネ、それからその次のだつて愉快だぜ。外交官遺子。美人、廿三、目下藝術勉強中、相當後援し下さる方を求む。」

「ふん、この二口は面白さうだな。」と、俺は答へた。「だが嫁ぎ度しでは仕方がないや。俺達結婚する意志は少しもなし……」

「馬鹿。」と、布木は俺を叱りつけた。「この文章の陰翳（ニュアンス）をよく讀み分けろよ。一人は十分交際の上と斷つてゐるし、一人は藝術勉強中、相當後援し下さる方を求む――と言つてゐるんだぜ。十分交際してやるか、相當後援してやりやいいんだ。ふゝ、十分と相當か――面白いな。」

そして、事實、さも面白さうに俺の顏を見乍ら布木は唆のかすやうにつゞけた――

「どうだね？この二人の美人なるものを早速拜見に出かける氣持はないか？」

俺も退屈し切つてゐたから生返事をした。

「いゝだらう。」

まづもつて今日一日の冒險（アワンツール）の種は出來た。僕たちはその朝わざと銚子拔きで飯を食つて、自動車を呼ばせて出かけたんだ。廣告主は小石川富坂の何とかいふ學校の裏なのさ。

尋ね當てて見ると、靜かな横町の、格子門の家で、華道教授何とか庵といふ札が出てゐた。ちよいと小待合のやうな見付だつた。

布木の奴はのんこのしやあだから、構はず玄關の格子の外で

大きな聲で狗巾をやらかす。やがて十三四の小娘が出て來て御用向きを訊く。

「廣告で拜見して來たんですが。」と、布木。

「はあ。」と、小娘は引込んで、今度は切髪の五十がらみの油切つた婆さんが出て來たが、

「ようこそ〳〵、さあ、どうぞ。」などと、これはまた莫迦に愛想がよかつた。

俺達が通されたのは、敷松葉をした、茶がかつた坪庭が座ガラスから見える六疊だつた。床には柳塢の花鳥の小幀がかけられ、沈丁花が生かつてゐたが、ちよいと乙だつた。

「一體、この御婚禮と申しますものは――」なぞと、婆さんは茶を進めてから口を切つた。「何分御緣次第でムいまして――」

「ナニ、僕たちはね、六かしい注文はないんだ。ところで今日の新聞に十分交際の上といふのと、相當後援をといふのとがあつたが、一體どんな女ですな?」と、布木は短刀直入に口を挾んだ。

「ええ、あのお二方でムいますか? あの方々はそれはもう何一つ缺點のない方でムいまして――」

「兎に角僕たちはその人達に逢つて見たいのだが――」

「しかし、あなた樣方はほんたうに御結婚の思召がおありなのでムいますか――殿方はいろ〳〵な御道樂氣がおあんなさるから、おひやかしといふわけでムいますと――ほ、ほ、ほ。」と、婆さんはこつちの腹の底を見拔いたやうに笑つた。

布木は洒然として答へた。

「まあさう理屈詰めに行かんでもいいではないか? 僕たちとその人達との間で話さへつけば――で、君の方へお禮はどの位取るんだね?」

「さあ、普通は殿方から廿五圓、御婦人から十五圓となつてをりますが……」

「特別の方――つまり　の周旋は?」と、布木はづばりと言つた。

「さあ――」と、婆さんは澁つて、「手前は正式の御結婚ばかり取扱ふことにいたしてをりますので――」

「よせよ」と、布木は待合のおかみにでも對するやうな態度に急になつて、「そんな肩ひぢを張つたことは拔きにして、讀みと歌で行きたいものだな――君だつて萬更金くその婆さんでもなささうだ。」

「おほ、ほ。恐れ入りました。實は時々はあなた方のやうなお方もありますので、さうした方からは　だけお禮を頂いてをります。」と、婆さんも商賣氣を露骨に出す。「そして御婦

人の方からは月極めの高に應じまして最初の月の五分一といふことになつてをるのでムいますが――」

「少し高いが――どうだ伊野、張り込むか？」

「うん」と俺は答へた。俺は死んだおやぢが殘して行つてくれた財産がまだ二三萬は使ひあましてあるから、それにその金を早く使つてしまつて氣樂になりたいのだから、周旋料の安い高いなぞは問題にしてゐなかつた。

「じやあ、さういふことにして――そこで相手はいつ見せてくれるね？」と布木は訊ねる。

「明日午後に願ひます。」

「それは困る。僕たちはせつかちなんだ。今日中に何とかしてくれ給へ。」

「では、今夕でようムいます。何とか致しませう。それに致しましても、女の方がお二人、あなた方がお二人ですが、どんな事にいたしますか？どういふ風にお引き合せいたしませう？あなた様、お若い方がよろしいでせう？」と、婆さんは、俺が默つてゐたので大人しいと思つてか愛想笑ひをして言つた。

「いゝや、僕は年增がいい。」と、俺は答へた。人がああ言へばかう言ふのが俺の性分なんだ。

「ようムいます。ではあなたはお廿八の方になさいまし。」

「その女もめかけをするのかい？その女の方は後援を望むといふ文句がないが――」と、俺は訊いた。

婆さんは淺間しく笑つて、

「ええ、まう、それはこんなところへ頼んでおいでの方はみんないくらかその方のお望みもありませうが、しかしあの方はまあ御交際を願つた上で何とも――と仰有つておいでしたから――いづれにいたせ、まあ、夕方お逢ひあそばしてごらんなさいまし。そこでお二人御一緒にお見合ひも妙ですから、あなたは――」と、俺を見て「五時から――あなたは六時からとお約束いたしませう。お氣に召したら御婦人方とどちらかでお夕飯でもなさいまし。」

俺達は約束を極めた。俺達は明らさまに本名を名乘り、申込金　を收めて外へ出た。大分時間があるので帝劇のマチネーの音樂を聽いて、東洋軒でカクテルを飮んだ。四時半を聽くと俺は立ち上つた。

「じやあ、布木、僕あ先發するぜ。」

「うん――そしてお互に女が氣に入つたら下谷へ連れ込まうではないか。そしてその結果を十一時ごろあそこの廣間で落合つて告白しつ子をしよう。」

「よからう。」

下谷には、その時分の俺達の遊蕩本陣の待合があつた。俺達はよくそこの待合から出て來たわけだつた。

俺は正五時、自動車を生花師匠の家に乘りつけた。婆さんはちやほやと招じ上げた。前の部屋ではなく、もつと奥まつた四疊半で、電氣にはほの紅いシエードが掛つてゐた。

「もう女の方はいらしつておいでですが、念のため申し上げますが、今晩だけはお名乘合ひはいたさないやうにしてくれと仰有いますから、まあ人柄だけも御覽になるお積りで――お互にお氣に召したら、假約束だけなすつて外へお出なさいまし。ええ、まう、それは人柄な――最も、實は――」と、婆さんは聲をひそめて「つい昨年まである政治家のおくさまでいらしつたので――旦那さまがあんまり御道樂をなさるので御不縁をお取りになすつたのですが――それは立派な方でございますよ。」

婆さんはしづかにぽん〳〵と手を打つた。小娘が出て來た。

「あの二階のお客さまにこちらへいらつしやるやうに――」

――廊下を衣づれの音がして、やがて、

「御免遊ばせ。」

と、襖の外で、それはすばらしく物柔しい落付きのある聲が聞こえた。

「さあ、どうぞ――と、婆さんが答へた。

襖がしづかに開いて、女ははひつて來た。ちよいとうしろ向きになつて襖をメめた姿が、すこぶる繪になる美くしさを見せてゐた。髮はやや舊式な束髮で、白い頸はなか〳〵肥えてゐた。

女は少しもぢ〳〵して見せた。婆さんが二三度すすめると、やつと火鉢の側まで來た。

「さ、お布きなさいましよ。こちらは御遠慮深いのをお好み遊ばしませんから。」と婆さんは言つて、「お約束ですからお名前は御紹介いたしませんけれど、お二人ともお身柄はあらかじめ申し上げてある通りで――どうぞ、お二人でお心置きなくお話し遊ばして下さいましよ。私はほかにちよいと用がムいますからあちらへ……」

婆さんは二人だけ殘して去つた。

女は稍々平面だつたが、目が大さう黑く、唇は卅近い年ばえなのに小娘のやうにむつちりしてゐた。胸は盛り上る程よくふくれてゐた。羽織は錆を含んだお納戸、着物は靑く光る縮物、帶はつづれ風の織物で、羽織の紐の金鎖がややいやみだつたが、まづどこから見ても中流の上の貴婦人だつた。

「妙なわけでお近付になりましたね。」と、俺は口を切つた。

女は伏目に羽織の鎖をいぢりながら、

「はあ——おはづかしうムいますわ——此の世にまるつきり一人ものでムいますものですから、あんまりお淋しいのでこちらの御隱居さまに御相談に上りましたの——」

「僕もまあそんなものです。」と、俺は女の横顏を見ながら微笑したが、うち〳〵してゐても仕方がないから、布木流の鐵面皮さで「どうです？　僕のやうな男でも交際して見る勇氣がおありですかね？」

女はその時顏をあげて、眞すぐに俺を見て笑つた。

「ほ、ほ、ほ——勿體なうムいますわ。」

俺はひどく滿悦してしまつた。女はひねではあつたが擦カスではなかつた。水々して、色深くつて、解りがよくつて、ミストレスには持つて來いだ。

しばらく話が絕えたあとで、俺は言つた。

「こんな陰氣な家にゐてもはじまらん——外で夕食でも食べませう。おつき合ひ下さい。」

「ええ、どうぞ——」

俺は婆さんを呼んだ。女が中座したあとで　　　　の御禮の中、手付がやつてあつたので　　　と、女の分の　　　を渡した。

「これで君とはいさこさなしだよ——いい儲けだね。」

「ほ、ほ、ほ——旦那方のやうなお方ばかりはムいません——きたどうぞお氣が向きましたら——」

僕達は婆さんの喋々しいお世辭に送られて、待たせてあつた自動車で下谷へ行つた。

——女は酒も少しは飲めた。××××××××××××××
××××××××××××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××××××××××
×××××××××。

女は十一時に別れる迄金がほしいとも手當がほしいともひと言も言はなかつた。きつかり一週間目の午後五時、東京驛で逢つて郊外にゆく約束をしてわたしは別れた。女は自動車も車もことわつた。

「あなたが私の身元をお知りになると興ざめなさるから、乘ものは拜借しませんは。」と、女は言つた。

——女を送り出してから、廣間で俺は布木と會見した。

「どうだつた？」と、俺は言つた。

「いや、おかしな奴だ。」と、布木は笑ひ出した。「日英模樣といふ奇妙奇天烈な長襦袢を着てゐたぜ——その長襦袢を見たらもう澤山になつちやつた。」

布木の女は——外交官の遺子で、藝術研究女性で、相當の後援のほしい女は、丈けの高い、立派な娘だつたが大分腋臭が强かつたと言ふ。隨分困つてゐるらしく、幼稚園の保母をしてゐるのださうな。

「外交官遺子か——は、は、は——外交官とはよかつたよ——きいて見ると、父親は××商會のロンドン支店の雇人をしてゐて、彼地で死んだのださうだ。で、父親が彼女が子供のころ送つてよこしてくれた、何かの式場の装飾に使つた羽二重の日英兩大帝國の×××縫ひ合せて、長襦袢にして着てゐるのだ。國旗を襦袢にするとは考へたもんだ——卅圓與れて、出たらめなことを言つて別れてしまつた——取得と言へば、あれはたしかに處女だつたよ——しかし×××××××××××よ——は、は、は。」と、布木はまた笑つた。「で、君の方は？」

「僕の方は中々いい女だつた——われわれは一週間後の午後五時に又逢ふのだ。」と、俺は簡單に答へた。

「そりや成功だ。じやあ、今夜これからの座敷は君の持ちだぜ。」

われわれは妓どもを澤山呼んで飲んだ。

——ところで、一週間後に俺が彼女に逢つたかと言ふと、その幸福をほしいままにすることは出來なかつた。翌々日の東京諸新聞は、相當有名な女の謠の師匠が、曾つて關係のあつた××團といふ反動團體の壯士の一人に、深夜自宅で凌辱された上絞殺され、有金全部を掠奪されたことを知らせてゐた。その寫眞の女が彼女だつた——

婆さんが、「去年まである政治家のおく樣」だつたと説明した言葉を俺は思ひ出した。そして女の不幸を哀れむよりも先きに哄笑した。政治家夫人が壯士の女房上りで、外交官遺子が商會の雇人のみなし子とは、成程仲人口とはこんなものかと哄笑した。

——が、兎に角あの女はなかなか才女で、すばらしい肉體を持つてゐた。生きてゐて關係がつづいたら、凄腕を出して俺の財産を根こそぎさらつたかも知れないよ。は、は、は。

唐辛子夫人

今東光

雪の青白い朝、太陽に輝いた金色の馬車が高台の門を出た。それは子爵の柩車だつた。彼は四十九の厄年で死ぬまで無爲に終つた。金モールの禮裝をした式部官や、外國公使官員や、華やかな貴夫人の自動車が續いた。陸軍の嚴めしい軍服をつけた將軍や、古風な山高帽をかぶつて紋服をきた舊藩臣の長い行列が從つた。その中で子爵未亡人の厚化粧が目に立つた。彼女は黒い小さな影を先立せながら、人々の履物の音をかすかに聞いた。涙が凍つた。未亡人の眼が黒いのか、灰色なのか判斷することが出來なかつた。人々は誰も皆、

『やれ／＼。これで美しい後家さんが一人出來た。お可愛想に…………』

と殉情的な、幾分かこつてりとした歎息をもらした。

○

新聞の三面に、新らしい墓標の前に立つた喪服姿の子爵未亡人が出た。悲しみにやつれるより、硬直した姿勢がみづみづしかつた。

○

子爵未亡人の兄は、貴族院に議席を持つてゐる侯爵だつた。彼は空論に近いもくろみを立てるのが仕事のやうだつた。また葉卷の煙出しだつた。彼はまる／＼と肥つて、どちらかといふといふと童顔だつた。目は鯨のやうに小さくて潤つてゐた。垂れ下つた鼻は顏の眞中を占領してゐるほど大きかつた。赤い肉感的な唇は傷口のやうに開いてゐた。五本の指は蒟蒻のやうに柔かく、醜い形をしてゐた。さうして彼はその觸手で若い女の肢體を感ずるのが好きだつた。彼は紙雛のやうな小間使を愛玩した。厚い束髮を首筋に捻つてゐる夫人に對しては、褪せた肉慾しか感じなかつた。夜の怪しい力が盛り返してくると、浮世繪のやうな格好をした女を漁つた。小さな足、血の氣の通つて

あるふくら脛、裸の首筋などが彼の夢に生きた。彼は澤山の妾の牡丹刷毛や、黑子などが、どんなに彼の神經を昂らせるかを知つてゐた。彼は妹の子爵夫人が、この世の中にたゞ一人で殘された時、寧ろ腹立し氣に呟いた。

『アレはこれからどうしようといふんだらう。アレにはこの方面の生活が総つて仕舞つたんだ』

さうして侯爵の頭には愛慾が至上の墮落であるといふ誰かの言葉が、意地惡くこびりついた。

○

美しい子爵夫人は、色々な人々から求婚された。その中には精神的にも肉體的にも殆んど役に立ちさうにも見へない年寄つた實業家があつた。また若い伯爵が單なる好奇心のために求婚した。また八人も子供を殘して死んだ或る子爵夫人の後添ひのために、名譽ある結婚を申込まれたこともあつた。また放蕩な外交官から求愛されたこともあつた。また自動車の運轉手から迷惑な愛情を注れたこともあつた。彼女は深い拒否を感じながら、一方、韻律的な衝擊を受けた。さうして彼女の乘りまわす華やかで、艶つぽい女乘りの自動車の小さい窓から見渡した人人の、輝やかしい數多の瞳を眺める時に、この感じが一番深かつた。

○

彼女の弟の、のらくら男爵は名もない活動女優と戀愛に落ちた。この素性の知れない女優は雀の巢のやうに頭の毛を縮らし、獼猴のやうに頰を眞赤に染めてゐた。さうして笑ふと鼠のやうに齒が反つてゐた。背が低く、横にガッシリと張りを持つてゐて、顏だけが並外れて大きな印象を與へ、汚い空氣草履を穿いて歩いてゐた。子爵未亡人は弟の行状を許へられた時に、彼を叱る前に自分にも斯うした淫蕩な血が流れてゐないこともないことを懸念した。

○

この不幸な子爵未亡人は、よく夢に一つの窓を見た。その窓は高い所にあつて四角だつた。鐵の枠がはまつてゐたか、それとも硝子がはまつてゐたかは夢のことだからよく解らない。然しそれは小暗い部屋で、監禁されてゐるやうな感じを受けた。彼女の小兒時代の記憶が、時折りかすかに甦つて來るのであつたそれは父の亂行を見せまいとする生母の苦心だつたらしい。父は泥醉すると白晝でも侍女に戯れた。彼女は此の陰慘な部屋に入れられるのが怖しかつた。この感情は幸福であるべき處女時代にもつき纒つた。さうしてその窓から外を見ると、澄み透るやうな青い空氣を感じたのを覺へてゐる。彼女はその窓にすべ

ての憧れと望みを托した。夢に見る窓は更に美しかつた。屢々見るに從つて、その薔薇窓はます〳〵美しくなりまさつた。

○

父系に對しては彼女は憎惡を感じた。血を見ることの好きな人、貪る領主、無能な大名、白痴の殿樣、女好き、徒食者、母系に對しては彼女は輕蔑を感じた。どれも分明ではなかつた。足輕の娘、髮の毛の赤い女、肥つた御殿女中、黄色い目の妾。

○

子爵未亡人は斯ういふ色々なものを享け繼いだ。彼女の髮は尾長鳥のやうに長かつた。彼女の目は古池のやうに澱んでゐた。彼女の睫毛は處女林のやうに見事だつた。彼女の脣は接吻を欲してゐるやうに見へた。彼女の腕は蛇のやうに長かつた。彼女の乳房は睡蓮の莟のやうに膨れてゐた。彼女は猫が痩せるまで愛撫した。彼女は吠へるまで犬を打つた。彼女はげんなりする程食べた。彼女は氣紛れで、好奇心を滿足させるためにはどんな手段をも撰ばなかつた。彼女は高尚な趣味を持つてゐた。しかし下品な嗜好を滿足させるためにはその方法を躊躇しない。

○

さびしい時の子爵夫人は、しつかりとした調子でピアノを彈いた。それは必ずしも曲に限られてゐなかつた。スケールの稽古に指の痛みを感じる位だつた。それは呪文のやうに聞へ、哄笑のやうに聞へた。彼女は自分の聲に聞き入つた。また音響の容器の中へ流れ込むトーンを樂しんだ。それは彼女を充分に陶醉させた。はじめは嵐のやうに烈しく、後には靜かに解けてゆくキイの手觸りが彼女を夢中にさせた。

○

彼女がさうしてピアノを彈いてゐる時に、彼女の若い崇拜者は心の動悸の激しく覺へながら聽き入つてゐた。青年は夫人のために譜面をめくつてゐた。彼女はぴたりとキイをたゝく手を止めた。明るい表情が浮んだ。青年の手が彼女の白い、むつちりとした手の上に重なつてゐた。

○

『妾にはわかりませんわ』

と子爵未亡人は言つた。自動車は濠端を疾驅してゐた。彼女は血液の流れる靜かな短階音を意識した。連れは名門の次男で、無官の華奢な美男子だつた。彼は未亡人の耳許で柔しい甘い物語を聞かせた。彼女は此の連れの手入のとゞいた顏と、逞しい運轉手の首のあたりを等分に眺めながら自分が今までどん

な劇を演じてゐるかを考へた。さうして感じた。

『ほんとうに人生はコントラストの織物でしようか』

『さあ。しかし戀し合ふ人達にとつては然うかもしれませんね』

と彼は考へ深く答へた。魚のやうにぬる／＼した、氣味の惡いほど溫い、しなやかな指が彼女の三本の指に絡みついた。彼女は何だか面白かつた。

○

ある朝、牛乳のやうな匂ひのするお湯にはいつてゐると、思はず笑ひ出した。溫い湯の撫感が、彼女の感覺をきゆツと引き緊めた。なめらかな足の線が、靑い水の光の中に浮き出し、關節が柔かになるやうに思はれた。しかし彼女は自分をさまで若いとは信じられなかつた。その考へが吾ながらいじらしかつた。さうしてしみ／″＼と嘆息した。

『妾はさびしい動物のやうだわ』

睡蓮の莟のやうに膨らんだ彼女の乳房は、なまめかしく怪しい、いたづら事をもう忘れてゐたのである。

○

兄の侯爵は同時に三人の子をもふけた。一人は男で他は女だつた。この三人の兄妹は一人／＼違つた母親を持ち、皆同年だつた。

○

怪しからぬ結婚をした弟の男爵も、空氣のやうにふよ／＼した不具の子供をもふけた。彼の妻である女優は、また映畫に出て、群衆の一人になつた。男爵は落魄した。それでも式日には古ぼけた大禮服を着用することを忘れなかつた。

○

彼女は若い夢を埋めた。さう思ひ込んでゐた。しかしともすれば、もつと異つた生活を夢見ることもあつた。

○

彼女はルドルフ・ヴレンチノといふ外國の役者を映畫で見て

『この男だわ』

と心で叫んだ。端麗な容貌だつた。特に齒にある感じがあつた。逞ましい身體だつた。太い綱のやうな腕の筋肉、よく反り返る足の指、動物的の目の色、少し下品な表情、また余り悧恰さうでない感じ、これが趣味として彼女にぴたりとした。

○

子爵未亡人は、ある時電車に乗つて、隣席の勞働者の毛脛をチラと見て眩暈を感じた。彼女はさういふのを一種の性慾の精華作用だとは氣がつかなかつた。

一つのきら／＼と光る瞳を忘れることが出來なかつた。どこで受けた印銘であつたかは知ることが出來ない。しかし強い緊張を感じた時に受けた感動の殘滓であつたらうと思ふ。

○

ある避暑地のダンス場であつた。夜、濱風に吹かれながら踊つてゐた。すると突然、停電だつた。子爵未亡人は瞬間、誰が自分のパトナアであるかを忘れた。その時に誰だかが、さうしてそれは自分の踊り相手でないことは解つてゐたが、彼女の襟首に強く××××××をした。

『アツ』

と彼女は危く聲を立てさうになつた。その時には、もう此の風流な怪漢は空氣のやうにかき消えてゐた。さうして音樂は依然として流れてゐる。この戀の技術を彼女は到底忘れることが出來ない。電氣が點いた時には、そこにはたゞエテエケツトしか見出し得なかつた。戀は音樂のやうな情緒を與へるものらしい。音樂の旋律はたま／＼彼女を未亡人らしくなく見せるに役立つたのかもしれない。しかし彼女は、その時の戀戯を想ひ起すと、きつと今でも彼女の襟首に接吻の跡が烙印のやうについてゐるやうに思ふのである。

○

七年の間、子爵未亡人はもつと幸福な、もつと誘惑的な生活を夢見ることもなく暮らした。彼女は軈て女ではなくなる日が來るのではないかと、その頃になつて周章した。さうしていたづらに似た野心が起つた。

○

寢過ぎた後のやうな不愉快さがだん／＼子爵未亡人を苦ろしめた。彼女はもう完く成熟した果物だつた。やがては枝から離れ、地に墜ちて腐敗しようとする果物だつた。多分に酸素の醗酵した果物だつた。甘味もなくなつた果物だつた。くツきりとした乳房の線が萎んで、だらりと垂れ下り、それに小皺の寄つた褪せ凋んだ大きな果物だつた。彼女は漸くあせりはじめた。

○

思ひなしか青白い理知的な額は、頭の半分ほど禿げ上つた。さうしてその額の眞中を青黒い太い靜脈が一本ずうつと通つてゐた。髮の毛も馬の尻尾のやうに短かくなつた。頬の肉もたるんでぶよ／＼してゐる。目も充血した。歯は黄色く見へた。眉もちよんぼりと投げつけた位に生へてはゐたが、筆で引かなくてはならなかつた。鏡に對ふと泣きたいやうに思はれた。それを念入りに化粧した。

○

子爵未亡人の亂行の噂が、兄の侯爵の耳にはいつたのはそれから間もなくであつた。

『アレも淋しい一匹の雌鹿だ。感覺的で、人をからかふのが好きなアレが、巧みに危險を除けて通ることはむづかしいだらう』

と侯爵は述懐した。

○

弟の男爵は

『誰があの姉に美味な滋養分をやつたのだらう…………』

と卑しくにや〳〵笑ひながら、活動女優の妻君に語つた。彼は愛情をこんな風に取り扱ふのが好きだつた。

○

子爵未亡人は、子供の四人もある醫師を愛してゐると傳はつた。それは本當かどうか誰も知らなかつた。さうして此の噂と、その非難とは直き彼女自身の耳にも跳ね返つてきた。

○

彼女はしかし、この噂を萬更ら憎くまなかつた。彼女の一生にとつて、斯ふいふ實のある噂が立つことの方が面白く感じられた。彼女は額を蔽ひ隠す前髪の技巧や、絹の長い黒手袋や、腕にぴつたりとついた絹の靴下や、美顔術や、マニキュアなどで辛うじて保つてゐる彼女の美が、激しい戀などを經驗したら、たちまち醜く崩れて仕舞ふのであらうと思つて苦い涙を呑んだ。何も彼も遅過ぎた。

○

けれどもその戀が、噂から出て本當になつたのは事實だつた。男も人生に疲れ、生きてゐることに倦き、家庭を嫌惡し、肉體的にも弱つてゐた。子爵未亡人も殆んど同じ様な困憊と疲勞を感じながら、戀を戀し、お互ひの歎き、呟き、欠伸の上に幻を描いて纔かに慰めとした。

○

此頃では、あの美しく、艷めかしく、ほのかな子爵夫人は、いたく容色が衰へ、鼻の先が赤くなつて仕舞つた。彼女は戀を嗜好するよりも、今はこつそりと侍女をも遠ざけ、華やかな女部屋の火鉢で、醜く、あさましい馬鹿唐辛子を焼いて食べるのを好んだ。それは人間の不合格な鼻のやうに大きかつた。さうして焼くと香ばしい匂ひがした。食べると眼から涙がぼろ〳〵と流れるほど辛かつた。彼女は此の自分のアペタイトを滿足させるのを、何よりも好んだ。人にかくれて盗み食ひする快感も悪くはなかつた。野趣もないではなかつた。しかし何よりも食べると、そのぴりりと辛く香ばしい味感が、まるで匕首で舌を刺すやうな殘忍な、青臭い魅力で好かつた。さうしてその瞬間、

彼女はともすれば子爵未亡人であることも、戀人を持つてゐる後家さんであることをも忘れてゐた。

裏から見た結婚媒介所

ぜう、はり生

暗い半面、罪惡の殿

警視廳のO部長室の午後。折りからの土曜日で森閑としてゐる。法律を開いてゐたO部長は、その人の好さうな眼を、フトくもらせて

『君、この通り、取締り規定といふものがあるけれど、結婚媒介所なぞといふものは、近代の産物であるだけに、その取締りの困難なことには、全く、弱らされてゐるんだ』

と、投げるやうに、つぶやいた。

いはゆるその聽介なるものを見ると、全文卅九ケ條から成り、その法規は、紹介營業取締規則に基いたものであつて、更に、その内規をうかゞふと、申し込み手數料が五圓以下、會見料が一圓以下、成婚料が廿五圓以下といふことになつてゐる。

いふまでもなく、會見料といふのは、その見合ひのことであるが、果して、この内規通りに行けば、わづか、金一圓也で、女の顔が見られるのだから、ひやかし半分に、彌次馬が、媒介所を訪れるのも無理はない。

かう、聞けば、待合遊びには、纏つた金が無く、女郎屋では殺風景であり、カフエーでは物足りず、丸ビル女には、一寸、その手づるが無いといふてあひが、好奇心を『媒介所』の見合ひの一ト幕に、寄せるととなる。

『この間の湯川照子の結婚詐欺は、おゐ分と、ひどいぢやありませんか。アンナのは、尙ほ他にもいくらもありませう。警視廳も、しツかりせにやなりませんぜ』

といふと、O部長は、一ツ、カラ〳〵とせゝら笑つて

『湯川なんか、大したこちやないんだ。單に自分が結婚すると

云つて、佐度く金を取つたのだから、帝派の醜猥行爲とでもいふんだらう。しかし、一ツ、活眼を開けば、事實にその裏面の醜劣さを驚嘆せずにはゐられないものがあるんだ』

と、思はせ振りに、口をつぐんだ。

湯川照子といふのは、人も知るとほり、かつては、帝劇の倶樂部にゐた美人であるが、その放縱な歡樂生活は、忽ち、彼の女を驅つて、黄金地獄にをとしいれ、一にも金、二にも金――といふやうになつた。さうして、窮餘、案出したのが、例の『優縁社』といふ結婚媒介所であつた。しかし、それは、他の婦人を、多くの男に、めあはすといふ殊勝な考へではなく、自身の美貌をたねに、助平男を釣つたのであつた。

事件は極めて簡單であるが、この一事は、たま〳〵、新時代の産物だといはれる『結婚媒介所』の、暗い半面、罪惡の一端を、明るい日の前に、曝露したものに外ならない。

今、その筋の認可を受けた結婚媒介所は、東京市内で四十ケ所、郡部で八ケ所。そのことごとくが、暗い半面、罪惡の殿堂でないとは、わかり切つてゐるけれど、その看板の下に、眉をひそめるやうな、多くの醜弄な行爲を働らくものも多いので、閻魔の廳の警視廳ですら、

『困つたことだ』

と、嘆息、これを久しくする次第であらう。

二三、罪の殿堂をのぞいて、世の社會研究家の一粲に供する

有夫の婦の秘めたる罪惡

驚いたことには、有夫の婦が、獨身のやうな顔をして、結婚媒介所ののれんを潜ることだ。

たゞし、これは、もとより、媒介所の馴れ合ひでもあれば、更に、突込んで云へば、求婚を申し込む男との間にも、暗黙の諒解があるものと見て、差支へないのだ。

といふのは、有夫の婦は、もちろん、正式に結婚なぞを夢みてゐる筈はなく、その目的は、前にも述べたやうに、待合でもなく女郎でもないといふところの、肉的戀愛に飽滿した浮かれ男が金五圓也を投げて、いゝ女をあやつらうと、いかさまな媒介所へ口を掛けて來たのをとらへて、小づかひ稼ぎの罪惡を犯すのである。つまり、これを早くいふと、純然たる淫賣行爲で、男も、はじめからそのつもりであるし、媒介所も亦た、そのへんの呼吸を心得たもの、いゝなく鳥だとおもへば、自身の家や、或ひは、かねて、取引き關係を結んでゐる宿屋なり、あいまい家なりに送り屆ける寸法だといふ。しかも、これ等は、いづれも、淺はかな女の虚榮心から、良人に内しよで、十圓、

二十圓の白粉賃を稼ぐ目的に出發してゐるのだから、腰辨を下げて、役所にでも出てゐる亭主こそ、知らぬ間に、とんだ箇難(?)に出會つてゐるわけである。

閻魔の廳の一人は、今更に驚嘆して

『この間も、無免許の媒介所へ手を入れたところ、驚いたことには、檢擧した婦人の幾割かゞ、有夫の婦であつたことだ。しかも彼の女等は、學校の程度から云つても、高等女學校を卒業したもので、いはゆる中流階級の家庭の主婦であつたのだ。風教上こんなのは、斷乎として、處罰すべきものであり、世間へ顏見せの出來ない制裁を加へてやらうかとおもつたけれど、頻りに前非を後悔してゐる樣子でもあり、知らぬ間に、女房のため、顏にどろを塗られた亭主のことをおもへば、限りない不愍さが湧いたので、世間へ發表することだけは、差し控へておいた次第だ。いづれにしても、有夫の婦の結婚媒介所入りとは、意外千萬であつた』

と、呆れかへツてゐた。

虚榮のための、秘められたる罪惡――女子は、遂ひに養ひ難しか。

相談所へ泣き込む

『資産數萬、係累の無い婦人を求、當方年齡卅才』

なぞといふ新聞廣告を掲げて、多くの職業婦人なぞといふ結婚難に惱む婦人をおもちやにしたといふ話し。――

それは、淺草の某商店の主人であるが、この男は、懇意な媒介所を買收して、これと氣脈を通じ、その媒介所から、前記のやうな新聞廣告を出したものだつた。

さうして、手ごろの女がくると、そこの媒介所主は、自働車に乘せて、『當方三十歲』と自稱する前記の淺草の某商店の宅へ案內する。自働車は、もちろん、その店頭附近に止まるけれど、決して女自身を閾の中へ一步だに入れしめない。たゞ、堂堂たる構への主人だといふことだけを、女の頭腦の中へ燒きつけておくのだ。

やがて、媒介所主の合ひ圖で、『當方三十歲』と自稱する男が出てくる。三人は、自働車で、行きつけのあいまい家へ行く。一杯飲んだところで、

『どうぞ、ごゆツくり、見合ひをなさい』

と云つた工合ひで、なからど役の媒介所主は、かへつて行く。アトは、云はずと知れた男女二人きり。杯は廻つて、場馴れ切つた男の手は、いよ〳〵なめらかとなる。さうして、そこに、男の野獸性は、遂に發揮させられるのだ。

これなぞは、もとより、十圓か二十圓で、一度切りのなぐさみものとなるわけだが、湯川照子が結婚詐欺なら、これも、正に、一種の結婚詐欺である。

かういふ目に逢つて、泣き寢入りになつたものが、どれほどあるか、わかつたものでない。

しかし、中には、口惜しさのあまり、警視廳の人事相談所へ、泣き、崩れ込む女もある。いづれにしても、好配遇を得んとする心の悩みから、結婚媒介所を通じて、とんでもない恥辱を受けるとは、弱き者よ、汝の名は女なりである。

聞けば、警視廳には、この手で、田舎から出て來た處女を冒すことを常習手段とする『結婚魔』の名簿を、地獄帳に載ツけてあるさうだ。いいとである。

女房に家財を賣り飛ばされた話

お次ぎは、結婚媒介所から、貰ひ込んだ女が、案外のしたゝか者で、一杯、喰つたといふ話し。——

それは、名高いことで、市内でも屈指の一媒介所から、二十八九の中年増を貰つた男の實驗である。彼の女は、バイオリンも彈けば、一寸した刺繍もするといふので、中年にして、糟糠の妻を失つた、その良人なる男は、又となく、これを寵愛した。しかし、所詮は、結婚媒介所なぞに世話になるほどの女だ。彼の女は、日を經るにしたがつて、自惰落となり、横着は勝手次第、買ひ喰ひはお得意、拭き掃除は大きらひといふ體たらしくなつた。

好々爺の彼の女の良人も、たまりかねて、三度に一度は、苦い顔をした。ところが、どうであらう。或る日、勤め先きから歸つてみると、女が持つて來た鏡台、たんす、バイオリンなぞは、おろかなこと、彼れが大切にしてゐた床の間の掛け軸から書棚、その他、家財道具の一切が、ことごとく持ち運ばれて、空き家も同然ながらん洞さではないか。

説明するまでもなく、不貞な彼の女は、田舎へ引ツ越すと稱して、その一切を賣り飛ばし、金にかへて、どろんと消えたのであつた。

『實に癪に觸つたよ。一時は、八ツ裂きにしてやらうと、あたりをさがしたものさ。むろん、警視廳へも屆けておいたし、媒介所へも、どなりこんだのさ。しかし、媒介所では、結婚後の責任は、知らんと申すのだから、取りつく島もない譯さ』

と、世にも愚直なる彼れは、當時を想起して、憤慨、やる方のない顔をした。さうして

『今ごろは、アノ阿魔め、どこかの媒介所を通して、年齢二十

七、高女出身、容貌美、對人の方に嫁入りたし……………なんと云つた新聞廣告でも出してゐることだらうよ」

と、自らを、嘲けつた。

* * * * * * *

以上は、誠に乏しい話しではあろけれど、近代文化の産んだ『結婚媒介所』といふ新職業の影に、思ひもよらぬ罪惡と不純が營まれてゐるといふ事實を、幾分でも、讀む人のあたまに、吹きこむことが出來れば、その目的は足りる。

夜の淺草三つ

サトウハチロー

一、可愛い影芝居

灯がつくと淺草もおつとりして來ます。空はぼんぼり色になります。

お堂の側にいつもゐる風船屋のおばあさんはもう五つになる夏蜜柑のやうな顔をした男の子を連れてお家へ歸つてしまつたのでせう。石疊に鳩もゐません。ねんねです。

鐘が鳴つてゐます。ぼんぼり色の空に響きます。八時。割引きの鐘ですね。

僕は三社様と觀音様との間のベンチのひとつに腰をかけてゐます。僕の隣りには人形屋の娘がゐます。娘は十八、家は市松人形屋です。娘の兄貴と僕とは昔の仲間です。

僕と娘、それつきり他に誰もゐません。寒いのです。風で耳も鼻も痛いのです。

「久しく會はなかつたな。兄いさんは此頃どうだい？」

「しつかり商賣してまつさ」

「家へ歸つたらよろしく言つてくんなよ」

「えゝ（しばらく沈默）やつぱりちよくちよく出てくるんですかい？」

「俺かい、あゝ、やつぱりくるね。少し來ないとやたらに來た

くなるんだよ。でも役者も静かだな、……此頃はちつとも（ふところから拔くまねをして突くまねをして）ないかい？」・

「こゝですかい。ありませんよ。先月あるにはありましたが肥後の守ですよ。春にならなけりや大きいのはありませんよ」

不良少年達はつまらない小さい喧嘩を肥後守（安物の小刀）と呼んでゐます。それで突きあふからでせう。僕達の腰を下してゐるベンチの前が観音様の横腹で、右後が三社様で、左後が二天門です。二天門なんて門は他處から來た人には何の用もない門です。山ノ宿、花川戸、今戸、金龍山瓦町、聖天町あたりの人は、公園に來るのにくゞることもあるでせうが、他處から來て此門をよく知つてゐるのは不良少年ぎりです。

二天門裏と言へば決算の場所です。

活動寫眞街から數町と離れてゐない、仲店のどよめきの手に取るやうに聞こえる、門をくゞれば馬道の交番が見へる此處が、どうして彼等の決算の場所に選ばれたか解りませんが、十年このかた公園内で釀された小さい爭ひは皆此處で決算することに定められてあるのです。此處は妙に靜かです。夜はいつもしめつた影を落します。それにどういふものかオマハリサンが通りません。

—活動寫眞館のなかで—セントラル・カフェーの前で—公園劇場の裏で—池の邊りで—つまらないことから爭ひが起る。今夜十一時いつもの場所へ來いと兩方が言ふ。そうして別れる。

彼等はそれから十一時迄の間、或は活動を見、オペラをのぞき、安い三州屋か崎西屋かパウリスタの飯を食ひして、その間に會つた見知りごしの不良少年達に夜のことを知らせます。

芝居も活動もかぶりました。あとかたづけをすませて女給達も、友達と、下廻りの役者と、中賣りの小母さんと、辯士見習ひと、赤だすきと、各々手を組んで歸つて行きます。

灯はひとつまたひとつ消へます。空のぼんぼりも暗くなります。にぎやかなのは廣小路の居酒店ばかりです。……

とある射的場の横丁から三四人に守られて今夜の役者が出て來ます。彼はその横丁の共同塵芥箱の下に隱してあつた匕首を取り出して來たのです。あゝなんと愛らしい秘密な場所よ。

對手の役者は、やはり三四人に圍まれて八手の茂つたなかで煙草をふかしてゐます。そこは團十郎の銅像の裏です。長い竹筒に入れてうづめてある短刀を掘り出してゐるのです。掘り出された短刀をふところに彼は八手のなかから飛び出します。鳥打帽子にからみついた蜘蛛の糸にお月さまがとまつてゐます。

彼は小聲でラ・パロマを歌ひます。團十郎も聽いてゐます……

どうしてこのやうに射的場の横や團十郎銅像裏から武器（少しおかしいが）を出さなければならいかといふと、彼等が親愛なる刑事諸君に會つた時しらべられるからです。兇器携帶といふ有難くない名目で板のお部屋へ這入るのはいやですからね……舞臺には、もう見物の不良少年達が集まつてゐます。主役をつとめる二人は兩方とも寂しく微笑んで向ひあひました。靴ベラのやうな二日月が二人の四つの眼にうつります。不良少年道徳をよく守る見物は啖ひとつしません。片方が傷づけば見物のなかから誰かが飛出して仲を分けます。そうしてみんながめいめい贔負の役者の肩に手をかけ、或はなぐさめいたわり或はほめたゝへて散つて行きます。

「いつしよに何處かでご飯でも食べよう」と僕。

「あゝ　鰻がいゝな」と兼。

鰻がいゝ。鰻がいゝ。食ひたいものをハッキリ言ふ兼はえらいぞ。僕は立上り、兼と肩をならべて仲店へ出た。

なつかしい二天門裏よ。可愛い影芝居の舞臺よ。

二、屋台店での話し

僕は柳川貞一といつしよに一軒の屋臺店で酒を呑んでゐます。僕と貞チン（彼の通稱）とに向ひあつてフライパンを振りまはしてゐる親爺は樋口傳四郎です。名は御前仕合の遺恨から闇討をくはして遂電した敵役だが顔も心もいたつて優しい親爺です。僕とは僕の家で赤坊が生れたときお祝ひに帽子を贈つてくれた程のなかです。こゝは西洋料理店です。豚もあります。ほんとうの牛肉もあります。夏にはおいしい生ビールも呑ませてくれます。さて、ひよつとこの話しで食べに行きたくなる讀者諸君の爲に傳四郎の店をくわしくいふなら、淺草廣小路の露店飲食の川原町の方から數へて十何軒目の椰子軒と染めてある暖簾がそれです。たまには行つて下さい。

貞チンはオペラ役者のなかでは物解りもよくものごとをカンタンに片づける心がけのよい面白い男です。貞チンは僕に話します。その話しによると、みやこ（文士及畫家諸氏のよく行く小料理店）のおたけさんが嫁に行くのださうです。何處へ？未だはつきり定つたわけではないからその家の名を言ひませんが、おたけさんを貰ひたい家のお母さんが木村のお時（飛行家小栗常太郎氏夫人）と知りあいで、お時におたけさんの今迄の操行をしらべて下さいと賴んだのださうです。おたけさん位奇麗な娘さんを貰ふのに操行なんかしらべてはいけませんね。貞チンも隙だから藥屋でお時といつしよにおたけさんに戀人があ

つたとかないとか、あの人にどうかしらあの人がなつたと數へ遊ぴをしてゐるのださうです。で僕も貞チンと樋口傳四郎一刀流のカツレツを突つつきながら數へ始めました。仲木貞一　武田比佐　澤田正二郎　伏蘇丈夫　小栗常太郎　佐々木杢郎　中村吉藏　立花寛一　高田保　久米正雄　ヤキメシ屋のまあちやん――それからそれへと名を浮び上がらせました。おたけさん及び右の諸兄よ！

變に怒つて下さるな。かんべんして下さい。これは僕の童話遊戲なのですから。

僕は小便が出たくなりました。共同便所まで行くのはめんどうくさいので母子軒の前の呉服屋の横に這入りました。震災前には此奥に鳥料理の淫賣屋があつたがな、などと想ひながらゆつくり小便しました。傳四郎の暖簾のなかに歸つて來ると貞チンは酒をやめて飯を食つてゐます。傳四郎得意のオムライス――卵燒のなかに飯の這入つたもの、その名を笑ふ勿れ　僕達二人は母子軒を出て雷門の方へいろいろな匂ひに押されて歩いて行きました。

チンヤの時計が十一時。

自動車へ乘りました。僕は巣鴨へ、貞チンは柏木へ。

僕は今夜家で愛する妻女に（妻は淺草のその他大勢女優の一人だつたのです。おたけさんのことを話すのです。僕もおたけさんと口をきいたことはないのです。がそのむかし馬道の大黒湯で裸體のおたけさんを毎日のやうに見て知つてゐるのです。僕の今夜のお土産はおたけさんの嫁入り話しです。

貞チンも淺草で左褄をとつてゐた愛妻に、おたけさんのことを話すでせう。二人の淺草から來た愛する妻はなんていふでせう。樂しみです。

三、寒い口笛

淺草はやつぱり夜がいゝ。

とりわけ活動寫眞街はさうです。それもあんまりお天氣のいい日はいけません。雨か風の夜がいゝのです。女の人は足駄ばきが一番美くしいですね。安物の飛白の合羽もいゝですね。どろついた敷石路も好きです。

雨上りの夜もいゝものです。お屋根とお屋根の間の空に星かあります。六月頃からは、この空にも羽虫が廻ります。羽虫はこんな街にもゐるんですね。やさしい羽虫。夕闇色の羽虫。まはれまはれ羽虫の群れ透明な羽の匂ふまゝに………

晴天ならば朝がいゝ。

安建築の屋根が陽を受けて、釘の頭が屋根にそろつて出てゐ

て光つてゐるやうな氣持ちがします。バラックの劇場の裏手の板戸などのふし穴に脂のふいてゐるのも朝の陽に樂しい。大きな槌で建物をみんなたゝきこはして、その上におてんと樣色と空色のだんだら布をかぶせて、一二三で村山知義が飛び出す手品でも使つてみたい。

でもやつぱり夜がいゝ。

とりわけ活動寫眞街はさうです。

ひどく風の吹く夜。

どの劇場もどの活動館も出るお客ばかりで這入るお客は一人もありません。幟竿がしなふ程風が吹いてゐます。

僕は池の方から女の人の後について歩いて來ました。女は黑い塗下駄で羽二重の足袋を履いてゐます。エリマキをしてゐないのが馬鹿に奇麗にみせます。耳が白く風の中に浮いて、あゝ耳のなかにちよんぼり幸福ぼくろでも隱れてゐるのでせう。女は足早です。僕も足早です。

女は僕の知らない人です。僕はたゞたゞついてゐたいので、ついて歩いてゐるのです。たとへばそこが人里離れた山奥であつたとしても僕は××××××してなんて心は少しも持つてゐません。僕は善良な童話作家ですから。

女は僕とは今迄一度も言葉をかはした事はありませんが、僕は此の女をもうこれで三度か四度見たことがあるのです。それだけで知つてゐると言へれば知つてゐるのです。

最初に見たのは震災前です。やつぱり風の吹く夜です。僕のビール代のパトロンである根岸吉之助氏が經營してゐた常盤座で、下足番と玉の井新地の開けた話か何かしてゐた時です。もう閉ねに間のない時です。

女が一等の切符を買つて下足を取つたのです。芝居は大詰の幕が半分以上も進んでゐる時なのに變な人だなと思ひながら、僕は階段を上つて行く女の足の裏を見てゐたのです。すると五分か六分か經たないうちに女は下りて來ました。ずいぶん妙な人だなと思ひました。その後は道で會つたのか、電車のなかか、又はやつぱり何處かの劇場でか覺えてゐませんが、でもいつも風の吹く夜だつたやうな氣がするのです。

女の顏に一面に雀斑のあるのを覺えてゐます。がその澤山の雀斑にかゝわらず女はほんとうに白く奇麗でした。

その女に又出會つたのです。で僕はともかくもと、たゞたゞ後からついてゐるのです。

女は富士館の前で立止りました。這入るのかしら、少しゲンメツだな。こんなすつとした女が松之助を見るのかしら。あつ

いけない、切符を買つてゐる。僕もいそいで切符を買ひました。女について僕が這入らうとしたとき

「御同伴御案内」と女給が叫びました。

しめたとしまつたが同時にピンと來ました。僕もついて行きました。女は驚いた様子もなくどんどん行きました。いつしよにならんで座りました。變な氣持ちです。

寫眞はありがたいことには松之助ではなく、馬に乗つた異人さんが森の中でパイプに火をつけてゐるのでした。

女は僕を氣にもとめず寫眞を見てゐます。さつき御同伴と呼んだ時知らん顔をしてゐたこの女は隠賣かな。隠賣だといゝな。宿る位の金はあるし。今夜はこの女の雀斑をはつきり見て樂しむことも出來るし……女の手にさわつてみようかしら、さわつて他の人は怪しむ氣づかいはない、僕と女とは同伴者なのだから。手を握りあふぐらいは誰だつて大目に見てくれるだらう。

今夜どこまでも御同伴してかまひませんか、と言つてみようかしら。そいつは拙いな。女は入口であびせられた言葉に氣がつかなかつたのかも知れない。僕が言ひ出して、女が變な顔をして、オマハリサンに、この人こんなことを言ひましたと引渡されたらつまらない。

あゝ默つてゐよう、默つてゐよう。

この女の身元調べなどせずに、別れるまでのしばしの間を静かにゆつたりと味はわう。と考へました。

それからしばらくの間はボンカンボンカン鳴るピアノを髪の毛の先に聴きながら、スピートハッチかハリケンハッチか忘れたがとにかく子供のメンコの繪でいつもお目にかゝるハッチソン君の振りまはす腕を見ながら、女の鼻のとんがりを盗み見てゐましたが、ひときはボンカンボンカンが高く鳴り響いてハッチソン君の腕の振りまはし方がはげしくなつた時、僕はこの女が何であるか。何の爲にこの活動寫眞館に這入つたのか。何故に後からついて來た變な同伴者を氣にかけなかつたか、はつきり解りました。

——蛇の道はへび——

女の眼は寫眞に向つてゐません。今の今迄女の鼻ばかり見てゐた僕の眼にはつきませんでしたが、僕達（この女と僕）の前少し右寄りにゐる男女、男は手代風、女は馬道邊の鼻緒内職かなにかしてゐる娘、その二人の行動行爲を見てゐるのです。此の富士館は下級の人々の集る館故、この怪しげな行爲はすこぶる多いのです。女はそれを、じつと見てゐるのです。

女は風が吹く夜は無暗とそんなものが見たくなるんでせう。で女はこの館を選んだのでせう。同伴席でなくては見ることか

出來ないので、女は多年の練磨から僕に後をつけさせて同伴人にさせたのでせう。僕は女の小道具です。何とまぬけた僕よ。

しかしこの女の寄生尾星張りの美しさはたまらなくいゝ。

僕はそつと席を立つて

「また風の夜お目にかゝりませう。さよならおやすみなさい」と、女にはちつとも聽こへない小さな聲で言つて、女に滿足を與へてゐる男女をもう一度見て、心ひかれる想ひはしましたが外に出ました。

風は強く吹いてゐます。

女もやがてこの風のなかを歸るのでせう。

何處？　いふまい謂ふまい。風が吹けば又會へるもの。……

僕は風のアスファルトの上でマスターの「汝が青き眼を開け」を心かぎり口笛で吹きました。

馬樂は生きてゐた！

吉井勇

馬樂は生きてゐた！と云つても誰もほんとにするものがあるまいが、しかし事實馬樂は生きてゐた！相變らずの坊主頭で、相變らずのきよとんとした錆み眼で、相變らずのさつかけない鼻に懸かつた聲で、相變らずのぶつきらぼうな調子で、相變らずの飄々乎たる生涯を、彼はこの世の何處かで續けてゐたのである。

「いよう、これは、これは……。」

かう云つて突然聲を懸けられた時には、さすがに私もびつくりした。私も死んでしまつたとばかり思ひ込んでゐて、馬樂忌なんてこともやつてゐたんだから、かう云つた聲を懸けられると、水でも浴せ懸けられたやうにぞつとしずにはゐられなかつた。

それに第一時刻と場處が惡い。時は灯ともし頃と云へば何でもないどころか、ちよつと色つぽくも聽こえるが、少しもの凄

く云へば逢魔ヶ時、ところは向島の三圍弘前の土手の上、とても昔とはがらりと變つて、「鐘がゴオンと鳴りや上汐南さ」のお陽氣などころはちつともなく、堤下の河波がぴちやぴちや洗つてゐる棒杭の邊には、潮につれて舍利骨でも流れて來さうなたたずまゐだ。折柄河向うの辨天山の鐘の音が、水に響いてボーン……と來ると怪談噺になつて來るんだが、さうは問屋で卸さない、千住通りの蒸汽の笛の音が、びゆつと筑波颪に吹きちぎられて來さうな響を立てた時に、

「いよう、これは、これは……。」

と云ふ聲を懸けられたのである。

最初から聲を懸けられた時には、思はず私もぶるつとしたが、しかしそれがほんとに馬樂だと云ふことが分つて見ると、私は堪らなく嬉しくなつた。なあんだ！死んだなんて嘘だつたのか？やつぱりこの世に生きてゐたのか？と思ふと、私はだくだくするほど嬉しくなつて來ると同時に、「馬樂地藏に酒たてまつる」なんて歌を作つたことなぞが、少し馬鹿々々しくも感じられて來た。で、それから二人で「久しぶりで一杯……」と云ふことになつたのだが……。

氣が附いて見るとそこは天麩羅屋の忠さん、即ち天忠の座敷、柱懸には「そのあした天麩羅を焼く時雨かな」と云ふ馬樂惡筆の短冊が懸けてあつて、そこに居合せる面々は、岡村柿紅、鈴木喜水、中村秋湖と云ふ猛者揃ひ、無論もう醉態淋漓、警句亂發、杯の雨が降るやうな體たらくである。が、私もひどく醉つてしまつてゐるので、酒で磨き立てたやうな柿紅の黒く光つた顏も、油繪の定九郎——それをつゞめてアブサダと云ふ異名のある秋湖の青く沈んだ顏も、唯目の先にちらちらしてゐるばかり、みんな何を話してゐるのだか、如何もはつきり耳に入つて來ない……。しかしそれでゐてひどく面白い。全く堪らなく面白い。何が何だか分らないが、笑ひが胸の底から込み上げて來る。氣狂ひ染みた笑ひ聲が、みんなの口から爆發する……。天麩羅の笑ひ聲だ！天忠自慢の其角揚の笑ひ聲だ！

が、その中にたつたひとつ笑はない顏がある！それは馬樂だ！彼は笑はないどころか、むしろ怒つてゐるのではなかと思はれるやうな、ひどく機嫌の惡い顏付で、苦しげにみんなの笑つてゐるのを眺めてゐたが、やがて例の鼻に懸かつたやうなぶつきらぼうな調子で、

「笑談ぢやありませんぜ。あなた方は笑つておゐでだが、近頃の寄席の有様を見ましたかい。あれを見たらば、酒も咽喉に通りますまいぜ。いや、もう情ねえとも何とも云ひやうのねえ體たらくぢやありませんか。」

とひどく悲憤慷慨の態。と、思ひ入れよろしくあつた道具廻る……。

寄席だ！寄席の中だ！と云ふことだけは分つてゐるが、それが何處の寄席だか分らない。震災後のバラツク普請、メリケン杉の妙にやにつ臭い匂ひが、ぷうんと生々しく鼻を撲つ。が、兎に角見てくれよく、客に見えるところには、外國物ながら檜が使つてあるので、ちよつと見たところは立派だが、如何も芝居の大道具と云ふ感じを免れない。そこへどや〳〵と花道から——それも東の假花道から現はれたものと御承知を願ひたい。如何もみんな星影太右衛の家來ばかりで、五郎藏の乾兒と思はれるやうな御面相のものは一人もない。——馬樂が眞先に柿紅、秋湖、台水、私と云ふ、先づ役者で云へば、猊助、新十郎と云ふところが登場する。下座の誂への唄は、先づ馬樂得意の「辻君」かな?、

客はざつと七分の入りだが、それがみんな「會社睦大合同競演會」と云ふ看板に釣られて、大枚一圓五十錢と云ふ木戸を拂つて御入場になつた方々だから怖ろしい。しかもみんな大枚の木戸錢の手前、ひどく物靜かに御謹聽とある。高座で喋つてゐるのを誰かと思ふと三語樓だ！

「おや、あいつが當事評判の三語樓ですかいて、驚いたねえ、そいつは！」

と馬樂はちよつと呆れたやうな顏付。しかも三語樓が喋つてゐるのは、故人小せんが得意でやつた「鰻屋の幇間」だから一層面白い。が、その「鰻屋の幇間」が言語道斷、話の運びの何も滅茶々々で、もう少しで落と云ふところまで來て、

「さてこれからの幇間が失敗すると云ふ滑稽なお話でございますが、もう藥屋には大勢見えましたやうで……。」

と云ふやうなことで、によろりと高座を下りてしまつたのだから堪らない。まるで馬樂を怒らせるために上がつたやうなもので……。

「驚いたね、そいつは！ねえ、オカポチさん（岡村柿紅のこと）！ひでえ世の中になりましたね！そいつが何ですかい?、當時自動車で一晩に十軒も常々廻つてゐるつて落語家なのですかい?、驚いたねえ！呆れたねえ！何しろ小せんて男はいい時に死にましたよ！」

と、馬樂の憤慨一方ならず。が、お客様方はいい氣なもので演說會よろしくの拍手をするだけのことか、御丁寧にもほつと感歎の溜息を吐かれた方さへある……。

續いて上がつたのが柳亭左樂、顏が見えるより直ぐに「寝貰」

どと云ふ怪がかかる。軍國主義の落語家であるばかりか、落語仲間に軍閥を作るやうな、政治家的素質さへある人間、藝の拙いのも無理はない。馬樂はもうこいつの拙いのは先刻御承知と云つたやうな顔付で、苦々しさうに默つてゐるので、

「ねえ、馬樂さん。この間大阪の花月で、こいつと小さんと伯山と痴遊と橘之助で五圓の木戸を取つたさうだぜ。」

と云ふと、馬樂はまた呆れたやうな顔付で、

「いづれ名人會とか何とか云ふんでせうが、左樂が一枚のつてゐるだけに五圓の木戸はひどうござんすね。」

と云つて憫笑をする……。

左樂が拍手喝采に送られて高座を下りると、さてその次に上がつたのが桂文治。不得意の「祇園會」を演つたが、如何も少し家元意識があつていけない。が、兎に角藝が本筋に近いだけに、馬樂は少し機嫌がいい。

「まあ、この位ならちよつと聽けるね。しかし如何も以前よりは藝に其味が出來て來たやうだが……。」

その次には正藏が出て「品川心中」をやり、またその次には今度の馬樂が出て「長屋の花見」をやる。この二人は馬樂にもちよつと氣に入つたらしく

「ああ、こいつは以前の小三治だね。まあ、これなら馬樂を名乘らせても惜しかあねえや。正藏と云ふ男もちよつとやるね。」

と馬樂は機嫌斜ならず。さてその次に古今亭しん生が上がると馬樂はびつくりしたやうな顔付で、

「おや、小助六がしん生になつたんですかい？しかし相變らずうめえね！酒と女に懸けちやあだらしがねえが、藝はやつぱり飛び抜けてゐるよ！」

と云つて懐かしさう！

そうのち高座で「繩暖簾」を喋つてゐるしん生の姿が、だんだんぼんやり霞んだやうになつて來たかと思ふと、もう何時の間にか私達は寄席にゐない。どろどろと云ふもの凄い大どろの太鼓の音……。それに水禽の羽音が聽えて、この道具返しに、以前の三圍社前土手上の場となる……。これから清元の出語りが欲しいんだが、そんな贅澤なことは私は云はない。

兎に角氣が付いて見ると、もうそこに馬樂の姿が見えないで、豆絞りの手紙が一本落つこつてゐるばかりだつた！

夢かも知れない？　幻かも知れない？しかし私は馬樂が生前よく話してゐた小唄上手の蛇の茂兵衛さんのやうに、この世の何處かに生きてゐるものと信じたいのである！

馬樂逝き、小せん死し　私はやうやく寄席から遠ざかるやう

になつた。しかし私の夢はいつもあの懐かしい寄席の高座の上に飛ぶ——

懐かしの寄席よ！　懐かしの高座よ！

近代カフエーの女

松崎天民

◇

『君も生きて居たのか…』

と、私が云ふ。或るカフエーの一夜。

『え丶、助かりましたわ。危くね…』

と、彼の女が云ふ。そして、又言ふのである。

『あのお峯さんね。深川だつたものですから、今に、行方が判りませんのよ…』

と、彼の女は一寸、暗い表情をして見せた。

『でも、新らしい女達が殖えたね。地震で死でも、若い美しい女は、澤山、居るのだね』

『あの…七三に結つてる人ね、お君さん……御存じありませんか。葭町に出て居たんですつて……地震前までは…。藝者からカフエーの女へなど、随分、變つて居ますわね。他にも二三人、そんな人が居ますのよ。皆、なか〳〵の手腕家ですわ…』

彼の女はお徳と云つて、地震前まではキタニホンに居たが、去年の三月頃から、此のカフエーに出たのである。齢二十三四、色の白い大柄なスタイルだと云へば、若き人々よ、思ひ出しはしませんか。

◇

赤坂の演伎座で、新國劇の澤田と其の一黨が、菊池寛の「戀愛病患者」を演じた時であつた。私は幕間の廊下で、二人の女性に、

『今晩は……。随分、お久し振ですこと…』

と、親し氣に挨拶された。岡榮一郎君や佐藤丈夫君など丶一緒

に何かの交話をして居た際とて、私はドギマギと面くらつた。

『やう、その後は……。何うしてますの……』

斯うは云つたものゝ、その女性が何處の何人であるか、私には少しも見當がつかなかつた。何處かで見たことのあるやうな女――だとは思つたが、その瞬間には、面くらつてしまつて、宜い加減な返事をしたのだつた。

その女が赤坂の分千代春〻の藝妓で、千代春と云ふ女であることは、傍に居た若様の三榮が説明してくれた。けれども本名をお夏と云つて、十年からカフエーの女となり、銀座の臺灣喫茶店に居たお夏の後身であることは、何うしても思ひ出せなかつた。

田中純兄よ、彼の女の其の後を知つて居ますか。

◇

『まア、松崎さん、私、きまり悪いわ……』

と、三五人來た妓達の中でも、頭髮のバサ〳〵したハイカラが、クス〳〵と笑つた。

駒込神明の場合で、私は甲府のM新聞社長と一緒に、遲い晩餐の卓を圍んで居た。

大正十二年十一月の東京、まだ餘震に脅かされ勝で、電車も所々しか開通して居なかつた。新橋も、赤坂も、下谷も、霞町も、在りし日の歡樂氣分は、思ひ出に殘るのみであつた。

『世が世だからね、辛抱することさ』

若い元氣の好い社長は、斯う云つて盃の數を重ねた。『これでも藝妓かね、女將さん』などと、私達は無遠慮な口を利き合つたりした。

『さうよ、藝妓よ、から見えても……。私達、震災藝妓といふのよ。ね、いゝでせう』

などゝ、はしやぐやうな若い女も居た。

『君、何うして知つてる、僕のこと……』

『知つてますわよ、私……。銀座のカフエーに居ましたもの……今年の夏時分まで……。それから藝者に成り下りました。』

◇

水郷の潮來へ行く一方の水路は、佐原からするのが面白かつた。日本旅行文化協會の美代司年甫翁に連れられて、その佐原の割烹店川島で、一夜を靜に興じたのは、恰度、三月の中旬頃であつた。

甲州のM新聞主筆を辭して、私は心も身も長閑であつた。そこには若い田舍〳〵した藝者達の他に、一人の美しい女中が居て『私、東京、本郷ですわ』と云ふのだ、何と云ふこと無しに、私達の心を引いた。

『須田町の萬世樓に居ましたけれど、地震でねえ、着物も何も焼いてしまひましたわ。ついでに、長いこと附きまとはれて居ました不良少年も、行方が判らなくなつてしまつて、ほんとにせい／＼いたしましたわ東京は地震が怖いでせう、ですから出命稼ぎに出まして、ノオ／＼して居ますわ』

さうなれば、少しはいけるらしい女は、次第に酔の廻るにつれて、其の過ぎ來し方の短い一くさりを、私達の前にさらけ出した。

◇

若い美しいウエートレスを、數多くそろへて居るので、若い浮かれ男の間に魅力を持つて居るのは、淺草のアメリカであつた。

地震後は××××と改名して、相變らず多くの女給達に依つて、繁昌して居る様子に見えた。料理にこれぞと云つて、大きな特色が無くても、若い美しい色香盛りの女給さへ置いて居れば、自然に客足が繁くなる！これがカフエー經營の秘訣らしく見えた。

私はそこで、一人のウエートレスに發見された。敷島の空袋に、鉛筆の走り書で、『アナタハ、マツザキサンデセウ』としたのを、そつと渡された時、私はほんとにびつくりした。二十五位の肌の色でありながら、若々しく化粧して居るので、二十か一か位にしか見えぬほどに、彼の女は小柄であつた。

『鳴子温泉の鳴子ホテルに居ましたの、あなたのお給仕をしてあげましたことを、お忘れになつたのも、御無理はありません』と何と諸君、その女はこくめいにも、敷島の空袋に鉛筆で片假名に書いたのであります

◇

中にはこんな手紙を寄越して、私の好奇心を唆るやうなカフエーの女もあつた。

――前文御免下さい、あなたのテーブルのそばに居た慶大の學生さんから、あなたのお名前を承りまして、この手紙を差上げます、これをお讀み下さる時には、私はもう東京に居ないかも知れませんし、居てもお目にかゝれぬやうになつて居ますかも知れません、先夜十圓札をいたゞいて、二圓五十錢のおつりを差上げましたが、あれは四圓五十錢の間ちがいで、二圓だけ余計にいたゞきました、それは帳場の方の手落ではなく、私がわざと二圓だけ、余計にいたゞきましたのです、何しろそのやうなことをいたしましたが、別に悪い氣はなかつたのですが、ついだまつていたゞいてしまひました、悪いことをしまして、申し譯がございませんが、あれはあの

まゝ私が借用して置きます、妙な女だ、哀れな女だと、お申し下さいますやう……

私は狐にでも、つまゝれたやうな心地がした

◇

郷里の場所で、大きな宿屋の女將として、幸福に暮して居たが、亭主が何かに失敗したゝめ、一緒に東京へ出て來たと云ふのが彼の女の身の上話の冒頭であつた

そして亭主は、市の電燈課に勤め、自分はカフエーの女となつて、チツプを貰ひ貯めながら、郷里の方で再興する資金の助けをすると、彼女の心は、世にも健氣なものであつた。

『さうか、それは感心な心がけだよ。折角、大に自重自愛して遣るべきことだね？』

と、その身の話を聽かされたものは、眞面目に應酬する他はなかつた、顏は二十七八になつて居て、若々しく化粧して居ても、顏のそばかすや、眼の縁の皺が、ほんとの齡を隱し了(おほ)せなかつた　子供も一人位は生んだやうな、皮膚のたるみが見えた女であつた

『あいつか君、例の横田ね、あれと關係したといふんだから、地震のドサグサまぎれほど、女を心機一轉つけさせたものはないよ……』

と、これはライオンでの話であります。

『道玄坂の界隈に、いろんな飲食店があるだらう。女の世界は

◇

カフエーに限るけれど……』

『風變りの家でもあるのですか』

『別に風變りでもないが、四坪の土間に圓テーブル三つ四つ。一方はコツク場への通路で、「三越か何かのポスターが貼つて居る」

『右手には細長い階段があつて、二階の六疊へ過ぎるといふ段取なんでさね。すべて場末のカフエー宜しくと云ふ誂への舞臺裝置で……』

『さうさ。いやに白粉をコテ／＼塗つた十八九が二三人居て、馬鹿に食べ物のお誂へを強やがる。カフエー一丁では見向きもしないが、ビール一本になると、秋波(ながしめ)の大安賣さ』

『そして何でせう、「あなた、二階が空いてるわ」と來るでせう。クリームの匂をプン／＼させて、いやに肉感をそゝられさすので、いや、もう全く……』

『何處の何々に軒か知つてる？』

『何處つて、場末は小石川でも、澁谷でも、龜戸でも、目白でも、何處でもですよ。地震後期の東京世相に見る現代産物の一つですよ』

◇

おでんやが出來た、すしやが出來た、天ぷら屋が出來た、支那料理屋が出來た、牛めし屋が出來た、鍋屋が出來た、小料理屋が出來た、とり料理屋が出來た。地震でグチャツとなつた東京市に、復舊復活復興の處をしたものは、それ等の飲食物を商ふ店々であつた。

殊に西洋料理、レストラン、カフエー、バーの類が、如何に現代東京の都會相を彩つて居るかは、何人も氣づいた大きな存在であらう。うどん、牛めし、すいとん、西瓜、梨子の外には、何ものも無かつた地震直後の東京に、何と云ふあはたゞしさで數多くの飲食店が出來たことか、そしてこれらの小さい飲食店には、影の形に添ふやうに、若い化粧した女達が居て、飲食物の他ある雰圍氣を標榜して、若い男徒の心を唆つてゐるのである。中にも安西洋料理店のカフエーには、必らず二三人の若い女が居て、東京の文化的世相の一面を形造つて居る事實を、私は見のがすことが出來ないのである。

私は焦點をカフエーの女に置いて觀た。

◇

『私、淫賣婦ぢや無いわよ、失禮な。お客だと思つて、好い加減にして居れば、最前から何ですツ。ね、お千代さん、隨分、人、馬鹿にして居るね。こんなお客、私、もうコリ〳〵……』

一人の醉ばらい老人を相手にして、一人の女給さんは、プンプンと怒鳴つて居た。醉漢は何と罵しられても、何にも辯明せぬほどに、ヘヾレケに醉ぱらつて、『こら、お花、お酌しろ』とか、『あゝ宜いわ、今にダイヤモンドの帶止を買つて遣るから、驚くな』とか、『さう怒らずに、お酌してくれよ』とか、他愛なく深醉して居る態が、可笑しいほどに見えた。

『何だと、ダイヤだと、へーンだ、ダイヤのダの字が聞いてあきれるわよ。もし、お千代さん、この人、余つぽど誇大何とかだわね。シツコい助さんたら、いやになちつまうぢやないの。カフエーの女〳〵と、私、つく〴〵世の中が厭になつてよ……』

と、以上は宮益坂の某カフエーで、夜十一時頃の所見である。諸君、以て如何となす。

◇

さうかと思ふとこんな話もある。

男から男へと轉々として、二度も流産しながら、二十八が二か三かに見える若さを資本に、東京中のカフエーと云ふカフエーを、流れ渡つたといふのである。そして眞面目にして居ても、「カフエの女」と言へば、何うせ浮氣者扱ひされるのだか

ら、出來るだけの資奬をして、出來るだけの男から出來るだけの金を取らうと云ふのである。

私は其の女――お時さん――を、上野廣小路でも見たし、須田町のオリエントでも見たし、銀座の清水軒（であつたと思ふ）でも見たし、神樂坂下のフジ屋でも見たし、淺草の雷門界隈でも見た。そして何時でも若々しく、或る時は丸髷に結つて居たり、或る時は銀杏返しに結つて居たり、又或る時は七三に結つて居たりした。

『相變らず、發展して居るんだね』

といふと、お時は何時も笑ひながら云つた。

『私、もう常習犯ですもの、徹底してますわ』

◇

あの大地震を境界線として、一般の女が職業的に眼ざめて來たと共に、女の職業がより以上世間的に進んだことを、私は見のがすことが出來ぬ。それも地震初期の東京世相にのみ見る特異的現象であつて、社會事象の上から云々すれば、大いに喜ぶべき傾向の一つとでも云ふのであらう。

性に伴ふ危険性はあつても、それは何もカフエーの女に限つたことではなく、凡ての職業婦人に共通した悩みなのである。あの大惨事件のために、生活の根底を脅かされた東京生活者の大部分は、ジツとして居られぬと云ふ不安に急き立てられた。今までは家庭の人として、内にのみ働いてゐた女性などが、「斯うしては居られぬ」世の中となつたのである。私の思ふに妻までが、美容術の内職を初めた事例に見て、私はさう斷ずることの盲でないことを信ずるのである。

カフエーの女と云つても、今はこれを職業的に見て、眞面目な生活の存在なのである。

◇

藝妓になりたちと云ふことに、女が引け目を感じない程度以上に、カフエーの女であることに、引け目を感じた時代は、過去のことに過ぎたのである。自分の良人を養ふため、カフエーへ通つて居る女を見たし、一人の弟に學問させるために、カフエーの女になつて居る者もあつた。或は貧しき父母の生活の助けに、或は嫁入支度を稼ぐために、或は又自らを、最も正しく養つて行くために、カフエーの女になつて居る人迄も、相當に多いのである。

そこに異性との接觸が多いため、交際が淺からぬため、いろ〱の墮落的傾向の可能性が多いにしても、問題は「性」にあつて、職業では無いとやらに、解して居る人々もある。カフエの女が淫蕩なのではなくて、その女が浮氣であり淫蕩であるこ

とに、着眼して宜いのである。同時に環境を、若い男達な度外視して、この問題は言はされぬことを、私はカフエーの女達のために辯じて置きたい。

カフエーの女は、東京生活者にとつて、美しき職業の一つである。

―十四―三―五夜―

どりんく、ごうらうんど

辻潤

Shameless――つまり恥知らずにならなければ作家にはなれない――とジョウヂ・ムウアが云つてゐるが、作家と云ふ程の人間でない場合でも凡そ文士なぞと云はれる人間なら多少にもみな恥知らずでなければ務まるわけのものではない。否、この世の中に蠢動してゐる人間共はみんな或る意味で醜を曝らし、生き恥をさらしてゐると云つても差支ひあるまい。神經の人並外れてデリカな者ほどそれを沁々と骨身に答へて感じるのだ。かういふ意味で世に藝術家の靈魂ほど血みどろなものは恐らくあるまい。同時に自分を棚へあげて他人を裁く階級にゐる連中程良心の痲痺してゐる無神經者もあるまい。

云ひかへれば良心の強い人間程、己の恥知らずであることをより鋭く感じるのだ。

私は最近偶々アルツィバアセフの「作者の感想」を讀んでゐる中に――神は私に凡ゆ作家の運命にふりかかり得べき最大の不幸を與へた――私は誠實である。――と云ふ言葉を發見した。

勿論それは彼自身の靈魂に對して誠實であると云ふ以外のなにものをも意味してゐないのだ。

自分がなに故にかくの如き言葉を冒頭に揭げたかは讀者の推量にまかせる。

凡そダダイストにとつてはこの世に許され得ない言語行動など

云ふものは一つとして存在し得ないのである。――しかし彼がその中のなにを撰擇するかは彼の個性によつてきまるものだ。彼はなにを撰擇しなければならないかと云ふやうな一切の義務をも責任をも感じてゐないのだ。

アプリオリの世界は恐らく彼の眼前からはいつでも消滅してゐるのだ。

夜ふかしをし、酒に溺れ、女に戯れ、賭博を行ひ――それを又誇らし氣に得意然と書きたてて生活の資を得、世間から虚名を博して先生とあがめ奉られること――唯單にそれだけであるとしたら、まつたく「文士」と云ふ職業ほど世に羨望に價するものはなく、猫も杓子も小說家になりたがるのは無理もない話である。

しかしそれは偶々作家の生活に現はれた一面の結果から推量された極めて皮相な觀察に過ぎないことは云ふまでもなく、それから作家以外の人間の生活はみんな規則正しく道德的であるかと云へば――それは問題にもならない程馬鹿氣た考へ方で、かれ等は唯それを公衆の面前にさらけ出さないと云ふまでに過ぎない。

私は自己强辯をやつてゐるのではない。――これまでにも自分と云ふ人間はかなりあからさまに自分の生活もさらけ出して生きて來た。これ以上自分をかくしたてする何等の必要をも義務をも感じてはゐない人間なのである。

考へると自分のヴァガボンダアジュの生活もあまり短かいとは云はれない――よく今迄生きて來られたものだとさへ時々泌々思はれることさへある。しかし先輩坂本紅蓮洞氏などのことを思へばまだ自分などはほんの靑二才に過ぎないではないか――そんな風に考へることもあるのだ。

道樂と云へば私にとつては先づ讀書と酒とであるそれを取り去ると私の生活がゼロになつしまふと云つても差支ひはない。

今では自分がなんの爲めに讀書し、なんの爲めに酒を吞むのだかわからなくなつてしまつてゐる程それが第二の天性になりきつてしまつてゐる。

私は此處でとやかく酒の功能を論じ立ててやらうとするものではない――しかし私にとつては少なくとも酒は自分をこれまで生きながらへさしてくれた命の恩人だとさへ時に考へられるのである。

前置が些さかながくなり過ぎたやうだ。

倫敦ならばピカデリイ、巴里ならモンマルトル、日本の帝都ならば淺草……

私は震災後しばらく旅で暮らしてゐたので歸つてきてみるとまるで樣子がわからなくなつてゐた。七八年前の淺草ならば私は手のウラをかへすやうに知りぬいてゐた積りだ。

幻のやうな赤い塔のなくなつてゐるのも實に淋しい。全體が恐ろしくプロゼイツクになり果てゝ少しもミステリアスな趣きがない。

それでも私は昔馴染みの白木の殿堂が復活してゐるのを發見して久しぶりで其處へ腰を落ちつけた。

そこは澤の鶴を飲ませる純粹な細暖簾で如何にも瀟洒として女氣がないので私達はそんな風に命名してゐるのだ。元の合羽橋通りで六區の入口に近いなか屋と云ふ酒場なのだ。

今頃ならばいつでもたいてい「青柳」である——私はそれを目的にして出かけたものだ。勿論、フトコロ勘定から打算しての話だから、あながちさうばかりとも云へない。

由來、僕は細暖簾黨なのだ、その上酒でも食い物でもまるで日本人だ——から云ふと自分がなにか外國人らしいが、現代の若い人達はどちらかと云ふとたいてい洋服をきてトンカツを食べ、まづいコーヒイに舌皷を打つてゐる連中が多いやうだ。

從つて僕はカフェへはあまり出かけない。なぜならカフェにはうまい日本酒がなく、第一あつたにしろ酒の香がない。

先づ振り出しには飛び切上等な酒でなくつては我慢がならない——勿論酔つたら最後萬事萬物はダダのカレイドスコープだ。

細暖簾ではイヤに氣取つたり澄ましたりしてゐる連中は一人だつてゐやあしない。勿論カフェのやうに女給を張りに來るやうな種類の客は一人もゐず、女中がゐても客に遠慮してゐるやうなのは滅多になくマゴ／＼するとアベコベに客の方がやつつけられるやうな手合の方が多い位だ。

細暖簾なら一人で出かけても少しも淋しくはない。全體酒呑みと云ふ者は sans réserve なものだが、プロレタ氣分が横溢してゐる酒場では殊にみんなが期せずしてタワレシチイで、始めて顔を合せた人間でも三年も馴染んだチンコロのやうに醉へば必ず饒舌り合ふのだ。御相互にあまり無遠慮過ぎてツイ喧嘩も始まるのだが、それ位はかへつて人間味があつて面白く汽車の一等室や電車の中で御相互に口を利けば損だと云ふやうなツラをしてゐる人間が一人もゐないのが何より嬉しい。

二三本平げて少し氣持がよくなつたので、噂にきいてゐた宮戸座のそばのカフェ・アレキサンドリヤへ行つてみた。なる程、四五人の露西亞婦人がゐた。——しかし注文したカルヷスもウオツカもないのには驚いた。仕方がないからまづい瓶詰の酒と酢蛸とで我慢をしながら僕の番にあたつた一番年長のおばさん

を相手にして話した。

いきなり——あなた赤知つてろ——などと云ふ質問に出逢つてメンクラつたが、——こちらもさる者——知つてゐるつもりだが、おばさんは赤なのかね——ときくと白で赤だなどと異體のわからぬことを云ふから、僕もおばさんが白で赤ならコッチは黒で綠りだと云ふと——ではそのつもりで握手をしようと忽ち日露交渉が出來あがつた。なんのことだかさつぱりわからない。僕のロシヤ語の智識ときたらセイ〴〵ダダとハラショ位な程度なのだから——

若い連中はみんな水色や桃色の鉢卷をして怪し氣な日本語で盛んに饒舌りたててゐた。やがて常連らしい兵隊さんの一團が這入つて來たら、シベリヤかサガレンにでもゐたことのある連中だと見えて流暢なロシヤ語をベラ〳〵やりながら若い女達を相手にし始めた。

ロシヤ美人と云ふと僕は震災前銀座のカフエロシヤにゐたリヨウリヤさんのことを思ひ出す。彼女はさして美人と云ふわけではなかつたが教養があり、愛嬌があつて、歌もよく唄つた。日本できいた中では「天然の美」のメロデイが一番好きだなどとセンチメンタルなことを云つてゐたのもよかつた。プウシユキンやレルモントフなどをよく讀んでゐたツけ、米國の工業學校へ入る爲めに英語をしきりに勉强してゐた——英語は日本へ來てから始めたらしいが、ヂキにデイケンスなどを讀むやうになつたらしい——しかも自分ではエンヂニヤアになるのだと云つてゐたから感心だ。日本のウエイトレスにもリヨウリヤさんのやうな人が早くドシ〳〵と出て來ると面白いと思ふ。——變にすまして話もロク〳〵出來ず、歌もセイ〴〵籠の鳥やストトン程度ではなさけなくなつて來る。もつとも偶には宇野千代子さんのやうな立派な藝術家も輩出するが……なにはともあれ、出かける御客様も好きな人がゐたら盛んにセンチメンタルエヂユケーションでもほどこしてやることさ。

なか屋以外に自分がよく出かけたところは馬道の大黑屋、電氣ブランで有名な例の吾妻橋ぎわの神谷バア——あすこには僕がその昔小學校で敎へたY——と云ふバアテンダアがゐて今では立派な一人前の男になつて切つて廻はしてゐる——僕が飄零漂泊時代には金がなくなるとよく最後にはアスコへでかけてY——からウイスキイやブランをロハで飲ませてもらつたものだ。ついこないだも久しぶりで這入つたら、種蒔きの連中が大勢きてゐてダダは早速思ひがけない歡迎に預かつた。

無想庵の「結婚禮讃」の中に彼と辻潤とが銀座をぶらつくところがある。

辻潤が無想庵に――俺は銀座へ来るといつでもエトランゼの氣持がする――と話すところがある。その銀座も今ではかなりフハミリヤアになつた。これも震災の影響の一つだ。

この間築地劇場を見物に行つて偶々出遇つたI―と歸へりに又とう／＼アナザア軒をやつてしまひ、電車がなくなつたので、銀座裏のI君のところに厄介になつた。

その翌朝、僕は始めて銀座の朝湯なるものに入つた。朝湯、朝湯――震災後大阪以来それが始めての朝湯なのだ。大阪にはたいてい何處でも朝湯が五時半か六時頃には沸いてゐるのに東京では或る特殊の關係を持つ土地でないと朝湯は殆んどない。大阪に朝湯ありて江戸に朝湯なし――まつたく驚き桃の木サンショの木だ。

朝湯からあがつてブラ／＼と歩るき日本橋の花村でこれも震災後始めて飯を食つた。

私は少々なさけなくも阿呆らしくなつた――世は末だと云ふ感じだ。

まさか花村でトンカツやワンタンメンを食はせるやうにならうとはまつたく御釋迦様でも御存知あるめい！

曰くトルコ飯、なんとかミラネーズはまだいいとして、蛤のココア煮たあ抑もなんじや？――まるでダダイストの爲めの特製品とでも云ふべき名稱ぢやないか。

カフエ、ライオンと云ふと僕はすぐ死んだ安成貞雄君のことを思ひ出す。晩年も彼はライオンの可愛いいマドモアゼルになにちやんが好きで鳥の啼かぬ日はあつても安成君がライオンに姿を見せぬ日はないと云はれた程、毎晩通つたと云ふ話だ。

そのライオンへ僕はまだ數へる程しか行つたことはないが――バンジヨーを抱へたメリケンのボキサアが相手と一緒に踊つてゐる圖などはアスコなどでなければ滅多に見られまい。それに貧弱ではあるがピアノとセロとヴアイオリンのエンタアテイメンツのあるのもないよりは遥かにました、なほ更に美しい少女のバレでもあればライオンは一層繁盛するに相違ない。

その筋向かふにカフエ、タイガアとは皮肉にも傑作である。仄聞するところによると最近――と云つても噂される頃はもう既に一世紀位は經過してゐると云ふのが常例だが――芥川龍之助先生が屢々出現なし給ふとのことである。

震災前迄にはタイガアの裏あたりにたしかドラゴンと云ふ家があつた筈だが今でもあるかドラゴン？

あれば獅子と虎と龍とが揃つたわけで――コイツを各々嗾しかけて喧嘩をやらせたらさぞ銀座はいやが上にもウルサイことであらう、その他バアロツト、ピイコツクなどとまるで銀座は

動物園みたいだ。

昔、金子洋文は銀座の札幌ビールで生を飲み、須田町のヤツチヤ場の中のなんとか云ふ家で天婦羅を食ふのが人生無上の樂しみだと話したことがあつたが、今ではまさかそんなことばかりやつてもゐなさうだ。

震災前だつてさうだが銀座は如何にもメリケンの場末が連想されてならない――全體首府東京と云ふ奴が既に日本のダストビンみたいで近頃では銀座を歩けばヘタな殖民地を歩いてゐると思へばまちがひない、歩いてゐる人間だつて和服は少ない、殊に若い女の人達はみんな斷髪だとか耳かくしとかオールバツクだとかなんとか云つた方が多數を占め、その間にまた本物の異人が必ずどこかしらを歩いてゐる。どこの店でも下駄で這入るには不適當に出來てゐる。樂器店だつて日本物を蓄音樂できかせてゐるやうな時代遲れの店は一軒もなく、ラヂオで變な樂隊をきかせてゐる家さへある。ライオンの前では時々ロシヤのおばさんが造花やハンケチを立つて賣つてゐる。

どこを歩いてもしつとりとかしんみりとか云ふやうな味はまるでない――それにも拘らず、裏通りには相變らず新内の流しなどが歩いてゐるが――これが下駄の商人とか猿廻はしとか云ふなら兎に角、少なくとも藝と云ふもののなにものであるかを解してゐる人間だとすると無神經にも程がある。

こないだも「加六」で飲んでゐたら――あすこの菊正はうめい――隣りから蓄音器がきこえて來る。それがなにかと申さうならばジヤヅバンドぢやないか、このわたやうにで盃の縁を舐めまわしてゐると隣りからオリエンタルヤキヤラバンがきこえてくるなどは皮肉を通り越して愉快になる。これでいいんだ。ヅン〳〵やつて行けばいいのだ。轉落するまで轉落してゆけばいいのだ。今となつては逆戻りは出來ない相談だ。おいてきぼりを食はせられる人間は氣の毒だが、若い元氣のいい無茶な人間には到底かなふものではないからぐん〳〵場席を侵略されてもいたしかたはあるまい。いつの時代でもみんなからだが、今はそれが急激に目立つてゐるに過ぎないのだ。

牛込のプランタンと小石川石山の南天堂とは文士や藝術家のリゾオトとして有名だ。文士の消息や文壇のゴシツプなどは大抵それ等のカフエの臊きたる煙草の烟りやビールの泡から生れてくるのだ、文學修業の人達は早稲田や本郷の學校へ行くよりそれ等のカフエへ日參した方が早手廻はしかも知れない。

さてこれから女給さんの評判記にでも移れば益々面白くなるかも知れないが、それは自分の柄でもないし、限りある紙數と限りなき帝都のカフエレストオランを如何んせんやだ。(一九二五、三月)

安來節見物

岡本一平

われ〳〵の頭を安めるには一筋繩のものではいかぬ。

安易（イージーゴーイング）で、馬鹿に出來て、いつでも好きな場合に好きな分量だけ通俗なセンチメンタルになれて怪奇（グロテスク）と共に多少エロテックな刺激があり、果敢なさもあり、その興味に離れる時弊履を捨つるより易い負擔でなければならぬ。

で、淺草の安來節を時々覗きに行く。

舞臺正面館が設へてある。眞中に女の太夫が控へ左に三味線彈き右に太鼓が居る。館には床の間があり掛軸がかゝつてる。

太夫一人で二つぐらゐ唄ふと舞臺監督か木を入れる。するとくるりと廻つて裏の館が出る。館にはもうちやんと一組が控へて居る。すぐ彈き出す。燒煎餅を裏返へす、手數で一揃ひの藝術家をどし〳〵さしかへて行く。客の飽きの前には藝の苦勞も藝人の體面もない、さつさと數でこなす商略の犠牲に供して仕舞ふ。先づもつて痛快だ。

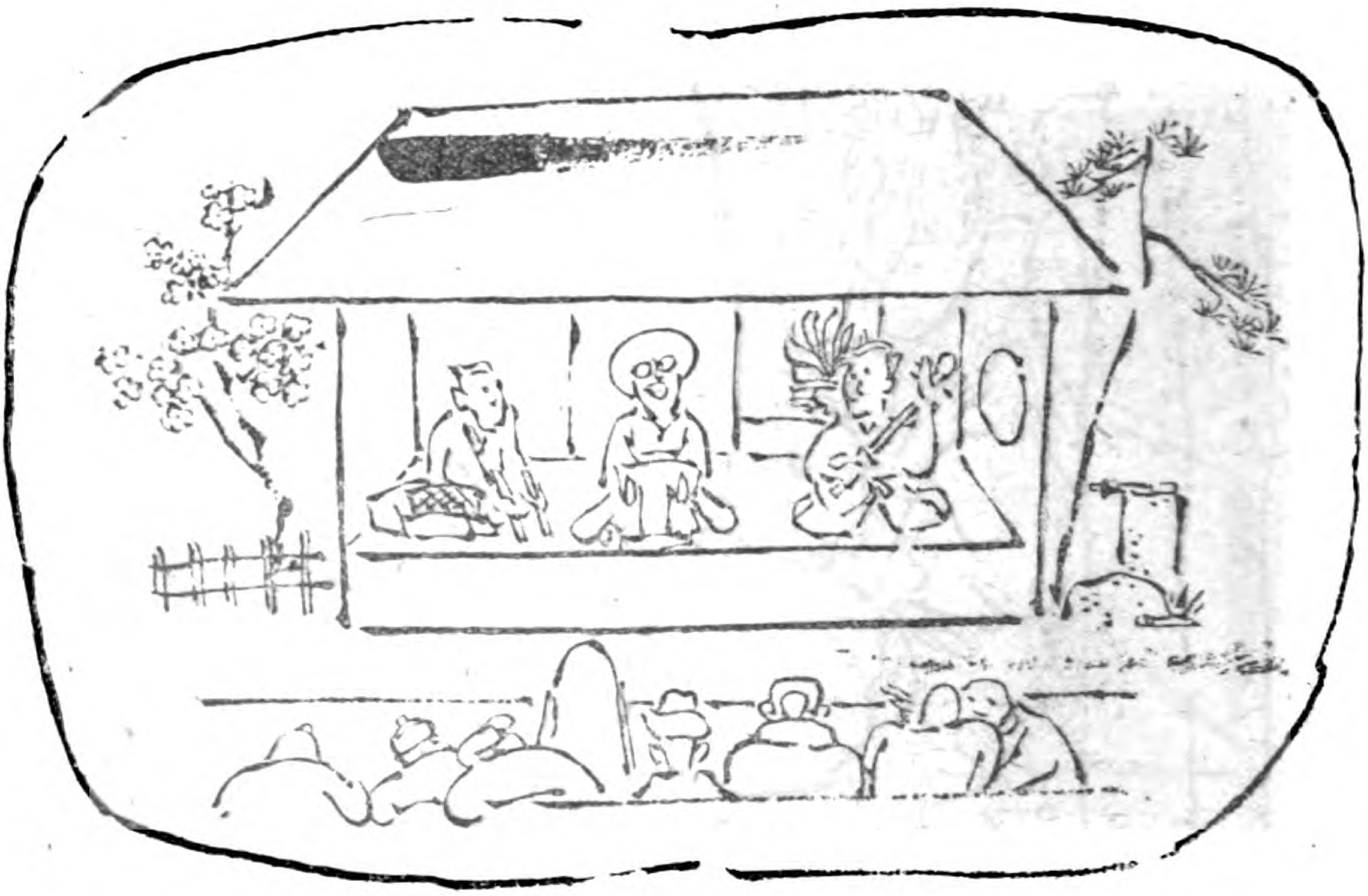
これは興業主乃至幕内主任の方寸に在るのだらうが、そこへ出る安來節の女達はこの人造の須臾の運命を聊も疑はぬ。のみか木と木の間の僅の時間をひと夜のいのちと許りいつくしみ傅いて人氣を集めよう藝に反應あらせようと許りし精一杯努める。だから服裝（なり）や態度も考へた末だ。『金色夜叉』舞臺のお宮のような太庇髮（ひさしがみ）の鬘を冠り金鎖を胸にかけロイド眼鏡をかけたのがある。借二流れの安來節を唄ふのに淨瑠璃の見臺を飾るのがある。彼女は三味線の前彈き中氣取つて湯呑みの湯を呑み客とは世界が違つた顏をしてすます。けれどもそれはトックリ。見よ右角の屏邊に客の半疊を待つ投繩の笑みの用意せらたるをそは一見客をば馬鹿にしてゐるようにも見ゆる。けれども實は逆手の媚だ。愛すべき見物はまんまとこれに引つかゝる。

『こんどは花ちやん――エヘ〳〵』

三味線の節に乘り乍ら太夫唄ひ出しの鉾先を恨まぬよう定連の一人が巧に怒鳴る。彼の憶へた奇聲は一方太夫のすました樣子を突きくづし一方滿場の好笑を購（か）ち得た。滿場の好笑は自然だが太夫のとちらされた態度は人工的のものだ。何故なれば彼女は氣取つてとちつて居る。

　閼伽（あか）竹の水は夜露出ても
　　浮名は立たぬ

唄ひ出しが來て太夫は唱ひ出した。この時はもうすましも氣取りもか



なぐり捨てた。よりよく唄ひ度い一心だ。舞の關を作る時の懸命さに本能的なところが似て居る。

上の句の終りを見計らひ、半疊連が聲を揃へ

　シタコラ、コラサア

と出雲訛りの地方の掛聲を奪つて怒鳴る。下の句の

　一夜添ふても浮名立つ

こゝでまた掛聲がある。

半疊黨は舞臺に一番前の中央の椅子を占領して居る。氣を付けて見るとお互に馴染合ひの一團だ。

鳥打帽を眞深に冠り繻子襟のついた半纏を着半ヅボンにホック止めの赤靴——こういふ若者許りかと思ふとおやぢ〳〵と呼ばれる四十男が居る。禿頭の前と左右に少し許り薄毛が殘つて居る。のろといふ獸は見た事は無いが名前から想像して多分こんな顏だらうと思ふそれにこの男は似て居る。額だけに薄命らしい神經質の皺が寄つてる。

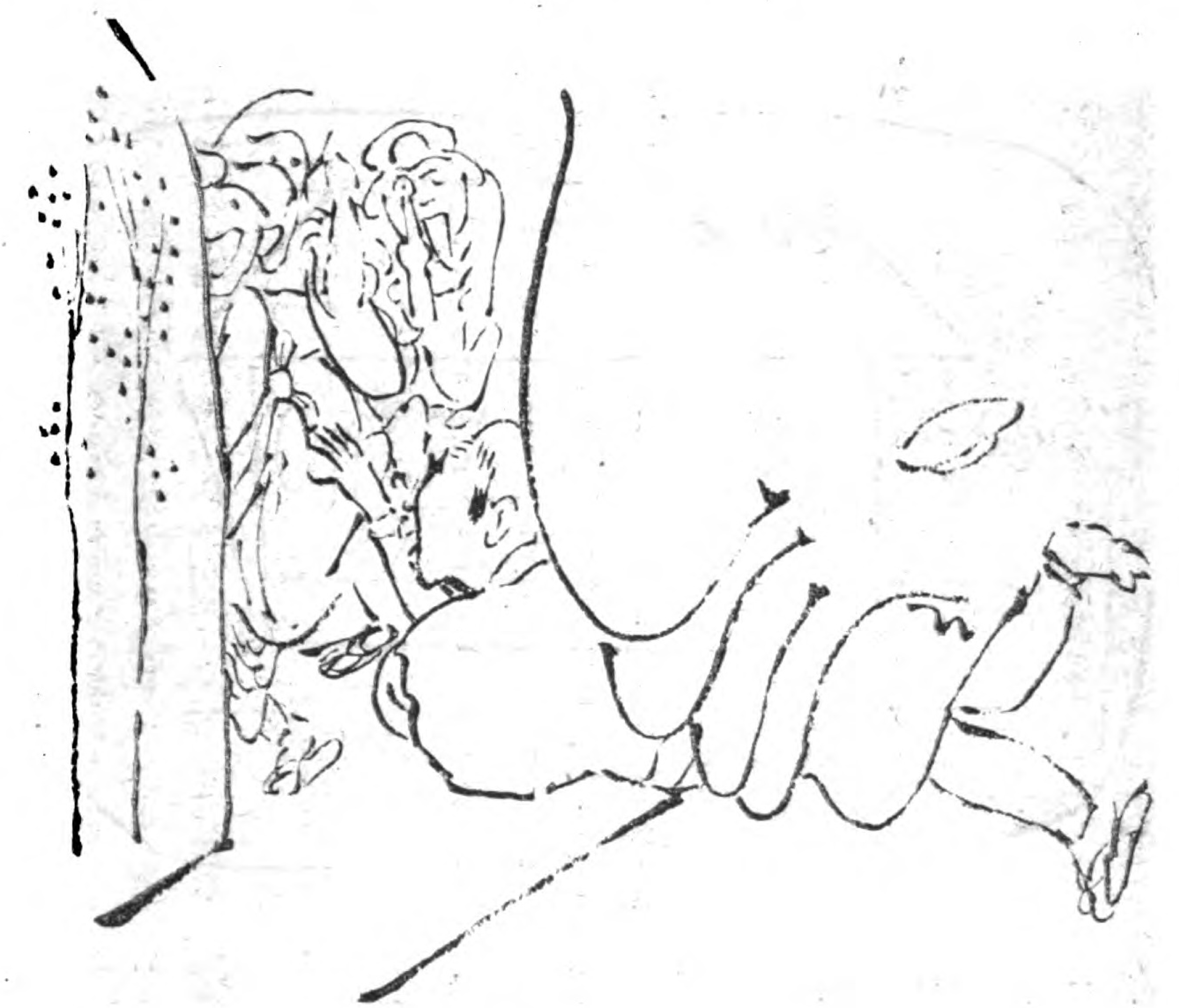
筒袖着物の内懐へ片手を寒そうに入れ片手で南京豆の皮を剝いては掌へ載せ直し口で吸ひ取つてゐる。幕が代る毎に鈍い眼に光を添へきろ〳〵と舞臺を素早く見て取り、

『やあ、花公、今日は醉つてやがる』

とか

『琴公又おん大に叱られたので膨れてやがる』

とか樂屋通を獨り呟いて滿足氣である。この男思はぬ時に女太夫のあるもの丶癖を誇張して安來節上七文字を唱ふ。のろに似合はず美音だ。



滿場やんや〳〵。これに催され場の隅より何者とも知れず以上の美音で上七文字が操返へされる。滿場更にどつと來て喝采するものさへある。すると定連達は一大事のように顧り

「誰だ〳〵」

と椅子の上へ乘り上り唱ひ手を探し求める。彼等の顔には嫉妬と瞋恚の表情が獸の如く出て居る。彼等は半疊を入れる權利を絕對に我黨の手中に收めて置き度いのだ。だから掛聲も他所からするものがあると

『バチ(場違ひ)默れッ』

と一齊に脅喝し所謂バチを撲滅せずには置かぬ。

四十男ののろは幕が引けると幕の裾を潜り舞臺に腹匍ひになり、今し引上げて袖(左右の扉の背景)る蔭に入らうと女弟子共を逸早く摑まらうとする。女弟子共はのろの頭、肩を足蹴にしたり、叩いたり、いゝおもちやにして袖へ避け入る。

のろに捲られた幕の隙を幸、舞臺を覗き込んだ見物は片付けられつゝある大道具の忙しき間にちよこまか守の手を離れて逃げ歩るく附け紐の小兒を見付け連れのものに耳語く

「あれは大統領と旦那の講釋師の間に出來た子だぜ」

と。大統領とは勿論眞打ちの女太夫の事。

たゞ一節の安來節の三味線だけを覺ゑ、それを彈いて生活してゐる安來節の三味線彈きの男を見ると世の中は何とでもして食ゑるものだと思ふ。如何にうまく彈き如何に拙く彈こうとたかゞ節一



節の範圍内である。雜曲の程の知れて居るのに三味線彈きは五つ紋の羽織を着袴を穿いてる。そして尊厳な顔をしてる。聴どころへ来るとつぼへ調子を嵌める、藝の崇高なる雜みを表情へ現し来る。そして彼等の趣味に陶冶された曲の聴どころといへばつぼへ嵌れば嵌るほど卑野に、なつて、おつちよこちよいにお尻を端折る。それを歎き乍ら聴いて居てこつちが氣まり惡がり乍らいつかおつちよこちよいのものゝ持つ遣り切れない魅惑に陥れられ行く。腰がひよこ〳〵浮きそうだ。

太鼓の男はもう一層堪らない。節高な荒仕事をした手に箸のような細い撥を斜に構へる。身體と首を溢れる肉慾に堪へ切れない歪み方の曲線に徹底して動搖させ——それは雄鷄が雌鷄に羽ずりをして挑みかけるあの實感をさへ見る人に催起させる——太鼓の曲叩きをやる。撥の頭を革に置く投げ返し尻を革に置く。入れ違いる。胴を叩く。高く抛つて手を逆にして受取り素早く革に當てる。鼓面の前方鼓面の後方、鼓面の兩側、革に當てた撥頭は多く之をいふ所へ當て、撥をおらして眞々眞ん中を叩かない。小手先でひよぐられる一種のショックを客の心に起させ思はぬ間にてタン〳〵と打込む。時には女太夫の側へにじり寄り惡い脂の浮く猥褻な眼色顔色を實感的にして見せ

オヤ何とか何とか何とかの
オヤ何とか何とか何とかの
オヤ何とか何とかそばよりも

こゝまで節奏的な褻詞をいひ、突序
わたしやとの人のそばがよい

」と安來節の節で唄ひ納める。總てこれ等の仕業を道化師が道化を使つた積りで居る。オヤといふ掛聲の時は勿論半疊黨活躍の秋だ。

馴染の加はつたお蔭で半疊黨から餘興の安來節を唄はせらるべく命令される太鼓や三味線彈きはもう一人前と認められた證據だ。

半疊黨は

『太鼓やれ』と、横柄に注文する。『商賣々々』といふものもある。すると太鼓は中々やらない。田舍ものゝ惡しつこさをもちて、遠慮する樣子を見せる。そのきまり惡がる樣子をげら〳〵笑ひで見て座の白けるほど執拗に遠慮する垢拔けぬさまは何處行つて見ても同じだ。型になつてる。けれども半疊黨も慣れて居る、命令を續ける。ド、三味線彈きが直接行動に出で三味線を女太夫に渡し男から太鼓を無理に奪り取る。太鼓叩きの男は頭を掻き『商賣々々』といひ居すまひを改め唄ひ出す。唄ひ終つて先程の仕返へしじやお禮に自分が三味線を執り半疊黨に三味線彈きにも唄はせよと眼まぜする。半疊黨意氣込んで

『三味線やれ』『三味線屋　商賣々々』

と改めて命令を與へる。

淺墓な道化。田舍ものゝ厚釜しさをもちそれを見透されぬ積りでまんまと都人種を笑はせ終せたとする。呆れた鈍感！それが東京の盛りばで公然行はれるのを見る異樣た興味。

泥鰌掬ひの踊りの場面が加へられてゐる。背景は伯耆大山の見ゆる田舍の景。一人の老婦が型の如き襷へ目笊を掲げ節につれ出る。女が若さと興作である事の持つ魅力を失つたのを自覺し最後の慰めは人氣に嚙り付くにあるのだと決心した恐ろしさを見よ。

彼女は「體」を探してそれは昔男を索引した拔け殼であるとも男の習性をたどつてまだ多少習慣的にかれをこれに索くものは自分の腰よりほか無いと無意識に覺悟した。彼女は腰を破廉恥に搖り動かして見せる。それ許りやつてる。人々の最後の恥を見る醜。憐れなる老婦の齡よ。見物は始めは笑ふが終ひには刺激されない。老婦は誘つて『オーイ』と手を擧げて幕内を呼んだ。そこから若い踊子の一隊が華やかにしなりしやなり出て來た。白い手拭、襷、赤い腰布そして白い太い大根のような手足を幼稚に振り動かして出て來た。一列に見渡せば華やかだが一つ〳〵に目をつけると不きりようもの許りだ。中には不きりような上に生れ付き屈托顔に出來上つてる女も居る。その女の踊るのを見てると『心配』が手拭を冠つて華やかに泥鰌を掬つて居る。世の中はいゝとちだ。きりようのいゝのを必要とする踊り子の中からきりようのいゝのだけ買れて行き、不適任の不きりようものだけがいよ〳〵殘つていつまでも踊つてる。彼の人間は何の役にも立たぬとて包を背負はせ使番に歩るかせられてる。

何故安來節が流行の命脈を保つて居るのだらうか。見物の民衆と舞臺の藝人と一つ座敷にある氣持ちだからだ。土間の民衆は舞臺の藝人を所有してる。女を所有してる。彼等は舞臺に命令する事が出來る。舞臺をおもちやにする事が出來るからだ。舞臺の藝人を道具として自由に自分の藝術を表現さす事が出來るからだ。その渾然とした交りを見て自分はいつでも涙が出そうになる。

安來節よ。俺れのこの位なりアリステツクな描寫に閉口垂れるな。お前が民衆と結びついてる間はお前の安値は生きた安値だ。大威張りだ。

パアトナー

松山省三

「アノ外人がアスクに來そうですから、すぐ始めて下さらない！」

Y夫人からオーケストラが始まるか始まらないに催促されたので、私は多少面喰ひながら、火を點けたばかりの煙草を捨てて立上つた、元來婦人(レディ)の方から男子に申込む事はダンス場の禮儀として、無い事はないのだが、私等の樣な長い仲間(パアトナー)であり親密な間柄では往々にして有る、それに夫人は私を待ちあぐむでたのだ。

私等は數日前からコノスペシャルダンスに約束してたのだが止むを得ぬ用の爲夫人を迎へに行く事が出來なくなつたので、電話で少々おくれるから一足先に行つてくれる樣たのんだのだ然し七時の約束が九時になつたので私も氣が氣でなく用もそこ〳〵に、いつもの車(カー)で此處へ驅けつけたのだ。

三十坪位の此ダンス場は壁に添ふて置かれた椅子もテーブルも會員も、臨時會員で滿員の盛況で、中には立つてる人も二三人居た。

一しきり終つたと見えて、人々は上氣して見えた、三月のまだ寒い風を窓を開けて心地よげに顔にあてゝる令孃たちも居た。

フロアを掃除した跡へボーイを指揮して粉(パウダー)を撒いてたマネージャーの北島は、私を見ると、笑ひながら

「おそい〳〵」

と云つた、ダンス狂の樣に云はれてる、私の居ないのは彼等にも物足りないのだが、今日はY夫人の待つてる事を意味してた。

私は人々に挨拶しながら外套を脱いで、MやK等と雜談しながら人待ち顔の夫人の許へ直進した、

「すみません〳〵大變お待ちでしたらう」

「いゝえ」

とは云つたが、さみしく笑つた、然しホツトした樣にも見えた

間も無く、フォックストロットが始まつた、すると夫人が立上つたのだつた。

成程！二三歩此方へ來かゝつて、私等の踊り出したので、又自分の席へ歸つた外人を見た。

「アノ外人は御存じなのですか」

「いゝえ、始めてなのです、早くから一人で來て相手が無いので、北馬さんにレデイを紹介して呉れつて賴むんですつて、私が一人で居たものだから踊つてあげてくれつて北馬さんから云はれて斷り切れずに踊つたのですが、コリ〳〵致しましたわ、でも拙いんですもの、ツツカケてばかり居て何度蹐まれたか知れないんです、又申込まれたらどう斷らふかと思案してましたの、ほんとうは、あなたの遲いのをおうらみしてたのですわ」

「すみません〳〵今日になつて用事が出來て申譯ありません、モウプログラムは余程進行したのですか」

「いゝえ樂手は今來たばかりなのです、今迄はレコードでやつてましたの、つまらないつて皆さんブツ〳〵云つてらつツしたのです、活動館の都合でおくれてすみませんと、北馬さんが御詫してらつしやいましたが」

「ナンだ、そうですか、道理でオーケストラがいやに落つかないと思つた、ではコレが第一回なのですか」

「え、そうなのよ」

最初と最後は、自分のパアトナァと踊るのが常例なのだ。夫人が急いで私と踊つたのも讀めた。

私達は三度迄アンコールをした、夫人の輕くて巧者なのは敬服に價する、凝性の私もダンスには十分の自信がある、定間に行かず、テンポをはづして踊る面白さは夫人とのみ味へるので、時にはシミーをも交へて踊り廻つた、私達は場中のスターになつた、二三の惡友どもは、私達の其前に踊り行つた時、ヨウ〳〵と云つた風な拍手を送つた、夫人は一寸眉をひそめて私を見上げたが、私が平氣な風して踊り續けたので、大膽になつて全く私のリードにまかせて了つた。

瞑目して顏を胸におし付けてる夫人の髮は輕く私の頰にさわる、やるせ無い二人に見れば見えるだらう。

「ヤット踊つた樣な氣が致しますわ―」

テーブルに歸つて面白かつたと云つた風に夫人は云つた、

「早速プログラムを拵へて置きませう、七番のワルツ、十一番のフオツタストロット、それから八番、九番も私のにして下さい、その外はアスタした人に願ひます、そして空いた番は全部私と云ふ事にして宜いでしやう、又外人が來たら約束濟だと云つてやりませう」

「えゝ何卒か」

二人で番組を揃へてる處へ文士のT君が來た、

「此三番が御願ひ出來ますか」

「え、御願します」

コウ云ふ風に四人ばかり申込が出來た、私も其間を他のパアトナーに求めた、幸に私は相手に不自由しない、あまり他のレデーと踊ると夫人が難ずる樣な目色を見せるので寧ろあまる程だ、

Fのマダムに先敬意を表した、第三回はT君の連の令孃に申込だ。

K子、或外から逆に紹介された美人、十九か二十で、アリトレスと云ふ事だつたが私はどこのステージでもスタリンでも未だ見た事のない人だつた、形は女優になつてたが踊は此の頃やうやく巧くなつた位ひのものだ、モダンガールこうした種類の若い娘さん達をどこのダンス場でもよく見かける、若い美男子のHと來てるのだが、Hが他の令孃と踊つてるので淋しそうに一人居た、アスタしてやつたら彼の女は非常に喜んで私の申し込みに應じた、

「彼の方は評判がよくないんですよ」

「私がテーブルに歸つた時夫人は云つた、Hは親掛りの身で小使にも不自由して、二人で方々遊び廻るには自然K子のエキスペンスになる、或る所に一ケ月いくらと妙な契約をして生活してるのだがその所得では不足勝なので、秘密に別のパトロンを求めてると云ふ變な噂を私も聞かぬではない、Hはそれを知つてるのだかどうだか、戀の爲めに無茶な手段を取つてる彼の女の行爲は無論よくないが同情には價する、非難さるべきはむしろHだと思ふのだ、然し夫人が心よく思はぬらしいので再び踊らなかつた、そして夫人も私とよりほかにはもう踊らなかつた

十二時頃オーケストラは終つた。人々はボツ〳〵歸り始めて私達七人ばかり殘つた。

私も夫人を送るべく車の仕度に取掛らうと立ち上つた時常連のS子爵が美くしい夫人と入口に現れた。

「もう終つたのか少し遲くて殘念だね、諸君會員では無いが次人の普羽屋と一所なのだがかまはないかね」

「普羽屋？珍らしい人が來たね。かまはないぢやありませんかお入れなさい」

北島は普羽屋とは知り合ひなのでむしろいそいそして云た、婦人連も一樣に喜びの色を見せた。オペラパックを持つてトイレツトルームに飛び込んだ人も有つた。私も舞臺以外で普羽屋を見るのは始めてだから好奇心を持つて歸り仕度を中止した、S子爵は引き返したが一所に現れたのは四角な赤ら顏の男

で帽子も外套もだらしなく着くずした和服の醉漢だつた。音羽屋には相違ない彼は日本橋の大雜貨店音羽屋の若主人なのだ。

人々は顏を見合した。期待と餘りの相違に思はず失笑した。恐らく自嘲だつただらう。

「僕は踊れないのだ見物してゝもいゝだらう」

醉漢も場中の淋しいのに失望したらしく見廻した、若い男女が踊り狂ふ歡樂境に仲間入りするといふ好奇心が裏切られたに相違ない。

人々はいよ〳〵歸り仕度をした。私も夫人の方を見た。夫人は新來の子爵夫妻に話し込まれて立ち得なかつた。

「もう少し踊つたら如何です是非踊るところを見せて貰ひ度いね」

醉漢は無遠慮に夫人等のテーブルに着いた。

「然し僕は酒だS君もそうだらう、ボーイ君ウイスキー二ツ、オーソーテン二ツ」

マネジャーの北島は弱つた顏付きしてたがS子の連れなのでやむを得ずボーイに酒を持たした、ウヰスキーと白ブドー酒とは夫人等のテーブルに置かれた、

「さあどうか」

酒に口の無いS子は自分もグラスを取り乍ら口添へをした。S子夫人も杯をとつたのでY夫人もおつき合ひに一口つけたが私が立つて待つてゐるのを見ると靜かに杯を置いて立ち上つた。

「御免遊ばせ」

愛想笑ひし乍ら所狹なのでテーブルと音羽屋の膝との間をすれすれに出やうとした、

「もう歸るのですかまだ早いぢや無いのですか」

こう云ひ乍ら醉眼に見上げたが突然夫人の弱腰をかゝへた、此の不意の無作法に夫人は一たまりも無くよろけて音羽屋の膝の上に倒れかゝつた、人々は、はつと色を變へた無論彼も色をなしたのは夫人である、一言も發せず取りすまして空いた椅子に靜かに行つたが聲を呑んで泣き出した。

「失敬千萬なあやまらせろ」

「あんな奴がダンス場に來るから風儀がどうのこうのと云はれるのだ、撲つちまへ」

男達は口々に義憤を發した。

北島もにがり切つてた、そして夫人のところに行つてあやまつた。

「まことに申譯ありません、私の責任です、謝罪させますから御勘辯願ひます」

そして音羽屋のところに行き開き直つた、

「君は非常に失禮な事をした、あやまり給へ」

「僕が何をしたらう、わびるやうな悪い事をしたかしら」

醉つぱらひは、きよとんとして、

「失禮ぢや無いか君は始めから夫人達に對して禮を失してる、藝者か何かに物言ふやうに口の聞き方をして最後に無禮たちにも夫人に抱き付いたぢや無いかそれが悪い事ぢや無いと云ふのか、謝罪し給へ」

「僕はあやまるやうな悪い事をしたかしら」

同じ事を繰り返すばかりでらちも無い、紹介者のS子爵は之も醉つてゝ、

「困つた〳〵」

と云ふばかりで問題に立ち入らない。獨り子爵夫人が心配して云ひ譯けしてやつてた。

「醉つてらつしやるから」

「醉つてられるのは充分了解してますが、醉つてれば何をしてもよいと云ふ理由にはなりません」

マネージァーの北島は强硬に出てた。――

男達は音羽屋の謝罪しないのでたゝき出しかねぬ形勢になつたが女達、それは夫妻で來た人も交つてたから悲鳴に近い聲で止めてた。

此の騷ぎの中で私は冷靜を保つた、そして靜かに夫人に近寄つて小さい聲で訊いた、

「どうしても我慢出來ませんか」

夫人は何とも返事をして吳れない、で私は決心した、いきなり着たばかりの外套をぬぎ棄てると音羽屋の襟首を掴んだ、人々は冷靜な私の俄に烈しい態度に出たのでびつくりした、

「まゝ君靜かにして吳れ給へ僕が困るからキット詫らすから」

マネジヤーもあわてゝ私を止めにかゝつた。人々は私等を引分けにかゝつた。婦人達は私をなだめた。殊に子爵夫人は私の腕に取すがりながら半泣であやまつた。

私の此けんまくに音羽屋も不承〳〵マネジヤーの云ふ通に詫まつた

それを潮に、

「俺が何を悪い事をしたかね、皆して俺をあやまらしたが、俺には解らぬ」

とくど〳〵云つてるのを子爵夫妻でかゝへる樣にして外に連れ出した、

一度白け渡つた中に私も興奮から落付いて夫人にコートを着せて退出した、

「呆れた無法者でしたね、醉ては居るがあまりわからぬ奴だか

ら腕か足を叩きくじいて濟らふかと思つたのです」
私はカーをドライブしながら夫人を顧みた此私の武勇？には夫人は余程感激したらしかつた、
「お世話をかけてすみませんでした、でも私そんな風に見られるから思つたらほんとに悲しかつたのです」
「ナーにあんな無茶な奴はありませんよ貴女の罪ではありません」
「然しあなたに申譯ない事をしたと思ひますの、」
「と云ふと」
「でも御迷惑がかゝりはしないかと思はれてなりません、ちよいちよい私等の事を噂してるのを御存知ありませんか」
「うすうすは知つてます、ですから先刻もそんな事を云ふ奴等の前で反撥的にあんな踊をしてやつたのでした、云ふ奴等は何とでも云はして置けば宜いぢやありませんか」
「でも」
と云つたがだまつて了つた、しばらくして「わたし此頃宅が面白くなくつて仕方が無いのですどうして宜かわからなくなる事があるのですよ、あゝ毎日ダンス場に行ける人がほんにうらやましくなります」
「…………」
「あゝ、此まゝ何處か遠い處へ行つて了ひたい」
私は夫人のヒステリックな聲音に驚いたが無言で夫人の宅へ車を飛した、
「奥さん今日は少し興奮しましたね、靜に御やすみなさい」
車から助け下ろして送り込んだ時私は云つた。
「あなたは冷い方ね、何んで冷い目をしていらつしやるのでせう」
コウ云ひながら別れの握手をしたが急にコケツトな姿をして出し抜けに○○○○○○○○○○、
無言で夫人の手の甲○○○○○私は一揖して車に飛乘つた、何と云ふ事だらう―、なる様に成れ！と云ふ氣持の外私は頭には理性も何も無くなつた。

女學生讃美論

吉屋信子

帝都、東京の美しさ麗はしさは何處に在るのでせう、銀座に日本橋に丸の内に淺草に……帝劇に三越に丸ビルに日比谷公園に上野の不忍の池に……否々そんな處にあるはづはない、殊に大地震の災禍の痛手の跡まだいえやらぬ市街の都にまだ驚嘆すべき美は見出されるはづがないのですもの、私は今東都の美をお茶の水橋の近く四谷見附の古松の堤のあたりに四季咲き賑はしく咲き匂ふ生命ある麗しい花のあまたに心も恍惚と夢見心地にさせられる――と言つて、もしかんの悪い方に合點がゆかぬといけぬゆゑ、露骨に申し上げれば、お茶の水のあの女學校のほとり、四谷はあの双葉女學校のほとり、勿論此の二校に限りはしない虎の門女學館、府立第一第二第三、三輪田、跡見、山脇、三田、淑徳、千代田、實踐、普連土、佛英和、京華、立教、麹町、英和、頌榮、佐藤、大妻、成女、女子學院、學習院、文化なんとか etc…… etc ……

かくの如き處に美は群がり咲き匂ふて不斷の春を示すと私には思へますの――

時代を離れて人は生き得られない、丁髷からざんぎりに然してオールバックに、男の人のよそをひすらかく變つてゆく時代の流れに、女性のよそをひが變つて行くのは理の當然でございます、平安朝にはその時代の女性美が在つた。元祿時代にはその時代の女性美が生れる、歌麿に依つて描かれた美女の俤、春信の彩どりし女性の姿態、各々皆その時代の反映でなくて何んであらう。明治初年にはその頃の女性美が在る。默阿彌のざん切ものゝ劇中の男女の風俗のいかにグロテスクなものであらうとも、やはりあれはあの時代の正統的美の標準だつたに相違ない。私どもの生れなかつた以前の女性の風俗は、それを一葉全集の中に見ることが出來、紅葉山人の金色夜叉に覗い知ることも出來る、古き其の上の文藝倶樂部、新小說の木版刷の折り込み口繪に、梶田半古畫伯の御筆になる、娘、婦人、令孃、然して女學生の姿は奇しくも珍なるものである。しかも其の當時は

恐らく讀者をして「あゝら、いゝわねえ」とふるひつき度くさせて洛陽の紙價がせり上つたに相違はありますまい。丸髷、高島田、銀杏返し、桃割、結綿、お稚兒髷——から束髮、切前髮、S卷、二百〇三高地髷、ひさし髮、マガレツト、お垂髮——それから近代に及んで耳かくし、斷髮、同じお垂髮でも昔と今とまるで感じがちがふ、第一結處リボンに天地の差がある。千羽鶴の前簪や、つまみ細工の前櫛や、銀の短冊のぶらさがつた花簪なんて、見たくも無い此頃、ライスカレーかオートミルか、は乃至スープを吸ふにも併用出來る樣な、大型にしやくれた、セルロイドのヘヤピンがずらつとならんでゐる此頃である。時代かくして移りゆく、美は移りゆくものなのである。もはや明治初年から中頃へかけての、お高祖頭布に小紋の二枚重ねで、小笹にさらりと夢のやうにつもつた粉雪を半開きの蛇の目で受けて黑塗の足駄で駿河屋の紺の軒簾をくゞる風情は、すでに過去に曾つて在りし女性美である。歷史の一過程である。かゝる美が今見受けられないからと言つて、女性美が退歩したわけでも無ければ廢つたわけでもないのである、古き美は廢れゆくと同時に新しき美は時代の背景の前に登場しつゝあるのである。かくて新しき酒は新しき革袋に滿されて人類の歷史は進展してゆき、博物館の記錄を作りゆくのである。

その時代の女性美の變化はこれでいゝとして、しかもその時代の女性美の中心をなすものが必ず有るに相違ない。譬へば或る時代には櫻かざして舞ひ給ふ大宮人の群の女性が其の時代の美を代表してゐた事もあらう、又は德川時代の或る時期の如き下町の濃艶な娘貢八丈の白木屋の娘や、緋鹿子の振袖あでな八百屋お七の群が當時の女性美を代表し中心的勢力をなした事もあらう。又は仙台樣をぢらし、佐野次郎左衛門を怒らした高尾、八ツ橋の大門全盛時代もあはれ在りつらん。又は維新當時の亂世に在りては憂國の志士を三味線を小栖に生命に代へてかばひ立てた頭腦明折な歌妓の群の淸艶人を魅する美と氣凛が一代を壓して光つた事もあらう、然らば現代は如何なる段階の女性が女性美の中軸を爲すであらうか？私はいさゝかもたゆたわず言下に答へる。

「それは女學生でございますわ」と——

實に明治の後期より大正の今日にかけて、もはや動かす可らざる時代的女性美の中心は女學生に依つて創造され建築されたものである。

故にいくら永非荷風先生の今よりお開けに相成らなかつた以前の模倣をして、末輩の後輩の吹けば飛ぶ樣なヘナチョコヘッポコデコボコボロクソ文士がいかに見得を切つて、やれお高祖

頭巾がよろしいの洗髮に黄楊の横櫛が戀しいの美は廢れるの女はつまらなくなるのと、うす汚ない寢言を活字にして稿料を取つたところで、天下の趨勢は如何ともなしがたい自然の原則であるぞよ。

それはお高祖頭巾も結構、黄楊の横櫛も嬉しい、結綿の鹿の子もいゝこと、京の祇園の舞妓の姿も、宗右衛門町の灯ともし頃も、今は儚なくも歌舞伎の舞台で見るに止る仲の町に八文字踏み渡る花魁も、すべては美しいものであるに露いさゝか異議をな差しはさもうとする野暮天のお茶ピイではないけれど、けれでもです。時代の變遷を又如何に……そのせんやとか申しますわ。然しあくまでも移りゆく此の時代に反し女性美を追求憧憬して止まぬ御仁はまづ自ら時代の風俗に叛逆遊してはいかゞ。何御遠慮には及びません、月代靑々としたお丁髷に上下姿であらうとも、前髮立てゝ振袖のお小姓姿であらうとも　どうぞ御隨意に、まづ自ら然る後にそれに調和した女性の姿態を望んでたんとお小言を仰しやひましな。さうまでなれば御不足かは存じませんが私でよかつたらお相手役を一世二代に買つて出ませうに。文金高島田か何かで三寸もねきを出して、「わしや、あの殿御にこがれたいわいなあ一とねえ——まづ女性の現代の耳かくしや　斷髮をかれこれ御意遊す前に鍋の子たわしをちよいとのせた恰好の現代の男の方のお頭を　丁髷に還元々々。

然るが故にですわ、何んと申しても現代の帝都の美は女性、女學生に在りでございます、帝都の女性美のパーセント八十は女學生、或は女學生的の美です、殘りのパーセント二十にその他の女性の美がございます、貴夫人、姫君、お孃さん、奧樣、未亡人、タイピスト、女優、ウエトレス、その外いろ〳〵、しかもこれらは皆一度女學生を通過して出來上つた美ですから、これも元をたゞせば一つ穴の女學生的美の延長であり、成長であるに過ぎませんわ。それでまつたくの異分子と申せば、それ〳〵新橋金春湯の黄昏だの、赤坂邊の夕月のぼる頃だの、少しくだつて富士見町白山あたりの逢魔が時、さては櫻痴居士の御名詩を刻した御門内のほとり……さてはそれに類した風俗傳習に生きる女性美も、あはれ聖代のあまりに强き烈日のもと、夕べやどせる露の白玉もゆらがば消えん儚なさに、紫仄な桔梗よ女郎花よ、爛れて散りゆかん牡丹のゆく春のけうとさ、世はなべて女學生のチューリップ、ヒヤシンス、鈴蘭に白百合に薔薇の匂ひも濃き春と移りゆくこそあはれなり。と言つて私達は女學生の世に生れ女學生的にして生きてゆくよりせん術は與へられないのである。さらば世人よ、御身等は女學生の美を認識しそのけがれ無き美を讃へ給へかし。古き盃に盛る可きもはや古典と銘打つ

灘の名酒をお土藏にして遊離觀念に醉はんとする時、これを錦繪に古き物語に鏡花先生の御作に歌舞伎に求めよ、然して新しきびいどろのカップに色鮮かなる術衞酒をシャンデリヤの光に透して、現代の女學生的美を讃え崇めんかな、いかに人々。

試みに思ふても御覽遊せ——此の大帝都東京から、女學生、及び女學生的女性を全く除し去つたとしたならば、まあどうでせうその跡は一望荒涼たる見るも無殘な廢墟と化すことは彼の千九百二十三年度の大地震以上ですわ、まあ、考へたつて身ぶるひと寒氣がなさらないこと……朝な夕なのあの市電、省線の混雜のプラットホームに、はた停留所に、地に降らされし崇めの天使の如き、地に在りて輝く不斷の灯、しぼむを知らぬ生命ある薔薇、地を飾る星の群にも似て、矢がすりに銘仙に友禪の袂に紫の校服に袴に海老茶に紅に打葉色にバンドに銀の校章に靴下の絹に木綿に靴の踵の高いのに曲つたのに帽子にリボンにピンに鞄に包みにお辨當に詩集に切り花の包みにチョコレートに上級、下級、同級の憧れの君にさゝぐるひそやかなピンクの封筒にインキ壺におしゃべりにお笑ひにおすましにお氣取にセンチメンタルに茶目子にめそ子にひね子さんに——おゝ美しいあでやかな小さく幼なく若い麗人佳人の群れよ！おゝ御身等こそ未來の日本を創り未來の日本を生む人類の使徒、罪無きエンゼル！!!!

麗しくも聖い象牙の塔にも譬へまほしい女學校の校舍に諸先生の御教訓よろしき(?)を得て教養を身につけ理智に目覺め個性を發見し男性を尊敬しないでもいゝ理由を知り、同性を戀ひ憧がれ聖らかに純潔なる精神を培養し女性の境地を擴め開拓し、曾つて祖先のあやまち失なひし女性の自由と獨立とを雄々しくも取り戻さんとする光輝ある使命を帶びて開きゆく春を約束されし花の美しさに生きる女學生諸孃こそは確に童貞にして御母なりし處女マリアの申し子でゐらつしゃる。

おゝ、私はどの樣に崇めと讃美の言葉を盡してもまだ足らぬ心地である。否かく言ふ私自身も久遠の女性にはとても生れつき及ばぬことながら、せめては久遠の女學生にだけはなり度いものと、目下修業中、ずゐぶんとうのたつた女學生で恐縮致して居ますけれど。改造より此の度帝都百鬼夜行の珍題目のもとに何か書けとの御注文を受け、私には女學生を受け持てと仰しやる、へーへえ、成程東都の此頃は甚だぶつさう千萬、銀座に追はぎが出て女のオペラバックをうばふといふに至つては全く百鬼夜行の有樣でございませうが、然し女學生諸孃だけは、かゝる世も末の惡道路と追はぎ流行の東京にありて唯一つ存する聖なるもの美なるものゝ力（パワア）そのものであると確く信じて居りますゆゑ、どうして素破ぬきとか惡口なんか無いからかけやアし

ない女學生こそは百鬼の中にまぢはる、これやこれひともとの美しい薔薇になぞらへて敢て春早き少女のいのちの女學生美を賞め讃える所以でございます、何、女學生をほめるなんて不良少年か田舎者だと仰しやるのなら大まちがひ、私これでも江戸ッ子の血をひいた末孫ですわ、先祖の筋を聞たくば聞かせてあげませう、音にも名高き大江戸の幡隨院の長兵衞一派を向ふに廻した當時江戸の旗本の不良青年の組織した大小の神祇組、の一隊古屋組一名白柄組とは私の數代前のお祖父さんのことよ、しさいありて一族御維新後中國に北國に流轉の憂目は見たれど、も、持つて生れた旗本の流れの血をひく家の娘の私も時代のお陰で女學生になり、そして女の小説家になつて、そして女學生を讃えるからには、誰が何んと言つても後へはひけぬ、帝都の美は女學生に在り、此の一言は金鐵。百鬼夜行がかけないのは、かんにんして下さい。その代り衆生濟度の御利益あらたかな女菩薩の利生記を百鬼を退治せんがため敢てお州へ下されば、ほんとうに私うれしいわ。

（十四年、三月八日夜）

童馬山房漫筆

齋藤茂吉

○

かへりちゆう。鷗外先生の「大鹽平八郎」のなかに、平八郎の陰謀を、味方のものが、ませた少年を手先に使つて、奉行所に密告するありさまが書いてあつた。そして、このやうな『返忠』の行爲は、たとひ人間の感情の上ではそれを蔑んでも、行政の上ではそれを褒むべき行爲として奬勵したものであると註してあつたとおもふ。僕は當時、『返忠』といふ語は、德川行政が生み出したものであらうと、漫然とおもつてゐた。ところが、平家物語、俱利伽羅落のくだりに、『又越前の國、燧が城にて、返忠したりける平泉寺の長吏齋明威儀師も囚はれて出で來る』といふのがあるから、延長年間あたりには、もう通り詞であつたといふことがわかる。座右に參考書をもつて居れば、いろいろ用語例をひろふことも出來よう。『返忠』は弱者の行爲であつて、そこに二つの強者の存在を豫想してゐる

チエツコスラワキヤの國は、大戰の終はらぬうちに聯合國側に味方した。『返忠』をしたのである。はじめは、墺太利軍の一部として東部戰線で戰つて、その俘虜はどんどん西比利亞に送られた。しかし返忠してみれば、敵の俘虜とし

て、これを看做なさくもよい。そこで本國に還ることを許した。ある時、チエッコスラワキアの俘虜を滿載した船が、長崎の港に入つて來たことがあつた。長崎の街を見て歩いてゐる彼等の服裝は千差萬別であつた。ある一群は、さかんに食物を買ひこんで重さうな嚢をになひながら街を歩いてゐた。ある群は大浦の海岸どほりで、英語を使つて魯西亞の紙幣を賣つてゐた。それから、鳥居の下に一かたまりがゐたり、諏訪神社の神殿の前に一かたまりがゐたりした。彼等は小泉八雲によつて傳へられた日本を見てゐた。甘露夢のやうな長崎の神殿を見てゐたと僕は通りすがりに思つたことがある。けれども彼等の大部分は、あの長崎の山の中腹にあるしづかな墓地に入り込んで、何かから疲れたやうな面持で、ひそひそと語りあひながら休んでゐた。墓碣石塔のあひだに、さういふひそかな休をしてゐる俘虜の群は幾組も幾組もあつた。僕はなぜ彼等は『むすめ』の街にあこがれないかなどと、淺薄にも考へたことを今想起する。その船はとうとう長崎を出帆した。俘虜の船が出帆してから、長崎の山上の石のかげで一人の俘虜が死んでゐた。死んでからもう十五六日も經つたのであらうか。俘虜の身體は腐つてゐた。長崎警察署の方では、いろいろの狀態から考へて、恐らく病死であらうといふので、さう新聞に出た。けれども僕は、ひよつとしたら他殺ではあるまいかといふやうな氣がして、ひどく感傷的になつたことがある。新聞には屍の寫眞も載つてゐたやうに思ふが、或は間違つてゐるやうな氣もする。すでに記憶はおぼろになつた。

それから一年ばかり經つて僕は洋行をした。まだ椋鳥のやうにぼんやりしてゐるころである。ひとり朝早く伯林を立つて維也納に向つた。その汽車はチエッコスラワキヤ經由のものであつた。汽車が墺太利の國境に近づいたとき、そこで二度目の荷の檢査があつた。すると一人の役人が來て、『君は日本人ですか。支那人ですか』ときいた。そこで僕は、『私は日本人です』と答へた。停車場の文字は殆ど盡く獨逸語を廢してチエッコ語にしてあるのに、役人は獨逸語を使

つてゐる。そこで僕も獨逸語で答へた。すると、直ちに『よしよし』と云つて何に札を張つてくれたから、僕はそのまゝ車室に歸つた。しかし僕の側に乘つてゐた西洋人はなかなか歸つて來ない。それから僕は二たび檢査するところに出て見ると、西洋人どもは荷物できびしくいぢめられてゐた。けれどもそのうち汽車は出發して維也納に着いた。維也納に着いてから僕はそのことを先輩に話すと、いろいろの品物を國外に持出すからだといふことであつた。これは實際その通りであつた。しかし一二年間西洋にゐるうちに、あれはやはり、長崎の俘虜のことをも聯想すべきである。『返忠』のことをも聯想すべきであることがわかつた。

チエツコの首府プラーグには、獨逸語系統の古い大學がある。しかし國の主張としてはチエツコ語系統の大學を出來るだけ補けて、獨逸語系統の大學を衰頽させようとしてゐることは、實にはつきりしてゐる。そこで立派な歷史を以つてゐる獨逸語系統の大學でも、つまりはチエツコ語系統の大學になるのである。『返忠』の結果は、國の獨立となつて、獨逸、墺太利は、これを敵と看るから、その爭ひの大學にも及ぶものは自然の行きかたである。

○

僕が維也納の教室で勉強してゐたときである。厳しい冬に入りかけて、人間の吐く息がもう白い霧氷になつて髭につく、西暦一九二二年の十一月すゑである。いつものやうに教室に行きかけると、恰も解剖學教室の前に數百の學生が固まつてゐた。僕はそのなかに入つて見ると、一隅に一人の學生が鋭いこゑで演說をしてゐる。それを聞くと、何か猶太人のことを論じてゐる。しかし僕にはその眞相がよく分らなかつた。たちまち一部の學生はなだれを打つて叫んで走つた。さうして一人の學生が悲鳴をあげて逃げた。これは斯うである。一人の猶太人の學生が何も知らずに登校しようと

するとヽ忽ち反猶太人の學生のために途に要撃せられて殴ぐられたのであつた。その時はもう維也納の各分科の大學生全體が反猶太人運動をおこして、同盟缺席を遂行してゐたのである。

この運動は、チエッコスラワキヤの首府プラーグの大學にはじまつて、維也納の大學に波及したのであるといふことは僕の興味を牽いた。これより先き、プラーグの大學では、猶太人が總長に任命された。すると、いつのまにか、教授も學生もその數に於て非猶太人を凌駕しようとするいきほひを示した。そこで"numerus clausus"の實行を叫んで、それの中味を塗るに、汎猶太國土主義の防止を以てした。彼等は、ゲルマン精神の學問からは猶太精神を一掃せねばならぬと號した。かうなると議論は冷靜には行かない。Lausbuben, Trottel などの語がしばしば彼等の口から出た。この運動は四五日つゞいて、大統領の領會を得て止んだと、新聞紙が報じたやうにおもふ。

學生らの如是運動は、猶太人に對する蔑視から來てゐること論を待たない。けれども其の蔑視は、僕らが遠く離れた東海の國で、人種哲學を愼にして、感ずるやうな、さういふなまぬるい蔑視ではないのである。さうして彼等の痛烈な運動は、相當の威力を示したと謂つても、新聞紙からは毎日、やはらかに冷笑されてゐた。なぜかといふに、十數種ある維也納の新聞紙の二つを除いては、盡く猶太系統の新聞紙であつたからである。僕は當時、毎日教室の入口で學生から誰何された。けれどもいつも許されて教室で勉強してゐた。

大戰がいまだ終らぬに、チエッコスラワキヤは墺太利から離れて獨立した。そして、返忠（かへりちゆう）をしたチエッコの首府プラーグの大學では獨逸語系統の大學を衰へさせようとしてゐるのに、このたびは、大學擧つて、さうして一たび敵視した國の維也納の大學と相呼應して、猶太人に當つた。僕はぼんやりして、興味を以て看てゐたが、これはもはや人種問題ばかりでは解けまい。日耳曼自身に纏る生活に根ざしてゐると看るがいゝ。學生らが當時さかんに使つた beschimpfen

といふ評は、もはや字義どほりのものではない。ひじひじと身體髮膚に迫つて來る底のものであつたのであると看るがいゝ。

○

〝Hakenkreuz〟は『鉤十字』の義である。僕らから見れば、萬字卍である。おもに勞働者の團體で、基督教徒から成るこの團體は、鉤十字の旗を立てて、街を練り歩いてゐた。これは猶太人に對して示威運動をしてゐたのである。ある時僕は、この團體が殺氣だつて來て、街頭の猶太人を捉へ、電車から引ずりおろして、なぐつたのを見たことがある。群衆から追ひすがられた一人は、僕は猶太人ぢやありません。猶太人ぢやありませんといつて、公園の植込みのなかに逃げた。そのとき群衆のひとりは、『ゼノアだ。ゼノアだ』といつた。ゼノアは伊太利の都市である。さういふことが、今僕のおもひに、おもかげに立つて來てゐる。

むかし、猶太人が國内にながれて來た時その國びとは、猶太人を目して賤奴となした。然るに、猶太人は隱忍して、金錢の世界に頭角を出して來た。國人は驚いたけれども、これは『愚物の復讐』だと謂つてゐた。維也納人がいへば Rache des trottels である。けれども今では、それでは濟まされなくなつて來た。國人が口ぐせに云つてゐた賤奴、愚物のうちから平等主義者、自由主義者、非帝王主義者が出た。これは、はつきりしてゐる道理である。然るに、その賤奴、愚者は、今は長者になり果てた。そこで、鉤十字の團體の運動の如きが起つた。この運りあはせは、ライゲンの舞踏の如くであらう。僕は印度洋を通つてゐたとき、汗を出しながら思つた。日本國の水平社運動のごときはあれは兄弟内にせめぐのである。西洋の場合とは根本が違ふ。かう思つた。

○

青山腦病院が燒けたとき、六十幾羽飼つてあつた鷄が、大部分猛火のなかで死んだ。燒け殘つた小さい家に僕の家族のものが固つてその日その日をおくるやうになつたとき、そのなかに生き殘つた七羽の鷄もゐた。鷄は晝のうちは日光のなかで遊んでゐる。夜になると煉瓦塀と家の間の狹いところに、とたん板で消繖を作つてくれて、鷄はそこでねむつたところが、僕らが寂しく夕餉をしてしまつて、火事のことなどを話合つてゐると、いまだ八時にもならぬのに、牡鷄がもうけたたましく時をつくつた。一つが啼けば三つともこゑを張りあげて啼いた。

「あらまた啼きます。火事のあつたまへにも、背の口に幾晩も幾晩も啼いたのでございますよ。あらまた啼く。いやな牡鷄だこと」

三十八年ばかりも僕のうちで働いて、おのづから年の老いた媼がこんなことを云つた。

「縁起がわるいから、殺してたべてしまへ」

數十年の苦業のあとが、一夜にして灰燼に歸してしまつたとき、物に動ぜない心の張を持つてゐる年老いた主人も、その犧牲の餘り大きいので、このごろひどく神經を疲らせてゐた。そこでこんなことをいひ放つたのであつた。そのとき、十になる童子がいそいで窓ぎはに行つて、

「ぢちをんどり、啼くんぢやない。おまへ殺されるよ」

などといつた。けれども鷄は、啼くべきところまでは啼いた。僕らは、迷信の果敢ないものであること、鷄鳴と火事との間に何等科學的因果律の存在せぬこと、さういふことを話合つて、强ひて心を靜めながら、床のなかにもぐり込む

のであつた。ところが鷄は一夜のうちに幾たびも幾たびも啼いた。僕もねむり難い夜が幾晩もつづいた。眞夜中に目をあいて闇黑を見つめてゐたりすると、たちまち牡鷄が啼いた。三つの牡鷄が競ひ啼いてしばらくして沈默にかへる。小一時間經て二たび啼く。さういふこゑを三たびも聞いて、それから僕は漸くうつらうつらするのであつた。そんなことをしてゐるうち、ある夜、犬が鷄を襲つて牝鳥二つを食つた。女中が慌しく戸をあけた時には、もう二つの牝鷄はゐなくなつてゐた。翌日、女中は柵を作つた。然るにその夜犬はその柵を破つて、牝鷄一つを食つた。それから、ある雨のふる夕方に、たつた一羽殘つてゐた牝鷄が犬に襲はれて、食はれるところを見つけて、僕らがその牝鷄をむいて、うどんを入れて食べた。

いまは、牡鷄が三羽ばかりになつた。それが晝のうちは三つかたまつて遊んでゐる。ときに爭ふことがあつても、つまりは相寄つて歩いてゐる。さうして夜になると、やはり幾たびも互に競つて啼いた。

僕は床のなかで、こんなこんなことを思つたりした。『神經過敏』の證候は、禽獸にもあらはるべきものであらう。さうして、猛炎に咽んだ鷄どもの精神上の痛手は、意識乃至不意識、清朗乃至薄明の心のさまにまたがつて、"Komplex"の說は、いつたい奈何に片付けられるべきものであらうか。

○

一月の七日の夜に、僕は燒け殘りの寂しい家に歸つて來た。そこに黃褐色の大きい、まるまると肥つた猫がゐた『おほきな猫だな』こんなことを僕がいふと、『も一つ白がゐたのでございます。兄弟でございました。それは火事のあとで、もう歸つてまゐりません。』老いた婢はかう答へた。廿四五年も僕のところで働いてくれた婢は、その間に、幾つも

猫を養つて、幾つも猫を葬つた。白と黃の兄弟猫もその姉が養つて、わが子のやうにしてゐたのであつた。ところが白いのは火事後ゆくへが分からなくなり、黃いろいのだけが殘つたのであつた。その猫は牡で、鳴いたり咽を鳴らしたりすることも稀であつたが、それでもたまたま姉の足に頭をすりつけて甘えるのを僕は見たことがある。燒け殘りの小さな家は、夜分は戸じまりをするので、猫は火事前のやうに、氣儘に外で遊び、氣儘に姉の布團のうへにねむるといふことが出來ない。そこで猫は宵の口に歸宅しなければ、夜ぢゆう寒空の下に居らねばならなかつた。そしてゐるうちに、だんだん毛なみが惡くなつて來た。ある時は餘所の牡猫と戰つて、耳に傷を負つて歸つて來たこともあつた。ある時は、眼がたゞれて何だか小さくなつて見えるやうなこともあつた。食べものも今までのやうに、旨い餘りものなどは全くなかつた。姉は、うどんの殘物とか、飯に鰹節を少しかけたのとか、そんなものを食べさせてゐた。それでも猫は多く家に歸つた。火鉢のそばにゐたり、火事見舞にもらつた客用の座布團のうへにゐたり、しちりんに頭をおしつけるやうにしてゐたり、ちやぶ臺のそばに來て人の飯くふのを見てゐたりした。稀には僕の膝のうへに乘つて來たこともあつた。そのうち二月に入つて、雪も二三度降つた。猫は元氣衰へて、時にはしきりに咳をした。ある午前に、僕は日向に猫が目をつぶつてすわつてゐるのを見た。ところがその日の夕方に、もう日も落ちて水たまりの水も氷りかけてゐるのに、猫は家に入らうともせずに、やはり目をつぶつてすわつてゐた。口からは涎を垂らしてゐ、咳をするので、僕は直ぐ猫は病氣だと思うた。僕は蜜柑箱の燒け殘りを拾つて來て、その底に藁を敷いてやつた。その夜はすでに猫は鰹節かけた飯を食ふことを欲しなかつた。それでもしちりんに火をおこすと、猫は箱をぬけ出で、しちりんに頭をおしつけるやうしてすわつた。その次の日に姉は猫を日向に出してやつた。猫はそのまゝ目を閉ぢて日向に座つてゐたが、姉も折々燒跡のとり片付に忙しいので、猫のことなどには氣が付かずにゐた。夜になつて寒い雨が降つた。朝飯のとき僕は猫のこと

をたづねたが、ゆうべは猫は家に歸らなかつた。その次の日も次の日も猫はつひに歸らなかつた。

どうも猫は、あの夜に人目にかゝらぬところに行つて死んだ。さう思つて僕はいろいろ燒殘りの場所などを見たが、猫はつひに見つからなかつた。西洋に、"Strohtod" といふ語がある。僕はこれを『藁往生』と謂つてゐたが、いつぞや、書物にこんなことが書いてあつた。いつたい、耶蘇きりすとが十字架にかからずに、藁往生をしたら、今ごろの世界のありさまはどうなつてゐただらうといふのであつた。藁往生は藁布團のうへで死ぬの義である。猫は藁往生を强ひてやつても、やはり何處かに行つて死ぬ。僕のかかる聯想は低級だけれども、ときにはかかる聯想も起るものである。婢は云つた。『あゝ。あゝ。猫までこの難儀を見て死んだ』かう云つた。かかる感慨も實は低級である。けれども時あつて、かかる感慨も人間の口より出づるのであつた。

○

ミユンヘンの町に大雪が降つて、その次日は、からりと天氣になつたから、太陽は美しい光を放射した。その日の晝過ぎに僕は爲事用の買物をするために教室を出て行くと、石炭をつんだ小さい荷車が止まつてゐた。先きに立つて荷車を挽いたのは嫗で、こちら向いて休んでゐる。あと押をして行つたのは若い娘で、今しやがんで石炭のこぼれを拾つてゐる。ひろひ終つて面をあげたこの娘は、かがやくやうなをんなであつた。僕はたちまち物に憑かれたやうになつて、荷車と竝行して歩いた。娘は、まぼしさうな目付をしてこつちを見た。その一瞬に、僕の滿身の紅血が、順流逆流、半順半逆流して、僕は猛烈に戀愛をした。

けれども、あはれあはれ、話はそれでおしまひである。なぜかといふに、僕は爲事用の針を買ひに店の戸をくぐつた

からである。

その夜僕は、Fürstenhof（フユルステンホーフ）といふ珈琲店の隅に行つて、しきりにその娘のことを思つてゐた。娘は日本將校の外套に附いてゐる頭巾のやうな、あゝいふ格好の黑い巾で、れいすに似た縁（へり）のあるのを冠（かぶ）つてゐた。それにひもがついてゐて頤のところで結んでゐる。身には粗末な黑い服を纏うてゐた。そして媼は娘と全く同じ服裝を着てゐた。僕は珈琲店の女給仕を呼んで、娘の素性のやうなことをたづねた。旨く言葉が話せなくなつて來ると、鉛筆でその娘の服裝を繪にかいたりした。そして、媼も娘も修道院にゐるものであらうといふことが分つた。

あの端麗で、豐かで、何とも彼とも云ひやうのない、かがやくやうな娘を、僕は少しく具象的に書き記したいと思つて、床の中でいろいろ工夫したけれども、それは實にむづかしいことであつた。とどのつまり、ヴエニスの美術院（アカデミヤ）にある、ジヨヴアンニ・ベルリニの、彼の俯目（ふしめ）がちな、端嚴な童貞女まりあを以て、辛うじて僕は我慢をした。

そののち半年で僕は獨逸を去つた。そののちまた半年で佛蘭西のマルセーユから船に乘つた。船は東海の國へ向つていそいだ。僕は香港の茶館で、ジヨヴアンニ・ベルリニの美しい女ももう無益だといつて、支那娘のひくい鼻をきゆうつとつまんでやつた。

○

大戰中、墺太利の大學の學生の數は、猶太人が九二%で、殘りの八%が墺太利人であつた。と或る人は勘定してゐたこれは猶太人でない學生は、どしどし召集されたからである。しかしそればかりではない。大戰中ずいぶん多く、猶太人の學生が維也納の大學にながれこんで來たのは事實である。そこで西暦一九一八年に、生き殘つた學生が祖國の大學に歸

つた時には、もう滿足に這入ることが出來なかつたさうである。かういふことを一人の墺太利の學生が僕の友人に話したことがあつた。けれども僕はさういふことには餘り感激しない。ただその時にふと其の學生の話した事が僕の興味を引いた。それはかうである。その學生が魯西亞の戰線で戰つてゐたときに、破裂せずにゐた爆彈を一つ二つ拾つたことがあつた。そのなかの紙を見ると日本文字が書かれてゐたといふのである。僕の友人は、微笑してかうべを振つた。そして、日本は "bushido" の國である。その文字は蒙古あたりの文字であつただらう。かう云つたのである。

○

棄つる神あれば助くる神あり。助くる人あればいぢめる人あり。僕を棄つる神はこれまでも滅びた。僕をいぢめるものは、きびしい罰をかうむる。このはつきりした運びを、娑婆の人々はまだ好く知らぬと見える。

○

オツトウ・ワイニンゲルも、シグモンド・フロイドもアルツール・シニツツレルも、維也納の空氣を吸つてゐたといふことは面白いことだ。あゝいふ空氣を吸つて居れば、女人を拔きにしては生きられまい。『いつたい女てやつは、共泣をしやがるものだ。共笑をしやがるやうに』などと云ふのも、それから、『それ女人は、常につゆさびしからず。ゆゑは、女人はさびしさの哀をも、恐をも知らさればなり』などといつてゐるのも、女人を當にせなければ云へない言葉である。フロイドの Libido の説は、つひにレオナルド・ダ・ウインチの女の『微笑』にまで及んだ。僕が、シニツツレルの『輪舞』を見たとき、伯林に於てよりも、維也納に於てが、ときに胸をぞくぞくさせた。

これは『家系』でなくて何であるか。

○

僕は今、伯林にゐる前田茂三郎君のことを思つてゐる。僕が、伯林、漢堡間の汽車のなかで泥棒にあつて、どきまぎしてゐたとき、君は伯林第一流のをどり場に僕を連れていつて、シャンパンなどを飲ませたことを想起する。その後、三年の留學の間、一日として君との交渉の斷えたことがない。僕が今、干瓢の味噌汁を吸つて、痛切に君を思ふのは、單に共に藏王山の麓に生れたといふゆゑのみではあるまい。君が伯林から僕の本箱を送つてくれたのは燒けた。が、半ば燒けた本の間に、上海新聞の一片などが殘つてゐた。これは僕が上海に上陸したとき買つたものであらう。ひろひあげて讀むともなく讀むと、戀愛革命論などといふのがあつて、『所以中國今日社會的一切禮教制度、依舊是陳腐不堪的數千年前中國社會一切的禮教制度、二十世紀的社會、還適用麼?』などとある。それから、『人類的結合、建築在愛的基礎上、沒有愛、就沒有結合、我們現在試睜眼看中國今日的社會、社會現在男女結合的情形怎樣?』などとある。僕は今、如是の小文章にも心を牽かれて居る。日本國の君子は、如是の小紙片は尻ふき紙にも役立たしめないであらうに。

僕は今、伯林の前田茂三郎君のことを思つてゐる。蘇峰先生の尊い事業の一つである、青山會館の開館記念に、軍人美談『大和魂』全六卷といふのを映した。ゆうべ女中がそれを見に行つて、骨折つてあらましを僕に話して呉れた。これは山形の歩兵第卅二聯隊を背景にしたものである。若しこの映畫が、伯林のZoo(ツオー)あたりの活動寫眞館で映されるなら、君の側にすわつてゐる、明色のうつくしい娘が、しばしば君をぬすみ見するであらう。僕は今、伯林にゐる前田茂三郎君のことをおもふ所以である。

短文二十六

武者小路實篤

一　迷信

僕の處に第二の女の子が生れた。この子は僕の四十一の時の子だ。それでつまり四十二の二つ子と云はれる子で、四十二の二つ子は親に心配をかけると云はれてゐて、一度すてゝ、ひろつてくるのがいゝのださうだ。元より僕はその迷信を信じない。すてもしなければひろいもしない。しかしかう云ふ迷信はよくないと思ふ。

誰だつて親に心配かけない子なんてあるわけはない。僕なんか四十二の二の子だつたら早速、矢張り四十二の二つ子だから親に心配をかけるのだと思はれるだらうと思ふ。處が幸ひ母の三十三の時の子で、母の三十三の時に出來た子は母を養ふと云はれてゐるのださうだ。其處で僕の母から母の小遣ひ金をまき上げたことはいくらもあるが、母には一文だつて金をあげたことはない。母が兄に養はれて滿足してゐて、僕が小遣ひを上げませうかなんて一ぺんや二へん云つたこともあるが、いつも母がいらないと云ふので自分でつかうか、他へつかつてしまふ。少くも凡そ母を養はない子だが、母は僕が自分を養つてくれる子だと思ひこんでゐる。時々隨分心配かけるがその方は忘れてしまうらしい。

よく何にどしの人はどう云ふ性質をもち、どう云ふ運をもつと云はれてゐる。ひのえ午なんかの女はよく嫌はれるさ

うだが、誰だつて向ふ意氣の弱い人間なんてあるものではない。人間にはいろ〳〵の性質があり、運命があるのだから色眼鏡で見ればそれに丁度あてはまるやうな性質はいくらでも認めることが出來る。其處で矢張り何にどしの人だけのことはあると云ふことになる。

よく新聞で今日は一白の人は運がいゝとか七赤の人はわるいとか、出てゐる。一日の内にでも運のいゝこと許りでもなく、わるいこと許りでもない。わるいと思つて見れば惡く見へ、いゝと思へばよくも見へる。

禍も福に轉じた時見れば運がいゝと見へ、福も禍に轉じた時見れば運がわるいと見へる。見やうでどうでも見へる處を利用して迷信なんかははびこりやすいものである。

親に心配かける子は皆、四十二の二つ子で母を養ふ子は皆三十三の時の子と云ふわけはない。たゞ迷信に適當した場合のみをひろい出し、矢張り本當だと思ふ人があれば、お目出たいと云ふより仕方がない。

二　役人

僕は役人の人には滅多にお目にかゝる必要のない人間だが、どうかした拍子にお目にかゝると、いつも個人としては決して惡い人とは思はないが、又特別に意氣地なしにつくられた人間とも思はないが、實につまらないことに許り頭をつかつてゐるのにおどろく。むしろ同情したい位いだ。

青空の下に生てゐる人間と云ふ氣がしない。ごみすて場に生てゐる人間と云ふ氣がする。あれでは人間が馬鹿になり、いぢけるより仕方がないと思ふ。

三　華族と自分

僕は公卿華族の次男坊に生れた。本當は八男坊だが、上が六人死んだ。自分は華族だと云ふことを恥てもゐないが、少しも名譽なことゝは思つてゐない。處が宮内省では僕が華族なのに持てあましてゐると云ふ噂を聞いた。そして僕が平民になりたがらないのを不思議に思つてゐるやうな口ぶりだつたさうだ。

本當云ふと僕自身は新しき村をやる時、分家して新平民になるわけだつたが、母が反對したので兄にたのんでおいたのが握りつぶしにされてゐた。三四年僕は戸主のつもりで、勿論平民のつもりでゐたが、さうでないことを知つた時、一寸いやな氣がしたが、それも母の愛だし、何にも華族をいやがる程のものとも思はなかつたので、母をよろこばしておこうと思つてゐた。それで自分はそのまゝ華族に籍をおいてゐたが、元より自分は名譽だとは思はない。思ふ方があれば華族の方で僕の方ではないと思つてゐた。處が宮内省の人は宮内省らしい考へ方をすると思つた。それで自分は自分にとつて零にひとしいものをすてることにした。すてゝもすて甲斐のないものと思ふが。しかし今時に華族になりたがつてゐる人もあるし、又華族を目のかたきにしてゐる人もある。自分はどつちでも同じことだと思つてゐる。他人のよろこぶやうにすればいゝと思つてゐる。

前は母をよろこばすために平民になるのをやめたが、今度は宮内省の人をよろこばすために華族をやめることにした。どつちでも枝葉が一つのる方に自分は傾く。どつちでも僕の眞價はかはるわけはないことを知つてゐるからである

四　食慾と性慾

食慾と性慾とは自然の本能であることは事實である。食慾は生存のために必要なものであり、性慾は種族保存のために必要なものであることは誰も知つてゐる。しかし性慾については二つの正反對の考をもつ人がある。一つは性慾を罪惡視する人で、他は性慾を食慾と同じやうに耻ぢることなしに實行するのが本當と云ふ考へである。

兩方ともまちがつた考へ方なのは云ふ迄もないが、當然な顏して兩方の考へをのべる人を見る。

性慾はそのものとして罪惡視することは出來ない。性慾がもし罪惡なら人間が生れると云ふことも罪惡視しなければならない。罪とか、惡とか云ふ言葉は恐ろしい言葉であるが實際性慾を惡と見すぎる時、我等が平氣な顏して、すまして歩いてゐるのからおかしくなる。それは兩親の惡を天下に公然と示してゐることになる。自分の生てゐることや、他人の生てゐることに耻かしさを感じるのは寧ろ病的な人間か、考へ不足の人間である。性慾が本來の性質上罪惡に傾きやすい本能だと云ふのならわかつてゐる。殊に家庭本位の世界では性慾方面の制裁は嚴重に行はれることが必要である。他人の子供を自分の子供だと思つて育てるのに平氣でゐることはむづかしい。自分の生活の希望、親の愛がすなほに生きないのは困りものである。又どん〳〵無責任に子供をつくられても困る。又男女の間を理想化して見たいのは人間の自然性でもあり、それがこはれるものは悲慘でもある。しかし性慾は社會から制裁されなければならないから、罪惡視される。然し功利的に罪惡視されるだけかと云ふとさうではないと思ふ。先天的に性慾には羞耻心がつきものゝやうに思ふ。性慾を滿たしてゐる人を僕は見たことはない。皆かくれて行つてゐる。公然と行はさない處に自然の意志があるやうに思ふ。性慾は秘密的なものである。この性慾の傾向が、罪惡觀念と似てゐる。耻かしいと思ふことは氣持の

いいものではない、又公明正大な氣持とはちがう、だからそれを罪惡を行つた時受ける感じに似てゐるので罪惡だと思ふ。しかし之は性慾の眞價を生かしたいためにあるものと思ふ。つまり恥の觀念がなかつたら、男女の間が亂れすぎて、精力を失なひすぎるからだと思ふ。

食慾と性慾のちがひは、一方は絶斷禁慾するとすぐ働けなくなり、そして死んでしまう。つまり生きる活力や、働く力を失なふ。そして食慾は相手の感情を無視する必要が少ない。酒のみなぞには相手に無理に酒をのましたがる人もあるらしいが、性慾の場合とはちがふし、又食慾とちがふ本能からそれは出てゐると思ふ。食慾はよく社交的に利用されるが、相手のいやがるのを強いる性質のものでもなく、又公明正大の氣持を傷つけるものではない。寧ろ世界の人が集つて食ひたいものを一緒に食ふと云ふことが出來たら、實に美しい光景にちがいない。まあさう云ふことはともかくとして、食慾も過度だと害もあるが、適當に食慾を滿すことは、我等の健康のため、生きるため、仕事をするために絶對に必要である。

しかし性慾はさうではない。禁慾すれば死ぬと云ふことはない。たゞ性慾的の妄想を起しすぎて、性慾を滿さない場合は身體をそこねるかも知れないが。しかしそれも死ぬといふことはない。まして性慾に超越出來る人間は性慾を滿さなければ、なほ活力が出來、なほ立派に生き得ることは事實が證明してゐる。だから食慾と性慾とを同一視して得意に饒舌してゐるのを見ると馬鹿に見へる。

もの丶區別、特色と云ふものに凡そ鈍感者に見へる。性慾の害を誇張するものも馬鹿なら、性慾を滿さないのは健康に害があると云ふものも馬鹿である。たゞ性慾を人工的に剌戟し快樂をぬすもうとするものはエネルギーを失なうであらう。又性慾的妄想は腦にも身體にもあまりいゝものでないと云ふことは事實である。しかしそれはどの本能について

も云へることである。たゞ性慾の特別な特色は恥かしいと云ふ本能と化合してゐることである。そして又それが人間のためにいゝやうに自分が思つてゐる。

くわしいことは自分にはかく興味がない。あとは察してほしい。

五　不可能だと云はれた時

自分が出來ると確信してゐることを他人に出來ないと云はれても、自分はすぐ出來ないことゝは思はない。誰もが出來ないと思つてゐることを、平氣でやつてのける人間を自分は尊敬する。

尤も實際人間には不可能のことを自分が愚かなために可能と思ふこともあり得る。それは恥であるが、自分が出來ると思ふ間は、他人に出來ないと云はれるとなほやつて見たくなる。他人に出來ないと云はれると本當に出來ないことゝ簡單に思ふものは利口ではない。人類の進歩は、他人が出來ないと思ふことをやりとげる人間がゐることによる。

自分は溫室で溫度の加減をうまくやれば米が年に三度か四度はとれるはづと思つてゐる之は今の經濟本位ではやるだけ馬鹿氣たことだが、電熱の利用、日光の利用、地熱の利用が完全に行はれる社會では經濟的にやり得ると思つてゐる。殊に何をおいても生きやうとする人間にはこのことの可能なことを知るのは心丈夫なことゝ思ふ。しかし或人の話では、米はどんなことをしても二度以上はとれないことにきまつてゐるさうだ。いかにもそれはオーソリチーのある人が云つたやうにその人は確信をもつて僕に知らせてくれた。しかし自分はまだそんなはづはないと思つてゐる。年に四度はともかく三度はとれるはづだ。四度もとれていゝはづだと思ひ込んでゐる。

自分が信じ切つた學者がゐてどうしても自分が納得しないわけにはゆかないやうに說明してくれゝば別である。しか

しその時だつて學者の考へに何處か不足な處がありはしないかとさがせるだけさがし、又その上にこつそり自分で研究して見た上でないとその說に贊成することはしないだらう。熱帶地方で自然のまゝにつくつて二度以上とれないのは當然なことである。しかし溫室をつくつて溫度の調節をうまくやれば世界何處でも三度か四度か、とらうと思へば米がとれるはづと今でも思つてゐる。しかしそれを主張しやうとは思はない。だゞとれないことにきまつてゐるさうだと云はれて、さうですかと云つて引込むやうな自分は人間ではない。

村の仕事だつて皆不可能のやうなことを云つてゐたが、自分は可能なことを信じてゐたし、七八年たつた今なほ強く可能のことを信じてゐる。自分一個の力の小さすぎるのは恥てもゐるが。

一たい他の人が出來ないと云ふと、すぐそんなことはないはづだと自分は思ふ。しかし自分の考への足りなかつた點は從順に認めたく思ふが、更にいくらでも方法があり得ることを自分は知る限り、簡單に不可能だと云ふ言葉はつかいたくない。やれるだけやつて見ないうちはあきらめない。そしてやれるだけやることは大變なことである。

だから他人が不可能のやうに思ふことが、まだ考へ不足なことがわかる間、他人と一緒にそのことは不可能だとは思はない。そのことを可能にする道をその人はまだ見つけないだけだと思ふ。見つけ方が足りないのだと思ふ。勿論自分は人間の萬能でないことは知つてゐる。しかし自分に可能だと思へる間は他人が何と云つても、自分の考へ不足はなほすが、自分は不可能なことだとは思へない。

多くの人は、他人がかう云つたで滿足する。自分はそんな時、學者に何がわかる、やれるだけやつても見ないくせにとすぐ思ふ。そして今に僕の考へた方が本當なことを知らして見せると思ふ。

そしてなほ決心がつよまる。尤も自分の考へがまちがつてゐるかどうか、考へられるだけ考へて見るが、それで自分

で自分の考へのまちがいがわからない間、自分の考へで進むより仕方がない。

六　もう一息

もう一息と云ふ處でくたばる人がある。

意氣地なしである。

生てゐる限り自分の確信を他人の忠告のためにまげてはいけない。他人の忠告はよく考へて見るべきである。その上ですてるべきものは平氣ですてたければならない。

七　子供を育てる人

子供を育てるのは親でない方がい丶と云つた人がある。尤もそれははつ切り主張したのではなく、單に親が子を育てるのが本當だと思つてゐる人が多いので一寸疑ひを入れて見たのかも知れない。

それなら誰が子供を育てたらい丶のか。

親が子供を育てるのにも缺點がないはづはない。しかし他人が子供を育てる缺點はなほ少ないとは云へない。一方に疑ひをはさむのはわけない。然らばどうしたら一番い丶かと云ふことをはつきり云ふことはむじかしい。

自分は親が育てるのが一番い丶と云ふ考へを持つてゐる。しかし親による。ある親よりもましな他人を見出し得ることとは出來ないこと丶は思はない。

しかし親の愛がなくて子供をそだてることとの困難を知りすぎてゐる。

親がなくとも子は育つ。しかし弱い人なら死ぬであらう。一茶の子供の話は別としても、他人に自分の子を任せるのは萬やむを得ない時以外はいなやことだけは、動かすことの出來ない事實である。

八　子供を

子供を育てることを本職にしてゐる人があるとすれば、その人は子供の生命を愛せずに事務的にあつかい、泣き聲には平氣になり、病氣したつて心配をしないであらうし、死んでも死亡率が多い少ないで自分の名聲上の心配する以上に個人の生命のことは氣にすることは人間わざには出來ないと思ふが。

どんなものか。

尤も子供と云ふものは自分の内の生命に支配されて生るので、その他の支配をうけることは少ないものと思ふが。

僕は職業的に大勢の人を育てる人を自分は信じることは出來ない。それなら他人の個人に任せるべきものか。そんな人も自分は信用出來ない。親、殊によき母に育てられた子供は一番仕合せものである。

萬やむを得ない時の他は子供を仕合せ者にしたいと自分は思つてゐる。

九　人生に必要

宮崎のある役人が新聞記者に「芝居は人生に必要のないものですし」と云ふやうなことを云つてゐた。いかにも御尤な言葉である。それなら人生に必要なものは何か。役人なんかも人生に必要かどうか疑問である。學問だつてさうだ。學問しなくつたつて人間は生てゆける。運動なんか宮崎では多いに奬勵してゐるが人生に必要かどうか。テニスの競技

に用ゐ、之も人生に必要とは思へない。第一人間が生てゐると云ふことも人生に必要かどうかわからない。

第一人生そのものが必要なものかどうかわからない。わからない話をすれば切りがない。第一人生と云ふ言葉からしてはつ切りした言葉ではない。生るために芝居は必要がありませんからと云ふ意味にとるのが一番本當かとも思ふが、あまり必要論でせめてゆくのは面白くないと思ふ。人生は必要なもの許り切り存在し得ないのなら隨分人生は無味乾燥になる。一昨日の晩梅の香のいゝのに今更におどろいたが、之も人生に必要のない親玉であらう。

その人は呑氣に云つたのだらうと思ふが、人間に與へられた喜びと云ふものを否定するつもりで云つたのではあるまい。

元より宮崎の一役人が云つたからと云つて問題にすべきではないが、かう云ふ考へをもつ人が多いし、自分も脚本家として常に考へてゐることだから云ふのである。

人生によろこびが不必要であるとは誰も云ふまい。人生によろこびは必要なものである。人生によろこびが必要であるならば、人生に最も深いよろこびを與へ得るものゝ一つである芝居を人生に必要なしとは云へない。人間のゐる處芝居のない世界はない。恐らく野蠻人國にもあるであらう。文明國で芝居のない處はない。實際人生に芝居は必要なしと簡單に云ひ切るのは亂暴なのである。たゞ芝居を見ないでも平氣に生てゆける。人生によろこびは贅澤にすぎない。人生はよろこばずに生てゆくべき所だと云ふものは大膽な人である。

自分が芝居を見たくないと云ふのはいゝ、他人も見る必要がないと云ふのは一種の暴君である。或る芝居は見るのはよくないと云ふのはいゝ、芝居全體の價値を平氣で否定するのは、さすがに宮崎市だけのことがあると思つた。それであやしむ人もないのである。

一〇　馬鹿の神様

或人が僕のことを馬鹿の神様と云つた。それをある新聞の記者が面白がつて同感してゐた。馬鹿の内容がよくわからない、馬鹿と云ふと大勢を意味するやうに思ふが、僕が馬鹿の神様とすれば餘程變り種の馬鹿の神様らしい。馬鹿の神様と云ふ名のあてはまる人は僕より他に居さうだ。少くも僕は馬鹿者に馬鹿にされ、賢い者に尊敬される種類に屬してゐる人間である。子供の時から僕は同級の内で一番馬鹿な人間からは馬鹿にされ、賢い人間から尊敬されて來た。こんなことを眞面目で云ふ處が少し馬鹿らしいが。

少くも僕は別に大して不服をのべやうとも思はないのだが、たゞ僕が馬鹿の神様だつたら今時分金に困つたり、僕の全集を出した人に何萬圓と損させ、僕自身も全集からは第二回の募集をすると同時に一文の金ももらへなくなるやうなことはなくつてすみさうなものだと一寸思ふのだ。

僕は賢さい、馬鹿ものから馬鹿にされることにはなれてゐる。百年が、二百年のちは知らない。今は賢い人以外からは馬鹿にされる運命に甘じてゐるものだと云ふことを一言しておきたいのだ。

一一　南畫

畫なんか見て興奮する人の氣持がわからないと云ふ人が時々ある。しかし自分はいゝ畫を見ると夢中になり、感心する。

近頃まで東洋の畫にあまり興味をもたなかつたが、この頃、支那の畫、殊に南畫のいゝものには實に感心する。

文學や音樂は味はふのに時間がいる、しかし畫は見たい時に、全體が瞬間に見へる、見たい時は實にわづかの時間で見られ、そして全體が一目瞭然なのが氣持がいゝ、

それに畫を見てゐると、自分の精神も生々出來る。文學はよむのに努力がいり、時間がかゝり、味はいたい時にすぐ味へると云ふわけにはゆかない。僕はだから畫が他の藝術より優るとは云はないが、だから自分は特に畫が好きだとは云へる。そして又そんな理窟ぬきにも自分は好きな畫になると夢中にすきになる、彫刻も實にすきである。

支那の畫がすきなのはその自然にたいする態度、及びその味はい方に、實に獨特な大きさがある。

藝術の優劣は何んできめるかと云へば、その味の深さ、大きさ、强さ、その藝術を通してふれる心の大きさによる。少くも自分は本氣になつて感心出來る作は味の微妙なものが、强いものか、大きいものか、特別に美しいものかである。その他純粹なものなら愛することは出來る。可愛がると云ふ方が本當のものもあり得る。

この前フランスのセロひきの名人のホルマンのセロを聞いた時、セロを愛撫してゐるやうな感じが、何如にもフランス人らしくつて好きだつたことがあるが、ルノアールの畫をかく時の氣持と共通な處があるやうに思つた。

南畫にはいろ／＼の人がゐるであらう。皆一寸見ると同じやうなものをかいてゐるが、かく人々によつて深さや、性質が異なり、ある者（新羅山人など）は微妙の味でまさり、ある者（沈石田？）は落ちつきでまさり、ある者（八大山人など）品で優り、あるもの（石溪上人？）は强さでまさり、或者（石濤和尚）はものゝ見かたの大きさと、大づかみとでまさる。王石谷などは實にそつなく自由にこなしてかいてゐるが、味に何處か常識的な處があつて、深さが足りないやうに思ふ。

勿論一概に特色はきめられるものではない。持ち味は先天的にきめられて、たゞそれを何處まで生かすかと云ふこと

が、その人の境遇修業による。どの持ち味でなければならないと云ふのではないが、その持ち味がのこりなく生かされることが必要である。そしてその持ち味の生かし方には、傳統が随分大事だと云ふことがわかる。

南畫は傳統として随分立派なものであり、支那の傳統を正統に生かしてゐるものと思ふ。南畫は老子を持つ國、道教や禪の盛んな國で始めて生れるべきものと思ふ。

自然にたいする態度が、我も生き自然も生くと云ふ態度である。悠然と山川に對し、お互に融けあつてゐる感じである。

レンブラントのエッチングや、デッサンの風景も随分好きだが、矢張り目で見たと云ふ感じがする。そのよしあしは別としても。しかし南畫のいゝものは目で見たのではなく、心で見たのである。しかも勝手につくられた自然ではない。日本の南畫家は、勝手につくつた所がある。支那の南畫でもさう云ふ人もさがし出せるかも知れないが、一流の人は自然を決して見くびつてゐない。日本の南畫家でも野呂介石と云ふ人なぞは見てかいてゐるが、矢張り寫生に墮してゐる。本當の支那のいゝ南畫には自然の動かせない力が出て居、そしてそれに少しもおとらない人間の心が出て居る。兩　相對して大きく生てゐる。その點世界に類のない藝術と思ふ。

セザンヌの畫には南畫と共通なものがあると思ふが、然しセザンヌは支那の傳統を受けてない西洋人である。このことについてはまだはつ切りしたことを斷言したくない。

畫家は自然を寫す時、御手本を見て畫をかく子供のやうにたゞ似せればいゝではよくないことはわかつてゐる。

自分が十何年前に有島生馬にたのまれて肖像をかいてもらつたことがあるが、その畫は出來上らなかつたが、僕は毎日有島のアテリエに通つてゐて或日、有島がその時かいた僕の畫を見たら僕の肖像畫と感じがまるで同じなので、自分

かモデルになつてゐることがあるが、其の畫を見ても、モデルが生てゐるよりも、かく人が生てゐる。だからいくら忠實に自然を模寫したからと云つて自分の心を空虚にして模寫したものは空虚な感じ切りのこらない。自然の魅力は何處かへ行つてしまう。

支那の南畫の偉いのは心の修業が出來てゐ、自然の見方が出來てゐるからだ、實際自然にたいする見方の深さに感心する。自分は老子や、禪をさう好きではないのだが、支那の畫を見て、矢張りいゝ所があることをちかに知つた。技巧の方も自由自在であるが、自然や人事にたいする態度が大きい。

民衆の世界とはちがひすぎるが、人間の心の世界とは實にちかいものを持つてゐる。人間はいくら大勢と生きる時でも、生死の問題や、病的興奮がすぎされば矢張り孤獨感をまるで持たないわけにはゆくまい。人間は萬人と共に生ても一人の時はあり得、その時、最も深い力は生れて來る。南畫は孤獨で自然に對する時の感じが主になつてゐる。

自分は大勢と共に生ることも好きであるが、南畫の世界、するみのない自然にたいする。態度、其處には大きく生る處からくる香氣さはあつても、實に精神が生々してゐる。

實際時代も平和な時ではなく、泰平をたのしんで畫をやつたではなく、畫をかくより他に自分の内にある精神を生かす道がなかつたので畫をかいたと云ふやうな感じがする。

畫を見て感心出來ない人は、畫を見て人間の内にある貴き魂にふれることの出來ない人である。貴き魂にふれてなにになると云ふ人は、生てゐて何にゝなると云ふ人と同じである。何にゝもならずに生てゐるよりは、愛する魂にふれて人生最上のよろこびに參加するものゝ方が賢いのは云ふ迄もないことである。

文學でもこの魂にふれると云ふ要求の客人種が多すぎるが、自分はそれ等のかくものを一寸は面白がるが、それは退

屈の時に限る。尊敬は元より出來ない。一寸好きにはなれても。

二一　快活人種

ゲーテがエッケルマンに話てゐる内に、かう云ふ文句がある。

「だからラフォンテンがフランス人から大へん尊敬されてゐるのは彼の詩の功績ではなくつて彼のかいたものにあらはれてゐる彼の性格の偉大さによつてだ」

其處で自分はラフォンテンのことを知りたいと思つて自分が持つてゐる貧弱きわまる本棚からカル・ブゼの世界文學史をとり出して讀んだことがある。其處にはかう云ふ文句があつた。

「モリエールはたしかに段ちがひに力もあり、重みもあつた。彼は自然のために戰ひ、來たるべき日の健全のために用意をした解放者である。ラフォンテンは戰はなかつた。彼は笑ひ、考へ、無邪氣で、自由だつた。彼は當時における殆んど唯一の自然人であつた。彼はすべてのものを肯定した。Boileaus の教義も、全アカデミーの形式的文學論も。しかし自分はそれに無頓着で、自分はすきなことをやつた。彼は可愛らしい有名な粉屋とその息子とロバの話をかいた。始め粉屋と息子がロバをかついで行つた。出逢ふ人が笑つたり批評したりしたので今度は息子がのつた。すると又老人を歩かして若者がのつてゐると云はれた。それで今度は老人がのつた。今度も惡口を云はれた。つまりどうしてゞも惡口を云はれるので粉屋は皆に聞へるやうに云つた。「それなら之から私の考へ通りやらう」。そしたら萬事よくいつた。そのやうにフォンテーンは規則には拘泥しないで自分の歌いたいやうに歌つた。(中略) 彼は宮庭生活にあこがれもせず、ルイ王の不機嫌を平和な心で耐えた。寺院に對しても自由で、年とつてひどい病氣して寺院にかんけいし、新約をくり

かへし讀んだが、彼の快活な精神は永遠の鬪のと云ふ考へをひどく拒んだ。云々」(意譯)こんなことは知つてゐる人が多すぎることゝ思ふが、面白く思つたのでかいて置く。もつとよくいつか知りたいと思つてゐる。

自分はとらはれない快活人種が好である。

一三　陶淵明の詩の一句

今一寸飯を食ひながらある本でよんだ陶淵明の詩の一句を思ひ出した。

「我東のかきの下の菊をとりながら悠然と南山を見る(思ひちがひあるかも知れない。)

中々面白い心境が出てゐると思ふ。すると頭のなかにこんな句が出て來た。

「我東を向いて小便しながら悠然と向ふの山からのぼる月を見る」

どうも少しキタナイなと思つたら、我知らずふき出したくなつた。

一四

青空のもとで
いぢけてゐる人間を見ると
はがゆいね。
もつと大きな心をもつても

食ひはぐれずに
生られる世界が來ないと噓だね。

一五　自分の詩

大正明治何とか云ふ詩の撰が出來るので僕の詩も出したいと云つて來た。僕はすぐよろこんで承知しやうと思つたら、撰は自分達に任せてほしいとかいてあつた。

少しがつかりした。どんなものを撰ぶか、御手ぎはを拜見しやうと思つたら、二つ撰んであつたが、兩方とも僕は自分の詩の撰集にのせたくないと思つてゐたものだつた。

惡意があると迄は思はないが、僕の詩の特色は一番いゝ詩になくつて、散文風な惡口をその人達が云ふのに適當なものにあると思つてゐるらしい。

西行の言葉が思ひ出されて滑稽。

始めつから期待してゐなかつたから別にがつかりもしなかつた。後世にのこる本とも思はないぜ、オーソリテーもないのだから。もつと下らない詩を書いてゐるのだから、あの位いなのを撰んでくれたのを仕合せとする方がいゝのかも知れない。

しかし撰者がもし本氣でいゝ詩を撰んだつもりなら、僕は撰者の頭をうたがう。しかし詩の撰をするのはいゝ詩を撰するものではなくつて、中位いの出來を撰ぶものだと云ふなら、自分は一言も云ひたくないものだ。

一六　社會主義者の文章と資本家の言葉

僕は所謂社會主義者のかいたものをよくよむといつも不快を感じる。文章が粗雑なのはまだいゝとしても、考へ方が千篇一律で、よんでゐても自分の頭が少しも自由にならないし、教へることもない。いつも同じものを見せつけられる。本當を見やうとする努力よりも主張しやうとする努力がさきにたち、敵か味方かの區別をつけたがり、御利益の押し賣りとブルジョアの悪口、時々は同主義者の悪口でうづめられてゐる。もう少しさきを考へると云ふことをしない。はがゆい代物である。僕は社會主義に多くの同感出來る處も認めるが社會主義者のかくものをよむと社會主義が嫌ひになる。世の中を自分の思ふ通りに簡單になると思つてゐるのも滑稽である。一人位は日本に頭のいゝ社會主義者がゐてもよささうに思ふ。學者にはゐるさうだが、一々本家と相談ではよむ氣になれない。

しかし資本家が新聞なぞで得意になつて、他人の生命そつちのけに、たゞ金もうけのこと許りに熱中してゐるのを見るとさすがに不愉快である。社會主義者がゐてくれるのはいゝことだと思ふ。

自分は社會主義者のものをよむと社會主義が嫌ひになるが、資本家の言葉を見ると社會主義もいゝものだと思ふ。おかしな現象である。

或人が僕が本音をはくと社會主義者なのだらうと云つて手紙をよこしたが。自分は資本家のゐる處、社會主義者の出ることを當然と思ふが、この二つだけで人類が保つてゐるものとは思つてゐない。

自分は今の世でも兩方に屬しない人間が存在し得ると思つてゐる。つまり獨立人で、協力家である處の。

一七 先發隊

「一つの先發隊、新しい家をたてゝ、あとからくるものを泊めるために骨折ることになつた。一つの先發隊は目的地につくといきなり古い家をつぶした。其處へ本隊が來た。皆平等に野宿をしやうとしたが、さむいのでにほか普請をつくつて住むことにした。そして舊い家をなつかしがる人があると極刑に處した。其處で舊い家を公然となつかしがるものはなくなつた。其處で新しい世界は腹をへらし、ふるへながら讃美した。讃美しないものは飯が食へないからである。

他の方へ行つた他の先發隊は何處へ行つたかわからなかつたが、舊い家はそのまゝになつてゐたので、皆やむを得ず不平をいゝながら舊い家に住んでゐた。すると先發隊の人が一人來て新しい家が出來た。しかしまだ皆を入れることは出來ない、少しづゝやつて來て、新しい家を大きくすることに働いてほしい。なるべく舊い家で我慢の出來ない、新しい家のすきな人から來てほしい。舊い家を出るのを氣味わるがつた人はわりに多かつたが、しかし新しい家にはいれる人以上に新しい家に入りたい人があつた。それ等の人は新しい家にゆき、その家をひろくするために働いた。だん〳〵新しい家に住む人が多くなつた。そして古い家に安樂に住んでゐた人達も、新しい家に住まないではおちつけなくなつた。それで新しい家をつくるのに手つだいだした。

そして皆が新しい家に住んでから、もう一つの連中はどうしてゐるかと見にいつたら、古い家の材木をつかつて、古い家に隨分似た家をつくつて其處に住んでゐた。人數も隨分へつてゐた。もう新しい家をつくるのはこり〳〵したと云つた。

私がかう云ふ話をしたら或人が怒つた。其處で私は云つた。

「之には困たるお話しだよ。之れつきりのお話しだよ。寓意もなんにもあつたものぢやないのだよ。一寸こんな話がして見たかつたゞけだよ」

一八　風呂たきの名人

僕は赤坊を風呂に入れるので風呂をたくことをやつて見た。新しき村では共同の風呂があつて、男の日と女の日とかく日に湯をわかす。女の人は少ないので女の日は早く湯をわかして、男の人の勞働をすませる時分には女の人は皆風呂から出てゐる。女の日は男の日よりも三時間位い早くわかす。女の人は炊事や洗濯や裁縫や、病人のかゝりや、子供の世話をするので、風呂には皆入れる。この風呂は兄弟の一人が風呂がゝりで風呂をわかしてゐる。自分も子供が出來る迄は其處に入りに行つた。子供が出來ても當分其處に入つてゐたが、自分の家に風呂をつくることにして、風呂を自分でわかすことにした。

始めは中々うまくわかないで時々癇癪をおこしたが、その内すつかりこつをのみ込んで樂にわかせるやうになつた。時々他の人がやつてくれる時があるが、皆うまくゆかないので、僕のうまいのに感心してゐる。お世辭ぬきに、自慢ぬきに僕はうまくなつた。一體僕は不器用な質だと思つたが、やればわけないものだ。たゞ順序がある。風呂たきの講義をしやうとは思はないが。

偖てこゝまでかいて來て、何のためにかいて來たのか忘れてしまつた。だから人間は勉强しなければいけませんと教訓でもするつもりでもなかつたやうだ。

ともかく風呂たきでも頭をつかつて、いろ〳〵工風して之以上、早くわかすことは出來ない、又之以上薪をけんやく

することは出來ないと云ふことを研究しながらやつて見るのは面白いものである。と云つてごまかしておく。消さうとも思つたが。

一九

こないだある雜誌で菜食がいゝと云ふ說をよんだ。デンマークの學者で中々偉い人だつたが例によつて名を忘れたが、その人は肉食の必要に反對して、大麥に中々滋養があることを知つて、それを一國に應用して、國民の食糧問題をよく解決したさうだ。その說にその學者の娘が矢張り菜食で非常に健康で、足が達者なことなぞが面白くかいてあつた。

しかしその議論だと菜食すると身體が丈夫になると云ふやうにとれたが、その學者の娘は菜食で丈夫になつたのか、運動や、節制や生れつきで丈夫になつたのか、それはわからない。肉食しなければならないと云ふ說を痛快にやぶつたのは面白いが、肉食より菜食がいゝと云ふ結論にならないと思ふ。たしかに人によつては肉食より菜食がいゝと云ふこともあり得ると思ふが、人間の胃腸はわりに融通がきいてどつちでもいゝと云ふ說の方に自分は贊成する、それは兩方に長所も短所もあるかも知れないが、一方の否定にはならないと思ふ、勿論、肉食がわるいとはその論文にかいてなかつたかと思ふが、菜食の方がまさつてゐるやうなかきぶりだつたかと思ふ。

しかし僕はその論者には尊敬をはらつてゐても不服を云ふ氣はないのだが、よく肉食がいゝとか、菜食がいゝとか、牛乳がいゝとかわるいとか、いろ／＼議論を見るが、結論が早やすぎると思ふことがよくある。

例へば菜食したから足が早いと云へば、スルミは菜食家ではないと思ふ。肉食でなが生きする人もあれば、佛で知つた木食上人のやうな木食で九十幾つで毎日佛像をつくる人もある。人間の身體に健康であれば融通の中々きくものと思

ふ。僕は肯定の方にはいつも簡單に贊成するが、一面を肯定するために他面を否定したがる傾向には反對する。どつちもいゝと云ふことはあり得る。

二〇　男と女のある優劣論から

他の雜誌で粗食をすると男が多く生れ、美食すると女が多く生れる。だから女の方が優つてゐると云ふ説をよんだことがあるが、之も面白い話だが、どう云ふものか。比較的の話だからわからないが、日本の農家に女の子が澤山生れてゐるのでもこの説は、隨分はく弱である。戰時で男が多く死ぬと男が多く生れると云ふ説を、戰時粗食するからと云つてのけるのも學者としては少し早やすぎると思ふ。元より粗食すれば女が生れないと云ふのではないから、反對し甲斐もないが、さう云ふ説は一説として面白いがそれだけの面白さと思ふ。同じ處に男の子の育ちにくいのも男の方が劣つてゐる理由としてあげてあつたが、之も同じ理由で男がまさつてゐるともいゝ得る。下等な動物程よく育つとも云ひ得る。

僕は疑問の與へ方の少ない議論は嫌ひである。そして一々疑問を入れてゆくと、結局奇拔なことを云ふ興味はなくなつてくる。本當のことだけが云ひたくなる。

しかし自分は女が男より劣つてゐるとは云ひたくない。元々特色がちがうのだから仕方がない。その特色を生かせばいゝ。

村の出來たてに男女平等論をしきりとやりたがる女の人がゐたので、その女が又特にぐうたらなので、僕は男女の價打は平等であるから下らない女はくだらない男のやうに下らないと云ふ意味のことを云つて怒らしたことがあつた。

女だから、男だからと云ふよりは個人の値打で僕はその人の價値をきめたい。少くも尊敬すべき女もあれば、輕蔑すべき男もある。

女より男がまさつてゐると一生懸命に云つてゐる男が、實は女より頭がわるかつたら見ともない。又男より女が偉いなぞと云つて男の眞似をしてゐる女があつたら見ともない。

そんな人間が居ると云ふのではない。居ないと云ふ必要も認めないが。

二一　先づ疑問を入れて見る

自分は本をよんで頭から感心する者ではない。いくら耶蘇や、釋迦の言葉でも、又どんな學者の議論でも自分の實感や、知つてゐる事實にあてはめて見て、それが本當か、嘘かを吟味して見る。本當だと思つた時始めて感心する。嘘だか本當だかわからない時はそのまゝにしておく、嘘だとわかれば、その點、少くも輕蔑しないわけにはゆかない。

又自分のわからないことは、わからないことゝしておきたい。

自分は誰が何と云つたつて、本當だと思へない事は思はない。賛成しない。

二二

自分の内面世界にはいろ〳〵の人が住んでゐる。近頃は自分の内面世界に石濤和尚が入つて來た。古い中央美術に闘雞のもつてゐる和尚の畫を見て急に好きになつた。自然にたいする態度の大きいのに感心した。その自然の見方には自

豫約募集　申込締切四月三十日限

大杉榮全集

全拾巻　七千五百頁　◆　内壹巻別册　伊藤野枝全集

詩聖タゴール著　佐野甚之助譯

（內容見本呈上）

創作 ゴーラ

忽三版

ポイント活字・八百頁
口繪數葉更紗表裝優美
定價金參圓八拾錢
書留送料金貳拾參錢

詩聖タゴール生涯の二大使命は、一は外に對つて古來印度の特產たる貴き心靈界の或物を全世界に宣傳すると、他は內に對つて三億生民の現代の疾苦を救ふとにある。思想の衝突に悶え宗敎の中毒に憊れ、政治に苦み、社會に惱める祖國の實情を背景として、力强き信念と、愛國の精神とに燃ゆる青年ゴーラを藉り來り、之に配するに美女、貞婦、懦夫、義人を以てし、波瀾重疊の間に自己の大使命を說いたのがこの小說である。理智の雪峰！愛の恒河！そこにも性の苦杯が酌まれた。殉敎の烈火が燃え立つた、而も其眞劍味に讀者は必ず襟を正し、その深刻味には涙の湧くのを覺えぬであらう。されば宇宙の核心から迸り出た大靈感は一讀、再讀、三讀何物かを讀者の肉に、骨に、髓にまで烙き附けねば措かぬ空前の大文字である。

懸賞募集

全篇七十六章現在各章の題目なし。四版より新に附すべき各章の適切なる題目を廣く讀者より募集す。

一等　金百五拾圓・二等　金五拾圓・三等　金貳拾五圓・四等　金拾五圓五人・五等定價五圓以上の書籍　十人

選　者　文學博士　高楠順次郎氏・文學博士　木村泰賢氏・水上瀧太郎氏・松岡讓氏・譯者　佐野甚之助

應募期限　大正十四年四月三十日迄に大雄閣懸賞係宛送附のこと。

發賣　京都市西六條　振替大阪一〇八一五番　興教書院

發兌　東京小石川關口臺町五　振替東京六六九二九番　電話牛込七六八番・六七六〇番　大雄閣

分が今迄一番位い好きだつたレンブラントの自然の見方も叶はないと思つた。
　まだ自分はこの珍客にすつかり親しさを持つことは出來ないが、この珍客のことがしきりと頭に浮んでくる。
　そして偶然にも、岸田の處へ行つてこの和尚を見せてもらい、不二の六號を見ると長與も好きになつてゐた。殆んど同時に別々にこの和尚が好きになつたのも面白い。好きになつた處は同一かどうか知らないが、面白い和尚を知つたことをよろこぶ。僕が支那の詩や、國民性、傳統なぞにもこの和尚が好きになつたことから段々親しみを感じることが出來さうになつた。
　この和尚はたゞものではない。
　自分の頭にあるパルナスには東洋人も段々入つて來さうでうれしい。雪舟もこの頃、この仲間に入りかけて來た。大雅堂はいつのまにか入つてゐる。八大山人、新羅山人なども招待したいと思つてゐる。
　さう云ふ人達のことを考へてゐることは人生の最大幸福である。その人達一癖ありさうな連中が、自分の世界をもつて悠然と歩いたり、休んだり、ねたり、話したりしてゐることを考へるのは最大のよろこびである。

二三　無題

　自分はこんな筋のものをかいて見たくないだふと思つた。
　それは優れた人間が何かの拍子で劣つたものに負けて馬鹿にされながら死んでゆく話である。その人は政治家であつても、藝術家であつてもいゝ。
　たとへば文學者にしてもいゝ。優れたものをかいても誰も認めない。下らないもの作りがほめられてゐる。與論全部

豫約募集　申込締切四月三十日限

大杉榮全集

全拾卷　七千五百頁　◆　内壹卷別册　伊藤野枝全集

大杉榮全集

第壹卷　論文集
第貳卷　論文集
第參卷　自叙傳、獄中記　日本脱出記　小説「死灰の中から」
第四卷　隨筆、書簡
第五卷　一革命家の思出　青年に訴ふ　革命の研究
第六卷　民衆藝術論　相互扶助論
第七卷　男女關係の進化　人間の正體　物質非不滅論
第八卷　種の起原
第九卷　昆虫記　科學の不思議
別册　伊藤野枝全集

◆内容見本無代進呈◆

大杉榮氏の全著作を收む。彼の思想、生活、行爲の完き批判、研究は、この全集によりて初めて行ふを得べし。

申込略記

全十卷、各卷九ポイント組約七百五十頁、英國ウインターボットム會社特製純黑バックラム裝幀。六月より毎月一卷宛刊行す。會費全額參拾八圓を次の通り分割拂込の事。申込金參圓（申込と同時に）會費毎月參圓五拾錢宛十回に御拂込の事。一時拂參拾五圓（申込金不要）外に全部の送料を要す。

豫約申込所

東京小石川表町　振替東京六八八六八　アルス
東京日本橋通四丁目　振替東京一六一七　春陽堂

東京市本郷區駒込片町十五
大杉榮全集刊行會

豫約募集　申込締切四月三十日限

大杉榮全集

全拾巻　七千五百頁　◆　内壹巻別册　伊藤野枝全集

大杉榮全集

第壹卷 論文集

第貳卷 論文集

第參卷 自叙傳、獄中記 日本脱出記 小説「死灰の中から」

第四卷 随筆、書簡

第五卷 一革命家の思出 青年に訴ふ 革命の研究

第六卷 民衆藝術論 相互扶助論

第七卷 男女關係の進化 人間の正體 物質非不滅論

第八卷 種の起原

第九卷 昆虫記 科學の不思議

別册 伊藤野枝全集

◆内容見本無代進呈◆

大杉榮氏の全著作を收む。彼の思想、生活、行爲の完き批判、研究は、この全集によりて初めて行ふを得べし。

申込略記

全十卷、各卷九ポイント組約七百五十頁、英國ウインターボットム會社特製純黒バックラム装幀。六月より毎月一卷宛刊行す。

會費全額參拾八圓を次の通り分割拂込の事。申込金參圓（申込と同時に）會費毎月參圓五拾錢宛十回に御拂込の事。一時拂參拾五圓（申込金不要）

外に全部の送料を要す。

豫約申込所

東京小石川表町 振替東京六八八六八 アルス

東京日本橋通四丁目 振替東京一六一七 春陽堂

東京市本郷區駒込片町十五 大杉榮全集刊行會

分が今迄一番偉い好きだつたレンブラントの自然の見方も叶はないと思つた。

まだ自分はこの珍客にすつかり親しさを持つことは出來ないが、この珍客のことがしきりと頭に浮んでくる。

そして偶然にも、岸田の庭へ行つてこの和尚を見せてもらい、不二の六號を見ると長與も好きになつてゐた。殆んど同時に別々にこの和尚がすきになつたのも面白い。好きになつた庭は同一かどうか知らないが、面白い和尚を知つたことをよろこぶ。僕が支那の詩や、國民性、傳統なぞにもこの和尚が好きになつたことから段々親しみを感じることが出來さうになつた。

この和尚はたゞものではない。

自分の頭にあるパルナスには東洋人も段々入つて來さうでうれしい。雪舟もこの頃、この仲間に入りかけて來た。大雅堂はいつのまにか入つてゐる。八大山人、新羅山人なども招待したいと思つてゐる。

さう云ふ人達のことを考へてゐることは人生の最大幸福である。その人達一緒ありさうな連中が、自分の世界をもつて悠然と歩いたり、休んだり、ねたり、話したりしてゐることを考へるのは最大のよろこびである。

一三 無題

自分はこんな偉いものをかいて見たくこないだふと思つた。

それは優れた人間が何かの拍子で劣つたものに負けて馬鹿にされながら死んでゆく話である。その人は政治家であつても、**藝術家であつてもいゝ。**

たとへば文學者にしてもいゝ。優れたものをかいても誰も認めない。下らないものの作りがほめられてゐる。輿論全部

にそなかれて、自分で自分の頭を疑つてくる。自分の方がいゝと思ふのを總がゝりでわるいときめられ、頭が足りないとけなされる。實際政治家程、全部的に壓倒されたり殺されたりはしないし、眞價を發揮しながら生てゆけるのだから、たゞ負けたのとはちがうが、輿論全部、批評家全部から下らないものあつかいされたら、そしてそれが定評になつて誰も疑はなかつたら、そして自分でもそれが本當かも知れないと思つたら、それは悲慘なことである。

そして下らない人間が時を得顏にふるまわれたら、そして國民全部がその人の御機嫌をとり尊敬したら、滑稽以上だらうと思ふ。勿論。馬鹿にされた男が意志の強い、確信の強い男なら何處かで確信をもち得るが情けない氣はまぬかれないであらう。

僕の尊敬する友人がある會合へ出たら、自分が子供あつかいしてゐた人間が、對等の顏してなつてゐない理屈を衆をたよつて得意になつて云つてぶつかつて來たのには、たさけない氣がしたと云つた。（少し事實とかへてある。）その氣持は自分にもわかると思ふ。

勿論、自分が輕蔑するより仕方がない人間がいくら威張つて來たつて、笑つてすませて、わかる人にはわかる、天知る、我知るとは思つてゐればすむが、しかし賢い者が馬鹿にされてそして反抗することを輿論で禁ぜられてゐるのは悲劇である。僕は「楠正成」でその問題に一寸ふれたが、しかし楠正成位いになればまだ我慢も出來るだらうが、はつ切り自分の方がいゝと云ふことを知りながら、輕蔑され切り、立つ瀬がなくなつては困ると思ふ。しかしわかる人にはわかる。

しかしはがゆいと思ふ。ロシヤのルナチヤウスキーなぞが文學者で巾をきかしてゐるなぞは滑稽である。文學と政治とごつちやにしてゐるものは、人間の精神的要求に無智な連中である。精神は愛し得るものは愛するが、愛しなければ

ならないと政治家に云はれて、はいさうですかといへないものである。

精神は小學校の生徒ではない。だから馬鹿者は精神を嫌ひ、否定したがる。だがそれは病氣の證である。

二四　僕のものの上演料

東京の友達から僕の脚本の上演料は安いと云ふことが定評になつてゐると云つて來た。厄介な定評が出來てゐるものだ。僕は世間のことには無頓着な質だ。自分の考へたいことは多すぎるから、考へたくないことまで考へる餘地がない。世間の人がどの位の上演料をとつてゐるか、又どの劇團は貧乏で、どの劇團は金持か知らないし、芝居がどの位いもうかるものか、損するものかを知らないし、僕の脚本をやつて人が來るのだか、來ないのだかも知らないし、役者がいくら月給をとつてゐるか、衣裳や背景や廣告にどの位の金をつかつてゐるかも知らない。税も高いことは知つてゐるが、どの位いだつたか忘れてしまつた。しかし僕は他の劇作家の人のものより僕のものがやすくつて、そのためにこの人のものをやるよりはやすい方がいゝと云ふので僕のものをやる人があるとしたら、他の人にもわるいと思ふし、僕も不愉快だ。芝居なんて云ふものは脚本料を氣にしてやるやうな不景氣なものではないと思ふ。もうけるものをやればいくら出してもいゝものだし、もうけないものを出したらたゞでも閉口な、二三百圓作者からもらつてもおいつかない仕事だと思つてゐる。だから安いから僕のものをやると云ふ心配はいらないと思ふが、安くつていゝのに高くだすのは馬鹿氣てゐると思はれては一寸困るが、一體どの位いとつたらいゝものか僕には見當がつかないから、相手を信用して任せることにしてゐる。それに不精で、ハガキ一つかけば百圓や二百圓よけへとれるかと思ふが、つい不精してしまう。返事さへ出さずにほつたらかしておくことゝなる。

やめになつたのか知らんと思つてゐると誰からか見たと云つて八ガキや手紙がくるので、矢張りやつたのかと思ふこともニ三度以上だ。何しろ僕が不精になり出したら切りがない。

それに自分も貧乏してゐると相手の貧乏に同情が出來すぎて催促する氣にならない。その内に何とか云つてくるだらう、今でも送つてくるだらうと心待ちしてゐる内に日がたつて、いよ〳〵あてがくるつて困るとやつと催促するがその時分には相手も氣が廢け、こつちも八分位いあきらめてゐる。親切な友達がゐてくれて僕が金に困つてゐるのを知つて骨折つてくれるのでやつといくらか金がくると、入らない金が入つたやうな氣になると云ふ質だ。何しろ遠方だから電報でもうつには二里半以上行かなければならないのだから、ついでをまつと往復で四日はかゝる　手紙だと一週間かゝるからうんざりする　ほつたらかしておく方が氣らくだ。又劇團の方も呑氣で電報をよこしても返事もかいて來ないのがある　イサイフミとかいてあつて待つてゐると手紙が來ない時がある　何處の劇團がやつてゐるのか、田舍ものにはわからずにしまう。東京の新聞を一つも見てゐないせいもある

だから上演料はつい相手まかせになる　劇作家協會へ入つてゐるから安心だと思つてゐるが、何とか云つてくると、面倒だから抗議を申し込まずにそのまゝにする。

しかしそれが定評になつて　僕のものはやすくつていゝなぞと云ふことになつては困るから今後は規定通りにしてそれでいやならよせと云ふことにするつもりだが、返事の出せない電報をよこして　そのまゝ芝居をやられる場合は困る向ふでは有名なつもりなのだらうが、こつちがもの知らずだから困る

しかし規定通りやらないでは他の劇作家にたいしてもすまないわけだから、今後、その方のことは関池公功君が承諾してくれたら同君にまかせる心算だ。

二一五　呑氣な話だが

秀吉と曾呂利の話で二十何年前によんで今でも時に思ひだすノンセンスな話がある。誰でも知つてゐる話かも知らないが、知らない人も十人の内六　七人はゐるであらう。

或る日秀吉と曾呂利が庭を見ながら話してゐた。秀吉はふと曾呂利に難題を出して苦しめてやらうと思つて云つた。

「俺を俺が氣がつかない内に椽から下へおろして見ろ。」

秀吉はいくら曾呂利でも自分を知らない内に庭へおろすことなぞは出來るはづがないと思つたにちがいない。僕もそれをよんだ時さう思つた。之は出來ないことだと思つた。そして曾呂利は何と云ふだらうと思つた。

曾呂利はすまして云つた。

「それは出來ませんね。しかし殿下を庭から椽に上げることなら出來ます」

秀吉は大得意で

「さうか、それなら上へあげて見ろ」

さう云つて庭へ下りて、曾呂利の方を見た。

自分も其處までよんでどうして曾呂利は秀吉を上へあげるかと思つた。處が曾呂利は笑つて云つた。

「殿下は知らない内に下りになりましたね」

秀吉（さすがのと云つてもいゝ）も之にはぎやふんと參らないわけにはゆかなかつた。そして又知らずに上へ上つたにちがいない。

この話は下らない。ノンセンスな話だが自分はそれをよんで大いによろこんだ。矢張り曾呂利の頭の動き方は意表外であり、そして適確だと思つた。一番簡單な道で目的を完全に達してゐる。とても自分には思ひつけないことを平氣で突差に思ひつける頭に感心して矢張り珍らしい頭の一つだと思つた。

他人に不可能だと思ふことを、平氣でやつてのけて、しやあ／＼してゐる處が痛快だ。相手が相手だからなほ面白い。すましておりたり上つたりしたいゝ師した秀吉はあまり利口ではない。だがにくゝはない。

それだけの話である。

去年醫者の雜誌でよんだのだが、一寸面白く思つて今でも覺えてゐる話が二つある。例によつて名を忘れたのは殘念である。(あまり殘念にも思つてゐないが)

ある醫者の所へ神經衰弱のひどい、陰うつな男がやつて來た。醫者はその人の身體を見てあなたは氣をてんぢて呑氣になる必要がある。それには何とか云ふ有名な滑稽家があるからその人の話でもきいたらいゝでせうと云つた。

するとその男は「それば駄目です」と云つた。

「なぜだめなのです」醫者はさう聞いた。

「私がその男なのです」

一寸チエホフか誰かの短篇を思はすやうな話だと思つた。之も結果が豫期以上で面白い。それに何かへんな感じがある。チヤプリンを一寸連想する。

もう一つは、有名な醫者が、貴族の家から子供が負傷したからすぐ來てくれと云はれた。どうせ大したことではないと思つたのでゆく氣もしなかつたのだが、あまりさいそくされたので出かけて、子供の負傷を見た。すると醫者は怒つ

たやうに語つた。

「早く早く私の家につかいを出して藥をもつてこさせて下さい」

親たちはびつくりして

「そんなに心配な負傷なのですか」

其處で賢者は云つた。

「早く早く使を出して下さい。さもないと使が歸つてくるまでに負傷がなほつてしまいます」

之にはふき出さないわけにはゆかない。

二六　ものをよむ時

ものをよむ時、自分だつたらさう云ふ時どうするだらう。何と云ふだらう。又どんな行動をとるだらう。さう考へて見て、さて自分より立派な、或は賢い、或は利口な、或は生々した處を何處かにもつ人の言行にふれる時自分は感心する。それに反してさう云ふ時、まるで無自覺、無責任、無良心、無知、考へ不足、生命の力の空虚さなぞにふれるとがつかりする。

前者は自分の心を自由にしてくれ、大きくしてくれ、生々さしてくれ、痒い處に手がとゞく。

後者は痒い處に手がとゞかず、はがゆいこと非常である。（二五、三、二〇）

東京帝大助教授 平野義太郎著

法律における階級鬪爭

菊判 上製 定價貳圓五拾錢 送料廿三錢

新刊 發賣

法律の成立及び進化を社會學的對象として考察し、階級鬪爭が法律の世界でいかやうに現れるかを看た上唯物史觀と價値の法律哲學との交渉を明かにし、その見地から所有權本位の法律組織を批判しつゝ、その合理化を說いて勞働法上基本權の基礎的研究をなす。

目次

◎**法律に於ける階級鬪爭** 序說—階級の成立。階級と身分—「身分意識」の成立。階級的法律秩序の固定化と理想化。法律に於ける階級鬪爭の發展。◎**階級鬪爭とローマ法** ローマの法律に於ける階級鬪爭。資本主義とローマ法。◎**資本主義的法律組織の下における階級鬪爭** 資本主義的法律の嚮導原理。階級鬪爭としての勞働運動。◎**階級鬪爭と價値の法律哲學** 法律價値の定立と共同態の理念。階級鬪爭による價値の實現。◎**同盟罷業の合法性** 緒言—ストライキ權。現代の法制上よりする同盟罷業の合法性。勞働爭議と騷擾罪。警察法規と同盟罷業。同盟罷業とドイツ新憲法。◎**同盟罷業の私法的效果**。◎**勞働爭議と爭議調停法**

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

商大助教授 孫田秀春著（新刊）

勞働法總論

菊判 定價貳圓六拾錢
上製 送料貳拾參錢

勞働法學著書の嚆矢

勞働問題の喧しく、『勞働法』の新法制ありて勞働法を指針する一書だになきを遺憾とし、我孫田教授は多年の研鑽と、獨自の見解とを加へて茲に本著を公刊することとなつた。本書の出現が新時代に順應せるものであつて其使命も實に奪はれたる勞働者階級權利の回復にあるべく、此新著の生誕が、新興階級の發生と、その發展とにどれ丈けの意義と效果を齎すかは新時代の人々の容易に首肯し得る所なるべし。本書は多數學徒及有識者が必備の良著である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二〇番 改造社

賀川豐彦著

死線を越えて 下卷
壁の聲きく時

我家庭になくてはならぬ一夫一婦聖愛の小說

愛の感激であり、靈の生活であり、人格主義を體驗づけた本書が、此の不景氣の空に唯だ一書、飛ぶやうな賣行きを示すはそれは常然の事である。凡百の讀みものの總てが淫蕩を對象として書かれたるに拘らず、本書は實に一夫一婦家庭道德の純愛を基調とし、三角戀愛を排し、陰慘なる修羅場—貧民窟！誘惑多きゴロツキの群—にも感激の生活を徹底せしめた大男子の凱歌である。殊に彼が死を誓つて勞働爭議の陣頭に立ち、震災勞頭救護の最前線に立つた勇氣ある涙ぐましい血の記錄を讀むものは、唯一人として首を上げ得ない。特に彼が唯物主義の弟の爲に捧げた熱烈な唯神主義は讀者の心臟を強く鼓動させではおかない。眞に人格主義の勝利に共鳴する人々、純聖愛の一生に強く生きんとする若き人々の爲に本書を捧ぐる。

四六判上製　定價貳圓八拾錢　送料貳拾壹錢

（上卷）死線を越えて　二百八十四頁　定價參圓　送料貳拾壹錢

（中卷）太陽を射るもの　[illegible]百十六頁　定價貳圓八拾錢　送料貳拾壹錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

改造社新刊書

社會科學研究の自由に關して 青年學徒に訴ふ

森戸辰男著 （改造社パンフレット叢書）

定價參拾錢
送料九錢

近時澎湃たる社會科學問題に公憤を發したる著者の火の如き熱烈の卓論。社會科學の發展なき所に眞實の思想なく、眞の獨立はなく、眞の解放なし。我々は此問題解決の爲に一切の障壁を排すべしと結論して當局の措置に一大痛棒を加へたるものにして全國の學生は必ず一讀すべし本書は本社が實費を以て天下の學生に頒布して氏の時事に對する意見を徹底せしめんとす。

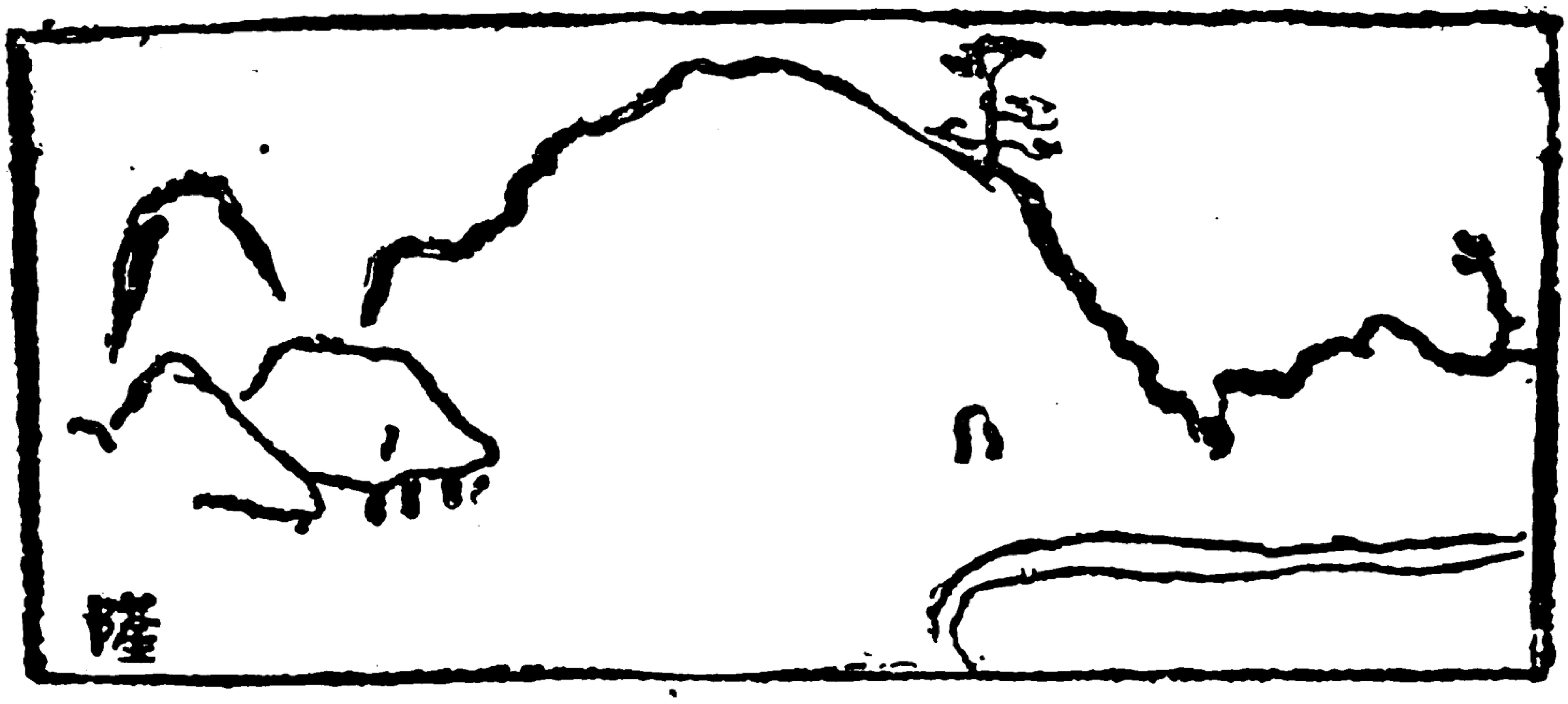
ジャン・ジョレス

柳澤健著

四六判上製
定價壹圓五拾錢
送料拾五錢

ジャン・ジョレスは過般の歐洲大戰の勃發に先つこと數日偏狹なる國家主義者の兇手に罹り命を隕したる偉大なる犧牲である。然も平和の佛蘭西は今や國を擧げて彼を愛惜し、國家の最大なる偉人としてルッソー、ユーゴー等と並べパンテオン殿堂にその遺骨を祠るに到つた。近く物故せるアナトール・フランスの晩年に於いて抱懷せる思想が主としてジョレスの感化に依りたるものなることは何人も知る所、ロマン・ロランの如きは彼を目するに、現代に於ける獨自（ユニック）の型にして古代まで遡るに非ざれば到底かゝる類型をば見出し得ざることを斷言した。著者は多年彼の言行の研究に努めた。

四月特別號創作



最後の女

正宗白鳥

（一）海邊の砂丘

ある男、海邊の高い砂丘の頂上に憩うてゐる。この男の姿は、廣い自然の點景人物のやうに廣く見える。その側に三四人の男女が現はれたり隱れたりする。ある男は、それに注意したり、無關心であつたりする。あるひはステツキで砂に物を書く眞似をしたり、遠くの海面を見渡してゐるやうな態度をする。

やがて、ある男が砂丘の頂上から消えると、間もなく、大山誠吉が砂丘の麓に、上から驅下つた態度をして現はれる。向うから橋本久がブラ〳〵歩いて來る。

橋本　やあ（意外に感じたやうに）君は此處へ來てゐたのか。

大山　今砂山の上で見つけて、どうも君らしいと思はれたから、慌てて驅下りて來たんだがね。………何はない方がよかつたかも知れないな。あしこにぢつと蹲んでて、君が此邊を通るのを默つてみてゐればよかつたのに、僕は相變らず思慮が足りないからいけないよ（しよげる）

橋本　（微笑して）詰らない獨合點を云つてゐるね。僕に會つちやいけないやうな後暗いことでもあるのかい。僕は話相手の欲しいところだつたよ。丁度よかつた。まあ一服やらう。

橋本が氣輕に云つて、軟かい砂の上に腰をおろすと、大山もその側に腰をおろして足を投出す。

橋本　君は一人で來てるのかい。誰れか連れがあるのか。別莊は買つたんださうだが、宿屋へ泊つてるのか。………何處に泊つてるの？（矢繼ぎ早に訊く）

大山　一人だ。今朝急に思立つて來たんだが、これから歸らうと思つてるところだ。

橋本　ぢや、僕の宿へ行かないか。連れはあるんだがね。あつたつていいだらう。

大山　奥さんか。

橋本　大勢だ。雪江も來てるし、親類の子も連れて來てゐるんだ。今あしこでみんなが曳網を見てるよ。

大山　さつきこの上で見てたら、東京者らしい人間が曳網の側に大勢集つてたやうだつたが、ぢや、あの中に君の御連中もゐたのだな。（遠くの方を見やつて）實は僕はあのなかに知つた人がゐやあしないかと思つてゐたのだ。今朝から一人ぽつちで此地をまご〳〵してゐたのだから、誰れかに會ひたいやうでもあるし、誰れにも會はないで歸つた方がいいやうな氣持もしてるところへ、出し拔けに君の顏が見えたものだから、自分でも出拔けに下りて來ちやつた。僕が今日といふ日に大磯へ出て來たことは、もう自分だけの秘密にはして置けないな。

橋本　ぢや、君は世間へ秘密（ないしよ）で此處へ來たのかい。

大山　可成秘密にしときたいと思つてたのだが、もう駄目だな。

橋本　秘密なら秘密でいゝぢやないか。僕は商賣違ひで、君の友人に會ふ機會はまあないと云つていゝんだし、君の最

近の生活狀態だつて殆んど知らないんだから、今日此處で君に出會つたことを他人に洩らす氣遣ひはないよ。その點は安心して大に秘密を守つてゐたまへ（氣輕に云つて）……君のお父さんが亡くなられたこと、別莊を買つたことゝは、去年の秋頃雨宮に會つた時に聞いてるんだが、その他の事はなんにも知らないんだ。君は稼業を相續してるんだらうな（ふと思出したやうに）さう〳〵、君に旅行鞄の堅牢な奴を拵えて貰ふ約束があつたけな。地震なんかであつたので、すつかり忘れてゐた。君の方からも催促の端書一本も寄越さないから忘れてゝ失敬した。本所の工場は地震で燒かれたんだが、小さいながらも兎に角復興してるんだよ。お互ひに地震以來會はなかつたのだな。

大山　地震どころか、足掛け四年も會やあしない。親爺の死ぬる少し前に、中川の洋行を横濱へ見送つたきり會はないんぢやないか。（稍々心を安んじた樣子）

橋本　さうだつたな。お互ひに中川を中心にして會つてたんだから、あの男がゐないと會ふ機會もない譯だね。

大山　さうさ。……僕も、地震に會つたり親爺に死なれたり、その外いろ〳〵な目に會つてゐながら、まだ性根が入らないんだな。人間を見る目が本當に開かないんだ（獨りで感じてゐるやうに云つて）……知つた者があの中にまじつてやしないかと思つて、下を見てるうちに、ふつと君を見つけると、君が僕の最近の生活も、胸の底の底までも知盡してるやうに思はれて、怖さと懷しさで、咄嗟に山を飛下りたのだが、さう慌てなくつてもよかつたのだね。……君のお邪魔にさへならなきや、君の宿へお伴をして晩まで遊んで行つたつていゝよ。

橋本　久振りに一しよに飯でも食はう。……僕は一週間ばかり靜養するつもりで、昨日此方へ來たんだが、天氣はいゝし、明るくつて温くつて、年齡が若くなつたやうな氣がするよ。一年あまり毎日々々工場を離れた日はなかつたのだが、こんなせい〳〵した田舍に比べると、工場の生活はまるで泥溝の中の生活だ。かういふ土地に小さな別莊でも持

つてゝ、毎週一日づゝでも遊びに來られるやうだと健康にいゝんだが、僕はまださういふ身分にはなれないんでね（吸ひかけの煙草を投げて）さあ、僕の宿へ行かうぢやないか。

　橋本が立掛けたところへ、彼れの妹の雪江がアタフタと入つて來る。

雪江　兄さん、今杉浦さんがいらしつたのよ。急な御用があるんですつて（息もセカ〳〵と云つて、大山に會釋する）

橋本　杉浦が來たつて？（力づよく云つて）用事があつたら電話を掛けると云つといたのよ。（大山の方を見て）ぢや、僕は一足先きへ歸つて用談を濟ましてくるから、君はあとからやつて來たまへ。……宿屋は精龍館にゐるんだよ。

　橋本は、大山の存在を念頭に置いてゐないやうな冷淡な態度で、妹と一しよに足早く出て行く。大山は立上つて兄妹のあとを見送つたが、再び砂上に蹲んで、ステツキで砂の上に文字を書いたり、海の方を見やつたりする。そこへ、橋本の妻あさ子が入つて來る。大山は人の近づく氣色（けはひ）がしても無關心な風で、砂上のいたづら書きを續けてゐる。あさ子は、忍び足で彼れの後へ廻つて、砂上の文字を見てから、ふと笑ひ聲を立てる。

　大山は驚いて振返る。

あさ子（笑ひを殺して挨拶をする）暫くでしたわね。あなたが此處にゐらつしやること、今妹に聞きましたのよ。

大山（砂上の文字をステツキで消しながら）あなたはこの前お目に掛つた時と少しも變りませんね（いかにもお世辭らしく）

あさ子　何が變りませんの？（そのことは意に介しないやうに）あなたは少しお痩せなすつたやうね。……わたし、不思議な人からあなたのお噂を承はつてゐますのよ。

大山　雨宮君からですか。

あさ子　雨宮さん？いゝえ。……その方のお名前はちよつと申上げられないんですけど。……

大山　別段その名前を聞きたかありません。自分の事を聞くことも詰りませんね（さういふ話を避けようとする仕草をして）曳網では魚がよく捕れましたか。

あさ子　なか〳〵網が上つて來ませんのよ。隨分手間がかゝるものですわね。

大山　ぢや、これから網の上るところを見に行きませうか。僕は、此方に別莊があつた時には、よく曳網の魚を買つてゐましたよ。捕れた所に行つて買ふと非常に安いんです。

　大山が立つて行かうとしかけると、あさ子は立塞がるやうにして、

あさ子　まあ、お待ちなさいまし。……わたしあなたにお目にかゝつたら、是非お話したり、お訊き申したりしたいと思つてることが御座いますの。わざ〳〵お宅へお訪ねするのも變だし、何處かでお目に掛つたらと、長い間心待ちにしてゐましたの。ですから、大山さんがそこにゐらつしやると、妹が何の氣なしに云つた言葉が耳に入ると、わたし飛上るやうな氣持で此方へまゐりましたのよ。そこで、砂の上にお書きになつた文字も偶然拜見しました。

大山（不機嫌な顔して）あなたはそんな下らんものを、興味をもつて見るんですか。（消し殘されてゐる文字を足のさきで消しながら）若しもわたしに訊きたいことがあるのなら、簡單に早く云つて下さい。

あさ子　なぜそんなに氣にお掛けなさるの？……ぢや、簡單に申上げますわ。曳網が上つたら、みんながわたしを搜しに來るでせうから、それまでにあなたとわたしとの間の大切なお話を片附けなきやなりません。

　あさ子が蹲むと、大山も腰をおろす。

あさ子（打解けた表情と口吻で）あなたは搜してゐらつしやるものがおありになるんですつてね。

大山（空呆けて）僕が搜してゐる？何をです？
あさ子　あなたが搜してゐらつしやるものが、わたしにだけは當てがついてゐるやうに思はれますの。若しかするとわたしの思違ひかも知れないけれど、
大山　それをわたしに敎へてやらうと思つてゐらつしやるんですか。どうも不思議ですね。橋本君とさへ近年は交際が杜絶えてゐたのに、奥さんがわたしの内情をよく御存じなのは變ですね。
あさ子　橋本は何にも知つてやしません。この事はわたしの口から一言も橋本に洩らしてやしませんの。わたしも世間並みのお喋舌りの女なんですけど、このことばかりはまだ誰れにも話さないで、自分の胸にそつと仕舞つてるんですわ。（ふと相手の方へ目を据ゑて）お父さまは不意にお亡くなりになつたんですつてね。
大山　えゝ。話がそこからはじまるんでせうね。あなたはあの時の事情をよく御存じだかどうだか知りませんが、僕の方から手つ取り早くわたしの身の上を簡單に云ひませうか。他人に話すよりも、自分の思出に情熱を感じてゐるやうに）僕の父は僕の不在中に腦溢血で死んだのです。あの女がおれの息子を誘惑したのか、おれが行つてその女を打ちのめして息子を連れて歸るといきり立つて、旅行鞄を持つて出かけると、玄關で打倒れて、それつきりになつたんです。父が女を打つさきに、女が父を打殺したやうなものです。僕はその時大磯の別莊にゐたんですが、父が死んだつていふ電報を見ると、吃驚りしながらも、自分の世が來たつていふ氣持がしました。その頃の僕に取つちや、世の中のたつた一つの障礙物が取れたやうに思はれたのですからね。ところが親不幸の天罰は覿面だ。親爺の死んだあとは、身内の奴なんかゞ、僕が世間知らずなのをいゝ事にして、家の中をめちや／＼にしたんです。親爺を打殺した女が、貧乏になつた僕の側にゐないのは當然でせう。

あさ子　あなたの捜してゐらつしやる者は、その女の方ぢや御座いますまいね（戯談らしく）

大山　そんな者を捜してどうします？先方から僕を捜して來ても、僕は横を向くまでですよ。場合によつちや唾液ぐらい引掛けるかも知れませんがね。

あさ子　……でも、あなたの捜してゐらつしやる者は、女の方ぢやなくつて？

大山　あなたはさう思つてゐらつしやるんですか。……ぢや、假りにさういふことにして、あなたはわたしが捜してる女を知つてゐるんですか。

あさ子　假りになんて仰有るのなら申上げられませんわ。あなたが生命にかけても一心に捜してると、わたしにお誓ひにならない限りは。

大山　人に云つて恥かしいことぢやないから、誰れに云つたつて差支えはないんですが、關係のない人に打明ける必要はないんですからね。

あさ子　わたしをお信じにならないのなら爲方がありませんわ（熱意を相手の顔に注いで）あなたはお小い時にお別になつたお妹さんを捜してゐらつしやるんぢやないの？

大山（驚いて）あなたはどうしてそれを知つてゐるんです。僕が、生きてるか死んでるか分らんやうな妹を捜してることは、誰れかの口からあなたの耳に入つたかも知れないが、あなたが、僕の捜してる者の居所を知つてゐるのは不思議ですよ。僕を揶揄んぢやないでせうね。

あさ子（感情を強いて壓えて）あなたのお妹さんはあさ子と仰有るんぢやないの？

大山　あなたは名前まで知つてゐらつしやるんですか。……本當にあなたはその居所を知つてるんですか、（知つてゐる

のなら直ぐにいへといはぬばかりに迫る）

あさ子　……でも、今直ぐにつて譯には行きませんわ。御當人の許可を得て、二三日うちに乾度お知らせしますから、あなたのこの頃の御住所を教へて下さいました。

大山　僕はこの頃は家にゐない時が多いんですが、あなたの音信のあるまで家の中にぢつとしてゐてもよろしい。僕の家は橋本君が知つてゐますよ。……しかし偶然出會つたあなたが、妹の居所を知つてゐらつしやるは變ですね。

あさ子　ぢや、夢だと思つてゐらつしやいましな。わたしがかうしてお目に掛つてゐるのを。

大山　夢にしても、自分に希望を抱かせる夢なんだから、あなたに感謝してい〻譯ですね。

彼れはあさ子に對して親しみを寄せる。あさ子の態度にも、今までのやうな戯談らしさ、遊びのやうなところはなくなる。

大山　僕の父が社會的に成功してゐなかつた時分に、僕の外に、女の子が一人あつたことは、父が死ぬる少し前に、偶然父の口から洩れるのを聞いたんですよ。それであさ子といふ、同じ母親の腹から生れた同胞（きやうだい）のあることだけは、その時知つたんですが、何しろ僕の身持について、親爺に酷い小言を喰つてた時分だつたので、詳しい話は聞かうともしなかつたのです。親爺の死んだあとで、親類に訊いても、僕の生みの母の昔の事は知つてゐても、妹の行衛については、誰れも知らないんです。……僕の生活があたり前に運んでゐたなら、妹の存在なんかはどうでもい〻譯だつたのでせうが、僕は父に死なれてからは災難つゞきで、この世の中に、眞實に僕を慰めて呉れて、僕の受けた傷を癒して呉れる者は、子供の時分に別れたきりで、顔も記憶えてゐない妹の外にはないやうに思はれて來たのです。……こんなことを、平生の僕を御存じのないあなたに打明けると、可笑くお思ひになるでせうが、妹の話が出たからお話する

んですよ。嘘はないやうにして下さい。

あさ子　嘘ふものですか。わたし一心に聞いてゐますわ。從姉續きだと仰有るのに、東京のお宅や此方の別莊を人手に渡したり、お父さんが一代でおつくりになつた財産が無くなつたりしたことなんですか。

大山　それぱかりぢやありません。僕は今のところ、財産なぞどうでもいゝと思つてゐるくらいです。なまじつか少しばかり有つてたために、まはりの人間に騙されて馬鹿にされて、僕の方でみんなを憎んだり恐れたりしなければならんやうになつたのですから。

あさ子　（馴々しく）あなたはさつき砂の上に、金、金と大きな字で書いてらつしつたわね。

大山　（急に不機嫌になつて）僕は金が欲しくなつてそんな字を書いたんぢやありませんよ。いたずらに書いただけなんです。僕は家にゐる時でも、この頃は氣が欝して來ると、やたら字を書いて氣を紛らしてるんです。獨りで書いて獨りで見てると、金といふ文字が人間の顔のやうに見えるから妙ですね。

あさ子　面白いこと云つてゐらつしやる。……金といふ文字の外にまだ何か書いてゐらしつたけど、お妹さんのお名前ぢやなさゝうでしたわね。あの文字も、あなたが御覽になると、その人の顔に見えますの？（揶揄ふやうに云ふ）

大山　なあに（苦笑して）……僕はさつき砂山の上で海を見下してゐても、父をはじめ、見覺えのない母の顔や、その外に關係のあつた善人や惡人の顔が、いろ〳〵に目のさきに見えたのです。わざ〳〵此處まで來て穩かな春の大海を眺めてゐながら、臭くさい人間の顔を忘れきれないやうぢや詰りませんね。橋本君なんぞ、働く時は眞黑になつて働いて、かういふ所へ遊びに來ると、海や山をたのしみで見てゐるんでせうから幸福ですね。

あさ子　それはどうですか（橋本の話などには心の向かないやうな空々しい返事をして）あなたは今いろ〳〵な人の顔

を思出してゐると仰有つたわね。見たことのない人の顔までが目の前に現れてるやうに思つてゐらつしやるのなら、お妹さんの顔も御覧になつてゐるんでせうね。

大山　えゝ、見てるやうなものです。

あさ子　………お妹さんはどんな顔してゐらつして？

大山　さあ、何と云つたらいゝでせう（その顔を思出してゐるやうに目を据えて）あの親爺の子で僕の妹だから、決して世間で云ふ美人型に出來てやしないんだけど、僕にはその顔がいゝんですよ。目も口も鼻も眉の形までもそれでいいんです。世界中の女といふ女のどの顔よりも、その顔が、僕にだけは美しくつて懐かしく思はれるんです。あなたのお取做しで、その妹に會つた時に、若しも僕が不滿足らしい目付で妹を見たら、あなたは僕のこの兩眼を抉取つて下さい。（眞劍になる思つてゐるやうに云ふ）

あさ子　（感動して口も利けないやうだつたが）………でも、お妹さんがあなたがそんなに仰有るのを聞いたら、どんなに喜ぶでせう。

大山　（ふと反省したやうに）あなたは海岸へ保養に來た餘興に、僕を煽てゝこんなことを喋舌らせたんじやないでせうね。

あさ子　さう思つてゐらつしやるといゝわ。二三日うちに分ることですから。

彼女が馴々しい隔ての取れたやうな口を利きかけたところへ、雪江と一人の少年とが姿を現はす。あさ子立上つて、われ知らず大山の側を離れる。

雪江　（不樂らしい目を二人の方へ注いで）義姉さんは何處へいらしつたのかと、みんなで捜してゐたのよ。

少年　（あさ子の側へ寄つて）叔母さん、曳網にはちつぽけな魚が入つてたばかりなんだよ。あんなものを見てたつて詰らなかつた。僕は、鯛か鮪か、大きな魚が入つてるに違ひないと思つてゐたのに失望しちやつた。大抵な網を曳いてあんなちつぽけな魚を捕つてどうするんだらう。

雪江　ほんとにさうよ。一時間も見てゝ詰らないとしちやつた。こんな廣い海にでも魚はそんなにゐないらしいのね。

あさ子　魚といふものは海の底にばかり住んでるのか知ら。いくら海を見詰めてゐても魚らしいものちつとも見えないぢやないの。

雪江　杉浦さんの御用はもう濟んだか知ら。……義姉(ねえ)さんはすぐに宿屋へお歸りなさるの？

あさ子　歸つてもいゝわ。……大山さんはわたしどもの宿へお遊びにいらつしやるんでせう。

大山　いや、今日は此處で失禮して直ぐに東京へ歸りませう。橋本君によろしく云つて下さい。

少年　僕はこの砂山へ上つて見たいな。

大山　ぢや、左様なら。

彼れは、意味ありげにあさ子を見て、帽子を取つて皆なに挨拶して出て行く、あさ子、感傷的な表情をして見送る。

雪江　あの人、この頃はちつとも、家へ遊びにいらしやらないのね。もうよつ程前のことだけど、あたし、電車の中であの人に會つたことがあつてよ。奇麗な女の人を連れてゐたのよ。今月の東京雜誌の口繪に出てゐるやうな面長で目のパッチリした奇麗な人だつたわ。……あの人一人で此方へ來ていらつやるんでせうか。

あさ子　さあ、どうですか。(空々しい返事をして物を考へてゐる)

少年　僕はこの砂山へ上つて見たいな。

雪江　上りたきや、あなた一人で上つていらつしやい。あたしこんな急な坂を上るのは大儀だわ。

少年　ぢや、僕一人で行かう。此處で見といでよ。

少年は二人の側を離れて出て行く。

あさ子　杉浦さんが急用があるつて來たのなら、兄さんは、屹度早く歸ることになるでせう。兄さんは、とても一週間も工場の事を忘れて、こんな田舍でゆつくり遊んでられるやうな人ぢやないんだから。

雪江　兄さんは歸りたきや歸つてもいゝわ。あたしだちは極めて來た日數だけは此方で遊んで行きませうよ。旅行なんか滅多に出來きやしないんですもの。あたし三年この方東京の外へ一足でも出たことなかつたのだから、隨分情けないと思つてよ。兄さんは商賣にばかり熱中してゐて、なぜ家族の健康つてこと考へないでせう。曳網を曳いてる人を見てると、女でも子供でもみんな丈夫さうな元氣な顏してるのに、あたし達は青い顏して。……（姉の顏を見て）身體が病人らしくなるから、精神も病人らしくなつて憂鬱になつたり、いら／＼するやうになるのね。あたしのやうな女でも、海を見てると、心が廣々として來るやうなの。

あさ子　あなたは何時だつて心が廣々としてるぢやないの。

雪江　嘘よ。……あたし、生れつき氣が小ちやいのに、この頃は腦が惡くなつたせいか、詰らないことまで氣に掛つて爲樣がないの。……姉さんも、どこかお惡いんぢやないの。今度、一週間といふこれまでに例のない長い間、此方へ遊びに來るやうになつたのも、姉さんの身體を兄さんが氣遣つたゝめぢやないかと、あたしは思はれるのよ。

あさ子　雪ちやんはお察しがいゝわね。でも、わたし、身體は弱くつても、何處も病氣に罹つてやしないわ。

雪江　それならいゝけれど……（口へ出すのを躊躇したあとで）今日のやうな機會に姉さんに聞いた方がいゝかも知

れない。姉さんはなぜみよ子さんと險惡になさるの？兄さんもいやがつてるらしいのに。………から云つちや生意氣か知らないけど、あの人は他所の家庭の破壞者のやうに思れてよ。わたしにいろんな惡知恵をつけるんですもの。姉さんにはなほ餘計な告口なんかしてるかも知れないわ。

あさ子（快活に）雪ちやんも詰らない取越苦勞をするのね。わたし達の家庭は女一人の口先で破壞されるやうな、そんな薄弱なものぢやないのよ。わたしとあなたの間だつてさうでせう。お互ひにたまには氣まづい思ひをすることがあつても、お腹のなかでは少しも惡意は持つてやしないんだから。………それにみよ子さんは、惠み深い神樣のお告げのやうな悅しい事をわたしに知らせて呉れたんです。それを今あなたに明かす譯には行かないけれど、あなただつてそれを知つたら吃驚するほど喜ぶに違ひないの。人間の一生には奇蹟見たいなことに出會ふことがあるものだと、わたし先つきからひとりで感じてゐたのよ。

雪江　さつきから姉さんが欝いでらつしやるやうだつたから、急に心配事でも出來たのかと心配してゐたら、そんなことだつたの。その奇蹟つていふものを早く知りたいわね。狹つ苦しい東京の家から、こんな廣々としたところへ來てスガ〳〵した海の風を吸つてると、躍り出したくなるやうないゝ事が、目の前に出て來さうに思はれるものよ。……あゝ、あたし、姉さんが今獨りで喜んでゐらつしやることを、早く聞きたくつてならないわ。

あさ子　……雪ちやんは、さつき此處で會つた大山さんをどう思つて？

雪江　どう思ふつて、何をどう思ふの？（義姉の問ひによつて心に動搖を感じてゐるらしく）

あさ子　あの人、お坊ちやんだから、お父さんに死なれると、傍の人にいゝやうにされて、財産をすつかり無くしたんですつて。それに、性質のよくない女に不實なことをされて、女つていふものを、みんな呪つてるらしいの。（つ

毒ねえ。
雪江　大山さんてそんな方なの。あたしあの人を放蕩者とばかり思つてゐたのよ。
あさ子　あの人はまだ女の愛といふものを知らないの。どんな女の人に關合つてたか知らないけど、まだ純潔な女の心にめぐり合はなかつたのだわ。だから、あたしあの方を絶望から救つて上げたいと思つてるの。雪ちやんも力を合せてあの人を救つて上げる氣になつて頂戴ね。
雪江　さう云へば、あの方淋しさうな顔してらつしつたわね。
あさ子　その事で、今に雪ちやんなんかを吃驚させることがあるのよ。（獨りで樂しさうに云ふ）
その時、砂丘の上から、少年の叫聲が聞えて來る。姉妹はその方を仰見る。
砂丘の上には、小さな點景人物の如く少年が憩うてゐる。
雪江　あしこへ登つて見ませうか。（元氣づいて）姉さん一しよにいらつしやらない？
あさ子　さうね。……登つてもいゝわ。（元氣づいて）あしこからだと、海の眺めもいゝに違ひないわね。
雪江　此處で見えないものも、あしこからは見えさうよ。あの子は小ちやな身體をして威張つてるぢやないの。……あしこからはあたし逹もあんなに小ちやく見えるんでせうね。
姉妹は砂丘へ上るべく出て行く。（幕）

（註。時候は春。砂丘及び丘上の人物は非實際にてよし）

（二）大山誠吉の居室

さして廣くない部屋の眞中に、不釣合なくらゐな大きな紫檀の机が据ゑられてある。裝飾品に、西洋の美女の油繪、裝釘の贅澤な西洋書。大山は机に向つてゐる。机の上には、手紙と一葉の寫眞と鋏とが置かれてゐる。彼れは、その寫眞を取上げて見ては、詰らなさうに机の上に抛りだす。

書生が襖を開けて、鉢植ゑの西洋花を持つて來る。

大山　（不思議さうに）そんな者を誰れが持つて來たのだい。

書生　神崎さんの奥さんのお使が持つて來ました。

大山　おれの所へ草花の贈り物は變ぢやないか。（鉢植ゑを机の上に置いて、それに添へられてゐる名刺を見て）何だ。お祝ひのしるしにだつて、馬鹿にしてやがらあ。

書生　何のお祝ひなんでせう。

大山　だから馬鹿にしてると云ふんだよ。おれの身に祝つていゝ事がある譯はないぢやないか。君はよく知つてるだらう。

書生　えゝ。……でも、贈つて下すつた方は、何かのお祝ひのおつもりなんでせう。あなたの方で何かお心當りは御座いませんか。

大山　まあ君考へて見れたまへ。昨今の僕に祝盃を擧げていゝやうなことが一つでもあるのかい。

書生　……でも、大磯からお歸りになつてからは、何か知ら希望がおありになるやうぢや御座いませんか。

大山　君の目にさう見えたのかい。無理もないね。しかし、駄目だ。新たに幻滅を感じさゝれたよ。全體おれが怒りもしないで、希望なんかを持つからいけないんだよ。……しかし、不思議なこともあればあるものだ（寫眞を取上げて

見詰めて冥想してから、書生に渡して）君、この顔には僕に似てるところがあるだらうか。比べて見てくれたまへ。

書生（寫眞を見詰めて）成ほど似てゐますね。目元から小鼻の邊が、隨分よくあなたに似てゐますよ。……この方はどなたです？

大山　不思議だ。ぢや贋物ぢやないんだな。……さつきに、寫眞の顏と僕の顏とを比べるために、自分の顏を鏡に映してつくづくと見入つたのだが、僕も三四年前の僕とは大分違つて來たよ。衰弱した僕の顏に似てるこの女は、あんまり幸福ぢやあるまい。

書生　この方はどなたでせう。（寫眞を持つて、まだ不思議さうに見てゐる）

大山　おれの最後の女だ。（戯談のやうに云ふ。書生ニヤリと笑ふ。）

書生　わたくしはこれから郵便局へ爲替を受取りに行きますが、何か御用は御座いませんか。

大山　無いよ。……まだお母から小使錢を寄越したのかい。羨ましいね。

書生　いくら強請つても煙草錢くらゐしか寄越さないんだから駄目です。

大山　金の高はどうでもいゝさ。

書生　ぢや、行つてまゐります。

書生が行きかけると、大山は呼留めて、鉢植ゑを指差して、

大山　これは君の部屋へでも持つて行つときたまへ。僕は入らないんだから。

書生（訝りながら）ぢや、頂いて行きませう。

書生が鉢植をもつて出て行きかけると、呼鈴の音が聞えて來る。二人はその音に耳を留める。

書生　今日はお客樣をお通しするんですか。

大山　毎日客を追返すに極めてやしないよ。それに今日はおれの方で待つてる人があるんだ。……來たのだな（これは獨言のやうに思はず云ふ）

書生は出て行く。大山は心の動搖を表てに現はしながら待つてゐる。

間もなく、あさ子が派手な服裝をして入つて來る。

あさ子　お宅が分らなくつて隨分搜しましたのよ。（輕い挨拶をして、極りの惡さうな顏して机の側に坐る）

大山、努めて冷靜にして、事務的な口調で、

大山　今朝からあなたの手紙と寫眞とを前に置いて眺めつくらしてゐたのです。こんな事が有り得べきことかと夢を見てる氣になつてゐたのですよ。あなたが僕の妹なんですか。

あさ子　あなたは疑ぐつてゐらつしやるの？（感傷的になる）わたし、大磯で偶然お目に掛つた時には、若しかすると自分の思違ひぢやないかと、あなたに打明けたい思ひが喉まで込上つてるのを呑込んだのですけど、家へ歸つて母の紀念を明けて見ると、もう疑ふ餘地はなくなりました。それで野崎さんの奥さんにもよくうかゞつて、間違ひのない、同じ父と母との間に生れた兄妹だと、確かに分つたものですから、橋本にも家の者にも直ぐに打ち明けようとしたのですけど、あなたと名乘り合はないさきに、他人に洩らしちやいけない、興もないと思つたものですから、今日お宅へお訪ねしたのも、家の者にはないしよなんです。……わたしは、あなたが搜してゐらつしやるあさ子ですよ。

大山　僕はあなたの贈つて下すつた寫眞を開けて見ると、手紙の文句なんか讀まないさきに、長い間の秘密の扉が開い

て、正體が見えたやうに思つたのです。僕はあなたが僕の妹だつてことを、もう疑つてやしません。あなたは僕のたつた一人の本當の妹なんです。僕はあなたの手紙にあつたやうに明治二十六年三月十日に生れたのです。僕たちの血を檢査しなくつても、神崎の妻君の母親の證明を俟たないでも分つてゐますよ。僕は、顔も知らない母親に今會つてるやうな氣持がするんですもの。僕やあなたの生みの母は、あなたくらゐた年齢に、父に別れて、あなたを連れて行衛不明になつたんですね。母に不都合なことがあつたのか、父が無情だつたのか、そんな大昔の詮議立てしたつて爲方がないが、あなたは父の生きてゐるうちに僕の家へ來ればよかつたのに。……親爺も死ぬる前には、若い時分に別れたなりの、生死の分らない一人の娘を思出したらしいんですよ。……わたしが母の顔も知らないやうに、あなたも父親の顔を知らないんだが、僕の顔をよく見て御覽なさい、母に別れて男の手で僕を育てて貧乏生活をした時分の父は、丁度僕くらゐの年齢だつたのです。

あさ子　わたしは五つの歳に母の身の振方の都合で、他所の家へ、音信不通の約束で、養女にやられて、母の顏さへうろ覺えに夢のやうに覺えてるばかりなの。でも、わたしは幸福だつたのです。貰はれて行つた家も、兩親とも優しくてわたしが行つた後で生れた男の子と、同じやうに大事に育てて呉れたのだし、今の橋本の家だつて、あなたが御存じのやうに、みんないい人なんですから。

今まで冷靜を裝つて事務的な口を利いてゐた大山も、橋本といふ言葉を聞いた刹那に冷靜を破つて、感情を押へきれなくなる。

大山　橋本の家庭はそんなに平和なのだらうか。僕は最近は殆んど往來しなかつたが、學生時代にはあの家へたびたび出入りしてゐたし、結婚當時の事も知つてる。

あさ子　あたし、覺えてますわ。あなたが中川さんとお酒に醉つていらしつて　役者の假聲を使つたり端唄だか何だか唄たりして……

大山　そりや昔の僕だ。……今だつて酒は隨分飮んでるんだが、酒の味ひは昔とは違つてるんです。……それで　あなたは、僕を橋本の前へ連れて行つて、これがわたしの兄だと云つて紹介をするつもりなんですか。

あさ子　わたし、さうして皆んなを驚ろかしたいんですの。わたしに兄が一人あつたといふことは、以前橋本に話したこともあつたのですけど、それは昔話として云つたゞけですわ。だから、あなたがその兄だと分つたら、吃驚して、それから喜ぶに違ひありません。……わたし、今夜にもあなたをお招きして皆みなにお引合せしようと獨りで手筈を極めてますのよ。

大山　僕が橋本の親類になる譯だな。……僕が一心に捜してゐたのは橋本の親類になるためだと思ふと滑稽だ。（自ら嘲けるやうに云ふ）

あさ子（腑に落ちぬやうに）あなたの妹が、偶然お友達の家へ緣付いてゐたことは、何かのお導き見たいぢやありませんか。橋本は身内にはよく盡くす人ですから、あなたの御相談相手にもお力にもなりますよ。

大山　それが當てになるものか。僕はまた友人や身内を當てにしてやしないよ。此間大磯の砂山の上から、橋本の影を見ると、うつかり懷かしくなつて驅け下りたことを後悔してるんだ。あの時僕の方では飛付いて腹の底までも打開ける筈だつたのを、橋本は冷淡だつた。しかし、それはあたり前だ。僕の方で橋本に友情を求めたのが間違ひだつたのだ。あの時砂山を下りて行きさへしなきや、あなたにも會はないで、夢が醒めないでお互ひのために、却つてよかつたたかも知れないんだ。

あさ子（呆氣に取られて）橋本はあなたに對して何かよくないことをしてゐるのでせうか。

大山　僕の捜してゐた一人の妹が橋本のやうな男の女房になつてゐるとは思はなかつた。

呼鈴の音が聞える。

大山　あの書生は外へ出た筈だから、あなたでも取次に出て下さい。大事な客が來る筈になつてるんだから。

あさ子　お取次になら行つて來ますわ。

あさ子が出て行くと、大山は、寫眞や手紙をしまつて、大切な來客を待受けてゐるやうに身構へする。

そこへ、あさ子に導かれて、たま子（あさ子より若くて美しけれど、容貌が窶れてゐて服裝も見窄らしい）入つて來る。二女は互ひに他を怪しんでゐる。大山は、あさ子を迎へた時の冷靜と變つて、愕然度を失した有樣。

たま子　しばらく。

彼女は二人に挨拶する。あさ子座蒲團を勸める。

大山（氣色ばんで）お前はどんな用事があつて此處へ來たのだ？

たま子　あたし、暫く御無沙汰したお詫びに上つたのですけど、お邪魔なら直ぐにもお暇しますわ。

大山　御無沙汰のお詫びだつて。しやあ／＼とよくそんなことが云へたものだ。……でも本當にお詫びしたいのなら、—そこへ跪つくばつてお詫びをしろ。

たま子（せゝら笑つて）今日は大變偉くおなんなすつたのね。まるで人が違つたやうだから、あたし面白くてなりませんわ。

あさ子、當惑してゐる。

大山　おれの家は書生と二人生活だ。餘計な人間は來ても台はないことにしてゐるんだ。それに、おれには餘分の金などはないんだから、人のふところに目をつける奴に寄りつかれちや溜らないよ。

あさ子　わたしがうつかりお通しゝたのが悪かつたら、お詫びしますわ、折角寄つて下すつた方に酷いこと仰有るもんぢありませんよ。(たま子の方を見て)わたし、此方の主人の妹で御座いますの。

たま子　お妹さん？(あさ子の顔を不思議さうに見て)此方にお妹さんがおありになること、わたしちよつとも存じませんでした。(信じないらしく)

あさ子　少し譯が御座いまして、小さな時から別れてゐたものですから(輕く云つて)……さつきお取次に出て伺つた時に米村とか仰有いましたが、あなた樣のお名前は、若しかたま子さんと仰有るのぢや御座いますまいか。

たま子　えゝ。(その質問をば輕く外して)本當にお妹さんでしたの。あたし失禮いたしましたわ(改まつて挨拶する)

あさ子　たま子さんてどんな方だらうと思つてたら、あなたでしたの？

大山　どうしてそんな名を知つてるんです？(詰るやうに云ふ)

あさ子　どうしてと云つて、あなた御自身で大きく書いてらつしやつたぢやないの。此間大磯であなたにお別れしてから、雪ちやんに誘はれて砂山へ上ると、砂の上にある文字が書いてあつたのですよ。雪ちやんが見つけて、誰れがこんな字を書いたのだらうつて、面白がつてゐたのですけどわたし默つてましたの。それで砂の上の文字は下駄の歯で消して來たのですけど、わたしの胸にはハッキリ殘つてゐますのよ。

大山　(不機嫌に)そんな字は誰れが書いたか分るものぢやない。

あさ子　それはさうでせうとも。わたしは何にも知らないのですから。……わたしが傍で聞いてゐちやいけないやうな

お話が御座いますのなら、わたし茶の間へでも書生さんの部屋へでも行つてゐますわ。

大山（命令的に）ぢや、さうして下さい。

あさ子（相手の語調の命令的なのに不快を感じながら、たま子を尻目に見て）御ゆつくり遊んでいらつしやいまし。

あさ子、出て行く。たま子は後を顧みてから、

たま子　本當にあなたのお妹さん？

大山　まあ、さうだ。

たま子　まあ、さうだなんて變ね。どんなお妹さんか知らないけど、あなたはあの妹さんの前で、随分あたしを侮辱しちやつたわね。あたしが去年の秋、あゝ云つた譯でお別れしてから、今日の日まで、どんな思ひで暮してゐたか、少しでも知つてらしつたら、そんなに邪慳にされる筈はないんだけど。……あなたにはいゝ事が出來たもんですから。

大山　おれに何がいゝ事があるものか。見ても分るぢやないか。こんな安つぽい借家に書生と二人で暮してるんだ。

たま子　却つて氣樂でいゝぢやありませんか。あなたがお金持の後繼者でなくなつたら、誰れもあなたを騙したり強請つたりしに來る人はないでせうから。……あなたは零落したと云つても、こんな小ぢんまりした居心のよさゝうな家で、氣儘に暮してゐらつしやるんだけど、あたしを御覧なさいな。昔はあなたのたま子だつたあたしが、こんなに變れて見じめになつてるぢやありませんか。……自業自得でいゝ氣味だと思つてゐらつしやるの？。あなたの目付がさうらしいわね

大山　おれとお前と、どちらが餘計に見じめだか分りやしない。お前がおれの家の軒下で行倒れになつて死んだとしても、おれほどに見じめぢやないんだ。お前はおれの親爺を殺しただけで飽足りないで、おれまでも嬲殺しにしようと

するんだな。今日はおれがどんな樣して生きてるか、そつと見に來たのだらう。妹がはじめて訪ねて來た時を見計らつておれを訪ねて來たのも偶然ぢやあるまい。おれは親爺がこの世に殘したたつた一人の妹に出會つた今が、一番みじめな氣持になつてゐるんだ。財産を剝がれて、親類にも愚弄されて、魂までも預けてた奴にも裏切られて、働く力も眠る力もなくなつてるおれに、力をつけてくれて、明るい光を見せてくれる天女を待つてゐたのに。見ろあれが天女か。

たま子　本當にあなたのお妹さんなの。でもちつとも似てゐらつしやらないのね。

大山　似てゐない?。そんな筈はない。お前は二人の顏を比べてじろ／＼よく見てゐたぢやないか。

たま子　あなたには似てゐらつしやらなけれど、隨分美しい方ね。あんな美しい妹さんがあつたり、こんな居心地のいい部屋で氣儘にしてゐらつしやれるんだもの。あたしのことなんぞ構ひつけない譯さ。

大山　いけしやあ／＼と何を云つてるんだ。‥‥書生が家にゐたらお前なぞ上へ上げるんぢやなかつたのだ。

たま子　さう?。ぢや、妹さんのお取次のお蔭でお目に掛ることが出來た譯ね。妹さんはあたしのためには天女見たいだわね。今日は、あなたのお家には、天女と鬼女とが一しよに飛込んで來たのだから不思議ぢやないの?

大山（もどかしさうに）お前の云ふことはそれつきりか。

たま子　まだ肝心なことは一言も云やしないぢやありませんか。今日此處でお別れしたら、この次には何時何處でお目に掛れるやら分らないのよ。今でさへこんなに零落してゐるあたしは、この次何處かの市街のはてか海のふちかであなたにお目に掛る時には、皮を被つた骸骨になつてるかも知れませんわ。あなたがいくら惡罵をお吐きになつても、その時のあたしは耳が潰れてゐて、他人の言葉がちつとも聞えなくなつてるかも知れませんの。

大山　それがさうなつたにしても、おれの知つたこつちやないさ。……お前はあの男と一しよにゐるんだらう。（下へは氣にしてゐないやうに訊く）

たま子　あなたの仰有るあの男は、そこの四つ角であたしを待伏せしてるかも知れないわ。此處の窓の隙間から覗いてるかも知れないわ。

大山　彼奴、お前を此處へ寄越して、おれに馴合ひをつけておれを強請らうとするのか。お前は彼奴と馴合ひでおれの所へ來たのだな。

たま子　何を呆けてゐらつしやるのよ。あたし怖くつて逃げてるんです。彼方へ逃げ此方へ逃げして、もう逃げるところがなくなつたゝめに、あなたのお家へ驅込んだのぢやありませんか。……でもあなたの手に凭れて昔のやうな夢を、も一度見ようなんて、そんな蟲のいいことを考へてやしません。……あなたがあたしを此處から抛出して鰐の口に呑込ませようとも、それはあなたの御勝手なの。あなたの腹癒せには、さうなさるのは一番いいことかも知れませんわ。

大山　いい覺悟だ。おれは、誤魔化しの愛情の夢や安樂の夢を見たあの頃のおれぢやないんだ。お前は、あんなことのあつたおれを、まだ昔のおれと思つてるんだな。お前の言葉の裏は見透いてるのだ。……よし、昔のよしみで、今のおれの心を見せてやらう。

たま子、ふとビクビクする。そして、大山が凄い目をして立上るのを見ると、次の間へ逃げかゝる。そこへ、あさ子が入つて來る。

あさ子　（驚いて）どうなすつたの？わたし、今お茶を入れて來ようとしたところだつたのよ。

大山　（たま子を捉へたまゝ）僕の親爺を殺したのはこの女だよ。此處へ來合せたのが幸ひだ。あなたも親の敵の此奴を

どうにでもして錨を打つといゝんだ。僕が今柱に縛りつけるから、あなたも手傳つてお見れ。

大山は力が弱くつて、たま子を自分の力だけでは縛ることが出來ない。たま子も、はじめのやうに慌てて逃出さうとはしない。

あさ子　そんなひどいことを。……さあ離してお上げなさいな。

あさ子、大山の手を取つて二人を引離す。たま子ぺつたり坐つて動かない。大山も疲れたやうにぺつたり坐る。

あさ子　お話になることがあるのなら、もつと靜かに話したつていいぢやありませんか。見つともない（侮蔑を含んだ目で二人を見る）

たま子　あたし、斬られても磔刑にされても構ひませんわ。大磯の別莊で、誠吉さんと二人世間を隠れて遊んでゐた四五日の間のことを、今思出してますの。あの時には、別莊のお庭には山吹が咲いてゐました。蝶が飛んでゐました。二人の顏はもつと艶があつて若かつたのです。一しよに砂山の温い砂の上に寢ころんで、青い空に大島の煙の上るのを見たこともあるんです。砂の上にお互ひに書きつけた文字だつて、あたし覺えてますわ。……お父さんがお亡くなりになつたと知つて吃驚しても、それはお互ひの心と心とを一層つよく結びつけるための知らせ見たいなものだつたのですもの。

大山　何を寢言を云つてるんだ。早く行つちまへ。

そこへ、書生が何氣なく入つて來る。

書生　たゞ今（元氣よく云つて。挨拶して、二人の女の顏を不思議さうに見る）

大山（たま子の方を顋で示して、烈しい口調で）このお客を直ぐに歸らせてお見れ。

書生、合點の行かない樣子してゐる。

大山　いゝから引摺出してくれ。

たま子（俄かにけはしい顔して）あたし物貰ひぢやありません。あなたに惡い思ひを殘させないでお別れしやうと思つて、通りがかりに寄つたゞけなのです。この後あたしの身にどんなことがあらうとも、指一本差して貰ひたくないのです。

さう云つて、たま子は足早く出て行く。書生は隨いて行く。

あさ子　呆れた女ね。

大山、玄關の方を氣にしてゐるやうにして、默つてゐる。

あさ子　どんな深い關係があつたのか、わたしには分らないけれど、今のやうだと、あなたはもうあの人とは永久に緣をお切りになつた譯ね。

大山は默つてゐる。

あさ子　何だか下衆つぽい人ね。……あんな人とは絕對に關合ひがなくなつた方がいゝんですわ。……今直ぐにこんなお話するのは變ですけど、あなたも書生さんとお二人きりで、淋しくお暮しになつてゐちや、身體のためにも、精神の上にもよくないんですよ。無邪氣な可愛らしい氣立のいゝ若い女を、はじめてあなたにお目にかゝる手土産のつもりであたし考へてゐるんですけど、

大山（冷然として）その人には、紹介されなくつても寫眞を見なくつても、此間大磯の濱で會つた。さうして僕が橋本と二重に關係つけ［ママ］い親類になるのが、僕のために幸福だと云ふんですか。

あさ子　それは今急がなくつても、おひ／＼にお話しますわ。……わたし今、お茶を入れようと思つて、茶の間や臺所へ入つて見て、男世帶つてこんなものかと呆れましたのよ。それで、見たばかりでも氣になつて打遣つて置けないから、戸棚の中を片附けて、ちよつとお掃除もしといたいのです。

大山　それは有難う。ぢや、書生の差圖をして次手に家中の整理をしといて下さい。僕はちよつと出て來るから。

大山はさう言棄てゝ、あさ子の返事も聞かないで、慌たゞしく出て行く。あさ子もあとに隨いて出て行く。（幕）

（三）の一　海邊の砂丘

（一）と同じ。但し時候は眞夏の朝。

あさ子と雪江が、何か話しながら並んで歩いて來る。二人とも輕裝して海水帽を被つてゐる。

雪江　何かしらお話してるうちに姉さんを此處まで連れて來ちやつた。この砂山だつたのよ、この前登つたところは。

あさ子　さうだつたのね。（上を仰見て）道が違つてたから、わたし氣がつかなかつた。

雪江　登つて見ませうか。あしこから見る朝景色はいゝに極つてるわ。

あさ子　わたし今日は大儀よ。この次にでもしませうよ。

雪江（人を仰見て）あ、あしこで誰れかゞあたし達を呼んでますよ。……兄さんらしいわ。

雪江、手を擧げて向うへ合圖をする。

あさ子　貸別莊を見に行つたんでせう。わたしはこの土地に家を借りて保養する氣にはなれないと云つてるに、兄さんは自分で獨極めに極めて行つたのよ。餘計なことだわ。

雪江　でも、姉さんは二三ケ月くらゐは、こんな空氣のいゝ海岸で養生さなる方がいゝの。東京の家にゐちや、とても充分な養生の出來る譯ないんだから。……兄さんは此處へ下りて來るらしいの。此處で待つてゐませうよ。

二人は砂の上に腰をおろす。

雪江　此處にゐると、あなたの兄さんが向うからやつて來さうな氣がするぢやないの?。姉さんはさう思はなくつて?

あさ子　思ふも思はないも、雪ちやんは、あの時の事を思出させようとして、わたしを此處へ引張つて來たんでせう。

雪江　本當はさうよ。この春のやうにまた此處で珍らしい人に會へやしないかと思つて。

あさ子　あなたはどんなに珍らしい人に會ひたいの?。珍らしい人なんか、會つたて詰らないぢやないの。わたし、奇蹟はもう澤山よ。家の人がみんな無事で、喧嘩もしないで今日を暮してれば、もうそれで滿足だと思つてゐるの。あなたが今わたしに聞きたさうにしてること、此處で聞かないで下さいね。あたしの氣を惡くするばかりだから。

雪江　わたしが何を聞きたがつてるか、姉さん知りもしないくせに。

あさ子　まあ海でも見てゐらつしやいな。……沖は靜かなのに、磯へ打寄せる波は隨分勢ひがいゝぢやないの。

雪江　暴風の吹く時にはこの砂山の側までも波が打つて來るんですつてね。あたしそんな時を一度見たいと思つてよ。

あさ子　そんなひどい波にたび〳〵打たれても、この砂山はよく崩れないものだわね。

雪江　風や波のお話は詰らないわ。それよりも、あたしが長い間聞きたいと思つてることを、姉さんは話して下さらない?。。……默つてお母さんにも誰れにもあたしの口から洩らしやしないわ。……姉さんが怒つてもいゝから、あたし訊いてよ。……これは、あなたの兄さんのお家にゐた書生さんがあたしに話したのだけど、姉さんが兄さんをはじめて訪ねていらしつた時に、たま子さんとかいふ人が兄さんを訪ねて來ると、兄さんと姉さんと二人してその人を掴まへ

て、打つたり蹴つたりした揚句に、その女の人を裸にして縛りつけたんですつてね。あたし、書生さんに聞いた時には驚いちやつて、信じられなかつたんですけど、後で時々考へると、何だか信じられさうな氣持がするのよ。裸にして縛上るなんて多少おまけがあるかも知れないけど、……（姉の顔に注意しながら話を途切らす）

あさ子（呆れて）わたしにそんな酷いことが出來ると思つて？。あの人家を出されたものだから、わたし達を怨らんでそんな酷いこと言觸らすのよ。……いやな奴ね。

雪江　でも、あの書生さん、話しつ振りが嘘らしくはなさゝうだつたの。

あさ子（やゝ氣色ばんで）ぢや、雪ちやんはわたしがそんなことしたと思つてるの？

雪江　だから姉さんに聞きたいと思つてたんです。……あたしだつて、その場合にそのくらゐなことしたかも知れないわ。その女の人は親の敵見たいなものぢやなくつて？。お父さんを怒らせて頓死させたり、兄さんの一生をあやまたせたりした人なんですもの。あたし生れてはじめて、人を打つたり蹴つたり出來る氣持が分つたやうな氣がしてよ。姉さんがその女の人を荊棘の鞭で打つて、身體を傷だらけ血だらけにしたと聞いても、あたしちつとも吃驚しないわ。却つて氣が晴れて胸がスーツとするやうに思はれてよ。

あさ子　雪ちやんはきついわね。（相手の顔を見て不快を感じたらしく）でも、そんな話止して下さいね。わたし臆病だから。……あのたま子といふ女に、わたしなんかゞ手を當てられるものですか。わたしこそ打たれて息の根を止められるかも知れないの。……でも、そんな話止しませう。女のくせに、打つたり蹴つたりの話、いやぢやないの。

雪江　でも、あたし、この頃さう思はれるんですもの。女だからつてお體裁ばかりつくつてゐるのはいやぢやないの？姉さんだつて負けてゐていゝ氣持はしないでせう。

あさ子　わたし、誰れに負けてゐるの？
雪江　だつて、あなたの兄さんは……
あさ子（相手を遮つて）そんな話、もう止しませう。雪ちやんもしつこいわね。」
そこへ、橋本が元氣のいゝ顏して入つて來る。
橋本　二人ともいやに不景氣な顏してるぢやないか。……おれは今、昨夕の話の貸家を見て來たよ。間取りの工合ひもいゝし風通しもいゝし、今日からでも越したいくらゐだ。
あさ子　でも、借りる約束はまだなさらないんでせう。……獨りでお極めになつても困りますよ。
橋本　いや、お前の爲めばかりぢやない、おれも時々は遊びに來たいんだから。この春來た時に思ひついたことが實行出來るやうな身分になつたんだからいゝぢやないか。雪江から時々非難されてゐたやうに、家族の健康に無頓着だつたおれが、大磯に休養所を設けられるやうになつたのは、これほど結構な事はないぢやないか。
あさ子　わたし大磯に押籠められるのはいやです（ふと力を入れて云ふ）
雪江　本當にさうよ。
橋本　押籠める？
あさ子　わたし、獨りでこんな田舍で暮すのはいやです。
橋本　獨りつてことないぢやないか。老婢は此方へ寄越しとくし、雪江なんかもたび〳〵やつて來るんだからいゝよ。
あさ子　老婢と二人で此方で暮すなんて、いやなことだわ。そんなことしたら、わたし病氣になつちまひますよ。
雪江　あんなゴミ〳〵した騷々しい家にいるよりか、こんな靜かな空氣のいい土地にゐる方がどれほどいいか知りやし

ないのに。

あさ子　あなたにも（峯江を見て、それから橋本を見て）あなたにも分らないのよ。わたしこの頃になつて、自分だけは世の中に一人ぼつちで生きてることがよく分つたのです。わたしを生んだ父親の顔も母親の顔を知りたいと思つたこともあつたのだけど、今はもうそんな顔知りたかないの。………せめて、わたしを橋本家の家庭に、生きてる間は置いて下さいな。いくら景色がよくつても空氣がよくつても、あの沖に浮んでる小舟のやうに、大海の中へ一人ぼつちで置いとかれちや、わたし怖くつて生きてられりやしませんよ。

橋本　詰らんこと云つてる。お前の健康のために此方で保養させようと思つてゐんぢやないか。

あさ子　いくらいい空氣だつて、あたしの心の健康の足しになりやしない。田舍で氣儘に遊ばせとけば丈夫になると思つてゐらつしやるなら、あなたには私の心がまだ分らないのよ。

橋本　大山の事をまだ案じてるのかい。あの男はこちらでどうしようたつて、もう爲方がないよ。

あさ子　あたし、大山の兄なぞに一生會ひたいと思つてやしないわ。神崎さんの御隱居さんが、わたしの生みの母だつたにしても、あたしの方から會ひたいとは思ひませんよ。（立上つて）さあ、波打際をつたつて宿へ歸りませう。わたしなぜこんな所へ來たのだらう。

あさ子が歩出すと、橋本も隨いて行く。さつきから何か考へてゐた峯江は、獨り後に殘つてゐる。夫婦は峯江の事は忘れてゐるやうに一しよに出てゆく。

（三）の二　ある山道

ある山路の途中。一方は嶮崖である。人間の腰掛けるに適した岩が出てゐる。たま子が先きにし、大山が後からその道を上つて來る。彼れはともすると、彼女に對して嶮しい目を注いでゐる。

大山　おれたちのためにいい休み場が出來てる。その岩の上で一休みしよう。

たま子　(立留つて) さつき休んだばかりなのに、もう弱つたの?。あなたは二三年前よりもまた足が弱くなつたのね。箱根へ上つた時にはもつと強かつたぢやないの?

大山　弱いのは足ばかりぢやない。

苦しげに息を吐いて岩上に腰をおろす。

たま子　また妹さんに手を貸して呉れと云ふのぢやない?

端折つてゐた裾をおろして、岩上に腰をおろす。

たま子　あゝ、海が見える。御覽なさい、いい景色よ。

大山　いいねえ(氣のない返事をする)

たま子　(顧みて) さつきからいやに卒氣ないのね。今日はあなた、どうかしてゐるわ。

大山　山路に疲れたゞけだよ。……(ふと思出したやうに、調子づいた口調で) 今日あたりだよ。橋本が家族同伴で大磯へ行つてるのは、おれにも行かないかと勸められたのだが、おれは止した。

たま子　なぜいらつしやらなかつたの?……大磯へいらつしやるかはりに、あたしを此處へ連れてらしつたの?。

大山　さういふ譯ぢやなかつたが、大磯といふ土地もいやだし、あの仲間に入るのもいやだつたから。

たま子　なぜ、あの土地がおいやなの?山吹の咲いてたあの庭で遊んでた時ほど樂しいことは、あたしたちの一生にま

たゞありやしませんよ。御自分一人で昔を思出しに行つたくせに、なぜあたしを一しよに連れてつて、昔の思出を樂ませて下さらないの？。……今日こんな所へ來るかはりに大磯へ行つて、妹さんやその家族の方にあたしを引合せて下されはよかつたのに。あたしあなたの妹さんとなら、直ぐ仲よくなつてよ。

大山　お前があの妹と仲がよくなる？そんなことがあるべきことか。……（獨言のやうに）それこそ天國と地獄とが妥協するやうなものだ。

たま子　何ですつて？。天國と地獄と仰有つたわね。（興奮して）あたしが地獄で妹さんが天國だと云ふんですか。

大山　いや、それは譬諭に過ぎないんだ。あんな不景氣な俗つぽい女が、何で天國な事があるものか。

たま子　だけど、美しい、柔しさうな方ぢやないの？。それにあなたのたつた一人の妹なんだから、あたし會つて打解けたお話して、一生親密にして頂きたいと思つてるの。あの方もあたしの心をよく知つて下すつたら、決してお憎みになさらないわ。

大山　女といふ者はよくそんなことを思ふものだが、お前でさへさうか。（海の見える筈の一方を指差しゝて）あの邊が大磯の濱なんだよ。今時分、朝の涼しいうちにみんなで散歩してるだらう。橋本は工場の仕事が當つて、懐工合が、ゝさうだから、得意になつて、成金の眞似くらゐしてるんだらう。

たま子　ぢや、妹さんは幸福ね。あなただつてさういふ家と御親類になつたら何かに心强いぢやないの？

大山　理窟はさうだ。貧乏したおれは、この上財産を剝取られる心配はないから、誰れと親類になつても、得はしても損をする氣遣ひはないよ。……だけど、この貧乏のおれをわざ〳〵冷かしに來た者があるんだから世の中は不思議なものさ。

たま子　それはあたしのこと？

大山　まあ、さうだ。

たま子　あたし、あなたの思つてらつしやるほど現金な女ぢやないわ。だけど、あたしが貧乏なあなたを咬かしたのが不思議なら、あなたが御自分でさん〴〵に侮辱したわたしの後を追つていらしつたのも随分不思議ぢやありませんか。

大山　やつぱり昔のやうに、お前に迷つてるためだと思つてるんだらう。

たま子　それほど己惚れが強かないことよ。

大山　いや遠慮なく己惚れてもいゝさ。何處からか湧いて出た妹を打やつといて、牛込の家を飛出してから、もう三四ケ月も時が經つが、今までお前の後を追續けてゐたやうなものだ。どうする當てがあるのでもなかつたし、何處で落着いてゐたこともなかつたのに、たゞ追續けてゐたのだ。見ろ、おれはあの時からまた痩せたぢやないか。

たま子　痩せたのはお互樣よ。

大山　これだけはおれの氣持の上だけでゞも、貧乏の襤褸隱しにして手離さないつもりだつた、西洋の本でも油絵でも、みんな賣飛して、襤褸のまゝでお前の後を追續けてゐたのだ。…………だけど、おれももう息が續かなくなつた。今日この山路が登りきれるか知ら。

たま子　手を引いて上げませうか。見てる人はないんだから。

大山　こんな苦しい思ひして、あしこの宿へ行着いたつて、一日もゆつくり遊んでられやしないんだ。

たま子　御自分で誘出して此處まで連れて來てゐながら、今になつてそんな煮切らないこと云つちや困るぢやないの。もう一元氣お出しなさいな。足が疲れても、青々した山を上つて行くのはいゝ氣持ぢやなくつて？。誰れも聞いてる

人ないんだから、唄を唄つて氣樂に歩いて行くといゝわ。あなたも昔は御自慢でいろんな唄を唄つてたぢやないの。

大山　そんなものは忘れてしまつた。お前こそ、唄ひたきや唄つて見ろ。

たま子　戯談にもわたしに唄つて見ろと、あなたが仰有つたのは、久振りだわね。……ぢや、何か唄ひませうか。よく
つて、(媚びを見せる)

大山　(何かを聞きつけたやうに)　オイ、誰れか來るやうだぜ。

たま子　來たつていゝぢやないの?。あなたはこの頃は罪人見たいに、人に會ふと恐れるのね。

そこへ荷物を背負つた男が現はれる。二人に會釋して行過ぎようとする。

たま子　上の方は道が惡か御座いませんの?

その男　さうさ。此間の大雨でえらく崖の崩れたところがあるだよ。二人並んぢや通れねえ。

たま子　村まではもう少しなんでせう。

その男　あゝ、もう一息だ。

迂散くさい目を二人の方へ注いでから行過ぎる。

大山　何だつて、あんな男に口を利くんだい。おれだちの顏を見てゐたあの顏は氣味が惡いぢやないか。

たま子　驅落者とでも思つたんでせう。さう思はれちやいけないの?

大山　あんな知らない男一人にでも、おれたちがこの道を上つてることを見られちや、おれは安心して此處を上つて行
けないんだ。

たま子　何を、譯の分らないことを云ふんです?。あたし達は途中で人に會はなさ過ぎるくらいだわ。人間の住まない
山へ來たのぢやないし。……餘計な心配しないでさあ行きませうよ。

そこへ、また荷物を背負つた男が現はれる。二人に會釋して行過ぎやうとする。

たま子　上の方は道が悪か御座いませんの？

その男　悪かないが、此間の大雨で橋が壊れてるから、あしこは氣をつけなきや危ねえよ。

　その男も迂散くさい目を二人の方へ注いでから行過ぎる。

大山　おれはもう止さう。あとへ引返さう。

たま子　橋が落ちてるのが怖いの？

大山　もうこれで二人の男がおれの顔を知つてる。……お前が崖から落ちるか、橋から落ちるかしたら、おれの所爲だつてあの二人は云ふだらう。

たま子　……あたしを崖から突落して知らん顔してゐようと思つてらつしやるの？。そんな下さらないことを考へるものぢやないわ。(平然として云つて)さあ、行きませう(手を執つて促す)

大山　お前はおれを信じてるのか。

たま子　あなたが、あたしをどうもし得ないつてことは。

　大山、手を執られたまゝ、力なく立上る。

(幕)

人物

大山誠吉(三十餘歳)

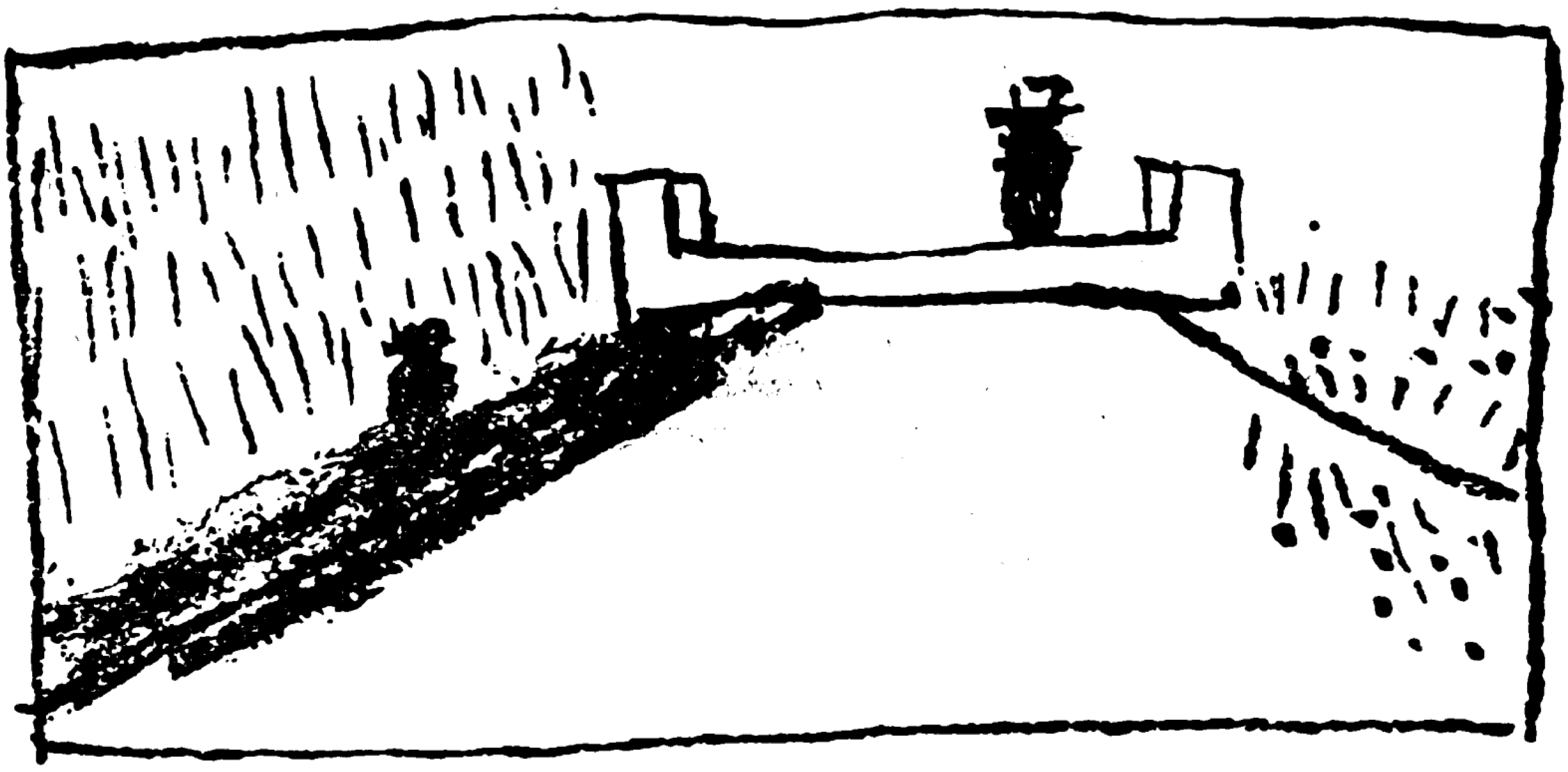
橋本久(大山より數歳の年長者)

あさ子(三十歳くらゐ)

雪江(二十歳くらゐ)

米村たま子(三十未滿)

少年、書生、ある男など。



口腹の小說

木下杢太郎

一

「ばあや、僕は途方もない事を企てたんだ。僕は全くお前を信用して居るのだけれども、今度だけはお前の手では間に合はないんだよ。ばあや、途方もない事なのだよ。」

勤の先から歸つて玄關に入ると——歸つてと云つても直接に歸つたわけではない。途中クラブに寄つて、そこで偶然落ち合つた二人の僚友とつひ一寸した家で夕飯を食つて、それから歸つたのであるから、もう九時過ぎであつた——玄關を入ると直ぐ自分はさう呼び掛けた。

ばあやは前掛で手を拭きふき、目を瞬かせながら、玄關の直ぐ後ろになつてゐる臺所から出て來た。そして殘念な顔付をして言つた。

「あんたは今夜もよそで御飯を召上つていらつしやつたんですね。あたし、今夜は

好いものを拵へて置いたんですのよ。」

自分は、ばあやを見て氣の毒になつた。そのせいか、ばあやの思つたより年の寄つたことなどに今夜は氣が付いたのである。

「今日は僕巴里で一緒に居た人に會つたから四五日うちに招かうと思ふのだ。だから全く巴里風の料理を拵へさせるんだ。出來る。きつと出來る。僕自分でやつて見る。」

「いつかの鰻の蒲燒のやうにね。」ばあやは笑つた。

ばあやはたつた二月からこつち自分の處に來て居るのであるが、然し元來は自分がまだ學生だつた時からの知己である。當時は——否その後もずつと、自分の友だちなる一詩人の家に勤めてゐた女である。そしてその詩人の趣味、性癖は勿論、その凡ての交遊の仲間の氣質をも熟知して居るのであつた。彼女は江戸育ちであるから、客膳の用意など、氣の利いたものであつた。今の鰻の話は此頃、自分が鰻を割くのは得意だからと云つて、ばあやに鰻を買はせ、友の家の臺所で、それを割いて見せたところが、豫告のやうに手際よく行かなくて、さんざ冷かされたことを、ばあやが今も覺えて居たのであつた。

で或時自分は彼女を——詩人の郷里なる水澤に富む南國に見出した。そこでは彼女は、親身の人でもあるかの如くその家に慣れて、我等の爲めに洗濯したての浴衣を簞笥から出してくれたりした。又或時は、富澤町の後街のしもとやに住む人であつた。それは東京下町の氣分に沈潜し、古風の言葉を用ゐてその情趣を歌ふことが仲間のうちの流行であつた時分我が友の詩人が假に定めたる寓居で我々はこの淺草生れの女から、或は二上り新内、或は二三の古い小唄を教はつて、みんなで聲を揃へて合唱したものであつた。その頃彼女は已に四十を越えて居た。それと共に彼女はまた我々に

江戸傳承の男女のかりそめの情戯の、如何に悲哀であるかをも暗示したのであつた。またそれ故に、彼女は――自分の蒔いた種子を拾ふべく、我々をば、しばしば、夜遅く、とある小さな旗亭に捜しに來なければならなかつた。勇快なるその家の女主人が、我々白面の書生に、費用を要せざる酒宴を提供したので、我々はともするとそこに集つて、我々相當の饗宴を開いた。我々はその家に於て、身を若き秀次、若き宗輔の役者になぞらへたりした。或者はそれを詩にし、短い劇曲にする術をも有してゐた。

ともすると酩酊し、放歌し、亂舞した。

そこへ彼女がやつて來た。そして「おや、Sさんまで今夜は大虎ですね。さ、もうみんな歸りませう。今夜はみんな家へお宿まんなさい。」

言ひながらも彼女は呆然として――半ばあきれ返り、半ば心を少年の放逸に投入して――そして獨りごとのやうに言つた。「あゝみんなおみきさんのする仕業だ。」

おみきさんとは彼女が酒の精を女性化して呼ぶ所の敬稱であつた。

また或時は、自分は彼女をある病院の一室の裡に見出した。そこには自分は、口腔の手術を受けたる病人として横はつて居た。自分の隣には一老富豪が臥してゐたのである。この翁のかく自分と同室したのは、當時その病院が部分的の修繕を始め、他に好個の室がなかつた故であつた。同病であつたから、我々は互に相憐んだ。

翁には二人の女があつた。他にも兒孫があつたかも知れぬが、我々が十日許同室してゐた間に、此翁を訪ねるものは、常にこの二人であつた。孰れも眉目形が美しかつた。或時、その妹の方が、何かの機に自分の掛蒲團を正しくしてくれたこともあつた。

時は夏であり、庭にはダリヤの花が咲いて居た。黄蜂がしばしば花圃の空を渡り、そして下宿屋らしい隣家の二階からは、絶えず下手な尺八が聞えて來た。此等の鈍い音響は夏の午時の閑靜を一層強くしたのみならず、その拙い曲節は能く青年の情操に甘味な空想の花を開かせるに足りた。

それ等の人々の運命と、自分とは唯その一週間、十日の間に於て、最大の接近を保つた。その以前も、その以後も、遠く、拋物線の如く相離れる。

宿命の歩みは常に休む時はない。ああ、それ等の人々は、今、世の何く、地の何れに在るのであらうか。

この老翁が他の室に移つて、自分は新しい隣人を迎へたのであつたが、その人の自分に語つた言葉の一節は今も記憶に殘つてゐる。

「あなたは森軍醫總監を御存知だらうですねえ。私もこの間、魔睡といふ小説を讀みました。森閣下は輕々しく事を爲される方ではないのですから、あの小説を書かれるには何か深いお考があつたのでせう」と此人が自分に感想を述べた。

やがて自分は此人が訴ふべくして訴へざる不平をその心に藏するのであることを悟つた。その妻は――是は後に世界的に有名な人となつた――久しからぬ前に、その夫を棄て他の人の家に走つたのだといふ事を自分はあとで聞き知つた。

かう云ふ病院生活の間に、ばあやは時々自分を見まつてくれたのである。或時は自分で作つたといふ餡なんぞを重箱に詰めて持つて來た。そしていつの間にか隣の翁やその娘たちと長話を始めた。

「わかいけれども感心な方なんですよ。詩も作れば戯曲も書くんですよ……」

詩人の家に居るので、彼女は以前の小僧として詩、戯曲等の貴いものであるといふ考を抱いて居た。然しこの考は世

間普通の通用手形ではなかつた。この老翁を相手としては、寧ろこの評語は「この人は怠け者ですよ」とか「道樂者ですよ」とか云ふのと同じものであつた。却つて「この方は文學などはおやりにならないのですよ、唯學校ばかりに精を出しますよ」と云つてくれた方が、もつと善く自分を世間に推薦することになつたのであつた。ばあやは自ら識らずして自分を世間に裏切つたのであるが、然し氣の好い老人もその娘たちも、さもさも同感する人のやうに、ばあやの話を聽くのであつた。

自分は老人に言つた「ばあやはあんな事を言ひますけれども、それはみんなうそですよ。うそでないにしても誇張なんです。私はもと文學が好きで、そんな專門に就かうと考へたやうなこともあつたんですが、私の田舍の親たちが、それを心配して夜中に水垢離を取つたりするので、私ももう止めてしまひました。唯、ほんの一二年そんな事をしたいといふ丈なんです。」

自分はかう辯解したが、實際は、自分の方が嘘であつた。當時はやはり内緒に、盛んに物を書いたりなどしてゐたのである。自分のこのお座なりのいひ分けの辭は、今もなほ殘つてゐる。それは必しも相手を欺かうとする爲めではないが、相手に得心の行くまで說明する煩勞を厭ふからである。が、また實際はこの物ぐさは卑怯と同じであつた。その爲め自分の意志生活、道德生活は多大の疵を得たのである。

「そして繪も大へんお上手なんですよ……」

とばあやは、段々と自分の罪狀を重くした。

文學及び藝術といふ言葉は、今は然し自分を苦しめることが少くなつた。然しばあやがこんな事を言つた當時には、屢々自分を不愉快にした。

自分が時々つまらない短篇を雜誌に載せる事が同じ級の誰れ彼れの氣付く所となつた。丁度其頃或る新聞が自分等の教授の一人に關して、皮肉な低級趣味の記事を掲げたことがあつた。すると自分の仲間の一人が言つた。

「君だらうＸ教授の事を新聞に出したのは。」

是れは質問といふよりも非難であつた。彼等はその記事を作つたものが私であるといふことをば何等の論證を經ることとなし決定してしまつたのである。文學を愛する人と新聞の雜報記者との間の概念には、彼等の頭には差別階級がなかつた。そう云つた男は今では偉い人になつて居り、その差別は出來なくても、立派な學者で通つてゐる。そして予とても、現在、それらの人に對して何等の反感をも持つてゐない。憤怒、反感、嫉妬……そんな心の動揺も、長い月日のはの底に沒しては、もはや無い始と同じである——

自分にも、過去と云ふものが段々と大きくなつて行くが、今玄關に入るとばあやの年を取つたことが今更感ぜられた。ばあやの不安さうな顏付を見て、自分はそれを安心させる爲めに、

「料理はね、ばあや、今度拵僕自分でやるから心配することはないや。唯僕言ふから材料を買ひ集めて置いておくれ。」

ばあやはまた急に笑ひ出した。「また豚の膝小僧を誂へるんですか。」

ばあやは東京で育つたから豚の肉などは好きではなかつた。一頃その主人の詩人の家に集まつた人々はみんな通がりやであつたから牛鍋などにさへ故更輕蔑を示したものである。ばあやの今のせりふはやはりその時代に胚胎してゐる。

二

白い上着をつけ、白い帽子を被つて、大きな瓦斯爐の前に立つ男を、自分の身の上に空想して見たことは一二度ではなかつた。然し實際、假そめにも、それを實行するやうにならうとは考へもしなかつたのであつた。

自分は子供の時から樣々な夢を見たが、今度の夢の姿が一番みすぼらしい。二十前後には長髮に拍車の靴で白馬に乘る男俠の青年に自分を見立てて、踊る胸を抱へて、上野の美術學校に規則書を貰ひに行つたことがあつた。又數年前支那を旅行した時には、オオレル・スタインか、エッワアル・シャワンヌかになつた積りになり、白い植民地帽を被り、ゲエトルを卷いたものである。又亞米利加に渡ると、宿屋も芝居をも容れる大きなビルヂングの持主になり、倫敦に行くと、瀟洒なる喫茶店の經營者になつたりした。そして巴里に行き一二年ぶらぶらしてゐるうちに、自分の空想は自分を牛羊を炙るグリルルウムの庖廚長に墮落させてしまつたのである。

割烹は藝術の一種であり、美食は最高の贅澤であるなどと時々途方もないことを考へ出すやうになつた。

自分はさつき飲んだ濃い珈琲の爲めに、强烈に空想力を刺戟られて、料理の事で頭が一杯になつてしまつた。何かそんな本をと捜して見るが、各種の巴里料理屋案内だの、近世饗宴史だのの類はあるが、生憎調理の技術を說いたものは一冊もなかつた。で臺所へ出て、

「ばあや、さあ出して御覽、うちには一體どんな臺所道具があるんだい。」

「テンピ」は僅かに二切の肉を炙るに適するものであつた。たつた一つの瓦斯涼爐は觸れても火傷もすまいほどの弱い焰をしか吹かなかつた。あちこちに汚れた小鍋、笊、鉢が轉がり、水道のゴム管は破れ、刺身庖丁は切れなかつた。凡て女の仕事の不秩序、不徹底をば、この臺所が象徵してゐた。

それでも戶袋を捜すと、いつ何處で買つたのか、牛刀の貧弱な小刀、フルシエットの類もあり、數々の玻璃杯もあつ

た。

それらの道具を完備せしめやうといふ慾望が忽ちめらめらと燃え上つた。

巴里のベルリツ學校の隣の金物屋には、あれあれの道具があつた。その銀の皿の、浮彫は高雅な模樣であつたなどと云ふことが一時に想起せられた。さう云ふものは、散歩の度毎に、硝子窓から眺め込んだ。然し今日の今まで、そんなものを買はうなどと云ふ氣を起したことはなかつた。今にして始めて、さう云ふ氣にならなかつたことを悔んだ。

さて菜單(メニユ)を作る段になつてまた一困難に會した。がそれは大したことではなかつた。晏餐(バンケエ)や人に呼ばれた時のものはなかつたが、時折料理屋で、ギヤルソンに内證で貰つた菜單子の五六枚は直き捜し出すことが出來た。それは魯西亞舞踏や、コメデイ・フランセエズの新狂言の番附と重なりあつて居り、自らの日記となつてゐた。マダム・テエレズ・ビエラアが、ジエラルデイの「戀する」を演ずるを見た日にはマルゲリイで、フイレエ・ド・ソオを食べた。マドモアゼル・テツシエエの出るロカンデリヤの日の午はグリルルウム・サン・ミシエルで冷いジエラチン漬のトリユイトを食べた。

美食と藝術——對照は極めて自然的である。

空想は盛になつた。鶏子、鯽、牛、羊、又はトリユイト、脂肝(フオアグラア)、アルベルジユなどが、シスレエの繪の遠景の如く、デユビシイの曲の海波の如くに、頭の内に洶湧する。

が、此音樂、この油彩を、わが臺所から創造する一事に想到すると、勇氣頓に挫折せざるを得ぬのであつた。

よしんばそれが出來たにしても、あのブルゴオニユなく、あのフインがない。

で我輩は、ラリユウ、ラペルウズ所は棄てて、第二流のドルアンとか、グリルルウム、メヂシスあたりの店で行からといふことに極めて、心持がやや穩になつた。實際のところその方が自分にはより親しく、そしてそれが實は「我々の

巴里」であつたのである。

たとへば自分は、用事あつて、しばしばE停車場の附近を通つた。そして時が正午の前後である場合にはいつもTEといふ料理屋で午飯を取ることにした。厨房長(メエトルドテル)も凡てのギヤルソンも顔なじみになつた。そこは無論一流の料理屋であつたけれども、季節には苺、木苺、パツシユ・メルバ、メロンの如きを、一流の家並みに食はせるのであつた。

マロニエの葉がさはめき始め、春のサロンの盛となる頃は、新しい苺に對する慾望が油然として起つた。さうすると夕飯時の、その街區に用事のない時刻にも、地下線に乘つて、わざわざTEの店に通つた。一週二週又三月四月の旅からかへると、まづ訪づれるは其店であるやうになつた。丁度自分が久しく東京を留守にして、そして偶そこに歸る時は必ず、あの汚い青木堂の二階へ足を向けたやうに。

葉が落ち冬の雨になる。ノエルも過ぎて、都の夜の生活がいよいよとないものになる。それからミカレムの祭。マロニエがまた鮮緑の影を成すと、苺、桃に對する慾望が再び廻つて來る。

一年の季節の移り更りは、北方の國土では亞熱帶の地方に於けるほど顯著ではない。殊に歐羅巴の大都に於ては、殆春及び秋の季節の存在を忘れる。日本及び南方支那の國民に自然の風物を詠ずる詩の多きは、その緣れ深いと考へられる。自分は然しTEの店に顯はれる料理の品目や殊に果實の種類に由つて、一年四季の移動を象徵的に、顯著に感ずるのであつた。是れは一には、我々が、俳句などと云ふ文學の形式におのづから薰染してゐるせいであつたかも知れない。そして食後の珈琲の碗を手に取り、給仕がきれいに皿の上に並べるフレエズ、ア、ラ、クレエムの苺を見入りなが

ら、十數年前の東京の生活を思ひ出したりなどした。

その頃、我々の仲間のうちに運動家が居て、端艇競爭の選手であつたりしたので、月に一度、多い時には二度も三度も、艇に出かけた。艇庫から船を下して、言問で團子、また果物、麥酒その他いろいろの食物を仕込み、上に漕ぎ上る。中の植半、八百松、左には富豪の大きな別莊、さう云ふ建物の形や情趣は、暗記するほどに腦中に印象せられた。左岸のさう云ふ家の間に、河に直接して小さな空地があり、そこに藤の棚が出來てゐた。その空地には垣根も結つてなかつたかと覺えて居る。春になるとその藤が芽を出した。やがて芽は葉となり、葉は肥えて擴がり、そして五月には長き薄紫の花を垂した。自然も人生もその時が面白い絶頂であつた。人はわかく、夢は夢を生んだ。女の如きも、四十から先きの人に對するとは、全く別趣の印象を與へるのであつた。——端艇を庫に入れると、我々のうちで一番溫泉好であつた一人が發見した、大きな浴場を持つ一料理屋で大勢晩餐を取つた。たしか竹松といふのが其名であつた。

我々は秋風が立つた後でも端艇漕ぎを止めなかつた。然しその時は已に武藏野の風物が——そのやや粗暴なうら寂しい自然が、昔の心こまかい江戸人に强い影響を與へなかつた筈はない。江戸の平民文學に現はれた情緒はきつと此者の爲めである——我々の心の底を搖蕩した。藤棚の枯葉の間に下る、大きな豆は、いかにも我々のこの氣分に似合ふさびしさを持つてゐた。

つまりその藤の葉、藤の豆を私は巴里に於てやや中心を離れた街區の一料理屋の果物に思出したのであつた。櫻の實、草苺は、夏の季節の好きな私の心を快活にした。それは初期の印象派の繪を見ると同じやうな感情である。メロンは夏の終を思はせた。苺が唯タルトの上にのみ見られる時は、もはや秋風がしみじみと身に染みた。でも秋の雨、秋の風は、武藏野の中の都會に於けるとは趣を殊にした。それには、荒涼、悲痛の感じが伴はないで、これから季節に入る

といふ、樂しい懷感が附隨してゐた。夏好、冬嫌の自分も、二三年の間この狂ひ季節に慣るる身となつた。

話が横に外れた。さてその料理屋での、ある日の午餐の時である。その日の特別の獻立は Carré de pré salé であつた。ニツケル製の、下にアルコオルランプの附いた高脚の大皿の上には、厨長が、その蓋を明けると、細紐で卷かれた肉の大塊が、ゆるやかに、蒸氣を吐いてゐた。このプラア、ド、ジユウルは、その日は別して需要が多かつた。メエトルの大きな刀で薄く肉を削ぐ。ともすると脂の處がばらばらになりかける。大きな廣さに切れないで、小切になつて落ちるのもある。厚きもあり、薄きもあつた。薄いものには、皿の上に落ち散つた小切を取り合せて、好いほどに分量した。そして小さい金風爐に温めて置いたたれを掛け、また菜と馬鈴薯を之に配する。一番の根をも止めぬ白髮の厨長は、その手際甚であつた。が、彼が立ち去つた後は、まだわかい男が代つて其役を勤めた。この漢子の盛り分ける肉は、嚮きの老厨長のに比すると幅薄く、且つその分量が少かつた。自分は好物の羊の炙肉を誂へて居るので、その大皿の料理に大した興味を持たなかつたが、唯、グリルの來るのに長い間があつたので、見るともなく、それ等の光景を見てゐた。そのうち段々とその方が面白くなつて來た。

「やあ、あの皿が自分の處に來たら好かつたなあ。あすこの處はうまさうだ。奴め、だいぶ厚く切りやがつた。たれも存分掛けたぞ。」

などと、片唾をのんで觀察した。

私の傍の卓には英吉利人の夫婦が腰をかけた。八月はあまり富裕ならぬ英國人の巴里見物に來る月である。この夫婦は二人とも佛蘭西語を話さなかつた。ギヤルソンが、それも亦まるで英語を話さない奴で、仕方がなく通辯を迎ひにやつた。その通辯がまだ來ないうちに用を聽いてしまつた。二人とも、舌平目の燒いたのと、いまの大皿のサレエであ

る。フランスの爲替が近頃ひどく低いので、滅法安い料理と思ふだらうが、これほどの料理も一寸倫敦では食べられまい。

私の右隣はこの店の御常連だつた。停車場附近と云ふ街區だから、一寸何商賣か判定がつかない。二人とも初めから肉の皿を註文してゐた。一人はシヤトブリアンであつたが、も一人は、今日のキヤレエ、ド、プレ、サレエを誂へた。そのあとでデツセエルを取つたばかりであるのに、酒だけは、ブルゴオニユの相當の處を、しかも二本も飲んだ。

向つて右の角は、この頃この店にちよいちよい顏を見せる二人のわかい女である。何者であるか、國籍がどこであるか、ちよつと見當が附かない。髮が眞黃色で、眼が飽くまでも碧く、それにその顏立から言つても、無論フランス人ではない。多分獨逸系の人種であらうが、その民族としては二人ともすばらしい方であつた。その不定に動かす目付から深窓に育つた人たちでないことがすぐ分る。リコエエルも飲めばシガレツトも吸ふ。まづ商賣人だらうと思はれるが、毎日この店で中食し、いつも一人に就いて三十法もそれ以上も拂つてゐるところを見ると、また服裝も相當であるしするし、滿更のところではないらしい。一度ギヤルソンに、あいつ等一體何者だいと居つて見ようと思つたが、いつも傍の卓に人が居たりして果さなかつた。

まん中の卓。田舍から出て來て、この近くの停車場へ下りたのらしい、中年の夫婦もの。その女房の風があまりに野暮臭かつたので、二人が入つた時、隣の卓の連中が思はず、くすつと言つて急に口を噤んだ。

その左。これが私のやうに一人である。外國人に相違ないがスイスかスカンチナヴイかよく分からぬ。私の氣付いたことは、此人も亦私のやうに食堂内の觀察者であつたことである。お互に話相手が無かつたからのことである。

其左の最端の男も一人者であつたが、是も亦この家の常連と見えて、廚長(メエトル)と握手し、メニユウも見ないで、口頭で料

理を選擇した。

壁を隔てて、なほ二つの間があつたが、その方の樣子はよく見えなかつた。

誂へたグリルがまだ出來て來ないので、私はまた大皿の方を眺めた。白髮の老厨長が前の若いのに代つて肉を切り出した。やつぱり切り方が鷹揚である。三人の組があつたと見えて三つの皿に取り分け、ギヤルソンが手傳つてそれに野菜を載せて引き下る。一寸亞米利加のロスビフを思はせる大切れである。そのあとではさすがの大塊の肉も心細くなつた。

途端に

「ギヤルソン！」

と呼んだものがある。見れば向の卓の一人者である。私がスカンヂナヴイ人と假想した男である。

さつきからまじまじと大皿の肉塊を眺めてゐた此男は、それを切る厨夫が變り、たつた今食慾をそそる鮮紅色の大切れが運ばれたのに誘はれたのか、競賣に見とれた男のやうにギヤルソンを呼んだのである。そして自分にもその皿を註文した。

「アン　キヤレエ。」

とギヤルソンが厨長に、大聲に通じる。私は勝負事を見る人の興味を以て厨長の手を見た（彼の男もまた見てゐる。）厨長が大刀を執つて肉を切ると、その部分が或る抵抗を與へた。厨長が少し力を加へたらしい。忽ち刀は肉を横つて空に出て、小片の部厚な肉が、重くぱさりと下に落ちた。厨長は其冷靜且つ嚴肅の容貌及び態度を變ずることなく、第二の割を與へる……。私はくたくだしい叙述を省くが、結局小皿の肉は、小さく厚い不揃ひな二三片の集りであり、前の

瓜のやうな鮮紅色の柔かさうなのとは雲泥の相違であつた。つまりこの男は餘り遲くジョオカアの札を出したのである。

然し給仕がその皿を彼の卓に持つて行つた時には、わかい男は別に不平さうな顏もしないで傍のフルシエットを取り上げた。私の觀察もそれで終を告げ、いつの間にか自分の前に來てゐた少し焦げ過ぎた羊の肉に取りかゝつた。

同樣に興味ある光景を其後もこの店に見たことがあるから、序にこゝに書き付けやう。

夏も盛を過ぎてメロンが肥え丸んだ時のことである。この頃巴里の人は貧富に論なく、皆避暑に出かけて、街道には人影も少なくなるがそれでもまだ日の落ち切らぬ夕めし時は、快活の極みである。鋪道（トロトワル）の上に食卓の出るやうになつて、却つて印象派畫工の美化した巴里の本場が此に在る。

メロンは市場で之を買へば、大きく肉附も好いのでも八九法（フラン）か高々十四五フラン。二十を越すものなどはめつたにないが少し、格の好い料理屋になると、大きさによりこれを八つとか十二とかに切つたものが一切れ五法（ユヌ、トランシュ、サンク、フラン）も八法もする。まことにトリスタン、ベルナアルが其喜劇「小珈琲店（ル、プチ、キャフェ）」の中の男に言はせたやうに、「いくら何だつてつたつて、やつちやばの値段の十倍も出してこんなとこで料理を食ふやつがあるかい」である。

我々のTEの店では、一切れまさか八法は取らぬが、それでも三法五十か四法は取る。その代りこれを冷す爲めに、」ふんだんに氷を使はぬが、然しいつも結構相當に冷えてゐる。

メロンは南瓜のやうに、縱の凹みがあり、その凹みに刀を入れて切ると、普通十か十一位の切れに切れる。自分並だ

から、どうしても切れに幾分の大小がある。

所で一つの大きなメロンの最後に殘つたのは頗る部厚な切れであつた。是も常連の一人と見える男が、まだアントレエの皿をつついてゐる時から厨長に談判してゐる。

「その二番終ひの切れを僕にくれ玉へ。」

厨長は肩を揺ぶつて、

「いんえ、これは最後の(デルニエエル)ではありません。アヴンデルニエエルのです。まだこいつ二つに切るんです。」

「さうしたら小さくなり過ぎるぢやないか。」

「いんや小さいことはありませんや。」

「小さいやな。さつきの切れに比べれば半分だ。半分でないにしても十分の七位だ。」

「それならこのままでは、一倍半です。」

「いいぢやないか、二番終ひだから。」……

厨長とうとう我を折つて、お客の仰せに從つた。

自分が今度の饗應の爲めに、膳附を造らうと思つて、まだよく整理しない鞄の内から取り出した、巴里のいろいろの料理屋のメニユウを見てゐると、もはや忘れかけた巴里生活の記憶が忽ち鮮かに再現して來て、ついうつとりと、壁の一方に目を据えて、少年の如くに空想したのである。

扉を叩くこともなく、入つて來たばあやはそそくさと

「料理は極まつたんですか。何を買つときあ可いんです。」

と言つた。

自分は夢を破られて、悶むやうにばあやを見詰めた。

「何も今夜でないつて可いぢやないか。考へて置いてあしたにけふよ」

三

それから自分はいろいろ考へた末次のやうなメニュウを作つた。ともすると、到底手にをへぬ途方もない料理の品目など考へつくが、一國の大統領が伊太利王を招待する饗宴の時のやうなものが、我々の厨房から生れたら大變な騒ぎである。まづ中流のグリルルウムを目安にして置かなければならぬ。菓子（パチスリイ）に對する知識の缺乏の爲めに、デセエルの選擇には大に困つて、可い加減た名をくつつけた。

DINER

Hors d' Oeuvre variés.

Consommé awx nids de Salanganes.

Carpes Güengoreaux glacées Sauce Francaise.

Langoste Therwidor

Côhe de hove grillée

Petits pois à la Francaise

Pâtirreries Siauvises.

Ferrert.

Vins:

Château-Yquem 1911.

Romané 1916.

燕巢のコンソメとクロエズ河の鰤の料理とは、千八百九十六年十月の六日に佛蘭西の大統領がロシアのニコラス二世を饗應した時の料理にあやかる積りだが、我厨房のカルプ、ゲンゴロオの成績に對して危惧の念を抱かないわけには行かなかつた。プチ・ポアには無論小型の豌豆の罐詰を以て之にあてるのである。

然しこのメニユウに、オオル、ドエヴル・ワリエエの代にマレンヌの牡蠣が出、肉の皿のあとにナンシイの脂肝（フオワグラア）にシコレエ、レッチユウのサラドでも出ると申分がないが、さうすると、まさか豚のコトレットでもあるまいと云ふことになる。然るにこの豚のコトレットこそ我厨方のお箱であるのである。

ブルゴオニユの紅酒ロマネエは年代は若いが自分が持つて來たから、確なものだが、シヤトオ、イケムの一九一一年と云ふものは貰ひもので、エチケツト通りものかどうか分らない。

さて、メニユウも出來これならどうにか出來さうだと安心が着いて、さて會場は、現在わが居る部屋を見廻すと——空想と現實——その貧弱さ、情ない限りであつた。

何しろ疊敷だけは十疊あるが、中央は村役場にあるやうな大きな高卓（たかつくゑ）を置き、上海ものの藤椅子をごろ／＼と轉べ、床には濟南で五十錢で買つた般若經大字の石摺が懸つてゐる。

室の一方には押入戸棚があるが、その半分は、羽目板に原紙を張り込んで、その上段をば寢床に利用してゐるのであ

る。

自分の部屋の殺風景であると云ふことを今日始めて氣が付いた。

一體自分は今の今まで、自分の家や座敷などを飾らうと云ふ欲望を抱いたことはなかつた。偶々飾れば、それは寧ろ打ち壞であつた。自分が支那に居た時は、襖一杯に、支那人の畫匠の像を自分で描いた。幸ひそれは社宅で、襖を汚したとて、責める家主はなかつた。その家は火事で燒けた。新に引移して來た家は、平戸港の光景を描いた。無論今頃は

その壁は塗り直されてゐるだらう。

で賣立てや、美術館で懸物を見ても、それをば單に美術史研究の材料として觀察したばかりである。

自分の一生のうち、然し、もし金があつたら買つて自分のものにしたいと思つた懸物が唯一つある。それは大正五年の六月に、兩國美術倶樂部の賣立てに出た藤原師賢の白描物語の殘缺といふものであつた。景氣の好い時分であつたから相當高いことに賣れたらう。無論逆立したつて我々の手に入るべき代物ではない。

巴里にゐた時、

「君二千フランで小さいけれども、ギユスタヴ、モロオの水彩があるから買へよ。」

などと繪を買ふ道樂位は誰にも出來ると思つてゐるK君に勸められて、無論買ふ金もないにせよ一週間ばかり考へたことがあつたが、まあ實際所有の欲望を美術品にかけたのはこの二度ぐらゐのものである。

般若經の拓本では仕方がない。さて、床には師賢が懸つてゐる積りだけにして置くのも好いがそれでは殺風景たる段依然として同じだから、好い事を思ひついた。それは自分が大同の雲崗石佛窟で、自拓して來た菩薩の一番美しいところを表裝せしめることである。

是れで勇氣を得て、室内を簡素で、一寸氣の利いた風に裝飾する、——本當を云へば一寸變化する法は無いかと、も一度周壁をずらりと見渡すと、この部屋の第一の缺點といふものを發見したのである。それは Legout Feminin のからきし無いことであつた。

さう思つて自分は他の室に入つて見ると、孰れもそれを缺く爲めに荒涼な感じを與へてゐた。さて又どうかして、廉價に然も上流にその雰圍氣を構成せしむべきかといふことが當面の問題になつた。

先づ電燈のかさに白、綠の羽二重の小さい切で市松の被ひをかけやう。その二とところ三とところは、白の代りに淡紅が來ても好いかも知れない。それなどは安い方である。

昔の双六の盤などを買つて床の間に置いて見ようか。立派な鏡台を作らせて、その棚に香油香水の數々を並べさせて見ようか、きやしやな書架を作らせて、芥川龍之介の小說、ジエラルヂイ又はマダム・ド・ノアイユの詩集でも置かうかなどといろいろ考へたが、金と時間とのかかる事ばかりで、ランプのかさの被ひのやうに甘い考は中々出て來ない。

結局リツサンだけを、天鵞絨か羅紗の白、綠の市松にして、ランプの被ひと同じモチイヴにしようといふことで鳧をつけた。

自分がある夏、女の朗讀の先生の家に招かれた時——その主人は辯護士であつた——靜かな街を見下ろすその家のバルコンに出る爲めに、女主人の部屋を通り拔けた。丁度ランプの點いたところで、窓かけ、ヂヴンの色、そこに漂ふ薰り等から餘りに強烈な Femina の雰圍氣を吹きつけられたことを記憶してゐる。然りそれは餘りに強烈に過ぎ、人工的に過ぎた。我邦に於て、殊に我室に於て Femina の趣味、その氣分の無いことは亦餘りに甚だしかつた。

その朗讀の先生の家のことであるが、他の客は皆スモキングか、然らずとも黑の背廣であつた。自分を一緒に連れて

行つた人が餘り遠慮深い人で自分に注文してくれない爲めに、自分は極暑い夏の夕のことであつたから、白つぽい洋服を着て行つた。これは之れでも東京で高いことでは有名なMと云ふ店で念入りに作らせて、二百圓近くも取られたものであるが、その仲間へ入ると、その仕立具合といひ、その色氣といひ、又自分の顏の黃黑さと云ひ、オストリヤかシンガポールから來たと、極印付であつた。まだ巴里の生活に慣れない時のことであつたが、室の裝飾のことから、つひそんなことまで想起した。

そんな事をかれこれと考へて居るうち、五月の雨雲の隙間から珍らしく太陽の光線の閃き出したやうに、忽然として自分の頭の中に洶いた新しい思想があつた。自分はつと立ち上つて、壁の一方を凝視した。そして（第三者が見たら多分さうだつたらう）莞爾として微笑したのである。さうだ。それがいいそれは一つ河本君に來て貰はう。

「拜啓その後は久しく御無沙汰。君は今多分遊んでゐるんだらうと思ふが、若し閑だつたら、又閑でなかつたら無理に都合をつけて、この手紙を見ると即刻僕の處へ來てくれ玉へ。その時スモキングと其附屬品を一緖に持つて來て下さい。又油繪と水彩の繪の具と大きな畫用紙をどつさり。もしまた南京玉が買へたら、白と綠と紅とだけを出來るだけ澤山買つて來てくれ玉へ、詳しいことは面語上。」

とさう一筆書いた。

四

そのあしたは會社へ出て、昨夕の空想も忘れてゐたが、午后閑になつた時遠方の二人の友人に今度のクリスマスには是非遊びに來るやうにと手紙を書いた。そして社の退けた後、近ごろ新しく知り合ひになつた一人の人を訪つれて、近い

日の會合へ招待した。

そして夕方六時頃うちへ歸つて來たのである。するともう河本君はちやんとうちに待つてゐた。ばあやとは已に東京で一面の識があつたのである。

河本君は變な服裝をしてゐたが、自分は始めそんな事には氣も付かず、河本君の顏を見るといきなり言つた。

「君スモンキングは持つて來たらうな。」

河本君は浮かぬ顏をして肯定した。

自分は拍子抜かしたが、外套を拔いて玄關の釘へかけるうちから、また河本君と向ひ合つて腰かけるまでに、ほぼ大體自分の今度の計畫を性急に物語つた。無論河本君は自分より一層乘氣になつて贊成するだらうと思つたのであつた。

所が河本君の返事は意外であつた。

「北村さん、隨分ブルジョワジイの趣味ですね。それは。」

自分は氣勢を削かれて、變な貌をして河本君を凝視した。

自分は言つた。

「ブウジョワジイの趣味。ふむ、成程或はさうかも知れない。僕はさうは自識しなかつたが。——然し美しい料理を拵へて、それで饗宴を開くといふことは、好い藝術を作らうといふことと同じく、人間本來の慾望である部分が多いね。それは多年アリストクラナイ、ブルジエオワジイの傳統から、その趣味にそれ等の階級の臭味を多大にくつつけては居るが、それあると否とに拘らず、君、人間の一種の藝術的慾望さ。佛蘭西で革命の後に、凡ての貴族階級のリユツリスに對しては、然るべき攻撃が加へられたが、纖細な料理法は少しも衰へなかつたと云ふぢやないか。」

と自分はいつもの方法で、河本君の攻擊に應じた。

「藝術自身も僕は今あなたの言ふ意味では認めないのです。」

自分はいよいよ狐につままれた氣になつて河本君の顏を見詰めた。顏つきから何となく變に感じては居たが、また確實に氣に留めはしなかつたが、今注意して見ると河本君は常ならぬ服裝をしてゐる。即ち外國の勞働者のペンキ職工が着るやうな、毛絲織の折襟の厚い着物の上へ、かなり古くなつた、丁度巴里で藤田嗣治が着てゐるやうな紺付の上着をつけてゐる。

「君は今それぢや何をしてゐるの、繪も文學もやつてゐないのかね。」

「やつては居るんです。材料や手法は同じですが主義が變つたんです。」

「もうそれぢやセザンヌではないのかね、君の藝術のパトロンは？」

セザンヌを此に引張り出したのは、彼が曾つてムシユ、ペランのコレクションを見ながら、眼に淚を溜めたりしていやに芝居氣たつぷりの感激ぶりを示したことがあつたからである。

「北村さん、もう私には、セザンヌの時期は過ぎたのです。」

と彼は歎息するやうに言つた。

「夢だ。」と突然口外して彼は立ち上つた「北村さん、あの時分は愉快でしたねえ、もう私日本へ歸つて二年になりますよ。」

「君は今それぢやどう云ふ調子で生活をしてゐるのだね。」

「第三アンテルナシオナアルの思想の上に立つてゐるのです。私の文學はその上に築かれなくてはならないのです。私の文學はその上に築かれなくてはならないのです。」

「今でも繪を書いてるの。」
「畫いてます。」
「繪はどんな所を行つてゐるんだね。」
「繪はピキヤツソの最近の所を出發點とするのです。」
「あんな繼ぎはぎの織物のやうなやつをかね。」
「その方角ぢやないんです。そらいつかロオザンベエルの展覽會に出てゐた大きな裸體を。」
「君、ピカツソオは喰はせものだぜ。君はコロニユのミユゼエで奴の非い時分の作品を見たらう。ロオトでもマチスでもさうだが、ピカツソオは何でも行くんだ。それにロザンベエルのあの繪などは、わざとクラシツクを入れてるんぢやないか。」
「それや北村さん、あんた見たやうな批評家の見方ですよ。ピキヤツソは新時代と云ふものを見たのですよ」
自分はこの極めて感激し易い男をなだめる爲めに彼と二三時間の會話を相交はさねばならなかつた。彼に自分の思ひ付いた壁畫を描いて貰ひ、また饗宴の日は、スモキングでギヤルソンの役を勤めて貰はうと思つたことなどは、當分噯にも出さずに居なければならなかつた。
この男の芝居たつぷりの感激性は、然し必しもわざと見せびらかしにするのではないやうであつた。――毎晩毎晩サン・ドニイの門の近くの、コンセエル・ツツシユへ通つて一かどの音樂家になつてゐた彼は、或夜我々と一緒にテヤトル・デ・シヤンゼリゼエのパアトルウのコンセエルで、ドビユシイの「海」とビトエヴエンの第五サンフオニイを聽いてすつかり感傷してしまひ、夜中過まで、ウエベエの店でシヨウコラアやフインを飲み、カルチエ、ラタンに

行く乘合自動車もなくなつて、とぼとぼと、コンコオルドの方へ歩いて來議事堂前の橋の近くまで來ると、忽ち倒れたやうに地上に臥した。皆びつくりして彼を起してやつてどうしたと尋ねた。

「私は今巴里へペエゼエしてやつたのです」と彼が答へた。

晝間だつたらば彼の唇に、馬糞のまじるコンコルドの土が附いてゐたことであつたらう。夜だから仕合せだつた。それから皆で長い間、この事を以て彼を揶揄した。こんなこともする男であつた。

自分は彼と話しながら、段々と彼の知つてゐる、又愛してゐた巴里の生活へと話を向けて行つた。そして リユウ・ドオヌウの十九番にあるシヤタムと云ふグリル・リウムの入口の部屋にある、一寸ギイスの繪を思ひ出させる壁畫のまねをして 我々の十疊の部屋の上三分一に、ずらりとクレイヨンの上に水繪の具をかけた壁畫を遣らうと云ふことに彼を同意させた。それはパンテオンを中心にし、一方にはリユクサンブウルの公園があり、有名な料理屋のフオツイヨオの店の軒が一寸見えたりし、一方にはサン・ミツシエルの學生街の通が見え、角のグリルルウ・ミデンスに大勢の人が飯を食つてゐる所である。

河本君は自分の空想に同化して、今夜夜を徹してでも始めようと言ひ出した。

自分は又あさつての日曜に、彼が私の爲めに、素描のモデルになつてくれと依頼した。それはうちの玄關のつき當りの壁に懸ける爲め、ワツトマン全紙に、伴天連オルガンチノが織田信長に一人の黒奴を獻じ、美少年の近習を從へた信長が喜んで黒奴の禮拜するのを眺めてゐる所を描かうと云ふのである。」

「君、若い時分のドガで行くんだね。」

「あんたは依然として印象派が好きですね」と河本君は笑つて言つたが、今度はその爲めに議論を吹掛けはしなかつた。

「時に、河本君、南京玉は有つたの？」と訊ねた、

「何にするです一體、有ることはありましたが、色は注文通りには揃ひませんよ、いろんな色が雜つてるんです。だけど何にするんです。」

「電燈の被ひの飾にするんだ。君この部屋に──少くとも幻想的に──もつとFeminaといふものの匂ひ、こころ持を出させるのだ。」

「僕北村さん　巴里であんたの處へ、方眼地圖を忘れて來たが、今でもあるでせうかね、僕時々あの地圖が見たいんですよ。」

「あ、それは確かにありますよ。僕持つてる筈だ。搜して見よう。」

さう云ふものを、ごたごたした荷物から搜し出す事は、かれこれ一時間餘の時間を要した、でも到頭搜し出した。見ると第一の頁には一圓──五法などとかいてある。

河本君が地圖を受取ると、忽ち附錄の大きな紙を擴げ出した。「あ、ここが僕の居たノオトル・ダム・デ・シヤンだ」と云つた、

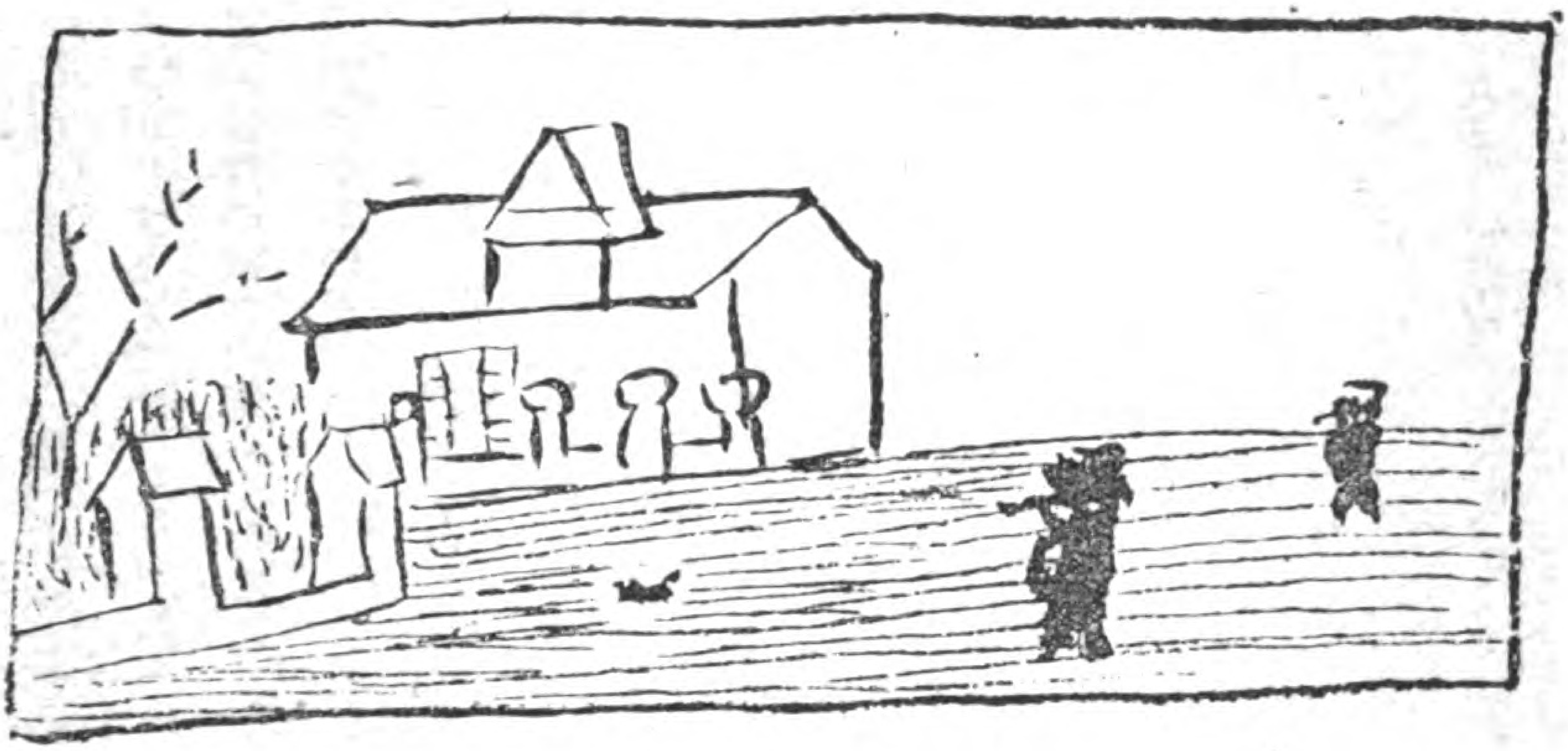
そしていきなりその部と覺しき所にベエゼエを與へた。

恐らくその部分をば、巴里の謂はばわかい胸の、兩乳の間より少し下の所ぐらひに錯覺してゐるのだらう。」

「北村さん　夢でしたね　全く。」

とさう云つて、河本君はまた立ち上つた、

（未完）



砧

（田舍のたより）

佐藤春夫

妻は私のために綿入れを縫つてゐます。姉はS町の女學校にゐる自分の子のために茶色のスヱーターを編んでやつてゐます。母は、このふたりのつき合をして、ごくゆる〳〵と石臼を廻しながら、これはお正月の餅つきの用意を、手廻のいゝことに今から、米の粉をひいてゐるのです。――煤けた茶の間のうす明るい電燈の一つの光をたよりに、一家の女たちは集つてゐるのです。

私だけがぼんやりとひとり、そこの長火鉢に手をかざしてゐる。おぼつかない火だけれども、別に手近の炭をさへつがうとは思ひません。十一月に水仙の咲くこの村では、晩秋初冬も名ばかりで、夜寒でも懷手したゞけでしのげるのです。

かうして母や姉に雜つて靜になる妻を見ることは、私にとつて愉快なことであります。私がつひひよつくり連れて來たのだから大丈夫とは思ひながらも、多少案じ

ないでもなかつたのですが、來た者もどうやらうまく折合へゐるらしいのは有難いことです。わけても妻が姉を好いてゐるらしいのは何よりの事です。といふのは、姉は子供の時に耳を惡くしてゐる上に縁も不仕合せでふたりも子供がありながら家に歸つて來た人なのだから、私としては妻が好んでこの人の話相手になることは最も望ましいことなのです。姉はごく單純な人で、見かけも四つも年上でありながら私よりは二つ三つも妹に見えるやうなのですが、妻もごく幼稚なところが双方で却つて氣が合ふらしいのです。………

母が時折り挽く手を休めると、臼の音がやんだあひ間あひ間に、次の部屋から狐戸（キツネド）越しに父の寢息が洩聞えてきます。父の病氣は大したことにはならないで濟みさうです。その代り耳の底で出血したのでたうたう片方の耳は全く聽えなくなつたさうです。しかし六十四にもなるのですからそれぐらいのことならば仕方はありますまい。で、父は未だ日の暮れないうちから寢ます。

おだやかな晩で、ぢつと耳をすませなければ濤の音もわからないほどです。漁船の石油發動機のひゞきが、――程近い港から出たのか、歸るのか、あたりを振動させて通り過ぎた後は再びひつそりとして、家のなかの臼の音より外に物音らしいものも無い。

「お母（かあ）さん」

默つてゐる人々の間へ、私が言葉を投げ入れたのです。私は子供のころの記憶を呼びおこしたので言つたのです――

「むかしは、うちにも砧があつたのう。――よくみんなが打つたものだが」

「砧？」母は挽く手をちよつと休めた。

「そら、あの槌のやうなものでこつ〳〵着物を打つたでせう」

「洗濯ものをのう。――今でもどこぞそこらの隅にあつた」
「今はあんなものを使ふところはないやうだが」
「さあ。氣のつかんうちにすたつたのう」
「一たいどうするのだらう――洗濯ものはやつぱりあるだらうのに」
「それや、むかしのやうに糊を固くせんのであらうかい。――でもあれでうつとよく目がつんで光澤が出るのぢやがのう」
「たき子」私は妻の名を呼んで「お前、知つてるかい、砧を。」
「は？」妻は噛んでゐた糸くづを指で摘み出しながら「どんなものでせう」
「そんな事を言ふやうぢや知らないのだね――それはえゝものぢや。靜かな落着いた田舍らしい……」
「もとはわし共の田舍などでもようやりをつたものですがねえ」――かう、不意に話の仲間へ這入つたのは自分の部屋でも寢た筈の庭男の源さんです。母が言ふ――
「源さん、まだ起きてゐたのかい」
「へえ。あまりはやく休むと夜なかに目が覺めますので。おさき御免を蒙つてもう横にはなつて居りますのぢやが、お話は伺つて居りますのぢや」
「田舍でほんとうに退屈ぢやのう。構はぬからそつから何でも話するがえゝ。――町ならひやかしにでも行くのにのう」
「へ、へ、へ。――さき程、ちよつとそこらへ出て見ましたが、人つ子ひとり通り居りませんでした」

源さんは、三河の方からS町へ流れ（9）て來た者で、何の眞似でもする器用な調法な男です。それでこのごろうちでは用がある度にわざ〳〵町からこの男を呼ぶやうにしてゐるのです。木を植えさせたりしてみると、この男はなかなか嗜みのある趣味的な性質らしいのです。酒も煙草ものまずよく働くのに貧乏をしてゐるのは女道樂だらうといふのがみんなの鑑定なのです。

「それでもかういふ靜かなところはよろしうございますな」話相手が欲しいと見えて、源さんはみんなの默つた時に言ひかけたのを母は受けて、

「何のいいことがあるものかの。時たまに來る人はさうも思うちやろが、住むのならやつぱり都ぢや。こんなところで暮す人は損ぢや。――今はかうしてみんなが集つてゐるのでさうも思はんが、こんなところでひとり留守番でもしてゐてごらん。私はやうさう思ふのぢやが、ほんとうに生きてゐるといふよりは死ぬのを待つてゐるやうなものぢやと考へることがあるよ」

「さういふのが本當に氣樂な、仕合せなといふのでございますよ。わしなどのやうに暮しに追はれてゐたんぢや、てんでそんなことを思ふひまだつてありやしませんわな。――仕事にくたびれりや、そのままぐつすり寢てしまひますし、でない時にや暮しの事やなどばかり考へてゐますものでね。――田舍は暮しようございますわい」

「さあ」と私は半ばひとり言のやうに言つたのです。「こんなところで氣樂に住んでゐるのは、まあ磯もののやうなものぢやな」

私の聲は低かつたから石臼の音に消されてしまつて人の耳には入らなかつたかも知れないし、入つても意味が通じなかつたかも知れないのです。私は今日の晝間見て來たものを思ひ浮べて獨合點なことを言つてゐたのです。

＊　＊　＊　＊　＊

ここから半里(はんみち)たらずのところに靜かな入江があるのです。玉の浦といつて西行法師の歌などにも出る名所なので、繪のやうなといふより外に仕方のないやうな　この荒海の地方としては珍らしく優しい曲浦なのです。一度そこへ散歩してみたいと言つてゐたのですが　折から風もなかつたしそれに汐時がいいといふので私たちは――姉と妻と、それから私の昔の友達と四人で、その日、その砂濱へ出かけたのでした。浦の子供たちは蛤を拾つてゐました。鍬を借りて、私もあちらこちらと歩いてみましたが、やつと二つ見付けただけでした。

そのうちにそこの街道で掛茶屋をしてゐる知り合ひの女房が出て來て、ぼつつり（東京で言ふびくです）などを用意して、私たちを磯へつれて行つてくれたのです。蛤はとても拾へさうにもないから、せめて磯ものでも採らしてやらうと思つたのでせう。磯ものなら誰にだつてとれるのです。

磯はその入江の鼻にあるのです。

磯ものといふのは磯の岩の間などにくつついてゐる小さな貝類のことを、さう呼びならはしてゐるのです。それを採つては、土地の人たちは湯で茹でて、そのごく小さな身を針でせせり出してなぐさみに食べるのです。名のあるのが不思議なほど小さな　さまざまな貝なのです。

私たちは汐の引いた磯の上を危く傳ひながら、あちらの谷こちらの窪の、水のなかに、ぼつんぼつんとくつ附いてゐる貝を、小さな金具でもぐのでした。どんなに南國だと言つてももう冬の海ですから、さすがに水はつめたくない事はないのですが、山で生れて都會で育つた私の妻にとつては　實に珍らしい遊びであると見えて、子供のやうに喜んでは

しやいでゐるのです。

「あら、あら。あれは何でせう」

手のとどかないあたりの水の中を覗いては、そこに美しく揺れてゐるものを指して、そんなことを言ふと、浦の女は答へるのです——

「あ、あれかのし。あれは、やつぱり磯の草ですのし」

また不思議なものを見つけたと見えて同じことを尋ねると、答へる人はまた同じことを言ふのです——

「あゝあれかのし、あれは やつぱり磯の蟲ですのし」

彼女たちの問答を聞いゝ私は思はずほゝ笑まれた。磯に生えてゐるものは磯の草。磯に生きてゐるものは磯の虫。浦里の人にはそれより外の名は要らないのだ。その代りにはたとひ小さくとも食べられるだけのものならば磯もののうちにも名はある。私は草鞋のやうな形の小さな貝を見つけて食べられるのかと尋ねると教へてくれるのです——

「あ、そりやぜというて、おいしいぞのし」

其の日のやうにのどかで、空には動かない雲が淡く浮んで、この入江の磯の波はただ川瀬ほどに揺れ騒ぐだけなのです。汐の引きつた岩の上には、大小さまざまな凹みが一とき海とは全く線がきれてしまつて、そこは獨立した小さな水溜りになり、岩に圍まれてそよ風にさへふれずに、水はぢつと凝り靜まつてゐる。その深くもない水の底の岩まで日かげは沁みとほつて、いみじく屈折する光のなかでそれぞれにもろ／＼の影をつくり出して、動くともない「磯の草」や「磯の蟲」がある。大洋のはげしい深い流れから最も遠いところに、かうして朝夕の潮の滿ち干のまにまに小さな生命を守つてゐる磯もののたちを私は不思議に思うたのであつたが、今この靜かな夜に、妻や母の傍に寄附いてゐる自分にふ

と氣がついて見ると、自分こそいま磯ものだといふことを考へたのです……

「はいさ。それや誰にしたところが何やかやと取紛れて日を送つてゐるのさ——心配や苦勞にねえ」

どういふ話題からの結論だか知らないが、母と源さんとの會話は、母のかういふ言葉でとぎれました。

「もう何時でございませうか」

しばらくしてまた源さんがいふのです。この問ひはみんなの心持を代表してゐました。といふのは、源さんがかういふと、聞えなかつた姉だけは別にして、外の三人は三人とも一緒に顔を上げて時計のかかつてゐる柱の方を見上げたものです。

「六時半？」母は自分の目を疑ひながら「七時半かい」

「六時半ぢやが——止つたかな」さう言へばさつきから時計の音がしてゐないやうなのです。私は自分の顔の近くにあつた電燈を傾けて、影になつてゐた時計を照したのです。仕事に熱中してゐた姉は光線が變つたので、びつくりしたやうにきよとんとした顔付で、私を見るのです。私は姉のために聲を高く言つた「駄目だ。止つてゐる」

「さうぢやらうのう。もうおつつけ八時ぢやろか」

「なんぼ夜長でももう八時にはなりませうて」

默つて時計を見入つてゐた姉は、つと時計の下へ立つた。時計の止つたのは姉と私とのせいだつたからです。毎日十五分ばかりもおくれるので夕方にふたりで振子を直したのでした。時計はその後に直ぐ止まつたらしいのです。

姉は先づ少し歪んでゐたらしいのを直にしたなほして、相談をするやうに私の方へふりかへつたものです。

「さう〳〵。——それでいい。——八時十分前ぐらゐ」

姉は私のいふとほり針を直し、それから振子をもう一ぺんゆすぶつて置いてから、安心して坐にかへつて來た。けれどもその時にはもう振子の音がしなくなつて、見てゐるうちにそれが動かなくなつてしまつたのです「駄目だ。また止つた」

姉は動かない振子を見出してもう一ぺんそれを揺ぶりに立つたのです。さうして安心して歸らうとすると、もうセコンドの音はやまつてゐるのです。――「また止つた」

姉はふりかへつて「嘘。動いてゐるのに」

「いや、動いてゐても音がしない」

「本當だ」と母も言つた。

坐りかけてまた立つた姉は、ぢつと振子を見てゐたが、だんだんその振幅が小さくなつて、たうとう止りさうになつたので、もう一ぺんそばへ行つて手で強く振子を動かして置いてから、今度は遠い耳を時計のそばまで持つて行くために背のびをして、肩を聳やかして體をぴつたりと柱へすりつけたのです。時計は一分とはつづかないで音がやんでしまふ。姉はもう一度振子を動かして置いてまた耳を澄せる。

「ハ、ハ、ハ――あの様子をごらん」

鼠をねらふ猫のやうな眞劍な姉の様子が私にはをかしかつた。みんなも笑つた。姉は同じことを十ぺん以上もくり返して、その間に姉の手で動かされる時計は五分も進行した。姉はすこし肝癪を起したやうに、母が笑ふときにもにつこりともしなかつた。

「あ、もうよし。あした時計屋へ持つて行かうよ」

母が慰めろやうにさう言うと、姉は口を少し開けて子供のやうな苦笑を洩しながら、やつと座へかへつて來た。それでもまだ心殘りだと見えて、恨めしさうに時計の方をふり返つて「どうしたのぢやらう」
「二十年も直したことのない時計ぢや。止りもしようぞ」
罪は私にあるのです——日に十五分遲れやうが二十分進まうが大して差支へのない田舍の時計を、苦にしたのは私だからです。用もない「磯の蟲」「磯の草」の名を知りたがる妻と一緒に、私もいつの間にか都會人になつてゐるのかも知りません。それはともかくも、止つた時計は一騷ぎでした。私はそれをきつかけに立ち上つたのです。そのついでに私はそつと背伸びをして首をまげて、ちよつとさつきの姉の眞似をしてみました。
「およしなさいよ」——妻は笑つて小聲で、さう私をたしなめたのです。

＊　＊　＊　＊　＊

私は小説家と呼ばれるものの一人で、それから書齋をひどく取り散らす癖のある男です。どんなによく片づけた場所でも、私は三時間でめちやめちやにしてお目にかけます。
私はその夜も、友達がこの間贈つてくれた彼の譯著書をさがすのに骨を折りました。私はそれを通讀した時に、氣に入つた一節があつて、今晩それをもう一度讀んでみたいと思ひついたのです。私はこれほど手短かにうまく書かれた田舍生活の描寫はないと思ふのです——

何といふ幸福なこつたらう！——ボオドレールやヴルレエヌを讀まず、ヌウヴエルアテネにも行かず、向ふのブルジョアのやうにドミノでもやつたり、兎に角、あまりに緊張した生の意識を呼び醒すやうなことをしないでゐた

ら。——眠つたい田舍に住み、働らける花圃を持ち、妻や子供を持ち、毎晩靜かに人生の些事をおしやべりをしてゐたら。明日は[illegible]の手入れをしつかりやらなければならない。蟲の奴がすつかり食つてしまひおつた。馴れた鷄が逃げて行つた。お母さんが教會の歸り道に御祈りの本を落したのに盜まれたと思つてゐらつしやる。善良で正直で、政治のことなどはなんにも御存知ないお百姓はずゐぶんかなり幸福でなければならない。…………

とそんな事が書いてあるのです。全くそのとほり。……早く密柑をもいでしまはねば霜がおりると味がなくなつてしまふ。菊ももうすつかり枯れてしまひをつた。馴れた山鳩が來なくなつた。去年鐵砲を打つたものがあるからだ。お姉さんは耳が聞えないものだから、セコンドの音がしなくなつても動いてさへゐれば時計はかかつたものと思つていらつしやる。——ほんとうにこれが我々の生活なのです。私は田舍へ來て何一つとして仕事らしい事はしないのです。またしようといふ氣にもならないのです。今もかうして部屋をかたづけてゐると、東京の雜誌社から新年號への催促が手紙や電報でいろいろと言つて來てゐるのが目につくのですが、私はそれでも書かうと思ふこともよく考へもしなければ、題一つ極めてゐないのです。さうして、東京にゐる同じ仲間や、またその仲間をせついてゐる雜誌の人々を思ひ出すと、ちよつと彼等はみんな何のためにあんなに躍氣になるのだらうといふやうな氣持にさへなるのです。たくさんの人が集つてその勢で押流されてただとり紛れてゐるのぢやないだらうか。——私はもとより田舍のこんな自分の生活を充分によしと思ふことは出來ないにしても、それでも東京にゐてみんなのやうにその日を送つてゐるより無意義だとも思へないのです。

この間から讀みかけてゐる佛蘭西革命史を、棚の上へ積まうと思つてとり上げると、この大きな本のなかからひらひらと落ちたのは一葉の往復はがきでした。拾ひ上げて見ると、忘れてゐたが、それはこの間さる婦人雜誌社からよこし

た質問でした。

「貴方の身邊に見出さるる幸福」

といふ題に答へよといふのです。私はこの偶然のことにちよつとした興味を覺えたのです。靜かな田舍の家にゐて革命の歴史を面白がつて讀む。その革命史のなかに栞がはりにかういふはがきが出て來る。幸福？「何といふ幸福なことだらう……眠つたい田舍に住み、働ける花園を持ち……」

When June is come, then al the day
I'll sit with my love in the scented hay;
And watch the sun hot places high,
That the white clouds build in the breezy sky.

She singeth, and I do make her a song
And read sweet poems the whole day long;
Unseen as we lie in our haybuilt home.
O life is delight when June is come.

さうにちがひない。しかも「何といふ幸福なこつたらう」といふ時に、彼の言葉のなかには惡意のない輕侮が何となく籠つてゐるし、「日なたの猫の礎もの」と考へる時に私も亦、自分のなかに自らを輕侮する氣持をかすかに感じるのはどういふわけであらうか。さうしてこの大きな本——革命史のなかで死んでゐるたくさんの人々とても亦必ずしも我々

と別棲につくられてゐた人間ばかりでもなかつたらしい。「幸福ではないのだ―常に我々の居る可きところは。確に、一幸福の中ではない。悲壯の中だ。」かういふ言葉を私が今聞いても、私は彼に同感しないでもない。たとひ逆押しに流されやうとも潮のただ中にゐた方が、幸福――もし生甲斐といふ言葉と同じものならば――なのかも知れないのです。ぼんやりと中學生のやうな感想に耽りながら、私はこの書齋の壁の或る場所へ目を向けたのです。そこに柱かけとして彫られてある板の上の文字を、日頃見なれたものを珍らしげに私は改めて見なほしたのです。「緘口勿言天下事放懷且讀古人書」――私の祖父の坐右銘なのです。

――私は二三日前に、椽の日向で父が私に聞かせた話を思ひ出してゐたのです……

* * * * *

父の意見によると、祖父の坐右銘といふものは祖父の鏡村自身が撰んだものではなく、恐らくは曾祖父椿山が與へたものらしいといふのです。

少しばかり私どもの家のことを記すのを許して下さい。少しくどく書くかも知れません――忘れてしまはないうちに。

祖父の鏡村は嘉永年間には京都で書生だつたのです。ちやうど明治維新の風雲が急な時代に、彼は諸國の志士たちが集つて來た新時代の中心的な土地に青年として住んだわけなのです。彼が家代々の業である醫學を學んだのは秋吉南豐先生だし、儒學を學んだのは城谷中書先生でした。城谷氏は曾祖父椿山の友人で、そんな關係でその子をその塾に學ばせたのでせうが、この人は當時近衛公の侍講であつたさうです。また醫學の師の秋吉先生は有栖川宮家の侍醫であつた。つまり鏡村の師家はともに勤王の人であり、なかでも、秋吉先生は頼山陽の高弟で、秋吉家には頼一門の書畫幅數

十幅もあり書翰は百を以て數へる程あるさうで――これは私の父が拜見したさうである。かういふ秋吉先生であるから、從つてその弟子のうちには所謂勤王の志を抱いてゐる靑年が澤山にゐた事は推察できるのです。つまり鏡村の同門はさういふ新思潮の一團であつたらう。さうして鏡村自身がやつぱりさういふ靑年の一人であつたかも知れないのである。いや、どうもさうらしいのです。今、家に殘つてゐる書束のなかに鏡村がその父の椿山に送つものにその間の消息を語るものがあるのです。

近日、近衞公が勅使になつて江戸へ行く時に、その近衞公に扈從して侍講の城谷先生も東上される筈である。その城谷先生の隨行として弟子の鏡村に命ぜられさうに思ふ。一度、東都を見たいと思つてゐる折からではあり、この上ない好機と思ふのだが、それに就ては總髮の頭の額を剃つて士風にしなければならない――それらの事を、鏡村は父の椿山に願つてゐるのです。しかし椿山はそれを許さなかつたのです。また、當時、新刊の日本外史を讀みたいといふので鏡村はそれを買ふことを椿山に乞ふてゐる。しかも椿山はこれをさへ許さずに、師の與へるものだけで滿足しなければいけないと小言を言つたと見えて、鏡村は閉口して謝罪を書いてゐるのです。

これらの事だけを見ると椿山はいかにもわからずやの頑固おやぢに見えるのですが、椿山は子供の教育のためには、鏡村の幼少の頃からもあらゆる努力を、むしろ身分以上に奮發してゐたのです。鏡村が椿山にとつてたつたひとりの男の子であつたせいもあるでせう。一たいこの私たちの故鄕である大洋と深山とで四方を圍まれた半島の田舍から、當時京都へ修業に出した事さへ近在の人々にとつては驚きであつたのである。それほどに愛惜してゐる自分の子が、自分の友人につれられて江戸見物が出來るといふ機會を拒み、また嘖々の評判のあつた當時第一の書物を見ることを禁じたのは、椿山は專ら當時の新思潮の運動を恐怖したからであつたのです。自分の子の性質を知つて椿山は、鏡村が少しでも

その渦に近いところへ泳ぎ出るのを邪魔をしたと言へるでせう。椿山は田舍にゐて時勢に疎かつたからかといふと必ずしもさうではないやうです。椿山は寧ろ先見の明があつた人で、椿山の怖れたのは新思潮そのものではなく、たゞ自分のひとり子がそれに投ずることだけであつたらしいのです。

さうしてそれには多少の由來するところがあつたのです。椿山は大塩平八郎の亂ですつかり懲りてゐたらしいのです。ごく遠いつゞき合せからではあつたが椿山自身がその事によつて取調べられたりして、一層身に沁みてゐたものと見えるのです。

大塩中齋が亂を起すその當時に、その塾頭をしてゐた麗洞湯川民太郎は、私たちの鄕黨の士で、また椿山には姻族に當り、椿山は幼い頃の麗洞に素讀を與へた事もあつたのです――その麗洞から、後には少年の鏡村が教を受けたのですが。

麗洞は中齋が亂を起すすぐ前に、父の寛仲が重患だといふ理由で同門にあつた弟周平と一緒に、大塩塾を辭して歸省したのです――事實は別に事情があつたかも知れないのです。さうして中齋が事成らずに自盡した後で、捕吏が來て麗洞の民太郎も弟の周平も一應縛せられた時に、椿山も亦さま〲な關係から多少の疑を免れることが出來ませんでした。取調べられて後には何にもなく、麗洞等と一緒に放免されはしたけれども、それ以來といふものは、椿山は自重してもう天下の事を一切言はなくなつたのです。「善良で正直で、政治のことなどはなんにも御存知ない御百姓はずゐぶんかなり幸福でなければならない」さうして維新の氣運を見ても佐幕の思想を抱いてゐるかのやうに見えたのです。さうしてたつたひとりの愛兒鏡村をも戒めて、天下の事を言はせず、ただ古人の書に親しむことばかりを勸めたやうに見えるのです。年とつた椿山は自分の幸福の爲めにも、また鏡村の幸福のためにも、鏡村の血氣と壯志とを案じて、鏡村が

田舍の生涯を樂しむことを欲したのであらうか……。――それにしても、日本外史が「危險なる書物」であるとは、今日誰が想像するでせう。

鏡村はその父の命じたとほり醫者になつて、その故鄕の八尺鏡野（やたがの）へ歸つて來た。さうして自分で鏡野隱逸と自分を呼んでゐた。故鄕の地に牧歌の如き生涯を喜ぶ者と彼は言ひながらも、しかしその志は本當にどうであつたかはわからないのです。故鄕へ歸つて三年ほどになつたが、近い港へ黑船が來たと傳へられたのを見に行つて、その歸りに病氣になつて死んだのです。當時のヌウベル アテネを知つてゐた鏡村にとつては、「何といふ幸福なことつたらう――この日向の維の磯ものは」といふ歎聲があつたかも知れない。無かつたかも知れない……

そのやうな自分の祖先のゐたところが、この家なのではないか。――私は其のことを思つて何氣なく考へてゐたことどもが、急に身のまはりであつたことに氣がついたのです。さうして二十七才で無くなつた鏡村より、私は年とつてゐるやうな氣がするし、椿山よりはもとより若いけれども――さうして、かういふ事を言ひながら、私もいつかは椿山のやうに年とるだらう……。私はへんに侘しい――つまりは落着いて悲しいやうに嬉しい氣持になつて來てゐるのでした。

私はあまりはつきりと言ひすぎたかも知れませんが、これらのすべての考と氣持とはごくおぼろげに私を柔かくつつんだのだとお思ひなさい。何故かといふのに私はこれらの間に、机のまはりを珍らしくも自分の手でほぼきれいに片づけてしまひ、それから机に對して、別に用もないのに硯を磨つてゐたのでした。それから卷紙をひろげると、「砧」と一字、書いたのです。

不思議なことに、私は今までにおぼえのない俳句といふものを書きちらしてゐたものです。

ありながら砧うたぬ里となりに見

この者に砧うたせて給へかし
嫁姑こもごもに打つきぬた哉
砧うつおのが女房にちよと惚れた
浦里は浪なき夜をきぬた打つ
ひびきて遊子の胸を打つ砧
一村は落うどにしてきぬた哉
義盛の裔が打つなる砧かな
御一家の打ちこそ侍れおん砧

第一の句は即事です。第二の句「父母の知らぬ婦を従へて郷にかへりて」といふやうな前書きが私の心にあるのです。それから私は打たない砧を聞いてみたくなつたのでせう。終りの三句は太地村といふこの隣りの漁村のことを思ひ浮べたのです。和田義盛の一族が落ちて來たといふのです。私は書きつづけてゐたが種切れになつて、讀みかへすとみんなつまらなかつたので、みんな消してしまつたのです。さうして、ふと氣がついて私は無用な事をしながら二十分ほど別に何も考へてゐなかつた自分を知つたのです。――幸福？私はもしや自分がうつろになつてゐたその間に幸福があつたのではなつかつたらうか。

階段を昇つて來る足音がして、ふりかへつてみると、そこに妻が來つつあつた。

「もう九時よ。お隣りの時計が打つたのがさうらしいから、みんなおしまひにしたの。お姉さんやつぱり苦になると見

えて、時計を動かしてみてゐたわ」

「うん」私はさう答へて「――どうも小說は駄目だぜ」

「私が机の前にゐると、彼女がきつと小說を書き出したかと聞くので、私は豫防したのです」。

「さうを。どうして?困るわね」

「…………」

發句などをよむやうな氣持ぢや、小說は成立たないといふことを說明しようと思つたが私は面倒だからやめにしたのです。

おやすみなさい。

私たちもう休みます――Unseen as we lie in our haybuilt home



思ひ出の記

宇野浩二

それは十九歳の春から二十歳の春までのことだから、丁度まる一年間である、私は私の過去の生涯を追想した時、妙な寄り道をしたものだと考へることがある。といふのは、その時までは私は大阪で小學校、中學校と、それは自分自身の家からだつたり、伯父の家からだつたり、その間にはあやふく學校を止めさせられかけたり或は全く自分の趣味に合はぬ學校に換へられようとしたり、いろ〳〵な事はあつたが、先づ順當に進んで來たのであるが、そしてその間に今いつた一年間を境にしてその後がずつと東京なのだ、東京で專門學校に入り、勉强し、怠け、世の中に出、苦勞し、煩悶したことは、私ばかりではない、誰もが一度は通るやうな道を通つて來たに過ぎない。と、しかしこんな風にいふと、私の今いつた一年間の寄り道といふのが、何か異常な經驗を含んでゐるやうに聞えるかも知れないが、それなら私は私の言ひ廻しが不當だつたことを讀者諸君に詫びなければならない、成る程これは少し思はせ振りであつたかも知れない、そこで簡單に言ひ直しておくと、私は少年

の頃から十九歳の春までは大阪に住み、飛んで二十歳の春からずつと今に至るまで東京に住んでゐる、つまり私は大體都會生活に終始して來たものなのだが、今いつた一年間だけを、ちよつとしたことで、思ひも寄らない田舍——といふのは、半年を河内の國で、後の半年を大和の國で暮すやうなことになつた、とかういふのである。

では、始めよう。——諸君も知らるゝやうに、河内の國は北、南、中と三つの郡に分けられてゐる、私が半年住んだといふのは、その中河内郡の若江といふ村であつた。河内は小さい國であるが、この三つの部分ではまるで違つた趣きをなしてゐる、北河内は淀川の流域に屬してゐて、一番普通な、そして肥沃な土地である、南河内の方はこれも大和川が流れてゐるし、山に近いし、丘や林があるから、景色がよくて矢張り豐饒な土地に違ひない、即ち一番惠まれないのは中河内だつた。大阪から始まつて何里かの間、それが生駒の山脈に遮られるまでの廣い平野に、何一つ、川も、池も森も、丘もない、嘗て濕氣といふものを知らないかのやうな、眞白な、乾いた砂の道が彼方此方に通じてゐるだけである、恐らく水田の部分より畑の部分の方が多いだらうと思はれる位だ。昔、小學校の時分に私はそこを遠足で通つたことがあつた、疲れた足を引ずりながら、兩側の畑に目を落すと、綿の塊を口から吐き出してゐる不思議な花をつけた草木が一面に植つてゐるのを見たが、教師の說明に、それは綿の木で、綿といふものは元來熱帶の植物である、だから世界中で印度が一番綿の澤山とれる國だ、この河内の國は年中雨が少くて水が乏しいので、かうして綿の木が育つのだと教へられたことがある、今は印度の多量製產の勢に壓倒されてその栽培を止めてしまつたと見えて、この地方にも綿の花は滅多に見られなくなつたが、昔綿畑であつたところに作られてゐる野菜は、始終皺破れてゐるやうに見える乾いた土の中から、干乾らびた、青味の少ない葉を出してゐるに過ぎない。私の勤めてゐた小學校の年とつた訓導は、每日校庭に繁つてゐるポプラの葉を數枚摘み取つて來ては、「どうです、煙草をあがる方は煙草入の中にこれを一二枚入れてお置きな

さい、でないと、煙草が乾いてまづくなつて粉になりますから、」と深切に注意してくれた。――さつと、中河内郡といふのはさういふ所である。

ところで、十九歳の春のことだつた。私は中學校を出ると途方に暮れてしまつた。といふのは、私はその時まで母方の伯父の家に養はれながら、中學校の學資は死んだ父の從兄弟に當る人からもらつてゐたのであるが、不幸なことに、この人は私が中學を出る數年前に墓に行つてしまつたものだから、その子の、即ち私からいふと又從兄弟に當る人が、好意で中學校を出るまでそれをつゞけてくれてゐた。が、そこで私が中學を出たことで一段落が着いたことになつた。そして彼はその先の學資をつゞけることを、彼自身が忙しいといふ口實や、又私の志望する科目が彼の氣に入らないといふ點から、容易にはつきりした約束をしてくれなかつた。一方、私を養つてくれた伯父には、もし彼にその志があつても、資力がなかつた。さうかうする中に、上の學校に入る準備の時期を空しく過ごしてしまつたのである。さうなると、私はだんだん子供が生れて、家族が増えて行く伯父の家に、何の目的もなしに厄介になつてゐることも心苦しくなつて來たので、或日到頭棄鉢な氣持から、大阪の町では極りが悪かつたので、府下の郡役所を地圖で調べて、出鱈目に三箇所ばかり選んだ上で、そこの學務係に宛てゝ、小學教員になりたいといふ手紙を送つたところが、三通のうちで一つだけ早速返事が來たのである。それが中河内の郡役所なのであつた。

私に一人の祖母があつた。それは母の母に當るものである。この祖母は私の生れる前から私の家に來てゐた。そして私の父が死んでからも、ずつと私の家にゐた。といふのは、彼女の一人の後取息子（それが後に私が養はれた伯父である）がその頃放蕩のために行方不明になつてゐたので、彼女は一人娘の緣家である私の家に身を寄せてゐたのである。だが、私の父の死後數年經つて、私の家がすつかり破産してしまつた時、幸ひに彼女の後取息子である伯父が現れて、

彼が獨立して一家を構へることになつたので、今度は私がこの祖母と共にその方へ引取られることになつたのだつた。だから、私が生れた時から今いふ十九歳の春まで、絶えず離れることなしに暮したのは、母の代りに、この祖母であつた。つまり私はこの人の、俗にいふ完全な「祖母ッ子」として育つたものである。

祖母は南河内郡の出であつた。家は代々の庄屋であつたが、彼女は早く母親を失つた八人兄妹の長姉に生れた爲に、幼い弟妹の面倒を見てゐるうちに婚期が遲れて、やつと二十八歳の時、當時岸和田藩士であつた私の母の父の家へ、後妻として嫁入つたのである。先妻に子供がなくて、彼女はそこで私の伯父と母とを生んだ。母が生れたのは彼女が三十歳の時だつた。ところが、彼女の娘である私の母は、私の兄を生んでからもう生きないだらうと思はれた位で、七年經つて、二十七歳の時に不意に私を生んだ。そんな風に順々に遲れてゐるので、私が十九歳の時、祖母は七十六歳になつてゐた。

だが、彼女は長生する老人が大抵さうであるやうに、その頃でも言葉通り若者を凌ぐ程壯健だつた。どちらかといふと彼女は大柄な婦人で、髮には白髮も見ず、齒にも一枚の入齒もせず、色の白い、當時の私にはそんな事は氣がつかなかつたが、若い頃は餘程の美人だつたさうである。私が今でも物珍しいことに覺えてゐるのは、彼女はその年になつても、毎朝起きると最先に髮の手入れをしたことと、晩飯の時必ず銚子に一本の酒をたしなんでゐたことだつた。それで極めて嚴格な性質だつた。現に、私は十六七歳の頃までこの人に添寢してもらつたが、それでゐていつでも「恐い祖母さん」だといふことを忘れなかつた。だが、彼女にして見ると、彼女は夫の時代に士族の廢止に會ひ、夫の死後は一人息子に放蕩され、頼みにしてゐた一人娘は寡婦になり、年とつてから漸く一家をなした子の家に落着くことが出來たものゝ、彼女の老後に殘された心配は、寡婦の娘とそして孫である私の身の上に違ひなかつた。而も詮じ詰めると、娘は

最早や取る年であつたし、その長年である私の兄は半分片輪者のやうな生れで、父方の親類に世話になつてゐるやうな身分だつたし、唯一の彼女の願ひは私の出世に違ひなかつた。だが、未だ年若かつた頃は勝氣な性質であつたから、數多い甥や姪やの面倒を見たり、又出來る時は彼等に金錢上の補助さへしたり、いろ／＼奮鬪して來た人ではあつたが、最早や私の頃には、彼女は伯父の家の隱居に過ぎなかつたから、幾ら私の身の上を案じても、彼女自身の力でどうすることも出來なかつた。伯父は私たちが彼の家に引取られて間もなく、遲播きながら妻を迎へた、そして何人かの子供も出來た。だから、祖母は厄介者である私の爲に、私の義伯母に對して遠慮しなければならなかつた。彼女は遠慮しながら、その年とつて最早や弱くぼろ／＼になつた翼の下で、出來るだけ私をかばふやうにしてくれた。彼女が毎晩の二合の晩酌も、伯父から貰ふ僅な小遣錢の中からに違ひなかつた。そして又その中から私に小遣を分けてくれることに依つて、彼女の財布はいつでも空だつたに違ひない。

私は河内に行くことが定ると、誰より先に彼女に打明けた。先にもいつたやうに、私がその事を誰にも相談しないで、計畫したのは、若しそんな事を先に人に洩らして、いざといふ時に失敗して嗤はれることを恐れたからであつた。「さう、それもいゝかも知れないね、」と祖母は私からそれを聞くと、氣の毒さうな、しかし又どこか安心したやうな口調でいつた。「しばらく腰掛のつもりでさうすることにして、この家を離れた方がね……。」さういつてから、彼女はふと寂しさうな顔をしたが、又しばらくすると、ふと希望に輝いた目で、「お前若しあつちへ行つて、よかつたら、そのうち祖母さんが御飯の仕度や、洗濯や何かに行つて上げるやうにしてもいゝよ。中河内といふところは、河内の國でも又特別に粗食をするところだから……」そして彼女はふと思ひついたやうに、「お前、しかし、羽織が入るね、」といつた。「羽織？」「入りませんよ、」と私は冷淡に答へた。「もう夏ですもの。」「夏だけど……」と彼女は微笑しながら、「學生と違つて、

たとへ小學校でも先生なんだから、夏は夏の羽織がある方がいゝ、」と彼女はいつた。そして、彼女はどういふ風にして工面してくれたのか、單物の羽織をその晩私のために縫つてくれた。だが、單羽織は馬鹿に大人めかしくて、私はそれを着た時變にもの悲しい氣がした。

關西線の港町から汽車に乘ると、今宮、天王寺と、大阪の南の郊外を過ぎて、間もなく河内の野に出る。その次の平野といふ停車場は既に河内の町で、平野の次の八尾といふのが私の下りる町だつた。その町に私の手紙に返事をくれた郡役所があつたのである。簡單なもので、郡役所の學務係は私と二三の問答をした後で、「では、早速今日から行つてくれませんか。その學校はこゝからまつ直に北へ一里ばかり行つたところの、若江といふ村です。若江といふ村は南と北とに分れてゐます。その南若江を通り拔けて、北若江へ入る道のまん中に、いやでもその學校の前へ出ます。」と敎へてくれた。

春といつたが、恐らく五月の末頃だつたと思ふ。私は祖母の縫つてくれた單羽織を着て、敎へられた道を北に向つて進んだ。廣い、眞白な砂の、どこ迄つゞいてゐるか分らないやうな平坦な大道の兩側には、先にいつた昔の綿畑がつゞいてゐるのだ。畑が畑につゞいてゐるばかりで、稀に右手とか左手とかの離れ離れの場所に村落が見える外、全く川にも森にも出逢はなかつた。右手の方に二里ばかり離れて志貴山から生駒山へとつゞく山脈が、屏風のやうに立つてゐるのと、左手の方に三里ばかり離れて、大阪の町が煤烟と一緒に横たはつてゐるのが見えるだけで、見渡す限り咽せるやうな乾き切つた野原だつた。さういふ街道の或所に沿うて、丈の高いポプラに縁取られてゐる貧弱な學校が、私の目指すそれだつた。それは學校よりポプラの方がずつと立派に見えた。道の左手に門があつて、門からすぐの所に硝子戸張りの敎員室が街道に面して立つてゐた。だから、人は道を通りながら、話が出來る程の近さで、その敎員室に五人の敎

員が並んでゐるのを見ることが出來た。私はその學校の代用教員の椅子を得たのである。

教員は私の外に男教員が二人と、女教員が二人とだつた。男教員は二人とも僧侶で、その中の一人が校長を兼ねてゐた。煙草が乾くからといつて、ポプラの葉を煙草入に混ぜることを勸めるのは、校長でない方の準訓導で、年は校長よりもずつと上で、五十歳を越えてゐた。この人の世話で、私は南若江の或無住の寺の一間を借りることになつた。便宜上この人の名を明かしておくと、巨摩峰春と呼ばれた。彼は私が文學者になりたい志望だといふと、「私も文學が好きでしてね、」と瘠せて背が高くて、板のやうに薄い身體をしてゐるので、案山子に洋服を着せたやうに見えるところの、その案山子の手を振りながら、「それで、私も若い頃家を抜けて、大阪の渡邊霞汀さんのところへ弟子入りに行つたことがありますが、先生は玄關で私の身體を見て、そんな身體ぢや文學はやれない、わしの身體を見い、といつて、角力士のやうな腕を見せられましたので、私はびつくりして歸つて來ました、」といつた。だが、さういふ言葉の中に、老人に有り勝の、あなたも身體が弱さうだからとか、文學なんかとてもむつかしいからなどと、私の志望を嘲笑したり、止め立てしたりする意味の何にも含んでゐなかつたので、私には氣持がよかつた。彼は學校は滅多に休まなかつたが、餘程身體の弱い人と見えて、晝飯の度に自分の家からお粥を運ばして食べてゐるばかりでなく、食前食後に乾痰藥を飲んでゐた。それから、もう一つ彼の特長は、外の教員はそれ〳〵受持の組と共に、その組の生徒が卒業するまでついて上る習慣になつてゐたが、この人だけは來る年も來る年も尋常一年級を教へることになつてゐたことだ。

私が巨摩老人に世話された寺といふのは、全くの無住といふ譯ではなく、隣村の寺の住職が兼任してゐて、そこにはその住職の老母が留守番に住んでゐるといつた風な種類のものだつた。私はその老母から賄されることになつた。なる程、私の祖母がいつた通り、可成りひどい粗食であつた。晝飯の辨當は大抵澤庵だつたし、家でのお茶には又かと思ふ

ほど瓜の煮たのが出た。瓜は色々の種類のものが煮られたが、中でも胡瓜の煮たのは最も閉口させられた。私の部屋は本堂の隣の西向きで、垣根も塀も何にもなくつて、寺の庭からすぐに田圃につゞいて、先にもいつたやうにところ〴〵にある村落の外には目を遮るものがないので、三里離れてゐる大阪の町が手にとるやうに眺められた。大阪の町の外れに、四天王寺の五重の塔が黒い影點を空に畫いてゐるのが目に立つた。又、夜になると、大きな牛でもが横たはつてゐるやうに見えるその町が、螢籠かのやうにちら〴〵する無數の燈火で輝いた。私は生れてから後にも先にも郷愁に似た感じを抱いたのはこの時切りである。早速手紙を出して、祖母に來てもらはうかと幾度思つたか知れなかつた。が、それを辛うじて止めたものは、誰でも二十歳の青年の胸に燃える向上心であつた。若し祖母にそんな手紙を出したら、それでなくてさへ私と一緒に住みたがつてゐる彼女は、早速荷物をまとめてやつて來るだらう、そしたら自分は今でもあやふやに葬られかけようとしてゐる東京へ行くことも、上の學校に入ることも全く出來なくなつて、一生こゝで田舍教師として朽ちなければならないだらうと思つたからだ。

その二三年前から、私は夏が來ると脚氣病に罹る習慣があつたので、その年もそれが起らければいゝがと心配したが、いつもは大抵七月頃からその徴候が見えるのが無事らしかつたので、これは多分田舍暮しがよかつたのだらうと嬉んでゐた。そのうち學校の方は勤め初めて二ケ月もしないうちに夏休みになつたので、私はいそ〴〵と大阪の祖母のゐる家に歸つて行つた。ところが、八月の末頃から遲れ走せに脚氣の徴候が現はれたので弱つたが、九月の新學期が始まつたので、私は無理に河内の方へ歸つて行つた。すると、そこに歸つた翌日から全身が動かない程ひどくなつてしまつたので、早速大阪から祖母に看病に來てもらつたり、終には病氣が長引きさうだつたので、當時大和の國にゐた母にも來てもらふことになつた。

私の母は、私たちの家が破產して、私と祖母とが伯父の家に引取られた時、伯父の家は彼女にも實家に當る譯だつたから、彼女も來て、一年ばかり私たちと一緒に住んでゐたのだつた。だが、彼女は兄である私の伯父と氣が合はなかつたし、又伯父の家そのものが未だそんなに餘裕のある家ではなかつたので、その後大和にある死んだ父の妹が嫁いで行つた親戚に身を寄せたのである。その家は釀造家だつた。もつとも私の父の妹はそこへ嫁入つて一年もしないで亡くなつたので、後に後妻が來て、後妻の子が生れてゐた。だから、家としてその家と私の家とは親戚に違ひなかつたが、私たちとは最早や何の血緣もない家だつた。母がその家へ身を寄せたのは彼女の四十歲の時分であつた。彼女はそこの當主（即ち彼女の夫である私の父の妹の夫）が死ぬまで、五六年の間、その家の居候になつて、退屈凌ぎと小遣取りとに、近所の娘たちに三味線とか踊とかの藝を敎へて暮してゐたのであるが、當主が死んでからはその家にも居辛くなつたと見えて、その後踊を敎へてゐる或娘の親の家へ、その家の離れの一間を借りて、獨立してさういふ藝を敎へながら細々と暮してゐたのである。當時彼女はさういふ境遇だつたのだ。

だから、河内の國の私の病氣で寢てゐる寺の一間に、私たち親子三人は何年ぶりかで、何日かの間、水入らずに暮した譯であつた。そのうちに私の病氣も峠を越して、少しづゝ快方に向つて行つた。私の病氣がなほりかゝつて來るにつけて、彼女等はこんな風に心の中で考へたらしかつた。それはこれ迄は止むを得ず親子が離れ離れに暮して來たが、かうして私がたとへ小學校の敎員にでもなつて、辛うじて自活することが出來るとすれば、私の收入が僅かで、母の暮しもかつ〳〵であるとしても、二人がさうして一緒に働いてゐたならば、別々に間借りなどして住んでゐるよりも、一緒になつて小さな家でも借りて暮した方が、經濟的でもあり、幸福でもあるだらう、祖母にして見ると、若しさうなつたら、今は自分の子の家ではあるが、他人の嫁などと一緒にゐる窮屈な思ひをのがれて、愛する娘と孫の家で住むことが

出來る、たとへ住めないまでも、屢々氣保養に來ることが出來る。――彼女等はそんな風にはつきりと考へたり、無論相談したりした譯ではなかつたらうし、又それが一番いゝことだとも思つてはゐなかつたらう、それどころか、若し彼女等に力があるなら、折角中學校を出たのだから、もう一奮發して、私が望んでゐるやうに、上の學校に入れてやりたいとは思はないではなかつたらうが、思ふだけでそれは彼女等の手では何とも仕樣がないことだつた、だから、いつそのこと、私がもうそんな望みを止めて、今いつた風な考へになつたら、それはそれで身を立てる近道でもあり、幸福の一種でもあるだらう、と彼女等は老人らしく互ひの胸の中で考へたものに違ひない。そこで、私の健康が身體を動かしても差支へない程度までに回復すると共に、祖母は一先づ大阪の家に歸り、私は河内の學校を止めて、母に連れられて、大和の國へ行くことになつたのだつた。私が大和の母の所に身を寄せたのは、多分十月の半頃だつたと思ふ。

大和では私は散歩ばかりして日を暮した。私のゐたところは畝傍の橿原神社の近くであつたから、大和の丁度中部邊に當る。それは河内から思ふと、ずつと景色のいゝ所だつた。だが、大和も河内と似てゐることは、こゝも北の方は平原で、南の方が山國になつてゐて、私の住んだ地方は、その平原と山國との境目のやうな位置にあつた。が、それは河内の住居と違つて、近所には川もあり、林もあり、丘もあり、そして落葉樹、――殊に櫟の多いところで、私が行つた頃はそれ等の木は悉く黄葉で蔽はれてゐた。東の山へは二三里もあつたが、西の方にはすぐ一里ばかりの所に、金剛山とか、葛城山とかいふ山々が聳えてゐた。現に私のゐた村は葛城と呼ぶ名の郡に屬してゐた。その代り、こゝには河内のやうに廣い、眞直な道がなかつた。もつともそれは季節の關係であつたかも知れないが、多くの道は狹くて、草に蔽はれて、うね／＼と曲つてゐた。私は散歩の足の元氣な時には、それ等の道を辿つて、何度畝傍山とか、天ノ香久山とか、耳成山などといふ山に上つたか知れなかつた。あの邊は織物の盛んな所で、どんな家からも、又はどんな見捨てられた

やうな小屋からも、ぎつちよん／＼と機を織る音が聞えた。機織りが盛んなので、娘たちの結婚期が遅れるのと、それ等の娘たちが金儲をするのとで、一般に女たちの風儀が惡く思はれた。私が餘り毎日懐手をして彼女等の前を通るので、「よお、又澄まし屋ののら書生が通るよ、」などとからかふものが珍しくなかつた。向うが大勢だから私の方がつひ壓迫されるので、私はぎつちよん／＼の音の前を通る毎にびく／＼したものである。

初、私は母が借間してゐるところへ、半月ばかり彼女と共に寢起きしてゐた。母はその家の人に頼んで、私たちが入るやうな小さな借家を見付けてくれるやうに頼んでゐたのであるが、田舍のことであるから、さういふ都合のいゝ家が容易に見付からなかつた。どこそこの後家さんが近いうちに再婚するかも知れない、そしたらその家が空くだらうからとか、なにがしの息子が町に出るといふ噂がある、もつとも妻子を殘して行くのださうだが、あの息子がゐなくなれば、妻子は親元に同居するだらうからとか、さういふぼんやりしたあての家ばかりだつた。私は考へて、さうだ、そんな家が空いてくれない方が結局幸ひだ、若しさういふ家が出來て、愈々母と二人で落着いて住むやうになつたら、それこそ自分はこゝで埋もれてしまはねばならない。年の行かなかつた時分には、長い間離れてゐたので、どうかして早く一緒に暮すようになりたいと思つた母だが、今はその母と一緒に住むのが恐れられた。私は唯無暗に勉强しなければならないと思つて、窓の下で本を開かうとすると、いつの間にか近所の子供が二三人もやつて來て、三味線の稽古などが始まるものだから、又しても舌皷を打つて散歩に出るのだつた。さうして何度かの散歩の道で考へた末に、或時母にいつて、こんな風ではとても自分の勉强が出來ないし、といつて借家の見つかるのはいつの事だかわからないから、當分私一人だけで靜かに勉强の出來る部屋をどこか近くに借りたいと相談した。母は私の氣むつかしいのに懲りてゐた折だつたから、早速それに賛成した。そして、私は間もなく私の望んだやうな借間をもとめることが出來た。それは主人が大阪とかへ

出稼ぎに行つてゐる或百姓家の離れだつた。家には留守番の年とつたお上さんと、それの娘と姪とがゐる切りだつた。彼女等は毎日朝から晩まで機を織つてゐた。どういふつもりで建てたのか、母家と中庭を隔てた六疊一間の離れがあつて、それが私の借りた部屋だつた。窓が東へ向いてゐて、その前の空地には見事な百日紅が一本植はつてゐた。だが、私がそこへ來た時には、さすがの百日紅も花を散した後だつた。母が毎朝食事の用意をしに來てくれた。さういふ風にして、翌年の三月迄、ざつと半年の間、私は彼女に養はれた譯だつた。

その間に一度又小學校の教師の話が持ち上つたことがあつた。私はしかしもうそれには懲りてゐた。殊に河内の場合と違つて、若しこゝでそんなことを始めたら愈々足を拔く機會がなくなるだらうと恐れた。唯困つたのは、さうしていつ迄も母の痩せ腕にすがつてゐる譯には行かないだらうといふことだつた。現に彼女はそれ迄は彼女自身だけの口を糊すればよかつたのだし、彼女自身の部屋代の心配もなくて濟んでゐたのだから、比較的呑氣であつたに違ひないのに、私が現れてからは、彼女は遠い町の方へまで出稽古に出かけたりなどしなければならなかつた。私はそれを見るにつけても、たまらなくなつて、或日私の中學時代の學資を出してくれてゐた又從兄弟に長い手紙を書いた。その家には先にいつた私の片輪者の兄が私の家の破産以來ずつと世話になつて行つてゐたので、そんな手紙を書く迄もなく、中學卒業後も私は月に一度なり、二月に一度なりは、いや〳〵ながら祖母に勸められて、御機嫌うかゞひに出かけたものである。その度に、私には今は何か主人筋の家のやうに見える又從兄弟の口から「お前もいつ迄さうしてゐても仕樣がない、では一つ相談に乘つてやらう」といふ言葉を心に期待して行つたのではあるが、會社の取締役とか、重役とかの役を幾つも持つてゐる彼には、お辭儀をするだけの暇位しかなかつた。「や、御機嫌よう。どうしてます。上の學校へ行くつもりですか。入學試驗に通る自信がありますか」と彼はいつた。「だけど、なるべく早く卒業が出來て、早く獨立の出

來る學校がいゝでせうね。」「ですけど、僕は……」と私がいはうとすると、「ちよつと急ぐから今日は失敬、ぢやあ、又、」と彼は大勢の下男や下女にお辭儀されながら、玄關先に待つてゐる俥の方へ進んで行つた。いつ行つてもそんな風で、私は彼と話が出來なかつた。だが、私から話さなくても、顏を見ればそんな風に言つてくれるのであるから、もし彼がその氣になつてくれたら、私に半時間でも一時間でもそれに就いて相談する時を割いてくれるだらうと私は考へた。もつとも、そんな風に考へてゐるうちに、私は中學校を出て、河内へ行つたり、大和へ行つたりして半年以上の日を暮してしまつたのだつた。そこで、私は思ひ切つて、自分の望みを長々と手紙に認めて、彼に書いたのだつた。いひ忘れたが、彼は神戸の住人であつた。

その手紙の返事が半月ほどして、彼の代りに丁度東京から何かの用事で來てゐた彼の弟が見て、彼から「どういふ志望だか、一度自分が會つて聞いてやらう、」といつて來た、そして彼は來る何日に大阪の何某といふ旅館にゐるから、そこ迄來てくれといつた。私は飛び立つ思ひで指定せられた日に大和から大阪に出かけて、彼を旅館に訪問したところが、彼は一應私の話を聞いて、それを彼から彼の兄に、なくべく私の願ひを聞いてくれるやう、盡力して話してやらうと約束してくれた。丁度それは十二月の末のことであつた。私は多少前途に希望の光を見た喜びで活氣づいた。私は大和に歸らないで、中學時代の友人の大勢ゐる大阪で正月を越さうと思つて、祖母のゐる伯父の家に足を止めることにした。神戸の又從兄弟の返事も大阪の伯父の家にくれるやうにと賴んでおいたのだつた。

その返事が待つても待つても來なかつたのが私を憂鬱にさせたが、半年餘りの田舍暮しと、友達を離れた孤獨な生活とに飽き飽きしてゐた時のことだつたから、久しぶりの大阪の生活は私に每日の日を忘れさした。中學時代の友達の多くは大概その年の入學試驗に落第して、それが當然のやうな顏をして遊んでゐた、若し私が次の年までに又從兄弟から

の援助を受けることが出來ると定つたなら、彼等と共に、彼等よりも遅れることとなしに勉强することが出來る譯だつた。

私はそれ等の友達と往來することに依つて、十二月の末から正月にかけて大阪で暮した。だが、正月になつても、又従兄弟からの返事が來なかつたので、私は次第にいら〳〵して來た。それで、一月の中旬になつて、私は一度又大和の方へ歸ることになつた。その時、私の祖母が「一度お前たちの家へ行つて見たい」といひ出して、彼女を連れて行くことになつたのだつた。彼女は明けて七十七歳になつた譯だつた。彼女は前の年、河内の國で私が病氣になつた時、その看病のために彼女の孫である私と彼女の娘である私の母と、母子三人水入らずで暮した記憶を懐しく思ひ出したのに違ひなかつた。同じ樂しさを大和の國で味ひたいと思つたのであらう、そればかりか、若し私や母がいゝといふなら、彼女は私たちと一生そこで共に暮したいと望んでゐたやうに見えた。愈々彼女はそこへ行くと定ると、まるで彼女は行き切りになつてしまふかのやうに、彼女の荷物の整理をしたり、到底そんなに着られさうもないと思ふ程、ありたけの着物を行李に詰め込んだりした。私はそんなことをされて落着かれては、私の二十歳の前途を封じられるやうな氣がしたので、顔を顰めて、なるべく持物を少なくするように勸めた。老人の常で、色んな小切やぼろ切などを貯へてゐたが、そんなものまで持つて行かうとするのを見た時など、「どうするんです、そんなぼろ切を?」と私は少年の頃はそんなにも恐い人ではあつたが、今はもう自分が大人になつた權威を以て、「そんなものまで持ち込まれちやあ僕が困ります、六疊切りの部屋なんですから、置き場所がありません、」といふと、「でも、こんなに小さいんだもの、わし向うへ行つたら暇にこれを縫つたり、繕つたりしようと思ふもんだから……」と頼むやうにいつた。隨分嚴格な人とばかり思つてゐたこの祖母が、子供が哀願する時のやうな表情をしたのを私はこの時初めて見た。若い頃の豐頬の名殘りとして、牛の咽喉の肉のやうな感じのする垂れ頬の皺が、何ともいへず哀れに見えた。が、私のいら〳〵した不機嫌は更に頑固に、彼女

が信玄袋の中に一旦入れたその小切の風呂敷包を邪險に自分で取り出して、「止して下さい、止して下さい、」と叫んだ。義伯母が傍から、「まあ、そんなになさらずに、お年寄りのことだから、いふまゝにさせてお上げなさい、」といつた。が、祖母もさすがに氣持を惡くしたと見えて、私が取出した風呂敷包を默つて元の押入の隅に入れてしつた。そこで、彼女は氣を變へて、顏色を柔らげながら私の方を見て、「ぢやあ、明日立つと定めようね、」といつた。「えゝ、さうしませう、」と私は冷やかに答へた。

私たちが大和に向つて立たうといふ日――その日を覺えてゐる、一月十六日であつた。――はひどく底冷えのする日であつた。餘り寒いので中止しようかと思つた位であつたが、祖母は年寄りの一念で長い間樂んでゐたことであつから、是非出かけようと言ひ張つたので、私もその氣になつてゐるところへ、折惡く私の友人が訪ねて來た。久しぶりの會ふ顏だつたし、何といつても私は片田舍へ歸るよりは、一刻も大阪で友人たちと話してゐたかつたので、快く彼を持てなして話し込んでゐると、その間に祖母は二三度も私の部屋に顏を出して、「どうするの、もう今日は行かないの？」と催促に來た。間もなく友人は歸つて行つたが、私はそれで祖母に對して非常に機嫌を惡くした。それに出發するにほんの少しだが、時間も遲くなつてゐた。祖母はそれでひどくがつかりした顏をしてゐたが、彼女よりも私は一層顏を顰めて、「どうして客が來てゐるのに、あんな客の氣持を惡くするやうなことをするんです、何も今日行かなければ行けないと限つてゐないぢやありませんか、」と唇を震はして叫んだ。「ぢやあ、今日は止めよう、」と祖母は私の權幕に泣き出しさうな顏をしていつた。が、私は反對に、「いえ、そんなに行きたいんだつたら、未だ時間がそれほど遲いといふんぢやなし、立ちませう、」といつた。「いえ、今日は、ぢやあ、止しませう、」と彼女はいつた。「だつて、さつきはあんなに催促したんぢやありませんか、行きませう、さあ、仕度して下さい、」と私はいつた。そこでも義伯母が仲裁の口を挾んで、結

局私たちは立つことになつた。それは午後一時頃だつた。一

私は悪い性分で、それから汽車の中までも祖母に對する不機嫌がつゞいてゐた。汽車は湊町を出て、例の河内の平野を走るのであるが、平野、八尾と進むうちに、次第に外の空氣が寒くなつて來たものと見えて、車内の人いきれで窓硝子がすつかり凍つてしまつた。これは大阪の邊では滅多にない冬の氣象である。「今日は大分寒いのだな、」と私は思つて、——混んだ汽車だつたので、私たちは別々の席に坐らねばならなかつた。それが三等車のことだから、向う前、向う前と並んでゐる腰掛に、兩側に人たちが掛けてゐる腰掛を一ト側おいて、私と祖母とは辛うじて顔を見合はすやうな位置に坐つてゐたのであつたが、ふと彼女の方を見ると、寒さがこたえたのか、さすが達者な老人ではあるが、例の牛の咽喉のやうに見える垂れ頬が、不斷より青白く見えたのが氣になつた。だが、私はまだ不機嫌な狀態がつゞいてゐたので、ふと彼女と顔を合はしても、わざと恐い顔をして反らすやうにした。

汽車が河内と大和の國境の隧道を通る時分には、曇つてゐた空から細かい雨を落し出したやうだつた。それは停車場でいふと、柏原と王子との間だつた。此間は一番停車場と停車場の間が長いので、その頃よく流行つた物賣りが乘り込んで來た。物賣りは彼等獨特の瓣舌で鞄の中から一組の繪葉書を出して、それに薄つぺらな講談本とか、地圖とか、八卦の本とかを添え物として幾ら幾らといふやうな賣り方で、低級な三等車の客の興味を呼んでゐた。彼はそれを一と通り賣り終ると、「もう一つお見せするものがあります、」といつて、今度は一そろひの玩具を取り出した。それは何細工だか知らないが、犬とか、蜘蛛とか、章魚とかいふ、尾とか足とかに特長のある動物の玩具で、それ等の尾や足がそれ／＼螺旋細工になつてゐるので、糸に依つて頭とか背中とかを吊り下げられてゐる蜘蛛の足や犬の尾が、吊り下げられてゐるまゝにピリ／＼と動く仕掛になつてゐるのである。物賣はそれを四方の客に見えるやうに、左の手のこれ／＼の指に

一つづゝ、その品數を增やしながら吊り下げては、「これだけ澤山あつて初めにいつた値段の幾ら幾らである。子供たちの土產にこんなに喜ばれてそして安いものはない、」と結んでから、最後にひどく剽輕な顏に造られた手足のある達磨の人形を添へて見せた時には、車中の客の半分まで笑顏になつた程、上手な說明を加へた。その時私は何氣なくその人形賣と人形とに注意をとられてゐた目を橫に反らすと、前の腰掛に掛けてゐる人の肩越しに、ふと祖母と目を見合はした。すると、彼女はにやつと子供のやうな無邪氣な、然し老人だけにどうかすると醜く見える笑顏を浮かべて、それから右手でちよつとその人形の方を指さすやうな恰好をして、私の意見を求めるかのやうに首を傾げて見せた。それは母のゐる家に小さい子供がゐた筈だから、あれを買つて行つてやらうか？と私の意見を求めた意味に違ひなかつた。が、私は彼女に對する不機嫌がまだつゞいてゐることを示す爲と、もう一つには、そんな下等な人たちが喜ぶ安物の玩具を買ふ不體裁さとを考へて、思ひきり顏を顰めて激しく首を振つて見せた。すると向うの席に腰かけてゐた彼女は吃驚したやうに、合圖をしかけてゐた手を下ろして、何ともいへぬ不滿らしい、情なさうな顏をした。私はその時心で年寄りにそんなにも執固く悲しみを與へたことが後悔されたが、そのまゝ窓の外の方に目をそらした。やがて汽車が止まつた王子といふ驛で、私たちは乘換へねばならなかつた。

乘換のためには汽車を下りてからブリツヂを渡らねばならなかつた。大勢の客に押されながら、私は祖母と前後して車から下りた。人込の中で待ち合はせて、その時も矢張り私は不機嫌だつたので餘り口數をきかないで、唯時々「あぶない、」とか、「急がなくてもいゝんです、」とか注意しながら、ブリツヂの段々を上つた。氣がつかなかつたが、多分國境を越えてからだつたらう、雨の代りに細かい雪が散つてゐた。氣丈者の祖母はブリツヂの段を上るのに、連れの私や、その他大勢の汽車の乘客たちに負けない早さで上るのだが、私が時々速力をゆるめて彼女と並んで行く時、氣をつける

と苦しさうな息を吐いてゐた。「急がなくつてもいゝんですよ、急がなくつても、」私はさういひながらも、どうかすると彼女を促すやうに、大勢の客たちに負けないようにと急いだ。だが、橋を横ぎる時分から次第に私たちの足は大分遅れたと見えて、降り口にかゝつた時は、上りの時より周圍の人足が少なくなつてゐるの私は發見した。そこで私は少し氣が急いだので、「僕、先に行つて場を取つておくから、ゆつくり下りて入らつしやい、」と彼女にいひ殘して、下りの階段を驅け下りた。大勢の遲れた他の乘客たちの中にも、驅け下りる者が多かつた。が、私が先に下り切つてしまつて、そこに待つてゐる列車を見ると、それ程込んでゐるやうには見えなかつたので、私は安心して階段の下に戻つて來て、遲れて下りて來る祖母を振り返つた。と、下り階段の彼女は案外遲くなつて、まだ思ひの外上の方から下りて來るところだつた。その姿は上りの時の樣子とすつかり違つて、左手で欄干をつかまへ、右手で紫羅紗のコートをつまみ上げながら、一足一足と來るのがひどく難澁らしく見えた。そして氣ばかり急ぐのに、身體が思ふやうにならないので、半分泣きさうな顏に見えた。よくいふ牛の咽喉のやうな垂れ頰の不斷から白い顏が妙な色に靑ざめて見えるのが、譯分らすに私の胸を打つた。階段には屋根がついてゐたが、それと欄干のすき間から北風に送られて粉のやうな雪が舞ひ込んでゐる寒さだつた。その爲であるのだらうが、滅多にさういふ所を見せたことのない彼女が、その心持長目の鼻の下を、少し鼻水で濡らしてゐるやうに見えた。あんまり足取が危なさうで、今にも轉がり落ちて來はしないかと私は下から見上げながら心配になつた程だつた。「この人もさすがに年とつて弱つたな、」と私は心で痛く思つた。だが、そこに、寒さと疲勞とに苦められて階段を下りて來ながら、泣き出しさうな顏で下から見上げてゐる私を見た彼女の目の中に、私が見たのは、いつ迄も不機嫌をつゞけてゐる私を咎めるやうな、又恨むやうな色ばかりではない、もつと氣味の惡い、もつとゑたいの知れない何かゞあつた、そしてそれは彼女の目の色ばかりではなく、顏附全體、身體全體にだといふこと

が出来た。その恐ろしさと印象の深さとは、その後私は停車場のブリッヂの下り階段にさしかゝる時、それがどこの國のどこの停車場のであらうが、必ず私にそのことを思ひ起させた程である。殊にそれが雨の日とか、雪の日とかで、階段の下りに骨の折れる時は、今だに一層はつきりとその時の祖母の姿を思ひ出すのである。

後になつて私はその時のことを思ひ出す毎に、あれが「死」の影だつたのだと考へるのである。私たちが下りた停車場から目指す村まではまだ五十町行かねばならなかつた。而も雪は次第に激しくなるばかりだつた。俥でやつと先方の家に着いたのは日が暮れてからであつた。迎へに出た母をはじめその家の人々が「まあ、よく入らつしやいましたわね、選りに選つてこんな日に、」といつた。「今日はこんな天氣だから見えないだらうと思つてゐましたのに。」祖母は寒さと疲勞とで可成り弱つてゐるやうに見えたが、やがてこの國の名物の炬燵に入つて、彼女の習慣である晩酌を始めた頃には、その色白の顔を櫻色に染めて、久しぶりで娘と孫とを一緒にして見る嬉しさで上機嫌になつてゐた。「しかし、こゝではやつぱり窮屈だから、」と彼女は私の方を向いて、「お前のゐる家の方へ行かう」といつた。が、もう夜も遅くなつてゐたし、來た日にすぐにあちらへ行くといふのも、母のゐる家に悪いといふので、「ぢやあ、明日行きませう。」といふことにして、やがて私だけ私の借りてゐる部屋の方へ歸つて行つた。その時分には最早や天候は鎮まつて、空には降るやうに冬の星が瞬いてゐた。

ところが、その翌朝早く、私は母のゐる家からの使の者に起された。「祖母さんが少し身體の具合が悪いやうだから、すぐ來て下さい。」といふのだつた。私はそれを聞くと、昨日の寒さにあてられたのだらうとは思つたが、大したこともないだらうと思つて、ゆつくりと手水などつかつてから祖母の寢てゐる家へ出かけて行つた。表からでなく、裏から庭石づたひに、それが母の部屋であるところの離れの座敷の前へ出て、縁側に膝をついて、そこの障子を開けると、祖母は

私が前の晩別れた時と同じ恰好に、炬燵の前にもたれかゝつて、後から按摩に背を揉ましてゐた。その傍についてゐた母と、按摩と、炬燵の蒲團の上に顔を俯せてゐた祖母とが一度に、障子を開けた私の顔を見た。が、その時一夜の間にがらりと變つて見える祖母の顔を見て私ははつとした。それは王子の停車場のブリッヂを下りて來る時のあの顔附そのまゝだつた。目の中に涙のやうな水がたまつてゐた。

それから二日目に彼女は枯木が朽ちるやうに死んでしまつた。二日目の夜中頃、前の日彼女の容體が大變よくなつたやうに見えたので、私が自分の間借してゐる家の方へ歸つて寢てゐると、母の家から使が來て、「祖母さんの容體が變りましたから直に、」と呼びに來た。が、私が駈けつけた時には、病人の身體はまだ温かだつたが、脈は止まつてゐた。母は泣いてゐたが、私はその時泣かなかつた。却つて今になつて私はその時のことを追想して泣くことがある。それと、電報が行き違ひになつて、大阪の伯父が中々到着しなかつたので、その翌日の晩、私は彼を迎へに大阪へ行つたことがあつた。大體母が居候してゐたのは先にもいつたやうに全く他人の家であつた、そこへ、わざ〳〵祖母が來て死んだやうな譯であつたから、一日も早く葬式をしなければならなかつた、私たちは伯父の到着の遲いのを待ち兼ねたのだつた。そこで、私は數日前祖母と二台の俥を並べて來た停車場からの五十丁の道を、反對に一人で俥に乘つて走つた。七日目位の月夜で、私たちが來た日に降つた雪が方々に殘つてゐた。月の直下にある金剛山や葛城山の頂は雪の爲に刃物のやうに光つて見えた。その時も私は泣かなかつたが、王子で汽車を乘り換へた時、私はどうしたのかその時二等に乘つたのであるが、車の中に一人も人が乘つてゐなかつたので、ふと來る時の汽車のことを考へて、その時一緒に乘つて來た人間が死んだ知らせに行くのだと思つた時、長い腰掛の上に長々と突伏して泣いた。

私は先に葛城郡といつたが、それは記憶の違ひで、その隣の高市郡であつた。高市郡の天滿といふ村外れの、街道か

ら半町ばかり左に入つたところに一寸とした丘になつた墓地がある。その邊には當時いゝ火葬場がなかつたので、大阪へは死者の髮の毛を持つて歸ることにして、土葬をすることになつた。その邊は私が毎日ほど散歩したところだ。村の墓地のことであるから、どの墓を見ても、幾つかの限られた同じ姓を名乘る墓石が並んでゐる中に、祖母のそれだけは如何にも他國者のやうに、街道から見ると一番手前の丘の端に、ぽつねんと異數な姓名を刻まれて立つてゐる。墓石の字は私が書いた。伯父の考案で、石は、下に大きな台石を積む代りに、小石で石垣のやうなものを造つて、その上に建てたものだから、外の墓よりずつと背が高かつた。それが墓地の一等端にあるだけ一層目立つて見えた。

　私はそれが出來た時に詣つた外は、二月から三月にかけて、まだその土地にゐたのだから屢々散歩にその街道を通つたが、いつでも此方から眺めるだけであつた。そしてあんなに望んでゐたにも拘らず、到頭私の借りてゐる部屋をも見ず、貯へてあつた小切で私のために座蒲團をこしらへてくれる暇もないうちに、あのやうに石になつてしまつた人のことを考へて思ず頭が下つたが、しかし或時は私自身の胸が前途の不安と無見當のために餘り暗過ぎたり、又或時は輝き初めた希望の光のために餘り明る過ぎたりして、その半町の道を寄り道して墓の前まで歩いて行くことさへなかつた。そのうちに三月の初に、神戸の又從兄弟から呼出しの手紙があつて、愈々私にそれから向う五年間の學資を出す約束をしてくれたのだつた。で、三月末に私は到頭そこを引上げるとになつたのだつた。母が例の五十町の道を停車場まで送て來てくれた。暖い日だつたので、私たちはわざと俥に乘らずに歩いた。その時私は母と二人で二度目に祖母の墓の前に立つた。僅か二ケ月ばかりの差であるが、野山の景色は祖母が墓になりに來た時とはすつかり變つてゐた。金剛山にも葛城山に雪はすつかり溶けて、最早や春らしい色に染められてゐた。櫟林も全く春の準備をしてゐるやうに見えた。踏みしかれた去年の落葉に溜てゐる露にも、春らしい白い光が輝いてゐた。行手の方の奈良から伊賀にかけての山は紫

色に染められて、麓には霞が掛つてゐた。そして、私の胸は希望に充たされてゐた。が、一緒に道を歩く母には、子が希望と出世の途に旅立つ喜びと共に、（か、それがいつになつたら成し遂げられるだらう？）その危ぶみと、到頭同じ土地に半年もゐたが、一緒に住むことが出來なかつた悲みとで、胸が一ぱいの思ひだつたに違ひない。別れる時、彼女は私の汽車が出てからも、長い間プラットフォームに立つてゐた。これは早く寡婦になつて物事に思ひ切りのいゝ彼女としては珍しいことであつた。だから、私も汽車が大和を走つてゐる間は胸が重かつた。私はそれから一旦大阪に行つて、大阪から東京に向ふつもりだつたのである。

汽車が八尾を通る時に、そんなことは滅多にあり得ないことだが、と思ひながら、誰か知つた人に合はないかな、と私は思つた。私は汽車が河内に入つた時分から、そろ〳〵前途の輝いた希望に浸りかけてゐたので、そんな事を思つて、誰か知つてゐる人を見つけて、聲をかけたいやうな氣分になつてゐたのだつた。が、丁度私たちの汽車が八尾に止まつた時は、上りの奈良行の汽車が右手の線路に止まつてゐたので、驛の待合室の方の側が見えなかつたが、間もなく、その汽車が先に行き違ひに走り出した後に、私たちの前に向側のプラットフォームが新しく展開された。と、そこに遠足か、それとも誰かを送迎に來たのか、小學生の一隊が並んでゐて、その中に、それは明らかに高等科の小さい學生であつたので、目に立つて背の高い、瘦せぎすの巨摩訓導の姿が見出された。私が彼を呼びかける前に、汽車の窓から半身を乗り出した私の顔を見覺えてゐて、彼の小さい生徒たちが一度に隊を亂して彼の周圍を取卷きながら、彼に私のゐることを教へた。初めそれが何を意味するのだか分らなかつた巨摩老人は、折角整列さした生徒たちが隊を亂したので、「こら〳〵、みんなどうしたんだ！」と例の案山のやうに洋服がたぶ〳〵に見える手を振りながら叫んだ。が、次の瞬間彼は線路越しに、止まつてゐる汽車の窓から乘り出してゐる私の姿を認めると、「おゝ！」といつてその平べつた

い、身體のやうに薄くて長い顔に、一ぱいの善良な笑を浮べて「御機嫌よう、」と手を振りながら叫んだ。私の汽車が止まつてゐるところとはプラットフォームが違ふので、彼は私の傍に來ることが出來ないのをもどかしがるやうな表情をして、「御病氣は如何です？」と皺枯れてはゐるが、敎室で出し馴れてゐるので、割合によく通る聲でいつた。私は汽車中の人々が私自身をこめてのこの不思議な光景に好奇の目を見張つてゐる恥かしさを忘れて「有難う、」といひ返した。

「お蔭樣で身體はすつかりよくなりました。それでこれから大阪へ行つて、來月早々東京へ行くことになりました。」

「それはよかつたですな、」と彼は心から私のために喜ぶやうに叫んだ。その時反對の側で車掌の合圖の笛が鳴つて、私の汽車が動き出したので、私は窓から少し身體を引きながら「では、皆さんによろしく、」といふと、巨摩老人は突然嚴肅な顔になつて、そのたぶ／＼した案山子のやうに見える洋服の姿を緊張さしたかと思ふと、いきなり「萬歳！」と子供のやうに兩手を擧げて叫んだ。その年寄りらしい老武者の顔が、萬歳と叫ぶ拍子に急に子供の顔のやうに見えたのが、どういう譯か私に涙を催させるやうな感情に陥れた。何にも知らない小さい子供たちが、先生が「萬歳」といつたので、一度にそれに習つて「萬歳」と叫んだ。私はその答禮に帽子を一振りしたまゝ急いで窓の中に身體を引込めた。

——と、これが私の河内と大和の記憶である。



父

吉田絃二郎

何といふ鳥であらう。鶺鴒に似て鶺鴒よりはずつと大きく、川の中の水に濡れた岩よりも黒い羽色をして、雪の朝の谿川の岩から岩へと暗い淵の蔭をもとめて低く飛んでゐる。

わたくしは去年も天城の奥のある湯の町でその眞つ黒な小鳥を見た。一日の中きつと一度は川上の方から川下の方へ谿川の面を矢のやうに飛んで行つた。いつも美しい谿川の水とすれ／＼に低く水の面を滑るやうに飛んで行つた。わたくしの部屋の窓の下は直ぐに、天城の奥からの流れになつてゐて、流れをへだてゝ暗く茂つた木立があり、木立を縁取るやうに若い椿がまばらに花を持つてゐた。花の下は小暗い淵になつてゐた。眞つ黒な小鳥はよくその小暗い木立の下の淵の岩にぽつねんとしてとまつてゐた。いつもたゞ一羽で、唖默つてゐた。

恰度四月の半ばころだつたので雪を分けた天城の奥では、梢といふ梢には夜が明けるのを待ちかねていろ／＼な小鳥が囀つてゐた。狭い山峽にも菜の花がかゞやい

てゐたり、靜かな山徑の一握りのつちくれまでもが溫かさうに日の光りをよろこんでゐるのに、あの眞つ黑な小鳥だけはうた一つうたふのでもなく、柔かな、梢にとまるのでもなく、ぽつねんとたゞ一羽で小暗い淵から淵をもとめてとんでゐるのであつた。

わたくしはこの唖默つた眞つ黑な孤獨の小鳥を、伊豆の山から山と湯治客の稀な湯の町を選んでへめぐつてゐるわたくし自身の生活にくらべて見たこともあつた。

昨夜からの雪に埋められた湯の町の川の中に、不圖去年見たあの孤獨な黑い鳥を見出した時、わたくしは去年の春の天城の奧の生活を思ひ出した。

わたくしがNの町の姉からの手紙で天城の奧から三島の方へ狩野川に沿ふてあわたゞしい旅立をしたのは四月も末に近かつた。

天城の谿々を驛馬車に揺られて、七八哩の道を急がなければならなかつた。

Nの町の父が緣側から葉蘭の中に落ちて脚の骨を折つた。と、たゞそれだけの短いたよりではあつたが、わたくしはその手紙を讀んだ時、父に對してすまない事をしたと思つた。

Nの町には父の家から少し離れて姉たちも住んでゐた。孫たちもゐた。しかし父の家には父だけが住んでゐた。數年前に亡くなつた母の位牌を守つて、いつも薄暗い納戸につくねんとしてゐるか、葉蘭の茂つた緣側に出て獵銃をいぢるか、自分で作つた薄い眞鍮の板鐵の雉子笛を吹くか、でなければ爐の傍に來て樽をくべながら酒を飲んでゐた。

母が死ぬ少し前から父の兩脚は惡かつた。母が死んだ翌年の春、姉婿につれられて山の櫻を見に行つたきり、それからは始んど少し遠い道を歩くこともできなくなつてゐた。

老齢に似ず眼だけは人一倍、達者だつた。ランプの光りで新聞のルビを眼鏡なしに平氣で讀むことができたほどであつた。だから來年は獵札を願つて一生の思ひ出に鐵砲を擊ちに行くと、いつも口癖のやうに云つてゐた。

父はまつたく故鄕では並ぶ者もないほどの獵の名人であつた。まだ獵犬などを使ふことのはやらぬころだつたが、父は雉子笛を吹くことも誰より巧みであつた。晝間の鳥は逸しても暗の夜の鳥は逃がしたことがないと言はれたくらゐ夜獵の名人であつた。

長い間の不運な境遇や、貧しい、あわたゞしい生活に馴らされてゐた父の心に、數年前からふたゝび若い日の銃獵に對するほとんど病的な熱情が頭を擡げて來たのであつた。

父は朝起きるから寢るまで納戶で雉子笛を吹いてゐることが多くなつた。

衰へ切つた父が暗い納戶で雉子笛を吹いてゐる音を聽くたんびにわたくしは子供のころのことを思ひ出した。そのころは父は貧乏のどん底にゐたので、わたくしの月々の小學校の月謝も滿足には拂つてくれなかつた。だからとても父に、獵札を受けるだけの金錢上の餘裕はなかつた。父は人の獵札を借りるか、でなければこつそりと銃を藁のなかに包むかして、わたくしを伴れて朝まだ暗いうちに山の中にはいつて行くのであつた。

わたくしは谿一つ隔てた山にしやがんでゐて父の雉子笛の音を聽くのであつた。ぴーいよ、ぴーいよと子供心にもあはれな雉子笛の音が狹霧の底に谿をへだてゝしづかに聞えて來るのであつた。曉の星がまだ殘つてゐた。

父はまたわたくしをつれて夜の鴨擊ちに出かけて行つた。高い草山の背を小半日步いて、そこ、こゝの高原の澤だの、池だのを見まはつた。そして葦の中の鳥屋の中に日が暮るゝのを待つた。

馬車の幌の間から、かゞやく樹の若葉につゝまれた裏伊豆の山々が見えた。わたくしはそれらの草山を眺めながらあ

のころの父を思ひ出した。父はどこにゆくにもわたくし一人をつれて行つた。

母に死なれてしまつた父がたゞ一人で薄暗いNの町の家を守つてゐる姿を思ひ出しては、年中、旅をへめぐつてゐるわたくしは、幾度か暗い心にとざされてしまつた。

『お前はなぜ父の家に歸らないのだ。』

そのたんびにわたくしは自分で自分を叱る氣にもなつた。

納戸で鐵砲をいぢつてゐる父、雉子笛を吹いてゐる父、爐の前にたゞ一人でつまらなさうに酒を飲んでは寢ころんでゐる父……を思ひ出すことはわたくしにとつて耐らないことであつたが、わたくしはやつぱり旅に出て父の家には歸らなかつた。

親といふものが、どれほど子を待つてゐるかといふ心持ちは、たとへまだ一人の子供も持たぬにしろ、ほどもうわたくしの年輩になれば想像はつく。親の寂しい心は想像しながらもわたくしは父の家には歸つてゆかなかつた。『もしわたしが父と一緒に家にゐたら父はどんなに喜んでくれるだらう。わたしが一緒だつたら父は緣側から落ちなかつたかも知れない。』近くに姉たちが住んでゐたにせよ、父をたゞ一人Nの町の家にのこして、旅をつゞけてゐるわたくし自身のエゴイスチックな心を責めないではをれなかつた。

父にとつてはわたくしはたゞ一人の男の子である。父がどれほどまでわたくし一人を賴つてゐたかといふこともわたくしには想像がつく。しかもわたくしは父の家には滅多に歸つてゆかなかつた。

不運なる父と子！わたくしは父とわたくし自身との關係を客觀的にながめていつもかう思ふのであつた。形の上から言つても、心と心との關係から言つてもわたくしたちの關係はあまり幸運ではなかつたやうに思ふ。

『父や母と別れて生きてゐなければならぬくらゐなら、自分は乞食になつてもいゝから學校を止めて父の家へ歸りたい。』

神學校の寄宿舍にゐたころわたくしは禮拜堂の塔の上で幾度となく、夜の祈禱會の後、こんなことを考たこともあつた。

あのころの父に對する私自身の純な心持ちが、まるでちがつた世界の思ひ出でゞもあるやうにわたくしの心に映つて來ることもあつた。時といふものが人間の心の上に與へる恐ろしい變化について考へないではをれなかつた。わたくしの心は暗くされた。

『父と子！』わたくしは幌馬車の中で同じ言葉をくりかへした。そこには二つの生存の間に言ひやうもなく懐かしい力が動いてゐた。不可思議な因縁の力が動いてゐた。と同時に言ひやうもなく寂しい、冷たい影が。

わたくしは自分を責めても見た。しかしそこにはわたくし自身のエゴイスチックな心以外にさらに或る力強い自然の力が動いてゐるのではないかと思つた。

父に對してわたくしは二十年前のわたくしの心を持つてはゐなかつた。

脚の骨を挫いてあの薄暗い納戸に仰臥したまゝわたくしを待つてゐるであらう父の俤を思ひ出しては父を案じながらもわたくしは、幌馬車の中から雲雀の聲を聽き、草山の春の光りをたのしむほどの餘裕を抱いてゐた。何の悲しみも持たぬ旅人のやうに窓によりかゝつて春の山を眺めてゐるわたくし自身をかへり見て、わたくしはふたゝび『不遇なる父と子』の姿を描いてゐた。

ばさと梢の雪が音を立てゝ川に落ちた。黒い鳥は冷たい水の面を滑つて川下の方へ飛んで行つた。

去年の春の日の追憶は破られてしまつた。わたくしは雪の中の川を見つめたまゝ橋の袂に立ちつくしてゐた。

『わたくしにはもう父もない！』

雪の川の中を、翅の下に首を突き込んで眠つてゐた四羽の眞つ白な水鳥が急に羽叩きをして流れを上つて行つた。

父につれられて高原の澤や池のほとりを、叢を分けて歩きまはつた日、父にはぐれて、高い萱の中で泣くばかりになつて父を呼んだ子供時代のさびしさがその刹那わたくしの心に取りもどされて來た。

わたくしは谿川に沿ふて湯の町を山の方へ歩いて行つた。

二番目の橋の袂で、わたくしは十年ばかり前からこゝの湯の町で顔馴染になつてゐるTといふ男に逢つた。Tはもとながいこと船に乘つてゐたのであつたが、こゝの湯の町に來て妻を貰つて、今では椿油の店を出して、ちよつとの間も手を休めないほどにまめ〳〵しく働いてゐるのであつた。

『まあお珍らしい、いつもの××屋にお泊りですか？ぜひお遊びに……』

『おかみさんも丈夫ですか？ありがたう。あなた病氣で入院なすつたつて？大事になさいよ。』

わたくしはTと別れて橋をわたつて行つた。Tにも子供はなかつた。

わたくしはTの顔を思ひ出した。わたくしはTが何のために入院しなければならなかつたといふこともほゞ想像することができた。

『あの人も相當金はできたやうですが子供がないものですからついねえヘツヘツヘツ……ええやつぱり寂しいんでせう』わたくしは××屋の女中の話を思ひ出して、もいちど振りかへつて見た。Tは大儀さうな足どりで下の方へ歩いて

行つた。子供を持たぬ中年の男の寂しい影がTのうしろ姿をつゝんでしまつてゐた。

十國峠の山の背の雪が眞つ白に湯の町の屋根越しに遠くに眺められた。

わたくしはいつものやうに××寺の山門前の橋をわたつて狭い石ころ道を山の方へ歩いて行つた。」

低い煤けた軒のあたりからかすかな湯の香が漂ふて來た。

日が雲の切れ目から照り初めて來た。屋根の雪が倦怠い音を立てゝ道の上へ落ちたりした。

いつの間にか數年前まで水車小屋があつたあたりに藝妓屋が二三軒立ち並んでゐた。私は藝妓屋の前を通り過ぎて氷てついた石段を經堂の方へ上つて行つた。

經堂の横の少し小高いところには昔この湯の町で殺された若い源家の將軍の苔むした塚があつた。その若い妻や子供たちの大小三つの輪塔が雪の中に埋もれてゐた。

わたくしは輕く頭を下げて將軍塚の裏をさらに松山の方へ登つて行つた。松山の上の番人が今朝早く雪を掻いて道をつけて置いてくれたので道は思つたより樂であつた。

將軍塚の直ぐうしろに綻びかけた一株の紅梅があつた。わたくしは不圖ひよう……ひよう……と鳴く小鳥の聲を聽いて紅梅の下に立ち止まつた。

わたくしは紅梅の梢をつゝいては啼いてゐる一羽の鷽を見出した。」

梢をつゝくたんびに柔かな胸毛がほんのりと紅く雪の中に動いた。

三十年前である。故郷を出てNの町に來た父は轉々として小さな家から小ひさな家へと移つて行つた。」

新開地のNの町はまだそのころは蘆に掩はれた澤だの、麥につゝまれた丘ばかりであつた。」

父はひろい麥畑の中に小屋を立てた。小ひさな杉の丸太だの竹だのを運んで來て、手斧だの、鋸だのを器用に使つて父は自分ひとりの手で堀立小屋を作つた。

三間に三間半くらゐの堀立小屋であつた。荒壁のまゝで、屋根はこけら葺きであつた。はいり口から裏までは突きぬけの土間になつてゐて、裏口にちかく土間に、ちかに、土の竈があつた。亡くなつた母はいつもその竈で薪火を焚いたり、父に擲られては一人で竈の前で泣いてゐた。薄暗い竈の前で泣いてゐる母を見るたびにわたくしは母を氣の毒だと思つた。亂暴な男、暴君的な父に對するかすかな反抗をすら感じた。

「麥畑の中の小屋を父の手で作つて貰つた時わたくしたちはどんなに喜んだか知れない。ともかくわたくしたちは故郷を出てから幾年目かにはじめて自分らの家を持つことができたのだから。

麥畑の中の小屋の軒に籠がつるされてあつた。中には一羽の鶯がいつも、麥畑を吹いて來る柔かな風を浴びながらひよう…ひようとさびしい聲で鳴いてゐた。

將軍の墓のうしろの紅梅の梢に鳴いてゐる鶯を見た刹那にわたくしは、麥畑の中の小屋や、軒の鶯のことを思ひ出したのであつた。

或る日わたくしは父に連れられて幾つかの草山を越えて行つた。父は鶯を入れた籠を風呂敷に包んで抱へてゐた。父は道々草の實を取つては籠の中に入れてやつた。

父はちよつとした森の縁に來ると風呂敷から籠を取り出して梢に懸けた。そして黐をつけた椿の枝を籠の上に置いた。

父につれられてわたくしは木蔭に隱れてゐた。ひよう、ひようとさびしい鶯の聲が木蔭まで聞えて來た。

わたくしたちは終日山を歩いた。しかし一羽の鶯も取ることはできなかつた。

その翌日であつた。父や姉たちは働きに出かけて家にはゐなかつた。わたくしと母だけが小屋にゐた。母はわたくしの凧の絲を拵へるために麻苧をつむいでゐた。

懶い初夏の風がかすかに麥の穗を戰がしながら小屋の窓へ吹いて來た。

わたくしは黍飯を食つてゐた。軒の籠ではしつきりなしに鶯が鳴いてゐた。

幼いわたくしの心にも六月の日の光りや、柔かな風や、麥の色や、小鳥の聲はこの上もなく惠まれたものとして映つてゐた。少年の心は無性に躍つた。

しかしわたくしの喜びに充たされた心はすぐにめちや／＼に叩きのめされてしまつた。

わたくしが箸を置いて立ち上つた刹那であつた。わたくしは鶯がぱたと鳴き聲を止めてしまつたことに氣付いた。同時に鶯の姿が見えなくなつたことを。

わたくしはあわてゝ母を呼んだ。

母は軒から籠を卸した。鶯は籠の底に落ちたまゝ死んでゐた。

餌壺には一粒の草の實もなかつた。

わたくしは鶯の死骸を抱いた。柔かな胸毛の感觸があはれであつた。

わたくし鶯の死骸を抱いたまゝ泣き出してしまつた。

あの時の懶い風が、ぎら／＼と照つた日の光りが、やさしい母の眼が霧の中に佇んでゐるわたくしの頭にさながらよみがへつて來るのであつた。

背の高い父が白い髯をして、箱を抱へて笑ひながら雪の中を下つて來るやうな氣がしてならなかつた。
わたくしは谷の聲を聽きながら雪の中を松山の方へ登つて行つた。

雪の夜に父の柩をN町の山の火葬場に送つて數日後にわたくしはたゞ一人でN町を立つた。
父や母が生きてゐる間はわたくしは年に一度か二度はNの町をたづねた。そこには小學時代の友人もゐた。Nの町はわたくしにとつて第二の故郷といふよりは、むしろ第一の故郷であるといつた方が正しいかも知れぬ。
しかしもう父もゐない、母もゐないといふことになれば、わたくしは滅多にNの町をたづねることもないであらう。
Nの町にのこつて、Nの町の土にならなければならぬ二人の姉たちのことを考へると離愁といふやうな淡い寂しさがわいて來ないではなかつた。
姉や妹たちは父の家の桃の木の下に立つて、わたくしを見送つてくれた。姉たちの眼は赤かつた。
わたくしは東京にかへるのもいやであつた。Nの町からの歸りを急に三島で下りて伊豆の溫泉場へ來てしまつた。
わたくしはこの數年來のオーヴァ・ウオークのためにかなり疲れてゐた。わたくしは思ひ切つて心ゆくまでしづかに伊豆の山で父のことも思ひ出して見たかつた。父を失つた悲しみに浸つても見たかつた。
月々Nの町の父にわづかの金を送つてやつて、父が喜ぶ顔を想像しては夜も晝も働いてゐたのであつたが、父がゐなくなつたことを考へると、わたくしは東京にかへつて働く氣にもなれなかつた。
「子供一人あるんぢやなし、今日からはたゞ食つてさへ行けばいゝのだ、」
わたくしはこんなことを考へては幌馬車の中から山をながめてゐたこともあつた。

山を登りつめたところはかなり廣いなぞへを作つた松林になつてゐて、素直に伸びた赤松が快いほど蟲々を並んでゐた。

そこには松林の間に亭見たいな茅葺きの家があつて、屋根は苔むして半ば落ちかゝつてゐた。しかし北向きの一室だけは雨も洩らず、仕切られた爐もそのまゝになつてゐた。

山番の家はその茅葺きの家からは二三十間へだたつた松林の蔭になつてゐたが、わたくしは偶然にもその山番の男を知つてゐたので、暇さへあれば松山の中の家へ來て終日爐の傍に坐つてゐた。

『ほんたうにお珍らしいぢやありませんか、またこんなところでお目にかゝるなんてねえ旦那！』

山番の男は番小屋の方から榾を抱へて來ては爐にくべた。

二三年前わたくしはこゝから七八里奥の天城の湯の町で春を過したことがあつた。

そこにはたゞ二軒の宿屋があるだけで、晝になれば田舍から山て來た湯治のお客たちは川原に出て流れ木を拾つたり、椿の下の流れで米を洗つたりしてゐた。

或る小糠雨の朝、湯の町の出はづれの水車小屋の裏から若い女の死骸が發見された。女は關西あたりから來た宿のお客だつた。その女の死骸を抱き上げたのが、こゝの山番の男だつた。そのころ、かれはその宿屋で走り使ひをしたり、薪を割つたりして居たのであつた。

かれを案内にしてわたくしは山蘭の根を掘りに行つたり。石斑魚を釣りに出かけたことが二三度もあつた。

六十に近いであらうかれは妻もなく、子もなく、人に使はれては天城の谿の間の溫泉町を浮草のやうに歩きまはつてゐるのであつた。

『今日も旦那はきつと登つておいでだらうと思つて雪も掻いときましたよ。』かれは小鼻に皺を寄せながら笑つて、大きな木の根つこを爐の中に投げた。

『ばかに歩きよいと思ひました。ありがたう。』

『雪を掻きとかんぢや、わしだつて町に下りられんで。この分ぢや奥の方はずゐぶん積つたでせうぜ、また奥の方では猪の奴が畑を荒しに來るにちがひない。』

『これぐらゐの雪でも猪が出て來ますか？』

『來ますとも、一週間ばかり前の雪でもこゝから二里ばかり上の山で二疋とれましたぜ、鶏小屋の横に猪の皮が干してありましたらう。』

『うむ、あの皮ッ？』

『あの黒い皮です、わたしが皮だけ貰ふて來て干しときましたのぢや』

山番の男は大きな土瓶や茶腕を爐の傍に置いて雪の中を番小屋の方へ下りて行つた。

去年の春ころまでは東京から毎年のやうにKといふ有名な長唄の師匠が來て、××屋の方から晝飯を松山まで運ばせて、終日この茅葺きの家の中で榾を焚いてぽつねんと爐のわきに坐つてゐたといふ話をかの山番の男が話してゐた。

Kといふ長唄の師匠は、わたくしは幾度も有樂座で見たこともあるし、その美しい聲の歌を聽いたこともあつたので、わたくしひとりで爐のわきに坐るたんびにKの白い顔や、美聲を思ひ出した。

そこの窓からは、狩野川の畔から分れてこの湯の町へ來る白い道が山の峡を縫ふてゐるのが見えた。時折り、幌馬車が白い道を走つて行つた。湯の町の中央に控へてゐる××寺の鐘の聲が山の麓から松山の上まで響いて來ることもあつ

た。また時としては天城から流れて居る谿川の水の音が思ひ出したやうに聞えて來ることもあつた。

しかしそこでは何も彼もあまりに靜かであつた。そこではたまに犬を連れた獵人を見るか、薪を積んだ小馬を見るか、その他にはほとんど人を見出すこともなかつた。人間の聲を聽くこともなかつた。

たまに兎を追ふ犬の聲を聽いたり、遠の峽を蠕動してゐる小ひさな黑點のやうな人間の姿を見出すことによつて、山の靜寂は一層深められて行つた。

一六一

火が消えさうになつて來るとわたしは下りて行つて落松葉を掻き集めて來た。落松葉のはぜる音が寂しく、わたくしの心の奥までも響いた。

わたくしは手をかざしながら高く空をかすめてゆく、靜寂な松籟の音を聽いた。

わたくしは眼をつむつた。快い爐の焚き火のぬくもりがわたくしの兩手を、胸を、膝を柔かにあたゝめてくれるのであつた。

わたくしは眼をつむつてゐても、東の窓から見える足柄、乙女、十國の雪につゝまれた山の背から想像することができた。

西の窓からは天城の嶺が見えた。

そこからはたゞ雪につゝまれた幾重もの山の頭、山の頭のみを見ることができた。

わたくしはたゞ一人で廣い自然の靜寂の眞ん中に抛り出されてゐるのであつた。

わたくしはそこにゐる間、すべての人間との交渉を斷つことができた。わたくしはたゞ木や光りや風とのみ交渉を持ちつゞけてゐた。

わたくしは眼をつむつた。そして自分自身の瞑想を、深山の禪僧たちの坐禪の生活になぞらへて考へることもあつた。

それほど松山の中の生活は單調であり、原始的であり、靜寂であつた。

かつてわたくしは或る一人の若い大學教授を誘ふてこの松山の上に連れて行つたことがあつた。恰度日が暮れかゝつてゐた。富士から南アルプスの雪の連互が薔薇色に染められてゐた。伊豆も駿河も山の麓はみな暮れてしまつてゐた。

かれは暗の中にそゝり立つた山の偉大な姿に直面した刹那に、

『あゝ、こゝに來れば社會問題もない。勞働問題もないね君！』

と心からの溜息をもらした。かれは熱心な勞働問題の研究者であり、實際運動の指導者でもあつたが。

まつたく、そこの松山に立つて青い大空と幾重もの山嶺とのみを眺めてゐる間は、わたくしたちの心からはあわたゞしい都會生活、そこに生まれて來る醜い人と人の複雜な交渉、息づまりさうな爭鬪、排擠といふやうなものは忘れられてしまうのであつた。

空虛な名、地位、富といつたやうなものもそこでは一文の價値をも持たないものとなつて來るのであつた。

もしそこに一つの意識が生まれて來るとするならば、それは本然的な人間の疑ひ、本然的な哲學上の疑ひとでもいふべきものであらう。

生死、人間の一生に對する究竟の疑ひ、たゞそれのみであつた。

少くとも或る刹那だけわたくしはそこに坐つて、そのやうなことを考へるともなく考へるだけの落ちつきを見出すことができた。

爐の前に腰を卸してわたくしは松籟の音を聽く。

父を失つたといふ新らしい悲しみが、わたくしが豫期してゐたほど強くはわたくしの胸を撃たないこともある。

どこかにたゞ一つ空虚な世界が生まれたやうな氣がする。わたくしは父の死に對して痴呆のやうな眼を瞠つてゐる。

長い長い父の貧しい苦しい生涯が客觀的な實在として浮かんで來る。

一人の人間が生まれる。生きる。苦しむ。子を生み、やがて靜かに死んでゆく。

それだけのことに果してどれだけの價値があるか。

人間は生まれなければならぬか。苦しみつゞけても生きてゆかなければならぬか。

父の長い生涯を一つの客觀的な事實としてわたくしは冷たい批判のメスを揮らうとしてゐる。」

×

午後の三時ころになれば松山の赤い松の幹を斜に照らして太陽は西の天城に近く傾いてゆく。天城の背の雪が、かげつてゆく麓の色に對して、殊に白く浮き上つて見える。

そのころになればほとんど毎日のやうに頬白の群が飛んで來て赤松の梢から、やがて落松葉の間をあさりながら可憐な聲で囀りわたる。

小身者ではあるが、ともかく色白な背の高い若い立派な一人の武士がわたくしの眼に映つて來る。」

二朱銀を桝で量つたといはれる大百姓のまなむすめがわたくしの眼に映つて來る。

かれらが愚かであつたゝめか。運といふものがなかつたためか？そこに二人の不幸な男と女とがある。いつも生活の苦痛に迫ひまくられた二人の眼のみがわたくしの心に映つて來る。

御維新になつてから父は酒を作りはじめたといふこともわたくしは聽いた。」

三年つゞけて酒を腐らしてしまつたといふことも聽いた。

父が西南戰爭に出かけて行つた留守に、わたくしのたゞ一人の兄が死んだといふことも聽いた。父が戰爭から歸つて來て泣いたといふことも聽いた。わたくしの兄の死以來母は一生芝居を見なかつた。父も母も人一倍子煩惱であつた。」わたくしは長い母の一生涯に、たゞの一度でも母がわたくしの兄の命日を忘れたことを知らない。

わたくしが生まれたころの父はすでに貧乏の底に喘いでゐた。

廣い川に沿ふて幾棟かの白壁の酒倉が並んでゐた。川と言つても直ぐ近くまで潮がさして來たので、水はきはめてゆるく流れてゐた。春になれば葦の柔かな若葉が水の下から頭を擡げて來た。かいつぶりがころ、ころ、ころとあはれに啼いては水をくゞつた。

『あれがお父つあんの酒倉だつたよ』わたくしはよく姉たちから、白い壁の倉を數へられた。

わたくしが知つたころは父は人手に渡つてしまつた酒倉の前の大川を、小舟を漕いでは毎日のやうに上り下りしてゐた。舟には眞つ白な石灰が積まれてあつた。父は石灰を賣つては幾人もの子供たちを養つてゐたのであつた。

わたくしは父の石灰舟に乘せられて幾度となく酒倉の前の川を下つて、さらに廣い本流の大川に出たことがあつた。本流に出ると父は小ひさな帆をかけた。わたくしは帆をかけた父の舟に乘つた日のうれしさを今でも憶へてゐる。

或る日石灰を積んだまゝ橋の下にもやはれてあつた父の小舟は、石灰に水がはいつたゝめに火を發して燃えてしまつた。父はさらに新らしい小舟を作るためには獵銃を賣つたり、簞笥ぐるみ母の着物までも賣らなければならなかつた。

恰度そのころであつた。わたくしたちが住んでゐた三百戸ばかりの、川のほとりの農村に赤痢がはいつて來た。衞生思想が發達しなかつたところだつたので村中ほとんど軒別に人々は疫病にとりつかれてしまつた。わたくしは枕を並べて

苦しんでゐる子供たちを看護してゐた母の顔を忘れることはできない。父も赤痢にとりつかれてゐた。それでも父は一日も休まないで、石灰を積んでは小舟を漕いで川を上り下りしてゐた。
母は毎年のやうに子を生んだ。
父の生活は苦しくなつてゆくばかりであつた。
母の家ではすでに、祖父も祖母もなくなつてしまつて、母の兄が放蕩者ではあつたが、まだ地方では押しも押されもせぬ大百姓であつた。
わたくしはよく母につれられて一里ばかり道を母の家まで出かけて行つたことがあつた。
母はわたくしと、わたくしの直ぐの姉の手を引いて、亡くなつたわたくしの直ぐの妹を懐に抱いてゐた。
母の兄の家は土堤の下に防風林につゝまれた屋根の高い大きな屋敷であつた。白い壁の籾倉が土堤の上から直ぐと見出された。
母の兄嫁が、母をつかまへてはいつもちくちく刺すやうなことを言つてゐた。
母はおづ〳〵と三人の子供をつれて廣い、暗い土間のなかへはいつて行つた。
わたくしたちは薄暗い板の間で貪るやうに飯を食つた。子供心にもわたくしたちを輕蔑するやうに見つめてゐる叔母の眼が恐しかつた。
『まあよく子供ばかり生むものぢやのう。仙之助は滿足に食はせることもできんが。』一度母の兄が、わたくしたちの前で、わたくしの母にかう言つたことがあつた。
氣の弱い母は俯向いてしまつた。わたくしたちは茶腕をかゝへたまゝ叔父の顏を見つめてゐた。」

叔父の家にはいつも米俵が高く積んであつた。

父は石灰を積んだ小舟を漕いで二三里も川下の賑かな町へ行つて、三日も四日も歸つて來ないことがあつた。そこには方々の港から集まつて來る船頭や旅人對手の遊女町があつた。

川下の賑かな町へ舟を漕いで行つては幾日も父が歸つて來ないことが繁々となつた。

母はそのたんびにわたくしたちを連れて、母の實家へ行つた。しかし後には母の家が見える土堤の木蔭まで行つて、一土堤を下りてゆくことをし得なかつた。一番の姉だけが土堤を下りて行つて、母の家から米を包んだ風呂敷を抱へて歸つて來ることもあつた。わたくしたちは母と一緒に土堤の小蔭に隱れて一番の姉が歸つて來るのを待つてゐた。

わたくしの直ぐの妹が死んだのもそのころであつた。父は川下の賑かな町から驚いて歸つて來た。

わたくしたちは小ひさな柩に入れられた妹を葬るために、葦の葉の茂みを分けて、田より三四尺小高い砂山の墓地なで歩いて行つた。たゞ二人の姉だけが紋の付いた着物を着てゐた。

わたくしたちの直ぐ後ろから若いたゞ一人の坊さんが歩いてゐた。そして思ひ出したやうに葦の葉の間を歩みながら鉦を叩いた。

誰かゞ墓穴の傍で火を焚いてゐた。

わたくしたちは墓穴を覗いて見た。底には水がいつぱい溜つてゐた。

小ひさな柩が水の中に卸された。柩は水の上に浮かんでゐた。上から砂を落すたんびにがぼ〳〵と水の音が聞えた。

墓の上に小ひさな杭が一本立てられたのみであつた。

わづかに六七人の會葬者たちが薄暗い夕暮れを葦の葉を分けながら村の方へ歸つて來た。

『あの時の坊さんにもたうとう御布施一つ出してはない筈だよ。氣の毒なことをした』父が死んでから一番の姉がこんな話をしてゐたこともあつた。

無論、その妹の墓の位置さへ今では探したところで見出すことはできないにちがひない。

『あの子が死んだのは親の毒を受けたからだよ』わたくしはこのやうな言葉を一度ならず姉の口から聽かされたこともあつた。

しかしわたくしはそれに對して若い日の父を責める氣にはなれなかつた。

人間であるかぎりは、若い男であるかぎりは、誰が昨日の父を責めることができやう。

たゞわたくしは、水深い墓の底に埋められてしまつたあの妹の運命を氣の毒に思ふ。永遠に墓一つ持つことのできない可憐な妹の魂を。

×

父がなぜ故郷を捨てゝNの町へ移らなければならなかつたか。貧乏のどん底まで落ちてしまつた父にとつては新しく開拓せられやうとしてゐるNの町へ移つてゆくといふことは大きな冒險でもあり、あの場合たゞ一つの逃げ場であつたかも知れない。

父は最初たゞ一人でNの町まで出かけて行つた。一ケ月ばかりの後父は故郷へ歸つて來た。父はその時山高帽をかむつて、モーニングのやうな洋服を着てゐた。父が何で、そのやうな服裝をしてゐたか、それは今日になつてもわたくしにはわからない。

父は川の岸に繫いであつた石灰舟を賣つて、一臺の荷車を買つた。

荷車の上には家財道具だの米だのが積まれた。

二番目の姉だけを一人のこして、わたくしたち五人のきやうだいは父の荷車と一緒に故郷を立たなければならなかつた。

二番目の姉は最後まで氣の毒な人であつた。かの女は口減らしのために叔母の家へ養女になつて行かなければならなかつた。

麥の穗が黄色に熟れてゐたころであつた。わたくしたちは或る水のほとりで急に麥の穗の中にしやがんでしまつた。

『お牧が泣いて走つてゆく』と一番目の姉が言つた。

二番目の姉が水の彼方の道を泣きながら母の實家の方へ駈けてゆくのであつた。

二番目の姉が土堤下の方へ走つて行く姿を見送りながら、母が眞つ先きに麥畑の中ですゝり上げて泣き出した。姉たちも泣いた。

二番目の姉の姿が麥の穗の中へ隱れた時、なほかの女の髮かざりが赤く穗の上に泳いで行つたのをわたくしは記憶してゐる。

まだ汽車といふものがなかつたので、わたくしたちは父の荷車の後について終日平原の道を歩かなければならなかつた。

わたくしは父の荷車の片隅に、荷物と一緒に載せられたまゝ旅をすることが多かつた。

廣い麥の野原の間を一直線に單調な道がつゞいた。一里か或は二里くらい麥畑の中を歩くと屹度古びた町があつた。

どの町もわたくしたちの故郷よりは賑かであつた。人々は幸福さうに思はれた。

板戸を橫にした上に、長い飴だの、土で作つた鳩だの、狐などが並べられてあつた。また時としてはチャルメラを賣つてゐる男もあつた。小さな花籠を賣つてゐる家もあつた。紫や青や赤の色に塗つた花籠は殊にわたくしの心を惹きつけた。

どこの家でも往來から直ぐに裏口まで通り拔けの土間になつてゐて、往來に沿ふた町の家には軒近く桑の實が黒く熟してゐたりした。

わたくしは父に土の鳩と、花籠を買つて貰つて、荷車の上で土の鳩の尻へ口をあてゝ吹いた。土の鳩の胴中はがらんどうになつてゐて、尻に口をあてゝ吹くたんびにぽうぽうと寂しい聲を立てゝ鳴いた。

三月四日の旅をつゞけてわたくしたちはNの町に着いた。

わたくしは初めて海といふものを見た。平原の眞ん中に生まれたわたくしは初めて山につゝまれた小ひさな町を見た。

或る山の中腹で、美しい谿川に沿ふた畑の中に小ひさな二階家があつた。そこがわたくしたちのN町に於ける一番目の家であつた。幾抱へもありさうな高い松の木が三本並んでゐる小ひさな丘が、わたくしたちの遊び場所であつた。松の下に莚で圍んだ共同湯があつて、夜になるとわたくしたちは父や母と一緒にそこまで出かけてゆかなければならなかつた。そこに集まつて來る人たちはたいてい方々の國々から移つて來た小作人たちであつた。

屋根がなかつたので、風呂桶のなかから夜の空が見えた。月の光りが風呂桶のなかで掻きみだされてゐた。

母に抱かれて野天の共同風呂にはいる夜がわたくしにとつて一番なつかしくもあり、悲しくもあつた。わたくしは故鄕でもよく母に抱かれて野天風呂にはいつて、夜の空を見たことがあつたので、Nの町に移つて來てからも母に抱かれて野天風呂にはいつた夜だけは幼心にもわたくしは故鄕のことを思ひ出した。旅といふものゝ賴りなさがしみ〴〵と感

じられるのであつた。

亡くなつた妹が眠つてゐる小高い砂丘がわたくしの眼に映つて來ることもあつた。

新らしい町を築くために毎日しつきりなしに山の大きな岩が火藥でくづされて行つた。ほとんど毎日のやうに岩の下になつた負傷者や死人が病院の方へ擔がれて行つた。

父は大阪から來てゐた男と一緒になつて一つの山をくづすかなり大仕掛の仕事を請負ふたのであつた。父はそのために一度故郷に歸つて背負ひきれるだけの金を借りて來た。

大阪の男は最初の柔かな土の部分だけで仕事を切り上げて、父の手から纒つた金を握つて後の仕事は父にゆづつて大阪へかへつてしまつた。

大阪の男が去つて、父一人の手で山をくづすやうになつてからは、堅い山の岩盤だけがあらはれて來た。父はすつかり大阪の男に喰はされてしまつたのであつた。

父には無論地質學上の智識はなかつた。それが失敗の一つの原因であつたにちがひない。父が酒造の仕事に失敗したのもやはり頭の問題が主であつたやうに思はれる。かう考へて見ると父の無智が父の一生の不運を將來したのだといはなければならぬ。が、同時に人を疑ふことのできなかつた父のお目出度さが父の一生を通じての不運の最も大きな原因であつたやうにも思はれる。

父は中途で山をくづす請負を投げ捨てゝしまはなければならなかつた。

わたくしたちは谿川のほとりの二階家を捨てゝ、大川に沿ふた濕地で、崖の下にあつた暗い軒の低い家に移つてゆかなければならなかつた。

家の直ぐうしろは美しいせゝらぎを作つた小川が流れてゐて、そこにはかゞやかな春の光りが水の面に溶けこんでゐた。わたくしたちはよく芹の葉を探して歩いた。

父はいつも眞つ暗なうちに起きて荷車を挽いて家を出た。土間の裏口からいつも星がまたゝいてゐるのをわたくしは夜具の中から見てゐた。

母がいつも土間の竈の下で火を焚いてゐた。土間にしやがんでゐる母の後ろに夜明け方の星の光りが寒さうにまたゝいてゐるのを見るたんびに、幼な心にも母が氣の毒でならなかつた。

父が母や姉たちを擲るやうになつたのはそのころからであつた。

父に髮を摑まれて土間や、緣側で、踏みにぢられ、叩きのめされてゐる母や、姉を見るたんびにわたくしの小ひさな魂は人間の殘虐性に對しておびえおのゝくことを初めて知つた。

わたくしは父を憎むことすら知つた。母や姉たちが氣の毒でならなかつた。

また或る時はわたくしたちは崖の上の家に住んだこともあつた。古い家であつたが、幾らか川の淵の家より廣かつた。そこでは旅廻りの役者などが幾日も逗留してゐることもあつた。

しかしその家には幾らも住んでゐなかつた。わたくしたちは池の土堤の直ぐ下の或る古い家の一部分を仕切つた狹い一室みたいなところに住まなければならなかつた。

わたくしたちの家の土間から二三間離れたところを池から落ちる水が流れてゐた。雨がすこしひどく降ると水は土間を襲ふて來た。

父と一番の姉はやはりいつも暗いうちに起きて濱の方へ稼ぎに行つた。夜になつて歸つて來ると寒い日など姉は血だ

らけになつた手や足のあかぎれに山蘭の根をこすりつけてゐた。
父の貧乏はいよ〳〵どん底に落ちた。月々の家賃さへ拂へないかして、母が月末になると隣りの家主に頭を下げてゐた。
家の直ぐ前の土堤に上つてはわたくしは池のまはりを飛んでゐる鶺鴒を見た。わたくしは生まれてはじめて鶺鴒といふ鳥を知つた。
わたくしは多分榮養不良の結果であつたらう、ひどい衰弱に陥つた。夕方になると眼がよく見えなくなつた。
わたくしは或る晩遲く濱から歸つて來た父が、若い鷄を一羽買つて風呂敷に包んで持つて來たのを記憶してゐる。
父は土間の戸を締めてしまつた。
父の顔はいつもより蒼白いやうに想はれた。父は煮へかへつてゐる釜の中に鷄を投げ込んだ。
父は一本の羽根でも土間の外に飛んでゆくのを恐るゝかのやうに、一本一本の羽根を紙の中に拾つた。
『いゝか、お前一人で鷄を喰べるのだ。これですつかり丈夫になる。』かう言つて父はわたくしに鷄の骨をしやぶらせた。
『鷄を食つたことなどを誰にも話してはならぬぞ。』父がなぜこんなことをわたくしに言つたのか、その時はまだわたくしにはわからなかつた。
それから後にも父は幾らかの金がはいると家主のおかみさんや娘たちに隱して、鷄を買つて來てはわたしに喰べさした。
池の直ぐ上に親切な醫師がゐた。美しい醫師の奥さんはわたくしに羽織だの足袋だのをくれた。
いつかわたくしたちが土堤で摘んだ蓬で母が草餅を作つた。わたくしは重箱に入れて草餅を親切な醫師の家へ持つて

行つた。

一二日後であつた。わたくしは池のまわりの竹藪の中に草餅が捨てられてあるのを見た。

わたくしは父に話した。

父は唖默つてゐた。

わたくしは貧乏人の子といふことが恥づかしかつた。

母や姉たちを擲る父の發作的な亂暴さは一層はげしくなつた。父は必ず毎晩濱から酒を飲んで來るやうになつた。姉が父に髮を掴まれて踏みにじられるやうなことはほとんど毎晩のやうにくりかへされた。

夕方になつて、父が不興な顔をして濱からかへつて來るのが恐しくさへなつた。

日が暮れかゝることがわたくしには一番不安でならなかつた。わたくしは父がゐない遠い靜かな世界をさへ想像するやうになつた。

「このやうなところにゐても駄目だ。北海道へゆかう。」父は濱で酒を飲んで來てはこんなことを言つた。

たゞ一枚のよごれ布團に獅嚙みつくやうにして眠つてゐる五人の子供たちのうちの誰かゞ、父の太い腕で引き摺り出されて擲られることもあつた。

母も五人の子も聲を揚げて泣いた。

翌日になると父はけろりとしてゐた。そして宥めるやうにわたくしたちを可愛がつてくれた。たまにわづかの金でもはいればわたくしたちのために帶だの、着物だのを買つて來てくれた。そして次の日は一文なしの貧乏になつてゐた。

父は先天的の浪費者であつた。

池の水が流れて二三丁下つたところに葦や、犬蓼などの繁つた沼地があつた。沼に沿ふて怪物のやうな三階建の建物があつた。三四十の部屋があつて、一つ一つの部屋にいろ〳〵の人たちが住んでゐた。

古い材木を組み立てゝ、荒壁を塗つたばかりで、一つ一つの部屋には何のかざりもないたゞ一つの窓だけが附いてゐた。明り取りがなかつたので建物のなかは晝でも眞つ暗であつた。窓からは汚れたシャツだの、洗濯物だのが一面に乾されてあつた。

あやしげな階段を登つて建物の中にはいつてゆくと、眞ん中は眞つ暗な廊下になつてゐて、廊下の兩側には、色々な人が自分々々の部屋を守つてゐた。死にかゝつてゐる病人だの、だらしなく胸をはだけた若い女だのが寢てゐることもあつた。上方から來てゐた旅役者が發狂してそこの部屋の一つで首を縊つて死んでからは、誰いふとなくその建物を幽靈三階と呼んでゐた。暗い廊下に旅役者の幽靈が出るなどといふ噂がひろめられた。

わたくしは姉と二人でよく幽靈三階へ駄菓子を賣りにやらられた。

三階の南の端に廣い部屋があつたが、そこにゆくためには晝でも蠟燭を點してゆかなければならなかつた。

そこには色々な男や、また數人の女達も集まつて來た。

目やにをいつぱい眼の縁にくつつけた筑後から來てゐた老婆がいつも、幽靈三階の入口に張番をしてゐて、何か怪しい人でも近づいて來ると綱を引いて三階の廣間の人たちに知らせるのであつた。人々はその老婆のことを筑後婆と呼んでゐた。

筑後婆はまた絶えず人々の着物を運んでは質屋へ走つて行つた。

わたくしたちはその部屋の中を覗くことをゆるされなかつたが、その部屋に集つて來る男も女も懐の中から賽ころを

出しては掌でころがすやうなことをしてゐた。

わたくしと姉は駄菓子を入れた箱を膝に載せて、暗い階段の隅にしやがんでゐた。

襦袢一枚になつた男たちが、わたくしたちの箱から菓子を掴んでは幾らかのお錢を硝子の蓋の上へ投げて行つた。

或る時は一時に二人の男が三階の廣間で短刀で突かれた。

いつの間にか幽靈三階は取り毀たれてしまつた。

もうわたくしは學校へ通ふやうになつてゐた。

五十に近かつた父はわたくしを肩車に乘せて學校までつれて行つてくれたこともあつた。

故郷を出てからほとんど十年間のどん底生活の報酬として、そのころ父は幸つと三間に二間半の掘立小屋を自分自身の手で麥畑の中に打ち建てたのであつた。

父が麥畑の中に毎日手斧と鋸を握つては小屋を作りかけてゐたところ、わたくしたちの故郷から突然、養子にやつてゐつた二番目の姉が、叔母の家を逃げ出して三十里の道を歩いて來たのであつた。姉は白骨のやうに瘦せてゐた。わたくしたちは姉があまりやつれて見すぼらしかつたので笑ひ出した。

『赤痢にかゝつてゐるのに、姉がよごしたものは全部叔母が姉に洗はせた』のだといふことをわたくしは數年後に聽いたことがあつた。

父にとつてまた發育ざかりの子供が一人殖えたといふことはかなり苦しいことであつたにちがひない。

わたくしたちは養家から歸つて來た瘦こけた二番目の姉に對しては他のきやうだいに對するやうな親しみを持つことができなかつた。かの女は闖入者のやうな地位に置かれてあつた。

父の小屋が出來上つて半年と經たないうちに叔母の家から歸つて來た二番目の姉がチブスにかゝつた。山の上の避病院に送られた病人は皆毒殺されるといふことを父も信じ切つてゐたので、父はかの女を醫師に見せることをしなかつた。

父はこつそりと藥屋にかけつけていろ〳〵な解熱劑を買つて來た。病人は死ぬばかりにもがき苦しんだ。

『あれは梅毒の藥にも使ふのださうだ。でも熱をさますのにはあれに限るといふことだつたから買つて來たがなあ』あまり姉のもがきやうがはげしいので父は心配さうな顏をして母に詫つてゐた。

水一滴飮ませても病氣には惡いといふ父の昔風な考からして、夜になれば、土間の隅の水甕には重い蓋がされて、さらにぐる〳〵と水甕と蓋に細引がかけられた。

一度眞夜中ごろであつた、父はかたりといふ物音に眼をさまして、急に蠟燭を點した。米のとぎしるを椀に入れて腋の下に隱し持つて、土間に這つてゐる病みほうけた姉が幽靈のやうな顏をして父を見上げてゐた。

姉は半年ちかく病んでゐた。それでも一日も醫師に見てもらふでもなく癒つてしまつた。

一筋の髮の毛もなく拔けてしまつた姉が、手拭を眼深に冠つて、小春日和の日光を浴びて、きよとんと病み上りの眼を瞠つて緣側にしやがんでゐる姿を、わたくしは幾度となく見た。

『あたしは故鄕(くに)の叔母の家に歸る』二番目の姉はかう言つて幾度か泣き出して、母を困らせたこともあつた。姉にとつては故鄕に行つても、Ｎの町の父の家に來ても、心からの温かい巢は見出せなくなつてゐたのであつた。

『お牧は養子に行つてゐたので心がひねくれてしまつた』父はよくこんなことを言つた。

働いても働いても父も母も長い着物一枚着ることはできなかつた。

雨の降る日など、母はよく父の白髮を拔いてやつた。

「わたしは駄目だ。幸助、お前が出世してくれなくちや。」父は溜息を吐いた。

わたくしの祖父が近在でのちよつとした學者であつたことからして、わたくしにも學問をさして、學者か官吏にでもなさせたいといふ考を最初は持つてゐたやうであつた。

父は、それを父の一生の最後の事業と考へたらしかつた。

しかし滿足に尋常科の授業料さへ支拂ふことのできぬ父は、わたくしが尋常科を卒ると同時に町に奉公へ出さうとした。むしろわたくしが學問をすることを嫌ふやうになつた。

たうとう父は或る日町に行つてモーニングの古手を買つて來て、それを小ひさく縫ひ直してわたくしを或る役所の給仕に出さしてしまつた。

わたくしが父に背いて、役所を捨てゝわづかの金を握つて或神學校に行つたのは半年後のことであつた。

わたくしは間もなく家に連れ戻されてしまつた。

「そんなに學問がしたいなら、金はやれぬが暇だけやるから學問をしろ」

父はよくこんなことを言ふやうになつた。わたくしが父と一緒に手斧を握つたり、荷車を引いたり、鍛冶小屋で、鎚を振つたりすることを嫌ひ拔いてゐることを見てしまつたからであらう。父はそのころ麥畑の中の家の傍に小ひさな鍛冶小屋を作つて、鍬の刃などを拵えてゐた。いつ、誰に教はつたといふでもなしに、器用な父はそんな仕事を始めてゐたのであつた。

父が毎日鞴の前に坐るやうになつてから間もなくであつた。濱には工場が出來、汽船が作られるやうになつた。

父は八人の家族を養ふために造船所に出かけて行つた。

「もと／＼素人鍛冶だからなあ！」父は夜になつて歸つて來るといつも溜息を吐いた。

わたくしは月末になると籠に入れた大きな鯛を抱へて工場の組長だの工長だのゝ家へゆかなければならなかつた。

父は鐵板のリヹツチング一つ滿足にはできなかつたのであつた。殊に父は、若い者と一緒に鐵板を打ちつける仕事をするにしてはあまりに老ひ過ぎてゐた。父は十年以上も齡を隱して工場にはいつたのであつた。

工長や組長等に辱かしめられ、冷笑され、罵詈せられながら父は薄暗いうちから工場の門をくゞつて行つた。

夕暮になつて幽靈のやうに衰へ切つた顏をして工場から歸つて來る父の姿を見ると、わたくしはどうしても父を捨てて故鄕を出る氣にはなれなかつた。

しかし今度は父の方からわたくしを東京に出すことを決心した。

「わたしのやうな日傭取りぢや一生涯駄目だ。わたしは達者でゐる間はこゝで働いてゐるから、お前は自分で金を拵へて學問をすることができるならさうしてくれ。わたしはどうしてもお前を一人前の人間になして、工長だの、組長だのにわたしの腕を見せてやる」

父は酒を飲むとこんなことを言つた。そして興奮した顏をして母やわたくしを見た。

わたくしは東京に出た。

わたくしは郊外の廢寺の一室を借りて自炊をしながら、雪の中を毎日神田の英語學校まで歩いて通つた。

わたくしには自分の腕で學資を作る意氣地はなかつた。

わたくしは月々父から金を送つて貰はなければならなかつた。

終日父が工場に通つて工長や組長たちに辱しめられ、罵詈せられながら得た金のほとんどすべてはわたくしの學資と

なつて費されてしまつたのであつた。
老年の父は夏になれば脚氣を病んで苦しんでゐた それでも父は朝早くから工場へ通つて行つた。夕方に家に歸つて來れば脚は丸く膨れ上つてゐた。
たゞ一人の男の子を育て上げるために老年の父はその魂をも、肉體をも擦り減らしてゐたのであつた。
わたくしは夕方よく永代や、築地あたり海岸にしやがんで、一日の勞働に疲れ切つた肉體を運んで船から上つて來る人々を見た。たまに老年の勞働者を見るたんびに父のことを思ひ出してたまらなくなることがあつた。
またわたくしは武藏野を歩いてゐる際に不圖野良に鍬を握つて働いてゐる老人や、櫟の下の赭土道を荷車を引きながら喘ぎ喘ぎ歸つてゆく白髮の男を見出すことがあつた。
わたくしはそのたんびに、父を捨てゝ東京に出て來たことを後悔せずにはをれなかつた。
わたくしはかつて神學校の禮拜堂の塔の上で、父や母に對して抱いたと同じ寂しい心を抱くやうになつた。
麥畑の中の父の小屋がわたくしの頭に映つて來た。
鍛冶場の軒の前に、父の手で播かれた桃が屋根よりも高く伸びて、美しい花を持つてゐた。
父が疲れ果てゝ呻きながら疊の上に俯伏せになつてゐた。
濱に商ひに出た母がカンテラを點して、一人で荷をかつぎながら坂道を上つて來た。母の髮も眞つ白であつた。
母は心配げに疲れた父を見た。
母は一枚一枚の銅貨や銀貨を疊の上に並べては、わづかの賣り上げ高を計算した。
母が十年來、その日その日の賣り上げ高を入れることにしてゐる竹の筒が赤く煤けて柱に懸けられてあつた。

父のかすかなる鼾聲がわたくしの耳に響くのであつた。母の氣の弱い眼ざしと、溜息が。

武藏野の秋は殊に故鄕の貧しい父と母とをわたくしに想はせた。

玉蜀黍の葉擦れの音を聽く武藏野の秋ほど年寄つた貧しい父と母を思はせる季節はなかつた。

夜の一時二時ころであつた。わたくしは幾度か眼をさました。靜かな秋であつた。

わたくしは地上二尺の高さに眠つてゐる。父も母も地上二尺の高さに眠つてゐるであらう。わたくしは地上四百里の隔りを想像して見た。遠い、寂しい隔りであつた。

父の疲れ切つた鼾聲がすぐわたくしの耳に聞えた。しかしそこには寂しい暗い四百里の隔りが横はつてゐた。

×

父と母の老年の魂と肉體とを擦り減らして、わたくしは辛うじて自分一人の幸福を見出すことができるやうになつた。わたくしはNの町には歸らなかつた。わたくしの心はたいていの青年たちが感ずるやうな都會生活の誘惑に麻痺してゐた。

わたくしが父と母とを養ふだけの報酬を見出すまでには、わたくしはかなり苦しまなければならなかつた。わたくしは毎日或る學校と、雜誌社と、××省との三つを駈け廻つて父に送る金を拵へなければならなかつた。

一年二年と月々わたくしから父のもとへ仕送りをする金は幾分づゝか增されて行つた。

父は工場を止めた。母は濱の商ひを止めた。

五人の娘たちを嫁にやつてしまつた父と母は桃の花の下でどんなにか老後の靜な幸福な日を樂しんだであらう。

しかしそれはわたくしの、また父や母の豫想だけに終つてしまつた。

たゞ一人の男の子であるわたくしを一人前の男に育て上げるといふことは、一生涯、失敗に失敗を重ねた父の最後の仕事であつた。父はわたくし一人を育て上げるために生き、苦しみ、辱められ、罵られてゐた。

父は何を收穫として與へられたか。

わたくしは休暇を利用してはNの町へ歸つて行つた。しかしそれも一年に一度か二度、いつも五六日か一週間くらゐの滯在であつた。

わたくしが歸つて行くといふ電報を打ちさへすれば、病中の父は起き上つてしまうとさへ姉たちは言つてゐた。まつたく父も母も數日前から眠れないほどにわたくしを待つてゐた。

『今度は幾日くらゐ滯在ができる？』わたくしの顏を見るとすぐ父も母もこんなことを訊ねた。『多分五六日……』とわたくしがいふと母は耐らなくさびしい顏をした。

『安助のおかげでわたくしは樂隱居になつた。お前が月々たくさんな金を送つてくれるのでなあ……』父はいつもかう言つた。父はわたくしが送つてやるわづかの金を心から喜んでくれた。そして二言目には『わたしらはほんに仕合せだ』と言つた。

父の家の直ぐ隣りに畑一枚へだてゝ新しく一軒の家が建てられた。そこには父と同じ年輩の、腰もやゝ屈みはじめた老人がゐた。

わたくしは桃の花の下で父と隣りの老人が腰掛に腰を卸しては終日語つてゐるのを聽いた。父はもうこのころは長い眞つ白な髭を生やしてゐた。そしてわたくしが買つて送つた金時計をいつも自慢そうに兵兒帶の間に挾んでゐた。

隣りの老人が平戸沖の捕鯨船の話をする間、父は珍しさうに話を聴いてゐるのであつた。

翌日もまた父と隣りの老人は父の家の桃の下で昨日の腰掛に腰を卸してゐた。

今日は父が、昨日隣りの老人から聴いたばかりの平戸沖の捕鯨船の話を、隣りの老人に話して聴かせるのであつた。隣りの老人は感心したやうな顏で聽いてゐるのであつた。

そんな風で父と隣りの老人は毎日のやうに二つか三つの話を二人の間にくりかへしてゐるのであつた。

隣りの老人が死んでからは父はよく一人で桃の下で金時計の機械を覗いて見たり、桃の下を通り過ぎてゆくかぎりの物賣りをとらへては、懐からがまくちを出して埒もない物を買つては、昔のまゝの浪費者の生活をくりかへしてゐた。

母が亡くなる數日前であつた。夕方濱の工場の汽笛を聽いた時『幸さんも造船に出しといたら今ころは濱から家に歸つて來てくれただらうに！』と母が姉たちに語つたといふことをわたくしは後にしつた。

わたくしが東京に出たといふことは父にとつても母にとつても幸福なことではなかつた。わたくしは死ぬまで母の悲しみを忘れることができないにちがひない。

父は母以上に、わたくしと別れ別れに遠く生活してゐることの寂しさを訴へることもあつた。

『いゝえ、別々に住んでゐた方がお互のためです。一度は東京見物にもゆかうが、わたしは東京に住まうとは思はぬ。』

母はいつもかう言つて東京行きには贊成しなかつた。母は自分の苦しい弱い心を無理にも叱つてゐた。

『なあに、幸助の嫁がどうあらうとわたしは東京にゆく。』父は無理にも東京へ出たがつた。

父は朝から酒を飲むやうになつてゐた。父の酒を攝するために、母は一人で氣をもんでゐた。父は母を叱りつけてすら酒を飲むこともあつた。そして朝から氣ちがひのやうになつて母を叱つた。

『お父つあんは狂人になるのぢやないだらうか？』母や姉たちはいつも心配しながらこんなことを話し合つた。

他家の人に對しては父ほど氣の弱い人はなかつた。しかし父は母や姉たちに對しては暴君であつた。

『わたしは故鄕に歸る。幸さんわたしを故鄕まで連れて行つておくれ！』七十を越した母が泣きながら言つた。

父は容捨もなく老ひ果てた母を突きのめすこともあつた。

『あれではとても東京へつれて行つても、幸さんが一人で困しまねばならぬ』母も姉たちも、父の仕打を見ては、いつも同じことをくりかへした。

わたくし自身時としては父の暴君的態度に對しては、不愉快な心を抱かないではをれなかつた。

『ほんにこゝの家こそ修羅場だよのう、一日でも、半日でもお父つあんがわたしをこづいたり、犬畜生のやうに言ひなさらぬことはない！』涙をためた母の眼と、顫へた聲。

わたくしはいつも暗い心を抱いて東京に歸つて來た。

『不運なる二人の老人！』

狹い小屋の中で終日終夜虐げつゝある老父、虐げられつゝある老母。わたくしには氣の弱い、いつもおど〳〵した母が氣の毒でならなかつた。

『うちのお父つあんくらゐ人の善い人はない。江戸の戰爭にしろ、會津の戰爭にしろ二男坊のお父つあんが一人で出かけて行つたのに、お父つあんは家一つ分けて貰ふではなく、親からまで馬鹿にされなすつたのだよ。世の中へ出れば世の中で、誰れにでもだまかされてばかりゐて一生貧乏の仕通しさ。そして家の者ばかり一生叩いたり、蹴つたりして何が面白いのだらう。損な性分よなあ。』父の機嫌がいゝ時には、母はよくこんなことを話した。父は子供のやうにやさ

しい眼をして笑つてゐた。それでも父は瞬間には、ほんの何でもないことのために狂人のやうにたつみ上つて母を突き飛ばしたり、口汚く罵ることもあつた。

實際父は他人に對しては氣のやさしい人であつた。無分別な浪費者で、懐に入れて持つて出ただけの金は家にかへるまでにすつかり町で使ひ果して來た。意志が弱かつたといふのか、氣が弱かつたといふのか、人に頼まれたことをいやといふことができなかつた。

母が病氣になつてからであつた。父は母の枕邊で、自分でうたひながら踊つたといふことを聽いた。

「幸助に、わたしが踊つたことなどを話してはならぬぞ」と言つて、父はとても八十の老人とは思はれぬほどしなやかなからだつきで踊つたといふことであつた。

一生、父に罵られ、擲られ、髮を挘られてゐた母は鍛冶場の前の桃の花が散つて間もなく死んでしまつた。

わたくしは母が死ぬ五六日前に東京に立つた。

雨のひどい朝であつた。母が寢てゐた納戸は暗かつた。わたくしは母の枕もとで歎異鈔を讀んだ。わたくしはあの時ほど美しい、うれしさうな母の顔を見たことがなかつた。わたくしにとつてそれは母の最後の笑顔であつた。

わたくしはほんの數日のことで母の臨終の日にも逢はなかつた。

日暮れ方であつた。わたくしたちは母の柩を桃の木の下から山の上の火葬場へ運ばなければならなかつた。

母が死んだ夜から、父はほとんどしつきりなしに酒を飲みつゞけてゐた。出棺の二三十分前になつて、寺へのお布施のことから婿たちを口汚く罵つた。

わたくしたちは幾度か父の手から杯を離させようとした。

柩が出る時になつても、父は薄暗い部屋にたゞ一人坐つたきり、柩の方を見からへらうともしなかつた。そして酒を飲んでは、椀の飯を貪り食つた。

わたくしたちは暗い山道を越えて山の上の火葬場へ母の柩を送つて行つた。闇のなかに白い野菜の花がほの見えてゐた。

わたくしたちが山の火葬場から歸つて來た時も、父は蠟燭を點した佛壇の前に坐つて一人で酒を飲んでゐた。啞默つたまゝきよつとんとして蠟燭の火を見つめてゐることもあつた。

父はもう二三町の道を歩くにも困難を感ずるやうに弱つてゐた。

『東京へ行きませう。』

『連れて行つてくれるか』父はほんとうにうれしさうな顏をした『わたしが行つてもお前に心配をかけるやうなことはないかのう？』

『何のそんな遠慮がいるもんですか。』

『それぢや思ひ切つて東京へ行かう。』

しかし、いよ〳〵となつて來ると父は長い旅行をあやぶむのであつた。或ひはそれ以上東京の生活に對する不安、嫁に對する遠慮といふやうなものまでもが父の頭に泛かんで來たやうであつた。

『わたしはやつぱりこの家の方が氣易いやうに思ふ。お前さんが月々金さへ送つてくれるなら。』

父は滿足とも絕望とも知れぬやうな顏をした。父自身にも、恐らく、その刹那の心持ちはわからなかつたかも知れない。

わたくしが東京へ立つ前の日の夜であつた。父はわたくしと同じ部屋に寢たいと言つた。この數年來わたくしは父の家に歸つても、いつも隣りの部屋に寢てゐたのであつたが。

わたくしは父と床を並べて寢た。

父は無性に喜んだ。

『お照さんにも、歸つたらよういふておいておくれ』などとわたしの妻の話などをした。

わたくしが東京に立つ日の朝であつた。

わたくしと並んで椀をかゝへてゐた父が急に歔欷と同時に口の中のものを吐き出してしまつた。

『お柳は……お柳は…………』父はたゞ母の名を言つたゞけで、何も語ることはできなかつた。わたくしは一生のうちはじめて父がすゝり上げて泣いたのを見た。

×

姉の家から二人の孫娘たちが來て、父の面倒を見ることになつた。

父はわたくしの家にも、また父が一番可愛がつてゐたわたくしの一番小さな妹の大阪の家へも行かなかつた。

またN町の姉たちが、引き取つて面倒を見ようと言つても、『俺は俺の家が一番いゝ』と言つて動かなかつた。

『さあ、もうこれからは思ふ存分に鐵砲を撃ちにゆくぞ。』

父は不自由な脚の引き摺つて、町に出ては機械油を買つて來て、納戸か、緣側に出て鐵砲の手入れをくりかへしてゐた。

そして草臥れると夜具を引きかむつて寢た。

夕暮れの父の家には誰もゐなかつた。

父はたゞ一人夜具に凭りかゝつてゐるかれ自身を見出した。

父は雉子笛を吹いた。ぴーいよ、ぴーいよと薄い金屬鈑の響きが暗い納戸の中から戸外まで流れて行つた。

父は火鉢の傍までにぢり寄つて行つた。そしてフラスコを抱へて見ながら、二日分位の酒を一度に飲み干してしまつた。

父は醉つたまゝ火鉢の傍に横になつて眠つてしまつた。

秋の夜長がつゞいた。

父は夜明けまでに二度三度。多い時は五度くらゐ眼をさました。

父は出來るだけランプの心を掻き立てゝ部屋の中を明るくしやうと努めた。

しかし、どのやうに部屋を明るくしても、そこに呼吸してゐる者は老ひさらぼひたる父一人であつた。

父は次の間に眠つてゐる二人の孫娘たちを呼んで見た。

父は誰でもいゝ自分の近くに誰かを感じてゐたかつたのであつた。

父の弱い聲は二人の孫娘たちを起すことは出來なかつた。

父は長火鉢の傍までにぢり寄つて行つた。父はフラスコを覗いて見た。父は貪るやうに杯をかゝへた。

夜が明けるまでに父は起きてはまた寢、寢てはまた起きてランプの心を掻き立てゝ見た。フラスコを抱へて見た。

普段無口であつた父が饒舌になつて來た。

父はよろめきながらも、隣家の人たちを訪ねて行つた。

『御隠居さんはお一人でお可哀さうに。』隣の家のおかみさんは涙を落した。

父は誰の口からでもさういつた風な言葉を聽きたかつたのであつた。

父は毎日のやうに父を案じて訪ねて來る姉たちの顔を見ると無性に腹立しくなることもあつた。二人の孫娘たちを怒鳴りつけたりすることもあつた。

父は姉やわたくしにも隠して二百圓の金を二度にして隣りの人たちに貸してやつたりした。

『俺はどうしても奉公人を雇ふ。』かう言つて父は姉たちの止めるのも諾かないで、自分自身隣の家に行つて臺所働きの女を雇ふことにした。

『お父つあんは、あの婆さんがお目見えに來た日は湯に入つて、顔を剃つたりして、あの婆さんをこゝに坐らせといて、それは大變な眼で婆さんを見なすつたよハツハツハツ……』一番の姉はわたくしにこんなことを話して笑つたこともあつた。

もう六十に近い雙眼の女で何をさせても不親切で、不潔であつた。父は頭からその女をがみつけてゐることもあつた。

姉たちのはからひで、その女は二週間ばかりで父の家を追はれた。

父はふたゝび二人の孫娘を對手に、暗い納戸で雉子笛を吹くか、長火鉢の前に坐つては醉ひつぶれるまで酒を飲むかして、孤獨の日を送らなければならなかつた。

あれほど浪費者であつた父が、金に對してきたないほど細かくなつた。『一文でも大事に貯へて置かないと幸助に申わけがない。また幸助にしてもいつ病氣にならぬともかぎらぬで……』父は姉たちにかう話した。

さらにほとんど人を疑ふことを知らなかつた父が、自分の娘たちに對してすら警戒するやうになつた。

一番目の姉が金澤から遠い旅をして、父を見舞に來た時であつた。父は五圓紙幣をどこかに藏ひ忘れたのであつた。

父は二番目の姉を疑つた。『お牧は子供のころ一度養子にやつたので、どんな氣性だかどうも安心がならぬ』父は平氣でこんなことを、他の姉たちへ話すやうになつた。そして二番目の姉に對しては、他のきやうだいたちに對するより深い警戒の眼を向けてゐた。

いよいよ姉が金澤へ歸へる時であつた。姉は父へ三十圓の金をねだつた。父はたゞ五圓紙幣を一枚投げてやつた。そして『そんなに金が欲しいならもう二度と見舞に來てくれないでもいゝ』と言つた。

姉は『あたしほど親にもきやうだいにも緣の薄いものはない。あたしはもう二度とは歸へつては來ませぬ』と言つて泣きながら金澤へ立つた。

×

父が緣側から落ちた時、父はひどく酒を飲んでゐたやうであつたといふことを一番の姉から聽いた。わたくしは父のだらしなさを腹立たしくさへ思つた。

けれども脚の骨を挫いて薄暗い納戸に仰臥してゐる衰へ果てた父の顏を見た刹那に、わたくしは自分を責めないではをれなかつた。

『夜も晝も俺はたゞ一人でこの墓のやうな家を守つてゐるのではないか。俺はお前たちきやうだいみんなの幸福のために、この家に、たゞ一人で殘つてゐるのではないか。お前たちには俺の心がわからないのか。酒でも飲まないで生きてをれると思ふか！』

父の衰へ切つた顏はたしかにかう語つてゐた。

父が緣側から落ちたのは恰度、鍛冶場の前の桃の花が咲いてゐるころであつた。

父は仰臥じたまゝ腕一つ、指一つ動かすことも出來なかつた。父はまるで木乃伊のやうな姿勢のまゝで十ケ月ちかくも寢た。

『幸さん。東京へ行つたらできるだけ可哀さうな義太夫のレコードを送つてくれ。悲しい義太夫を聽いてをると、世間にはまだわたしより不幸な人間もをると思ふので、苦しさも忘れる。』

『今度こそ蓄音器でも聽いてゆつくり養生をして、丈夫になつて東京へおいでなさいよ。』

『あゝ。東京へゆくとも。今度こそ、わたしを置き去りにしてはいけないよ。もうこの家に一人でをるのはいやになつたからのうハツハツハツ……』

餘程うれしかつたと見えて父は久し振りで子供のやうな笑顏をしてわたくしを見つめてゐた。

父は死ぬ前日まで父のいふ可哀さうな義太夫のレコードを聽いた。玉藻前、日吉丸、八陣、寺小屋、朝顏日記、安達ケ原、椰などのレコードが父の枕もとに置かれてあつた。

×

わたくしは父の臨終にも間に逢はなかつた。わたくしは父の柩が山の火葬場に送らるゝ二時間前に父の家へ歸りついた。

淡い雪が降つてゐた。

部屋の中は暗かつた。

數年前母の柩が据へられたと恰度同じ疊の上に父の柩が置かれてあつた。

柩の蓋が明けられた。

わたくしたちは最後のわかれをしなければならなかつた。

柩の中はすでに眞つ暗であつた。

わたくしは蠟燭の火をかゝげて父の顔を覗いた。

何といふ尊い寂しさであらう！

そこにはかつて一生の間母を虐げた父の憤りもなく、子供たちを土間に叩きつけた怒りもなかつた。

そこにはたゞ八十幾年の間六人の子供たちのために、すべてを苦しみ、すべてを忍んで來た殉教者的なやさしい父一人が經帷子を着て眠つてゐる。

枯木のやうに痩せた胸の上の合掌、干鱈のやうな薄い胸、朽ちかゝつたかぼそい杖のやうな脚！

あまりに長く生き、あまりに長く苦しみ、あまりに長く忍んだ殉教者が眠つてゐた。

「お父さんあたしたちも直ぐ後からまいりますわい。」一人の子供もなく、いつも病身な二番目の姉が眞つ先に聲を出して泣いた。

「佛さまに涙をかけないやうに！」姉婿が言つた。

六人のきやうだいたちは一人一人爪を剪つては父の柩に入れた。

かつてわたくしは母を柩の中に見た時、『世界で一番やさしかつた母』だと思つた。

わたくしは蠟燭の火に映つた柩の中の父の顔を覗きながら……

『世界で一番いゝ父であつた』と思つた。

わたくしは蠟燭の火を持ち直して、かはるがはる柩を打ちつけてゐるきやうだいたちの手もとを明るくしてやつた。

『旦那まだおいでゝしたかい？』

わたくしは爐にあたつたまゝ聴くともなしに松山の奥に單調な手斧の音を聽いてゐたことを、今さらのやうにはつきりと思ひ出した。そこには手斧と枯木の枝を抱へた山番の老人が笑ひながら雪の中に立つてゐた。

『昨夜の雪で大分若杉と檜が折れてしまひましたよ、可哀さうに……』

『そんなにひどく折れましたか？』

『うらから一尺ばかりはほとんどへし折られてしまひましたよ。』

『…………』

『植林々々いひますけれどなあ、杉を植えても檜を植えても一度少しひどい雪が降れば七年も八年もの丹精が總一文にもならないのですからなあ……』

『そんなものですかねえ。』

『何をしても、どこに行つても人間の世の中にやあ樂といふものはありませんなあハツハツハツ……』老人は笑ひながら一抱への落松葉を爐の中へ投げ込んでくれた。

『では、後の火はすみませんが消しといてください。』

わたくしは雪の中に立つた。

『えゝえゝ……』老人は爐の傍へしやがんで二三度煙管の雁首を叩いてゐた。

『また明日も登つて來ますから……』

『お待ちしてをります……』

箱根から十國峠の山の背の雪が殊にうら寒く見えた。

天城の山の背の雪とすれ〳〵にかすかな夕燒の色が漂ふてゐた。

山といふ山、灰色の空、地、木、さらに微動だにせぬ空氣まで、死のやうに凍つてしまつてゐた。

松山の中の赭土道は雪までがかち〳〵と凍てついてしまつてゐた。

踏むたんびにさく〳〵と碎けてゆく雪の音が夕暮の山の靜寂さをさらに深くした。

雪の中を、山の火葬場に父の柩を送つてゆく姉や妹たちの眞つ白なたつの綿帽子が、寒さうに暗の中を動いてゆくのであつた。

死ぬる三日前に「幸さんがわたしに呉れた金を、幸さんに隱してはすまぬが、お牧には子供もないから、年をとつて困るやうな時のために」と言つて、父がわたしにないしよで三百圓の金を金澤の二番目の姉に送つてやつたといふことなど思ひ出さるゝのであつた。

わたくしは將軍塚のうしろまで下りて來た。紅梅の色がまだほのかに見えてゐた。わたくしはさつき登つて來る時鳶がとまつてゐた梢のあたりを尙一度見まはした。

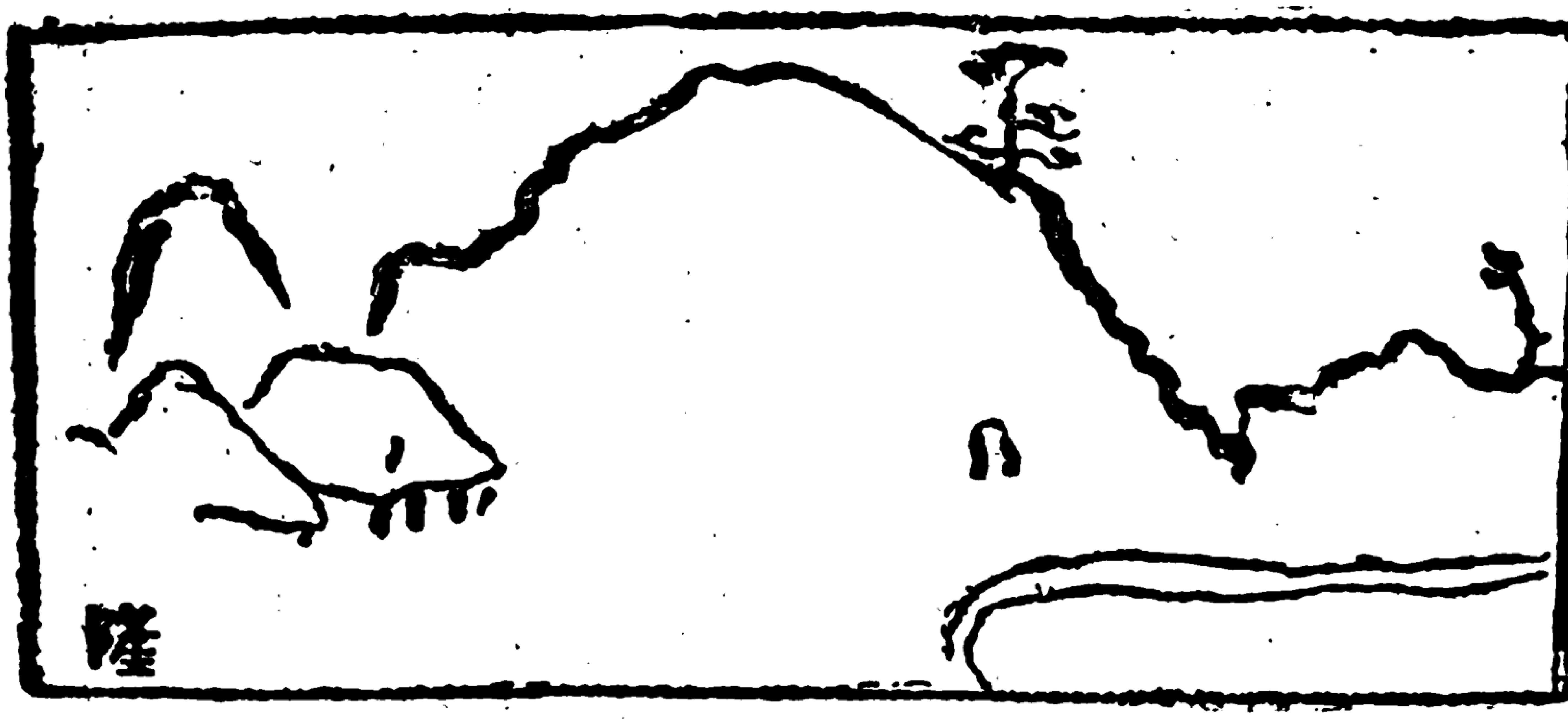
橋の手前でわたくしはTの店を往來から覗いて見た。

Tはゐなかつた。おかみさんが十年前と同じやうにぽつねんとたゞ一人でがらんとした店の眞ん中に坐つて、火鉢に凭りかゝりながら往來の雪を見つめてゐた。

子供を持たぬ中年の人たちの寂しい生活を他人事のやうに想像しながら、わたくしはいつものやうに××寺の山門をくゞつた。

夕暗につゝまれた庫裡の方から柝の聲がしづかに響いて來た。

——一九二五・三——



小さい雲

中條百合子

（一）

仲子は靴を脱いで玄關に上つた。しと〱雨が降つてゐる故か、壁に行燈形の電燈がついて居る玄關は陰氣だ。古びた天井が低く頭の上にかぶさるやうで、薄い絹の靴下一重の皮膚に疊はつめたく濕つぽく觸はる。仲子は、外套の襟を引そばめ、微に胴震ひをした。廣くがらんと開いた土間の外で、雨脚が燈に光る。父と二人の弟とは、默つて次々に靴を脱いだ。脱ぎ終ると、四人は廊下に出た。如何うしたのか誰一人出迎へない。屏風箱の置いてある狹い處に來かゝると、ひよいと突當りの曇硝子の扉が開き、女中の不用意な顏があらはれた。滿一年前から居た彼女は、仲子を認めると喫驚し拔いたやうに

「まあ！」

と云ふなり、挨拶も仕ずいきなり奥に驅け込んだ。直ぐ、さら〱と爪先をする

やうな聴きなれた母の跫音が近よつて來た。仲子は、母が床について居ると許り思ひ込んで居たので、その輕い速い熱心な足どりを聞きつけるとぎよつとした。自分が歸つたときいて、亢奮の餘り立つて來たのかと驚いたのであつた。

仲子は、急いで厚い境の扉を開けようとした。途端に、向ふ側から性急にハンドルをガチヤ〳〵云はせ戸が開かれた。女中と重り合ふやうにして母が出て來た。

「まあ如何うしたへ、仲ちやん」

母の調子が感に迫つて居るので、仲子は何とも言葉が出なく成つて仕舞つた。彼女は、默つて、泣くとも笑ふともつかない表情を浮べ乍ら母の手を執つた。

「心配してよ。起きて被來つて大丈夫なの？」

「あゝもう大丈夫なの。さぞ寒かつたでせうね、それでもまあよく無事で」

仲子は

「さあお床へ行きませうよ」

と云ひ乍ら、縮緬のどてらのやうなものを羽織つて居る母の背中を抱いた。

「もう歸つて來たんだからいくらでも悠くり話せてよ」

母は、仲子が誘ふのを拒むやうに兩足に力を入れた。

「本當に大丈夫なのよ心配しないでも。――大抵起きて居るのだから」

「――だつて――」

仲子は、疑問を感じ母の顏を見た。母は少し窶れ、髮も平常とは違つた引つめにして居る。仲子は、小さな聲で

訊いた。

「赤ちやんはどうしたの？まだ三日か四日ぢやあないの？生れて」

母は、仄かに間の悪さうな表情で

「いゝえ、其がね」

と、低い聲なり確かり云ひかけたが、ふと調子を更へ

「いづれあとですつかり話すよ」

と呼くと晴れ〴〵聲を張り上げて下の娘の名を呼んだ。

「つや子ちやん、つや子ちやん、何處に居るの、お待ちかねのお姉ちやまがお歸りですよ」

そして、先に立ち、父や弟達の居る部屋の戸をあけた。

「可笑しな子だこと、今朝から彼那に大騷ぎをして待つて居たのに。――火のそばに行くといゝわ。生憎雨降りでねえ」

仲子は、自分の生れた家に一年ぶりで歸つて來たのであつた。それだのに、何故だか親類へ客にでも來たやうな一種のそぐはなさを感じた。心の何處かで思ひ込んで來た當の脱れたやうな、目的のはぐれたやうな心持もする。仲子は、改つて

「有難う」

と煖爐わきの長椅子にかけた。相對したもう一脚の方に弟、父が並んで居た。久しぶりで會つた懐しさは、さすが互の胸に流れ合つて居る。其ははつきり感じられるのだが、さて何から切り出してよいのか。發育盛りの弟達は、僅の間にぐつと大きくなり、見なれない青年らしさを面ざしの上に持ち始めた。彼等も、何か云ひたいのだが、うまい言葉が

見つからないと云ふ様子で、仲子が笑ひ乍ら
「どうした？」
と訊くと、
「ふ、ふ、ふ」
と、母を顧みてはにかみ笑ひをする許りだ。

初對面の女中が二人、並んで挨拶をし、仲子の前に茶を運んだ。父は、奥へ着物を着換へに行つた。母は、卓子の横に坐り、頻りに女中に食事の指圖をして居る。母の後には、元と同じ場處に茶簞笥（カツパアド）が在つた。その上に懸つて居る鮎の額も始終見つけて居たものだ。眞鍮が鮮やかに光つて居る暖爐用具、少し色の褪せた窓帷、同じと云へば部屋の隅に積んであるビスケットの鑵の工合まで、仲子が昨年の九月、すがすがしい或朝遽しい出發をした時其儘のやうでさへある。周圍は斯様に親しみ深いものに滿ちて居る。其だのに、門を入つた時から口に云へないちぐはぐな感情が湧いて消えないのは何故だらう。

大體、仲子の歸朝は彼女自身にとつても豫期しない突然の出來事であつた。十一月の初旬まで、彼女は年内に歸らうなど、夢想しても居なかつた。彼女はつい十月の終りに佃と結婚した許りであつた。ハドソン河岸に近い、靜かで質素なアパアトメントで新しい生活がやつと始まつた處であつた。結婚に關して、兩親との間に頻繁な書簡の往復があつた。其中に紛れ込んだやうな一通の手紙が仲子を驚かした。父から、母が來る十二月中に出産の豫定である事、兼て重症の糖尿病がある爲醫師も經過については決して樂觀して居ない事、此際仲子が彼等の手元に居ないのを遺憾とする事などを告げて來たのであつた。仲子は、當惑した。彼女は心から兩親を愛して居た。其故彼等が自分を求めるのをとても冷

然と捧ける事は出來ない。同時に、彼女としては佃との生活に充分の未練があつた。佃は、研究の關係上今の大學を去る事は全然不可能な狀態であつた。若し歸るとすれば、伸子は獨りで歸らなければならないのだ。彼女は、種々考へた末、決心して歸國することにした。自分と佃との別れは、決してこれが最後となるのではない。辛くても堪へよう。萬一其間に一生魂の重荷となるやうな悔は殘したくない。——

伸子は、無理をして船室をとつた。十二月の荒々しい太平洋を横切る間ちゆう彼女は自分を待ち望んで居るだらう母の事と、外國に遺して來た良人の事とを思ひつゞけて居た。淋しい、感傷的な航海であつた。日本が近くになるにつれ、如何那不幸が待つて居るだらうといふ不安が募つた。横濱に入港する二日前、伸子は入港時間を知らせ傍々、母の安否を問ひ合はせる無線電信を打つた。丁度其夜船では別れの舞踏會があつた。十時過ぎであつたらう。踊らない伸子は、サルーンの胸欄から下の大食堂で愉快さうに舞踏する人々を瞰下して居た。近海に入つて居るのに船は盛に搖れた。ドドドウと舷を打つ重い濤音とともに、輝やく假漆塗の羽目板をギギギと軋ませ船全體がぐうつと右に傾く。床には蠟がぬつてあり、踊りては輕く舞踏靴で爪立つて居る。舞踏曲の節奏につれて氣取つた廻旋をする拍子に一搖れでも來ると、踊りて達は滑稽に小さい靴の跡の上で辷つた。する〳〵辷り乍ら婦人達は、對手の男にたよらうとする。男は婦人達を支へやうと脚を踏張り、暫くは踊りを忘れて大騷動をする。觀て居ると、踊りより不意なその辷りの方が、彼等にとつて遙かに面白さうであつた。崩れるやうな笑ひ聲、陽氣に甘えて何か叫ぶ女の途切れた言葉、拍手が、一どきに軆裝をした人々の裡からどつと起る。華やかな亢奮で廣間は啵であつた。弓形窓から見える外甲板は眞暗であつた。音樂に混つて、ドドーン、ザアツと夜の濤の碎ける音が單調に憂鬱に聞える。伸子は其時一人の侍僕が、大食堂の入口に現はれたのを見た。手に何か紙切れを持つて居るらしい。夕刻から返電を待つて居た伸子は、我知らず胸を轟かした。侍僕

の姿は、ちらちら人群の間を縫ひ、總て元來た處から出た。やつはり手に紙片を持つたまゝだ。仲子は胸欄に沿つて据えつけられた低い椅子から立ち上り、大階段の上迄出て見た。侍僕は思つた通り此方に來る。左手に紙片を持ち、兩腕をぶらさげ、歩調に合せてその腕を體の前で呑氣に振り乍ら階段を登つて來た彼は、仲子を見ると容を改めた。

「佐々さんで被居ますか」

「——電報？」

「只今受信いたしましたさうです」

「有難う」

仲子は、受取ると直ぐそれを開いて立つたまゝ文面を讀んだ。「ハハアンザンアンシンアレ」——母安産安心あれ——。仲子は、決して決して一家の上に不幸を期待したがつて居たのではない。然し、階下では舞踏曲の響く、明るい人氣ない踊場に立つてこの文句を讀んだ時、異樣な空虚を胸に感じた。そればかりを見つめて遙々駈けつけて來た目標がすうと立ち消えたやうな當途なさ。仲子は、もう引返せない處まで來てこの報知を手にしたことを殘念に思つた。若し二週間前この紙片一枚さへ來たのだつたら！　然し、仲子は直ぐ恐怖をもつて、自分の感情を克服した。彼女は、若し運命の神があつて、自分勝手な感情を見張つて居たら大變だと思つた。母の身に何事かあつたらそれこそ如何うだらう。瞬間でも、此那思ひを抱いた自分を地面に擲きつけたく思ふだらう。我まゝもの！

家に着く迄、母の顏を見る迄、仲子はこの電報を貰つた日に、弟か妹か、一人の同胞が生れたものと信せて居た。せめて、數日母の世話をされると云ふのが彼女にとつて遺された唯一の張合ひであつた。彼程離れたくなかつた生活から、學問をきめて戻つて來たこの志がまるで無になることは、仲子に寂しかつたのであつた。遂れこそ見えるが、勿論母

の樣子は一昨日新たな子を迎へた人ではない。そして、又何故彼女は、仲子がその事の爲許りに、陸つゞきなら飛んだ呼吸も聞えるだらう程せき込んで歸つて來たと辨り切つて居る一事を、あゝ輕く、何氣なく云ひ紛らして仕舞つたのだらう。母ばかりではない。仲子を迎へた家ぢゆうの空氣が、彼女が内にこもつて來たもの丶密度とは違つて居るのを感じた。急に歸つて來た者、他處に暮して居た者を、まるで整はない準備で迎へる漠然としたざわめきが在るばかりだ。仲子は、心持の上ではつとなげたものを、きつかり受けとめて呉れるもの丶ないのを悲しく感じた。恐らく母も、何の爲に自分が今頃歸つたかはつきり解つて居ないのだらう。考へて來たのとすつかり事情が異つて居るのを見ると、仲子自身でさへ、何故彼那に驚き意氣込み激した感情でやつて來たか解らないやうになる――仲子は、膝の上に抱き上げ愛想を云つて居た妹をそつと傍に下した。彼女は、外に洩されない吐息を胸に太く内に吸ひ込み、云つた。

「これぢやあくつろがないし、何だか變だから。――私の着物は何處？」

彼女は立ち上り、外套にくるまつたまゝで居る自分の躰を見廻した。

「ころ〱着物を着換へようかしら……」

（二）

「何しろ私が寢て居たから、どうも手の廻らないこと丶云つたら御話の外だよ」

多計代は、卓子に手をついて重々しく立ち上つた。

「さつき溫めて置くように云つたのだけれどどんな有樣だか」

仲子が出發する頃は皆普請中であつた部屋々々が、すつかり住み馴されて居た。母の居間は、狹く手奇麗な四疊半に成つ

て居る。三尺の、茶室好みの襖を二人の背後で閉めきると、仲子は

「ねえ、どうしたの一體」

と云ひ出した。

「何だか行き違ひがあるやうね」

炬燵の加減をなほし乍ら、多計代はうつむいたまゝ答へた。

「あゝ。――實はお前が此那に急に歸らうとは思つて居なかつたのでね」

「どうして？」

仲子は、意外なことをきくと思つた。

「あの手紙を戴くとすぐ電報を出したのは着かなかつたの」

「私は父様が其那ことを云つておやりになつたことをちつとも知らなかつたのさ。――けれども、今度こそ覺悟をしたよ。豫定より餘程早くなつたので、いざと云ふ時産婆さへ來て居ないと云ふ始末だもの」

「いつだつたの？」

「十一月の廿八日――一月早かつた譯だね」

「…………」

仲子は、何も知らず其日サンフランシスコに着いて居た自分を思ひ出した。暫く、感情が切なく佃の居る方に反りかへつた。

多計代は、默つて居る仲子をしげ／＼見ながら云つた。

「でもまあ、仲ちやんもよく元通りになつたね、彼方で病氣をしたと聞いた時の私の心持つたらなかつたよ。あの時は、此方でも家ぢゆう枕を並べて居る有樣でね」

多計代は、一寸言葉を途切らせた。

「其にお前…………追々話してお前の考へも聞かなければならないが、ひどい心配をしたよ」

仲子は、微に顏を赧らめた。母は、彼女と佃との結婚について云つて居るのだ。

「有難う。――遠くていろ〳〵はつきりしなかつたから」

「其もさうだし、第一佃さんといふ人のことは父樣から一寸伺つて知つて居る丈ぢやあないか。それも當にはならずし。妙なことは聞くし。――どつちみち歸つたら判ると思つて、本當に、待ちかねたよ」

母の調子は慈愛深く、恨み乍ら許して居るといふ咳さが籠つて居た。仲子は、初めて自分が想像して居たとは全く逆ふ意味で待たれて居たのを知つた。何だか氣分のしつくりしなかつた理由が氷解した。それと同時に、今迄幾分神經的な鋭さでぴんとして居た緊張が弛み、仲子は涙組ましいやうな和らいだ心持になつて來た。親の溫情が湯のやうに自分を圍むのを感じた。多計代は、娘に對するといふより、寧ろ年下の若い女に對して好意ある揶揄をすると云ふ風に、笑ひを含んで云つた。

「――よく一人で歸る氣になれたね」

「だつて大變だと思つたし」

仲子は、初めて母に面と向つて佃の名を口に出す事を變に極りわるく感じた。

「今どうせ大學を離れられないのだから」

「一人で却つてよかつたよ、いろ〳〵相談しなければならないからね、家としても重大な問題だから。父様はあゝ云ふ方だからお前には何も仰云るまいが、大變だつたのさ私ばかり。――內と外とでね」

仲子は、拘りのとれた穩やかな心持で立ち、着物を着換へ始めた。多計代は、仲子がぬぐ薄いブラウスや可愛いレース飾りのついた細々したものを一々手にとつて好奇心を動し乍ら眺めた

「女のものは何處へ行つても美しいね。これは何と云ふもの？」

彼女は、出發の時自分も、一緒に手傳つて仕度してやつた下着の一つを、仲子が身につけて居たのを認めた　彼女は懷しさうに云つた。

「おやまだそれを持つて居たの？」

「よく覺えて被居つたことね。相變らずよ。私は。着物なんぞ一向ないの」

「私の上げた短冊はどうなつたらう」

「勿論あつてよ。失くしなぞ仕なくてよ」

母は、仲子が出かけるといふ朝「かなし子よまさきくてあれ海遠くわけへだつとも母見まもれり」といふ歌を一首餞別として吳れたのであつた

「奧様」

女中が襖の外から母を呼んだ。

「そろ〳〵御飯の御仕度が出來ました」

「行かうぢやないか」

「えゝ。——でも赤ちゃんを見たいわ、その前に」
「ねんねだらう」
母は先に立つて、廊下を一曲りした奥座敷の唐紙を開けた。電燈を一隅によせて薄暗くしてある下に看護婦が白い洗濯物をたゝんで居た。小さい枕屏風にかこまれて、大きい針さしのやうに膨れ上つた赤い布團がある。仲子は、拔足をして近より、膝をついてすや〳〵睡つて居る嬰兒の顔を見た。餘り小さくて、母似か父似かはつきり判らなかつた。仲子には自分の妹といふ感じが何故か適切に來なかつた。彼女は、自分の背後からかぶさるやうに中腰になつて覗き込んで居る母に、顔だけ仰向けて囁いた。
「もう名があるの？　何といふの」
「ゆき子としたのだけれど」
「いゝ名ぢやないの。お乳くさいこと、それにお鼻がまだ芥子のおよごしね」
看護婦まで、聲を忍ばせてくつくつ笑つた。皆の居る處に戻ると、父が機嫌よく冗談を云つた。
「やつとお出ましだね、大分澤山内緒話があつたと見えるな」
仲子は、次第にくつろぎと樂しさが心や體にしみ込むのを感じた。

(三)

金屬の何かを、小さい槌で叩いてでも居るらしい澄み渡つたカン、カンカンカンいふ連續した音がする。仲子は、眼を醒した。彼女は暫く枕の上で其音を聽いて居た。人の手先が細かに動いて發する其音は濃やかさを持つて居、耳を澄して居

ると、音のある爲却つて四邊の閑寂さが増すやうに感じられる。仲子は、響具合で外は晴れて日が照つて居るのを知つた。昨夜は天氣が悪いし暗いしで一目も見なかつた庭の樹立や竹籔の姿が、頭の一隅に浮み上つた。起きたら、其等を悉くり見て廻れて愉しいと思ふ。霜でゆるんだ黑土の様子や竹垣の色を考へると、仲子は無意識の裡に渴望して居たものに出會つた豐かさを感じた。けれども、彼女の心持は何となく淋しかつた。疲勞から來る無氣力とは違つた。熟睡して氣持よく目が醒めた、さて起きて仕ようとするのが庭廻り許りなのが物足りないのだらうか。自分が起きた部屋の中を見ても、着物に手を通しても、事々に自分は歸つて來たのだらうといふ意識が、愈々鮮やかに動かし難く迫つて來るのが淋しいと云へた。仲子は、今頃は佃が何をして居る時刻だらうと思つた。彼が埠頭に立つて自分に高く手を振つた、その身ぶりが面影に立つ。然し、此處と彼方とでは時間まで違ふと思ふと、仲子は詰らない氣がした。彼女は夜具をはねのけた。手間をかけて着物を着た。そして、一段づゝ念入りに階子を降りて下に行つた。

風呂場も奥も森として居る。母は、食事部屋の卓子で手紙を書いて居た。

「お早う」

「どうしたい、よく眠れましたか。一寸待つとくれね直ぐ濟むから」

仲子は新聞を見た。朝の光で、昨夜とは少し様子の違ふ室内を眺めた。煖爐棚の上に、新しい獨逸の麥酒飲みが殖へて居るのが目についた。多計代は筆を置いて硯を片よせた。

「久しぶりだねえ、此那に御飯を一緒にたべるのは。晝間は淋しい位だよ、皆留守になるから。――何をたべるかい」

「母様は何を上あがるの」

「私はパンよ、この頃」

「ぢやあ私もそれをいたゞくわ」

仲子は、昨夜母と床を並べて寢た。彼女等は眞暗な中で、永いことといろ〳〵話した。多計代は、堰いた堤が切れたやうに、仲子が留守中にあつたこと、思つたことを話した。今朝も、母の話題は無限らしかつた。仲子も胸一杯に何かあることはあるのだ。けれども、それ等はどれも母の經驗外のものだ。まして、

「ねえ母樣、あの人はどうして居るでせうね」

などゝ云へようか！　一番云ひたいことを控えて居る爲、仲子は窮屈であつた。多計代は、話對手の出來た悅びで、仲子のさういふ感情に無頓着であつた。彼女は愉快さうに云つた。

「可笑しいぢやないか、父樣つたら今朝頻りに仲子が昨夜何を話したつておきゝなさるんだよ」

「さうお、可哀想に」

仲子は笑つた。

「父樣を仲間はづれにしたから？　何て仰云つてそれで」

「何つて、話したことを又話して上げたの」

「滿足なさつて？」

仲子は、トウストにバタアをつけ乍ら半分ふざけて云つた。

「當分私はいそがしいな、二人にうらみつこなしに話をして上げなければならないから、ね」

「特別に私と寢たいつてお前が云つたので、何か——お前が身持ちにでもなつたのかと思つたつて仰云るのさ」

母は、そして殆ど艶やかといふ表情を眼尻に浮べて笑つた。その、此世に其那事實はあり得無いと確信して居るらしい

調子！　仲子は苦々しさ此上ない心持ちがこみ上げて來るのを感じた。若し、實際自分がさういふ體であつたら如何であらう。親達は其を恥辱ととるか？自分は何を愛した。そして、結婚した。彼等のやうに他人に媒酌されて結婚した人々が姙娠し、母となるのは正當で自然だが、自分のやうに互に愛し合つた者達は、結婚しても親になることに恥辱が作つて來るといふのだらうか。仲子は、憤りを感じた。彼女は、微妙な言葉の抑揚、陰翳、はつきり自分の結婚が如何うとられて居るかを理解した。腹立たしさが過て悲しくなつた。親達は、仲子を愛して居る。其故、外に對して辯護はするだらう。然し、彼等の内心に入つて見ると、娘の所業を假令僅でも極りわるく、正當なことゝ信じ得ない、災厄同な感情を以て感じて居るのだ。仲子は、昨日船へ出迎へて呉れた父が、妙にそはついた擧動で居た原因を思ひ當つた。一層情けない心持になつた。自分は些も愧るところなく信じ、堂々と仕遂げたいと願ふ行爲に對して、親密なものが其について一向信念を持てず、妙に傍で氣を兼て居られるのは堪へ難いことだ。

多計代は、仲子の心に起つたこの激動に氣づかず、獨言するやうに云つた。

「本當に厭なものさ、お前のことが彼方此方に知れると、津村さんの奥さんなんかふだん足踏もしたこともないのに早速やつて來て、それ見たことか、と云はんばかりの様子だし。會はなければ、猶更變に思はれるから、大きなおなかで苦しいのを堪へて一々會ふ思ひつたらなかつたよ」

仲子は、紅茶の味が解らないやうになつて來た。

彼女は、食事をきり上げ乍ら、努めて穏かに云つた。

「わる口は云ひ度いものよ。あの娘は我まゝ者ですからと云つて泰然として居て下さればいゝのよ」

母は、仲子が、自分の受けた苦痛に對して先づ感謝しないのが不満らしかつた。むつとした調子で云つた。

「其はお前は遠くに居るのだし、好き勝手をして有頂天になつて居たのだから、泰然とでも何でも出來るだらうが、私共は左樣簡單には行きませんよ。少しは體面といふこともあるしね」

仲子は、決して兩親の心遣ひをおろそかに思つて居る譯ではなかつた。けれども、さもいゝ氣になつて、佃と日夜浮れでもして居たやうに云はれるのは心外であつた。佃との愛は仲子を微笑させて許りは置かなかつた。寧ろ苦しい愛である。仲子は、親と自分との立場がそれ〴〵違ふことを考へる丈の心の餘裕を持たなかつた。彼女は、傷けられた表情で云つた。

「いろ〳〵御心配をかけたのは惡うございました。けれども、私は母樣方が如何うでもいゝからあゝいふ事をしたのではないのよ。あゝするしか無かつたから——」

「私にはさう思へないよ。其はすきな者なら好きでいゝから、もう少し私共の顏を立てゝ呉れる方法もありさうなものぢやあないか。第一、私は一度も會つたことも無い人だし——其に——」

多計代は、意味深く聲を落した。

「その佃さんといふ人が私には疑問だよ」

仲子は、心に警戒を感じ乍ら、母を見た。

「どうして？細かく申上たゞぢやあないの」

母は、鋭く、きつと仲子を見た。

「さうですよ、お前は正直に云つてよこしたらう。けれども其はお前の見た——見たと思ふ佃さんだらう？佃さんがお前に話して聞かせた事だらう？其が間違ひない其人の全部かい？」

仲子は、厳しい母の言葉を、かつちり組んで受け留めるやうに答へた。

「あの人は私に嘘はつかなくてよ」

「どうかさうであるやうに祈るよ。一生のことだもの。私だつて、お前の愛す者はそのまゝ信じ度いさ。お前が愛すやうに愛しても上げたいさ、出來ることならね。けれども、疑ひがある以上、私はその疑ひがすつかり晴れる迄は信じられない。――私の性質だから。――いつも憎まれものになつては、種々あぶない處を切り抜けて來たのさ」

仲子は、きつぱりした母の語氣に一種の壓迫を感じた。同時に、彼女が自分の評價で佃を判斷し、その判斷で娘とのいきさつまで決定出來るもののやうに、するのが當然のやうに信じて居るらしい點が、著しく仲子を不安にした。仲子は、反問した。

「母樣は何が一番疑問なの?――若し說明してわかる事なら解らせたいわ。何故と云ふと……」

仲子は、つきつめた心持から聲が顫へさうになつた。

「今度のことは私遊びではないの。覺悟してかゝつたのです。だから、萬一、母樣と私との意見が違つたとしても、私の決心は變らない積りなの。出來る丈解り合ひたいわ」

多計代は、紅茶をさしかへて一口飲んだ。

「……いつかは話さなければならないことだからだが――皆は、お前が騙されて居ると云つて居るよ」

「あの人は自分が何もない事を始めから隱しは仕なくてよ」

「隱さない事でお前の子供らしい歡心を買つて居るのぢやあなからうか」

「まさか!」

仲子は一言の下に否定した。

「ぢやあ何故、ちやんとした紳士らしく此方に歸つて來て私共の承諾を先づ得てからにしないのだへ。お前が、假令こんなでも相當な親を持つて居ず、社會上何も持たない人間だつたら、同じように愛して呉れる人とは思はれないよ」

仲子は、母の手を自分の手で押しつけた。

「ねえ母樣。母樣は私をよく知つて被居るでせう？私が自分で愛しもしない人間と、仕たくもない結婚をすゝめられてする女だとお思ひになること？若し私が騙されるのなら、あの人に騙す責任があると同じだけ、私にも騙される責任があるのです。半々よ。半々よ。………母樣のやうに考へるのは不幸だわ。私はその爲に騙さうと人が思ふやうないゝものを何も持つて居やしなくつてよ」

「――ものには程度があつてね、零に比べて一でもあればある部になりますよ」

（四）

仲子の部屋が新築の六疊と三疊とにとつてあつた。多計代が髪を結ふと云ふので、仲子は自分の部屋に來た。元は、土庇の長く突出た薄暗い五疊が彼女の部屋であつた。庭に美しい臙脂色の新芽をふく楓、古い槇があり、蕗の臺などが生えた。落付いた庭であつた。今度の部屋も、仲子の注文で土庇が出て居た。矢張り茶室風ではあるのだが、木も建具も眞新しい上、すぐ前の土を普請で荒したので、風情ない。

仲子は障子をあけて庭を眺めた。障子をあけた拍子に雀でも立つたと見え、葉も何もない櫻の枝が晴れ〲光る空の前で揺れて居る。仲子は、いつか、ミス、プラットの部屋の窓から向ふ側の空地に見た枯木の梢を思ひ出した。胸を掠

める思ひがある。仲子は、昨夜二階に運び込んだまゝに仕て置いたスウトケイスを片づけ始めた。蓋について居る袋からクリスマスカアドが四枚出た。一枚は大きな羊皮紙に肉筆で精緻なサラセン模様と雅歌の一節を裝飾文字で描いたものの、他は、フォーゲラーの繪を模した優しい線と色彩のもの、船が出る前晩、仲子等は坂の多いSの港町を散歩した。文房具店で其等の特色あるカアドが目についた。必要もないのに、仲子は紀念の積りで買つて來たのだ。其那ものを見なほしたり、品物の區分けをして居るうちに、仲子は猶更陰氣になつて來た。多計代との話が原因なのは勿論であつた。が、仲子は其につれて思ひ出した一事があつたのだ。

休暇中、佃と加奈陀に近い湖畔の避暑地に行つて居た時の事である。或午後、仲子は自分の部屋から佃の店の方に行つた。(佃は勉強し乍ら、日本の細々した物産を賣る玩具のやうな小店をあづかつて居た。)彼は、書籍だの帳面だの、置いてある勘定台の上で手紙を書いて居た。繁つた楡の青葉越しに、熱い日光がかつと射し込んで居た。店内は人氣なく、蠅が一匹、日覆と飾窓の硝子との間でぶんぶん唸り飛んで居る。佃は程なく手紙を書き終つた。彼は、數歩で盡る店をぶら／＼と見歩いて居る仲子を呼んだ。

「一寸この手紙を見て下さい」

「何なの」

「關屋の親父にやるのです」

關屋といふ男が店の持主であつた。仲子は、四角い書簡箋をとり、腰をかけた。一通り事務の報告があつて、佃自身の近況が書いてあつた。彼獨特の感慨をこめた調子で、去年と同じ快い自然を再び見る悦びを述べ、今年は自分にとつて更に自然は意味深く見える。或女の友達が一緒に來て居るといふ意味が書いてある。仲子は、其處を讀んで微笑した。

佃は、彼女の方にホワイトシャツの背を向け、蠅を追ひ廻して居る――。仲子は、先を讀みつゞけた。一行進まないうちに、彼女は愕然といふ形容詞が適當な程の不快な驚きに打れて頭を擡げた。佃は、やつぱり何氣なく、長閑に盛夏の蠅を一匹素手で捕へようと試みて居る。仲子はもう一遍文句を讀みなほした。間違つたのではなかつた。ちやんと、力を入れた餘り上手でない文字が書かれて居る。「その婦人は決して怪しむべき人ではありません。日本人の少い此處で、彼女の居ることは店の爲にもなつてよいと思ひますから云々」――

仲子は、佃に聲をかけた。

「これは下書なの」

「いゝえ」

佃の返事は餘り素直で、仲子は自分の嶮しい不愉快との間に變な齟齬を感じた。彼女はつぎ穂なく沈默して紙片を眺めた。

「どうです?」

「この店の爲にも何々といふのはどうしたの。變ね、」

「どれ」

佃は、自分の書いた手紙に目を通した。

「あゝ、親父はさう云つてやると悅ぶのです。どうせ深いことは解らない男です」

「ぢやあ何にも此那こと云はないだつていゝでせう」

「又變な噂でもきいて心配するといけないから………」

問答して居るうちに、仲子は自分のことについて其樣な會話をするさへ忌々しく成つて來た。佃のものゝ考へかたに坐つた疑念が起つた。彼女は素氣なく紙を下に置き、間もなく自分の部屋に戾つた。

窓際に椅子を持ち出して、仲子は長いことこの事について考へた。佃に、はつきり、仲子を辱めて迄も下らない小店主に阿諛しようとする意識があつたのだつたら、彼はあの手紙を、彼程すらりと自分に見せはしなかつたらう。いくらでも見せずに濟むのだから。最初の眼目は、彼の現在の幸福を無關係な閑居にまで仄めかしたかつたのではなからうか。書いて居るうちに、不知々々彼の、これ許りはどんな贔屓目で見ても高貴ではない卑屈さが働いて彼那文句を連ねたらしく思はれる。考へて居るうちに、仲子は、段々彼が哀れになつて來た。無意識に振舞つてあゝいふ一種の卑小さの現れる點、其が氣の毒であつた。生活に其那に歪められたかといふ慘めさを仲子は佃の爲に感じた。貴方は私を辱めたと云つたら、彼は顏色を變へて否定するだらう。其那氣は決して無いと。――其は偽でない。而も、對手如何に準じて自分の愛す者をその機嫌とりの材料にした彼の微妙な利己心を攻擊されたとしても、彼はその非難を理解しないだらう。或人がその愛人を何かに利用した、と云ふ風な局外の明瞭な事件に對しては、恐らく誰に劣らず批評する丈の言葉は彼も持つて居るに拘らず。――

仲子は、境遇が變化し、もつと自信を以て、もつと朗々と生活するやうになれば、佃のさういふ處は消えると信じた其の時は、其の希望で慰められた。すつかり忘れて居た筈であつた。處が食卓で、母の疑を持つた言葉を力强く否定しようとすればする程、仲子の心の一方で、其時の印象が濃く、濃くと浮み出したのは何故だらう。仲子は、恐怖と不安とを感じた。母を安心させようとする言葉は同時に自分自身に向つても必要なやうな有樣になりかけた。仲子は、足許が少しでもふらつきかけたことを彼に對してすまなく思つた。自分は、限りなく彼を信じ、信じたがつて居る。如何う

して彼那手紙を書いてくれたか。仲子は、佃に對する思慕、むづかり、悲しさを一緒くたに感じた。

彼女は、片づけを中途でうつちやつて部屋を出た。仲子は、卅分程嬰兒をあやした。午後、幼稚園から歸つて來たつや子を對手にして遊んだ。一寸ピアノを彈いた。

(五)

日數は段々經つたが、仲子はどうも一種の落付かなさを心から拂ひ切れなかつた。自分の家に歸りながら納り切れない心持。一年と數箇月留守をしただけで斯うなつたのだらうか。仲子は自分が變つたのを知つた。その變化は、旅行や違つた場處での生活につけられた外側のものではなく、内部的なものであつた。先仲子は、自分の愛す者としては、父や母しか持たなかつた。この家しか家と呼ぶべきものは存在しなく感じて居た。今の彼女には、佃といふものが出來た。そして、この家も、懷古的な情からは二つとないものに思ひはするが、佃が歸つて來たら二人で棲むべき、何處かの家を更に強い憧れで空想する狀態に居る。彼女の落付かなさは、其樣な心の變遷そのものより、其變化を、日夜顏を合はせて暮す兩親の前で、仲々吐露出來ない點にあつた。仲子は、知り過ぎる程よく、佃が彼等にどう受けられて居るかを知つた。彼等にとつては、自分等の愛する娘と佃とを結びつけて考へるさへ既に不合理なのだ。佃の故で、仲子の心持が變り、彼等の懷に居ながら居心地わるがつて居るなどゝ知つたらさぞ堪へ難く感じるだらう。仲子は、娘を奪はれたといふ心持から、過度な反感を佃に對して持たれることを恐れた。彼女は、愛する者と離ればなれの生活をする云ひ難い苦慮を堪へ、快活に安んじた娘の役割を持たなければならない。

氣持に無理があるので、仲子は本一冊身を入れて讀めなかつた。多計代は、娘の名を呼びそれに、答へられることを

愉しむやうに、一日に數度些細な事を口實に仲子を呼んだ。

「仲ちやーん」

彼女は居間に坐つたまゝ、聲の頂上で遠くの仲子を呼びかける。仲子は部屋で大抵机の前に居た。彼女の前には、開かれた書籍か、書簡箋か、白いまゝの原稿紙が在つた。ぼんやり庭を眺め、稍陰鬱に子供時代の思ひ出や現在の自分を考へて居た仲子は、母の聲に漠然とした迷惑を感じた。然し彼女は直ぐ返事をする。そして、母の居間の唐紙を明けた。

「何御用」

多計代は、染物の色本を膝の上にくり擴げて居た。彼女は、障子の方に本を近づけ頻りに色の濃淡を見わけ乍ら、仲子の方は見ずに云つた。

「今、齋久屋が來たのだがね、どれがいゝだらう」

仲子は、輕く傍に膝を突いた。

「何を御染めになるのよ」

「山繭が一反あるから、何かに仕ようと思つてね。—どうも近頃の色は元と違つて染草が悪いのか氣に入つたのがないねえ」

仲子は、興味なく受答へをする。多計代は軈て思ひ出したやうに、仲子に訊ねた。

「さう云へば、お前立つ時持つて行つた紫友禪の着物はどうしたへ」

「あつてよ」

「もうあれも着られまいね、いゝ模様だが—」

間を置いて多計代は云つた。

「どうする積りだへ、着物だつて少しはどうにか仕なくちやあなるまいが」

「其那ことはよくてよ、いらないわ」

「お前はいらないと云つたつて、さうもなるまい」

多計代は、女中に白地の反物と色本とを渡した。彼女は、布類を入れた箪笥の引出しをしめ乍ら、次第に考へが纏つてゆく口調で呟いた。

「——一體、佃さんのお國はどんな處なんだらうね」

伸子は、出來る丈單純に答へた。

「さあ……何故? まだ行つて見ないから判らないわ」

「妙なお國風だね、現に角斯うやつてお前が歸つて來たら、一應何とか挨拶があつて然るべきだらうと思ふね。——それとも何かい、佃さんは親御に云つてやらないのかい?」

「其那ことなくてよ」

多計代は、幾分嘲笑的に云つた。

「——嫁の親から御挨拶申上る迄默つて居るといふわけかね」

伸子は、厭になり、ふりもぎるやうに云つた。

「何 云つて來ていゝのか見當がつかないから默つて居るのでせう。意味があるのぢやあないわ。今に歸つてでも來れば、きつとちやんとするでせう」

「お前がた同志は、それでもよかろうどう、せ萬事普通と違ふのだから、――けれども、私はこの間も考へたのだが、人並はづれな事が必ず正しいことは定つて居ないからね。奇を衒ふのは　はたで迷惑する許りだよ」

「私は其那衒ひで生活して居るとは思はなくてよ。――其は母様とは性格も違ふし、もの丶考へかたの違ふところはあつても。――自分と傾向の違ふのを、一概に奇を衒ふといふ風に片づけるのはよくないわ」

「おやあ、お前は一から十まで自分のすることは正しいと信じて居るのかへ」

始めは、豫想もつかない事から、斯ういふ感情的議論になることは、伸子が歸つてから一度二度のことではなかつた。多計代は、激しい屈しない性格の女性であつた。思つたことは、ずば〳〵と云つた。或熱情が彼女を捕へると、其によつて傷けられる對手の感情や、理論の正誤に頓着せず肉迫する性であつた。伸子も、初はいつも節度を保たうと努めた。母としての立場、見解を理解し、亢奮しまいとした。自分は、母が贊成してもしないでも、結局斯うと思ふ風に生活するだらう。意見の違ふことは、抑々佃と結婚する決心をした時から覺悟して居たのではないか。本當に自信ある者なら優しさを失ふな。劬りを忘れるな。伸子は自分に向つて警告した。けれども、多計代の熾烈な調子は、いつも最後には伸子をむきにさせずに置かなかつた。むきになると、伸子も母同様容赦ない性質を現すのであつた。

一月下旬の或日の事であつた。

極小さな事から、又話が激して來た。伸子は

「この間うちから、同じことを繰返して居るやうなものですもの。母様の御志はよく判つてゐます。私の爲を思つて云つて下さるのだから、其は本當に有難いと思ふの。けれども――」

と、殆ど困惑し乍ら云つた。

「もうさういふ話はやめませうよ」

多計代は穏に済さうとする伸子の態度に著しく不服を感じるらしかつた。暖爐傍の椅子に向いあつてかけてゐた彼女は、上氣した頬の色でせわしく瞬をし乍ら伸子に云つた。

「お前も變つたねえ。――元は決して斯うではなかつたのに。お互に何處までも交換し合ふだけの眞心を持つて居た、これがお前の身上だつた。自分に都合のわるいことは道理があつても聞かないやうになつたら人間も上つたりだよ」

伸子は、この言葉で深い悲しみを感じた。彼女は云つた。

「私は狡くて避けるのでは決してないのよ。たゞ、論判のための論判のやうなことは仕たくないと思ふの。此處で、母樣と私とが打ち合ひの議論をしたところで、佃といふ人間が生れ變りは仕ないでせう？ 私があの人を愛して居るといふことも如何うも成りは仕ません。猶一層反動的な熱が加るやうなものです。……だから穏やかにして頂戴よ、ね」

「其が勝手ですよ。――散々自分は好きな眞似をした、然しお前は冷靜で居ろと注文出來る義理かへ。私は云ひたい丈は云ひます。お前がこれをどうとつても其はお前の自由だが……」

多計代は、はつきり伸子に佃を斷念しろと云ふのではなかつた。結婚するといふことが全然わるいと云ふのでもないらしかつた。勝氣な彼女は、伸子等が自分を甘く見て事後承諾を强いたと誤解して居た。其不愉快を、種々他のことにかづけて晴すのであるらしい。伸子は、其點に思ひ切つてふれなければ、とても議論は終らないと知つた。伸子は彼女を甘く見る處か其正反對であつた。多計代は、自分がどれ程伸子の一生に重大な關係を持つて居るか、伸子の知る百分の一も考へはしないのだ。

伸子は、根から自分の心持を打ち明け、今日限りでこの嫌な、堂々廻りの病的な論判はやめとしたいと思つた。彼女

は、心持を整へて云ひ出した。

「ね、母様、母様は私が大事だから私の良人となる者は理想的な男でなければいけないやうにお思ひなさるでせう？さういふ人間はまあ無いと云へてよ。第一私自身だつて決して完全無缺な女ではありません。恐らく母様の御覧なさるよりもつと悪いとこだらけの奴なの。其に私は、ひとにあてがはれた生活では、とても我慢の出來ない性分です。例へ自分の選んだものがひとの呉れるもの丶半分の價うちしか無くても、自分の手で選びたい。ね、だから、よしんば母様が最善だと思つて見つけて下さつた人があつたとしても、私は有難く受けるかどうか疑問よ。い丶と思ふ思ひ方も違ひさうなの……」

多計代は、やゝ弱く抗議した。

「い丶人と云ふ標準はどこの國でも同じだよ、…………お前のやうに」

「お仕舞までどうか聽いて頂戴ね」

伸子は、椅子をすゝめ、母の膝とすれ／＼に自分の膝を近づけた。

「母様には、戀愛などから超越して、孤り高く淨し、と行ひ澄したのがお好きなやうな趣味があるでせう？ 自分の娘が男など見向きも仕ず天使的で藝術に殉ずると云ふやうな考へは、確に母様を悦ばせるのよ。さうでせう？ 無いとは云へないでせう？ところが、私はもつと／＼人間的で貪慾なの。草木でも、日光でも思ふ存分愛したい、其と同じに、親でも戀人でもたつぷり、存分に愛したい慾があるの――わかつて？ 斯ういふ心持――だから、正直に云へば、母様の趣味に從つて、私は若しかしたら一生を心にもない納り方で暮しは仕まいかといふことが本當に可怖かつたのよ。………憤らないで頂戴……」

伸子は、切ないものが胸に閊へて暫く口が利けなかつた。女中がそつと戸をあけた。が二人の様子を見、何も云はずに

又引下つた。

「今度のことだつて、母樣に不滿足なのはよくわかつてよ。私も決して最もよく行動したと云へないことは知つて居ります。けれども………私はたつた一度でいゝから、誰に何とも云はれずに愛して見たかつたの。」

仲子は默つた。母も默つて居る。部屋の中は夕暮で薄暗くなつた。暖爐の低い焰が、時々ひら〳〵燃え上り搖れ乍ら、うつむいて居る二人の横顏を鈍く赤く照した。

この話をしてから、多計代は仲子に微かな思ひやりを以て對するやうになつた。仲子は、眞實な親の愛を其處に感じ、悲しい感謝を持つた。けれども、此一度の話し合ひは、思ひがけない反省を仲子自身にも與へた。言葉は魔物だ。仲子は自分の心持ばかりを見つめ、表現は念頭に置いて居なかつたのに、自ら出た最後の一句は、其夜彼女から多くの眠りを奪ふに充分であつた。深く考へて見ると、ひとりでに出たあの言葉――唯一度でいいから自分の意志のまゝに愛して見たかつたといふ言葉――は、異樣に運命的な何ものかを暗示しては居ないだらうか。母の性格と自分の性格との相異、あゝいふ孤立の環境、女性として成長した盛り年代、總てさういふものが運命として自分の前に在つた。自分は其等を統握した上で佃を愛すやうになつたのか。又は、其運命的な境遇に支配されて偶然佃を愛すやうになつたのか。若し後の方なら、其時佃が居たと同じ條件で仲子の前に現れた男性なら彼に限らなかつたと云ふことになる！仲子は、自分の頭を憎んで泣いた。このやうな考へは、考へるも穢しく苦しい。運命に負けたのでもよい。勝つたのでもよい。自分は、彼を愛したからこそ愛したのだ！

仲子は、一週に二度づゝ、長い手紙を佃に書いた。けれども、彼女は周圍の者の彼に對する感情や、極めて微妙な內心の感じ等については一切書かなかつた。文字は、數多く並べすぎると只混雜を招くだけだ。仲子は、たゞさへぎごちない佃に、何か先入主になるものを與へるのを案じた。彼は、最上の素直さと打ちとけと、自然な朗らかさとで、歸つて來なければならない。



病人騷ぎ

德田秋聲

勝手口の方で頓狂な話聲がした。出入の商人などにしては、少し調子が高すぎた。それに夜はまだ明け切つてはゐなかつた。おゑんはうと〱しながら、誰だらうと思つて耳を澄した。

「さらい何うも早くに飛び込んで來て、お眠いところを申し譯がありません。何にどこでもいいんで、隅の方をしばらくお借り申したいと思つてね。玄關でも茶の室でも……飛んだ御厄介で。」

おゑんさんは其の聲の主が誰であるかが略見當がつきかゝつたが、同時にそこに一段高いパンヤの蒲團のうへに寢てゐる良吉も、目をさましたらしく、首を動かしてゐた。良吉の枕元には藥瓶や、湯吞茶碗なぞを載せたお盆に、濕布の片、痰壺、卷煙草、灰皿―― さう云ふものがごて〱置いてあつた。彼は感冒にかゝつてゐた。火鉢にかけた鐵瓶に、薄い湯氣がたつて、炭火の白けてゐることを證據立てゝゐた。

おゑんは子供を抱いて寢てゐたが、持病のある體なので早起きが辛い方であつ

た。しかし一旦床を離れると、頭が少しぐらゐ痛くても、眩暈がしたり、熱があつたりしても、床をしいて寢るといふことは、一日中何かしらこちや〳〵用事の多い彼女の家庭では、許されないことであつた。二人で一人分にも足りない女中に任しておいたのでは、何んなことになるか知れないのであつた。それで朝だけでも、少しゆつくり寢てゐたかつた。飯の焦げる匂ひがしても、子供の辨當にまごついてゐるのが判つてゐても、出來るだけじれ〳〵すまいと思つて、目を瞑つてゐたが、何うかすると大きな聲を出して、台所へ指圖をしなければならなかつた。

「さあ芳や、ごめん蒙つてこちらへ上れや、皆んなもこちらへ來て休まして戴けや。」

そんな聲が玄關でしてゐたと思ふと、俥からおりて入つてくるらしい氣勢がして、やがてその芳といはれる女であらう、何か低聲で呟きながら茶の室へ通つた。

そこへおゑんが身仕度をして、出て行つた。女中が板戸を繰開けてゐた。

「どうも朝つぱらから飛んだお騷がせをして申譯がない。宿を取らうかなんて言つたけれど、何にどこでもいゝから、ちよつとの間御厄介にならうと思つてね。」

「さうですとも、そんな遠慮はいりません。何だかよく似た聲だと思ひましてね。」

おゑんはさう言つて、更めて挨拶をした。去年の夏子供たちと暫らく行つてゐた親類の家に働いてゐる、その家の主人の兄の正太であつた。

芳子――正太の娘は、隅の方に小さくなつて、「父さん〳〵」と言ふ言葉だけは分明わかるが、間斷なしに微聲でしやべつてゐる言葉は、おゑんの耳にはよく聽き取れなかつた。

「これは芳の婿だあね。」正太はさう言つて、入口の方に畏まつてゐる、物堅さうな男をおゑんに引合せた。

「こちらが上の悴の正男さね。――おめえ一度もお目にかゝつたことはなかつつら。」正太はさう言つて、また引合せた。

おゑんは生絲會社に努めてゐる正男のことも、學校の先生をしてゐる芳子のことも、また町の女學校の先生をしてゐる芳子の婿の小山のことも、噂に聽いてゐたけれど、逢ふのは初めてであつた。芳子は先生らしいさつぱりした風をして、おろ〳〵四邊を見廻しながら、やつぱりおしやべりを續けてゐた。

「何にあね、芳が少し氣が變になつたゞね。後でゆつくり話さにや判らんが、この前にも一度こんな事があつたゞね。その時は松澤病院へ三月も入れておいたが、まあ好い鹽梅によくなつて、二年間何のこともなかつたゞね。それがふとした事から、また起つたもんだから、先月中頃××病院へ入れたゞけれど、專門でないもんだね、やつぱり東京で好いお醫者にかゝつた方が早いだらうといふので、連れて來た譯さね。××病院ぢや、大分落着いたやうだから、もう少し置いてみろと言つてくれたけれど、一つこちらの先生にお願ひして、大學へでも入れるやうにしておもらい申したいと思つてね」

その間も芳子は絕えず何か口走つてゐたが、この家が何處であるかゞ不安であつた。そして父がそれを言つて聽かせると、漸かにおとなしくなつて來た。

「それは飛んだ御心配ですね。それぢや今裏の家を掃除させますから。」

おゑんはさう言つて、急いで女中を指圖して、火を起したり、子供達の寢てゐる裏の家の北向きの部屋を取片着けさせたりした。そこには書籍や雜誌が積み重ねてあつたり、古綿の入つた蒲團のやうなものや引裂いた紙片の詰つた行李のやうなものが、縁側に置いてあるかと思ふと、紫檀の机に琴のやうなものがあつて、薄暗い欄間の壁に土方のやうな顏をしたベエトベエンの圖が光つてゐたりした。おゑんは其處へ足を踏込む度に、子供か女中かの誰かに、何か知ら小言を言はずにはゐられなかつた。幼稚良吉たちの住居も古び煤けてゐた。梁や柱が歪んで、建具の足や閾が磨滅してゐ

た。天井や壁も煤けきつて、汚點が出てゐた。廢頽した老寄にも似た良吉の書齋にも、歳月がつけて行つた古色がしみ出してゐた。それは其れで彼の氣分にふさはしいものではあつたけれど、建物の壽命と彼の壽命とを對照するとき、おゑん達は何うかすると暗い氣持になつた。いつになつたら少しは片着けばえのするやうな明るい家をもつことが出來るのかと思ふと、年一年ごみごみしたものゝ溜り〳〵して行く、この頃の生活の煩雜さにうんざりしてしまふのであつた。良吉は大分前から一部改築の設計に興味をもちはじめてゐた。そして何うかすると、夢中になつて家の周圍を測量したり、圖を引いたりしてゐたが、今のところそれも机上の空築に過ぎなかつた。子供はそれを見ると、

「また設計ですか」と憫笑するのであつたが、おゑんも同じやうに笑つた。

「家の設計なんてものは、遣り出すと誰でも病的になるらしいですね。」

「でもお父さんお氣毒よ。」おゑんは目を潤ませたが、子供たちが陰で氣遣つてゐるやうに、悪くすると彼は設計した家を建てずにしまうかも知れないのであつた。

良吉もそれは何うでも可いと思つてゐるらしかつた。彼がやつておかなかつたら、皆んながまごつくだらうと考へたが、爲殘すべきもつと良い事が外にあることに氣ついてゐた。で、やつぱり傍目もふらずに自分自身の仕事に精進しようと思つてゐた。

三人をその部屋へ落着かせてから、おゑんは台所へ出て、朝飯の仕度に取りかゝつてゐたが、ちよつと隙を見て、エプロンで手をふき〳〵良吉の傍へ行つて見た。諒解を求めるほどのことではなかつたけれど、自分の身うちだけに、泥て

ゐる良吉にも告げておきたかつた。病氣のときの良吉はひどく我儘であつた。病氣を重く見ないことが、何うかすると彼の氣分を苛立たせたが、良吉にはまた良吉の理由があつた。偶に病氣を得て寢るのは、いつもあわたゞしい彼の氣分に取つては、安息に好い機會であつたけれど、一日も中止することのできない仕事を持つてゐる彼に取つては、寢てゐるのも樂ではなかつた。床の上に坐つて一日だけの仕事をしてしまふと、きつと疲勞と熱が出た。十五六年も前から冬が來る度にきつと一度か二度は脅かされることに決つてゐる慢性の氣管支カタルで、胸が一面に爛れてゐた。おゑんの親類にあたる若い醫學士が殘して行つた、可也强い藥の處方箋を、彼はその度びに取出したが、最近ではそれも慣れつこになつてゐた。

若いをりはから／＼してゐたおゑんも、この二三年氣管を惡くしてゐた。咽喉の奧の方に腫物が出來て、毎年々々冬になると紙を貼つたやうに呼吸が苦しくなつたり、聲が出なくなつたりするので、氣分がとかく憂鬱に陷りがちであつた。おゑんはそれを切る練習をするために、病院がよいをしたこともあつたが、ちようど其の時外に手術を要する箇所ができて、機會を失つてしまつてからは、いつ思ひ立つて手術をするといふ日もなくて、毎日々々に追驅けられてゐた。それに體質までが良吉の惡いところを受けて來たやうで、實を言ふと、この間中から感冒を引きづめであつたのであつた。良吉に比べて、少し確かりした體に産れついてゐるだけのことであつた。

しかし良吉は、この二三年彼女の氣分がすつかり乾ききつたやうになつてしまつたことを、遣切れないことのやうに思つた。彼女が氣にしてゐる以上に、彼はおゑんの髮の毛のぼさ／＼して來たことや、目に潤ひのなくなつて來たことや、顏の表情が硬張つて來たことを、氣にしないではゐられなかつた。男にしろ女にしろ、若い時は、かうした顏が年取るにつれてあゝした顏になるものだといふことぐらゐは、親の模型をそこに見てゐる場合、大抵想像のつかないこと

はないのであるが、おゑんの場合では若い時の彼女は父の遺傳の方が容貌の多くを占めてゐて、若さが失はれるにつれて、頑固に雁れついてゐた母の原型が、まさ〳〵露はれたのであつた。勿論氣分のうへでも、彼女は全く敗北してしまつてゐた。若いときの張りや賑やかさや、機轉や諧謔や總ての魅力を殆んど亡くしてゐた。それはちやうど良吉と反對の方向へ走つてゐるやうに見えた。そして其の一半は、良吉自身の若い時の不道德から來てゐると、彼は思つた。子供たちの弱いのも、其のためだと思つた。良吉は醫術によつて、いくらか彼女を健康にすることができれば少しは幸福を取戻すことも不可能でなささうに思つたが、或る醫者は時々それを口にする良吉を嗤つた。

「まさかこんな病氣で死ぬこともないだらうが、しかしぽつくり逝く人もあるからね。」

良吉は昨夜もそんな事を言つて、おゑんを脅かした。事實彼の體溫は、又少し上つてゐるのであつた。彼は傍に誰かゐないと、何かに不都合だと思つた。

「看護婦を一人そう言つてもらはう。」彼は皮肉半分に言つた。

おゑんは高を括つて默つてゐた。

で、今朝も來客に餘りちやほやするのも何うかと思つた。

「病院へ入れて、今日のうち皆歸るんださうですけれど、あの家があつてみればね。」

「さうとも。」

良吉は餘り切詰めるやうにされるのも厭であつた。

「狂人といつても、何かとよく判つて、それあ溫順しいんですよ。體溫器々々々つて言つてゐますから、熱でも計らうといふのかと思ひましたら、此のあひだ四圓とかいくらとか出して、獨逸製の體溫器を一つ買つたんですつてっ さうす

ると何うかした拍子にそれを踏みつけて壊したんださうです。さうお金がある譯でもないんでせうから、惜しいことをしたと思ふんでせう。」

「それで狂つたのか。」

「ところが其よりももつと可けないことがあつたんですつて。」

で、おゑんは今ちよつと聞いて來た、頭腦に狂ひの出來た原因について、良吉に話した。それは芳子の良人が、何かの拍子に、友達にさそはれて、お茶屋で酒を飲んで、ふと藝者を買つたのが因で、それから少しその女に溺れた。そして此の結果貯金の通なぞを持出したのであつたが、折が悪かつたとみえて、悪い病氣を受けて、しばらく病院がよひをしなければならなかつた。

「多分忘年會のをりか何かだつたんでせうが、少し燃へすぎたんですね。あの人の家に相當財産もあるんですから、少しくらゐ費つても困りはしないんですが、心配したんですね。一月ほど××病院にゐたさうですが、あの人は産科ですから。」

「おれは又小さい子が病氣で連れて來たんだと思つた。體が子供のやうだつたからね。」

「別に手がかゝらんから、可いんですよ。蜜柑をもつて行つたら、林檎がいゝと言ひますから、今買はしたんです。林檎は滋養があつて好いなんて、そんなことを言つてゐますの。」

「醫者は何うするかね。僕にさへ頼めば、どこの病院でも自由になるものだと思つてゐるんだから……。」良吉は笑つた。

「今S——さんにお願ひに行かうと思つてゐますの。誰方かに紹介していたゞくやうに。」

おゑんはそれから又、良吉のお粥のお茶を作りに臺所へ出て行つたが、外にもう一人お粥を配るところがあつた。さつき客を案内してから、隣室を覗いてみると、長男が引被つて寢てゐた。次男は弟妹たちと、茶の間へ來てゐた。

「どうしたの。」おゑんはきいてみた。彼は顔をしかめてゐた。

「僕も風邪だ。」

「それあ可けない。診ておもらひなさい、大事にならないうちに。」

「いや、昨夜キナを飲んだから。」彼は言つてゐた。

良吉の機嫌が食膳のうへの配合なぞにも、可也影響されるのは、病氣のときに限つたことではなかつた。御馳走をする必要はなかつたけれど、何かしら好意が認められなければ、氣が濟まなかつた。

一としきり子供たちの騷いでゐた茶の室がひつそりしてしまつた頃に、良吉は床のうへに坐つて、食事をしてゐたが、誰か玄關に客があつたので、おゑんが出て應對した。

「……何ですか熱がございますものですから。」おゑんはさう言つて其の來客に斷つてから、良吉に知らせた。

「たゞ熱があるぢやをかしいぢやないか。あの男は初めだから、床をしいた處へ通すのが失禮だから逢はないんぢやないか。もつと氣をつけるんだよ。」

「されあさう云ふ場合もあるさ。」

「さうですか。でも、貴方が昨日さう言つていらつしつたから。」

「さうですか。」

おゑんはやがてS――さんに紹介を頼みに行つた。その序に良吉の容態を話した。

おゑんが歸つて來たのは、ちようど昨夜から來て泊つてゐた彼女の弟が、田舍の連中を引連れて、病院へ行つた後であつた。そして良吉の傍へ來て、少し話してゐると、そこへS――さんが見舞つた。

「先生、とにかく行つてみようと申しまして、唯今皆んなで參つたさうです。いづれその先生に御厄介になるでせうけれど。」

「はあ、もう行つたんですか。」S――さんは笑つてゐた。

「大して惡いやうには見えませんですがね。」おゑんはさう言つて、芳子の話をしてゐたが、去年松澤で死んでしまつた、これもおゑさんの親類の若い男、それから十幾年、死にもしなければ、癒りもしない　これもおゑさんの親類にゐたる、千葉の方にゐる五十ちかい女の噂なども出た。

「ちよつとした機會のやうですね。」良吉は言つた。

「さうですとも。此邊の神經は頗る微妙で複雜ですからな。まあ大抵、遺傳か黴毒ですがね。」

S――さんはさう言つて、腦病院の話をしはじめた。

「一度行つてみてごらんなさい。それあ面白いですよ。狂氣にも、泣くのと笑ふのと怒るのとあつて、こつちの室では、狂犬が人に吠えつくやうに、頻りに怒つてゐるかと思ふと、その先きでは、何か譯のわからん泣言を言つて、めそ〱泣いてゐる。又その先きへ行くと、今度はひどく樂天的で、げら〱笑ひながら、じやか〱三味線を彈く眞似をしてゐるといふ騷ぎで……」S――さんは手眞似口眞似をしながら話した。

良吉もおゑんも噴笑してしまつた。

さつと診察してS――さんが忙しさうに歸つて行つてから、良吉は枕頭へ小几を引寄せて、ペンを執らうとした。さ

うして長い時間を費して、漸と書きはじめてゐた。

おゑんは長火鉢の前で、ちやうど裏の家の半分を借りてゐるＹ――氏の夫人と、お茶をいれてゐた。Ｙ――氏は震災直後にも、良吉の裏の家の二室ばかりを借りてゐたが、この頃また戻つて來ることになつた。Ｙ――氏にいはせると、此の家が何かにつけて緣起が好いのであつた。

「若し本氣になつて勉强するなら、少しくらゐ長くたつて介意はないが……」良吉はおゑんにさう言はせた。

Ｙ――氏も八方儲け仕事に奔走することを斷念して、試驗の準備に取りかゝらうとしてゐた。その間の兵糧も裕かに用意されてゐた。

「今度の感冒は、何だか何時までもこびりついてゐるやうで可けませんね」感冒で二三日臥つてゐた夫人は、まだ本當にはつきりしてはゐなかつた。

「私も少し寢たいと思ふんですけれど。」おゑんも言つた。

「ほんとうにお大事になさいませんと可けませんね。田舍の方は何うなさいました。」

「大學へ行きました。多分入院するとになるでせうから、晩方にでもちよつと行つてやらうと思つてゐるんですけれど。」

「私も一人知つた家の奥さんが入つてゐますから、ぢやあ御一緒にまゐりませうか。」

「さうですか、誰方ですか。」

「去年お嬢さんと同じ病氣で、同じ時に入院していらした、あの奥さんですの。あの時も、あの方のはずゐぶん長くかかりました。でも十分とは行かないまでも、まあ退院するくらゐにはなつたんですの。ところが今度はこれも矢張り氣が狂つたんですつて。本當にお氣毒ですわ。」

「まあ。」おゑんは何だか薄氣味が惡くなつて來た。

「不思議なことがあるもんですね。」

「本當ですね。一度お見舞に行かう〳〵と思つてゐたんですけれど……そう言つちや惡いですけれど、何だか氣味が惡いでせう。それに人が行くと引止めて、歸すのを厭がりなさるさうですから。」

「お氣毒ですね。何不足もないのに。」

「震災のときは、あの方達はほんとうにお仕合せでしたのに。」

おゑんは自分の氣の狂つた時の事を、ふと想像してみた。何か一つ心配しだすと、一晩眠られないことがあつた。體の弱い娘の卒業後、結婚前後、結婚生活――そんなことを考へ出すと、際限がなかつた。それから、夜中に板戸ががたりとすると、そこに泥棒が窺い寄つて、節穴から覗かれてゐるやうに思へて、何うしても寢つかれなかつた。

「おーい。使ひ。」良吉が遽かに大聲を出した。

おゑんは「はい〳〵」と言つて火鉢の傍を立つた。

良吉はほつとしたやうに溜息をついてゐた。

「これから體温器を買はなければ。あれはもう駄目だ。」良吉はさう言つて、額に手をあてゝゐた。

「莫迦に疲れるな。こんな事ぢや迚も駄目だ。」良吉は嘆息した。

おゑんは下手に返辭はできないと思つた。

「體温器なら宅にございますが……。」夫人はさう言つて、やがて女中に取りに來るやうに命じて、歸つて行つた。Y―氏は良吉の子供たちの部屋とのあひだを仕切られた二室を使つてゐたが、何の部屋も部屋の體裁を成してゐなかつた。

でもY——氏夫婦が來てから、そこに住居らしい喧かさが醸された。

やがて女中が體温器をかりて來た。良吉はちよつと其を振る拍子に、纎細な硝子器がつるりと手をすべつて、襖際へ飛んで行つた。そして女中が拾つてみると、水銀のたまつてゐる部分の先端の折れてゐることが判つた。

「仕方がない、買つておいで。」

「二三本借りておいで。」

女中は出て行つた。

「あの狂人さんも體温器を氣にしてゐましたつけが、聞いてみると面白いんですね。旦那さまが遊んだので、大分悲觀したらしいんですね。」おゑんは今朝の續きを話しだした。

「何でもさういふことが知れてから、大變責めたさうです。教育家の癖に、そんなところへ足を踏みこむのが悪いと言つてね。旦那さまは一度懲りてゐるものですから、逆はないやうに機嫌を取つてゐたさうですけれど、一體氣の小さい方でせうから、ひどく氣にしてしまつたんでせうね。自分でも病氣が出るのを心配して、こんな事を言つてゐると、前の病氣が出さうだつて言つてゐたさうですが、一と晩そんな事を言つてゐた揚句、ふいと狂ひ出してしまつたんださうですよ。それに其の時、親類の娘が一人來てゐて、三人炬燵に當つてゐたところ、旦那さまが其の子に肩をさすらせたさうです。さうすると、芳子が二人がをかしいと言ひ出して、ふいと立ちあがつて、それきり傍へ寄つてこなければ、口も利かないんですつて。それがもう可笑しいんですね。汽車のなかでも、旦那さまの側へは何うしたつて寄つて來なかつたさうですよ。」

「ふん。有りさうなことだね。」

「ですからね。京子なんかも本當に心配ですね。」

そこへ女中が各種の體温器をもつて來たので、二人は値段と照して、何れにしやうかと迷つてゐた。

「坊つちやんとこへ持つて行つてごらんなさい。」おゑんは言つたが、自分で行くことにした。

長男は少し元氣づいてゐた。そして獨逸好きな彼は、獨逸の製品を一つ採り取つて、熱を並つてから振らうとすると、合憎そこにあつた炭斗の縁に當つて、音もしないで、尖端が砕けてしまつた。

「しまつた。三圓八十錢を二つ、七圓六十錢損した。惜しいな。」

「今日はまた何うしたと言ふのでせうね。親子で粗匆して……。」おゑんは笑つた。そして

「仕方がない、もう一つ取りませうね」と言つて、良吉の傍へ戻つて來た。

「莫迦だね。」良吉は苦笑した。

「だつて、それあ仕方がないでせう。誰にだつて失策はありますから。」

「逢ふさ。ぶつつけたのと、過つたのと」

夕方おゑんは裏の夫人を連れて、病室を見舞つた。

S――さんに紹介してもらつたと同じ博士に、折よく診察してもらつて、芳子は直きに病室に收容されることになつたのであつた。三人は外に用事もあつて、おゑんの弟だけが、歸つてそれを報告した。

おゑんが病室へ入つて行くと、芳子は低いベツトに腰かけて、温順しくしてゐた。ちよつと見たところ普通人と變つたところもなささうに見えた。

「いかゞです。落着きまして。」おゑんは訊いた。

しかし芳子は何とも言はないで、バスケットのなかを整理してゐた。

「ほんたうに温順しいんですわ。たゞお藥をお飮みにならないだけなんでござゐます。直きに快くおなりでせう。」

すると同室してゐる、年の頃三十ばかりの、ちよつとお上品な若い夫人らしい女が、ふとベットを離れて、側へ寄つて來てまるで自分の訪問客を迎へるやうに、ひどく慇懃な態度で、おゑんたちに挨拶するのであつた。そして、「どうぞおかけ下さい」と言つて、にこやかな風で、椅子をもつて來てくれたりした。

「どうも濟みません。」おゑんたちはお辭儀をした。

すると其の女は、まるでお客にでも來たやうにドアの前に坐つて、しとやかにドアを開けたかと思ふと、「ごめん遊ばせ」と言つて出て行つた。お附きの看護婦がついて出た。

おゑん達が歸るときにも、芳子は見向きもしなかつたけれど、その患者は慇懃にお辭儀をして、廊下まで見送つてくれた。

それからY——夫人の知人のところへ廻つたが、そこでも其の日は何事もなかつた。

「癒るでせうか、私の病氣は。」その患者は胸をおさへながらさう言つて、悲しげな目をしてゐた。

「えゝお癒りになりますとも。」

「さうですかね。有難うござゐます。」患者は感謝の目を輝かして涙ぐんでゐた。

二人は長くゐなかつた。

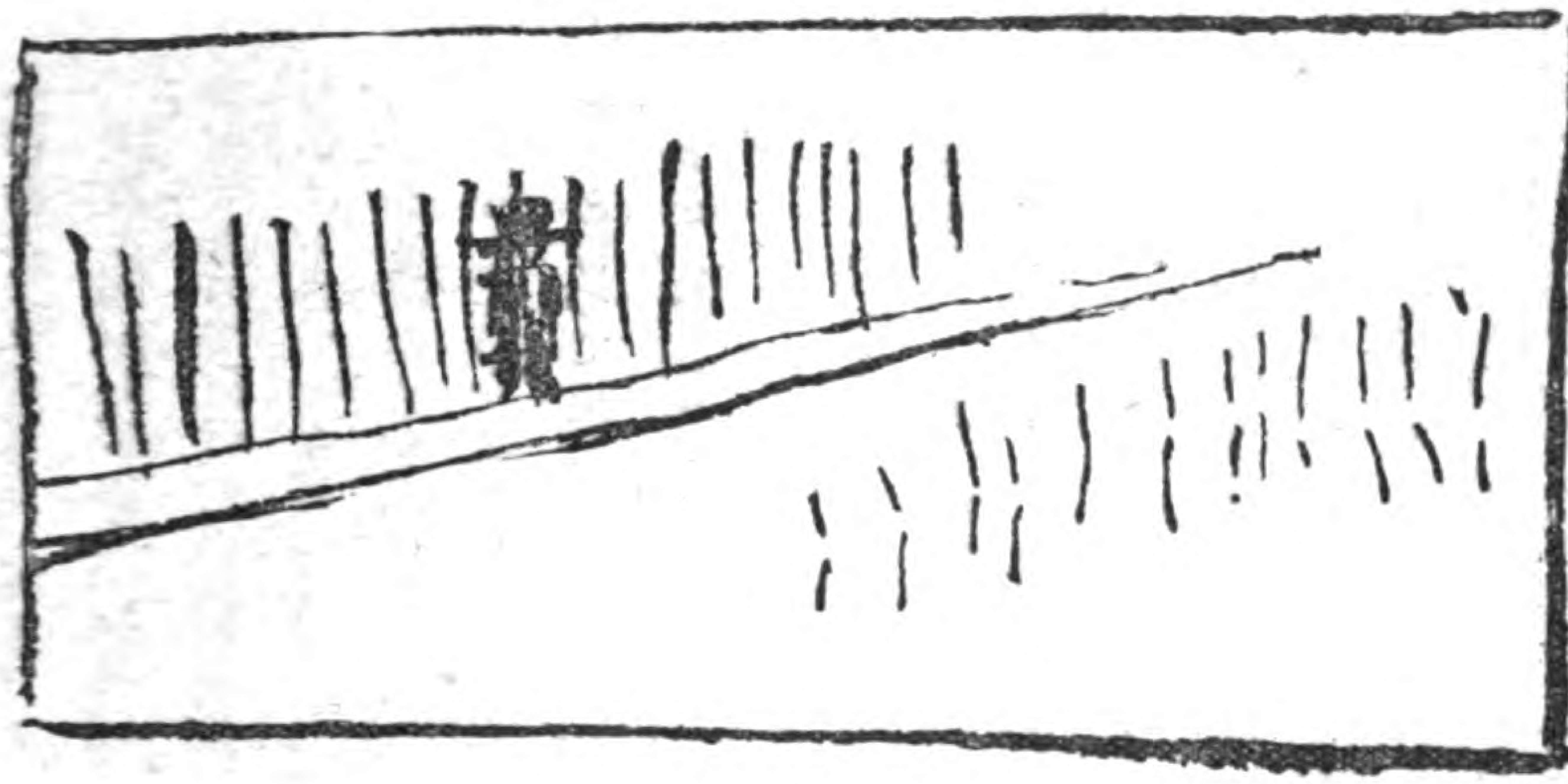
「早くお歸りになりますやうに。お祈りしてゐますわ。」

さう言つてY——夫人は別れを告げた。そしておゑんと一緒に歸途を急いだ。

「厭ですね。あんなになつて生きてゐても詰まりませんね。」

「でも皆さん氣樂さうね。あの若い奥さんのやうでしたら、私も一月くらゐ倆に入つて見てもいゝと思ひましたわ。」

途々そんな話をしてゐたが、おゑんは何時か氣忙しかつた今日一日の出錢の多かつたことなどを考へさせられてゐた。



兄との關係

佐佐木茂索

一

兄の手紙を見ると麟は直ぐ返事を書いて、いろいろの話とはどういふ話なのかもう少し詳しく知らせて貰へないかと云つてやつた。しかし兄は何とも知らせて呉れなかつた。麟は又手紙を書いた。それにも兄は返事を呉れなかつた。麟はじりじりしながら、結局自分で出向くより仕方がないと決心した。だが麟は或る會社へ入つたばかりで、少し勝手が利かない上しかもやや責任のある地位に就いたので酷く多忙だつた。なかなか京都まで出かける暇が見出せなかつた。麟が都合のつく限りをつけて、やつと東京驛から立たうとしたのは、兄の手紙ののち約一ケ月たつてからだつた。

その間、兄の手紙は幾度となく麟に讀まれて、竹中彪と書かれた裏書も、竹中麟殿とある表書も著しく毳立つてゐた。手紙は幾度讀み返してみても麟を不安にする以外に役立たなかつた。「どうしても順子と結婚するとお母さんに云つてゐるさうだ

が、それについてはいろいろ話があるから一寸來ないか。」手紙は修辭を除くとこれだけだつた。毳の立つほど讀んでも、最初に一閲した時に受取つた不安に寸毫の增減を示さない手紙だつた。さうして、麟の水落を時々きゆうと緊めつける手紙だつた。それは竹中彪といふ兄の名の爲ではなかつた。手紙自身の爲では決してなかつた。順子、唯その名から浮いて出る連想の爲だつた。順子、その爲に麟はきゆうとする水落に手紙を時時抱きしめた。

二

麟は寢不足の蒼白い顏を京都驛頭の朝に踏したとき、これから直ぐ兄のところへ行つたものだらうか、それとも、と考へた。實は麟が辛うじて京都に來る都合をつけ得たのは何社の用件を兼ねることによつてであつた。だから、それともとは、兄のところへ行かうかそれとも社用を先に形づけやうかの意だつた。麟はどうせ兄の家に一泊するつもりだつたので、社用を先にすることにした。彼は京都の東へ約二里ばかりのところ迄急いだ。其處で用事を形づけて歸らうとすると、別の來客があつた。來客は麟の知らない人ではなかつた。で一旦上げた腰を又下した麟は、悠り夕方まで其處にゐた。來客は、

「ひどく蒼い顏をしてゐますね。」と麟に云つた。麟は微笑を習慣的にした。

「寢台車ではとても眠れないのです。」

その蒼白い顏を麟が三條大橋まで運び戻して來たとき、既に日暮の街には灯が連つてゐた。北山一帶を見ると霧は頂きを僅かに殘して悠悠と暮れ合つてゐた。一旦東山を大津への途中まで京都を離れて行つて來た麟は、これから更に北山の方へ京都を二里以上も離れて入つて行かなければならなかつた。北山の霧を見て、あの物寂しい山の中に佇んでゐ

る兄を思ひ浮べ、あの山の中まで自分が行くのかと考へるとき、憂鬱な麟は突如として疲勞に取卷かれて來た。

もう乘合自動車は勿論ない時刻だつた。しかし今夜一晩京都に空費するのは多忙を拔けて來た麟のなし能はざることだつた。彼は不相應に高い賃金を自動車屋に拂つて、普通の車を出させた。京都の街を出離れ、野路も盡きてしまふと、とつぷり暮れた山間だつた。路に添つて溪の音がした。山が段段深くなつて急に冷氣が襲つて來た。向ふから來る牛車とゆつくり麟の自動車は身をかはした。杉並木の壓してくる暗さと、肩に泌み入る冷氣とに、麟の神經が極端に疲れた頃、自動車は麟が下りていい地點まで來てゐた

爆音で兄の娘が田舍者の顏を門口に出した。

「俵子。叔父さんだよ、忘れやしまい。」

麟は笑顏と、割に天氣な聲を姪にかけて格子戶を入つた。兄は奥に坐つたまゝ聲をかけた。

「麟か。」

「遲くなりました。」

麟は灯のない空洞のやうな玄關で答へると直ぐ奥へ通つた。

「けふは來んと思つてゐた。乘合もなくなつたしな。寺町に泊るのかと思つてゐた。――屆つて來たのだね。」

そこへ嫂が青くむくんだ顏で二階から下りて來た。彼女は階段を下り切らないうちから聲をかけた。

「ようお越しやす。」

嫂には癲癇の發作があつた。持病は癲癇だけではなかつた、脚氣があつた。それで寢たり起きたりの生活だつた。病人と云ひ切つていい程の嫂だつた。兄がこんな山の中に引込んでゐるのも、人と接する機會の多い、刺戟の強い町中が

嫂に惡過ぎるからだつた。定職がなく、僅かに生活し得るに過ぎない兄の經濟狀態の爲もあるにはあるが、此廢人が兄を餘儀なく山の中に住ませるのに違ひはなかつた。兼子は山の中の小學校だけで、あとは看護婦になつたのと同じだつた。彼女はすつかり田舍臭い小娘になつて嫂の看護婦だつた。

麟は嫂の顏が正視出來なかつた。青くむくんだ顏に間を置いて二つの澱み切つた目が、見開かれてゐた。東京にゐても麟の時時魘される顏だつた。——

兄夫婦、兼子、麟の四人は默つて一つの火鉢に手を出してゐた。兄は無口な男だつた。麟も兄に讓らない口不調法な男だつた。茶を入れながら、菓子をすすめながら嫂が仕かける用のない話題だけが、それも時時沈默を破るに過ぎなかつた。

「わざ〳〵一臺出させたら、高うつきますやろ。」

嫂の訊いてゐるのは自動車賃の事だつた。

「可なり取ります。山の中へ來るのですから。」

麟がさう答へると、兄が口を挿んだ。

「俺なら歩くよ。乘合の十五倍も出せんからな、今時の若い者は無駄ばかりするわ。」

兄は不思議な訛を交へて、ひどく老人くさいことを云つた。

「晴子、お前はもう寢たらいゝ。」

しばらくして兄は嫂にさう云つた。そして嫂が何か云ひさうな前に、

「麟も今夜は早く寢るがいゝ、疲れてゐるだらう?」と云つた。

山の中の夜の更け方は早かつた。灯がつけば夜だつた。音はない生活だつた。いきなり夜の山の中へ飛び込んで來た鱗には、家中の凡てのものが陰惨に見えて仕様がなかつた。嫂が鉄子に助けられて、やつと二階へ上つたとき鱗は兄に云つた。

「暗い晩ですね。」

「うん。」

さう答へた兄は、暗いといふ言葉につられて、反射的にランプの芯を大きく出した。

「嫂さんが二階に寝てゐるのは不便ぢやないんですか。」

「うん。でも、二階の方が下より乾燥してゐていゝのだらう。」

兄は面倒臭さうに云つたが、一寸調子を代へると

「鱗。何かお母さんから訊いたか。」と云つた。鱗には意外な質問だつた。

「お母さんが何か知つてゐるのですか。」

「訊かなかつたのだね？」

「御存じだつたら訊くのでしたが。」

「いや。知つてゐる譯はないがね。」

鱗には兄の云つてゐることが分らなかつた。いかにも母が知つてゐさうな口振りが最初の質問に匂つてゐた。だが兄は直ぐ、知つてゐる譯はないと事もなげに云つてしまつた。そのどちらが本當だか鱗には分らなかつた。鱗が訊かなかつたと云つたので、取消したのだらうか。鱗は兄に訊いた。

「何のことですか。」

兄はしばらく返事をしなかつた。さうして突然別な方へ持つて行つた。

「明日の晩歸るのだね。」

「さうです。」

「ぢや、寺町へは寄つて行けないね。」

「いや、寄るつもりです。どのみち、こゝの歸り途ですから。」

「寄るのか。——」

兄は一寸言葉を切つてから、

「今夜はもう寢やうぢやないか。お前も疲れてゐるだろ。」

「そんなでもありませんが ぢや寢ることにしますか。」

麟は、今夜はどうせ何も訊けないと思つてゐた 兄はもとより話す氣を持つてゐさうもなかつた

兄弟は並んだ枕に頭を置いた

庭の泉水へ落ちる筧の水音が麟の耳についた ちかちかとする神經は筧の音と調子を合はせて多少の熱を後頭部に持つて來た。麟は、可なり眠いくせに眠られぬ頭で不意と、兄が先刻云つた言葉を思ひ出した

今時の若い者は無駄ばかりするわか。——そんなら兄自身はどうなのだ？ 兄自身はと考へ出したとき、暗闇の床の中で思はず微笑を浮べた。

兄は昔遊蕩兒だつた。彼はよく馬に乘つて遊びに出かけた。定紋打つた馬乘提灯に火を入れてゆつくり東へ行く兄を

隣は幼い目で記憶してゐる。一家は破産する前の狀態にあつた　その中で兄は摑めるだけの金を摑んで遊びに出かけた。茶屋の拂ひが大ぶん溜り、さうして茶屋が彪一家の經濟狀態を知つて危ぶみかけたとき、兄は。

「さうか　そんなら拂つてやらう。」と云つた。「金を拂へばいいのだらう。金ならとんな金でも受取るね」

「そちもうお金なら。——」

茶屋のお上はさう答へて、しかし答へが少し現金過ぎると思つたのか直ぐ冗談めかして附加へた。

「——金は金だが延金ぢやアでは困りますけど、ほほほ。」

その夕は兄は馬車に風呂敷包と一緒に乘つて茶屋へ出かけた。

「拂ふぞ。」

兄はさういふと、風呂敷包を解いた。中は其頃は立派に通用してゐた一文錢と鍋錢との山だつた。兄は錢通しから拔いてばら錢にしたのを風呂敷一杯に持ち、右手で丹念に座敷の片隅から青疊の上に並べ始めた。お上も女中も「まあ。」と云つたきり兄の仕草を眺めてゐた。兄は冗談氣を微塵も顏に現はさず丹念に一文錢を並べた。座敷一杯にひろげて、廊下をうしろ向きにすさりながら兄は並べた。——兄はかういふ片意地なところを持つてゐた。

朝鮮に神官をしてゐる親類があつた。其處から兄に祭禮用の神輿を買つて呉れと依賴して來たことがあつた。

「妙なことを賴まれるものだな。朝鮮でかつぐ神輿など何でもよかろに。」

兄は依賴通り神輿を買つた。そして荷造りして送らうとしてゐる時だつた。兄は不意に金が必要だつた。兄は何の躊躇もなく質屋に入れてしまつて所用の金を間に合せた。朝鮮からは度々催促が來た。兄はようやく神輿を質屋の藏から出すことが出來た。朝鮮からは直ぐ禮狀が來て、秋に大祭があるから遊びに來ないかと云つて寄越した。兄はもとより

行かなかつた。さうして秋になると兄は突然笑ひ出した。

「おもしろいな。質に入つた神輿を今頃擔いでゐやがるかと思ふと――ははは。面白うてならん。」

兄にはこんな方面もあつた。麟は兄も無駄なことをしなかつた譯ぢやないと寢床で考へてゐた。

三

翌朝京都へ出向くとき、兄は歩いてゆくと云ひ出した。乘合に搖られて行くよりは、こんないい天氣には歩いた方がいいと兄は云つた。麟は同意した。その方が問題に觸れる機會が多い筈だからと思つた。

兄は玄關に出ると裾を端折りながら、

「麟。お前も捲くれ。」と云つた。

麟は云はれる通り裾を端折つた。兄弟は四本の脛を並べて早春の山路を下り始めた。路は、昨晩來るときと同じ杉並木の下だつた。溪流も同じ音を足の下で立ててゐた。何處か未熟な午前の日の光りが、高い梢から落ちてゐた。蔽ひかぶさる杉並木が盡きて、山峽がやや開けて來ると黑のソフト帽に直接な日が差して、辷り皮の下が輕く汗ばんだ。

「今夜どうしても歸るね。」

兄はしばらく歩くとさう云つた。

「歸らねばならないのです。」麟は思ひ切つて云つた。「――で、例の手紙の話なのですが。――」

「あれか。」

兄は頭になかつたことのやうに無造作に云つてのけたが、暫く無言の後、「分つてゐるよ。」とつけ足した。と直ぐ又

「おい麟。」と呼んだ。

「だけど麟。順子には子供があるぜ。」

「それは知つてゐます。」

「知つてゐるならいいが。――誰の子供だか知つてゐるかい？」

麟は愕として兄の顏を見た。順子の子供は勿論順子の前の夫――夫ではないかも知れないが、さういふ男の子供ではないのか。麟は兄の問ひの前に茫乎とした。すると兄は麟に苛棘としか見えない一瞥を投げて直ぐに言葉を續けた

「俺の子供だぜ」

「え？」

麟は自分の耳を信じかねた。「本當ですか？」と非常極まる疑問を眞劍に投げた。

「それ見ろ。」兄は眉も動かさずに云つた。「もう瞞されかかつてゐるぢやないか。」

麟は兄の顏をもう一度見た。兄は「おい。」と麟を呼んだ。

「おい麟。お前人の心が分るか。分るまい。順子は女だぜ。お前はお母さんに順子の心は分つてゐますと云つたのだらう？何故そんなことを云つたのだい。現に今兄の俺に瞞されたぢやないか。――あれは俺の單なるいたづらにお前が乘つたのぢやないぜ。俺がお前を瞞したのぢやないのだ。順子だぜお前を瞞したのは。お前が今愕いたのは俺を信じてといふよりは或はと順子を疑つたからだらう。それが順子にお前が瞞され得る證據ぢやないか。」

麟は今さら兄から說法を聞きたくはなかつた。そんな事は麟にとつて過去の問題だつた。麟が兄から聞きたいのは――手紙にあつた「いろいろな話」だつた。麟は聞きたいばかりではなく云ひたいことが澤山あつた。彼は兄の說法を阻止

しやうと試みた。
「その程度のことはどうでもいい事でせう。人間には全然疑ふ氣も瞞す氣もないものだとは僕云はないのですから。」
「さうか。——だが何時かお前が激怒したことがあつたらう。あの時のお前の手紙を俺はよく覺えてゐるよ。お前は彼女がかう云つたからかうだ。ああ云つたからああだ。その何處に兄さんは疑ひを挿むのかと個條書きにして俺を詰問したぢやないか。俺はあの詰問書をみてお前を愛しただけだつた。で、あれはお前が彼女を信用してゐるといふ證據にはなつても——證據になるだけぢやないか。それ以外に役立ちはしないさ。」
麟はもどかしくなつた。この邊で低徊されてゐては堪らなかつた。
「それや、僕はその程度に莫迦でせう。だが今はもう分つてゐることです。——」麟は何切りをつけて云つた。「いろいろの話て何ですか。それを——」
兄は、思ひがけなく微笑した。
「麟。ははは。今いろいろの話をしてゐるぢやないか。」
「でもこんな事は——」
「お前は話を聞きに來たのだらう。ぢや聞いてゐればいいぢやないか。これも、いろいろの話のうちの、いかな位に當る話なんだよ。」
「ぢやあ——聞きませう凡て。けど僕は忙し——氣も忙しいしするから、事實を云つて下さい。抽象的な議論なんか。」
「事實か。根のあることだね。皆俺のいふ事は根のあることだからね。——では、と、今度伏見の小母に會つたかい？」
勿論會つてゐる譯はなかつた。疎遠で、それに今度のやうな忙しい旅にそんな訪問を麟がしないのは兄に分つてゐる

筈だつた。――伏見の小母といふのは彪、麟兄弟の死んだ叔父の妻だつた。

「會つてるものですか。僕は京都へ著いたばかりです。」

「小母は片目つぶれたのだよ。こないだ俺は訪ねてみて驚いた。――何故つぶれたのか知つてゐるかい？」

「知るものですか。」

「分らないだらう。痳毒なんだからね。」

兄はかう化學者のやうに慘酷に云つた。麟は、だが風眼がどうしたのだといふ氣もちしか起らなかつた。

「それがどうかしましたか。――第一、そんな必要以外の話は聞きたくないのですが。」

「だからお前は駄目なんだ。それがどうしましたか位の事ぢやないのだ。それにそれは順子にも關係してゐる必要な話なのだよ。」

「本當ですか。」

「小母はね――」

兄は云ひかけて傍の小さな神社を指した。

「あすこで一寸息まう。」

麟は兄のあとから拜殿に腰を下した。

「小母はね、叔父の死後何してゐたと思ふ？――叔父と小母とはむかし駈け落ちをして一緒になつた人達だぜ。その小母が――分るかい、叔父の死後何して暮したと思ふ？ 分るまい？小母はね、養女があつたらう、美代といふ子、あの子を賣つて食つてゐるのだぜ。妾といふよりは高等內侍だね。旦那が絕えず變るのだから。小母は美代を賣つただけぢ

やない、自分も―――」

「本當ですか?」

麟は思はず口を入れた。

「本當さ。自分も貰つたのだぜ。養母子が一つ屋根の下でそんな事があると信じられるかい。そして痳毒で失明さ。」

麟は脛を拜殿の階段に投げ出し、ぼんやり自分の脛を眺めてゐた。よく見ると脛の毛に白い埃が花のやうに纏つてゐた。――脛から目を離し、しばらくして云つた。

「さうですかね。だが皆が悪いのですね、小母さんだつて好き好んでの事ぢやないに違ひありません。第一、叔父さんの保險金だつて小母さんに渡らなかつたつて聞いてゐますが、―――そんなに皆でいぢめたのでせう。」

「さうさ、それやさうさ。生活さ。だがねそんな事はどうでもいゝのだ。俺は小母さんの片目だけ潰れたことを云へばいゝのだ。――お前も歸りに伏見へ寄つてみろ。京阪線の墨染といふところで下車してすぐだ。竹林の中の妙な家に住んでゐる。墨染に有髮の尼ありさ、――風眼ぢやちと困るだらう。伏見へ行つてあの目を見て來い。女を信ずる氣がなくなるぜ。おい麟。」

女と呼んで順子を侮辱してゐる兄の言葉だつた。が麟は兄の無禮を咎める氣にもならなかつた。親類中がどんな態度で小母を遇したかそれは分り過ぎてゐた。麟は、しかし此處で義憤を發することは止めた。兄も小母を遇する親類中の態度には憤慨してゐるらしかつた。麟は肝心の問題を急ぐし、それに兄の口吻は小母一人を嘲るものではないので、何も云はぬことにした。さうして婉曲な抗議として、

「だが順子の話はどうなるのです?」と云つた。小母は墨染の竹藪で何うしやうと、だから世間一般の女を不信用とす

るには當るまい、まして順子にとつては小母の話は何の關係もないぢやないか、といふ麟の意を、暗に通はせたつもりだつた。

「おかしな奴だな。そいつを今話してゐるぢやないか。さうだ——も一つこゝに根のある話があるがね、順子も近々に金持になるのだぜ、知つてるか。」

麟はもとより知らなかつた。兄は話し續けた。

「順子の子、つまり一郎だね、あれが小學校へ通へる年になると、一郎は父親の實家へ引取られることになるのだ。その代りそれまでの養育料として一萬圓だつたか二萬圓だつたか呉れるといふのだ。一萬と二萬は少し違ひ過ぎるがどつちだつたか今一寸忘れてゐるがね、ともかくどつちかの金額なんだ。近々と今云つたが、尤もそんなに近近に一郎が小學生に育ち上がる譯もないがね、死なければ大きくなるに決つてゐるからね。金持になるのは確かだよ。だから寺町ぢや、お政なんか大よろこびさ。——どうだ。いやな話だらう。」

寺町とは順子の家の所在地だつた。お政と兄の呼ぶのは順子の母だつた。お政はつまり彪、麟兄弟の伯父の連れ合ひだつた。兄は大抵の女性を陰では呼び捨てにする癖があつた。

「何でもない話ぢやありませんか。」

「大ありだよ。順子が何故今でも結婚しないか知つてゐるかい？」

麟は、僕の爲でせうといふ代りに、

「良縁を待つてゐるのでせう。」と云つた。

「お前の爲ぢやないのだぜ。」

兄は肚を見すかしたやうに云つた。これは兄一流の毒のない毒舌だつた。だから鱗は唯ふんと云つた。

「一郎を引取る時金を呉れるといふのにはね、それまで再縁しないことといふ條件が付いてゐるんだ。つまり先方が狡るいのだよ。あの變な男が突然外國へ飛出しちまつて歸つて來やしないやね、これが歸らず仕舞だと先方ぢや一郎が酷く大切になる訣だらう。その大切な一郎の母親に再縁でもされて一郎が他人の手へ渡るのは危險だらう。それに若し——」兄は一寸言葉を低くした。「あの變な男が外國から不意に歸つて來でもしてごらん、順子が再縁してゐると何がどうなるか、少し複雜になり過ぎるだらう。かたがたといふ譯さ、こゝまでおいで甘酒進上といふ釣りの一手だよ。」

「ぢや順子は金の爲にぢつとしてゐるのですか。兄さんはさう云ふのですね？」

兄は迷惑な顏をした。

「さうは云ひやしないよ。俺は唯、順子はぢつとしてゐれば金が貰へるのだといふだけを云つてゐるのだよ。順子は勿論それを知つてゐるといふだけの事だよ。」

「ぢや、順子がぢつとしてゐるのはあの男が歸るかも知れないといふ氣がいくらかでもあるからだと云ふのですか。」

鱗には少し訊ね難い問ひだつた。しかし彼は毛脛の尖に目を落したまゝ訊ねた。

「さうは云はないさ。順子はあの男は、嫌ひだと云つてゐたからね。今でも云つてゐるからね。だけど——」

ぷつりと切つて兄は煙草に火をつけた。ゆつくりと吸ひ込んで、こんどは非常な勢ひで鼻の前を煙だらけにした。

「どうだといふのです。」

鱗も煙草に火をつけながら云つた。兄はもう一度煙りを吐いてから、

「鱗。お前は後家がどの位金を大事にするか知つてゐるかい。俺でも想像の外なんだからな、お前にはとても分るまい

?」

麟はこれは自分にも分つてゐると思つた。大分以前だつた。麟の友人が京都へ遊びに來てゐたことがあつた。このとき友人は金に多少困難を感じて來たので、東京の麟のところへ金を送つてくれないかと言つて寄越した。これは曾て麟が此男から借り放しになつてゐる金があるので實はその催促だつた。麟は友人に責任を感じた。が其時麟の手許には金が乏しかつた。彼は友人の三本木の宿のことを考へると、そこから四五丁の距離にある寺町を連想した。で麟は直ぐ寺町へ手紙を出して三本木のこれこれへ金を届けてくれないかと金額を申しやつた。それ位の金は何でもない寺町の事だから何とかしてくれるだらうと思つてゐると、五日たつても返事が來なかつた。承知したとも何とも云つて來なかつた。麟が寺町め不親切だな、云ふこと聞いてくれないのかと思つてゐると、ある日三本木の友人から手紙が來て、それには寺町から届けて貰つた、御手數有難うと書いてあつた。麟は友人の手紙を見てからそれぢや寺町からもう何とか云つて來るだらうと考へたが寺町は何も云つて來なかつた。金持ちだからこつちで考へてゐる程に考へてゐずそんな事でわざわざ手紙を出すのが面倒なのだらうと麟は判斷したのだが、それから暫くたつて他の用事で先方から手紙が來たときも、金の事は少しも書いてないので、始めて麟は妙だなと感づいた。金のことは云ひたくないのだな、それだけに金に拘泥してゐるのだな、二度と麟から余計なことを云つて來ないやうに避けてゐるのだな、吝な奴だなと麟は思つた。

麟がこの事を告げると、兄は笑ひ出した。

「さうだらう、お政てそんな奴だよ。後家だからね。お政でなくても後家は皆さうだよ。順子だつて謂はば後家だぜ。何しろ後家から金と色氣を拔いたら後家ぢやなくなるから酷いよ。」

麟は兄のかうした話をもう聞いてゐたくなかつた。それに京都へ行きつくのが遲くなるのが厭だつた。麟は早く寺町へ行つて順子にゆつくり合ひたかつた。

「そろそろ出かけやうぢやありませんか。」

「よかろ。」

麟の聲に應じて兄も拜殿から腰を上げた。拜殿から街道に出るまで、づつと櫻の木が植つてゐた。見あげると梢は可なりに芽をふくらませてゐた。

「櫻落葉の時分になると此境内はとてもいゝぜ」

兄はかう云つて閑寂な境内を見廻した。麟も兄にならつて頸を動かした。兄弟はまた四本の脛を並べて歩き出した。

京の街へ入るまでにはまだ二里近い路がある。麟は足許にあがる薄い埃りにかすかな疲れを感じてゐた。

四

京都へ入つた。家つゞきになつて來た。兄は羽織の下から手拭を出して埃まみれの脛を拂つた。そして「そら」と云つて手拭を麟に抛り出すやうに渡してくれた。麟も兄にならつて脛をはたはたと拂つて裾を下した。

「麟。これからどうするつもりだ。」

兄は意外なことを訊ねた。麟はこれから寺町へ行くつもりでゐた。その途中もその後ももつと兄からいろいろの話を聞くつもりでゐた。兄は勿論いろいろの話を聞かせてはくれた。しかしそれは麟の豫期したやうなものではなかつた。麟に云はせればどうでもいゝ話ばかりだつた。

鱗は兄はどんな顏して云つてゐるのかと思つた。
「寺町へ行くのぢやないのですか。兄さんもそのつもりぢやないのですか。」
「行くには行くがね、お前が東京へ歸つてからだ。今夜家へ歸るのは遊過ぎるのかね、何時もの通り寺町へ泊るつもりでゐる。」
「ぢやその間どうするんです。」
僕を京都見物にでも引つ張り廻すつもりですかと鱗は訊きたかつた。
「芝居にでも行つてみようぢやないか。どうせお前は十時頃の汽車に乘ればいいのだらう。」
「芝居ですつて？」
鱗は兄の眞意を捕捉するに苦しんだ。僕はそんなことは厭です。それより寺町へ獨りで行きますと鱗が云はうとしてゐると兄は、
「順子はゐないぜ。」と云つた。
「なぜ？」
鱗は兄の言葉の意外さに驚いた。順子がゐないといふのはどういふ意味か分らなかつた。それを今まで默つてゐた兄の衷懷に到つては推諒の外だつた。彼は茫然と兄を見るよりほか仕方がなかつた。
「城の崎へ行つてゐる。ゆとう屋に泊つてゐるさうだ。輕いリヨウマチでね。」
鱗は何故それを今まで教へてくれなかつたのですと聞くことも忘れてゐた。すると兄は、
「お前は知つてゐると思つてゐたよ。順子から手紙でも行かなかつたかい。」と云つた。

かう云はれて麟は急に頬の紅くなるのを感じた。順子から或時は忘れられる自分だといふことを兄に知られたのは麟の少からず參つたところだつた。彼は辛うじて云つた。

「僕が東京を出たあとに着いてゐるかも知れませんが。」

「順子がゐなければ寺町へ行つても仕方がないだらう。お政は厭だらう？後家だぜ。」

麟は苦笑した。

「厭は厭でも、でも――」

「でも、どうだと云ふのだ。さうは行かぬといふのかい。お政なんか何でもないぢやないか。」

「將來、しかし――」

兄は「おい麟。」と大きな聲を出した。

「麟。お政と將來何等かの今以上の交渉が生じるから、さう疎遠には出來んといふのかい。――まだ分らないかね。お前、順子は駄目だぜ。もう酷く年老つてゐるし、お前が以前見た目で今も思つてゐるとしたら大違ひだ。それに――いろいろ話があるよ。」

麟は自分の頭が急に惡くなつたと思つた。兄は何のつもりでこんなことを云つてゐるのだらう、さうして自分は何ういふ意味にそれを取つてゐるのだらう。兄は順子と結婚したいといふ麟に不賛成らしい、それは兄が「一寸來ないか」と麟に云つて寄越した手紙にも書いてあつた。その手紙には、それに就てはいろいろの話があるからと書いてあつた。麟が其爲わざわざ無理な都合をつけて東京からやつて來ると、兄の話は直接麟の大問題に觸れぬものばかしだつた。兄はわざわざ自分を呼びつけて何を云はうとするのかしらと麟はいぶかつた。寺町へ行くことさへ餘り行かせたがらな

いのは何ういふ譯なのだらう。兄が順子と麟を結びつけまいとしてゐるのは分る、しかしそれは手紙でども分つてゐた簡單な事實だ。いろいろの話とは勿論その理由を意味してゐるに違ひない、さうでなければ無意義だ。兄は理由の存在することを匂はすが遂に何事も語らうとはしない。麟から云はせれば、兄は單に世の中の女性の信用すべからざるを漫然述べてゐるに過ぎない。麟にはさういふ一般論は不必要だつた。麟は今兄が吐いた「いろいろな話があるよ」といふ口辯の如きを捕へて、一歩肉迫しやうとした。

「はつきり云つてくれませんか。順子がいけない譯を。」

さういふ麟の顏の何處が怪しかつたのであらう、兄は不審さうに弟を見て云つた。

「何を此上訊き質したいのだい。」

「理由です。」

「理由?あれだけぢやいけないかい。隨分云つたつもりでゐるがね。」

「だけどあれは順子のことぢやないでせう?」

「どうしてだい?」

「どうして?」

麟はまた自分の頭の怪しいのを感じた。兄は兄の主張する如く、旣に理由と目すべきものを語つたのだらうか、さうしてそれを自分は聞き逃してゐるのだらうか。兄は罌染の小母のことを語つた、後家と金と色氣との事を語つた、寺町のお政を攻擊した。しかし麟が順子と結びついてはならない理由は、一體何を語つたらう、ちつともそれらしいものを述べなかつたのではないか。麟はなほ腑に落ちぬ顏をした。

「麟。お前は具體的に、それも個條書きか何かのやうに聞きたがつてゐるのだらう。しかしそれは俺から云へないよ。唯お前は默つて東京へ歸つたらいいだらうと思ふのだ。明朝東京へ着く迄には分るだらう。」

兄の此口上は鐵のやうに冷たかつた。冷たいばかりではない、鐵のやうに固かつた。麟はやうやく鈍くなつた頭で一つ決心した。兄からはもう何も聞くまいとするつもりだつた。兄は麟の表情の動かないのに無頓着らしく、

「麟。芝居へ行かないか。」と云つた。

麟は人形以上に意志を失つてゐた。同時に人形以上に他の意志に影響もされなかつた。彼は默默として兄の動くやうに動いてゐた。

五

南座は紛然と動いてゐた。それにも麟は無關心だつた。唯彼を極端に驚かせたのは幕間に寺町のお政に出會つた事だつた。麟は蒼ざめた顏で兄に訊ねた。

「偶然ですか。」

「電話をかけたのだよ。」

兄は平然としてさう答へた。麟は憤怒に近いものを此時感じた。麟を寺町へ行かせまいとしたのは兄だつた。順子が不在でお政だけのところぢや厭だらうと兄は云つた。それだのに兄はわざわざ電話をかけて呼んでゐる。何が何だか兄の仕草は麟に不可解だつた。唯解し得たのは、自分の心に兄を疑ふ心のきざしたことだけだつた。麟は兄を何の點でも疑ふまいとした。兄が何をしてゐるか、そんな事は決して疑ふまいとした。事その事に就ては決して疑ふまいと力めた

が、兄が霧の中の存在の如く朦朧となりかゝるのはいかんともしがたかつた。麟は一刻も早く芝居を出たかつた。京都を逃れたかつた。

「まあ麟さんどすか。お久しをすえな。」

「どうも御無沙汰しました。」

さういふ會話も煩に堪えなかつた。麟は寺町のお政の傍から、兄の傍から、出來るだけ早く去りたかつた。

麟は朦朧と煙つてゐる休憩室でかすかに目を閉ぢた。癲癇の發作のある嫂、小金持ちの寺町の母子、風眼の罌粟の小母、——麟の瞼の裏でこれらの人が夢のやうに現はれて消えた。殆ど廢人と云つていゝ嫂と、何處か剛膽で深味のあるやうな兄とが一番強く麟の頭へ來た。その周圍に寺町と罌粟のソフトフオカスの顏が浮んだ。順子——その顏を思ひ浮べやうとして麟は慌てゝ頭を振つた。

自分は何を想像しやうとしてゐるのだらう——麟は竦然とした。

「今の幕おも白かつたな。」

「あれからどないなるのやろ。」

「そんなこと分つたら面白ないがな。そやけど深刻やな。あんなこともつと大人にならんと本當には分らんで。」

「そらそやて。若いうちはもつと綺麗ごとで行かうとしよるさかいな。色戀でも何でも年とつたやつのは凄いで。」

麟の隣りに腰かけてゐた二人の青年は芝居に就てしやべり續けてゐた。麟がぼんやり會話を聞いてゐるとその前へ寺町のお政が忙しさうに立ちはだかつた。

「こゝにおゐやしたのか。何しておゐる？東京が戀しなりましたのか。今夜お歸りやて本間どすか。」

「本當です。非常に忙しいので。」

「もう一日ぐらいよささうなもんどすがな。男はんて忙しないものどすな。折角京まで來て直ぐ歸らはらんならん。隨もう一兩日うちには歸つて來ますやろに。」

「さうですか。」

　麟は靜かに云つた。

「へえ。あれもお目にかゝりたがつてゐましたのに。いろいろお話しせんならん云ふてましたのにな。えらう殘念がりますやろ。」

「私も殘念です。ですけど又ぢきお目にかゝれるでせう。」

「まあ、まあ、男はんはさつぱりしといやすな。ほほほ。」

　何と話しかけやうと木の洞を叩いてゐるやうなものだつた。麟は僅かに響きに應じるに過ぎなかつた。

　麟は寢臺車でゆつくり睡りたかつた。睡れるだらうか。睡れたなら此の譯の分らない夢がすつかり消えるだらうと思つた。清清しい頭で、一切を消し去つた頭で、明朝東京へ著くことを考へると、ようやく麟に生色があつた。彼は東京へ歸つて蒼蒼と晴れ渡つた空を仰ぐときを想像した。その時自分自身、果して京都まで行つて來たのだらうか、それともずつと東京に居たままなのだらうか、——一昨夕からずつとこの東京驛頭に立つたままなのぢやないのだらうかと、疑ひ出しさうな氣がして來た。

——一四、三、一三、——



戲曲

茶の間

室生犀星

人物

信三（つとめ人。）
おつや（信三の妻。）
母親（おつやの母。）
狄島（つとめ人。）

景情

茶の間。長火鉢の上に電燈が下つてゐる。鐵瓶の湯氣が上つてゐるが既う宵の程が過ぎてゐるやうな物靜かさである。子供のおもちやが次の間へ通ふ暖簾の裾に散らかつてゐる。上手に斜めに北國の町家らしいしとみ戸が下りてゐて、橋のない溝の上に春さむい雪がゆつたりと降つてゐる。まだ肉體的にも若

いおつやが長火鉢の前に坐つてゐる。左手に階段がある―

おつや。（縫物の針を運ばせながら低いこゑで暖簾の垂れてゐる方へ向いて言ふ。）熱はまだあるやうですか。夕方にはじ度八分くらゐに下つてゐたんですけれど……

母。（姿は見えない。）ないやうだね。それによく睡てゐるやうだよ、そこからも鼾が聞えはしないかね、ほら、ね、鼻も先刻の吸入が利いたのか本統にこころもちよさそうにすうすう通るやうになつたやうだ。吸入つてよく利くものらしいね。

おつや。（耳を澄ます。そして微かな愛情めいた微笑みを漏らす。）ええ、吸入をかけてようございましたね、でも、あんなにいやがるものだから、つい可哀さうな氣がしましてね。こんなに利くんだつたら少しくらゐむづかつたつて明日の朝もかけてやりませう。

母。（しみじみと。）それがいいね。わたしたちの子供時分はこんな吸入なんてものはなかつたものだよ、いま時の子供は何と言つてもいろいろな立派なお醫者さまの機械が揃つてゐるから仕合せなわけだね。そのかはりむかしと違つてだんだん子供のからだが弱くなつたやうな氣がするね。お向ひだつておとなりのお子さんだつてみんな病弱（よわよわ）しいんだから……

おつや。（縫ひかがりを歯で切りながら。）けれども家の子はまだ達者な方ですよ。この間も病院で三人のお子さんを連れてみんな交る交るの病室に臥てゐる方がゐましてね。廊下でよく行く會ふもんですからつい挨拶をするやうになりましたが、その時もわたしのそばへ入らしつて、まあ、このお子さんは一體どこがおわるいんですかと、呆れたやうな顔貌でお仰るんですもの、全くうちの子のやうないい顔いろをしてゐる子供なんか、滅多に病院にはゐはしませんか

らね。
母。(話に身を入れ少し起き直つたやうな聲音で。)そしてお前どう言つたの。
おつや。(何となくうれしさうに。)わたし何んだかきまりがわるいやうな氣がしましてね、すこし風邪をひいたものでございますから大ごとになつては取り返しがつかないと思つて、まあ言つて見れば病氣の先廻りをして診にまゐつたんでございますと言つたら、その奥さんが心から感心したやうな調子で、ええ、その方がいいんですよ、少しくらゐの風邪でも打つちやつとくよりか、輕い間になほして置くんですね、あとあとが清々しますから。わたしのやうに三人とも入院してゐた日には、まるで子供の看護に生れたやうなものですよ、と、ほんとにお氣の毒でした。ずゐぶん疲れてゐらしつたやうですよ。
母。お可哀さうにね、しかしそれも矢張り何か業のやうなものだね。そんなに三人の子供がみんな病院に入つてゐるなんて、よくよくの不仕合せな方だね。(年寄りらしく。)そんな人はやはり前生がよくないんだよ。
おつや。(すこし笑つて。)そんな前生なんてものはあるもんですか。
母。誰にだつてあるものだよ、お前なんか前生は善光寺さまの牛だつて言ふんだもの。うそならお臀の左に綱ずれのあざがあるのを見てごらん。わたしも始めはうそだと思つてゐたらちやんとあるんだもの。
おつや。(思ひあてて不愉快な顔をする。)いやなことを言ふお母さんね。もうそんなことはこれから言はないでちやうだい。
母。………
おつや。(間を置いて。)水枕はもういいでせうか。

母。さうだね。(間を置いて。)だいぢやぶ。もうよほど下つてゐるやうだよ。つめたくなつてゐるから。

おつや。さうですか。いいあんばいね。この樣子だと明日は藥をのませなくともいいかも知れませんね。

母。(睡さうに何か返辭をする。)

おつや。縫ひものをつづける。縫ひものをしてゐる襟足をすぼめる。寒い凍て冴え返る音がする。)

母。(睡さうな聲で。)誰か來たやうぢやないか。

おつや。(耳を立てたが。)水甕のお餅の水を先刻かえてをいたものですから、多分あれが氷るんでせう。それに今晩はよほど應えますね。人通りもあまりなくなつたやうですよ。

母。春さきになつてからきふに寒くなることが、あるものさ、大かんよりか寒いことがね。

おつや。(表に氣を配る。氷る音ばかりでないやうな氣がして表へ眼をやる。)……

母。信三はおそいね。

おつや。ええ、それでも四五日中にはひまになるらしいんです。(しばらくして。)お母さん、誰か入らしつたやうですよ。」

母。(ゐねむりらしく返辭がない。)

おつや。誰方か知ら。(中膝になる。そして耳を立てたが何となく顏色をかたくする。)

客。(低いこゑで遠慮深げにいふ。)ごめんなさい。

おつや。はい、唯いま、……(これも低いこゑで何故かひつそりと立ち上る。あたりが餘り靜かだからしぜんさうなる。)どなたでございますか。(おづおづと土間から中格子を引きながらいふ。)中山はこちらでございますが。

客。僕です。狹島ですがおそくにあがつてすみません。もうおやすみになつてゐたんぢやありませんか。それならまた

参つてもいいんです。近くまで來たものですから、ついお寄りしたくなつてあがつたんです。
おつや。(しばらくその聲音に居竦められて佇る。そして暖簾の方を眺める。母のいびきが聞る。おつや、何か考へあててきつぱりした表情になる。先刻からと違つたやうに活々する。)まあ、こんなにおさむいのに、よく入らしつてくださいましたのね。(しとみ戸をひらく。そとにゆつたりした雪が暗に射したあかりに浮いて見える。)どうぞおあがりください。こんなにおさむいのにまあ。
客。(自然に低い聲になる。)みなさんおやすみですか。
おつや。(客の忸れた聲に惹き入られる。)いましがたまでお母さんが起きてゐたんですけれど、もう睡入り込んだらしいんでございます。
客。お子さんは?——。
おつや。もう寢みましたの。
客。ぢあ、あの、なんですか、おつやさん一人きりなんですか。
おつや。ええ。でも、……(暖簾の方を見る。)ひよつとしたら母は目をさましたかも知れません。そんなこと、どうでもいいんですけれど。(長火鉢の火を掻き立てる。「こん夜はなかなか冷へますね。」と客が言つて手を翳す。そしてあたりを親しさうに見廻す。)
客。この茶の間は全く久しぶりですね。しかし爐はもうつぶしてしまつたんですね。
おつや。ええ。子供が落ちたりたんかするとわるいと言つて、疊をしいてしまひましたの。ほんとはあつた方がいいんですけれど。

客。子供は達者ですか。

おつや。(客に馴れ懐しさうにする。)ええ、まあ達者の方です。

客。けふ野村さんのところへ行つておつやさんがよくあそこへ遊びに行くことをきいたんです。おさらひによくゆくさうですね。

おつや。(ややてれて。)ええ、おけいこの道なものですから、ついおうかがひしてゐますの。

客。野村さんで此間も女の人で僕のことをよく知つてゐるのが、一度ぜひお逢ひしたいつて傳言されてゐたんですが、僕はおつやさんだとは思はなかつたんです。野村さんは初めおつやさんだといふことをハツキリ言つてくれないで、なんでも僕が野村さんに行つたらあそこのうちでは、すぐおつやさんに電話をかけて呼びよせると言つてゐたんですが、こちらでそんな古い知り合ひもなし……若しかと思つて見たものの、やはり氣がつかなかつたんです。(客、露骨に。)おつやさんは野村さんに若し僕がたづねて來たら、ぜひ一度來るやうに頼んだのですか。

おつや。(赧らんだがきつぱりと。)ええ、そんなふうに言つたかも知りません。(微笑つて。)でもお電話は野村さんが自分で考へ出してかけやうとしていらつしつたのでせう。しかしよく入らつしつてくださいましたのね。

客。僕も一度お逢ひしたいと思つてゐたんだけれど、逢つても仕方のないやうな氣がしてね。何から言つていいか分らないやうな氣もちでね。

おつや。(茶を入れながら俯向きがちになり。)ええ、そりやそうですけれど……こちらへ入らつしつたことは大ぶさきから知つてゐたんですし、それにあの綾子さんに此間途中でおあひしたときに、あの方がお宅へおうかがひしたつてさう言つてゐらつしやいましたの。だから綾さんさへおうかがひしてゐるなら、わたしだつておたづねしたつてかまは

ないと考へてゐたんですけれど、つい、ぐずぐずしてゐましたの。でも綾さんもずいぶんかはりましたね。むかしのやうなお嬢さんめいたところがすつかりなくなりましたのね。

客。(おかしさうに思ひ出して。)この間突然に訪ねて來ましてね。ちよつと吃驚りしたんです。でも、すぐ顔をみるなり綾さんだと思ひましたよ。かはつてゐても何處かにかはらないところがありますからね。ところがあのひとときたら最う世帯の話しばかりし出してね。何んでも滿洲の方の旦那さんから毎月の仕送りを少しづつ貯めて、着物や帯を買つた話ばかりだつたが、それを妙に僕にほめてもらひたいやうな風でしたよ。あんな大家のお嬢さまも世帯じみてくるとみんなあんなになるのかと思つた。それに最う一つおかしいのは、歸へりぎわに風呂敷包みの中から、何を取り出すのかと思つたら鷄の皮づつみを出して、これはまことに失禮なものですけれど言つて、おみやげの代りに置いて行きましたよ。僕は鷄の肉が非常にさもしいもののやうに思つてね。

おつや。まあ、そんな人になつてしまつたのか知ら。けれどもまだ美しいぢやありませんか。

客。ええ、まだ子供のときの顔かたちが、そつくり殘つてゐますね。鼻つきなんぞまるでむかしとほりですね。しかし妙に窶れてさむさうだ。――縫物(しごと)をしてゐたらどう、僕にはかまはないで・・。

おつや。(一方に縫物を片づける。)もうしなくてもいゝんですの。でも野村さんにおたのみしておいて、ようございましたわ。でなきやお伺ひできなかつたかも知れないんですもの。いつか夏のころお宅の前を通つたことがございましたけれど、お寄りしにくくつて素通りしたんですが、・・・いいお住居ですのね。

客。見晴は高台だからいいんですけれど、冬はさむくていけないんです。(何となくおつやの顔から眼を離す。――そしてふと勝手への開き戸を見つめる。)まだ、あのままですね。いま見てもなかなかよくかいてあるな。これはお世

鮮ぢやないんです。

おつや。（同じく開き戸に芝居繪の似顔をかいた交ぜ張りを見る。）張り代へやうといつも思つてゐながら、まだ、あれきりになつてゐますの。あんな繪を毎日毎日うつしてゐたころがほんとに暢氣でしたわね。それでもあのころは繪の具なんぞつかつて一生懸命でしたのよ。さう言へばあれを張つてゐたころは師走のころでしたのね。やはり霰か何かが裏戸を叩いてゐてびつくりしましたわね。それに妙なことにはいつでもお目にかかるときが冬が多ございますね。今夜もふつてゐるし、全くふしぎなやうですね。

客。（思ひ出して。）たしか十二月の十八日でした。お觀音さまの日のやうだ、晩に山の上のお寺へ行つたら提灯に雪が吹きつけてゐましたね。あのときの御詠歌はいつでも耳についてゐるやうでよく思ひ出しますよ。

おつや。（一時に考へあてたやうに。）歸へりましてからわたしずいぶんお母さんから叱られたことを覺えてゐますの。あのころはひどい噓をこしらへて出歩いたものですから……しかし、あのころはようございましたのね。何んでもしたいことが工合よくできたんですもの。お母さんひとりさへ丸めてしまへばよかつたんですからね。

客。（皮肉に笑つて、）いまぢやそれができないと言ふんですか。

おつや。（しやんとして。）ええ、それもさうですけれど、そんなうそなんぞつくこともございませんし、したくもございませんわ。

客。（さびしく平凡に。）まだこちらへつとめてゐたころですから、もう十年くらゐになりますね。

おつや。（考へて。）ええ、大きい方が、七つになりますからね。早いものでございますのね。

客。男だつたかしら。

おつや　ええ男の子ですの。(暖簾の方で子供のむづかる聲がする。おつや、それを聞きすまして起たなくともい丶かどうか考へる。間もなく歇む。)昨日からすこし風邪氣味で熱があるものですから……。もう下りましたけれど

客。それやよくないですね。おだいじになさい。

おつや。たいしたことはないんです。お宅では皆さまお達者ですか。……。

客。(眩しげに。)みんな達者です。

(話やうやく絶えがちになる。二人とも話題に縋らうとして焦つてゐるが見つからないでじれじれした氣味になる。客は煙草ばかりふかしてゐる。おつや、しきりに話題を求めてゐるため顏いろ硬くなる。)

おつや。わたしほんとにおあひしたので何だかぽかんとしてゐるくらひなんです。おあひしない前は、やたらにどうしたらお目にか丶れるかと、そればかり氣に病んでゐたんですけれど。

客。(ぼんやりと。)僕も一度くらひ會つたらと思つてゐたんですが、會つてみると何も話すことがなささうですね。あんまりつまみどころがないやうな氣がしましてね。

おつや。(同感する。)ずいぶん貯めてをいたお話があつたんですけれど。それにはあなたもすつかり變りましたのね。もとはこんなに凝乎としてお話してゐらつしやらなかつたんですもの。

客。(おつやの眼を見入つたが物憂くその眼の鋭どさを失ふ。)さう云へばこんなに落着いてゐたことなんてなかつたやうね。ここの家でおつやさんを追ひ廻したことがあつた。

おつや。思ひ出して微笑ふ。(しかしおあいそのやうに表べばかりの笑ひ。)そしてお母さんによく見つけられましたのね。するとあなたは何日でもまるで走るやうにしてお歸へりになつたのね。あとをも見ずにね。

客。（苦笑ひする。）あのころはおつやさんだつて最つと活潑で、そんなにちやんと座つてなんかゐなかつた。よくお母さんの背後では舌を出したりしたいたづら者だつたんだが。

おつや。（むしろ極りわるく。）このごろになつて考へると、ひやひやするやうなことがありますの。だからお母さんが古いことを言ふと、わたし默つてしまひますのよ。なんだか餘處事のやうな氣がしてならないんですもの。

客。子供のときの話はときとすると非常に不愉快になることがあるね。が、どうかするとまた興味深いこともあるんだが……。

（二人また默つてゐる。客、ややしばらくして立ちかける。おつや、むしろ何氣なく客の立ちかけたのを眺め、べつに止めやうとはしない。）

客。だいぶ晩いやうですから、――お母さんによろしく言つてをいてください。

おつや。いろいろまだ話があつたんですけれど、何日、お發ちになりますの。

客。日は決つてないんだが、四五日中なんです。また暫らく會へませんがお達者で。（客、あいそ笑ひをする。）それから子供さんをお大切にね。

おつや。（土間へ一緒に下りかけ、中格子戸からしとみ戸の暗い方へ行きかけ。）これで又た十年くらゐは年始狀もくださいませんね。いつものやうにね。（やや皮肉なれど情のある聲。）

客。その方がさつぱりしていいぢやありませんか。もうしんるい交際のやうなものだから。

おつや。しんるい交際ですて、――。

客。まあ、そんなものです。

（しとみ戸に客が手をかけやうとすると、おつや、しとみ戸の上から押して見て默つて笑ふ。客、それを知らずにしとみ戸を開けやうとする。）

客。開かないやうだな。どうしたのか、ちよつと開けてください。

おつや。（振り顧る客を見て笑ふ。）開けてごらんなさい。

客。（氣がついておつやの顏を見る。或る表情を感じる。しかしまるで巫山戯られたときのやうな感じ。）だつて開かないぢやないですか、さう言はないで開けてください。れいの茶目が出たのね。やつと、いまごろにね。

おつや。（手を退ける。）ぢあ、開けておあげしますわ。（戸が開く、白々と寸餘の雪が溝をひとすぢ黑くした外に續いてゐる。）

客。どうもありがとう。や、雪がだいぶつもつてゐる。

おつや。（もはや平常のやうになり表へ出て、）いまごろの雪だから、すぐ消えますわ。

客。ぢあ、さよなら。（帽子を脱り早足になり行く。）

おつや。さよなら。

（暫らく客を見送る。間もなく家の中に入り火鉢のわきに坐り、手を火に翳しながら一とところを見入りながら茫然としてゐる。むしろ名狀しがたい放心的な物佗びた姿。しかし刻々に何かを考へ當てるため鋭どい姿になる。間もなく縫ひものを始める。やや暫らくして母親の聲がする。）

母。（睡いこゑで。）つい、うとうととしてゐたが、誰か來てゐたやうぢやないか。それとも夢を見たのか知ら。信二はまだかへらない？――。

おつや。（齒ぎれよく。）誰も來はしないんですの。

母。（べつに疑はずに。）さうかい、ぢあ、わたし一と足さきに二階でねますよ、信三は最うかへる時分だし……

おつや。（立ちかけて二階へ行きながら。）どうぞ、――ぢあ、お床があつたまつてゐるかどうか見て來ませう、先刻、安火に火を入れて置いたんですけれど。

母。大丈夫溫かくなつてゐるでせう。（母親出て來る。長火鉢のところで老人らしく淋しげに煙草を吸ふ。あくびを一つする。）

おつや。（二階から下りて來て。）いゝ工合にほかほかしてゐますよ。みかんをいつものやうに枕もとに置いてをきました。こんどのは甘いんですよ。

母。ありがたう。夜中に目がさめると何も考へることがないもんだから、妙に口淋しい癖がついてしまつてね、年とると矢張り口ぎたなくなる一方だよ、ほんとに氣をつけてくれてありがたう。子供の時分はそんな子ぢやなかつたんだけれど。

おつや。亭主をもつてから違ふとおつしやるの。いやなお母さん。

母。（しみじみと胸にあるやうに。）すぐお前はさう言ふけれど、そりやお前の變り方つてものは大へんなものだよ、しかしどこか他人行儀めいたところが出てくるのだけはいやだけれど……しかしよく氣をつけてくれるから感心だよ。

おつや。（微笑ひながら併しきつかりと、またいくらか優しく命令的に。）おやすみなさい。

母。（ほくほくと。）ねますとも、――お前も床に這入るといゝ。（階段を上る。）信三には何か溫かいものを拵へておやり。

おつや。ええ、——でも外で何か食べてかへるでせうから。

(子供泣く、おつや暖簾のうちに入り、添え乳をしてゐるらしく低い子守うたをうたふ。美しい聲。「ねんねお山のねむのはな、ねむのはな咲きやねんね山、ねんねお山の……」しづかにまたうたをつゞける。)——(信三歸る。外套の雪を拂ひながら茶の間の上り口に置く。そして茶の間をひと眺めして、暖簾の内を見る。

おつや。おかへりなさいまし。そとは寒かつたでせう。

信三。このごろの雪はあつたかいよ。それに急いで歩くものだから、——(靴を脱ぐ。)

おつや。(暖簾の内から。)ごはんはおあがりになつたんですか。

信三。あ、濟んだ、お母さんは?——

おつや。いまし方まで起きてゐしつたんだけれど……

信三。さう、誰も來なかつたかい。(信三、煙草に火を點ける。)

おつや。(やや間を置いて。)珍らしいお客さまがありました。

信三。(長火鉢の吸殼をのぞき込みながら。)吸口をつけないでバットを吸ふお客さまだね、へえ、誰か知ら、はいから
な男らしいな。

おつや。狄島さんですよ。

信三。狄島——聞いたことがあるやうだが、さう、さう、狄島庄平のことかい。

おつや。ええ。

信三。あの男が晩に來るなんて、——(信三やや不愉快げな聲になる。)お母さんが此間會つたとか言つたが、僕も一度

くらゐ會つてをけばよかつた。何しろ名前ばかりで一度もお目にかかつたことがないのだからな。それにお前の好きなひとだと言ふんだから。
おつや。（默つてゐる。）
信三。まだ、こちらにゐるやうに言つてゐたかね。
おつや。一二三日中にお發ちになるやうに言つてゐらつしやいました。」
信三。おいとま乞ひかね。
おつや。そんなおつもりだつたのかも知れません。
信三。お母さんは起きてゐたのかい。
おつや。いゝえ。
信三。おやすみになつてから？――。
おつや。ええ。（暖簾の内から胸を搔き合せながら出てくる。）でも、わたし默つてゐましたの。
信三。なぜ、
おつや。べつに深い意味はなかつたんですけれど……お茶をいれませうか。
信三。（不愉快をまぎらせながら。）いらない。しかし何だつて荻島はいまどきになつて遣つて來たんだらう。
おつや。（平氣で。）しばらく會はないつて言ふんで入らして下すつたのよ、べつに何も他に意味もない……
信三。（刺立つて、）意味もない……
おつや。でも十二三年も入らつしやらなかつたんですもの、もともと、荻島さんとは親類同樣なんですし……これまで

もこちらへ入らつしたことはあつたんでせうけれど、あなたに遠慮して入らつしやらなかつたんでせう。
信三。さうか。べつに遠慮なんかしなくともいゝんだがね。とにかく僕は、ばかに睡いんだ。
おつや。床はあつたまつてゐますから、おやすみなさい。
信三。(立上りながら上着を脫ぐ。)古い男なんかが訪ねて來ても、大がいの場合は默つてゐる方がいいよ、正直もいゝ加減な年にはそんなに必要でないから。
おつや。(胴衣を手に取り默つてゐる。)……。
信三。へいぜいから見ると少し元氣らしいね、狄島が來たせいかな。
おつや。(やつと微笑ひながら。)さうかも知れません。
信三。(少し覗き込むやうにして笑ふ。)お前にもまだそんなしほらしい氣があるなんて、ちよつと可愛らしい氣がするよ。
おつや。　さうでせうか。
信三。さうとも、咎めるよりもしほらしさが先きに立つよ。
おつや。(考へ込む。)さうね、わたし自身でもそんな氣がしますわ。それはさうと何か召しあがりませんか、何か溫かいものでも――――。
信三。(先刻とは別な調子で。)何か食べるかな。(打解けて、)まだ實は飯前なんだよ。
おつや。(びつくりして。)まあ、さうならさうと早くお仰ればいいのに。なにかこさへませう。
信三。腹の足しになれば何んだつていいんだよ。

おつや。（いそいそと襷がけになり勝手へ行きながら振りかへり思ひなほして）ちやんと御馳走してあげますよ、通りまで行つて來ますから……

信三。傘なしぢや寒いよ、だいぶ雪がつもつたから。

おつや。（袖を胸に掻き合せ。）大丈夫ですわ。すこしくらゐの雪は？——（しとみの外へ出て。）まあ、たいへんな雪よ、足駄が沈むくらゐなんですもの。いつの間にこんなに降つたのか知ら？——

信三。（長火鉢にもたれ何か考へ込みながら佗びしげに言ふ。）もう、そんなにつもつたかな。

おつや。（やや遠いこえで。）すぐに來ますから。

（信三、長火鉢にかかんでゐる。何の音もない、——物憂いけはいで時計が十一時を打つ。信三、思ひ出したやうに時計のねぢをかけ氣がついて暖簾の内をのぞき込んで止める。）——（しばらくしておつやが歸つて來たらしく雪を拂ふけはひがする。しとみ戸が開く。）

おつや。（寒さうに袖を合せ。）大へんな雪ですよ。どうして今じぶんこんなに降るのか知ら？ 道路は歩けないくらゐなんですもの。

信三。さくらの咲く時分にもよく降ることがあるよ、ことに去年はつぐみの巣がだいぶ高いところにあつたつて山のものが言つてゐたから、まだ今年はこれくらゐでは濟むまいよ。

おつや。（皮包の草餅を出す……）ぢあ、つぐみの巣が木の下の方にあつたら、その年はふらないんですか。

信三。山のものはみんなさう言つてゐる。小鳥なんてやつは悧巧だからな。雪のよけいに降る年は高いところに巣かけへするなんて、よく考へたものさ。

おつや。（感心して。）さうね。悧巧なんですね。——おひとつ、いかが。

信三。（つまんで頬張る。）だが、また皮包みを押入れへ投り込んで、あとにお母さんに見つけられるとこまるよ。いつだつたかも叱られたぢやないか。

おつや。（微笑ひ出して。）まだ一しよになりたてでございましたね。でも、あんときはお母さんに隠しておいたから、わるかつたんですよ。朝にでも氣をつけてをけば皮包を見つけられはしなかつたんですけれど……。

信三。（低いこゑで。）でもお母さんもこのごろはよくなつたやうだね。以前のやうにやきもちを焼かなくなつたからね。

おつや。（思ひめぐらす。）ええ、さうよ、ほんとによくなつたのね。けれどもあの時分はおもしろかつたやうな氣がしますわ。張り合ひがあるやうで今よりかいいやうな氣がするわ。

信三。ぢあ、いまはおもしろくないといふのかい。（微笑ふ。）

おつや。（さびしく笑ひ。）おもしろくもおかしくもないのね。なんだかあんまり静かすぎるやうです。

信三。（平静な戯談らしく。）お前もさう思ふのかい。ぢあ、せつかく猿島君にでも來てもらつた方が心氣になつていいぢあないか。

おつや。（頭をふつて見せる。）それも最う駄目。

信三。（顔を覗き込んで。悪氣なしに。）なぜ？——。

おつや。（事もないやうすで之加も懐しげに。）何んとも思はないんですもの。あの方がおかへりになつてしまつて、あなたとかうしてお話してゐると、何んにも入らつしやらなかつた前のやうな氣がするんですもの。ほんとうよ。これ

だけはふしぎなやうね。

信三。（さういふこともあるかと感じ入り。）さうかな。そんな氣になつてゆくものかな。

おつや。（しばらく考へ込んでゐる。ややあつて。）男のひともやはりさうなんでせうねきつと。それともちがつてゐますか知ら？

信三。（苦笑ひしながらすぐにまじめになる。）そんな簡單なわけにはゆかないよ。しかし結局はさうもなるがね。（考へ直して。）やはりさうなるかな。しかしどこか女とちがつてゐるところがあるよ。説明しにくいところがあるがね。

おつや。（ふと何かを考へ出し別にかうでいせずに。）このごろおあひになりまして？――。

信三。（にがひ顏をする。）しばらくあはないよ。そんなひまなんて今のところないからな。あんなひことはお前もよく知つてゐるぢやないか。べつにあひたくもないんだよ。

おつや。（きふに美しい眼をする。）わたしその方と一ぺんあひたいと思つてゐるの。どんなひとですかしら。

信三。つまらないしやうばひ人だよ。あはない方がいいのさ。

おつや。（あつさりと無垢に。）さうでせうか。

信三。さうさ。おれはちやんと此處のうちにゐるんだからね。ね、おい。ふさいでゐるわけぢやないね。

おつや。（まじめな顏つきではつきりと。）いいえ、そんなこと氣になんかかけてゐないのよ。ただふいに思ひ出したからおたづねしたの。

信三。（安心して。）さうかい。それならそれでいいが……。

（ふたりとも默つて坐つてゐる。表に雪を拂ふ音がはたはたとする。ふたり目を表にそそぐ。）

おつや。出前持がきたやうね。
信三。ちよつと出ておやり。雪でたいへんだらうから。溝に橋板がとれてゐたから氣をつけないと危ないぜ。
おつや。ええ、氣をつけてやるわ。
(おつや、しとみ戸をあけに出る。信三、たばこをふかし長火鉢にもたれ表を見てゐる。)
おつや。(やや遠いびつくりしたやうな聲音で。——)あぶないわ。どうしたの、重のものを下におおきなさいよ。まあ、あんたみたいな子供にそんな重いものを持つて出させるなんてね、……すこし考へなしの御主人ね。
出前持ち。(かじかんだこゑで。)なにかまはないんです。これくらゐの雪なんか……。
おつや。ぢや、わたしそれを持つてあげるわ。指さきが凍ぢかんでゐるぢやないかね。
出前持ち。なに、かまはないんです。なれてゐますから。
おつや。明日の朝取りにきてくださいな。今晩はもうおそいから。
出前持ち。さよなら。
(信三、表の聲に氣を取られてゐる。しとみの開いたところから雪が吹き込んでくる。……信三、もの侘びしげにあくびを一つする。)
おつや。(出前の箱をさげながら。)まだ十二三の子供なんですよ。可哀さうに。
信三。さうかい。しかし仕方がないよ。いちいちそんなものを哀れんでゐては、こちらで可哀さうな氣もちの種切れになるわけだから——。
おつや。(皿、小鉢をならべ、勝手から酒徳利を持つて來て燗をする。)わたしけふ森島さんとお話をしてゐて、あの方もお

話がなくなつてゐらつしやるのを見てゐたら、なんだか氣の毒な氣がしましたの。

信三。（こともなく。）それで二人で默つてゐたのかい。

おつや。ええ、對ひ合つてぼんやりしてゐましたの。でも、なにもお話することがないんですもの。

信三。その默つてゐる間がいいんだよ。言はばその間に兩方で考へてゐるものがおやすくないのさ。

おつや。なんだか息づまりさうな氣がしてくるんですもの。わたし、ほんたうは早くおかへりになつてくだされぱいいと考へたくらゐですわ。ちよつとしたやけな氣になつてしまひましてね。

信三。（鋭い或る思わくに衝き當つて。）お前の考へてゐることは矢張り荻島をきらひでない證據だよ。お前は平氣ないやうに見えてそれで左うでないんだからな。

おつや。（銚子の酒をつぐ。信三、それを飲む。）さうですかしらわたし、あの方と七八つくらゐの時分からのおともだちですからね。

信三。（何か考へ。）そんな友だちといふものは、ばあさんになつても、よく思ひ出すことがあるものださうだよ。——荻島の手紙はまだお前持つてゐた筈だね。あれをちよつと見せないか。

おつや。（平氣で好意を交ぜ。）ええ、お見せしてもようございます。けれども、既ういぢめるのはよしてちようだい。

信三。（盃をあけ。）わかつた。いぢめはしない。

おつや。とにかく寢みませうか。（美しい目をする。）

信三。（立上りながら天井を見て。）明り取りがまだ開いてゐるぢやないか。道理でひやひやすると思つた。（土間へ下りて繩を引く。）雪の重みがのしかかつてゐるね。開かない。

おつや。（天井を見る。蒼白い雪あかりが顔へ落ちる。）ぐつと引いてごらんなさいさましな。

信三。（ちからを込め。）これでいいかい。（明り取りの戸、閉づ。同時に雪のかたまりが土間へ落ちる。）そとが明るいが月夜だね。

おつや。え、さうかも知れません。

（おつや。皿や小鉢のあと始末をする。消炭の壺に炭火を消す。信三、厠へ立つて行く。）

信三。だいぶ寒いな。寝ることにするかな……。

おつや。お床がすつかりあつたまつてゐるでせうよ。そつとしてゐてください。いまよく寝てゐるんですから。目をさますとこまりますから。

信三。（暖簾の内へ這入り。）よく寝込んでゐるね。（間―。）熱もなささうだ。電燈（あかり）は點けないのか。

おつや。（覗き込んで。）だいぢやうぶ目をさまさないでせようから、つけて下さいな。

（電燈點く。暖簾の片しぼりにされたところから、炬燵の艶めいたふとんが見える。子供の寝床及びたんすのわきに人形などがある。）

信三。やはり女の子といふものはどこか寝てゐても可哀いいものだね。兄キの方はおとなみたいな顔をしてゐる………

おつや。（鏡臺のそばで髪に手をやり夜更の鏡の底をのぞき込む。）ええ、あの子は血色がいいし兄よりも綺倆がようございますからね。――おねまきはあつためてあるんです………（顔料の瓶から二三滴掌に垂らし顔にさつとさすり。）いますぐ參りますわ。（しばらくそのまゝに音もない。おつやの二の腕するどく夜更けの鏡の前でうごいてゐる。）

――幕――



戯曲

正直直次郎（一幕）

里見弴

時。――天保年間

人。――片岡直次郎
三千歳
寮番の女房
新　造
金子市之丞

場。――入谷村なる大口屋の寮。

正面、廣からず且また粗末な感じの一間。床の間などもない方がよし。普段はあまり使つてゐないらしく、人氣なげに、寒げに見ゆ。下手よりに、一間の襖で出入口。廻り椽、上手奥の突當りは板戸の開き。それよりなほ上手へ一奥

の間」の羽目を見せ　袖垣、植込など、庭さきの模様よろしくあり。下手に庭木戸。飛石は、正面の一間を無視して　すぐに上手袖垣を廻り、「奥の間」へ通ずるこゝろ。

(金子市之丞、庭木戸のそとに立つてゐる。寡默な、愛想ツ氣のなささうな人物。寮番の女房、「たゞ今」とか、「たゞ今すぐにあけます」とか、捨臺詞のうちに、木戸の門をガタ／＼云はせ、奥の間を案じるこなし。ほどなく扉を開く。)

女房。お待たせ申しました相濟みません。さアどうぞ……。

(金子、應揚に、輕く會釋してはいる　女房は、手早くあとを閉し、小走りに案内する。)

同行。いつまでもお寒いことで御座います。

金子。さうですね。

女房。昨夜からはまた、殊更身にしみますが、そのせいでか、今日は頭痛がすると仰有つて、今しがたまでお床のなかにいらつしやつたのですけれど……。(聲を張つて奥の間へ)ようござんすか。もう片づきましたか。

金子。わたしへの遠慮なら、要らないことだから、そのまゝ横になつてゐればいゝのに……。

女房。いゝえ、もう……。(奥の間へ)およろしいんですね。お通し申しますよ。(陰の聲、「さアどうぞ」と答へるにつれて、女房、金子に會釋し、先に立つて袖垣を廻り、はいる。

と同時に板戸の開きがあいて、するりと直次郎が出る。いつもの拵への、絆纏の代りに、華美な廣袖をはをつてゐる。動作は機敏でも、慌てふためいてゐるやうに見えてはいけない。庭から、奥の間の方を見込むやうな科は

最いけない。緊張して、然し落ちついて、さつさと正面の部屋へはいればいゝ。續いて、新造が、直次郎の絆纒を擁へて出る。この方は、騒々しくならない程度で、十分慌てゝゐる心持を見せなければいけない。絆纒を置いてひそめた聲で、

新造。たゞ今すぐお火を……。

（何か云ひかける直次郎の言葉を待たずに、一旦正面出入口に消え、座蒲團を持つて出ると、がらんとした部屋の眞中あたりに敷き、大急ぎですぐまたはいる。

直次郎、置き物のやうに、ぽつんとその上に坐る。間のぬけた姿ゆゑ、見物は笑ふかも知れないが、そこで緊張を緩め、寒さうな科などをしてはいけない。生野暮に、ちつと考へ込んでゐなければいけない。

新造が火鉢を運んで來る。直次郎、すぐには手も出さず、なほ考へ込んでゐる。新造、何か慰めるやうなことでも云ひたさうにしながら、相手の樣子にそれも出ず、ついで來たばかりの火を直したり、暫くもじ／＼してゐてから、立つて行かうとする。續いて直次郎も立ちあがる。）

新造。あら？

直次郎。歸らう。

（廣袖をぬぎ、絆纒をはをる。新造、小走りに駈け戻つて來て、ことさら耳に口をよせ、いろ／＼云つて止めることなし。內々おかぼれしてゐるので、こんな時にでも……、と云つた氣持で、必要以上にそばへよつて、親切らしい言葉を囁いたり、ちよいと胸に手をかけたりするのが、ひどく嬉しさうに見えなければいけない。

直次郎も無論たつて歸りたくつて歸らうと云ふのではないし、いやにべた／＼くつついて來られるのにも、少し

く辟易の態で、そのまゝまたもとの座につく。新造は、いそ〱と、奥へはいる。

廣袖が絆纏になり、火鉢が來て、少しは形がついて來たけれど、まだ十分に居心地惡く、間ぬけじみて見えなければいけない。この感じは、後に膳が來、酒が出ても、なほ續かなければいけない。それでゐて、主役が、この感じに打克たれて、てれくさく見えるやうな、いつものイージーゴーイングな直次郎になつて了ふのでは、この芝居は滅茶々々である。だん〱生野暮な眞面目さに、見物を引つ張り込んで了ふ力があつてほしい。

直次郎は、兩手を火鉢の緣に置いて、そろ〱青い焔をあげ始めた炭火を見詰めてゐる。心持のしまつてゐることが、自然形をキチンとさせる。

奥の間から、金子の、もの靜な男の聲が、何を云つてゐるのか解らない程度で、ボソ〱と聞えて來る。無表情な三千歳の聲も時折洩れる。が、大體二人とも言葉少なである。そして、その間が、少くも不穩な感じを齎すやうなものではなく、日常茶飯的な落つきで、長閑に聞えなければならない。

直次郎が、そつちへ耳を持つて行かれてはいけない。さうかと云つて、聞くまいとする努力などが見えてもいけない。自然聞えては來るけれど、そんなことでは、少しも氣が散らされないほど、考へごとがしつかりしたものと見えるやうでなければいけない。――この間は、役者次第で、もてさへすれば、永いほどいゝ。

新造が、二品三品の皿小鉢と銚子とを載せた膳を持つて出る。

新造。御免ください。(ト、膳の上から、袴ごと銚子を取りおろして、)から云ふ不精なまねをして……。

(すぐ酌をしやうとする。直次郎、靜に盃を取りあげ、なほ考へ込んだまゝつがせ、一口に飲む。新造、もう一杯ついで、さて何か話かけようとするところに、「ごめん」と襖のそとから聲をかけて、宿の女房がはいつて來、新

造の耳もとに、何やら二言三言さゝやく。新造は、聞きから、奥の間の方へ行く。」

女房。お寒う御座いますから……。(ト、銚子を取りあげる。)

直次郎。へ。(ト、うけ、すぐ飲んでさす。)

女房。わたくし？晝間つから……。

直次郎。まア、いゝでせう。(酌をする。)

女房。(持ちあげて少ししかつがせなかつた盃へ、ちよいと唇をつけたばかりで下に置き、なんとなく目をそとへやる。)

なんですかまたしぐれて來ましたのね。

直次郎。(簷端から空を仰いで、)また雪にならなきアいゝが……。

女房。さ、どうでせう。悪くすると、もう一遍くらゐちらつくのかも知れませんわね。(盃をあけて返しながら、)お盃洗なしで……。

直次郎。いゝえ、(ト、うけて、)雪も、降つてるうちはいゝけど、あと、いつまでも道がぬかるんで……。

女房。えゝ、ほんとうに。うちの人なんぞ、しよツちう出歩いてばかりゐるもんですから、――それに、歩きやうが下手だとみえましてね、少し道が悪くつても、それアもう背なかのうへーの方まではねをあげて歸つて來るんですよ。足駄なんぞ、貴方、も、まるで泥ばツかり！……いゝえね、それにあの通りの醉ツぱらひでせう？ 歩きやうが下手なばかりぢアないんですわ。ぬかるみだつて、なんだつてお構ひなしに、きつとボチヤン／＼やつて歸つて來るんでせうよ。それアね、いつもあと始末で、ほんとうに一骨折りますわ。でも、そんなことは、貴方、御自分様は一向お構ひなしですからね、うちへ轉げ込むが早いか、大の字なりになつて、グー／＼云つてねちま

うんですのよ。ほんとうに、あんな困つた人ツたら……。それになんでせう……。

(このお喋り、役者次第にて、もてさへすれば、この先なほ可なり永く續いても差支なし。要するに、話上手にて、それからそれへとノンセンスに等しいお喋りを續けて行く、都會育ちの四十女にありがちな、あの特色を發揮するもの。但しこの場合としては、その習慣も習慣なれど、一つには、多少ともきまり悪く、面白くもなからうと思はれる直次郎の臍した氣持を、なんとかはぐらかしてアはふと云ふ、親切なたくらみもあつてのこと故、話題はなるべく面白可笑しく、話方は、身ぶり手ぶりで、大袈裟に、嫖輕に、一生懸命なだけ、そこに多少不自然なところが見え、この人のいつものお喋りほどにはいつてゐない、と云つた具合でなければいけない。

この間の直次郎もちよつとむづかしい。話に引き込まれていけず、さうかと云つて、不愛想に、ぽかんとほかのこと考へてゐるのでもなく、相手が親切でやつてゐてくれるお喋りだといふことは、十分察してもゐるし、その好意は嬉しくもうけてゐるのだが、もと〳〵さう面白からう筈のない話を、無理にも面白がつて聞いてゐるやうな顏をするほど輕薄ではないのだから、始終たゞ穏た笑顏で、靜に領き返してゐるくらゐがよいところだらう。

肝心なのは、そのやや間のぬけた、馬鹿げた様子に、暖く相手を包み込んでゐる大さが見えることだ。年上の、お喋りな女にまくし立てられて、いゝ潮合を見計らつて打切りも出來ず、始末に困つてゐるやうに見えてはいけない。このお喋りの間に、先刻新造がしめ損つて行つた板戸が、さう強くない風で、間をおいて、三四度、バタン〳〵輕くあほる。それが、女房よりさきに、直次郎の耳にはいつてゐなければいけない。然し、決して振り向かずに、背なかが氣にしてゐる。五度目かそこらに、やつと女房も氣がついて、喋り續けながら立つて行つて、カタンと棧をかふ。そのうしろ向きの立姿のまゝ、ふと言葉尻が消えて行つて、耳が奥間へ行つてゐる。

相變らず無表情の女の話し聲が、靜に幽に洩れて來る。と、すぐまた女房は「……ですから、それアもう、全くなんですよ……」と云ふやうな、一つも意味をなさない言葉で、前の話の尻へ、無理に、然し手際よく新しい話をすげ込みながら、もとの席へ戻つて來る。その時、直次郎が手酌でつがうとしてゐる銚子の尻が大分もちあがるのに氣がつき、）

女房。あら、どうもすみません。うつかり喋り込んでしまつて。……。すぐ持つて來ますから……。

（ト、そのまゝ襖の出入口からはいる。直次郎、食ひものに箸をつける。間きをあけて、三千歳が、靜な、落ちついた足どりではいつて來る。直次郎、見返る。）

三千歳。ひとり？

直次郎。たつた今までお神さんが來てゐたんだけれど……

三千歳。さう？

（ト、そばに坐り、持つて來た草双紙を默つてそこに置いてから、膳の上を見て、ちよつと佗しげな顔をする。）

同　右。あら、隨分なんにもないのね。

直次郎。何しろ腹がペコ〳〵だ。……あつちも御飯かい？

三千歳。いゝえ、お晝飯をすましていらつしやつたんですつて。ですからあたしも、たつた今すんだとこだつて云つて……。いつの間にかお午すぎちやつてたのね。（微笑。）

直次郎。日射がないんで、まるつきり刻限が知れなかつたが、どうれでひどく腹がすいたと思つた。

三千歳。でも、もうぢきですから、先に一人で御飯を食べちまつちアいやよ。

直次郎。今お銚子の代りを取りに行つてゐるんだが、まるツきり底がはいつてないんで、たつた一本でこの通りだ。

（ト、顏を撫でる。）

三千歳。まだ、なんともありアしませんよ。……いつだつて半時と落ちついてゐたことのない人なんだから、……着物を表に廻して、歸りはあつちから出て貰ひますから、貴方は、こゝでゆつくりあがつててくださいね。

直次郎。いや、俺アもう飯にして貰つて、今日はこれで歸らうよ。

三千歳。なぜ？。

直次郎。なぜつてこともないが、また二三日うちに出直して來よう。

三千歳。一人ツぽつちにして置いて、寂しいでせうけれど、もう暫だから辛抱してゐてね。少し聞いて貰ひたいこともあるんだし……。

直次郎。話は俺の方にもあるけれど、云つたところで、つまりは愚痴かも知れない……。

（足音を聞いて、三千歳は立ちあがりながら、）

三千歳。ぢア、ほんとに歸つちまつちアいやですよ。きつと待つてゝおくださいね。

（ト、念を押しながら、急ぎ足に開戸へはいる。

女房、銚子を持つて出る。

直次郎、今度は少しばかり恥しい氣持で、無意識に草双紙を取りあげ、棒に卷いて、片手の掌を輕く叩いてゐる

女房は、氣勢で三千歳の來たことを察しながら、敢てそれには觸ずに、）

女房。どうもお待遠樣でした。

（ト、酌をして、それからまたぼつ〳〵お喋りにかゝる。今度は、直次郎の氣持が、前よりも一層寂しく、暗くされてゐる樣子なので、次のやうな話を始める。（これを臺詞で書くと、くだくだしく、あまり長くなるから、こゝには故意と意味だけ述べて置く。））
まづ、前の日深川の不動へ詣つて來た話をする。それから「信心と云つたところで……」と云ふ風な冒頭で、神佛を馬鹿にした樣なことを云ひ、自分のお詣りも、深川が懷しいからだ、と、暗にその土地にいつでも住んでゐるらしい口吻で、遠廻しにのろける。若々しく、陽氣らしくそんな話へ持つて行く裏の心は、現在ちやんとした亭主をもつてゐる自分でさへ、蔭へ廻ればこのくらゐの秘密はもつてゐるのだから、まして貴方がたのしてゐることなんぞは、當り前も當り前大威張でゐるがいゝ、なんのこれしきの義合に、ちつともしよげることはないではないか、と云つたやうな、はたから勇氣をつける意味が十分に汲み取れるのだ。
この話のうちに、直次郎はいよ〳〵陰鬱になつて來る。仕舞には、火鉢の火に目を落して、ぢつと考へ込んで了ひ、時々氣がついて、ほんのお義理に笑顏を向けて頷いてみせたりしてゐる。相應利口な女ゆゑ、それにもすぐ氣がついてゐるのだが、乘りかゝつた舟で、女房は、自分のお喋りに、止むなく自分が引き摺られて行く態。暫くして、奥の物音、氣勢に心づき、）

女房、あら、お歸りらしいわ。

（ト、これをしほに立つてはいる。
直次郎も、ぢつとひとつところを見詰めたまゝ、奥の物音に耳を澄ましてゐる。
三千歳、新造を從へて、正面の襖から出る。喜色、おのづと面上に踊る意氣があつてほしい。）

三千歳。あつちへ行かない？

直次郎。（不愛想なほどに、）いゝぢやないか、こゝでも。

三千歳。でも、なんだか落つかないでせう？

新造。ぢア、おこたをこつちへ持つて參りませうか。

三千歳。えゝ、さうして頂戴。

（新造、寮番の女房に手傳はせて、炬燵、座布團、その他調度いろ〳〵運び込み、この部屋の空氣が一變する。この、調度の持ち運びは、捨臺詞のうちに、出來るだけ短時間に、手順よく成し終ること、また、新造が立つて行つたあとには、女房、女房のゐない時には新造と、どつちか一人は必ず舞臺にゐて、三千歳の注意の半分以上はそつちへ向けられ、直次郎との間には、一言の受け渡しもない方がいゝ。つまり、そこに、構はず落つかない、寧ろ騷々しい空氣を醸し立てゝ置いて、總てが片づき、二人がさがつて行つたあとを、汐が引いて行つたやうにじつくりと締めたい。）

（尤も、劇場の構造によつては、二杯飾り込み、廻して、奥の間に變つてもよし。その場合注意を要するのは、金子が歸つたばかりのあとへはいる、といふことに、多少とも拘泥(こだは)つた氣持を、直次郎を演じる役者がもたねばならぬことだ。）

三千歳。（寛めてほツとしたやうに、炬燵に手を入れながら、しみ〴〵と男の顔を眺めて、）寂しかつた？

直次郎。（なほ浮かない顔で、）うん。

三千歳。何をそんなに考へ込んでるの？

直次郎。いろ〳〵考へた。……考へるといふことは、決して悪るいことぢアないよ。

三千歳。どんなことを考へてたの？

直次郎。云ふとやきもちじみるが、まア差當つて今日のことさ。

三千歳。……ほんとにすみません。

直次郎。ちつともあやまられるところはないけれど、………一體、貴方にしてもあたしにしても、悪いことをしてゐると云ふ氣持は、これンばかりだつてありやアしない。ね、さうだらう？

三千歳。（何を云ひだすのか解せぬ面持で、）………え………。

直次郎。世間の口なんざアどうでもいゝ。金子さんに對しても、………天地神明に對しても、ちつとだつて疚しい氣持なんぞありやしまい？

三千歳。（ぢツと男の眼のなかを見詰めたまゝ、微に頷き返すのみ。）

直次郎。それだのに、俺は、兎に角身を隠したんだ。逃げたんだ。………それア、あの咄嗟の場合にだつて、俺はちつとも騒いだり慌てたり、……自慢ぢアないが、そんな氣持は微塵もありやアしなかつた。よしんば、ねごみに踏ン込まれて、たゝツ斬られやうとも、びくともしやアしない。お前さんのため、……ためなら當り前だが、たゞお前さんのことでだつて、いつ何時、どこでどう云ふ非常の最期を遂げやうと、俺アちつとも悔みやアしない。その氣持は、お前さんだつて、少しも疑りはないと思つてるんだ。

三千歳。え〻、あたしはたゞ貴方が生きてさへゐてくだされはいゝの。貴方が死んだら、あたし、すぐ死んで了うわ。……え〻、わけなく死んじまうわ。

直次郎。さうだらう？　それだのに、金子さんが來たと聞くと、いくら氣持は平氣だと云つたつて、兎に角俺は逃げ隱れするんだから……。

三千歳。それは、貴方が、あたしへの遠慮から……。

直次郎。うん、さう云ふ時代も慥にあつた。然し、この頃はさうぢやないよ。貴方が、あたしのために金子さんをしくじつたつて……。

三千歳。えゝ、そんなこと、あたしだつて、ちつとも氣にかけてやアしません。たゞあたしは……、あたしの氣持つて、ほんとにへんですわね、……あの人が、なんにも知らずに、一生懸命あたしを可愛がつてゝくださる、その、まるで子供みたいな……でなければ、夢みたいな氣持を、あたしの呼び醒す聲で、はツと吃驚させるのが……。

直次郎。それもよく解つてる。解つてるどころぢアない、さう云ふ女らしい、優しい性分も、あたしは大好きだし、あたし自身だつて、金子さんに對して、どれほど好意をもつてゐるか、ちよつと貴方にだつて想像がつかないくらゐかも知れない。

三千歳。えゝ、知つてますわ。

直次郎。然し、ほんとのことを云ふと、あたしと金子さんとのやうな關係で、一方が一方に好意をもつツてことは、大へんな侮辱を與へてゐることだからね。……さうぢやないか、戀仇だもの、お互に憎み合つてこそ五分々々の相手だけれど、氣の毒なもんだ、と思はれるなんて、これ以上の侮辱はありやアしない。だから、今まであたしは、金子さんに同情してゐることを、貴方にだつて成可く云はないやうにしてゐたんだ。然し、だん／＼俺に好意を

もたれるやうなことになつたのは、露骨に云へば、金子さんの責任さ。……俺が、額に青筋を立てゝ、あの金子のやつが、つて調子でものを云ふやうなら、あの人も立派なんだけれど、俺にさんづけで呼ばれるんぢやア、實際俺としても賴母しくないよ。さう云つちやアあんまりひどいが、正直なところ、力の入れやうがなくつて、却つて始末が惡いんだよ。

三千歳。ほんとにさうねえ。

直次郎。誰に疚しいところもない俺が、つひ逃げ隱れしなけれアならないと云ふのも、一つはそのへんてこな同情から來てゐるんだね。だが、人はさうは思はない。……人の思はくなんざアどうでもいゝやうなもんだけれど、誰だつて、男なら大抵まア、直次郎つてやつは、呆れた圖々しいやつだ、隣座敷に金子が來てゐるのに、平氣の平佐で酒を飮んでやアがる、つて云ふ風な見方をするだらうし、女なら、まアいけすかない、どうでせう、あの、色男のお札はこれから出ます、つて云ふやうな、ひとりで納り返つてる樣子ッたら！ きざだわねえ、とても見ちアゐられないわねえ、つてやうなもんだらう。……さうかと思ふと、喜兵衛の神さんなんぞは、俺が氣を腐らしてゐるとでも思つてか、なんのかんの慰めてくれるんだ。それも、ぢかの話はこれんばかりもしないで、遠廻しも遠廻し、大廻りに廻して來て、仕舞にやア、深川とやら、本所とやらに、自分のいろでもあるやうなことまで仄かして、暗に俺たちの氣持をいたはつてくれるんだ。その好意は、決して仇には思はないけれど、……つまり、それ、今の話だ、俺が金子を、さん附けで呼ぶのとおんなじことで、そんな同情は有難迷惑だ。憚りながら、俺たちの氣持は、同情されたりいたはられたりして、それでやつとのことに芽を出すやうな、そんな室育ちぢアねえんだ、とでも云つてやりてえくらゐなもんだつたけれど、おかげで、俺もまアだん／＼そんなことぢア氣持が

動かされなくなつて來たよ。ちつと一人で考へると、何もかも、鏡に映し取つて見るやうに、はつきり解つて、結局穏な好意をもつよりほかはなくなるんだ。……我ながら、あんまり分別くさくつて、擽つてえやうな氣がするくらゐさ。

三千歳。でもね、あたし、この頃、その分別と云ふものを、それァ荷厄介にしてゐるんですのよ。人みたいに、なんでも自分の云ひたいことや爲たいことが、あとさき見ずに、どん／＼云つたり爲たり出來たら、どんなにいゝか知れないと思つて……。

直次郎。ところが、それはさうは行かないやね。性分なり、今まで經て來た境遇なりで、一旦分別がついて了つたら、今度はまた、容易なことで、そのあとさき見ずつて云ふやつが出來るもんぢァないやね。……實は、先刻ッから俺もそれを考へてたんだが、この頃の俺たちの仲なんてものは、世間で謂ふ、いろだ戀だとは よつぽどわけの違つたものになつて來て、いやに分別くさくいぢけちまつたと思ふんだよ。それでね、二人の男が一人の女を好きになつた場合の、一番無分別な處置を考へてみたんだ。つまり、一番直情的な、簡單なやり方をしたのは、原始時代の人間に違ひないんだが、それァもう云はないでも知れたことで、力づくだ、腕力次第と云ふやつだ。それァそれでもいゝんだ。場合によつちァ、俺から金子に、果し狀をつけないものでもないが、然し、腕づくとなると、大抵はまァ強い者が勝つのが順だ。どつちが餘計本氣で惚れてゐるか、その眞劍さも、幾分關係しないことはなからうけれど、どうも矢つ張り強いやつの方が勝つ率が多いに違ひない。それくらゐなら、まだしもジヤン拳の方がましなくらゐで、好きさ加減の多い少いとは無關係なんだから。一向くだらない話だと思ふんだ。看貫みたいな機械で、心臟でも摑み出して載つけてみると、本氣の度合が、きちんと目盛に表はれて來るやうなものでもあれ

ば女別、どうもこいつばかりは、いかに水野様でも大岡様でも、はたから黒い白いはきめられないんだし、もしきめられたとすれば、誰だつて、惱つちまうだらうし……。

三千歳。身勝手なことを云ふやうですけれど、それが一番はつきり解るのは、相手の女だと思ふわ。

直次郎。それやまア、他人の眼よりはいくらか慥かにやア違ひないけれど、それだつて人間だからね、絶對に公平たア云へないさ。

三千歳。それやさうね。（眞面目くさつて巫山戯る。）公平に云つたら、貴方なんぞより、よつぽど、金子さんの方が……。

直次郎。なにヨウ云つてやがるんだい。

三千歳。心臓を載つける看貫なんてものが、出來ないのがお仕合だつたんぢアない？

直次郎。そんなこと云やア、お前さんのなんざア、お醫者の使ふ天秤にもかゝらないだらう。

三千歳。貴方のなら、輕いから大丈夫だけれど、あたしのはちつと重さうだからね。

直次郎。とすれア、分別の重みかな？……何しろ、貴方つて人は、何をするにも、地びたから足の離れない人なんだから……。

三千歳。どつかの人には、それがまた引離せないんだから……。

直次郎。引き離さうとすれば、すぐ痛がつて泣くくせに……。

三千歳。泣きアしないわ！　あたし、きつと自分一人の力で、貴方のとこへ飛んで行くから、その時、あんまりヒヨロヒヨロしてゐると受けとめそくなつてよ。いゝこと？　大丈夫？

直次郎。生れたまゝの裸一貫。用意も支度も要るんぢアない。今直ぐでも結構だ。

三千歳。ぢア、今すぐ金子さんへ使をやつて……。

直次郎。さうだ。騙すばかりが嘘ぢアない。假令好意から出てゐるんでも、有ることを無いやうに思はせて置くのは、決していゝことぢアない。腐つた土臺の上に、がつしりした家は建たないんだ。私たちのためにも、金子さんのためにも、そんな嘘は、一時早く吹き飛ばして了ふがいゝんだ。早速來て貰つて、面と向て、何もかも正直に云つて了ふんだね。貴方ほどの人が、今までそこに氣がつかなかつたのが不思議なくらゐだ。

三千歳。あんまりさきのさきまで考へすごして……。

直次郎。分別の祟だ。

三千歳。いゝえ、さう云つちア分別に氣の毒だわ。たゞあたしが弱虫だつただけのこと、卑怯だつただけのこと。

直次郎。然しもう一旦肚がきまつたら、人の一念、强いもんだ。假令殺されるまでも、あとへは退くなよ。

三千歳。その氣で心を決めました。

直次郎。それでこそ千人力、强いもんだ。

三千歳。一生一度の强がり。殺されても笑つちアいやですよ。

直次郎。誰が笑ふものか？ 都合のいゝ方法は澤山あるが、そのなかに、正しい行爲は一つしかない。そのために死ぬのなら……。

三千歳。えゝ、あたしは本望！

直次郎。そこまで聞けば俺も安心だ。なに、金子さんだつて、お前さんを殺したところで始らない話、そんなまねはし

やアしないよ。

三千歳。その代り、貴方のところへ飛んで行つて了つたら、あとはあたし、へと〱に弱くなつて了ひますよ。

直次郎。女だもの、弱いのが當り前だ。今までの貴方が、ちつと强すぎたくらゐのものさ。その曉には、心置なく弱くおなんなさいとも。

三千歳。貴方を困らせるほど弱くなつちまつてもいゝんですね？

直次郎。いゝとも！

三千歳。うれしい！

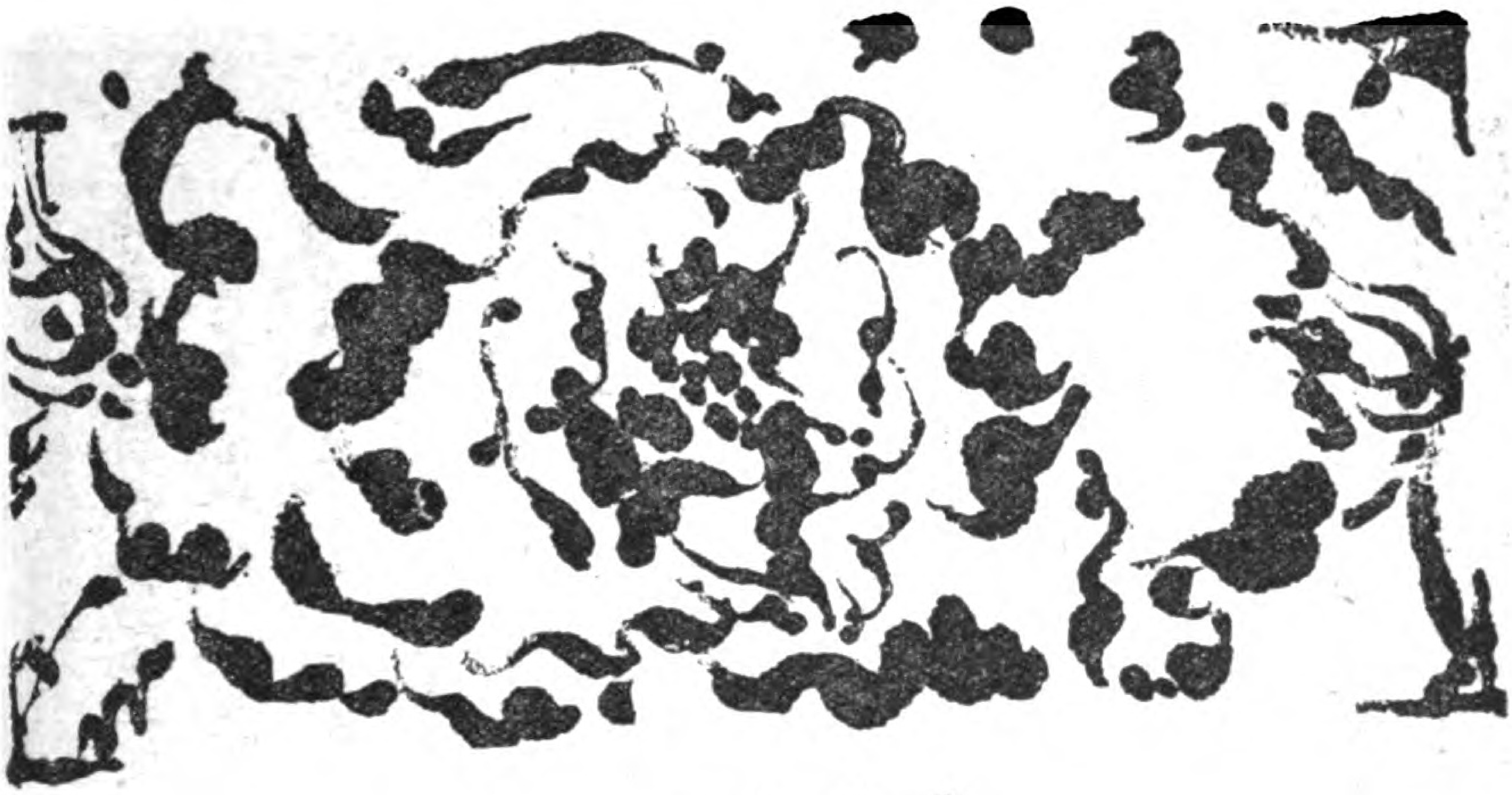
（ト縋りつく。

直次郎、抱きしめ、心のうちにて、

「この女に勇氣をお授けください？　勇氣、勇氣！　ほかにはなんにも要りません。今日半日、男にも勝つた勇氣をもたせてやつてください！」

と、神とも、佛とも、天とも、地とも知れないものに向つて一生懸命に祈願をこめる。）

──幕──



蘿洞先生

谷崎潤一郎

A雜誌の訪問記者は、蘿洞先生に面會するのは今日が始めてなのである。それで内々好奇心を抱いて、もうさつきから一時間以上も待つてゐるのだが、なかなか先生は姿を見せない。取り次ぎに出た書生の口上では「まだお眼覺めになりませんから」と云ふことだつた。寢坊な人だとは記者もかねがね聞いてゐたから、その積りで來たのだけれど、何ぼ何でも既に十二時半である。三月末の、彼岸櫻が咲かうと云ふ陽氣に、午過ぎ迄も寢てゐる者があるだらうか。記者はさう思つて、すき腹を我慢しながら、應接間の硝子戸越しに、うらうらと日の照つてゐる庭の方を眺めてゐた。

　東京の郊外の邸としてはそんなに廣い庭ではないが、手入れは可なり行き屆いてゐる。せいの低い、煉瓦の柱の表門から、正面のポーチへ通ずる路の兩側に躑躅が行儀よく植ゑられて、その向うには芝生がある。それから瓦で四角に仕切つた花壇などもある。獨身者の蘿洞先生は、書生や下女を相手にして草花いぢりをやるのだ

らうか。尤も手入れが屆いてゐるのは庭ばかりでなく、たとへば此處の應接間にしても、甚だ清潔で居心地がよい。A雜誌記者は職掌柄、學者や政治家や實業家や、いろいろの人の應接間を見たが、さすがに此處の先生は長く西洋にゐただけあつて、額の懸け方、家具の置き場所、窓と窓掛けの色の調和など、よく考へてあるらしい。小ぢんまりした質素な部屋ではあるけれど、感じが何となくハイカラで、塵一本もないやうに掃除がしてあり、椅子の覆ひやテーブルクロースも洗濯をしたばかりのやうに純白である。かうして見ると先生は潔癖家ではないのか知らん？　それとも獨身生活の人は、かう云ふ事に却つて神經を使ふのか知らん？

A雜誌記者はもともと此れと云ふ問題を持つて來たのではないから、――と云ふのは、每號雜誌へ連載してゐる「學界名士訪問錄」の種取りに來ただけであるから、此の家の主人に會ふ前に主人の趣味を檢べて置くのも、あながち無駄な仕事ではなかつた。それに先生は氣むづかしやで、我が儘者で、雜誌記者などが訪ねて行つてもめつたに好い顏はしたことがない。機嫌が惡いと殆んどロクに口もきかないさうだから、先づ先生の趣味の方から話題を作つて打つかつて見よう。――と、記者は記者なりに分別をきめて、もう三本目の敷島を吹かしながら、庭の樣子を一と通り見廻つた後、又ジロジロと部屋の中を見廻し始めた時である。みしり、みしりと、老人のやうな重い足音が廊下に響いて、次ぎには「えへん」と云ふ咳拂ひがして、漸く蘿洞先生が這入つて來たのは。

「成る程、此れは噂に聞いた通り、餘程氣むづかしい人だな。」

記者は急いで吸ひかけの煙草を灰皿に入れ、椅子から身を起し、「氣を付け」のやうな姿勢を取つて先生に敬意を表しながら、直覺的にさう感じた。先生の歲は四十五六、或は三四ぐらゐでもあらうか。巾着頭の、髮を綺麗に分けてゐるので、小鬢のところに白髮が二三本生えてゐるのを氣に止めなければ、それほどの歲のやうには見えない。が、顏は太

つてゐると云ふよりは寄ん膨れにふくれてゐて、それがむうツと、怒つてゐるやうな感じを與へる。おまけに眼瞼の腫れぼつたさうにむくんでゐるのが、一層その相を險しくしてゐる。寢起きのせゐでさう見えるのか、體の調子が惡いのであるか、腎臟病の患者にあるやうな厭な血色だと記者は思つた

「やあ、お待たせして失禮を。」

「はツ、お休みちゆうのところをどうも、……却つて恐縮に存じます。」

先生が椅子に就いたので、記者も再び、恐る恐る腰をおろした。

「——しかし、此の邊は非常に閑靜で、いい處のやうでございますな。先生はもう長いこと、此方にお住ひでいらつしやいますので？」

「長い——ええ、——そんなに長いことは——」

「もう何年ぐらゐ？……二三年？……三四年ぐらゐ？」

「ええ、まあ、——」

ここで會話がポツリと途切れた。記者が出來るだけ遠慮深く、聲を低うして質問しても、先生の答は不明瞭で、物を半分しか言はない。のみならず、聲が頗る低音で、神經質な顫へを帶び、語尾は曖昧に口の中へ消えてしまふ「傲慢な人」と云ふ評判であるが、話をするにも相手の顏をまともに見ないやうにして、たまたま視線がカチ合ふと直ぐにその眼を外らしてしまふ所など、何だか斯う、處女のやうに小心で、臆病らしい素振りもある。

仕方がないから記者は暫く沈默して、その間に篤と先生の身なりを拜見することにした。全體、家の様子から考へて見て、主人も定めし此の庭園や部屋にふさはしい、キチンとした服裝で出て來るだらうと臆測してゐたのに、豈圖らん

や先生の身なりはちよつと記者にはえたいの分らぬ恰好である。あのだぶだぶした、裁判官か郵便局員が着てゐさうな不思議な上ッ張りを纏つてゐるのは、何か知らん？　腰から上はルパシカのやうでもあり、支那服にも似てゐるけれど、襟の工合や、括り紐の附いた袖口の塩梅がその孰れとも違つてゐる。西洋人が寝間着の上などへ引つ懸けるナイトガウンの類だとしても、あの括り紐が矢張り可笑しい。地質は薄いぺらぺらした絹織物に相違なく、日本製でない珍しい品だと云ふことは分るが、一面に黒く垢光りがして、模様も何も判然しないほど汚れてゐるのは、餘程年數を喰つたものだらう。そしてその襟のはだけた下にフランネルと浴衣の重ね着をしてゐる所を見ると、先生はまだ寝間着のままなので、そのぼろ隠しにこんな上ッ張りを纏つたのであらうか。相手が片々たる雑誌記者だと侮つたのかも知れないが、何にしてもこの物臭い風つきは小ざつぱりした部屋の空氣に調和しないばかりでなく、蘿洞先生の威厳を損する。せめて襟だけでもちやんと掻き合はせてゐればいいのに、それがだらしなく弛んでゐて、頸の周りから胸板の方まで露はれてゐるのは、不精ッたらしくて感心されない。

その胸板を見たついでに、記者は先生の圓々と肥えた體つきにも注意したが、肥えてはゐるものの、事實は顔と同じやうにむくんでゐるのか、さもなければ脂肪太りに太つてゐるので、健康な肥え方ではないやうである。それにさつきから氣を付けてゐると、時々先生は「げッぷ」と云ふ音をさせて、味噌汁臭いおくびをする。洋行をした先生にも似合はぬ無作法な話だけれど、多分たつた今、遅い朝飯を腹一杯たべたのであらう。「ははあ、成る程、此の様子では腎臓よりも胃が悪いのぢやないのかな」と、記者は思つた。そして自分の空腹に比べて、先生の胃の腑の病的な飽満狀態が羨ましいやうな、面憎いやうな氣がした。

「あの、唯今拜見いたしますと、お庭の方に花壇があるやうでございますが、……」

「うん、ある、」

と、先生は云つた。とたんにチラリと偷むやうに記者の顔を一瞥して、やがて瞳を遠い所へ据ゑたのは、大方問題の花壇の方を見てゐるのだらう。庭の明りがさし込んで來るので、土氣色（つちけいろ）をした先生の顔にもさすがに一脈の春の光が反射してゐる。

「大分陽氣が暖かになつて參りましたが、此れからそろそろ園藝などには好い季節でございますな。」

さう云つたが、手答へがないので、記者は二の句を附け足さなければならなかつた。

「花壇には主に、どう云ふ花をお作りになるのでございませう？」

「さあ、別段どうも、……」

「先生御自身で種をお蒔きになりますので？」

「う、……ああ、……」

「はあ、左樣で、」

よくは分らなかつたけれど、記者は獨り合點をして、

「何うかもう少うし、さう云ふ方面のお話を伺へませんでせうか？　花の話、園藝趣味と云つたやうな事でも、——」

「うん、……さう云ふことには餘り興味がないもんだから、……」

「でも、どう云ふ花がお好きだとか、お嫌ひだとか云ふやうなことは？」

「好きと云へば大概な花は好き——と云ふより外はない。……」

その時先生はまたおくびをした。そして言葉尻と一緒に、それをもぐもぐと嚥み下した。

此れは餘程變つた人だ、隨分氣むづかしい人間にも會つたが、こんな奇妙な癖のある人を見たことがない。――記者はつくづく呆れたやうな表情で、恰も珍しい動物か何かを眺めるやうに、先生の顔を覗き込んだ。覗き込まれても先生は平氣で、知らん顔をして横を向いてゐる。「口を利くのは大儀だが、顔ならいくらでも見せてやる」と、さう云つたやうな態度である。一體此の人には神經と云ふものがあるのか知らん？どんな人間でも他人と應對する場合に、ちよつとぐらゐは愛想笑ひを洩らすものだのに、此の先生は決して洩らさない。その無愛想がまた普通とは違つてゐて、たまには笑はうと努めるのだけれども、笑ひかけると直ぐに笑ひが消えてしまふのではないだらうか？その證據にはをりをり口もとをピクピクさせて、笑ひの出來損ひのやうな痙攣を起す。「笑はないでは悪いだらうか、いや、笑つたところで面白くもない」と、二途に迷つてゐるやうでもある。そして何事をたづねられても、氣乘りのしない、詰まらなさうな顔をしてゐる。まあ成るべくなら下らない質問はやめて貰つて、早く歸つて貰ひたさうだが、時々わざと聞えよがしにほつと溜息をつくばかりで、斷然「歸つてくれ」とは云はない。氣の弱い人が保險會社の勸誘員に掴まつたやうに、向うが退却しない限りは此方も根氣よく生返事を繰り返しながら、一日でも二日でも堪へてゐようと云ふ風である。

「誠に恐れ入りますが、では先生の日常の御生活、――たとへば朝は何時にお眼覺めで、夜は何時にお休みになるとか、主にお仕事をなさいますのは何時頃であるとか、云ふやうなことでも伺はせて頂きませうか。」

少しく大膽になつた記者は、此れなら返事が出來ない筈はなからうと思ひながら、ポツケツトから手帳を出して、エヴアーシヤープ・ペンシルを握つた。

「いかがでございませう？お忙しいところを御迷惑ではございませうが、――」

「いや、忙しいことはないんだが、」

「はあ、左様で。――すると、お眼覺めになりますのは大概何時頃？――朝は御ゆつくりの方だと伺つてはをりますけれど、」

「朝は遲い。」

「はあ、――では何時頃？　十一時？　十二時頃？」

「うん、」

「はあ、はあ、」

と、記者は手帳へ書き留めながら、

「それでは自然、夜分おそく迄お眼覺めでございませうな。」

「夜は遲い。」

「はあ、何時頃？」

「三時頃。」

「はあ、三時頃。――しかし、大學の方へお出かけになる日は、朝もいくらかお早いのではございませんか。」

「う、……ああ、……なあに、そんなでもない。」

「さういたしますと、先生の講義はいつも午後なのでございませうか。……ははあ、いつでも午後に。……それで、大學の方は一週に何度ぐらゐ？」

「二度。」

「ははあ、それは何曜日と何曜日？……はあ、水曜と金曜。……で、その外の日は、日課としては主にどう云ふやうな

事たア 矢張り書斎で讀書をなさいます時が一番多いのでございませうな。」

「うん、まあ、そんなやうな事が、……」

「書物はどう云ふ種類のものを？　矢張り専門の、哲學の方の物ばかりを？」

「う、……ああ、」

先生の「う、……ああ」に釣り込まれて、此處まで暖簾と腕押しをしてしまつた記者は、此の時急に氣が付いて、

「あ、さうさう、」

と、慌てて云つた。

「さう云へば先生は、近々大學をお罷めになると云ふやうな噂がございますが、事實なのでございませうか。」

「うん、事に依つたら、……」

「どう云ふ理由で？……學校に對して不滿な事でもおありになると云ふやうな？……」

「さあ、……出ても詰まらんもんだから。」

「すると今後は、御著述の方へ全力をお盡しになりますので？」

「さあ、氣が向いたら、……何か雜誌へでも書くかも知れんが、……」

「ははあ」

と云つて、又行き止まりへ追ひ込まれた記者は、彼れか此れかと考へながら、落し穴からもがき出るやうに首を捻つた。

「ええと、……ところで此れは甚だ突飛な質問で、失禮でございますけれど、先生のやうな日常生活、——静かに、孤獨に、毎日書斎に閉ぢ籠つて書物を友としていらつしやる、——と口に云へば獨身主義の生活に就いて、何か御感想

が拜聽出來ればに結構なのでございますが、……」

かう云つたとて無論すらすらと答へてくれる先生ではないから、記者は續いておツ被せた。

「定めし此の、家庭の煩累がおありにならないと、思索などをなさいますには、却つてよくはございますまいか。」

「うん、それはいい。」

「しかし、一面に於いて淋しさをお感じになるやうなことは？」

「淋しいのには馴れちまつたから、……」

「すると、かう云ふ獨身の御生活の方が、サツパリしてゐて氣持ちがいいと云ふ風に？」

「うん、サツパリしてゐる。」

「で、氣持ちがいい？」

「うん。」

「はあ、成る程、……それでも時々訪問者はございませうな、學生だとか、又は御友人の方々であるとか。」

「めつたにない。」

「ははあ、――それから、あのう、お宅は何でございますか、お見受け申しましたところ、お掃除などがよく行き屆いて居りますやうですが、かう云ふ事は誰方がおやりになりますので？」

「書生にやらせる。」

「はあ、書生さんがお掃除を？――で、女中さんはお幾人？」

「二人をる。」

「では、書生さんが一人に女中さんが二人、それに先生と、四人暮らしでいらつしやいますので？」

「さう、四人暮らし、……」

「尤も何でございますな、先生お一人のことですから、それで十分でございますな。——いや、かう云ふところを拜見しますと、サツパリしてゐて氣持ちがいいと仰つしやいますのが、わたくし共にもよく分るやうな氣がいたします。」

「………」

今度は先生は返事をしない。そして溜息をついたかと思ふと、鼻の孔を少しひろげて、生あくびをした。そろそろ歸れと云ふ謎かな。——すき腹を我慢してゐる記者は、催促がなくてももう好い加減で退却する積りであつたが、實は斯うまでぶツきらぼうな扱ひを受けると、記者も人間である以上、多少は意地にならざるを得ない。まだ何かしら惱ましてやることはないだらうか、もう二三十分蒟蒻問答を續けてやりたいと、さう思ひながら彼はわざとぐづぐづしてゐた。が、先生はあくびをしてしまふと、依然として詰まらなさうに、庭の花壇の方を見てゐる。外の明りが顏にきらきら照り映えるので、眼を細くして、なうツと澄ました恰好は、日向ぼつこをしてゐる猫の感じである。

「さう云へば此の頃、過激思想の取り締まりと云ふことが、大分政治家や學者の間でやかましいやうに存じますが、あれに就いて先生のお考へは？」

「う、………う、」

此れから先は、何を聞いても先生はただ呻るだけだつた。過激思想から露西亞の宣傳防止問題、普通選擧、デモクラシーと哲人政治、果ては文部省の假名遣ひ案、ローマ字問題まで持ち出して見たが、結局不得要領の「う、……ああ」で受け流されてしまひ、記者は御苦勞にも一人相撲を取つたのであつた。

記者が應接間を辭したのはそれから數分後であつたが、何だか餘り業腹でもあり、まだ此れだけでは記事の材料が足りないやうな氣がしたので、表門を出ると小さな塀の外側を廻りながら、もう一度よく此の邸の建て方や、構への內外を觀察した。家は灰色の壁を塗つた、わりに新しい洋館で、成る程四人で住むにはちやうど手頃な、平家建ての造りである。記者はだんだんその塀に沿うて雜木林の角を曲つた後の、裏の方へ廻つて行くと、裏は疎らな要黐の生け垣になつてゐて、垣根の中がすつかり覗かれる。多分彼處の、廊下から離れの出てゐる部屋が先生の書齋なのだらう。さう云へば北側で、日あたりの悪い、陰氣な室を撰んだところは先生らしい、——と、記者がそんなことを考へてゐるとたんに、ザチヤン、ザチヤンと、吸上ポンプで井戸の水を汲む音がした。ハテ、と思つてそつちを見ると、井戸端にしやがみながら、十五六の小女が寝間着のまゝで歯を研いてゐる。小女は楊枝を使つてしまふと、金盥へ水を取つて、タオルでぞんざいに顏を洗つたが、それなり臺所の方へは行かずに、すたすたと此方へ歩いて來て、裏庭へ降りるドーアを開けて、紅い鼻緒のぴたんこな下駄を石の階段の上へ脱ぎ捨て、ついと書齋の中へ這入つた。

記者が覗いてゐる生垣の前を通つたのはほんの僅かな間だつたから、勿論よくは分らなかつたが、しかし女中が今頃起きて歯を研くのはどうも可笑しい。それに勝手口が向うにあるのに、寢間着であの部屋へ這入ると云ふのがちよつと奇妙だ。するとあの小女は何か知らん？「女中は二人」と云つたから其のうちの一人？ 小間使ひ？ さう、まあ小間使ひと云ふ柄だけれど、體のこなしに伸び伸びとした、奉公人見たくないところもあつて、顏色が少し青白かつた。では先生の「何か」か知らん？ いや、それにしては子供過ぎる。どう見てもまだ十五六だ。……

けれども記者の好奇心は、矢張りそれだけでは済まされなかつた　で、もう裏庭に誰も居ないのを幸ひに、そつと垣根に附いてゐる木戸をくぐり、そこに生えてゐた八つ手の葉蔭に身を隠しながら　問題の部屋の窓の下まで這つて行つてこつそり首だけ出して見ると、好い鹽梅に二枚のカアテンが、まん中でよぢれて微かに割れてゐる　その割れ目へ片眼を附けて中を覗ふと、果してその部屋は書齋であつた　一方の隅に石炭が赤く燃えてゐるストーヴがある　壁一面に、天井へとどくくらゐな書棚があつて、本がぎつしり詰まつてゐる。それから　室の中央には、牛肉屋の俎板のやうな大きなデスクが頑張つてゐる　ところで霧洞先生にさつきの上ッ張りを腰のあたり迄まくり上げて　そこから下にフランネルの寝間着を露はし、デスクの上へ腹ん這ひになつてゐる　小女はと云ふと　先生の背中へ腰をかけて　両足をぶらんぶらんデスクの下へ垂らしながら、先生の頭をコツンコツン叩いたり、頬ッぺたを摘まんだり、口の中へ指を突つ込んだりしてゐるのだが、しかしふざけてゐるのとは違ふ　小女の表情は陰欝で、真面目くさつて、恰も義務的の仕事を課せられてゐるやうである　その顔は、――いや手も足も、きやしやで青白い　同様に又先生の顔も以前の如く、何　艶もない土氣色を帯び、膨れッ面を小女の勝手にいぢくらせてはゐるけれども、それがいかにも詰まらなさうである

間もなく小女は、なほ先生の胴體の上に腰かけたまま、小さな、木の柄の笞を取り上げ、片手で先生の髪の毛を掴み、片手で先生の太つた臀をぴしぴしと打つた　すると先生はその時始めて、少しばかり生き生きとした眼つきをして「ウー」と叫つたやうであつた　――此の光景を物の半時間も覗いてゐた記者は、變な氣がして、コソコソ逃げるやうに裏庭を出た。

編輯だより

◇だいぶ実勢はされたがどうやら普選らしいものは出來たやうだ。無産階級解放史の第一頁に加藤、若槻の官僚の名がズラリ陳列さるるのは一寸奇觀だ。

◇政友本黨の普選案に對する態度も随分おかしなものであつたが、一體政本系は理論で立つ政黨でなく、情味で膨脹した政黨であり、裏からコソ〳〵の權威を解するから今日を成したものだ。憲政會は正面からの言論はうまいが、對人的情味の乏しいのが大の缺點である。下剛なる官僚らしい所はあるが、その缺點たる情味を補ふには憲政會になくてはならぬ。且一ある。

◇床次氏は治國理想に乏しく、言論が低調であり、攻撃力が女性的で消極的でありながらあの政黨を建設て行けるのは原敬の人情學の傳授を継いだが爲である。加藤は政治家としての人格に於て床次に優るが、これとて既に十八世紀式だ、人情を解するに於て、地方の黨情を解するに於ては彼は床次には遙かに及ばない。

◇山本達雄は政本に於ける唯一の人物である、或點ではこの人が政本に居ることが床次があるより以上に黨を重くせしめる。だがそれにはただ重くせしめるといふに止まり、彼には憲政に意義ある貢獻をなすだらうの期待はかけられぬ。中橋元田は淋しい過去帳に影を沒しやうとしてゐる。

◇この議會で一道の活気を點じたのは政友會だ。ただ高橋では何か気緩んでもの足らぬ憾があるが、小川にては稍にきえ短かい。彼が人格には同人が眉をひそめる。殊にその智識の淺薄なるは彼が治安法案での主持で十分に證明された。落第のイの一番だ。この點若槻は横着ではあるが賢かな及第であつた。ただ若槻、平野の一齣打は別だ。山本悌二郎はどこまで行けるか、何れにしても横田没後に高橋の活劇共鳴がなくなつた。

◇農民組合大會を傍聴した。どこかに新時代を映寫せしめる空気が漲溢し、組織的統一力も加はつて來たやうだ。そして地主に對する鬪爭的気魄の一層加つて來たことが著しく感ぜられる。

◇芝三田に開かれた、北海道會を一瞥した、貴族臭味は高かつたがどこかに新鋭の気が滿ち溢れてたのもよかつた。都會に疲れ切つた人々の味ふべき會でもあつた。しかし十年後の北海道にどれほどの若き義が殘國するかを思へば今から爽心にたえず。

◇それと思ふと帝國の南端には一日八錢で生計して行く幾十萬の同胞があることを思へば彼是對照して涙なきを得ぬ。その日の台は過ぎしたが、我等政者がそれを等閑に附してゐるのは斷じて許すべからざる事である。

◇その際には三ヶ月俸給を貰へ[illegible]總裁月俸[illegible]人もある。巴に昨年末の賞與の條令をかけてこそれを貰はず、彼等は路頭に迷ひ、學校は閉鎖同様である。この叫むべき絶海の孤縣は他縣同様な租率を負擔しているのである。その原因は國庫の公金百五十萬圓を保管せる銀行の破綻が一因だそうだ。

◇砂糖一斤の生産費が拾七圓で、その賣價が十五圓。そして其の仕事より離ることの出來ぬ同胞はもう萬策つきたと諦めてゐる。そして外國移民にも出で外國へも行かれずに泣いてゐる。泣いても涙も出ない有様だ。

◇思想的に東洋を代表していた政治家様な逝く。誠に哀悼の意を明にす。彼は東洋の淺薄な政治家中では理想家であつた。しかし一歩進んだ哲人的の客にはなかつた、實行家としても鋭腕の持主でもなかつた。勿論日本の伊勝伸[illegible]位の人物であつて實行[illegible]等の人材にはあつた。

◇本月から發行する「社論」號は[illegible]諸君[illegible]ました。五月號の本

誌で其のイキイキした内容を悉しく發表します。

◇本月號の「改造」が七週年記念號である。創刊當始を顧望して萬感こもごも至る。されど吾人の敵は頑強である、戰線の廣大なる無邊也、從つて吾々がどれほどの努力を累積すれば吾々に住みよき世界が出來る、よくならないでもエネルギーのあるだけ、出るだけ出して見る、戰つて見る。しかし無益の戰はやめる。

◇新進作家富ノ澤麟太郎君逝く、たのもしい人格の持主であつた彼には期待する處も多かつたが。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	四圓六拾錢	大割引郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	大割引郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增刊號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は直ちに拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾四年三月廿日印刷納本
大正拾四年四月一日發行

（價壹圓六拾錢）

編輯兼發行兼印刷人　東京市芝區愛宕下町一ノ一　平田貫一郎
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九[illegible]

里見弴著

文藝管見

四六判上製　定價壹圓貳拾錢　送料十五錢

最新刊

本書題して「管見」と云ふも、實に著者が藝術に對する深き思索を傾けて文藝の原理を考覈し、組織的に之を集成したるもの、秩序整然、理論一貫、論陣堂々、專門の文學理論學者をして後に瞠若たらしめた觀がある。而かも文章の遒勁、表現の剴切なる流石に「筆の人」たる著者を思はしむ。文藝愛好の士は固より、汎く學者、批評家、思想家の必讀すべき書である。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

石原純著

戀愛價値論

四六判上製　定價壹圓六拾錢　送料十七錢

最新刊

戀愛に對して特殊の體驗と深き哲學的考察を有せらるゝ石原博士が其の思索の結果を流麗なる筆に上せられたものです。本書收むる「戀愛價値論」、「戀愛と道德」、「愛の一つの相としての戀愛の本質」以下の諸篇、に於て東西古今の戀愛論を批判して、博士自らの所論に及ぶ。其の態度の嚴肅なる讀むものをして自ら襟を正しふせしむるものがあります。新時代の新しき男女は是非本書を熟讀して自ら戀愛の人生に於ける重大の意義と地位を省察せられむことを望みます。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

法學博士 森莊三郎著

法制講話

四六判 上製

定價貳圓五拾錢 送料十九錢

最新刊

本書は、著者が女子學習院高等科で講義いたしました法制講話であります。國民教育の見地から殊に家庭の讀み物として最も必要であり且最も興味ある法制の概念は先づ此の書物を繙て戴けばそれで充分であらうと思ひます。從來著されました法制の書は或は餘りに專門的に失し、或は餘りに無味乾燥に失した缺點を除きまして知らず〳〵全部を讀み終るだけの興味を讀者に惹起させる事が出來ますれば著者の勞力は充分に酬ひられたことゝ信じます。——著者——

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

高師教授 勝部謙造著（五版）

定價壹圓八拾錢 送料十七錢

ディルタイの哲學

近代教育の基礎學として註文殺到す

彼は極めて平凡なる日常茶飯事を通じて、極めて深遠なる哲學を解き、趣味ある文辭にて精神科學、自然主義的世界觀、自由觀念論的世界觀、客觀觀念論的世界觀を明にした。此點に於て他の追隨の出來ぬ世界の一大天才だ。彼は哲學的思索の形骸を捨てゝ所謂概念の核心を捉へ得た哲人だ。本書は近代教育學の基礎學として各學校に必備の良書なるのみならず、又實に兒女の根本教育を究めんと欲する良家にありて必ず一本を机上に置く必要あるべし。現代は唯だ單に教員諸君が教授、訓練、管理とか小器用の小手先に甘んずべき時代でなく、深く人性の基幹を掘り究めねばならぬ時勢だ、本書は實に夫に該當する良書。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

現代代表歌集出版

本社は四月を以つて代表歌集を出版することゝなりました、各册四月一日を以つて發賣します。

齋藤茂吉著　朝の螢　定價壹圓五十錢　送料十五錢

島木赤彦著　十年　定價壹圓五十錢　送料十五錢

古泉千樫著　川のほとり　定價壹圓五十錢　送料十五錢

中村憲吉著　題未定　定價壹圓五十錢　送料十五錢

釋迢空著　題未定　定價壹圓五十錢　送料十五錢

木下利玄著　題未定　定價壹圓五十錢　送料十五錢

改造社


ライオン煉歯磨チューブ入
LION TOOTH PASTE
T. KOBAYASHI & CO TOKYO
輕便含嗽設備の
新考案を募る
夜寝る前に歯を磨くのは、むしばの豫防上最も大切な事であります。しかし總ての家庭が、簡單に含嗽の出來る設備のない限り、夜間に於ての實行は極めて困難なことであります。弊舗は此點に鑑みまして、各家庭が容易に備へ附け得る輕便含嗽設備の新考案を募集いたします。どうぞ、どなたも奮つて應募下さるやう切望いたします。
賞金
一等　五十圓　二人
二等　三十圓　三人
三等　十圓　五人
▼選外佳作三百名へライオン煉歯磨チューブ入中形一個宛贈
規定
一、輕便含嗽設備の考案は新規のものに限る。
一、考案は成るべく輕便のものにて、有らゆる家庭に備へ附け得るもの。
一、考案は總て新聞半頁大の置用紙に圖面を以て表し、且つ簡單なる說明を附する事。
一、原稿は一切返却せず。
一、審査は當口腔衛生部にて行ふ。
一、〆切は四月二十日。
一、發表は五月中旬新聞紙上にて。
一、送り先は　東京驛前
ライオン歯磨口腔衛生部
懸賞係

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

株式會社秀英舎印刷